会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告15

鶴　沼　C　遺　跡

西坂才遺跡（１次）

序　　文

文化財は，それぞれの地域の歴史に根ざした文化遺産であり，我が国の歴史や文化を正しく理解するために必要不可欠なものです。そのため，当時の姿がよく理解できるように，可能な限りそのままの形で文化財を保存し，後世に伝えていく努力が現代に生きる私たちに求められています。

会津縦貫北道路は，喜多方市と会津若松市を結ぶ全長13.1㎞の高規格道路であり，平成８年度に都市計画道路として建設が決定され，平成９年度からは建設省(現国土交通省)直轄事業として建設工事が進められています。この路線内には，周知の埋蔵文化財包蔵地を含め，先人が残した貴重な文化遺産が包蔵されています。福島県教育委員会では，数多くの遺跡等の所在を確認するとともに，国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所と埋蔵文化財保護のための協議を重ねてきました。その中で現状での保存が困難なものについては，詳細な記録を残すために発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は，平成26年度に発掘調査を実施した会津若松市鶴沼Ｃ遺跡の１次調査，西坂才遺跡の１次調査の成果をまとめたもので，古代の会津郡衙の周辺に展開した掘立柱建物群の様子が判明しました。また，「倉人」「戸主」「田主」「舘」などの墨書土器や，線刻画の施された円面硯，多種多様な木製品など貴重な資料が出土しました。

今後，この報告書が，県民の皆様の文化財に対する理解を深めるとともに，地域の歴史を解明するための基礎資料として，さらには生涯学習等の資料として広く活用してしいただければ幸いに存じます。

最後に，発掘調査の実施に当たり，御協力いただいた会津若松市教育委員会，国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所，公益財団法人福島県文化振興財団をはじめとする関係機関及び関係各位に対し，深く感謝の意を表します。

平成26年12月

福島県教育委員会

教育長　　杉　　昭　重

あいさつ

当公益財団では，福島県教育委員会からの委託を受けて，県内の大規模な開発に先立ち，開発対象地域内に所在する埋蔵文化財の調査を実施しております。会津縦貫北道路にかかる埋蔵文化財については，平成９年度の表面調査を経て，平成13年度から発掘調査を実施してまいりました。

本報告書は，平成25年度に発掘調査を実施した会津若松市鶴沼Ｃ遺跡，西坂才遺跡の１次調査の成果をまとめたものです。今回の調査では，古代の規格的に配置された掘立柱建物群が検出された他，河川流路跡などからは，この時代の土器類や，大量の木製品がみつかり，会津地方で営まれていた当時の生活の一端をうかがい知ることができる貴重な資料となりました。

本報告書がふるさとの歴史を解明するための一助となれば幸いです。

終わりに，今回の発掘調査にご協力をいただきました関係諸機関ならびに地元住民の皆様に厚く御礼申し上げますとともに，当財団の事業の推進につきまして，今後とも一層の御理解と御協力を賜りますようお願い申し上げます。

平成26年12月

公益財団法人　福島県文化振興財団

理事長　　遠　藤　俊　博

緒　言

1　本書は，平成25年度に実施した会津縦貫北道路遺跡発掘調査にかかる鶴沼Ｃ遺跡と西坂才遺跡の調査成果を収録した。

鶴沼Ｃ遺跡：会津若松市高野町中沼字鶴沼　　埋蔵文化財番号：2028－00498

西坂才遺跡：会津若松市高野町中沼字西坂才　　埋蔵文化財番号：2028－00499

2　当遺跡の発掘調査事業は，福島県教育委員会が国土交通省の委託を受けて実施し，調査にかかる費用は国土交通省が負担した。

3　福島県教育委員会は，発掘調査を財団法人福島県文化振興財団(現：公益財団法人福島県文化振興財団)に委託して実施した。

4　財団法人福島県文化振興財団では，遺跡調査部調査課の下記の職員を配置して調査にあたった。

調査課長	安田　稔	副主幹	藤谷　誠
副主幹	後藤　信佑	文化財主査	佐藤　悦夫
文化財主査	菊田　順幸	文化財主査	日下部　正和
文化財主査	作田　一耕	文化財主査	阿部　知己

5　本書の執筆は，担当職員が分担して行い，各文末に文責を記した。

6　本書に使用した地図は，国土交通省国土地理院発行の５万分の１地形図，並びに同省東北地方整備局郡山国道事務所が製作した工事用地図を複製したものである。

7　本書に掲載したＣ14年代測定については，株式会社加速器分析研究所に委託し，その分析結果及び考察は，編ごとに付章として掲載した。

8　本書に収録した調査記録および出土資料は，福島県教育委員会が保管している。

9　発掘調査および報告書の作成に際して，次の機関および個人から，協力・助言を頂いた。

会津若松市教育委員会　　福島県立博物館

三上喜孝　　梶原文子　　高橋　満　　森　幸彦

用　　例

1　本文中および遺物整理に使用した略記号は次の通りである。

会津若松市……ＡＷ　　鶴沼Ｃ遺跡……ＴＲＮ・Ｃ　　西坂才遺跡……ＮＺＳ
柱　列　跡……ＳＡ　　掘立柱建物跡……ＳＢ　　溝　　跡……ＳＤ
土　　坑……ＳＫ　　井　戸　跡……ＳＥ　　柱穴・小穴……Ｐ
グ リ ッ ド……Ｇ　　遺構外堆積土……Ｌ　　遺構内堆積土……ℓ
サブトレンチ……ＳＴ

2　遺構挿図における遺構番号は，当該遺構は正式名称，その他の遺構は記号化した略称で記載している。

3　本書における遺構実測図の用例は，以下の通りである。

(1)　方位記号の表記がないものは，全て本書の上を真北とする。
(2)　縮尺は，各挿図版に示した。
(3)　遺構内の傾斜面は 〒 ，後世の削平や人為的な削平部分は 〒 の記号で表記した。
(4)　断面図および地形図における標高は，海抜標高を示す。
(5)　遺構外の自然堆積土はローマ数字，遺構内堆積土は，算用数字で表記した。
　［例］　遺構外自然堆積土：ＬⅠ・ＬⅡ…，遺構内堆積土：ℓ１・ℓ２…
(6)　平面図における座標は，平成23年３月11日に発生した東北地方太平洋沖地震による歪みを補正した平面直角座標系のⅨ系の数値を示している。
(7)　柱穴の深さは、平面図の()に数値を明記した。単位はcmである。
(8)　掘立柱建物跡の柱痕は，網点で示した。

4　本書における遺物実測図の用例は，以下の通りである。

(1)　縮尺は各挿図版に示した。
(2)　土器断面は，土師器・陶器を白ヌキ，須恵器はベタ黒とした。
(3)　挿図中の網点は，内面黒色処理範囲を示し，それ以外は図版ごとに凡例を示した。
(4)　遺物の計測値は，図中に示した。(　)は推定値，[　]は残存値である。
(5)　遺物番号は挿図版ごととし，文中では下記のように省略して表記した。また，掲載遺物の出土位置・層位は，右下に示している。　［例］　図28の10番の遺物…図28－10

5　本書における遺物写真で個々に付した番号は，挿図番号と一致する。

6　引用・参考文献は，執筆者の敬称を省略し，付章を除き各編末に一括した。

目　　次

序　　章

第１節　調査に至る経緯…… 1
第２節　地理的環境 …… 3
第３節　歴史的環境 …… 5
第４節　調査方法……10

第１編　鶴沼Ｃ遺跡

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺跡の位置……13
第２節　調査経過 ……13

第２章　遺構と遺物

第１節　遺構の分布と基本土層……15
第２節　掘立柱建物跡……17

1 号掘立柱建物跡(17)　2 号掘立柱建物跡(19)　3 号掘立柱建物跡(20)
4 号掘立柱建物跡(22)　5 号掘立柱建物跡(22)　6 号掘立柱建物跡(24)
7 号掘立柱建物跡(25)　8 号掘立柱建物跡(27)　9 号掘立柱建物跡(27)

第３節　土　　坑 ……30

1 号土坑(30)　2 号土坑(30)　3 号土坑(30)　4 号土坑(32)
5 号土坑(32)　6 号土坑(33)　7 号土坑(33)　8 号土坑(33)
9 号土坑(35)　10 号土坑(35)　11 号土坑(35)　12 号土坑(35)
13 号土坑(37)　14 号土坑(37)　15 号土坑(37)　16 号土坑(38)
17 号土坑(38)　18 号土坑(40)　19 号土坑(40)　20 号土坑(40)
21 号土坑(40)　22 号土坑(41)　23 号土坑(41)　24 号土坑(41)
26 号土坑(43)　27 号土坑(43)　28 号土坑(43)　29 号土坑(45)
30 号土坑(45)　31 号土坑(45)　32 号土坑(46)　33 号土坑(46)
34 号土坑(46)　35 号土坑(46)　36 号土坑(48)

第４節　井 戸 跡 ……51

1 号井戸跡(52)

第５節　周溝状遺構……62

1 号周溝状遺構(62)

第６節　溝　　跡 ……63

1 号溝跡(63)　2 号溝跡(63)　3 ～ 5 号溝跡(65)　6 号溝跡(68)
10 号溝跡(70)　11 号溝跡(70)　12 号溝跡(72)　13 号溝跡(75)

14 号溝跡(75)　15 号溝跡(75)　16 号溝跡(75)　19 号溝跡(78)
21 号溝跡(78)　23 号溝跡(79)　24 号溝跡(79)　25 号溝跡(80)
近代以降の溝跡と出土遺物(81)
第７節　流　路　跡……83
１号流路跡(83)　２号流路跡(106)　３号流路跡(125)
第８節　性格不明遺構……131
１号性格不明遺構(131)
第９節　ピット群と遺構外出土遺物……134
第３章　総　　括
第１節　遺物について……135
第２節　井戸跡について……137
第３節　建物群と遺跡の性格について……139
付　章　自然科学分析
第１節　出土炭化物等の放射性炭素年代測定について……141

第２編　西坂才遺跡(１次)
第１章　遺跡の位置と調査経過
第１節　遺跡の位置……205
第２節　調査経過……205
第２章　遺構と遺物
第１節　遺構の分布と基本土層……207
第２節　掘立柱建物跡……213
１号掘立柱建物跡(213)　２号掘立柱建物跡(217)　３ａ・ｂ号掘立柱建物跡(219)
４号掘立柱建物跡(219)　５号掘立柱建物跡(222)　６号掘立柱建物跡(222)
７号掘立柱建物跡(223)　８ａ・ｂ号掘立柱建物跡(223)
第３節　溝　　跡……229
古代の溝跡(229)　近世以降の溝跡(236)
第４節　土　　坑……238
１号土坑(239)　２ 号土坑(239)　３号土坑(239)　４号土坑(240)
５号土坑(240)　６ 号土坑(242)　７号土坑(242)　８号土坑(245)
９号土坑(246)　11 号土坑(249)
第３章　総　　括……250
付　章　自然科学分析
第１節　出土炭化物等の放射性炭素年代測定について……255

挿図・表・写真目次

序　章

［挿　図］

図１　会津縦貫北道路位置図…… 1
図２　調査遺跡と会津盆地北部地形…… 3
図３　周辺の遺跡位置図 …… 8

［　表　］

表１　会津縦貫北道路関係遺跡の調査履歴 …… 2
表２　周辺の遺跡一覧…… 9

第１編　鶴沼Ｃ遺跡

［挿　図］

図１　調査区位置図……14
図２　基本土層柱状図……15
図３　遺構配置図……16
図４　１号掘立柱建物跡……18
図５　２号掘立柱建物跡……19
図６　１・２・５号掘立柱建物跡出土遺物……20
図７　３号掘立柱建物跡……21
図８　４号掘立柱建物跡……22
図９　５号掘立柱建物跡……23
図10　６号掘立柱建物跡……25
図11　７号掘立柱建物跡……26
図12　８号掘立柱建物跡……28
図13　９号掘立柱建物跡……29
図14　１～４号土坑……31
図15　５・６・10・12・13号土坑 ……34
図16　７～９・11号土坑……36
図17　14～17号土坑……39
図18　18～22号土坑……42
図19　23・24・26～29号土坑……44
図20　30～34号土坑……47
図21　35・36号土坑……48
図22　１・３・４・７・８・10・15号土坑
　　出土遺物 ……49
図23　17・19・20～23・26・32号土坑出土遺物…50
図24　１号井戸跡……51
図25　１号井戸跡出土遺物（１）土器 ……52
図26　１号井戸跡出土遺物（２）井戸部材……54
図27　１号井戸跡出土遺物（３）井戸部材……55
図28　１号井戸跡出土遺物（４）井戸部材……56
図29　１号井戸跡出土遺物（５）井戸部材……57
図30　１号井戸跡出土遺物（６）井戸部材……58
図31　１号井戸跡出土遺物（７）井戸部材……59
図32　１号井戸跡出土遺物（８）井戸部材……60
図33　１号井戸跡出土遺物（９）井戸部材……61
図34　１号周溝状遺構，出土遺物 ……62
図35　溝跡位置図（１）１～６・10～12号溝跡……64
図36　１～５号溝跡……66
図37　１～５号溝跡出土遺物 ……67
図38　６・10号溝跡出土遺物 ……68
図39　６・10・16号溝跡……69
図40　11号溝跡出土遺物……70
図41　11・12号溝跡……71
図42　12号溝跡出土遺物（１）……73
図43　12号溝跡出土遺物（２）……74
図44　溝跡位置図（２）
　　13～16・19・21・23～25号溝跡……76
図45　13～15号溝跡……77
図46　19・21号溝跡……78
図47　19・25号溝跡出土遺物 ……79
図48　23～25号溝跡……80
図49　溝跡位置図（３）
　　７～９・17・18・20・22号溝跡……81
図50　７～９・17号溝跡出土遺物 ……82
図51　１号流路跡（１）Ⅰ区平面図 ……84
図52　１号流路跡（２）Ⅰ区断面図 ……85
図53　１・２号流路跡Ⅰ区断面図 ……86
図54　１号流路跡（３）Ⅱ・Ⅲ区平面図……87
図55　１号流路跡（４）Ⅱ・Ⅲ区断面図……88
図56　１号流路跡出土遺物（１）土師器……89
図57　１号流路跡出土遺物（２）土師器……90
図58　１号流路跡出土遺物（３）土師器……91
図59　１号流路跡出土遺物（４）土師器……92
図60　１号流路跡出土遺物（５）須恵器……93
図61　１号流路跡出土遺物（６）須恵器……94
図62　１号流路跡出土遺物（７）須恵器……95
図63　１号流路跡出土遺物（８）須恵器……96
図64　１号流路跡出土遺物（９）須恵器……97
図65　１号流路跡出土遺物(10)須恵器……98
図66　１号流路跡出土遺物(11)須恵器……99
図67　１号流路跡出土遺物(12)須恵器……100

図68 １号流路跡出土遺物(13)須恵器……101
図69 １号流路跡出土遺物(14)木製品……102
図70 １号流路跡出土遺物(15)木製品……103
図71 １号流路跡出土遺物(16)
木製品・石器・鉄製品……104
図72 １号流路跡付属施設……105
図73 ２号流路跡平面図……107
図74 ２号流路跡断面図……108
図75 ２号流路跡出土遺物(１)
縄文土器・弥生土器・土師器……109
図76 ２号流路跡出土遺物(２)土師器……110
図77 ２号流路跡出土遺物(３)
土師器・須恵器……111
図78 ２号流路跡出土遺物(４)須恵器……112
図79 ２号流路跡出土遺物(５)須恵器……113
図80 ２号流路跡出土遺物(６)須恵器……114
図81 ２号流路跡出土遺物(７)須恵器……115
図82 ２号流路跡出土遺物(８)須恵器……116
図83 ２号流路跡出土遺物(９)木製品……117
図84 ２号流路跡出土遺物(10)木製品……118
図85 ２号流路跡出土遺物(11)木製品……119
図86 ２号流路跡出土遺物(12)木製品……120
図87 ２号流路跡出土遺物(13)木製品……121
図88 ２号流路跡出土遺物(14)木製品……122
図89 ２号流路跡出土遺物(15)木製品……123
図90 ２号流路跡付属施設・
12号溝跡接続部……124
図91 ３号流路跡……126
図92 ３号流路跡出土遺物(１)
縄文土器・土師器・須恵器……127
図93 ３号流路跡出土遺物(２)須恵器……128
図94 ３号流路跡出土遺物(３)木製品……129
図95 ３号流路跡出土遺物(４)木製品……130
図96 ３号流路跡出土遺物(５)木製品・古銭……131
図97 １号性格不明遺構……132
図98 １号性格不明遺構出土遺物
土師器・高杯……133
図99 遺構外出土遺物
土師器・須恵器・鉄製品……134
図100 12号溝跡，１・２号流路跡出土土器……135
図101 井戸枠復元模式図……137
図102 扉板復元想像図……138
図103 暦年較正年代グラフ……144

［ 表 ］

表１ 墨書土器一覧表……136
表２ 放射性炭素年代測定結果……143
表３ 放射性炭素年代測定結果……143

［写 真］

1 調査区遠景……147
2 調査区全景……147
3 Ⅰ区２・３号流路跡掘込前全景……148
4 Ⅱ・Ⅲ区掘立柱建物跡群……148
5 １号掘立柱建物跡……149
6 ２号掘立柱建物跡……150
7 ３号掘立柱建物跡……151
8 ４号掘立柱建物跡……152
9 ５号掘立柱建物跡……153
10 ６号掘立柱建物跡……154
11 ７号掘立柱建物跡……155
12 ８号掘立柱建物跡……156
13 ９号掘立柱建物跡……157
14 １・３～５号土坑……158
15 ７～10・12・13号土坑……159
16 13～18号土坑……160
17 18～22号土坑……161
18 22～24・26～28号土坑……162
19 28・29・31～36号土坑……163
20 １号井戸跡……164
21 １～４号溝跡……165
22 ５・６号溝跡……166
23 ６・10～12号溝跡……167
24 12～14・16号溝跡……168
25 19・23・24号溝跡，１号周溝状遺構……169
26 １号流路跡(１)……170
27 １号流路跡(２)……171
28 １号流路跡(３)・２号流路跡(１)……172
29 ２号流路跡(２)……173
30 ２号流路跡(３)・３号流路跡(１)……174
31 ３号流路跡(２)……175
32 １号性格不明遺構……176
33 縄文土器，弥生土器，土師器……177
34 土師器(１)杯……178
35 土師器(２)杯・埦，赤焼土器……179
36 土師器(３)皿・高台杯・壺・甕……180
37 須恵器(１)杯……181
38 須恵器(２)杯……182
39 須恵器(３)杯・高台杯・長頸瓶……183
40 須恵器(４)長頸瓶・壺……184
41 須恵器(５)壺・甕……185
42 須恵器(６)甕・横瓶・硯……186
43 須恵器片……187
44 墨書土器(１)……188

45　墨書土器（２）……189
46　墨書土器（３）……190
47　木製品（１）　椀……191
48　木製品（２）　椀……192
49　木製品（３）　椀・皿・盤……193
50　木製品（４）　曲物　柄杓・底板……194
51　木製品（５）　曲物　底板・側板……195
52　木製品（６）　曲物　側板，串・
　　木簡・串状木製品，棒状木製品
　　火付木・板状木製品……196
53　木製品（７）　板状木製品・
　　建築部材・下駄……197
54　木製品（８）　櫛，荷札，瓢箪容器
　　性格不明木製品……198
55　木製品（９）　１号井戸跡出土部材……199
56　木製品(10)　１号井戸跡出土部材……200
57　木製品(11)　１号井戸跡出土部材……201
58　石製品，金属製品，古銭……202

第２編　西坂才遺跡（１次）

［挿　図］

図１　遺跡調査範囲・グリッド配置図……206
図２　Ａ区遺構配置図（１）……208
図３　Ａ区遺構配置図（２）……209
図４　Ｂ区遺構配置図（１）……210
図５　Ｂ区遺構配置図（２）……211
図６　Ａ区基本土層……212
図７　１号掘立柱建物跡，13・15・23号溝跡，
　　１号柱列跡（１）……214
図８　１号掘立柱建物跡，23号溝跡，
　　１号柱列跡（２）……215
図９　１号掘立柱建物跡(15号溝跡)出土遺物……216
図10　２号掘立柱建物跡……218
図11　３ａ・ｂ号掘立柱建物跡・出土遺物……220
図12　４号掘立柱建物跡……221
図13　５号掘立柱建物跡……224
図14　６号掘立柱建物跡……225
図15　７号掘立柱建物跡……226
図16　８ａ・ｂ号掘立柱建物跡（１）……227
図17　８ａ・ｂ号掘立柱建物跡（２）……228
図18　Ａ区溝跡……233
図19　16号溝跡……234
図20　Ｂ区溝跡……235
図21　５号溝跡……236
図22　溝跡出土遺物（１）……237
図23　溝跡出土遺物（２）……238
図24　14号溝跡出土遺物……239
図25　１～４号土坑……243
図26　５号土坑……244
図27　５号土坑出土遺物（１）……245
図28　５号土坑出土遺物（２）……246
図29　６～９・11号土坑……247
図30　土坑出土遺物……248
図31　古代溝跡位置図……251
図32　暦年較正年代グラフ……258

［　表　］

表１　会津若松市高野地区内
　　円面硯出土遺跡一覧……253
表２　会津若松市高野地区周辺
　　脚付鍋出土遺跡一覧……253
表３　放射性炭素年代測定結果……257
表４　放射性炭素年代測定結果……257

［写　真］

１　調査区全景……261
２　調査区Ａ区調査前全景……262
３　調査区全景……262
４　調査区Ａ区全景……263
５　調査区Ｂ区全景……263
６　１・３号掘立柱建物跡……264
７　１号掘立柱建物跡……264
８　２号掘立柱建物跡……265
９　３号掘立柱建物跡……265
10　４号掘立柱建物跡……266
11　５号掘立柱建物跡……266
12　６号掘立柱建物跡……267
13　７号掘立柱建物跡……267
14　８ａ・ｂ号掘立柱建物跡……268
15　１・３・６号掘立柱建物跡……268
16　溝跡（１）……269
17　溝跡（２）……270
18　溝跡（３）……271
19　土坑（１）……272
20　土坑（２）……273
21　５号土坑……274
22　出土遺物（１）……275
23　出土遺物（２）……276

序　　章

第１節　調査に至る経緯

会津縦貫北道路は，会津盆地北部の会津若松－喜多方間を結ぶ自動車専用の基幹道路で，喜多方市関柴町大字西勝を起点とし，湯川村を経て会津若松市高野町大字中沼を終点とする全長13.1㎞の道路として計画されている。平成８年に計画が策定され，同９年度からは，建設省(現国土交通省)直轄事業として，建設が進められている。平成25年９月には喜多方の起点から湯川南インターチェンジ(以下，ＩＣ)までが開通した。平成27年度には全線が開通する予定である。

福島県教育委員会では，会津縦貫北道路建設予定地内にある埋蔵文化財の保護を図るために，平成９年度より財団法人福島県文化センター(現公益財団法人福島県文化振興財団)に委託して表面調査を実施した。表面調査では，平成９年度に周知の遺跡21か所，遺跡推定地３か所，平成19年度に周知の遺跡４か所，遺跡推定地２か所を確認した。

表面調査により確認された周知の遺跡，遺跡推定地については，工事計画において優先箇所となる地点を対象として，平成12年度から試掘調査が実施された。平成18年度までに喜多方市に所在する遺跡，平成23年度までに湯川村に所在する遺跡の試掘調査を完了した。会津若松市に所在する遺跡の試掘調査は，平成23・24年度に実施した。試掘調査未実施区域については，本年度予備調査の形で本調査に先立って試掘調査を実施した。

試掘調査によって，保存範囲が確定された遺跡については，福島県教育委員会と東北地方建設局郡山国道工事事務所(現東北地方整備局郡山国道事務所)が協議を行い，発掘調査を実施して記録保

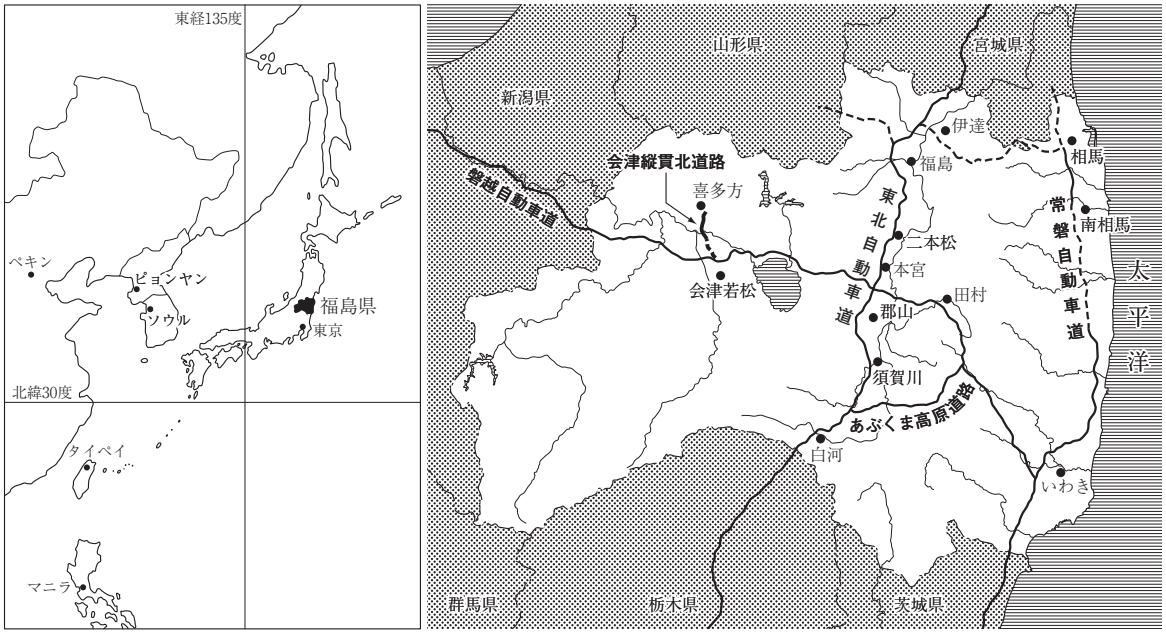


図１　会津縦貫北道路位置図

存を図ることとなった。

鶴沼Ｃ遺跡の発掘調査では，掘立柱建物跡９棟，井戸跡１基，土坑35基，溝跡25条，河川流路跡３か所などを確認している。河川流路跡からは，大量の平安時代の土器などと共に，木製品も見つかっている。出土土器には，墨書土器が多く含まれており，中には複数の文字が書かれたものや，「倉人」等の郡衙関連の性格を持つ遺跡であることを示すものなども出土している。また，井戸跡は，木枠を井桁に組んだ平安時代のもので，木枠材として建物の扉などを再利用していた。流路跡・井戸跡は，いずれも建物群に付随する施設と思われる。

西坂才遺跡の発掘調査では，堀立柱建物９棟，溝跡22条，井戸跡１基，土師器焼成坑１基，土坑８基などを確認した。溝跡のうち，平安時代の建物群それよりも先行して掘り込まれていた14号溝跡については，そのまま西側の鶴沼Ｃ遺跡まで直線的に延伸している。平面形が釣鐘形をした土器焼成坑からは，主に土師器甕の破片が出土し，中には三本脚付鉢なども細片となって出土している。

本年度まで実施された分布調査と発掘調査について表１に示す。試掘調査では，平成12年度より本年度まで，麻生館遺跡から西坂才遺跡までの10遺跡について実施され，発掘調査は平成13年度の喜多方市麻生館遺跡から本年度までに10遺跡について実施された。　　（藤　谷）

表１　会津縦貫北道路関係遺跡の調査履歴

遺　跡　名 （調査次数）	調査 内容	調 査 年 度	報　告　書　名
麻生館遺跡	分　布	2000年	県内遺跡分布調査報告７
	発　掘	2001年	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告１
荒屋敷遺跡（１～５次）	分　布	2000～2002，2004年	県内遺跡分布調査報告７～９，11
	発　掘	2001～2005年	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告２～６
高堂太遺跡（下高額館跡） （１～４次）	分　布	2004～2006年	県内遺跡分布調査報告12，13
	発　掘	2005～2008年	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告６～９
沼ノ上遺跡	分　布	2002，2007年	県内遺跡分布調査報告９，14
	発　掘	2007年	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告８
桜町遺跡（１～５次）	分　布	2003，2004，2008，2010年	県内遺跡分布調査報告10，11，15，18
	発　掘	2004，2009～2011，2013年	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告５，10，11，12，14
西木流Ｃ遺跡（１・２次）	分　布	2011年	県内遺跡分布調査報告18，20
	発　掘	2012，2013年	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告13，14
西木流Ｄ遺跡	分　布	2011，2012年	県内遺跡分布調査報告18～20
	発　掘	2013年	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告14
鶴沼Ｂ遺跡	分　布	2011，2012年	県内遺跡分布調査報告19，20
	発　掘	2013年	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告14
鶴沼Ｃ遺跡	分　布	2012，2013年	県内遺跡分布調査報告20，21
	発　掘	2013年	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告15
西坂才遺跡	分　布	2012，2013年	県内遺跡分布調査報告20，21
	発　掘	2013年	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告15

第２節　地 理 的 環 境

鶴沼Ｃ遺跡は会津若松市高野町大字中沼字鶴沼に，西坂才遺跡は会津若松市高野町大字中沼字西坂才に所在している。南東方向に直線距離で約3.6㎞のところにＪＲ会津若松駅があり，最寄りの駅は北西約1.6㎞にあるＪＲ磐越西線堂島駅である。また，遺跡の東側約400ｍには会津若松と喜多方を結ぶ国道121号線が南北に走っており，南側では約1.2㎞先で東北自動車道会津若松ＩＣと連結している。遺跡は会津盆地の中央よりやや南東側に位置している。

会津盆地は，面積約324㎢，南北約32㎞，東西約13㎞と南北方向に長い地溝状の形を示す構造盆地であり，北側は飯豊連峰，東は磐梯山塊・奥羽山脈，南から西縁は会津山地から越後山脈に連なる連山に囲まれた低地である。河川とその周辺にそって帯状にのびる氾濫原，河川間の平坦な段

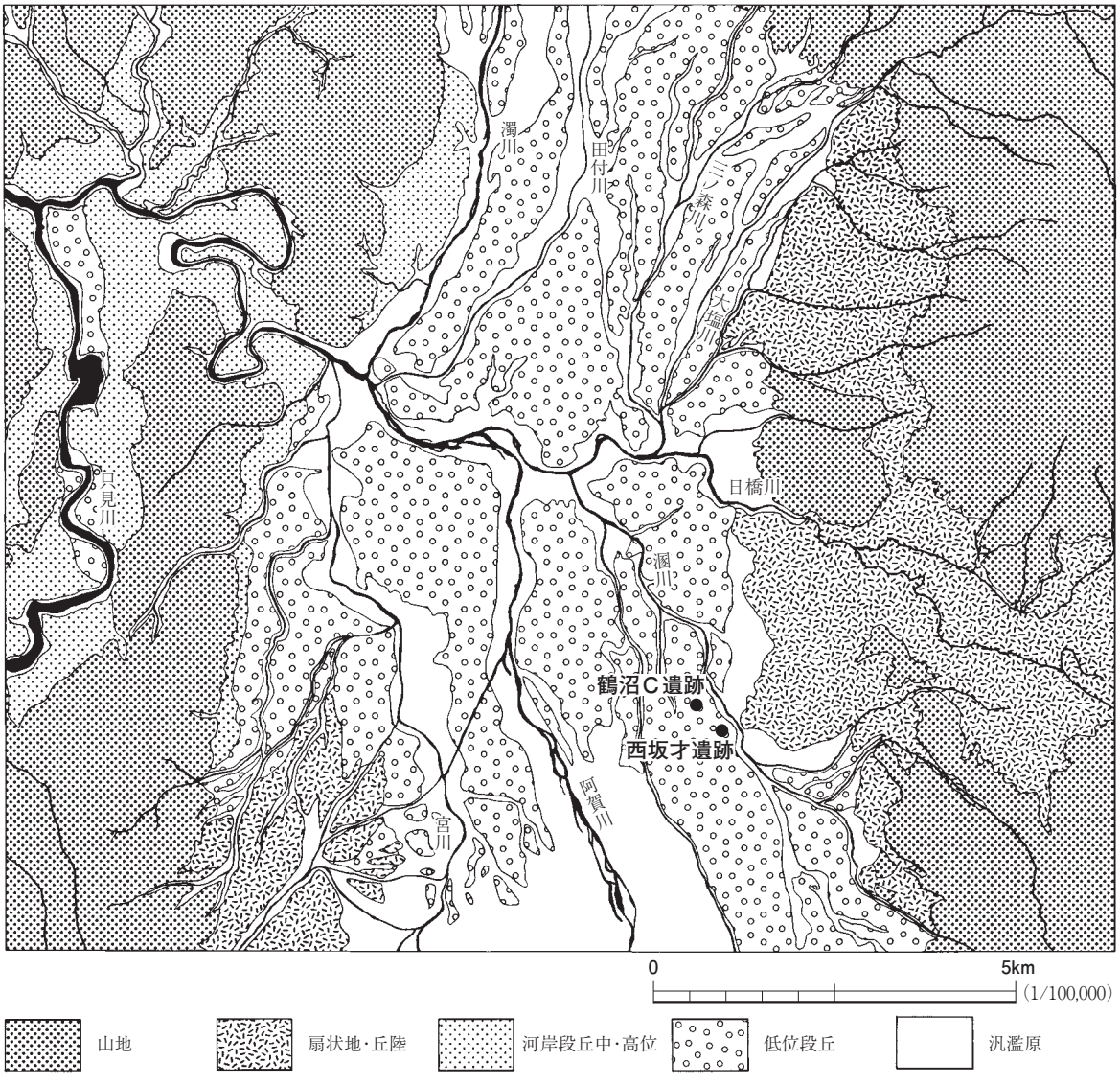


図２　調査遺跡と会津盆地北部地形

丘，扇状地に大きく分けることができる。特色としては，阿賀川が盆地から流出する先に，大規模な河岸段丘が発達していることである。この河岸段丘は，沼沢火山噴出物起源のハラール堆積物が基盤となっている。盆地南側の東縁部は，背炙山地山麓から盆地床に続く扇状地が広がっている。盆地床は東縁部から中央を流れる阿賀川に向かって，南から北側に向かって緩やかに傾斜している。遺跡付近の標高は，鶴沼Ｃ遺跡で約190ｍ，西坂才遺跡で約191.5ｍであり，鶴沼Ｃ遺跡中央では南から北に向かって約10～20㎝の比高差が認められる。

会津盆地内では，南会津に水源を持ち，盆地内の最大の河川である阿賀川（大川）をはじめ，その支流の宮川（鶴沼川）・旧湯川などが北流している。盆地中央東側では唯一猪苗代湖に水源を持つ日橋川が西流しており，そこに遺跡の約50～80ｍ東側を流れる溷（せせなぎ）川が流れ込んでいる。溷川には東側より大工川・金山川・不動川の各支流が合流している。これらの河川は，扇状地を侵食し，段丘状の地形等を形成させている。５万分の１の土地基本分類調査図「喜多方」では，地形区分は中央低地（大川低地）に属している。遺跡付近は，ＦｔⅢ下位扇状地に分類されており，遺跡周辺は，扇状地が侵食され平坦な低位段丘上に位置すると考えられる。会津盆地の土壌は，大きくは腐食を含む黒ボク土，灰色の低地土，褐色の低地土に分かれ，遺跡付近は，細粒灰色の低地土（高堂太統）が分布する地域に含まれている。両遺跡の基本土層のＬⅠは黒褐色（暗褐色）粘質土，ＬⅡは灰黄褐色粘土になっており，このＬⅡ層が基本土壌の灰色の低地土に含まれると考えられる。また，ＬⅢ以下に堆積している砂礫層については互層が多く，近くを流れる溷川等の諸河川によって形成された段丘堆積物であると思われる。段丘堆積物は周辺の地形に左右されるため，地域の中での分布にある程度偏りがあることが想定される。

この地域の気候は日本海側気候に属すると同時に，内陸盆地特有の気候も有している。夏は高温多湿であり，雷雲の発生が多く，12月は降雪により降水量が多くなる。東北地方太平洋沿岸で冷害をもたらすヤマセの影響が及ぶことは少ない。また，盆地気候の特徴として，気温の日較差が比較的大きいことのほかに，霧の発生日が多いことがあげられる。過去20年間でも年平均40日を数え，特に10月～12月にかけて平均25日と集中している。発生原因は気温の逆転に伴う放射霧の滞留が主なものであるが，大川沿いには水面から発生する蒸気霧も少なくない。会津地方においてこの盆地部は例外的にも積雪は比較的少ない。そのほかに，会津盆地の西縁には活発な活断層があり慶長16（1611）年の会津大地震にも関連している。地震による阿賀川の閉塞，堰止湖の形成が繰り返され大きな湖沼が発生した痕跡が示されている。また，阿賀川を含む河川は，たびたび氾濫を繰り返しており，会津平の地を豊かにするとともに大きな災害をもたらしている。

このような環境から，会津盆地は東北地方でも有数の米産地となっており，遺跡周辺でも各集落間の平地は水田として利用されている。両遺跡は，鶴沼集落からその東側の水田地帯まで広がっているが，調査前は大部分が水田として利用されていた。南北と東は周囲を険しい山岳地帯に阻まれている一方，西方は阿賀川を介して新潟方面と深く結びついた。このため，東北地方南部にありながら，北陸地方と結びついた風土を形成してきたと言える。（日下部）

第3節　歴 史 的 環 境

本節では西木流Ｃ遺跡が所在する会津若松市を中心に，主に発掘調査が行われた会津地方の遺跡から見た歴史的動向について概観していく。

会津若松市の遺跡数については，『会津若松市埋蔵文化財分布調査報告書』（会津若松市教育委員会1999）によると，これまで354の遺跡が確認されていた。さらに，平成の市町村合併によって旧河東町分の遺跡数と，近年追加された遺跡数を合わせると，平成24年度までに合計499の遺跡が会津若松市埋蔵文化財台帳に登載されている。

旧石器時代

会津盆地における旧石器時代遺跡の事例は少ないが，湊町にある笹山原遺跡群，喜多方市塩坪遺跡などが調査されている。笹山原遺跡群は，ナイフ形石器などを含む後期旧石器時代前半期の遺跡で，ナイフ形石器と台形様石器を含む後期旧石器時代前半期の石器群と，細石刃を主体とする後期旧石器時代終り頃の石器群が見つかっており，福島県内でも有数の旧石器時代遺跡である。その他では，同じく湊地区の小石ヶ浜遺跡や廻戸Ｂ遺跡など，現在確認されている会津若松市内の旧石器時代遺跡の多くは現在の猪苗代湖西岸寄りの山麓部に集中する傾向にある。

縄文時代

縄文時代の遺跡は，旧石器時代と同様山間部や山麓部に多い。縄文時代は草創期から遺跡が確認できる。笹山原№11遺跡からは隆起線文土器が出土し，西会津町塩喰岩陰遺跡からも草創期の遺物が出土している。早期の遺跡としては，常世式の標識遺跡ともなっている喜多方市常世原田遺跡が確認されている。前期から後期にかけての会津若松市内の調査事例では，湊地区の笹山原№11遺跡や河東地区の大野原Ａ遺跡などからも早期の土器が出土している。大戸地区の本能原遺跡では，中期の環状集落が確認されており，福島県内では有数の規模である。後・晩期では，大戸地区の上雨屋遺跡では300基以上の土坑墓が検出され，縄文後期から弥生時代中期までの土坑が確認されている。一箕地区の墓料遺跡でも縄文晩期の土坑墓が確認されている。

弥生時代

会津若松市周辺では，弥生時代の墓制について知ることができる著名な遺跡が多い。しかしながら，集落跡については現時点でも不明な部分が多い。弥生中期には，再葬墓が一箕地区の墓料遺跡の他に，門田地区の南御山遺跡，そして会津美里町油田遺跡などで確認されている。ほかに，門田地区の一ノ堰Ｂ遺跡や湯川地区の川原町口遺跡で，土坑墓群が調査された。再葬墓は，縄文時代以来の埋葬方法であり，東日本で多く見られる。弥生時代後期になると，再葬墓が見られなくなり，それに代わるように方形周溝墓が作られ始める。湯川村桜町遺跡では，弥生時代後期から古墳時代初頭の井戸跡より木製鍬や掘り棒などの木製農耕具が出土し，弥生時代後期頃には会津地方で農耕が始まっていたことが分かった貴重な遺跡である。河東地区の宮越貝塚や高野地区の上高野貝塚な

どは，全国的にも類例の少ない純淡水性の弥生時代後期の貝塚が確認されている。

古墳時代

古墳時代になると，会津盆地でも前方後円墳の築造が開始される。会津地方では前期古墳が多く知られる。前期古墳はいくつかの集中地点があり，盆地南東部では一箕地区の会津大塚山古墳･堂ヶ作山古墳・飯盛山古墳，盆地西部の会津坂下町杵ガ森古墳・亀ヶ森古墳・鎮守森古墳，盆地北東部にある雄国山麓の喜多方市田中舟森山古墳・観音森古墳・十九壇古墳群などで大型前方後円墳が築造されている。会津大塚山古墳からは東北地方で唯一の三角縁神獣鏡が出土し，会津地方のみならず東北地方の古墳時代史を考える上で重要な発見となった。また，湯川村桜町遺跡では，前方後円墳形の周溝墓が確認され，古墳受容期のものと考えられる。

古墳時代中期以降の会津盆地では，大型古墳の築造が低調になる。会津坂下町長井前ノ山古墳は前方後円墳であるものの墳長約36ｍと小型である。中小規模古墳で構成される古墳群も確認されているが，その大半が未調査で，遺物も採集されていないため不明な点が多い。

一箕地区の村北古墳群，大塚山西古墳などが調査されており，いずれも古墳時代後期の古墳と考えられている。７世紀代になると，横穴墓も構築され，河東地区の駒板新田横穴墓群や，喜多方市山崎横穴墓群では小札甲など，後期・終末期古墳と遜色のない副葬品が確認できる。

古墳時代の集落については，古墳同様に不明な点が多い。古墳時代前期の集落遺跡は弥生時代後期から継続して営まれている遺跡で確認できる。町北地区の屋敷遺跡では，古墳時代前期の竪穴住居が確認されており，弥生時代に引き続いた集落形成が確認できる。しかし，古墳時代前期以降の集落は，河東地区の村西遺跡，門田地区の門田ほ場遺跡などで竪穴住居跡が確認されている以外は不明な点が多く，様相は明らかになっていない。ほかに，国指定史跡の喜多方市古屋敷遺跡では，古墳時代中から後期にかけての豪族居館跡が確認されている。さらに，会津坂下町中平遺跡・樋渡台畑遺跡などで古墳時代後期の遺跡が調査されている。７世紀代の遺跡も，あまり確認されておらず，喜多方市内屋敷遺跡，会津坂下町竹原遺跡など数えるほどである。

奈良・平安時代

奈良時代の遺跡は，古墳時代に続いて遺跡の確認・調査数ともに少ないため不明な点が多い。河東地区の郡山遺跡は継続して調査が行われている数少ない遺跡で，奈良時代から平安時代の遺物が確認されている。掘立柱建物跡や，「會」と書かれた墨書土器や瓦，一般の集落には流通しない灰釉陶器などが出土していることから，会津郡衙の推定地として有力視されている。近隣では，平成25年(2013年)に発掘調査を実施した湯川村殿田遺跡では，奈良時代と７世紀代の竪穴住居跡が複数重複する形で確認され，会津郡衙設立前の様相を示す性格痕跡と考えられている。

奈良時代の生産遺跡としては，一箕地区の村北瓦窯跡が７世紀後半～８世紀初頭に操業していた。ここは会津盆地で唯一確認されている瓦窯跡であるが，操業期間は短期で，その供給地は明確ではない。奈良時代後半になると，東北地方でも有数の規模である大戸古窯跡群で須恵器の生産が開始される。大戸古窯跡で生産された須恵器は，会津地方だけではなく周辺各地へ供給されており，特

に長頸瓶は大戸古窯跡を特徴付けるものである。

平安時代に入って，市内の集落遺跡が急激に増加する。会津若松市に限ってみても町北地区の屋敷遺跡のほか，高野地区の矢玉遺跡・上吉田遺跡，神指地区の東高久遺跡など整然と並んだ掘立柱建物跡群が多く確認され，埋没した自然流路に沿って官衙に関連した遺跡が点在していたものと想定できる。ほ場整備に伴って会津若松市が実施した西木流Ｃ遺跡の調査でも，寺院や有力者の住居と考えられることが多い四面庇を持つ掘立柱建物跡が確認されているほか，灰釉陶器や緑釉陶器などが含まれていたことから，官衙に関連する遺跡として考えられている。喜多方市内屋敷遺跡・鏡ノ町遺跡Ａ・Ｂ，会津坂下町大江古屋敷遺跡・吉原遺跡などでも整然と並んだ掘立柱建物跡群が検出されており，郡衙とその周辺における土地の開発の状況から，平安時代における会津の社会の発展の状況がうかがえる。

大同２年(807年)，徳一上人によって建立された湯川村勝常寺(会津中央薬師堂)には，国宝である木造薬師如来及び両脇侍像を含む12体の仏像が安置されており，９世紀代造立された貞観仏として知られている。また，同じく徳一によって建立されたと伝わる磐梯町恵日寺など，平安時代の会津盆地には仏教の発展の状況をうかがえる寺院が散在している。湯川村では平成21年(2009年)から，堂後遺跡として勝常寺の範囲確認調査を継続している。調査の結果，応永５年(1398年)再建時の方形区画溝跡や関連施設などが確認されている。11世紀以降は集落の様相が再び不明瞭になるが，平安時代末の会津坂下町陣が峯城跡の調査から，当該期の多くの知見が得られた。

中世・近世

中世に入ると，会津地方では三浦蘆名氏が台頭するほか，新たな支配者層が成立する。会津盆地の各所に中世城館跡の存在が伝えられ，史料中にその城主名などが記されている。近年，会津縦貫北道路関連の発掘調査によって，喜多方市荒屋敷遺跡・麻生館遺跡・高堂太遺跡・下高額館跡などの中世の平城・平館が調査されたほか，喜多方市新宮城跡，湯川村北田城跡なども一部発掘調査されている。これらの調査により中世の城館の構造などの状況が次第に明らかにされてきており，文献に残された記録との対比が可能となり，中世の会津地方の歴史を考える上での資料が充実してきている。

戦国時代には，蘆名氏が全盛を迎えるも次第に衰退へ向かう。天正17年(1589年)には蘆名義広と伊達政宗による摺上原の戦いが起こり，伊達政宗が勝利し，蘆名氏は事実上滅亡する。伊達政宗が一時的に会津に入るも，その後は蒲生秀行，上杉景勝，加藤嘉明らが会津地方を治めている。この歴史の動向に関わる城跡が会津地方では確認できる。湯川村浜崎城は豊臣秀吉の奥州仕置後に廃城になるはずのところを蒲生氏が御茶屋として残している。神指地区にある神指城跡は慶長３年(1598年)に会津に入った上杉景勝が鶴ヶ城として知られる若松城が狭いという理由で築城を開始した。しかし，徳川家康の会津征伐の計画によってその途中で築城は中断された。その後，関ヶ原の戦い後の慶長６年(1601年)，上杉景勝は米沢に移封となり，神指城は完成を待たずに破却となった。神指城跡の一部は，近年試掘・発掘調査されており，二の丸の南辺と東辺の土塁跡と堀跡が確

1
2
3
4
5
6
7
8
9
10
11
12
13
14
15
16
17
18
19
20
21
22
23
24
25
26
27
28
29
30
31
32
33
34
35
36
37
38
39
40
41
42
43
44
45
46
47
48
49
50
51
52
53
54
55
56
57
58
59
60
61
62
63
64
65
66
67
68
69
70
71
72
73
74
75
76
77
78
79
80
81
82
83
84
85
86
87
88
89
90
91
92
93
94
0
2km
(1/50,000)

図３　周辺の遺跡位置図

表2　周辺の遺跡一覧

No.	遺跡名	種類	備考（文献）
1	**鶴沼C遺跡**	**奈良・平安時代の散布地**	**本書**
2	**西坂才遺跡**	**奈良・平安時代の散布地**	**本書**
3	桜町遺跡	弥生集落・墳墓，平安集落，中近世の城館跡	『会津5・10・11・12・13』
4	西木流C遺跡	奈良・平安時代の散布地	『会津若松66』，『会津13・14』
5	西木流D遺跡	奈良・平安時代の散布地	『会津若松66』，『会津14』
6	鶴沼B遺跡	奈良・平安時代の散布地	『会津66若松』
7	西木流A遺跡	奈良・平安時代の散布地	『会津若松66』
8	鶴沼A遺跡	奈良・平安時代の散布地	
9	西木流B遺跡	中世の散布地	『会津若松66』
10	下高野館跡	中世の城館跡	
11	鏡ノ町A遺跡	奈良・平安時代の集落跡	『塩川町3』
12	鏡ノ町B遺跡	奈良・平安時代の集落跡	『塩川町8』
13	沖館跡（館ノ内遺跡）	中世の城館跡	『新編』，『会津鑑』，『塩川３』『蘆名家御旧臣見聞録』
14	内屋敷遺跡	古墳～近世集落跡	『塩川町７・12』
15	貝沼館跡	中世の城館跡	『新編』，『蘆名家御旧臣見聞録』
16	麻生館遺跡（麻生館跡）	平安時代の集落跡・中世の館	『会津１』
17	上江館跡	中世の城館跡	『新編』
18	別府館跡	中世の城館跡	『古墨記』
19	上窪南館跡	中世の城館跡	『新編』
20	丹波館跡	中世の城館跡	『新編』，『会津鑑』，『古墨記』
21	南屋敷跡	中世の城館跡	『新編』，『会津鑑』，『古墨記』
22	小滝館跡	中世の城館跡	『新編』，『古墨記』，『蘆名家御旧臣見聞録』
23	掘込館跡	中世の城館跡	
24	深沢・平塚館跡	中世の城館跡	『新編』
25	竹の内館跡	中世の城館跡	
26	御池田山ノ神遺跡	平安時代・中世の散布地	『坂下44』
27	中目経塚	中世の塚	
28	下遠田館跡	中世の城館跡	『新編』，『会津鑑』，『古墨記』
29	荒屋敷遺跡	縄文～古墳・平安・中近世の散布地	『会津２～６』『塩川町10・13』
30	新屋敷跡	中世の城館跡	『新編』
31	北田城跡	中世の城館跡	『新編』，『会津鑑』，『古墨記』，『湯川村史』，『北田城跡』（湯川村，1984）
32	堂畑館跡	中世の城館跡	『古墨記』，『湯川村史』
33	小十郎館跡	中世の城館跡	『新編』
34	柏木城館	中世の城館跡	『塔寺八幡宮長帳』，『新編』，『会津旧事雑考』
35	浜崎城跡	中世・近世の城館跡	『新編』，『会津鑑』，『古墨記』，『浜崎城絵図』
36	浜崎館跡	中世の城館跡	『会津鑑』
37	沼ノ上遺跡	縄文，中世の集落跡	『会津8』
38	三橋館跡	中世の城館跡	『塔寺八幡宮長帳』，『新編』，『会津鑑』，『古墨記』
39	金川館跡	中世の城館跡	
40	笈川館跡	中世の城館跡	『新編』，『会津鑑』，『古墨記』
41	島の館跡（島村館）	中世の城館跡	『新編』，『会津鑑』，『古墨記』
42	嶋村館跡	中世の城館跡	『会津鑑』，『古墨記』，『伴野家系図』，『会津若松111』
43	権現堂跡	平安・中世の社寺跡	
44	地蔵窯跡	中世の窯跡	
45	堂島塁跡（堂島館）	中世の城館跡	『会津鑑』，『古墨記』，『河東町史』
46	大和田館跡	中世の城館跡	『川東町史』，『蘆名旧臣録』，『新編』，『河東町12』
47	大和田柵跡	中世の城館跡	『古墨記』，『河東町史』
48	大正寺跡	中世の社寺跡	
49	熊野堂館跡	中世の城館跡	『新編』，『河東町史』
50	高館館跡	中世の城館跡	『新編』，『会津鑑』，『古墨記』
51	南高野館跡	中世の城館跡	
52	勝常寺薬師堂	中世の社寺跡	『湯川村史』
53	禅定寺跡	中世の社寺跡	『新編』
54	笠ノ目館跡	中世の城館跡	『新編』，『会津鑑』，『古墨記』
55	荒木の館跡（代田村館）	中世の城館跡	『会津鑑』，『古墨記』，『新井家由来記』
56	高畑村館跡（高畑遺跡）	中世の城館跡	『会津鑑』，『古墨記』，『坂下27』
57	海老沢館跡	中世の城館跡	『新編』
58	佐野館跡	中世の城館跡	『古墨記』，『湯川村史』
59	細工名館跡	中世の城館跡	『新編』，『会津鑑』
60	塚原館跡	中世の城館跡	『新編』，『会津鑑』，『塚原村社寺縁起』，『会津坂下町史』
61	中ノ目館跡	中世の城館跡	『会津鑑』，『古墨記』
62	熊川館跡	中世の城館跡	『湯川村史』，『二瓶氏系図』
63	米丸館跡	中世の城館跡	『会津鑑』，『古墨記』
64	界沢遺跡	中世の城館跡	
65	東高久遺跡	平安時代の集落跡	『会津若松104』
66	西館跡	中世の城館跡	『新編』，『会津鑑』，『古墨記』
67	界沢館跡	中世の城館跡	
68	明石塚館跡	中世の城館跡	『明石塚館』（河東町，1977），『地誌草稿郡山村』
69	郡山遺跡	奈良・平安時代の官衙推定地	『河東町15』，『会津若松107・114・115・118・124・128
70	原田館跡	中世の城館跡	
71	中屋敷館跡	中世の城館跡	『明石塚館』（河東町，1977），『地誌草稿郡山村』
72	平塚館跡	中世の城館跡	『新編』
73	足利館跡	中世の城館跡	
74	平塚館跡	中世の城館跡	『新編』
75	和泉館跡	中世の城館跡	
76	田村山館跡	中世の城館跡	『新編』，『会津鑑』，『古墨記』
77	石原館跡	中世の城館跡	『新編』，『会津鑑』
78	平右衛門館館跡	中世の城館跡	
79	北館館跡	中世の城館跡	
80	東館館跡	中世の城館跡	
81	中館館跡	中世の城館跡	
82	真渡館跡	中世の城館跡	『新編』
83	矢玉遺跡	奈良・平安時代の散布地	『会津若松61』
84	上吉田B遺跡	中世の散布地	『会津若松66』
85	横沼館跡	中世の城館跡	
86	イタミ七堂跡	中世の社寺跡	
87	中地館跡	中世の城館跡	『新編』
88	神指城跡	中世の城館跡	『新編』，『会津鑑』，『古墨記』，『会津農水X』
89	金屋遺跡	奈良・平安時代の集落跡	『会津若松107』
90	殿田遺跡	奈良・平安時代の集落跡	湯川村2006
91	下高野A遺跡	奈良・平安時代の散布地	『会津若松66』
92	上吉田遺跡	平安時代の集落跡	「横断道９」
93	上吉田C遺跡	平安時代の集落跡	『会津若松66』
94	屋敷遺跡	弥生・古墳・平安時代，中世の集落跡	「会津若松30・94」，「横断道12」

『会津』会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告書　『会津農水』国営会津農業水利事業関連遺跡発掘調査　『横断道』磐越自動車道遺跡発掘調査報告書　『新編』新編会津風土記　『古墨記』会津古墨記　『会津若松』会津若松発掘報告書　『河東町』河東町発掘報告書　『塩川町』塩川町発掘報告書　『坂下』会津坂下町発掘報告書

認されている。

江戸時代の会津地方は，徳川秀忠の庶子である保科正之が寛永20年(1643年)に会津藩主となり，その後の会津藩の藩政の基礎を固めた。若松城やその城下に広がった武家屋敷跡も発掘調査によって確認されており，当時の武家の生活を示す遺物が出土している。高野地区の西木流Ｃ遺跡近隣にある馬頭観音堂には競馬場跡があり，会津藩主が毎年観覧に来ていたことが伝わっている。(阿　部)

第４節　調 査 方 法

平成25年度に調査を実施した鶴沼Ｃ遺跡および西坂才遺跡では，以下に基づいて行った。

グリッド設定については，世界測地系公共座標に一致させ，両遺跡ともに一辺10ｍ方眼を単位とした。両遺跡とも個別のグリッドは，東西方向に西から東へアルファベットＡ・Ｂ…，南北方向に北から南へ算用数字で１・２…とし，両者を組み合わせて，Ｄ６グリッドなどと呼称している。

遺構の掘り込み作業については，各遺構の形状・大きさ・重複関係に留意し，土層観察用のベルトを設定した。土坑など小型の遺構については，長軸方向にベルトを設定した。遺構内から出土した遺物の取り上げに際しては，上記の区画ごとに層位を確認した上で取り上げた。第１編鶴沼Ｃ遺跡の１号井戸跡の調査のように，安全面に特段の配慮をした調査方法については別途報告した。

遺構の記録は，掘立柱建物跡・井戸跡・土坑・溝跡を原則１/20の縮尺で，流路跡を１/40の縮尺で実施した。また，鶴沼Ｃ遺跡の１号井戸跡については，東西南北４面の枠材の出土状況について１/10の縮尺で立面図を作成した。層位名を付す際，基本層位についてはローマ数字を用いて「ＬⅠ・ＬⅡ…」と表した。遺構内堆積土層は，算用数字を用いて「ℓ１・ℓ２…」と表した。土層の色調は，『新版標準土色帳』を参考に記載した。遺物については，小さなものを１/10の縮尺，大型のものを１/20の縮尺で記録を行った。地形測量は，１/200の縮尺で行った。遺構平面図を作成するに際しては，各グリッドのＸ・Ｙ座標を基に１ｍの方眼に分割し，これを基準線とし，遺構平面図中で用いた。遺構平面図中の遺物については，流路跡を中心として，№１から順番に番号を振り，出土地点と標高をそれぞれ記録した。鶴沼Ｃ遺跡から出土した木製品については，小型のものはタッパーに水を入れ，水漬けし前記の遺物カードを入れ持ち帰った。大型の木製品については，水を入れた大型の平箱に遺物カードをつけて保管し，一部をサンプルとして持ち帰った。

写真撮影は，35㎜一眼レフカメラ２台を利用して，モノクロフィルムとカラーリバーサルの両方のフィルムを使って実施した。更に一部については，デジタルカメラによる写真撮影も行った。調査区と流路跡の全景写真については，ラジコンヘリコプターを利用した空中写真撮影を行い，フィルムには35㎜カメラと６×７判カメラによるカラーリバーサルフィルムを用いた。また，空撮写真撮影には35㎜デジタルカメラも利用した。発掘調査で得られた出土遺物と記録類一式については，報告書作成完了後，遺跡ごとに台帳を作成し，福島県文化財センター白河館(まほろん)に収蔵する予定である。　(藤　谷)

第1編　鶴沼C遺跡

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺 跡 の 位 置

鶴沼Ｃ遺跡は，会津若松市高野町大字中沼字鶴沼地内に所在する。周辺には，第２沼川を挟んで西側に鶴沼集落があり，東側には，溷川とその周辺の低地を挟んで国道121号線が走っている。本年度の調査区は，その間の水田部分であり，南北に走る農道と用水路によって３か所に分断されている。区画された３か所を西からⅠ区，Ⅱ区，Ⅲ区として調査を実施した。　（藤　谷）

第２節　調 査 経 過

平成25年度は，本調査に先行して，４月11～25日まで遺跡東側水田部分11,000㎡を対象とした予備調査を実施した。合計55本のトレンチを設定し，そのうち西側のトレンチから遺構・遺物が検出され，合計3,000㎡について新たに要保存範囲とした。今回は，それらを足した11,000㎡について発掘調査を実施した。

発掘調査は，４月18日から西側のⅠ区の表土削除作業を開始し，５月１日にⅡ区までの作業を終了した。４月23日から，作業員約50名を導入し，調査員４名体制で作業を開始した。

５月中は，Ⅰ・Ⅱ区の遺構検出作業と精査を実施し，Ⅰ区からは流路跡と土坑と溝跡が，Ⅱ区からは，掘立柱建物跡と溝跡が検出された。また，国土座標に沿ったグリッド基準杭と標高杭の打設を委託し，５月後半に完了した。

６月中は，Ⅰ･Ⅱ区で検出された遺構の調査を進め，Ⅰ区では流路跡と溝跡と土坑，ピット群の，Ⅱ区では掘立柱建物跡の調査を実施した。６月18日からは，Ⅰ・Ⅱ区の調査と並行してⅢ区の表土削除作業を小型重機で開始し，最終的には９月４日に終了した。６月末からは，先行引き渡しが必要な鶴沼Ｂ遺跡の北側の調査を優先する必要が出てきたため，半分の調査体制で調査を継続した。

７月は，特にⅠ区の流路跡の調査を中心に実施し，８月２日に第１回目の空撮写真撮影を実施した。８月初旬にⅠ区上面の遺構調査が終了した。８月５日からは，Ⅲ区の遺構検出作業を開始し，８月22日より精査を実施した。

９月からは，Ⅲ区の調査と並行して，Ⅰ区の北側にサブトレンチを設定したところ，土坑・ピットが検出された下面に，更に流路跡があることが判明し，９月24日にⅠ区北側にある２号流路跡上面の堆積土の除去作業を開始した。また，９月８日(日)には会津若松市高野地区のウォーキング大会で本事業の現場を目的地の１つとすることになったが，当日雨天のため，持参した出土遺物を説明するにとどまった。Ⅲ区の東側を検出していく過程で，井戸跡と思われる掘り込みが見つかり，９月10日より調査を開始した。

図1　調査区位置図

10月から，鶴沼Ｂ遺跡北側の調査に入っていた半分の人員がⅡ・Ⅲ区に入り，残りの掘立柱建物跡と１号流路跡の続きの部分の調査に入った。Ⅰ区では，２号流路跡の下面の調査を進める過程で，土器類とともに大量の木製品が出土した。10月19日(土)には，本遺跡と西坂才遺跡を主な会場とした現地説明会が開催された。10月中にⅠ区の下面の流路跡の調査が終わり，10月30日に第２回目の空撮写真撮影を実施した。10月31日には，その部分とⅡ・Ⅲ区の北側工事用仮設道路幅10ｍの部分を，工事側に引き渡した。

11月は，Ⅰ・Ⅱ区境界の農道下の調査とⅡ区の流路跡の調査を中心に実施した。11月29日にすべての調査を終了し，残りの調査区を引き渡した。（藤　谷）

第２章　遺 構 と 遺 物

第１節　遺構の分布と基本土層

本年度の発掘調査では，掘立柱建物跡９棟，土坑35基，溝跡25条，周溝状遺構１基，河川流路跡３か所とピット群が検出されている。掘立柱建物跡は，調査区中央から東側にかけての東西40ｍ，南北25ｍの範囲に集中している。土坑はⅠ区北部に集中する傾向にあり，Ⅱ・Ⅲ区にかけて点在して検出された。溝跡は，各調査区で東西方向のものと南北方向のものが，一部で重複関係をもって分布している。流路跡はⅠ区の北東部と南西部を除く部分とⅡ区の南側に位置している。

基本土層は４層からなる。ＬⅠは耕作土を含む表土である。ＬⅡは灰黄褐色粘土で，ほとんどの地点でその上面が遺構検出面となっている。火山性堆積物が二次的な水成堆積によって形成された層と考えられる。ＬⅢはＬⅡ下に堆積する黒色粘土で，止水状態の湿地状部分に堆積したと思われる層である。ＬⅣは褐灰色砂礫層で間に砂層を含み，河川の氾濫等によって堆積した層と思われる。（藤　谷）

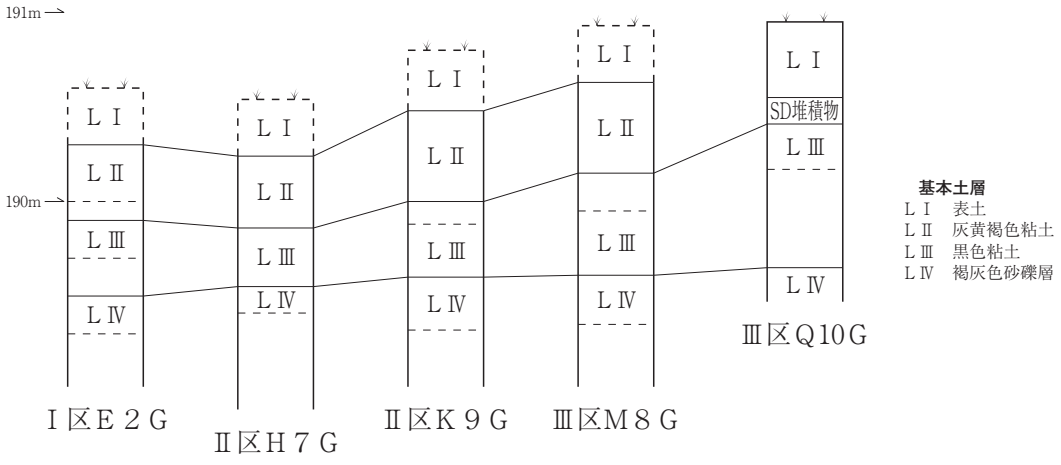


図２　基本土層柱状図

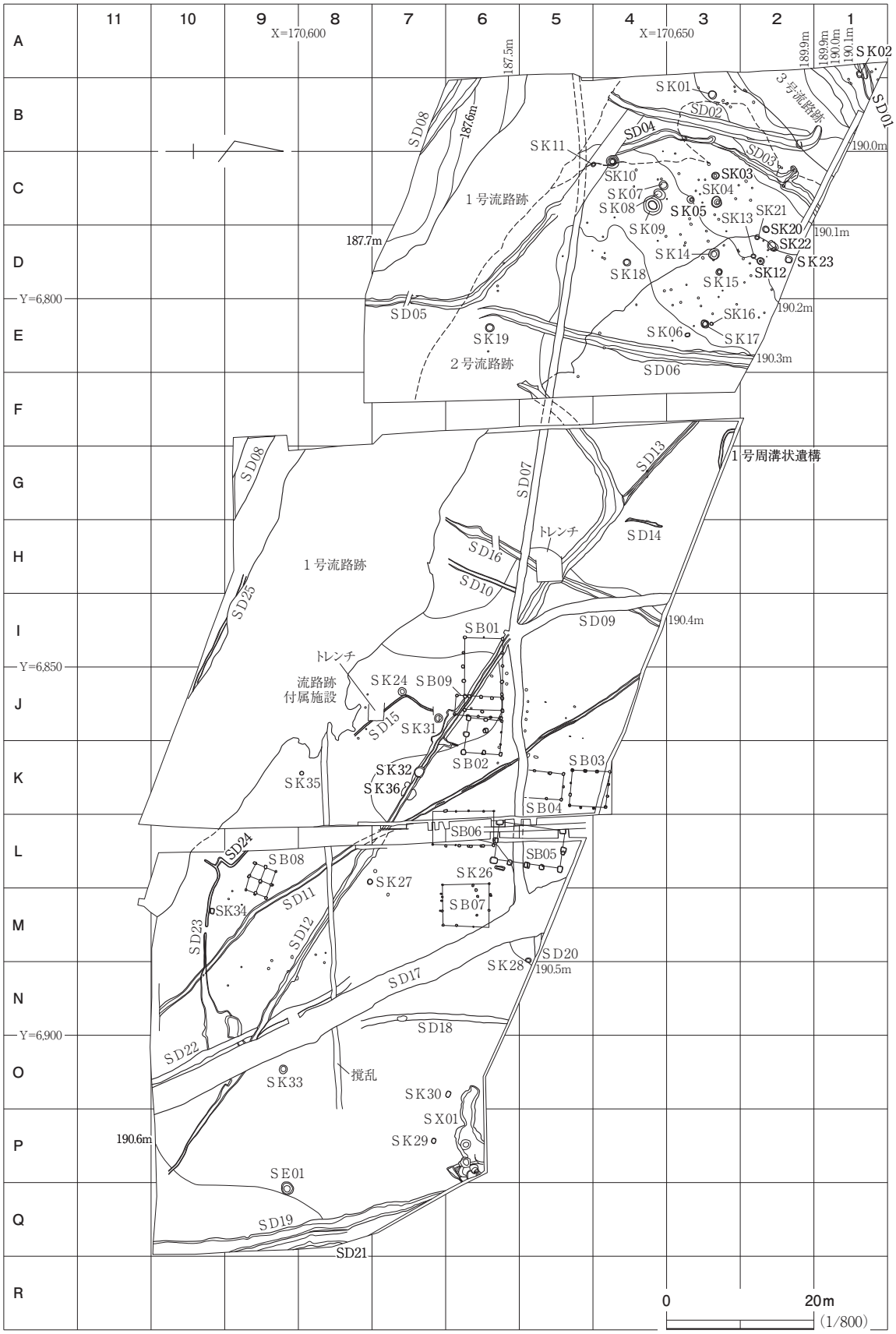

11
10
9
8
7
6
5
4
3
2
1
A
B
C
D
E
F
G
H
I
J
K
L
M
N
O
P
Q
R
X=170,600
X=170,650
Y=6,800
Y=6,850
Y=6,900
SK02
SD01
SK01
SD02
3号流路跡
SD04
SD03
SK11
SK10
SK03
SK07
SK04
SK08
SK05
SK13
SK21
SK09
SK20
SK22
SK14
SK23
SK18
SK12
SK15
SK16
SK06
SK17
SD05
SK19
2号流路跡
SD06
1号流路跡
SD08
SD07
SD13
1号周溝状遺構
SD14
トレンチ
SD16
SD10
SD25
SD09
SB01
流路跡
付属施設
SK24
SB09
SD15
SK31
SB02
SB03
SK32
SK35
SK36
SB04
SB06
SD24
SB08
SB05
SK26
SK27
SD11
SB07
SK34
SD23
SD12
SD20
SK28
SD17
SD18
SD22
SK33
攪乱
SK30
SX01
SK29
SE01
SD19
SD21
187.5m
187.6m
187.7m
189.9m
190.0m
190.1m
190.0m
190.1m
190.2m
190.3m
190.4m
190.5m
190.6m
0
20m
(1/800)

図3　遺構配置図

第2節　掘立柱建物跡

今回の調査では，合計９棟の掘立柱建物跡が検出された。Ⅰ・Ⅱ区境界の東西40ｍ×南北25ｍの範囲に集中しており，うち１・２号掘立柱建物跡と９号掘立柱建物跡が重複関係にあり，１・２号掘立柱建物跡が９号掘立柱建物跡を切る形となっている。建物跡の主軸は，真北に近いもの（１・６・７号掘立柱建物跡）と真北よりやや東となるもの（２～５号掘立柱建物跡）の大きく２つのグループに分かれる。８号掘立柱建物跡については，建物跡群からやや離れた位置にある。

１号掘立柱建物跡　ＳＢ01

遺　　構（図４，写真５）

１号掘立柱建物跡は，Ⅱ区中央よりやや北側のⅠ・Ｊ６グリッドに位置しており，12号溝跡と９号掘立柱建物跡と重複関係にあり，12号溝跡を切っている。また，位置関係より，９号掘立柱建物跡より新しいと考えている。周辺には，東側に２号掘立柱建物跡が，北側に９号溝跡が位置している。遺構検出面はＬⅡ上面で，検出時にＰ１～15の15個の柱穴が建物軸に沿って確認できた。この内，Ｐ６については，当初明確に検出できなかった重複する９号掘立柱建物跡のものである。

本建物跡は，桁行き５間，梁行き２間の東西方向を主軸とする掘立柱建物跡である。建物の東西主軸はＮ89°Ｗのほぼ真西となっている。柱穴掘形は，形態が円形から楕円形を呈し，長軸25～60㎝，検出面からの深さ10～30㎝であり，Ｐ11を除く柱穴から柱痕が検出された。このうちＰ13では木質の柱痕が残っている。また，Ｐ15については，掘り込みが浅く，柱痕部分のみが確認できた。柱痕跡上面の幅は，12～17㎝となっている。

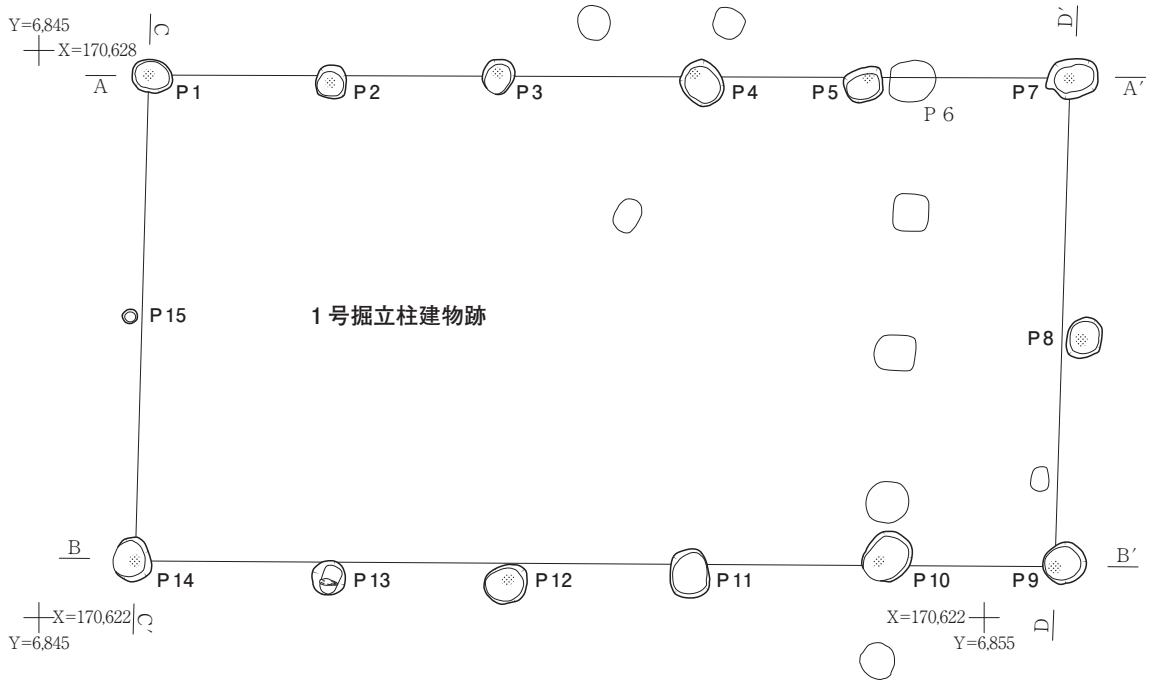
柱間寸法は，柱痕の芯々間で北側柱列が西から1.92ｍ＋1.77ｍ＋2.06ｍ＋1.85ｍ＋2.12ｍ，南側柱列が西から2.05ｍ＋1.91ｍ＋1.88ｍ＋2.04ｍ＋1.87ｍ，西妻側が北から2.56ｍ＋2.60ｍ，東妻側が北から2.76ｍ＋2.44ｍとなっている。間尺は，桁行きが６尺～６尺５寸を基本としていると推定されるが，各柱痕間にばらつきがあり，断定することはできなかった。梁行きは，８尺５寸～９尺を基本としていると推定されるが，桁行き同様断定することはできなかった。

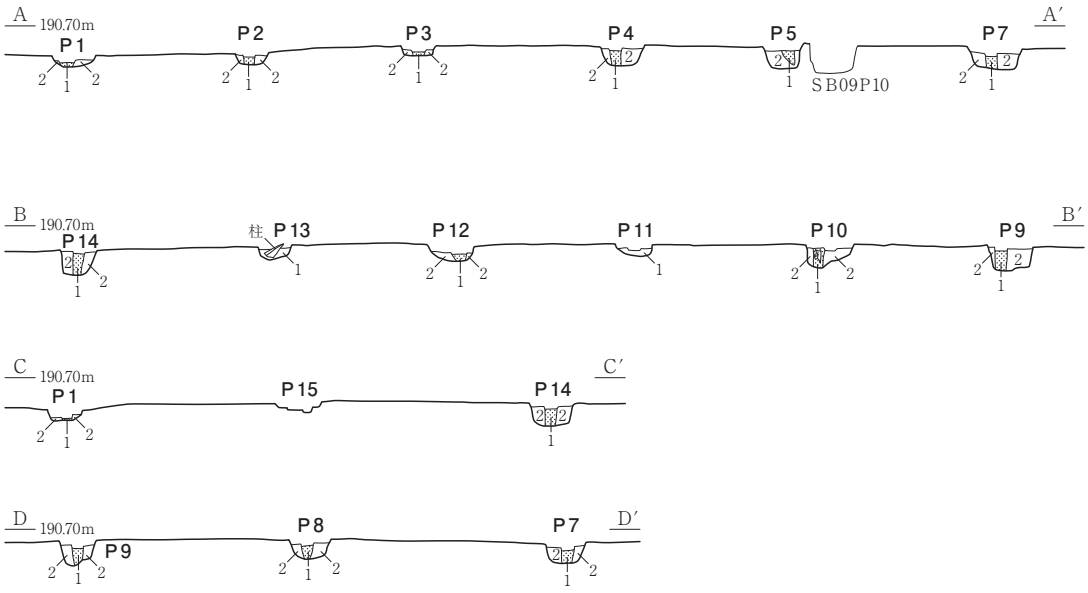
遺　　物（図６）

遺物は，Ｐ１～５・７～10・14の各柱穴堆積土より，ロクロ土師器と須恵器の細片が出土している。このうち図６に２点を図示した。１は土師器高台杯の底部から体部下端の破片で，内面に明瞭なロクロナデの痕跡が認められる。２はＰ７から出土した須恵器長頸瓶の口縁部である。いずれも平安時代９世紀頃のものと推定される。

ま と め

本建物跡は，柱穴の出土遺物から９世紀代の建物跡と推定される。遺跡の中では，主軸方向が共通するところから，６・７号掘立柱建物跡と同時期に存在したものと推定される。　　（藤　谷）





１号掘立柱建物跡堆積土
1　黒褐色粘質土　10YR2/3（灰褐色土ブロック少量，炭化物微量混入）
2　黒褐色粘質土　10YR2/3（灰褐色土ブロック多量，白色砂粒少量混入）

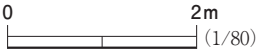


図４　１号掘立柱建物跡

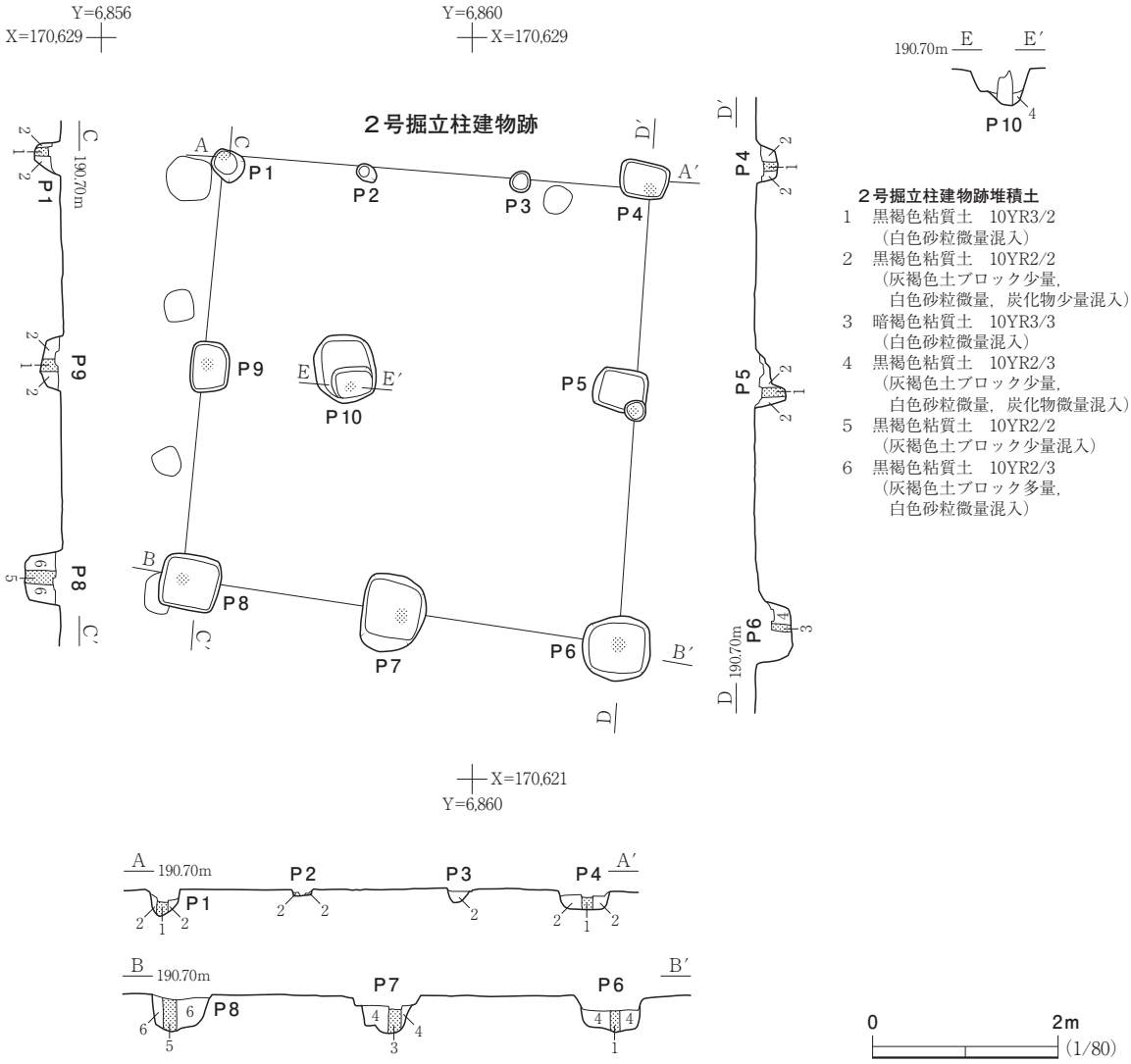


図５　２号掘立柱建物跡

２号掘立柱建物跡　ＳＢ02

遺　　構（図５，写真６）

２号掘立柱建物跡は，Ⅱ区東側のＪ・Ｋ６グリッドに位置している。９号掘立柱建物跡と重複関係にあり，それを切っている。周辺には，西側に１号掘立柱建物跡が，南側に12号溝跡が，北側に９号溝跡が位置している。遺構検出面はＬⅡ上面で，Ｐ１～10の10個の柱穴が確認できた。

本建物跡は，東西方向が２間と３間，南北方向が２間で，東西方向を主軸とし，中にも柱穴を持つ総柱の掘立柱建物跡である。建物の東西主軸はＮ－84°－Ｗと真西よりわずかに北向きとなっている。柱穴掘形は，長軸が53～80㎝で形態が隅丸長方形のもの（Ｐ４～10）長軸が22～35㎝で形態が楕円形のもの（Ｐ１～３）がある。検出面からの深さは８～42㎝とバラつきがある。小型のＰ２・３を除いた柱穴からすべて柱痕が検出された。柱痕跡上面の幅は，10～15㎝となっている。また，P10からは，柱下部が検出された。下部での径は16㎝となっている。

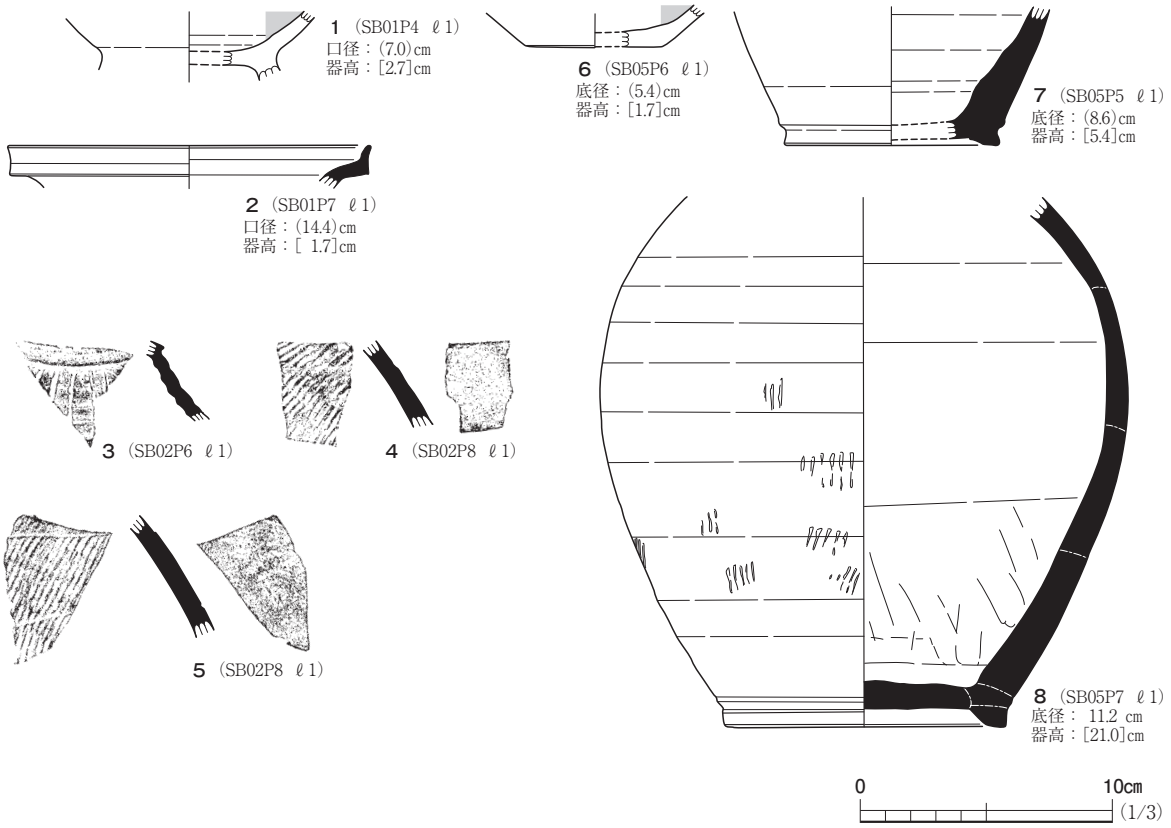


図６　１・２・５号掘立柱建物跡出土遺物

柱間寸法は，柱痕の芯々間で南側柱列が西から2.43ｍ＋2.41ｍ，北側柱列が西から1.52ｍ＋1.70ｍ＋1.38ｍ，西側柱列が北から2.25ｍ＋2.33ｍ，東側柱列が北から2.39ｍ＋2.39ｍとなっている。中央柱穴は，建物の中央より西側に寄っており，Ｐ９とＰ５間では1.55ｍ＋3.05ｍとなっている。間尺は，南東柱列をみると８尺を基本とすると考えられる。

遺　　物（図６）

遺物は，Ｐ１～９の各柱穴堆積土より，平安時代９世紀と思われるロクロ土師器と須恵器の細片が出土している。このうち図６に３点を図示した。３は須恵器円面硯の破片で脚部に縦方向の沈線が施されている。４・５は須恵器甕の体部破片で，外面にタタキ痕が残されている。

ま と め

本建物跡は，柱穴の出土遺物から平安時代９世紀代の建物跡と推定される。遺跡の中では主軸方向が共通するところから，３～５号掘立柱建物跡と同時期に存在したものと推定される。（藤　谷）

３号掘立柱建物跡　ＳＢ03

遺　　構（図７，写真７）

３号掘立柱建物跡は，Ⅱ区北東隅のＫ４・５グリッドに位置しており，南側で４号掘立柱建物跡に隣接している。一部北西隅の柱穴Ｐ１が調査区端の排水溝で壊されている。遺構検出面はＬⅡ上面で，Ｐ１～12の12個の柱穴が確認できた。

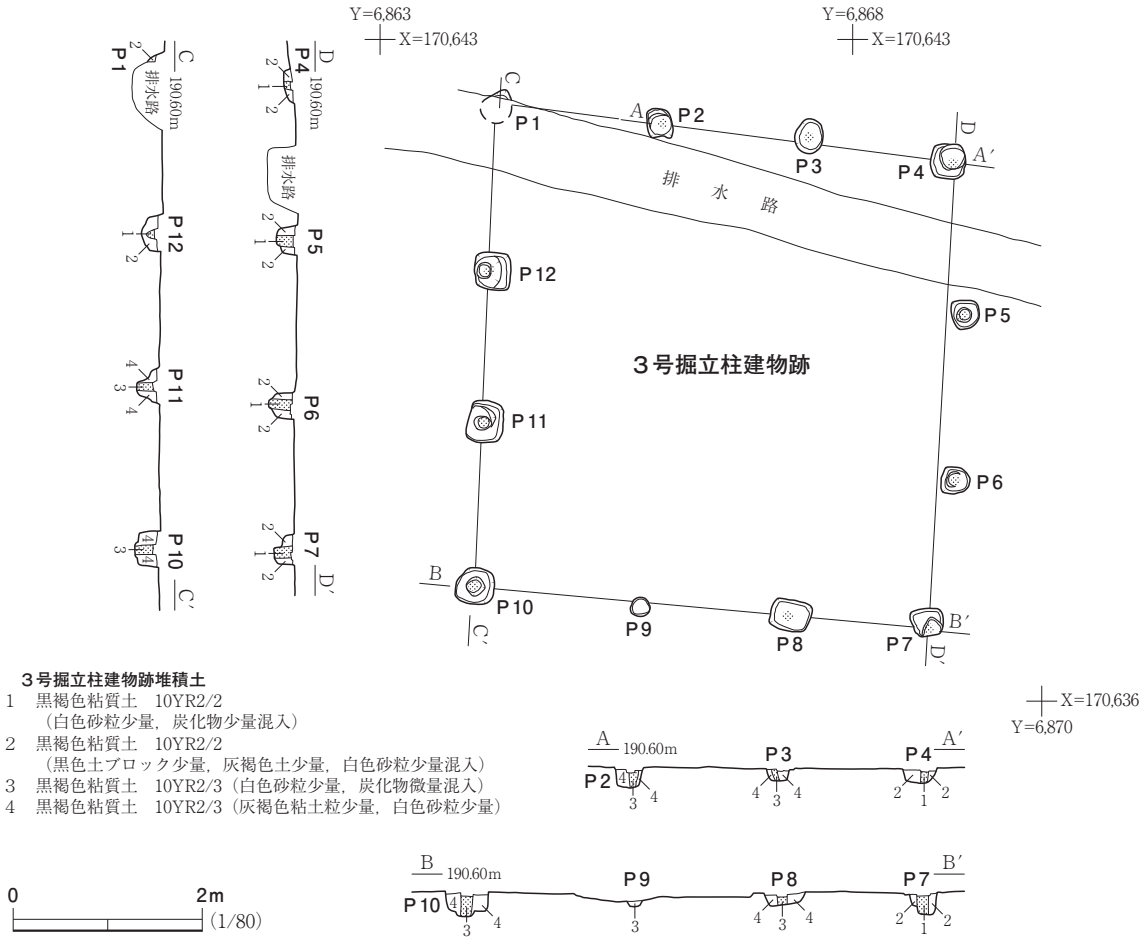


図７　３号掘立柱建物跡

本建物跡は，桁行き３間，梁行き３間の南北方向を主軸とする掘立柱の建物跡である。建物の南北主軸はＮ3.5°Ｅと真北よりやや東寄りとなっている。東側柱列のＰ５・６が主軸よりやや外側に張り出す形態となっている。柱穴掘形は，形態が円形から隅丸長方形を呈し，長軸20～45㎝，検出面からの深さ10～28㎝であり，Ｐ１・Ｐ９を除く柱穴から柱痕が検出された。柱痕跡上面の幅は，８～12㎝となっている。また，Ｐ４～７・10～12は，底面がほぼ柱の大きさに一段深く掘り込まれている。

柱間寸法は，柱痕の芯々間で西側柱列が北のＰ12から1.64ｍ＋1.72ｍ，東側柱列が北から1.62ｍ＋1.75ｍ＋1.59ｍ，北側柱列が西のＰ２から1.55ｍ＋1.54ｍ，南側柱列が西から1.76ｍ＋1.55ｍ＋1.49ｍとなっている。間尺は，桁行きが５尺５寸前後を基本とし，梁行きが６尺＋５尺＋５尺前後を基本としていると推定される。

遺物は，Ｐ７とＰ11よりロクロ土師器の細片が出土している。

ま と め

本建物跡は，柱穴の出土遺物から平安時代９世紀代の建物跡と推定される。遺跡の中では，主軸方向が共通するところから，２・４・５号掘立柱建物跡と同時期に存在したものと推定される。

（藤　谷）

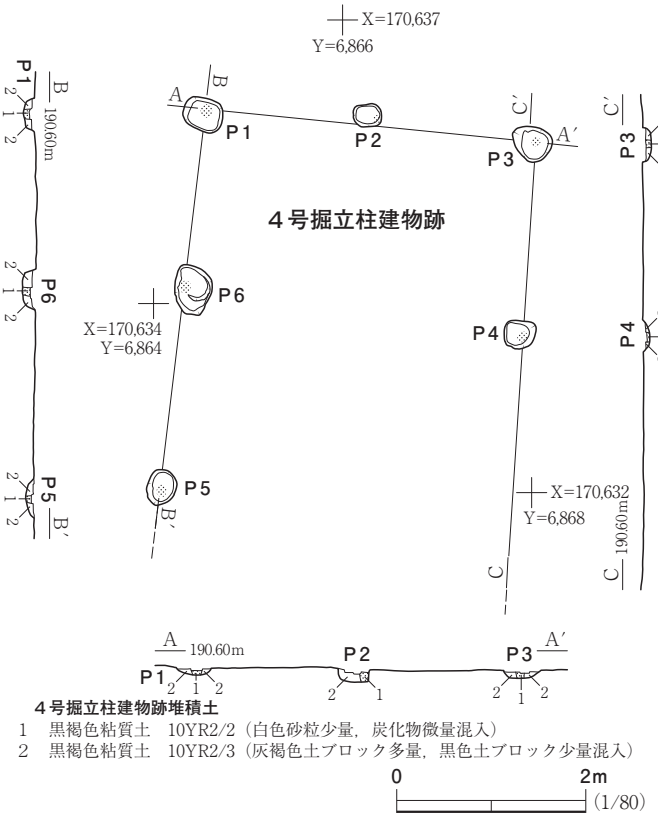


図８　４号掘立柱建物跡

４号掘立柱建物跡　ＳＢ04

遺　　構（図８，写真８）

４号掘立柱建物跡は，Ⅱ区北東隅のＫ５グリッドに位置している。９号溝跡と重複関係にあり，それに切られており，南側柱列は７号溝跡構築時に破壊されたものと推定される。周辺には，北側に３号掘立柱建物跡が隣接している。遺構検出面はＬⅡ上面で，Ｐ１～６の６個の柱穴が確認できた。

一部が破壊されているものの，建物跡は，桁行き３間，梁行き２間の南北方向を主軸とする掘立柱建物跡であると推定される。建物の南北主軸はＮ７°Ｅで，真北よりやや東に傾いている。柱穴掘形は，長軸が40㎝で隅丸長方形を呈するＰ１と，それ以外の長軸が30～42㎝で楕円形を呈するものがある。検出面からの深さは８～12㎝であり，全ての柱穴から柱痕が検出された。柱痕跡上面の幅は，10～12㎝となっている。

柱間寸法は，柱痕の芯々間で西側柱列が北から1.89ｍ＋2.15ｍ，東側柱列が2.05ｍ，北側柱列が西から1.80ｍ＋1.70ｍとなっている。間尺は，桁行きが６尺～６尺５寸を基本としていると推定され，梁行きが６尺を基本としていると推定される。

柱穴から遺物は出土しなかった。

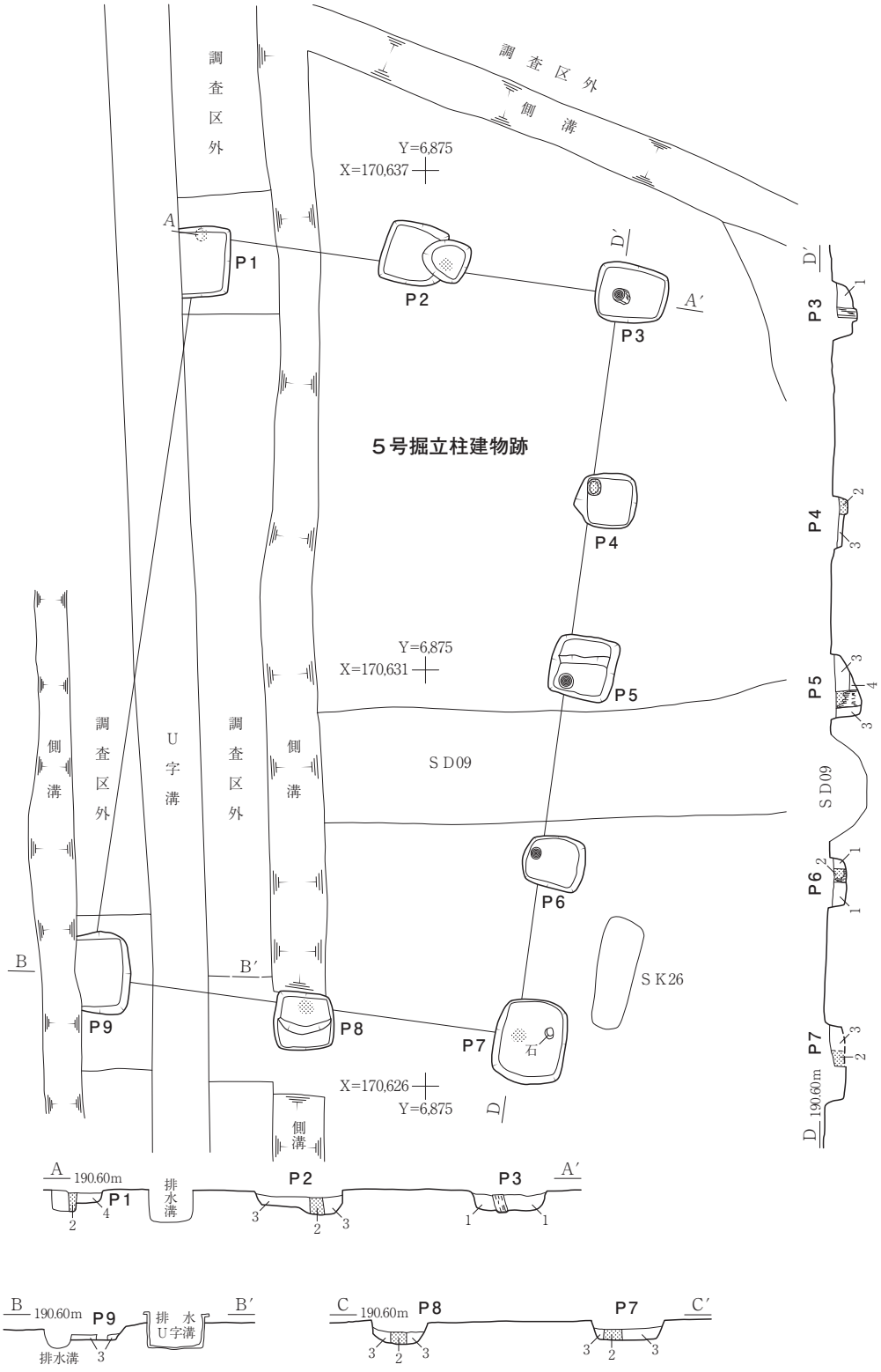
ま と め

本建物跡は，柱穴の堆積土が他の建物跡と共通するところから，平安時代９世紀代の建物跡と推定される。また，遺跡の中では，主軸方向が共通するところから，２・３・５号掘立柱建物跡と同時期に存在したものと推定される。　（藤　谷）

５号掘立柱建物跡　ＳＢ05

遺　　構（図９，写真９）

５号掘立柱建物跡は，Ⅱ区とⅢ区の北側にまたがって検出された遺構で，Ｌ５・６グリッドに位置している。西側に４号掘立柱建物跡が位置し，南側で６号掘立柱建物跡と隣接している。また，東側柱列の南西側には26号土坑が隣接している。遺構検出面はＬⅡ上面で，Ⅱ区とⅢ区の間の用水路によって，西側柱列の一部が破壊されている。Ｐ１～９の９個の柱穴が確認できた。



5号掘立柱建物跡堆積土

1　黒褐色粘質土　10YR2/2（白色砂粒少量，炭化物少量混入）
2　黒色粘質土　10YR2/1（黄褐色粘土ブロック・粘土粒少量混入）
3　黒褐色粘質土　10YR2/2（灰褐色粘土粒少量，炭化物微量混入）
4　にぶい黄褐色粘土　10YR5/3（黒褐色土ブロック少量混入）

0　2m　(1/80)

図9　5号掘立柱建物跡

本建物跡は，桁行き４間，梁行き２間の南北方向を主軸とする掘立柱の建物跡である。建物の南北主軸はＮ８°Ｅと真北よりやや東側に偏る形となっている。柱穴掘形は，全てのもので形態が隅丸長方形を呈しており，長軸65～100㎝，検出面からの深さ20～30㎝である。このうち，Ｐ９を除く柱穴から柱痕が検出された。このうちＰ３・５・６では木質の柱痕が残っている。一番遺存状況の良好なＰ５の柱痕は，径20㎝であった。

柱間寸法は，柱痕の芯々間で東側柱列が北から2.30ｍ＋2.36ｍ＋2.11ｍ＋2.18ｍ，北妻側が西から2.98ｍ＋2.14ｍ，南妻側のＰ７，Ｐ８間が2.55ｍとなっている。間尺は，桁行きが７尺～８尺，梁行きは８尺５寸～10尺＋７寸を基本としていると推定される。

遺　　物（図６）

遺物は，Ｐ３・８以外の各柱穴堆積土より，ロクロ土師器と須恵器の細片及び長頸瓶の体部破片が出土している。このうち図６に３点を図示した。６は土師器杯の底部で，内面に黒色処理・ヘラミガキが施されている。７と８は長頸瓶の体部から底部の破片で，７は低い高台が付く形態，８は外面にタタキ痕が，内面にナデの痕跡が確認される。何れも平安時代９世紀頃のものと推定される。

ま と め

本建物跡は，今回検出された建物跡の中でも，柱穴の規格，柱痕の大きさが最大の建物跡である。その時期は，柱穴の出土遺物から平安時代９世紀代と推定される。遺跡の中では，主軸方向が共通するところから，２～４号掘立柱建物跡と同時期に存在したものと推定される。　　（藤　谷）

６号掘立柱建物跡　ＳＢ06

遺　　構（図10，写真10）

６号掘立柱建物跡は，Ⅱ区とⅢ区の中央よりやや北側にまたがって検出された遺構で，Ｋ６・７，Ｌ６・７グリッドに位置している。周辺には，北側に５号掘立柱建物跡が隣接しており，更に建物跡の西側から南側にかけて11号溝跡が位置している。遺構検出面はＬⅡ上面で，Ⅱ区とⅢ区の間の用水路によって，妻側柱穴が一部破壊されている。Ｐ１～12の12個の柱穴が確認できた。Ｐ２・３については，重複しているものも１つの柱穴として番号を付けた。

本建物跡は，一部柱穴が破壊されたり，欠落したりしているものもあるが，桁行き５間，梁行き１間の南北方向を主軸とする掘立柱の建物跡であると推定される。建物の南北主軸は，ほぼ真北となっている。柱穴掘形は，形態が小型の隅丸長方形を呈するものがほとんどで，長軸23～38㎝，検出面からの深さ10～28㎝である。他に楕円形のものＰ９・12や，円形のものＰ７がある。これら柱穴のうち，Ｐ２とＰ３は柱の据替と思われる柱穴が重複する形態となっており，Ｐ２については，断面の状況から北側が新しいことが観察できた。柱痕は，Ｐ１・２・６・８～12の７つの柱穴から検出された。このうちＰ２・７・９・12では木質の柱痕が残っている。柱痕跡上面の幅は，８～12㎝となっている。

柱間寸法は，柱痕の芯々間及び小型のものでは中心でみると，西側柱列では北から1.38ｍ＋2.00ｍ

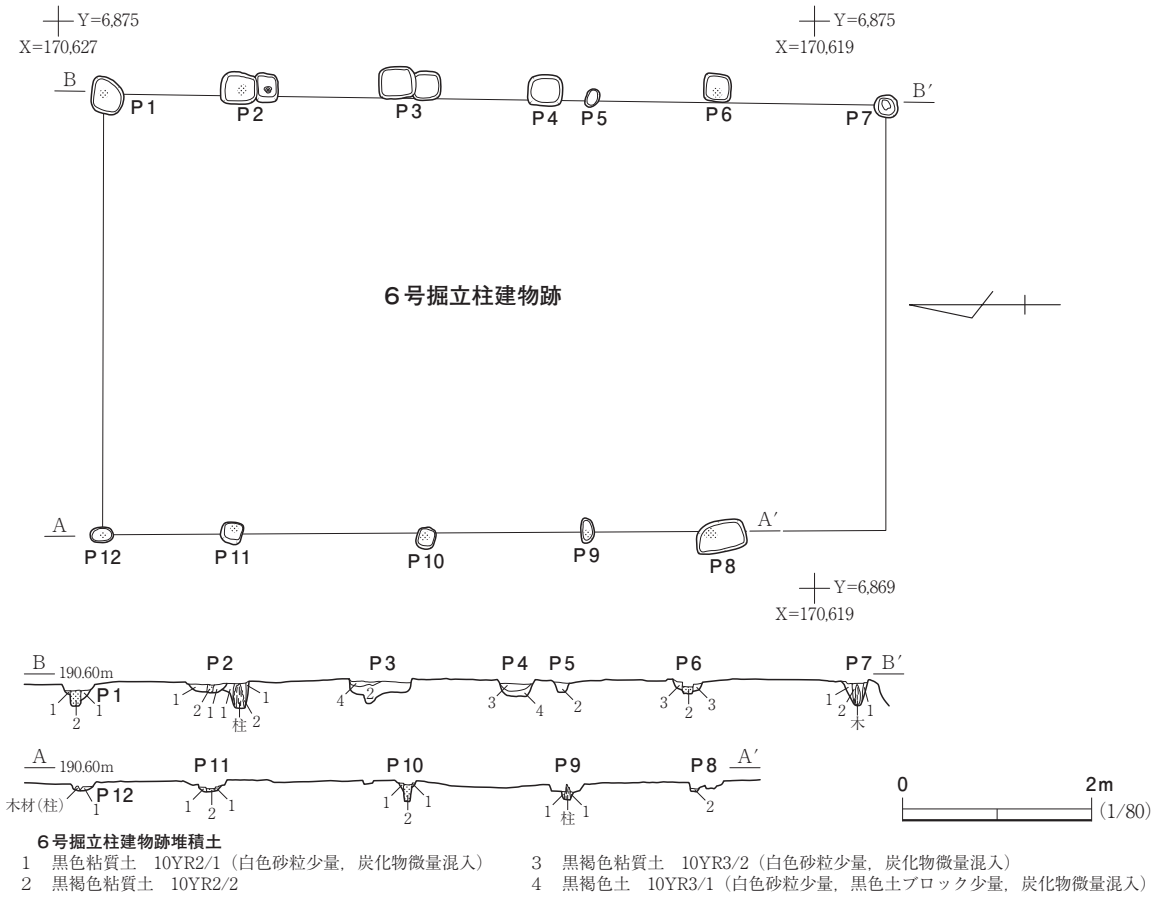


図10　６号掘立柱建物跡

＋1.72ｍ＋1.27ｍである。東側柱列では，Ｐ２で北側，Ｐ３で南側を基準に計測すると，北から1.45ｍ＋1.66ｍ＋1.56ｍ＋0.50ｍ＋1.32ｍ＋1.83ｍとなっている。北妻側の隅柱間は4.65ｍである。間尺は，桁行きに，各柱痕間に４尺～６尺の間のばらつきがあり，断定することはできなかった。梁行きは，15尺前後と推定される。

遺物は出土していない。

ま と め

本建物跡は，柱穴の堆積土が周辺の建物跡群に近似することと位置関係に規則性がみられるところから，同じく平安時代９世紀代の建物跡と推定される。遺跡の中では，主軸方向が共通する１・７号掘立柱建物跡と同時期に存在したものと推定される。（藤　谷）

７号掘立柱建物跡　ＳＢ07

遺　　構（図11，写真11）

７号掘立柱建物跡は，Ⅲ区北西側で検出された遺構で，Ｌ６・７，Ｍ６・７グリッドに位置している。

北東隅柱の位置で17号溝跡と重複関係にあり，それに切られている。周辺には，西側に６号掘

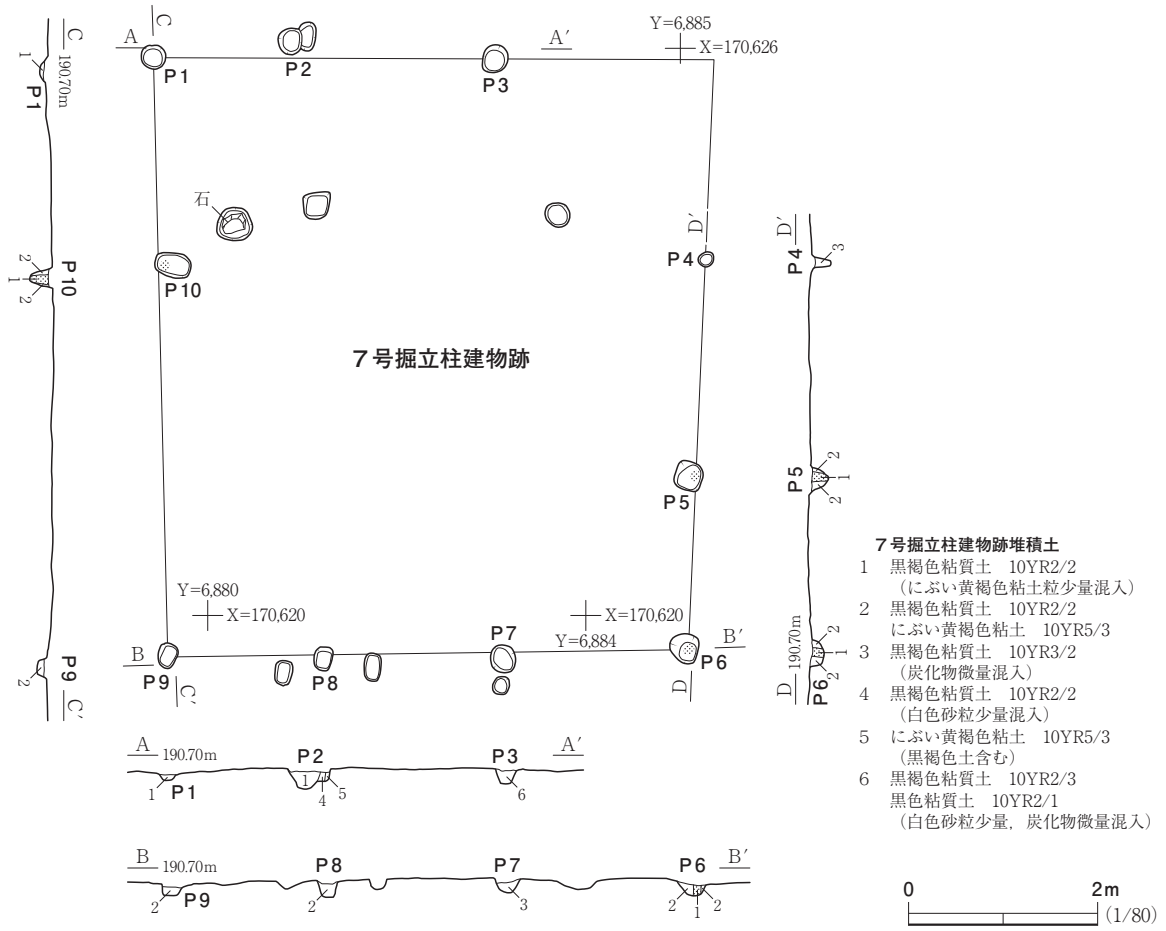


図11　７号掘立柱建物跡

立柱建物跡が，北西側で５号掘立柱建物跡が位置している。建物跡からは，Ｐ１～10の10個の柱穴が確認できた。遺構検出面はＬⅡ上面である。また，柱穴周囲には，北半部と南側柱列付近に小ピットが６個ある。一部本建物跡に関連する可能性が考えられるが，詳細は不明である。

建物跡は，一部柱穴が破壊されたり，欠落したりしているものもあるが，桁行き３間，梁行き３間の南北方向を主軸とする掘立柱の建物跡であると推定される。建物の南北主軸は，ほぼ真北となっている。柱穴掘形は，形態が小型の楕円形を呈するものがほとんどで，長軸22～35㎝，検出面からの深さ14～22㎝である。他に隅丸長方形のものＰ５・９，円形のものＰ３・４がある。これら柱穴のうち，Ｐ２は重複する形態となっている。柱痕は，Ｐ５・６・10の３つの柱穴から検出され，他の柱穴からは検出されなかった。

柱間寸法は，柱痕の遺存しているものは芯々間で，柱痕の遺存していないものでは中心で計測すると，西側柱列では北から2.20ｍ+4.15ｍである。東側柱列では，北側柱穴が欠落しているが，北から2.12ｍ+2.30ｍ+1.85ｍである。南側柱列では，西から1.64ｍ+1.89ｍ+1.98ｍとなっている。北側柱列では，東側柱穴が欠落しているが，西から1.81ｍ+2.15ｍ+2.35ｍとなっている。間尺は，桁行きが７尺前後を基本とし，梁行きが６尺～７尺を基本としていると推定されるが，各柱痕間にばらつきがあり，明確に断定することはできなかった。

遺物は出土していない。

ま と め

本建物跡は，柱穴の堆積土が周辺の建物跡群に近似することと位置関係に規則性がみられるところから，同じく平安時代９世紀代の建物跡と推定される。遺跡の中では，主軸方向が共通する１・６号掘立柱建物跡と同時期に存在したものと推定される。（藤　谷）

８号掘立柱建物跡　ＳＢ08

遺　　構（図12，写真12）

８号掘立柱建物跡は，Ⅲ区西側の中央よりやや南寄りのＬ・Ｍ９グリッドに位置している。周辺には，北側から東側にかけて11号溝跡が，南側に23・24号溝跡が位置している。遺構検出面はＬⅡ上面で，Ｐ１～９の９個の柱穴が確認できた。

本建物跡は，２間×２間の東西方向を主軸とする総柱の掘立柱建物跡である。建物の東西主軸はＮ69°Ｗのほぼ東西からやや北に傾く形となっている。柱穴掘形は，形態が隅丸長方形から楕円形を呈し，長軸28～55㎝，検出面からの深さ12～17㎝であり，Ｐ２～４・９の４個の柱穴から柱痕が検出された。Ｐ２とＰ６については，平面形が重複する形であり，建物の建て替えではなく，構築時に柱の据え替えで作られたものと思われる。Ｐ７については，北側底面で柱の痕跡が確認できた。柱痕の上部の大きさは11～18㎝となっている。

柱間寸法は，北側柱列がＰ１の中心から各柱穴の芯々で，西から1.82ｍ＋1.84ｍである。南側柱列がＰ７の柱痕，Ｐ８中央，Ｐ９柱痕間で西から1.87ｍ＋1.86ｍである。西側柱列がＰ１の中心から各柱痕間で北から1.50ｍ＋1.42ｍ，東側柱列が北から1.54ｍ＋1.44ｍである。間尺は，東西が６尺＋６尺，南北が５尺＋５尺と推定される。

遺物は，Ｐ２・３・８よりロクロ土師器甕の細片が出土している。

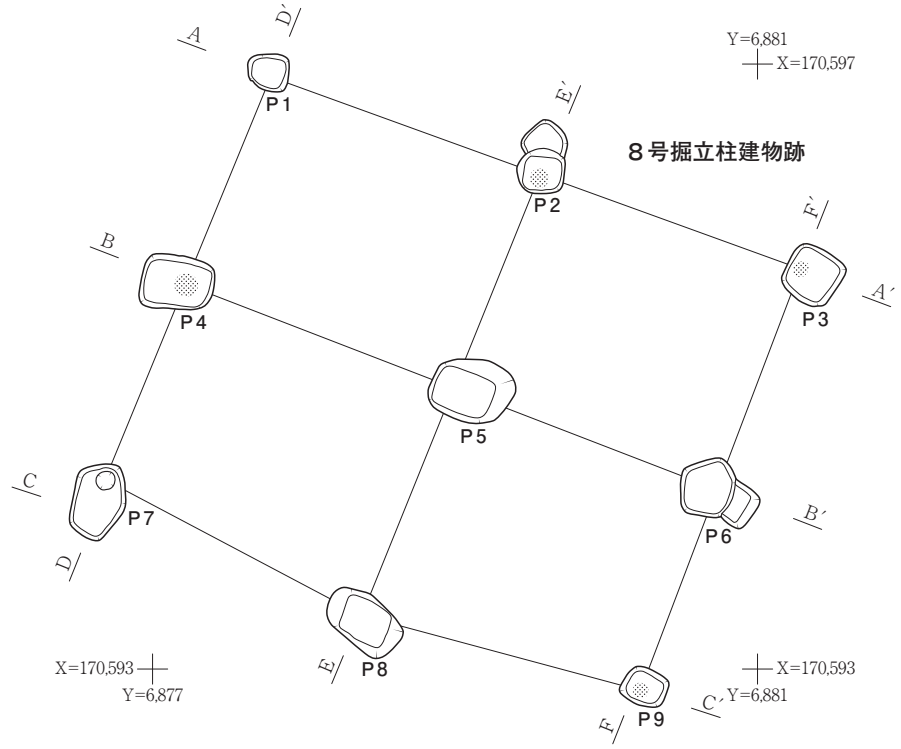
ま と め

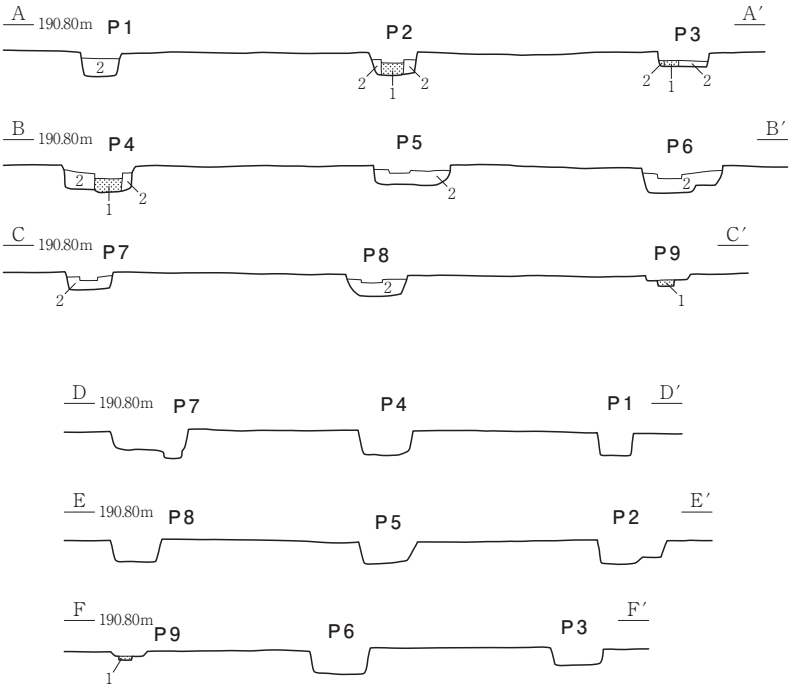
本建物跡は，柱穴の出土遺物や堆積土から平安時代９世紀代の建物跡と推定される。遺跡の中でも他の建物群と離れ主軸方向も異なるところから，それらとは若干性格を異にすると思われる。建物の構造は総柱であるが，上部重量を支えるような大型の柱穴を持っておらず，倉庫的なものとは考えにくい。堂等の宗教的な施設の可能性を想定したい。（藤　谷）

９号掘立柱建物跡　ＳＢ09

遺　　構（図13，写真13）

９号掘立柱建物跡は，Ⅱ区中央よりやや東寄りのＪ６グリッドに位置している。１・２号掘立柱建物跡，12号溝跡と重複関係にあり，12号溝跡を切っており，２号掘立柱建物跡に切られている。１号掘立柱建物跡とは柱穴での直接の切り合いはなかった。周辺には，重複している遺構の他に北側に９号溝跡が，南側に31号土坑が位置している。遺構検出面は，ＬⅡ上面及び12号溝跡堆積土

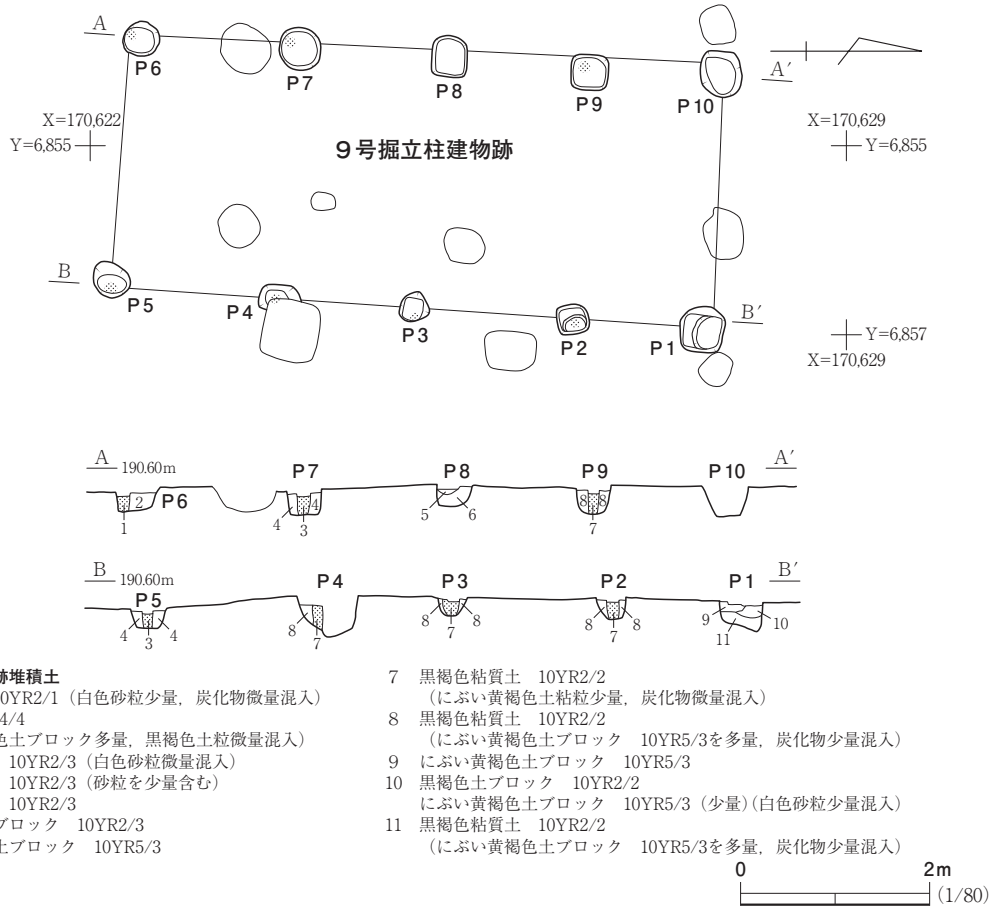




8号掘立柱建物跡堆積土
1　黒褐色土　10YR2/2
2　黒褐色土　10YR3/2（にぶい黄褐色粘質土（地山）ブロック多量混入）

0　1m
(1/50)

図12　8号掘立柱建物跡



９号掘立柱建物跡堆積土

1　黒色粘質土　10YR2/1（白色砂粒少量，炭化物微量混入）
2　褐色土　10YR4/4
　（にぶい黄褐色土ブロック多量，黒褐色土粒微量混入）
3　黒褐色粘質土　10YR2/3（白色砂粒微量混入）
4　黒褐色粘質土　10YR2/3（砂粒を少量含む）
5　黒褐色粘質土　10YR2/3
6　黒褐色粘質土ブロック　10YR2/3
　にぶい黄褐色土ブロック　10YR5/3
7　黒褐色粘質土　10YR2/2
　（にぶい黄褐色土粘粒少量，炭化物微量混入）
8　黒褐色粘質土　10YR2/2
　（にぶい黄褐色土ブロック　10YR5/3を多量，炭化物少量混入）
9　にぶい黄褐色土ブロック　10YR5/3
10　黒褐色土ブロック　10YR2/2
　にぶい黄褐色土ブロック　10YR5/3（少量）(白色砂粒少量混入）
11　黒褐色粘質土　10YR2/2
　（にぶい黄褐色土ブロック　10YR5/3を多量，炭化物少量混入）

図13　９号掘立柱建物跡

である。

本建物跡は，１間×４間の南北方向を主軸とする掘立柱の建物跡である。建物の南北主軸はＮ４°Ｅと真北からやや東に傾く形となっている。柱穴掘形は，形態が隅丸方形Ｐ１・８・９，隅丸長方形Ｐ２，楕円形Ｐ３～６・10，円形Ｐ７を呈しているものがある。長軸32～49㎝，検出面からの深さ20～30㎝であり，Ｐ１・８・10を除く各柱穴から柱痕が検出された。柱痕の上部の大きさは10～15㎝となっている。

柱間寸法は，各柱痕の芯心，または柱穴の中央部で，西側柱列が北から1.48ｍ＋1.45ｍ＋1.67ｍ＋1.69ｍで，西側柱列が北から1.48ｍ＋1.69ｍ＋1.50ｍ＋1.73ｍである。また，北妻側では2.80ｍ，南妻側では2.71ｍとなっている。間尺は，南北の主軸方向が５尺と５尺５寸を基準とした寸法で，東西の妻側が９尺と推定される。

遺物は，Ｐ５・９よりロクロ土師器甕の細片が出土している。

ま と め

本建物跡は，柱穴の出土遺物や堆積土から平安時代９世紀代の建物跡と推定される。重複関係より２号掘立柱建物跡より古い時期の建物跡である。　（藤　谷）

第３節　　土　　坑

本年度の調査で，土坑は合計35基検出されている。各調査区の内訳はⅠ区23基，Ⅱ区５基，Ⅲ区７基で，全体の2/3がⅠ区から検出されている。

Ⅰ区の土坑は北半に多く分布しており，このうち14基が平安時代の２号流路跡とその氾濫原の堆積土最上層で検出されている。また，近世以降の溝跡と重複関係にあり，それに切られているものもあることから，中世のものが主体であると思われる。Ⅱ・Ⅲ区の土坑は，建物跡群と同時期のものと，近世以降のものの双方がある。

１号土坑　ＳＫ01（図14・22，写真14）

Ⅰ区の中央西端，Ｂ３グリッドに位置する。検出面は２号流路跡氾濫部ℓ１上面で，東側2.5ｍに２号流路跡が南北にはしる。土坑は最も近い３号土坑でも10ｍの距離がある。

検出面での平面形は直径110㎝の円形で，底面までの深さは73㎝である。底面は砂礫層上面まで達しており，壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土はほぼ水平の人為堆積で４層に分層した。ℓ１～３は砂粒が主体で全体的に締まっており，最下層のℓ４は黒色土で木質片や炭化物を含んでいる。

遺物は図22－１の火付木１点を図示した。長さ11.1㎝で先端が焦げて細くなっている。ほかに取り上げの際に細かくなり図示できなかったが，土坑中央ℓ２から曲物１点，摩滅の著しい土師器杯の細片２点が出土している。

時期は，検出面が平安時代の２号流路跡堆積土ℓ１上面であることと堆積土の特徴から，中世と考えられる。性格については，廃棄穴や貯蔵穴などの可能性があるものの，判断材料に欠ける。

（後　藤）

２号土坑　ＳＫ02（図14）

Ⅰ区の北西隅，Ａ１グリッドの東端に位置する。北側は１号溝跡に切られている。南側に３号流路跡があるが，他の土坑とは離れて位置する。検出面はＬⅡ上面である。

検出面での平面形は直径88㎝の円形で，底面までの深さは20㎝である。壁はなだらかに立ち上がる鍋底状の土坑である。堆積土は均質で締まりの良い黄灰色土１層で，自然堆積と考えられる。

本土坑は１号溝跡よりは古いことは明らかであるが，遺物の出土もなく，時期や性格については，明らかにしえない。

（後　藤）

３号土坑　ＳＫ03（図14・22，写真14）

Ⅰ区中央のやや北，Ｃ３グリッドに位置する。検出面は２号流路跡氾濫部ℓ１上面で，西側３ｍには３号溝跡，東側２ｍには４号土坑，南東3.5ｍには５号土坑が位置する。

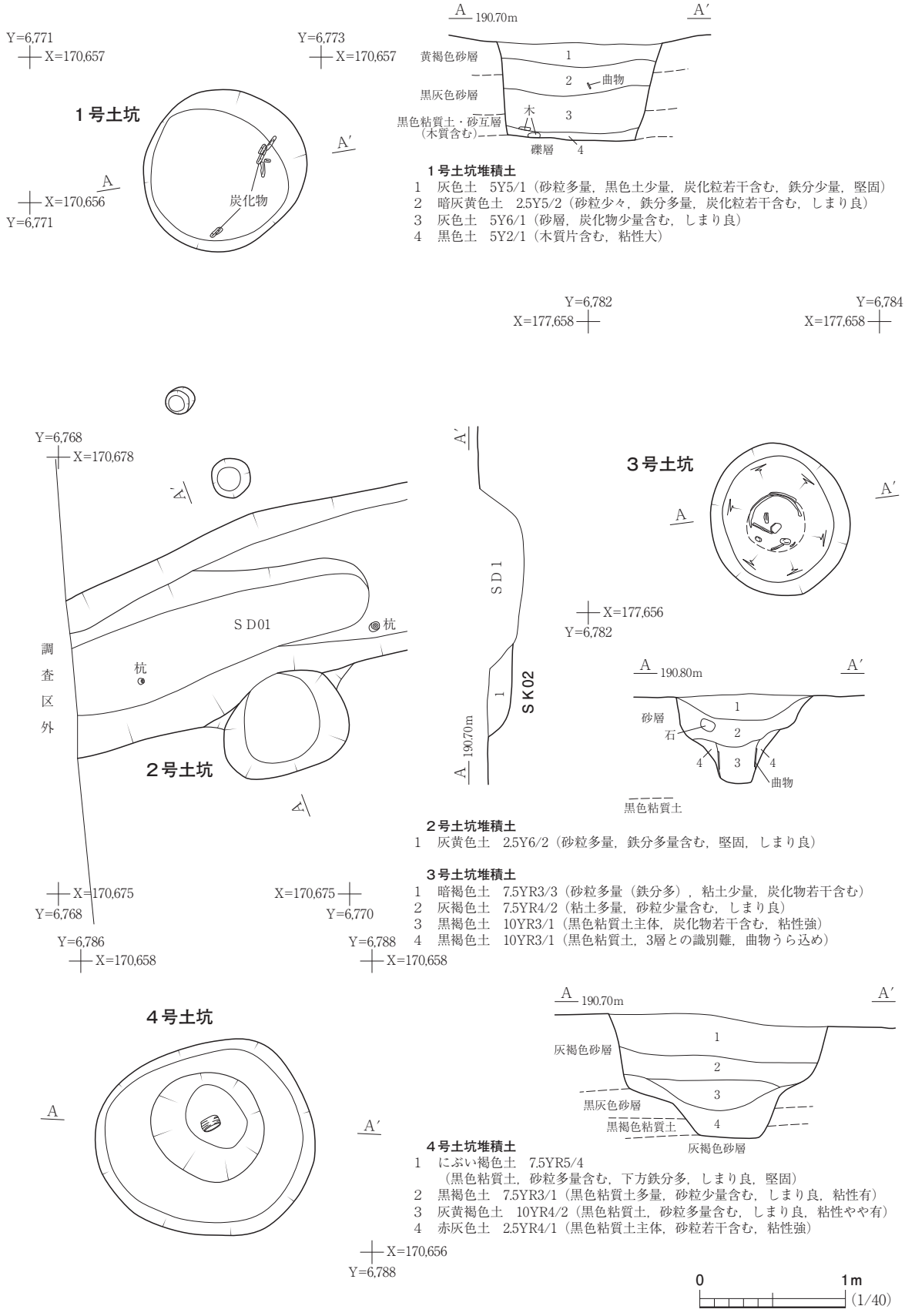

Y=6,771
X=170,657
Y=6,773
X=170,657
1号土坑
A
A′
X=170,656
Y=6,771
炭化物
190.70m
黄褐色砂層
黒灰色砂層
黒色粘質土・砂互層
（木質含む）
礫層
曲物
木
1
2
3
4
1号土坑堆積土
1　灰色土　5Y5/1（砂粒多量，黒色土少量，炭化粒若干含む，鉄分少量，堅固）
2　暗灰黄色土　2.5Y5/2（砂粒少々，鉄分多量，炭化粒若干含む，しまり良）
3　灰色土　5Y6/1（砂層，炭化物少量含む，しまり良）
4　黒色土　5Y2/1（木質片含む，粘性大）
Y=6,782
X=177,658
Y=6,784
X=177,658
Y=6,768
X=170,678
調査区外
SD01
杭
2号土坑
SD1
SK02
3号土坑
X=177,656
Y=6,782
190.80m
砂層
石
黒色粘質土
2号土坑堆積土
1　灰黄色土　2.5Y6/2（砂粒多量，鉄分多量含む，堅固，しまり良）
3号土坑堆積土
1　暗褐色土　7.5YR3/3（砂粒多量（鉄分多），粘土少量，炭化物若干含む）
2　灰褐色土　7.5YR4/2（粘土多量，砂粒少量含む，しまり良）
3　黒褐色土　10YR3/1（黒色粘質土主体，炭化物若干含む，粘性強）
4　黒褐色土　10YR3/1（黒色粘質土，3層との識別難，曲物うら込め）
X=170,675
Y=6,768
X=170,675
Y=6,770
Y=6,786
X=170,658
Y=6,788
X=170,658
4号土坑
灰褐色砂層
黒灰色砂層
黒褐色粘質土
4号土坑堆積土
1　にぶい褐色土　7.5YR5/4
（黒色粘質土，砂粒多量含む，下方鉄分多，しまり良，堅固）
2　黒褐色土　7.5YR3/1（黒色粘質土多量，砂粒少量含む，しまり良，粘性有）
3　灰黄褐色土　10YR4/2（黒色粘質土，砂粒多量含む，しまり良，粘性やや有）
4　赤灰色土　2.5YR4/1（黒色粘質土主体，砂粒若干含む，粘性強）
X=170,656
Y=6,788
0
1m
(1/40)

図14　1～4号土坑

検出面での平面形はほぼ円形で，規模は長径1.08ｍ，短径96㎝である。検出面から30㎝ほど掘り下げた後，さらに中央を円形に掘り下げて，直径25㎝，高さ30㎝ほどの曲物を正位に設置し，背面を黒色粘質土で固定している。検出面から底面までの深さは62㎝である。堆積土は４層に分層したが，下層のℓ３・４は黒色粘質土，上層のℓ１・２は砂粒・粘土が主体で自然堆積と考えられる。曲物は南側半分が壊れており，破片が底面やℓ３から出土している。

遺物は須恵器片・砥石・曲物各１点を図示した。図22－２は須恵器壺の底部破片，３は凝灰岩製の砥石で，曲物枠内の底面から出土している。表裏面とも剥落し，砥面は両側面にのみ残る。４は曲物の側板で，長さ44.8㎝，幅8.5㎝である。木取りは柾目で，樹皮で綴じた接ぎ目の部分が残る。出土時の計測では，高さ21㎝で直径35㎝前後であることから，全周すると長さ1.1ｍほどになる。

性格については，底面中央を掘り下げ，曲物を設置していることから，深さはないものの簡易な井戸跡と考える。底面から出土した須恵器壺の破片は平安時代のものであるが，検出面が平安時代の２号流路跡ℓ１上面であることと堆積土の特徴から，中世の可能性が高い。　（後　藤）

４号土坑　ＳＫ04（図14・22，写真14）

Ⅰ区中央やや北，Ｃ３グリッドに位置する。検出面は２号流路跡ℓ１上面で，西側２ｍには３号土坑，南側2.5ｍには５号土坑が位置する。

検出面での平面形はほぼ円形で，規模は長径1.48ｍ，短径1.38ｍである。土層の判断が難しく一部掘りすぎてしまったが，深さ50㎝ほど円筒形に掘り下げた後，中央をさらに深さ30㎝掘り下げている。検出面から底面までの深さは86㎝である。堆積土は黒色粘質土が主体で砂粒の多少により４層に分層したが，人為堆積と考えられる。

遺物は，図22－５の曲物の柄杓が，土坑中央のℓ４から１点出土しているのみである。やや歪んでいるが，側板を二重に廻し，接ぎ目を樹皮で綴じている。柄を取り付けた対向する大小の２孔があり，直径12.5㎝の底板も残る。３号土坑同様，底面中央を掘り下げており，曲物は設置していないが最下層から柄杓が出土していることから，簡易な井戸跡の可能性が考えられる。時期についても，３号土坑同様，中世の可能性が高い。　（後　藤）

５号土坑　ＳＫ05（図15，写真14）

Ⅰ区中央やや北，Ｃ３グリッドに位置する。北側２～３ｍには３・４号土坑，南側３～４ｍには７～９号土坑が位置する。検出面は２号流路跡ℓ１上面である。

南側は攪乱により壊されているが，検出面での平面形は直径90㎝の円形で，底面までの深さは77㎝である。直径55㎝ほどの平坦な底面から20～30㎝ほぼ垂直に立ち上がった後，やや傾斜を持って開く。堆積土は５層に分層した。上層のℓ１・２は砂粒，下層のℓ３・４は黒色粘質土が主体で，短期間の自然堆積と考えられる。

遺物は曲物の細片が３点と底面直上から骨が出土している。骨は極一部で，墓壙と断定するのは

難しく，堆積土や形態は周辺の土坑と近似しており，同様の時期や性格と考えたい。　（後　藤）

６号土坑　ＳＫ06（図15）

Ⅰ区北東，Ｅ３グリッドに位置する。検出面はＬⅡ上面で，北西２ｍには17号土坑が位置する。検出面での平面形は，長軸70㎝，短軸52㎝楕円形で，主軸方向はＮ５°Ｗである。底面はほぼ平坦で，検出面からの深さは18㎝と浅く，壁はなだらかに立ち上がる。堆積土は黒褐色粘質土を主体とする単一層で，自然堆積と考えられる。

時期や性格については，遺物の出土がなく，判断材料も乏しいことから，不明とする。（後　藤）

７号土坑　ＳＫ07（図16・22，写真15）

Ⅰ区のほぼ中央，Ｃ３・４グリッドの境界上に位置する。南東には重複する８・９号土坑が近接し，ほぼ直線状に並ぶ。検出面は２号流路跡ℓ１上面である。

検出面での平面形はほぼ円形で，規模は長径1.26ｍ，短径1.1ｍである。底面までの深さは84㎝である。底面は東側がやや深くなっており，壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は７層に分層した。ℓ１・４～６は砂粒が主体，ℓ２・３と最下層のℓ７は黒色粘質土が主体となる層で，自然堆積と考えられる。北西寄りの底面からは拳大の礫３点と木片が出土している。

図示した遺物は，図22－６の漆器の椀１点である。口縁部を欠くが，内面には黒漆の下地に赤漆で文様が描かれている。他に摩滅の著しい土師器の細片４点と須恵器の細片１点が出土している。

時期は検出面と堆積土の特徴から中世と考えられる。性格については判断材料に欠けるが，廃棄穴や貯蔵穴など可能性を指摘するのみにとどめる。　（後　藤）

８号土坑　ＳＫ08（図16・22，写真15）

Ⅰ区のほぼ中央，Ｃ４グリッドに位置する。検出面は２号流路跡ℓ１上面で，北西に７号土坑が近接し，南東で９号土坑と重複する。検出時の平面的判断では本土坑が古いと判断したが，重複する部分は両土坑とも最上層のℓ１のみで，堆積土に大きな相違は認められない。

確認面での平面形は，長径1.7ｍ，短径1.25ｍの楕円形で，底面までの深さは92㎝である。底面は平坦で壁はほぼ垂直に立ち上がり，上方でやや開く。堆積土は砂粒と黒色粘質土の多少により６層に分層した。砂粒と黒色粘質土が主体となる層が互層状に堆積しており，自然堆積と考えられる。

遺物は，ℓ２より出土した図22－７の荷札と考えられる木製品１点のみである。長さ11.2㎝，幅3.5㎝で両端をやや丸く削っており，円孔と擦れて判読不能であるが表面に墨書が認められる。

時期や性格については７号土坑などと同じと考える。　（後　藤）

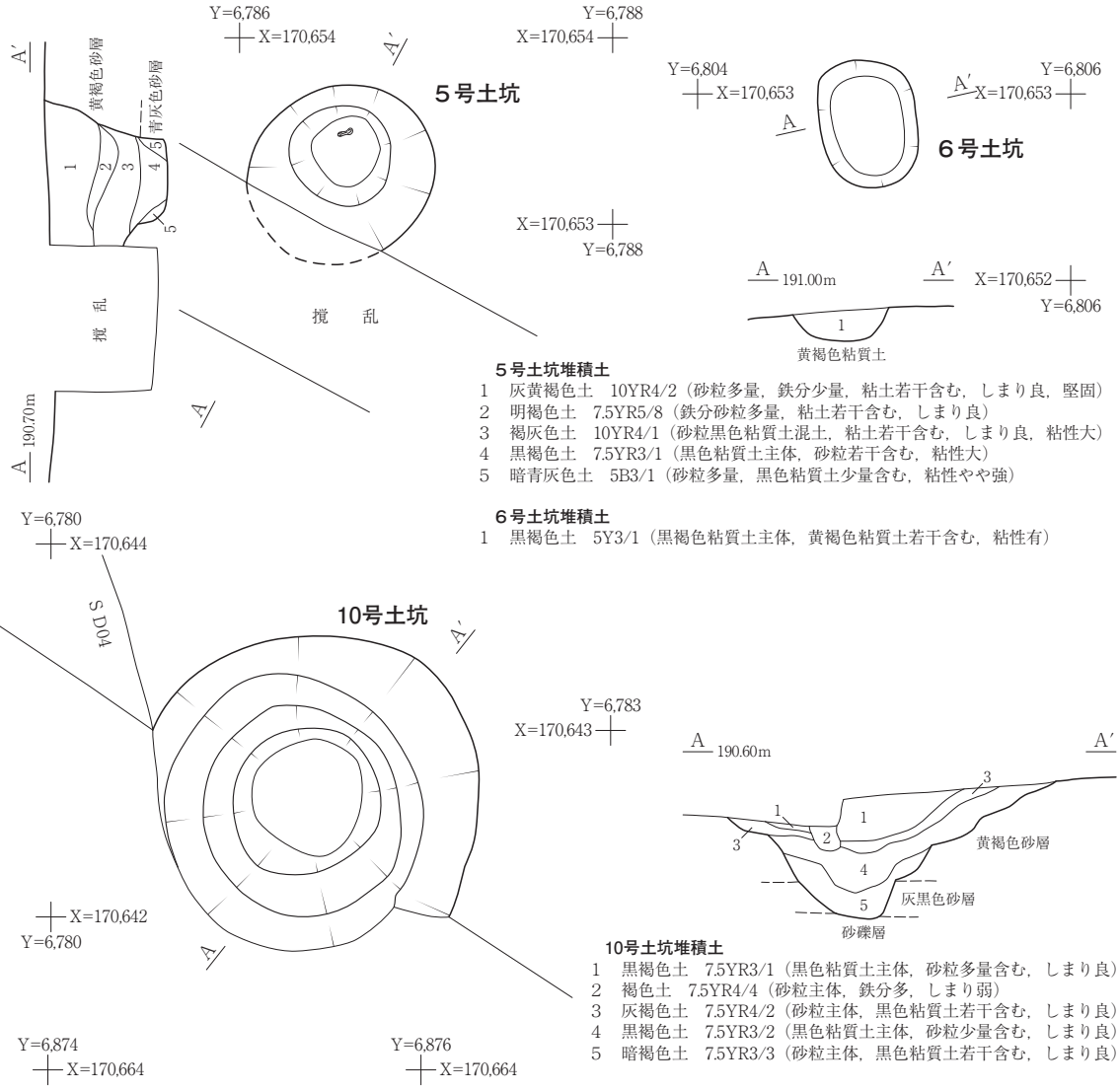


図15　5・6・10・12・13号土坑

９号土坑　ＳＫ09（図16，写真15）

Ⅰ区のほぼ中央，Ｃ４グリッドに位置する。検出面は２号流路跡ℓ１上面で，北西で上方が８号土坑と重複する。前述したとおり本土坑が新しいと判断した。

検出面での平面形は直径2.58ｍのほぼ円形で，本調査区最大規模の土坑である。底面は平坦で，中央が直径1.2ｍ，深さ10㎝ほど円形に深くなっている。確認面からの深さは１ｍで，壁はほぼ垂直に立ち上がるが，上方は大きく開く。堆積土は６層に分層した。ℓ１・３・４・６は砂粒が主体，ℓ２・５は黒色粘質土が主体となる層で，自然堆積と考えられる。

遺物はℓ２から木製品の細片が１点出土している。上層のℓ１・２は７・８号土坑と同質の堆積土であり，ほぼ同じ時期に埋没したものと考えられる。性格についてもほぼ同じと考える。（後　藤）

10号土坑　ＳＫ10（図15・22，写真15）

Ⅰ区中央西寄り，Ｃ４グリッドに位置する。検出面は２号流路跡氾濫部ℓ１上面である。南側1/2は試掘調査のトレンチにより，検出面から20㎝ほど深く削られているが，４号溝跡と重複していたと思われる。南側1.5ｍには11号土坑がある。

検出面での平面形は直径1.9ｍほどの円形で，底面までの深さは72㎝である。底面の平坦部は直径60㎝ほどの小さな円形で，壁はなだらかで段状に立ち上がる。堆積土は５層に分層した。砂粒と黒色粘質土を主体とする層が交互にレンズ状に堆積しており，自然堆積と考えられる。

出土遺物は図22－８の長さ16.8㎝で先端が尖る串状の木製品が１点のみである。時期は検出面と堆積土の特徴から中世と考えられるが，性格については判断材料に乏しく不明とする。（後　藤）

11号土坑　ＳＫ11（図16）

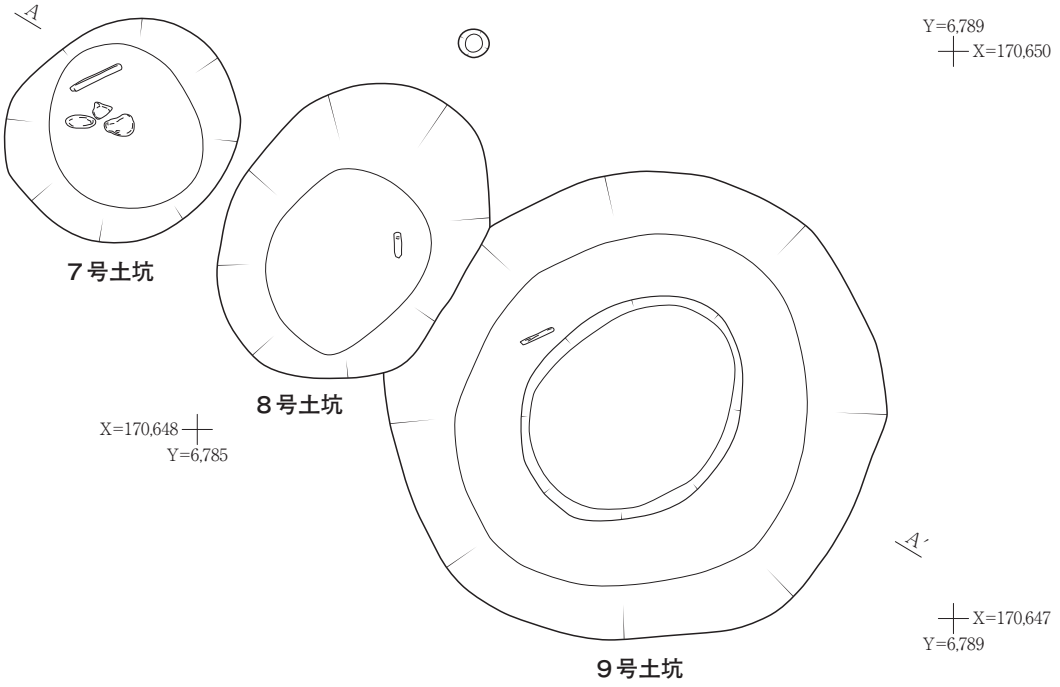
Ⅰ区中央西寄り，Ｃ４・５グリッドの境界に位置する。検出面は２号流路跡氾濫部ℓ１であるが，試掘調査のトレンチにより周囲に比べ20㎝ほど深い。最も南西に位置する土坑で，４号溝跡とはトレンチで削られてしまったが重複し，試掘調査の所見から本土坑が古いと判断される。

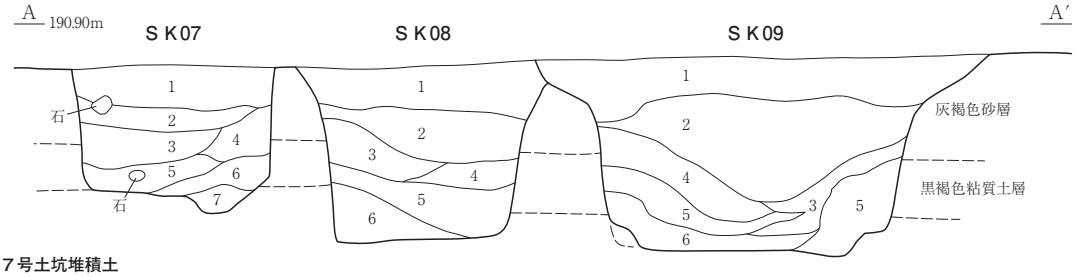
検出面での平面形は楕円形で，規模は長径66㎝，短径54㎝である。底面は平坦部が小さく，検出面からの深さは31㎝，円筒状で上方がやや広がる。堆積土は５層に分層した。砂粒と黒色粘質土の多少により分けた層が交互にレンズ状に堆積しており，自然堆積と考えられる。時期は検出面と堆積土の特徴から中世と考えられるが，性格については判断材料に乏しく不明とする。（後　藤）

12号土坑　ＳＫ12（図15，写真15）

Ⅰ区中央北，Ｄ２グリッドに位置する。検出面はＬⅡ上面である。南西に13号土坑が近接し，西から北側４ｍの範囲には20～23号の４基の土坑が確認されている。

検出面での平面形は直径98㎝の円形で，底面までの深さは60㎝である。壁はほぼ垂直に立ち上

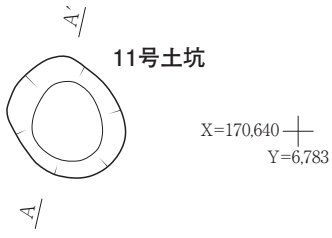




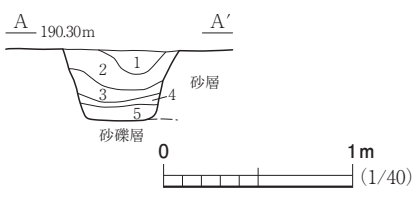
7号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（砂粒多量，黒色粘質土若干含む，下方鉄分多，しまり良，堅固）
2　黒褐色土　10YR3/1（黒色粘質土主体，砂粒若干含む，鉄分少量含む，しまり良，粘性有）
3　黒褐色土　10YR2/2（黒色粘質土多量，砂粒少量含む，しまり良，粘性有）
4　灰黄褐色土　10YR5/2（砂粒主体，鉄分少量含む，しまり良）
5　褐灰色土　10YR4/1（砂粒多量，黒色粘質土若干含む，しまり良）
6　褐灰色土　10YR4/1（砂粒多量，黒色粘質土少量含む，しまり良）
7　黒色土　10YR2/1（黒色粘質土多量，砂粒少量含む，しまり良）

Y=6,781
X=170,641
Y=6,783
X=170,641

8号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（砂粒多量，黒色粘質土若干含む，下方鉄分多，しまり良，堅固）
2　黒褐色土　10YR3/1（黒色粘質土主体，砂粒若干含む，鉄分少量含む，しまり良，粘性有）
3　灰黄褐色土　10YR4/2（砂粒多量，黒色粘質土若干含む，しまり良）
4　黒褐色土　10YR3/1（黒色粘質土多量，砂粒少量含む，しまり良，粘性有）
5　灰黄褐色土　10YR4/2（砂粒・黒色土多量含む，しまり良，粘性有）
6　褐灰色土　10YR5/1（砂粒主体，鉄分多，しまり良）



9号土坑堆積土
1　暗褐色土　10YR3/3（砂粒多量，黒色粘質土若干含む，下方鉄分多，しまり良，堅固）
2　黒褐色土　10YR3/1（黒色粘質土主体，砂粒若干含む，鉄分少量含む，しまり良，粘性有）
3　灰黄褐色土　10YR6/2（砂粒主体，黒色粘質土少量含む，しまり良）
4　灰黄褐色土　10YR5/2（砂粒・黒色粘質土多量含む，しまり良）
5　黒褐色土　10YR3/1（黒色粘質土多量，砂粒若干含む，しまり良，粘性強）
6　褐灰色土　10YR4/1（砂粒多量，黒色粘質土少量含む，しまり良）
　3～5層は縞状堆積



11号土坑堆積土
1　にぶい褐色土　7.5YR5/3（黒色粘質土，砂粒混土，鉄分多，しまり良）
2　灰褐色土　7.5YR5/2（砂粒主体，黒色土若干含む，しまり良）
3　褐灰色土　7.5YR4/1（黒色粘質土，砂粒混土，しまり良）
4　黒褐色土　7.5YR3/1（黒色粘質土主体，砂粒少量含む，しまり良）
5　褐色土　7.5YR4/3（やや粗い砂粒主体）

図16　7～9・11号土坑

がるが，検出面下20㎝付近から若干開く。底面は平坦で，底面中央に直径30㎝，深さ17㎝ほど円形に掘り下げている。堆積土は５層に分層した。砂層のℓ５が堆積したのち，黒色粘質土を主体とし，砂粒や炭化物の多少で分層したℓ１～４が堆積する。砂粒の混入は上層ほど多く，反対に炭化物・炭化粒は下層ほど多い。ℓ４では炭化物が薄く層状に観察される。

遺物の出土はないが，時期は検出面や堆積土の特徴から中世の可能性が高い。底面中央に浅い土坑をもつ円筒状の形態は４・８号土坑などと近似し，同じ性格の土坑と考えられる。　（後　藤）

13号土坑　ＳＫ13（図15，写真15・16）

Ⅰ区中央北，Ｄ２グリッドに位置する。北東に12号土坑が近接し，検出面はＬⅡ上面である。北西には20～23号の４基の土坑，南側には14・15号の２基の土坑が確認されている。

検出面での平面形は，長径64㎝，短径57㎝の楕円形で，底面までの深さは72㎝である。堆積土は全体的によく締まっており，５層に分層した。木質を若干含む青灰色砂層のℓ５が堆積したのち，黒色粘質土が主体で黄褐色粘土と砂粒の混入の多少により分層されたℓ１～４が自然堆積している。

出土遺物がなく，時期を限定することは難しいが，堆積土の特徴から中世の可能性が高い。西側２ｍに位置する21号土坑は，形状や規模がほぼ同じであり，関連する土坑とも考えられる。（後　藤）

14号土坑　ＳＫ14（図17，写真16）

Ⅰ区中央北寄り，Ｄ３グリッドに位置する。検出面はＬⅡ上面である。西側には２号流路跡が近接しており，東側1.4ｍには15号土坑がある。

検出面での平面形は直径1.46ｍの円形である。検出面から50㎝ほど斜めに掘り下げた後，さらに直径73㎝，深さ60㎝ほど円筒状に掘り下げている。壁は崩落により若干オーバーハングしている。底面はＬⅣの砂礫層を20㎝ほど掘り下げており，底面までの深さは1.14ｍである。堆積土は６層に分層したが，ℓ１が砂粒主体である以外は黒色粘質土が主体でよく締まっている。底面付近には大小の礫が詰まっており，ℓ１～４の上層は周囲から流れ込んだように壁際から礫が出土していることから，人為的な埋戻しの可能性が高い。

遺物は摩滅の著しい土師器の細片４点と木製品の細片３点が出土したのみである。漏斗状の形態や，底面が礫層まで達し礫が投棄された状態で出土していることなどから，素掘りの井戸跡と考えられる。時期は堆積土の特徴から，中世の可能性が高い。　（後　藤）

15号土坑　ＳＫ15（図17・22，写真16）

Ⅰ区中央北寄り，Ｄ３グリッドに位置する。検出面はＬⅡであるが，試掘調査のトレンチにより周囲に比べ10㎝ほど深い。西側1.4ｍには14号土坑が確認されている。

検出面での平面形は直径80㎝の円形で，底面までの深さは1.12ｍである。検出面から65㎝ほど

掘り下げ，さらに一回り小さく直径60㎝，深さ50㎝の円筒状に掘り下げており，底面はＬⅣの砂礫層まで達している。西側下方の壁は，ＬⅢに含まれる交差する流木を土坑の形状に合わせて削っており，興味深い。堆積土は４層に分層した。ほぼ水平の人為堆積と考えられ，よく締まっている。

遺物は図22－９～12の木製の串３点と12の曲物の底板破片１点を図示した。９は長さ21.5㎝で両端を尖らしており，10は扁平な形状をしている。ほかに，摩滅した土師器と須恵器の細片各１点と木製品の破片が14点出土している。性格については，形態や深さなどから素掘りの井戸跡の可能性もあるが，根拠に乏しい。時期は堆積土の特徴から，中世と考えられる。　（後　藤）

16号土坑　ＳＫ16（図17，写真16）

Ⅰ区北東，Ｅ３グリッドに位置する。検出面はＬⅡ上面であるが，試掘調査のトレンチにより周囲に比べ20㎝ほど低い。南側には17号土坑が近接する。

検出面での平面形は，直径44㎝の円形である。底面はほぼ平坦で，深さは11㎝と浅い。堆積土は黒褐色粘質土を主体とし，砂粒・橙色粘土の混入の多少により３層に分層した。各層の砂粒や粘土の混入は漸移的で，東側から順次堆積しており自然堆積と考えられる。

本土坑の時期や性格については，遺物の出土がなく判断材料に乏しく明らかにしえないが，規模・形状が近似する６号土坑と同じ性格が考えられる。　（後　藤）

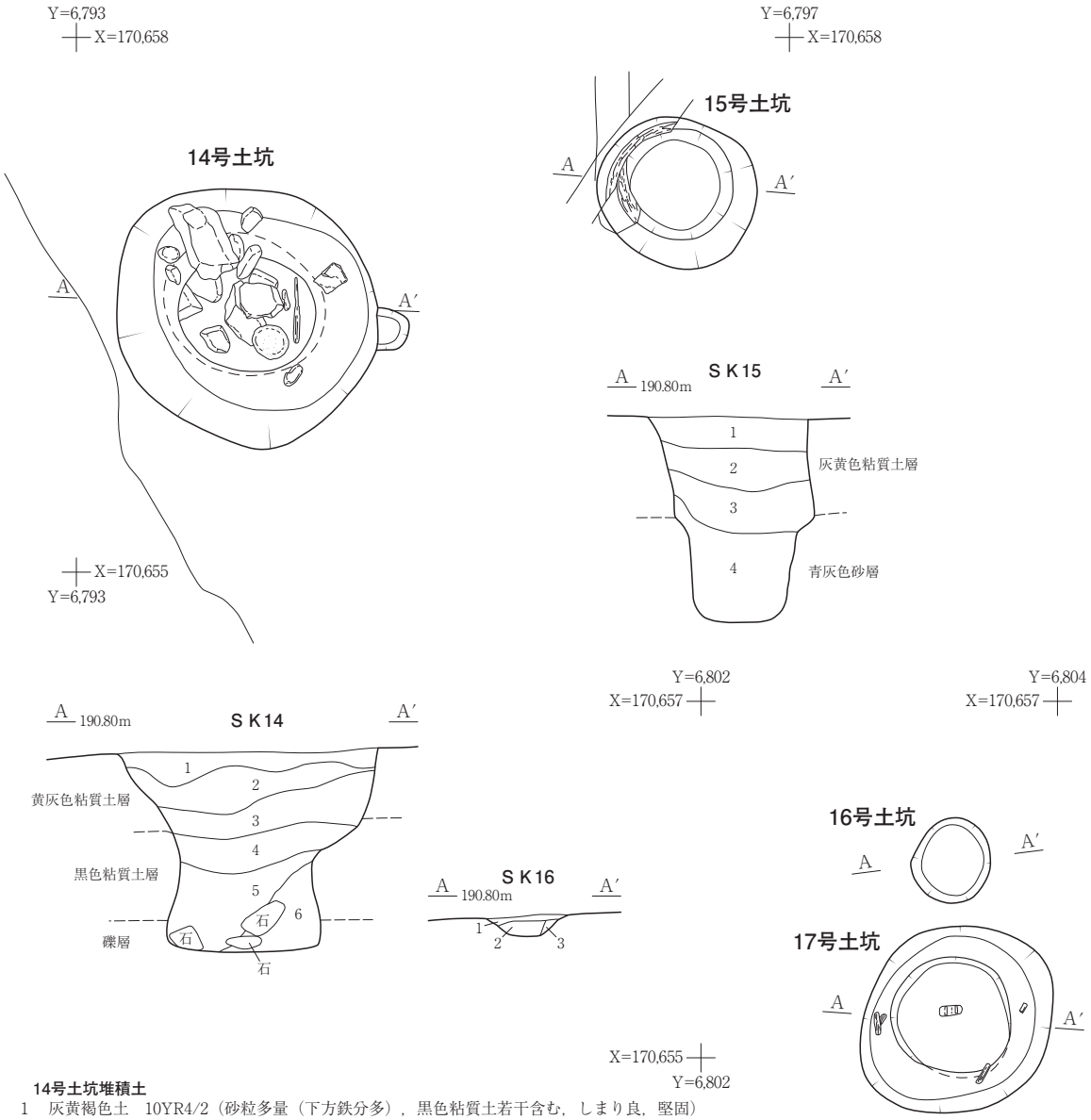
17号土坑　ＳＫ17（図17・23，写真16）

Ⅰ区北東，Ｅ３グリッドに位置する。北側に16号土坑が近接し，南東２ｍには６号土坑が位置する。検出面はＬⅡであるが，試掘調査のトレンチにより周囲に比べ20㎝ほど低い。

検出面での平面形はほぼ円形で，規模は長径1.18ｍ，短径1.03ｍである。検出面から70㎝ほど砂礫層のＬⅣ上面まで掘り下げたのち，中央の砂礫層をさらに直径67㎝の円筒形に50㎝ほど掘り下げている。検出面から底面までの深さは1.24ｍである。堆積土は７層に分層した。底面に20㎝ほど青灰色粘土ℓ７が堆積しており，その上のℓ６は炭化植物を多量含み，木製品なども混入していた。また，ℓ３も黒色粘質土が主体となる層で，下駄や砥石が出土している。人為堆積と考えられる。

出土遺物は木製品２点と砥石１点を図示した。図23－１は直径9.8㎝，器高8.8㎝の柄杓である。側板を二重に廻し，接ぎ目を樹皮で綴じている。柄を取り付けた対向する大小の２孔があけられている。２は長さ21.2㎝，幅9.0㎝の差し歯下駄の台で歯の部分で３つに割れて出土した。歯は欠損しており，後ろの眼は歯の前に穿たれており，前の眼の中には鼻緒の一部が残る。３は凝灰岩製の砥石で，被熱により赤変しひび割れが認められる。ほかに，摩滅の著しい土師器の細片４点と須恵器の細片１点が出土している。また，北西寄りの底面から拳大の礫３点と木片が出土している。

最下層の堆積土の状況から井戸跡と考えられるが，その上層は破損した下駄や炭化物などが出土しており，廃棄穴として使用された可能性が高い。時期は図23－１の放射性炭素年代測定の結果，600±20yrBP の年代値が得られており，中世（14世紀頃）と考えられる。　（後　藤）



14号土坑堆積土

1　灰黄褐色土　10YR4/2（砂粒多量（下方鉄分多），黒色粘質土若干含む，しまり良，堅固）
2　にぶい褐色土　7.5YR5/3（黒色粘質土多量，砂粒少量（鉄分含む）含む，しまり良，粘性有）
3　黒褐色土　10YR3/1（黒色粘質土多量，砂粒若干含む，粘性有）
4　黒褐色土　7.5YR3/1（黒色粘質土多量，砂粒・粘土若干含む，粘性有）
5　黒色土　7.5YR2/1（黒色粘質土主体，木質若干含む，粘性強）
6　黒色土　7.5YR2/1（黒色粘質土主体，大型礫多量含む）

15号土坑堆積土

1　灰黄褐色土　10YR4/2（砂粒鉄分多量，粘土・礫（1～3㎜）若干含む，しまり良，堅固）
2　褐灰色土　10YR4/1（粘土多量，砂粒少量，礫（1～3㎜）若干含む，しまり良）
3　黒色土　10YR2/1（黒色粘質土主体,砂粒・木質若干含む,粘性大）
4　黒褐色土　10YR3/1（砂粒・礫（1～5㎜）多量，黒色土少量含む，しまり良）

16号土坑堆積土

1　黒褐色土　7.5YR3/1（砂粒多量，橙色土少量含む，しまり良，堅固）
2　褐色土　7.5YR4/4（橙色土多量，砂粒若干含む，しまり良，堅固）
3　灰褐色土　7.5YR4/2（粘土粒少量，砂粒若干含む，堅固）

17号土坑堆積土

1　灰黄褐色土　10YR4/2（砂粒多量，1～3㎝大砂礫・炭化物・粘土少量含む，しまり良，堅固）
2　褐色土　10YR4/4（粘土多量，黒色土少量含む，しまり良）
3　黒褐色土　10YR3/1（粘土ブロック少量，炭化物若干含む，粘性大）
4　明褐色土　7.5YR5/6（橙色粘土主体，灰黄色粘土少量含む，粘性大，しまり良）
5　灰黄褐色土　10YR6/2（灰黄色粘土（砂質）主体，橙色粘土，黒色土・炭化物少量含む，粘性大，しまり良）
6　黒色土　7.5YR1.7/1（黒色粘質土，炭化植物多量含む，粘性大）
7　暗青灰色土　5B4/1（青灰色粘土，粘性大）

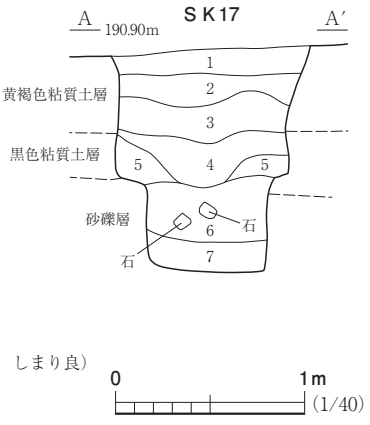


図17　14～17号土坑

18号土坑　ＳＫ18（図18，写真16・17）

Ｉ区のほぼ中央，Ｄ４グリッドに位置する。検出面は２号流路跡ℓ１上面である。周囲に遺構は少なく，北西６ｍに９号土坑がある程度である。

検出面での平面形はほぼ円形で，規模は長径1.02ｍ，短径94㎝である。底面は平坦で砂礫層まで達する。検出面からの深さは84㎝で壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は４層に分層したが，上層ほど砂粒が多く，下層ほど黒色粘質土が多くなる。ℓ１はℓ２とは明らかに異なる層で，土坑埋没後に掘られたものであろう。ℓ２～４はほぼ水平に堆積しており人為堆積と考えられる。

出土遺物はないが，時期は検出面と堆積土の特徴から中世の可能性が高い。性格については判断材料に乏しく明らかにしえないが，廃棄穴や貯蔵穴などと考えられる。（後　藤）

19号土坑　ＳＫ19（図18・23，写真17）

Ｉ区，Ｅ６グリッドに位置する。検出面は２号流路跡ℓ１上面で，Ｉ区の最も東に位置する。西側には６号溝跡が南北にはしるが，周辺には土坑はなく，最も近い18号土坑でも20ｍ離れている。

検出面での平面形は直径1.17ｍの円形で，底面までの深さは77㎝である。底面は平坦で，壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は３層に分層したが，ほぼ水平に堆積しており，人為堆積と考えられる。18号土坑同様，上層ほど砂粒が多く，下層ほど黒色粘質土が多くなる。

出土遺物は，図23－４の凝灰岩の砥石と摩滅の著しい土師器の細片が３点のみである。形状や堆積土の状況から，18号土坑と近似した時期や性格の土坑と考えられる。（後　藤）

20号土坑　ＳＫ20（図18・23，写真17）

Ｉ区Ｄ２グリッドに位置する。２号流路跡ℓ１上面で確認された土坑であるが，明瞭でないため南半を深さ50㎝ほど断ち割って断面を観察した後，掘り下げを行った。南東１ｍに21号土坑，北東1.2ｍに22号土坑など，東側５ｍの範囲には５基の土坑が確認されている。

検出面での平面形はほぼ円形で，規模は長径96㎝，短径86㎝である。検出面から深さ40～50㎝まで窄まってから，直径60㎝で，深さ70㎝ほど円筒状に掘り下げている。検出面から底面までの深さは1.48ｍである。底面は平坦で砂礫層を30㎝ほど抜いている。堆積土は３層に分層し，人為堆積と考えられる。ℓ２・３は黒色粘質土が主体で，ℓ３下方には礫や炭化物･木片などが含まれる。

図示した遺物は，図23－５の木製の串１点のみである。長さ22.3㎝で，両端は削られ尖っている。他にℓ３から須恵器杯の小破片１点が出土している。時期は，検出面と堆積土の特徴から中世の可能性が高い。性格については，井戸跡の可能性もあるが，根拠に乏しい。（後　藤）

21号土坑　ＳＫ21（図18・23，写真17）

Ｉ区中央北，Ｄ２グリッドに位置する。確認面は東側がＬⅡ上面，西側が２号流路跡ℓ１である。

東側２ｍには12・13号土坑，北側には20・22・23号土坑が確認されている。

検出面での平面形は直径65㎝の円形で，底面までの深さは59㎝である。底面は長径40㎝，短径30㎝の楕円形で，中央には曲物の底板が置かれていた。堆積土はよく締まっており，３層に分層した。人為堆積と考えられ，ℓ２・３は黒色粘質土が主体で，ℓ３には青灰色砂粒が含まれる。

出土遺物は，図23－６の直径12.4㎝，厚さ0.8㎝の曲物の底板のみである。東側２ｍに位置する13号土坑とは，規模や形状・堆積土が近似することから，１対の関連する土坑と考えられる。時期を限定することは難しいが，検出面と堆積土から中世の可能性が高い。（後　藤）

22号土坑　ＳＫ22（図18・23，写真17・18）

Ⅰ区中央北，Ｄ２グリッドに位置する。検出面は東側がＬⅡ上面，西側は２号流路跡ℓ１である。半径３ｍ以内には12・13・20・21・23号の５基の土坑が確認されている。

検出時，長径1.53ｍ，短径1.2ｍの楕円形の土坑として調査を進めたが，上方が広がる直径90㎝ほどの円筒形の土坑で，北側が半円状に掘られているものと考えられる。底面は平坦で砂礫層を40㎝ほど掘り込んでおり，南壁は湧水により崩落し，オーバーハングしている。確認面からの深さは1.14ｍである。堆積土は３層に分層したが，人為堆積と考えられる。いずれも黒色粘質土が主体で，上層から下層に向かって砂粒の含有量は少なくなる。

図示した遺物は，図23－７の曲物の側板１点のみである。木取りは柾目で，内側には縦方向に約１㎝間隔で細い切り込みが入れられている。ほかに，ℓ２・３から板材などが出土している。時期は検出面と堆積土の特徴から中世の可能性が高い。性格については，形状や規模が近似する18～20号土坑と同じものと考える。（後　藤）

23号土坑　ＳＫ23（図19・23，写真18）

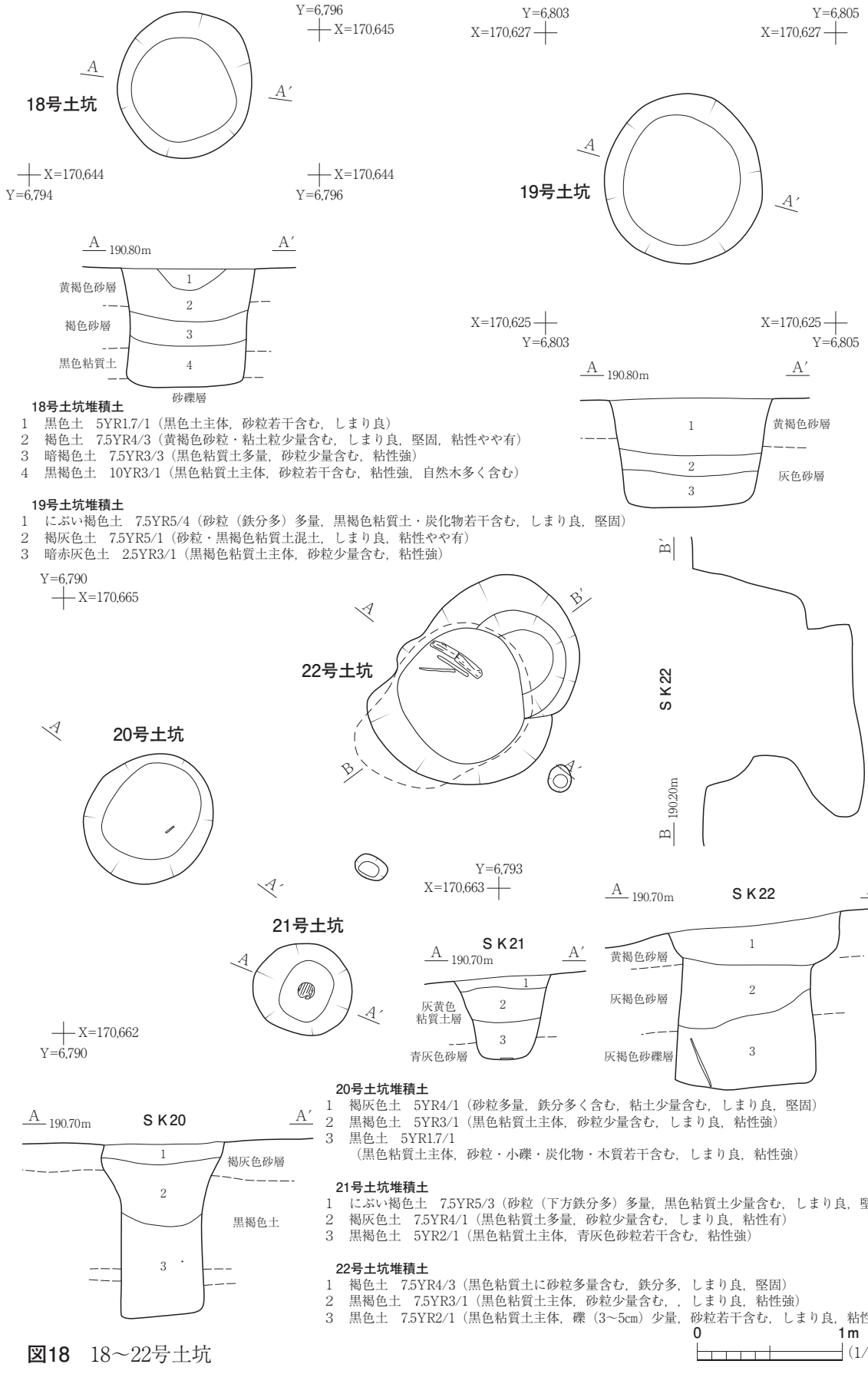
Ⅰ区中央北端，Ｄ２グリッドに位置する。確認面はＬⅡ上面で，Ｄ２グリッドの土坑集中地域では最も北に位置する。

検出面での平面形はやや歪んだ隅丸方形で，規模は96×92㎝，確認面からの深さは80㎝である。底面は平坦で，壁はほぼ垂直に立ち上がる。堆積土は３層に分層したが，いずれも黒色粘質土が主体で，上層から下層に向かって砂粒の含有量が少なくなる。底面はＬⅣの砂礫層に達しているため，ℓ３の下方には砂礫が若干含まれる。ほぼ水平堆積で，人為堆積と考えられる。

出土遺物は，図23－８の曲物の底板の破片１点のみである。時期は検出面と堆積土の特徴から中世の可能性が高い。性格については形状や規模などから周辺の土坑と同じものと考える。（後　藤）

24号土坑　ＳＫ24（図19，写真18）

24号土坑は，Ⅱ区中央よりやや東側のＪ７グリッドに位置している。周辺には，東側に15号溝跡が，南側に１号流路跡が，北側に12号溝跡が位置し，遺構検出面はＬⅡ上面となっている。



18号土坑堆積土
1　黒色土　5YR1.7/1（黒色土主体，砂粒若干含む，しまり良）
2　褐色土　7.5YR4/3（黄褐色砂粒・粘土粒少量含む，しまり良，堅固，粘性やや有）
3　暗褐色土　7.5YR3/3（黒色粘質土多量，砂粒少量含む，粘性強）
4　黒褐色土　10YR3/1（黒色粘質土主体，砂粒若干含む，粘性強，自然木多く含む）

19号土坑堆積土
1　にぶい褐色土　7.5YR5/4（砂粒（鉄分多）多量，黒褐色粘質土・炭化物若干含む，しまり良，堅固）
2　褐灰色土　7.5YR5/1（砂粒・黒褐色粘質土混土，しまり良，粘性やや有）
3　暗赤灰色土　2.5YR3/1（黒褐色粘質土主体，砂粒少量含む，粘性強）

20号土坑堆積土
1　褐灰色土　5YR4/1（砂粒多量，鉄分多く含む，粘土少量含む，しまり良，堅固）
2　黒褐色土　5YR3/1（黒色粘質土主体，砂粒少量含む，しまり良，粘性強）
3　黒色土　5YR1.7/1
（黒色粘質土主体，砂粒・小礫・炭化物・木質若干含む，しまり良，粘性強）

21号土坑堆積土
1　にぶい褐色土　7.5YR5/3（砂粒（下方鉄分多）多量，黒色粘質土少量含む，しまり良，堅固）
2　褐灰色土　7.5YR4/1（黒色粘質土多量，砂粒少量含む，しまり良，粘性有）
3　黒褐色土　5YR2/1（黒色粘質土主体，青灰色砂粒若干含む，粘性強）

22号土坑堆積土
1　褐色土　7.5YR4/3（黒色粘質土に砂粒多量含む，鉄分多，しまり良，堅固）
2　黒褐色土　7.5YR3/1（黒色粘質土主体，砂粒少量含む，，しまり良，粘性強）
3　黒色土　7.5YR2/1（黒色粘質土主体，礫（3～5cm）少量，砂粒若干含む，しまり良，粘性大）

図18　18～22号土坑

土坑の平面形は，上部が径56～52㎝の円形を呈しており，最深部で検出面からの深さは25㎝となっている。壁面の立ち上がりは緩やかで，暗褐色粘質土１層が堆積していた。堆積状況は，自然堆積と考えられる。

遺物は出土していないが，位置関係と堆積土が平安時代の遺構と近似するところから，平安時代の土坑である可能性がある。また，性格は不明である。（藤　谷）

26号土坑　ＳＫ26（図19・23，写真18）

Ⅲ区の北西，Ｌ６グリッドに位置する。検出面はＬⅡ上面である。９号溝跡と17号溝跡が合流する南西，５号掘立柱建物跡の南東Ｐ５・Ｐ６の東側に近接している。

検出面での平面形は，長さ1.34ｍ，幅37～48㎝の隅丸長方形で，北側の幅が若干広い。底面は平坦部の幅が狭く，検出面からの深さは23㎝で断面形はＶ字状に近い。底面直上のℓ２からは拳大の礫５個と須恵器甕の胴部破片が出土している。堆積土は黒色粘質土が主体で，灰褐色粘土の混入量により２層に分層したが，レンズ状の自然堆積である。

遺物は土師器杯底部と須恵器甕の胴部破片各１点を図示した。図23－９は摩滅により成形等は不明であるが，内面は黒色処理と思われる。10は胴部外面に2.5㎝ほどの間隔で凹線がめぐる。他にℓ２から摩滅の著しい土師器12点，須恵器２点の細片が出土している。

本土坑は，５号掘立柱建物跡の南東のＰ５・Ｐ６の柱間とほぼ同じ長さで，東桁行の柱筋とは40㎝の間隔で平行することから，５号掘立柱建物跡に関連する遺構で，雨落ち溝跡などの可能性が考えられる。10の須恵器甕の破片は９世紀代の大戸窯のものであり，時期も矛盾しない。（後　藤）

27号土坑　ＳＫ27（図19，写真18）

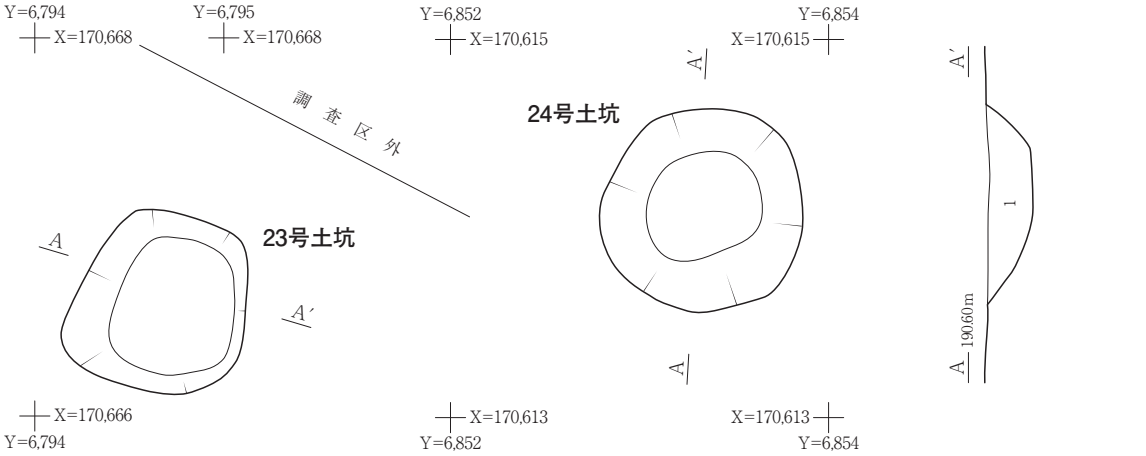
Ⅲ区の中央西側，Ｌ７・８グリッドの境界に位置する。検出面はＬⅡ上面である。南西1.5ｍに12号溝跡が北西から南東に延びる。

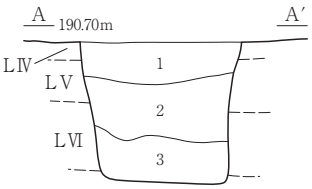
確認面での平面形は直径73㎝の円形である。検出面からの深さは1.03ｍで，壁はほぼ垂直の円筒形の土坑で，底面は礫層まで達している。堆積土は４層に分層した。人為堆積と考えられ，ℓ２が灰褐色粘土のブロックを多量含むものの，黒色粘質土が主体で，最下層のℓ４には礫や有機物が含まれる。

遺物は摩滅の著しい土師器の杯（内面黒色処理）２点と甕14点の細片が出土している。時期は堆積土の特徴から古代の可能性が高く，性格については特定する根拠に乏しく明らかにしえないが，北側に位置する掘立柱建物跡と関連する土坑と考えられる。（後　藤）

28号土坑　ＳＫ28（図19，写真18・19）

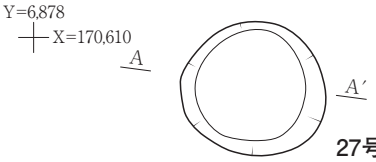
Ⅲ区の北西，Ｍ・Ｎ５グリッドの境界に位置する。検出面はＬⅡ上面である。北側60㎝には20号溝跡が東西に，西側2.7ｍには17号溝跡が南北に延びる。

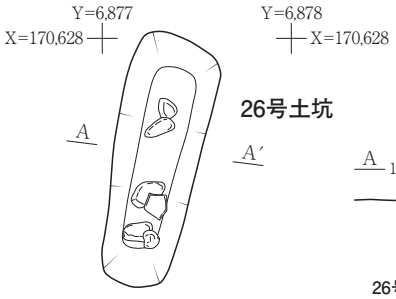


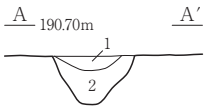


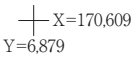
23号土坑堆積土
1　にぶい褐色土　7.5YR5/3（黒色粘質土多量，砂粒・粘土少量含む，鉄分で赤化，しまり良，粘性有）
2　黒褐色土　5YR2/1（黒色粘質土主体，砂粒若干含む，粘性強，しまり良）
3　黒色土　5YR1.7/1（黒色粘質土主体，砂粒・小礫（2～4㎜）若干含む，粘性大，しまり良）

24号土坑堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/3（灰褐色粘土ブロック少量，炭化物少量混入）

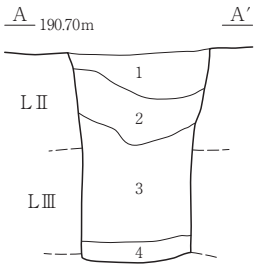






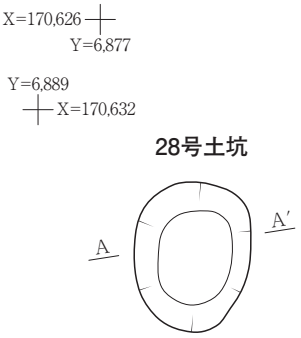


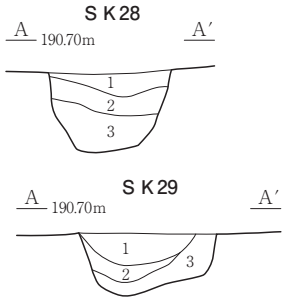
27号土坑

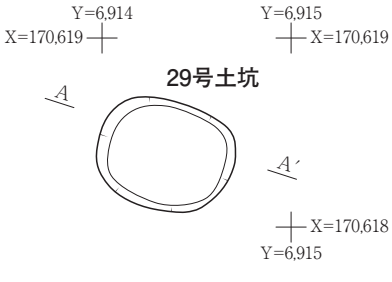


26号土坑堆積土
1　褐色土　10YR4/4（黒色粘質土，灰褐色粘土混土，粘性あり，しまり良）
2　黒褐色土　10YR2/2（黒色粘質土主体，灰褐色粘土少量含む，粘性大）

27号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/2（黒色粘質土主体，黄褐色・灰褐色粘土粒少量含む，しまり強）
2　灰黄褐色土　10YR4/2（灰褐色粘土ブロック多量，黄褐色粘土・黒色粘質土少量含む，しまり強）
3　黒色土　10YR2/1（黒色粘質土主体，黄褐色・灰褐色粘土粒若干含む，粘性大，しまり強）
4　褐灰色土　10YR4/1（黒灰色粘質土，礫若干，植物有機物若干含む，粘性大）







28号土坑堆積土
1　灰黄褐色土　10YR5/2（黒色粘質土・灰褐色粘土ブロック多量含む，しまり強）
2　黒色土　10YR2/1（黒色粘質土主体，灰褐色粘土小ブロック若干含む，しまり強）
3　黒褐色土　10YR3/1（黒色粘質土主体，灰褐色粘土ブロック少量含む，しまり強）

29号土坑堆積土
1　黒色土　10YR2/1（黒色粘質土主体，砂粒少量，灰褐色粘土若干含む）
2　黒褐色土　10YR3/1（黒色粘質土主体，砂粒若干含む）
3　灰黄褐色土　10YR5/2（砂粒・灰褐色粘土ブロック多量含む）

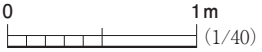


図19　23・24・26～29号土坑

検出面での平面形は南北に長い楕円形で，規模は長径80㎝，短径64㎝である。底面の平坦部は長径50㎝，短径40㎝とやや小さく，検出面からの深さは40㎝である。堆積土は黒色粘質土が主体で，灰褐色粘土ブロックの混入の多少により３層に分層したが，人為堆積と考えられる。

遺物は，摩滅の著しい土師器の細片が５点出土しているのみである。時期や性格については，判断する材料が乏しく，詳細は不明である。（後　藤）

29号土坑　ＳＫ29（図19，写真19）

Ⅲ区の北東，Ｐ７グリッドに位置する。検出面はＬⅡ上面である。北側には１号性格不明遺構が確認されているが，南側は20ｍほど遺構の分布が認められない。

検出面での平面形は楕円形で，規模は長径74㎝，短径60㎝である。主軸方向はＮ80°Ｗである。底面は中央から西側が若干深く，検出面からの深さは27㎝である。堆積土は３層に分層した。砂粒と灰褐色粘土のブロックを多量含むℓ３が堆積したのち，黒色粘質土が主体のℓ１・２がレンズ状に堆積しており，自然堆積と考えられる。

遺物は摩滅の著しい平安時代の土師器細片３点と須恵器杯細片１点が出土しているのみである。時期や性格については判断する材料が乏しく，詳細は不明である。（後　藤）

30号土坑　ＳＫ30（図20）

Ⅲ区の北東，Ｏ６グリッドに位置する。検出面はＬⅡ上面である。北側1.5ｍに１号性格不明遺構，南東６ｍに29号土坑がある。

検出面での平面形は楕円形で，規模は長径88㎝，短径62㎝である。主軸方向はＮ55°Ｗである。底面は平坦で，検出面からの深さは９㎝と浅い。堆積土は黒色粘質土が主体の単層で，砂粒の混入が均質であり，自然堆積と考えられる。

遺物の出土がなく，時期や性格を判断する材料も乏しいことから，詳細は不明である。（後　藤）

31号土坑　ＳＫ31（図20，写真19）

31号土坑は，Ⅱ区中央よりやや東側のＪ７グリッドに位置している。周辺には，北側に９号掘立柱建物跡と12号溝跡が，南側に15号溝跡が隣接して位置しており，遺構検出面はＬⅡ上面となっている。

土坑の平面形は，上部の径が約1.13ｍの円形を呈しており，最深部で検出面からの深さは30㎝となっている。壁面の立ち上がりは緩やかで，白色砂粒が微量混入する黒褐色粘質土１層が堆積していた。堆積状況は，自然堆積と考えられる。

遺物は，堆積土中から須恵器細片１点と土師器細片２点が出土している。その時期は，出土遺物と堆積土から平安時代の土坑である可能性がある。また，性格については，北側の建物跡群に関連する性格であったと思われる。（藤　谷）

32号土坑　ＳＫ32（図20・23，写真19）

32号土坑は，Ⅱ区東側のＫ７グリッドに位置している。遺構は，12号溝跡と重複関係にあり，それを切っている。遺構検出面は，12号溝跡の堆積土上面及び，ＬⅡ上面となっている。

土坑の平面形は，上部の径が長軸1.5ｍの楕円形を呈している。土坑内には，径約95㎝，高さ約30㎝の桶が埋置されていた。検出面から桶下部の掘形までの深さは39㎝となっている。断面は鍋状を呈し，桶内部も掘形も暗褐色粘質土が堆積していた。堆積状況は，人為堆積と考えらえる。

遺物は，堆積土中から須恵器細片１点と土師器細片５点が出土している。その時期は，検出面での遺構境界が明瞭であること，堆積土が平安時代の遺構と明らかに異なるところから，近世以降の遺構と思われる。また，性格については，桶の状況から墓穴の可能性が考えられる。　（藤　谷）

33号土坑　ＳＫ33（図20，写真19）

33号土坑は，Ⅲ区東側のＯ９グリッドに位置している。周辺には西側に17号溝跡が位置している。遺構検出面はＬⅡ上面となっている。

土坑の平面形は，上部の径が1.16ｍの円形を呈している。壁面の立ち上がりは緩やかで，検出面からの深さは28㎝となっている。堆積土は３層からなり，ℓ１・３に明瞭なブロック土が混入するところから人為堆積と考えられる。

遺物は，堆積土中からロクロ土師器の細片３点と須恵器細片１点が出土している。その時期は，出土遺物から平安時代９世紀の遺構であると考えられるが，建物跡群とも離れた位置にありその性格は不明である。　（藤　谷）

34号土坑　ＳＫ34（図20，写真19）

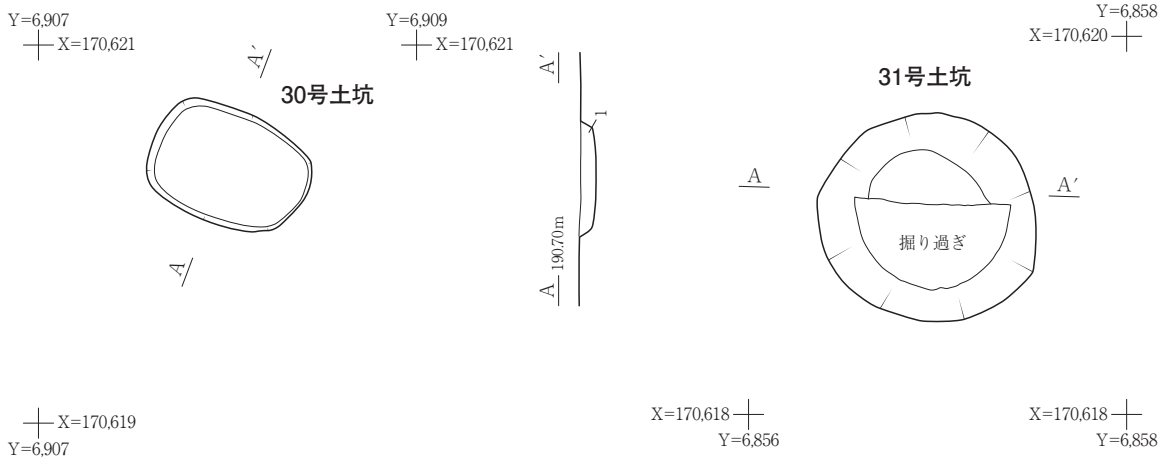
34号土坑は，Ⅲ区南東側のＭ10グリッドに位置し，南側には23号溝跡が隣接している。遺構検出面はＬⅡ上面となっている。

土坑の平面形は，長軸76㎝の隅丸長方形を呈している。壁面の立ち上がりは緩やかで，検出面からの深さは12㎝となっている。堆積土は１層からなり，建物跡柱穴の堆積土に近似するブロック土が混入する黒褐色粘質土となっている。堆積状況は人為堆積と考えられる。

遺物は出土していないが，堆積土が建物跡柱穴の堆積土に近似するところから，その時期は平安時代９世紀と考えられる。その性格は不明である。　（藤　谷）

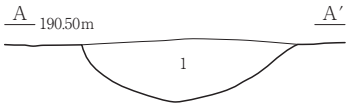
35号土坑　ＳＫ35（図21，写真19）

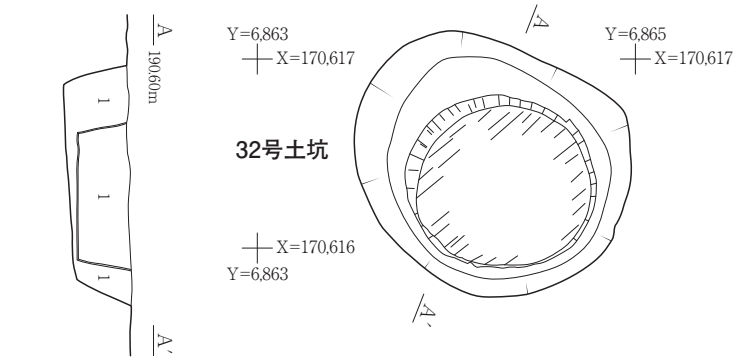
35号土坑は，Ⅱ区東側のＫ８グリッドに位置し，南側には１号流路跡がある。遺構検出面はＬⅡ上面となっている。検出時の状況では，建物群と近似した堆積土であり，周辺に同様のピットがあれば建物跡となる可能性もあったが，周辺にピットはなく単独の土坑となった。



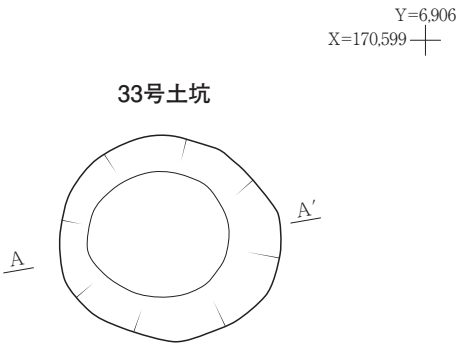
30号土坑堆積土
1　黒褐色土　10YR3/1（黒色粘質土主体，砂粒少量含む，しまり良）

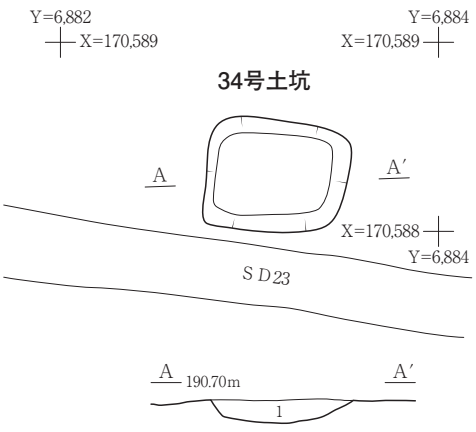
31号土坑堆積土
1　黒褐色粘質土　10YR2/3（白色砂粒微量，炭化物少量混入）

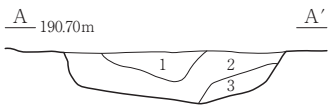




32号土坑堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/3（白色砂粒微量，炭化物微量混入）







33号土坑堆積土
1　黒色粘質土　10YR1.7/1（炭化物少量，黄褐色粘質土ブロック少量混入）
2　黒褐色粘質土　10YR3/2（白色砂粒少量，炭化物少量混入）
3　黒褐色粘質土ブロック　10YR3/2　にぶい黄褐色土ブロック　10YR4/3

34号土坑堆積土
1　黒褐色粘質土　10YR3/2（白色砂粒少々，炭化物少量，にぶい黄褐色土ブロック少量混入）

図20　30～34号土坑

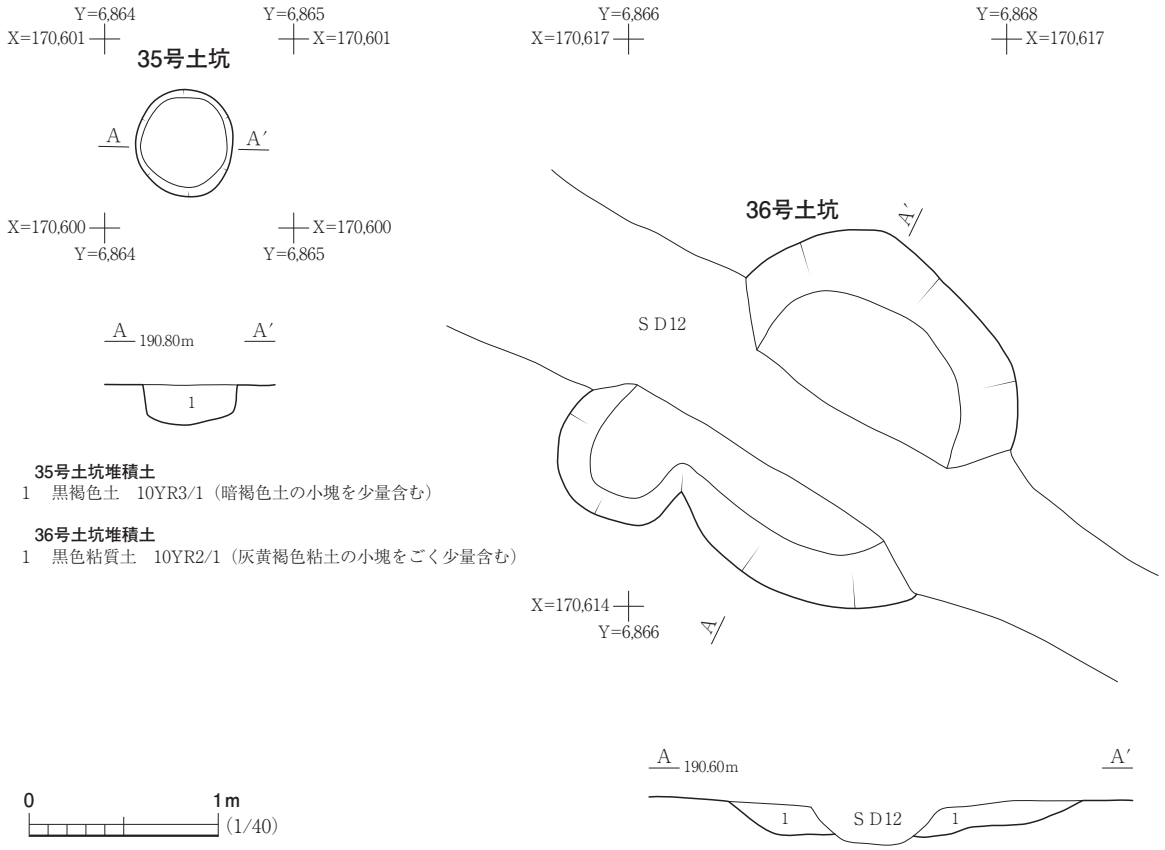


図21　35・36号土坑

土坑の平面形は長軸56㎝の楕円形を呈している。壁面の立ち上がりは急で，断面は鍋底状を呈している。検出面からの深さは22㎝となっている。堆積土は黒褐色土１層からなり，堆積状況は人為堆積と考えられる。

遺物は，土師器甕の細片が１点出土しているのみである。その時期は，遺物より平安時代９世紀と考えられるが，その性格は不明である。（藤　谷）

36号土坑　ＳＫ36（図21，写真19）

36号土坑は，Ⅱ区東側のＫ７グリッドに位置し，12号溝跡と重複関係にあり，中央部分がそれに切られている。遺構検出面はＬⅡ上面となっている。

土坑の平面形は径長軸1.68ｍの楕円形を呈している。東側には同時に作られたとみられる小穴状の掘り込みがある。壁面の立ち上がりは緩やかで，検出面からの深さは16㎝となっている。底面はほぼ平坦で12号溝跡の底面よりも５㎝程浅い。堆積土は黒色粘質土１層からなり，堆積状況は自然堆積と考えられる。

遺物は，土師器杯の細片が１点出土しているのみである。その時期は，12号溝跡の構築年代が８世紀後半～末まで遡る可能性があり，それに切られる本土坑はそれより古い年代のものと思われる。形態等から，その性格を推定することはできなかった。（藤　谷）

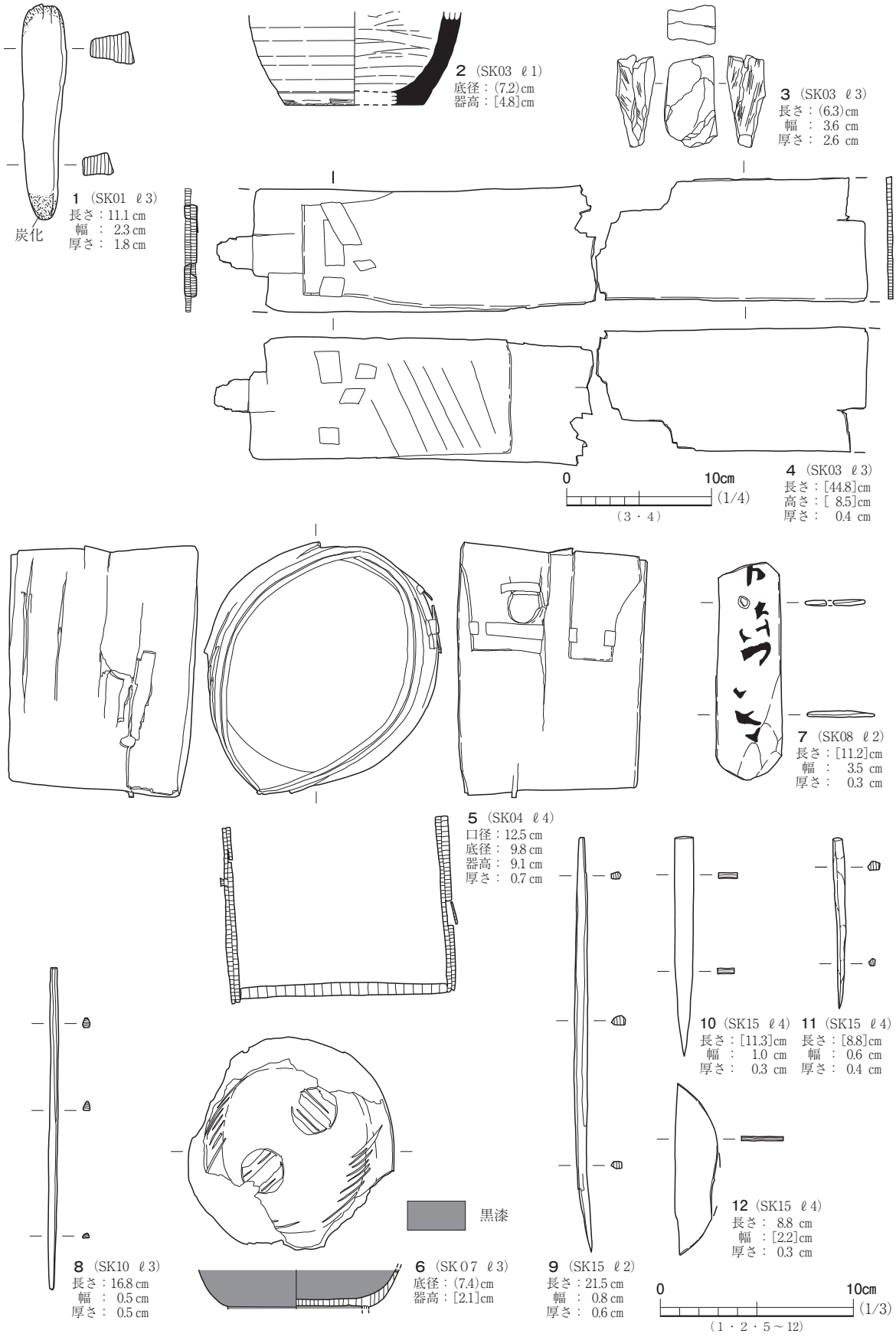


図22　1・3・4・7・8・10・15号土坑出土遺物

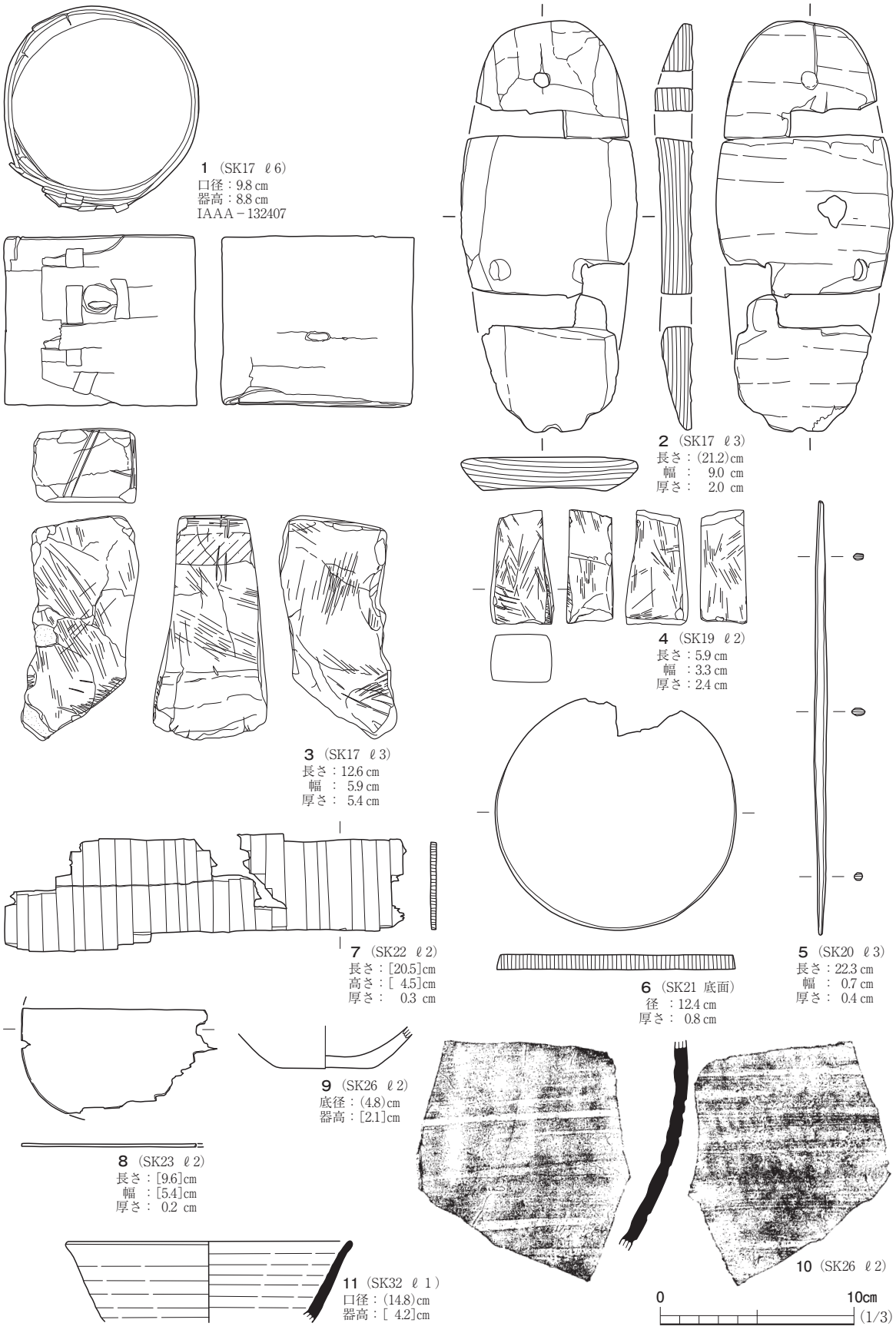
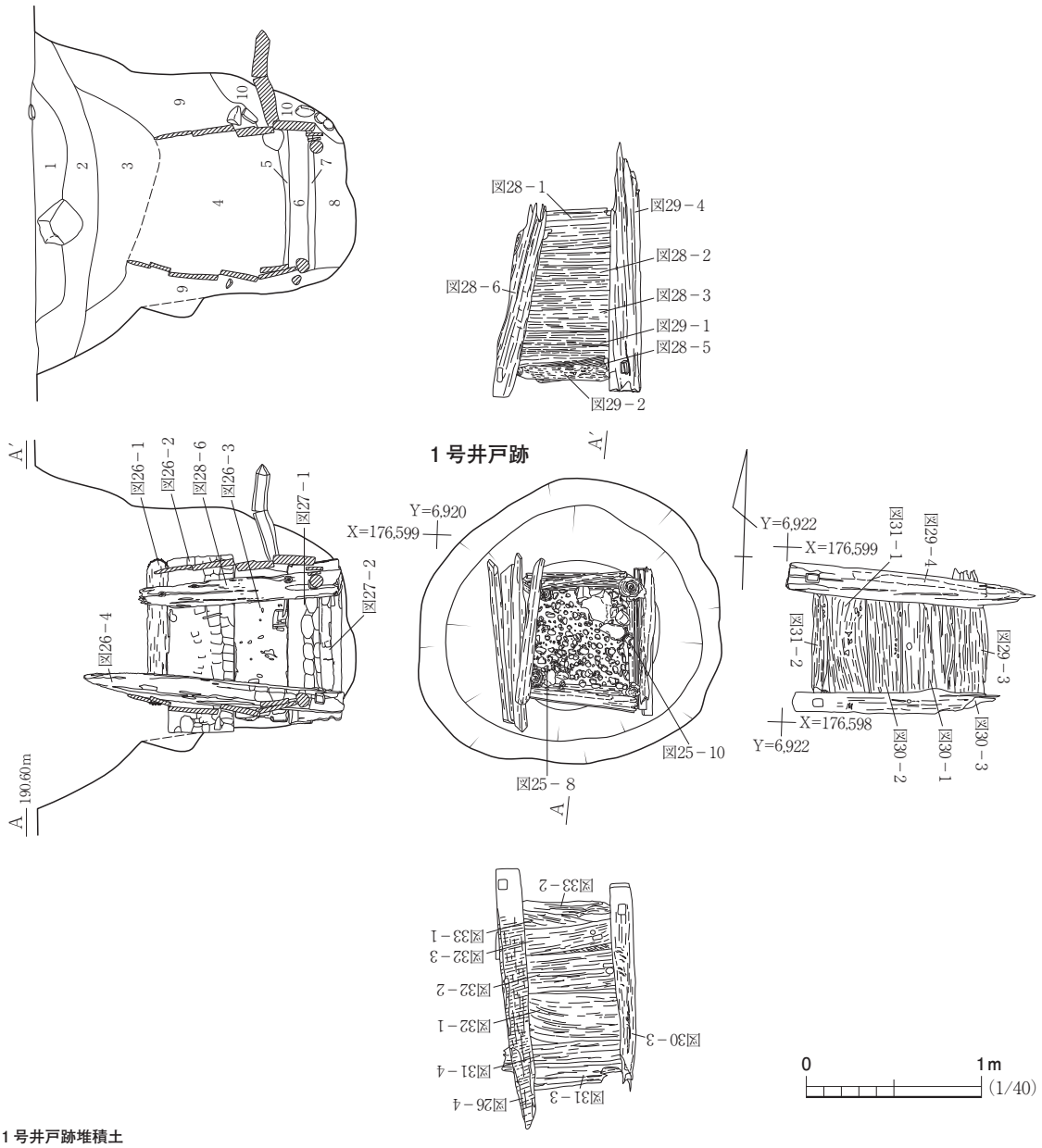


図23　17・19・20～23・26・32号土坑出土遺物

第4節　井　戸　跡

今回調査での本遺跡の井戸跡は1基のみで，Ⅲ区東端近くに位置する。時代・時期は平安時代（9世紀）である。現代の水田耕作土及びその床土である表土を除去し，直下の灰白色土ＬⅡ上面で検出した。井戸の上部構造に関わる小穴・排水溝等の遺構は検出できず，本遺構北西部で検出した掘立柱建物跡群の柱穴の深さが浅いことや後述する井戸側の残存状況も合わせて判断すると，当時の



1号井戸跡堆積土

1　黒褐色土　7.5YR3/2（細・中砂，白色粒子多量）
2　黒色砂質土　10YR2/1（細・中砂，白色粒子，橙色土塊多量）
3　緑黒色粘質土　10GY2/1（細・中砂，白色粒子，橙色土塊微量）
4　緑黒色粘質土　10GY2/1（やや粘性細。細・中砂，白色粒子，橙色土塊微量）
5　砂礫層　（小礫・中～粗砂多量）
6　礫層（拳大の礫2～3段敷く）
7　砂礫層（細～中砂多量）
8　砂礫層（20cm超の礫3段敷く）
9　緑黒色土　5G2/1（粘土と砂の埋め土）
10　にぶい橙色土　7.5YR6/4（細～中砂の埋め土）

図24　1号井戸跡

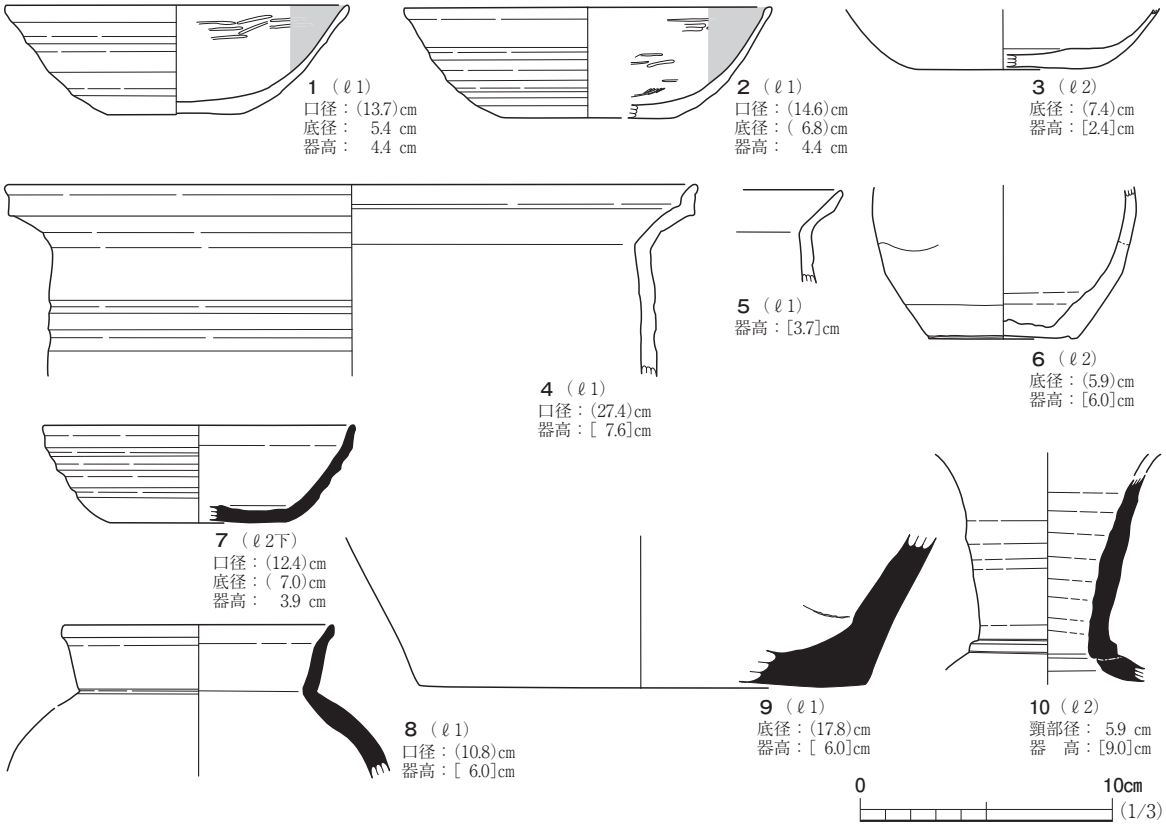


図25　１号井戸跡出土遺物（１）土器

生活面からは，かなり削平されていることがわかる。

本遺構と掘立柱建物跡群については，それらの全部または一部との関連が推定できるが，詳細は後述する。

１号井戸跡　ＳＥ01（図24～33，写真20・55～57）

Ｑ９グリッドに位置し，開口部の径は1.63～1.7ｍで，平面形はほぼ円形である。検出の深さは1.85ｍで，掘形断面は概ね「Ｕ」字形で，上半は大きく広がる２段掘り構造になっているが，後述のとおり，上半部は自然堆積土である。

井戸側（註１　第３章参照以下同）は方形で，大きく分けて３種類の部材からなる。下端近くにほぞ穴を各２か所穿った丸太材図26－４・図28－６・図30－３や割り材図29－４を四隅に柱状に立て（以下，「隅柱」（註２）という。），それを連結する割り材で作った横桟部材（以下，「桟木」（註３）という。）をほぞ穴に差し込んでいる。それで組んだ枠の外側に幅約70～100㎝，高さ約20～40㎝の板材（以下，「側板」（註４）という。）を横にして積み上げ，井戸側を構築している。

井戸側の法量は，西面が幅0.82ｍ，高さ0.79ｍ，北面が幅0.49ｍ，高さ0.77ｍ，東面が幅0.55ｍ，高さ0.87ｍ，南面が幅0.49ｍ，高さ0.93ｍである。（幅は井戸底レベルでの隅柱内法の計測値，高さは側板上端から井戸底５層上面までの残存値である。）

調査方法は，当初検出面から半裁して掘り下げていったが，井戸側内が狭く，作業が困難なことと，

雨や湧水で壁面崩落の危険性も想定できることから，作業の安全と調査を円滑に進めるため，井戸側西面の西側を東西・南北とも約3.5ｍの広さで掘り下げ，断ち割った。

調査の進行に伴い，掘削深度が深くなるようであれば，さらに掘り下げ範囲を広げる予定であった。しかし，結果的に深さ約1.85ｍの掘削で井戸底面が検出でき，深さに対してほぼ２倍の広さの掘り下げとなり，壁面が崩落しても作業者が埋没する危険性がほとんどない状態で調査を進めることができた。

さらに，当初想定した湧水もほとんどなく，雨水の浸透によって部分的な崩落をみただけであった。その部分も土のうの積み上げを行って補強したことで，以後の崩落も起こらなかった。

井戸側西面の側板を外側から検出するとともに，北･南面の中心を結ぶ線で掘形断面も検出した。西面側板を写真撮影・実測後，各板を取り上げ，井戸側内の堆積土を掘削・精査し，北・東・南の各面は，立面展開図作成の必要上，内面側からの写真撮影・実測を順次行った。西面の立面図は，図上での反転実測とした。

堆積土は上端と井戸側内に崩落堆積したものは図24のℓ１～４のみで，黒色系の粘質土や砂質土で占められている。

井壁(註５)と井戸側間の土，ℓ９・10は，構築時の埋め土であり，ℓ９は緑がかった黒色粘土に砂を混ぜたもので，硬く締まっている。

ℓ10は砂層である。地山の砂層と性質はあまり変わらないが，わずかに酸化していることと，地山との境界にℓ９の粒子が散見できることから，埋め土とした。ℓ10は北側枠板と井壁の間の一部で認めることができるのみで，他の部分からは検出できなかった。さらに本土層中とℓ９との境界付近に礫が多く入っている。

この部分の埋め土だけを砂にしたのは，地山に打ち込んだ杭を埋めるために，撒きやすい砂を利用したものと推定している。これは現在でも行っている，上下水管等の埋管時の巻き土として砂または砂質土を使用することと共通している。

井戸底は水溜めのような深掘り部はなく，井戸側の内側に構築層がある。

全体で約40㎝の厚さがあり，４層に分かれている。まず最下層(ℓ８・層厚約23㎝)に拳～径20㎝大の，比較的大きな円礫を概ね３段に積み重ね，その間隙が黒色粘土で埋まっている。この粘土が，構築時に意図的に埋めたものか，ℓ９の埋め土が湧水などで少しずつ溶出・流入して円礫の間に浸透したものであるかは，調査時に判別することはできなかった。

ℓ８の上段(ℓ７・層厚３㎝)には薄く砂を敷き，さらにその上に拳大の円礫を２～３段重ねている(ℓ６･層厚約11㎝)が，間隙には中から粗砂が入っている。これはℓ５の砂が入ったものである。

最上層(ℓ５・層厚３㎝)は，小礫と砂の層である。この上面が使用当時の井戸底であるが，直上から後述の長頸瓶などが出土したものの，構築時や廃棄時の祭祀を示すものはなかった。

以上の構築４層が水のろ過装置として機能していたことが想定できる。

なお，ℓ８の礫間を埋める粘土であるが，濁りの原因になりやすい粘土を間詰めとして利用する

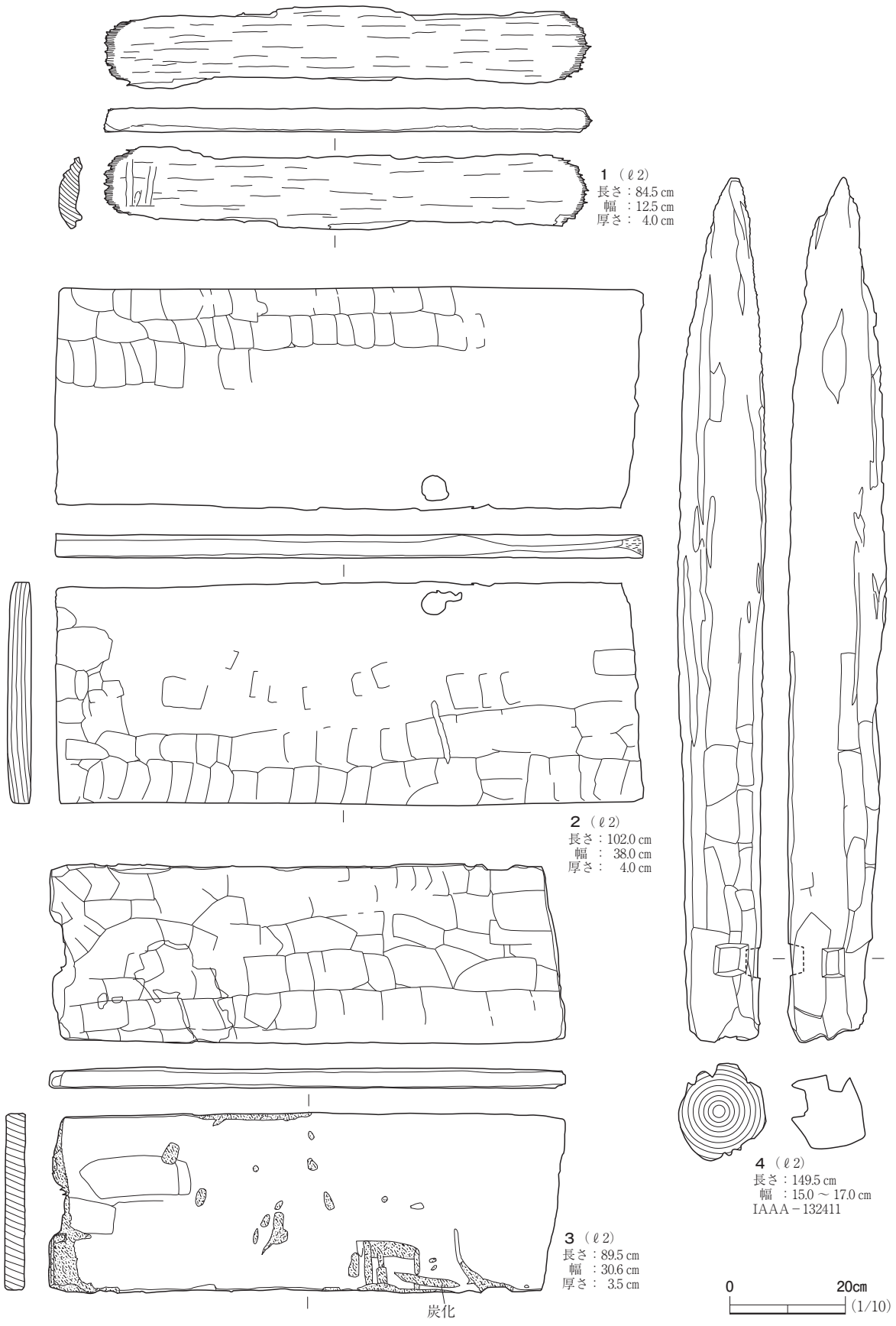


図26　1号井戸跡出土遺物（2）井戸部材

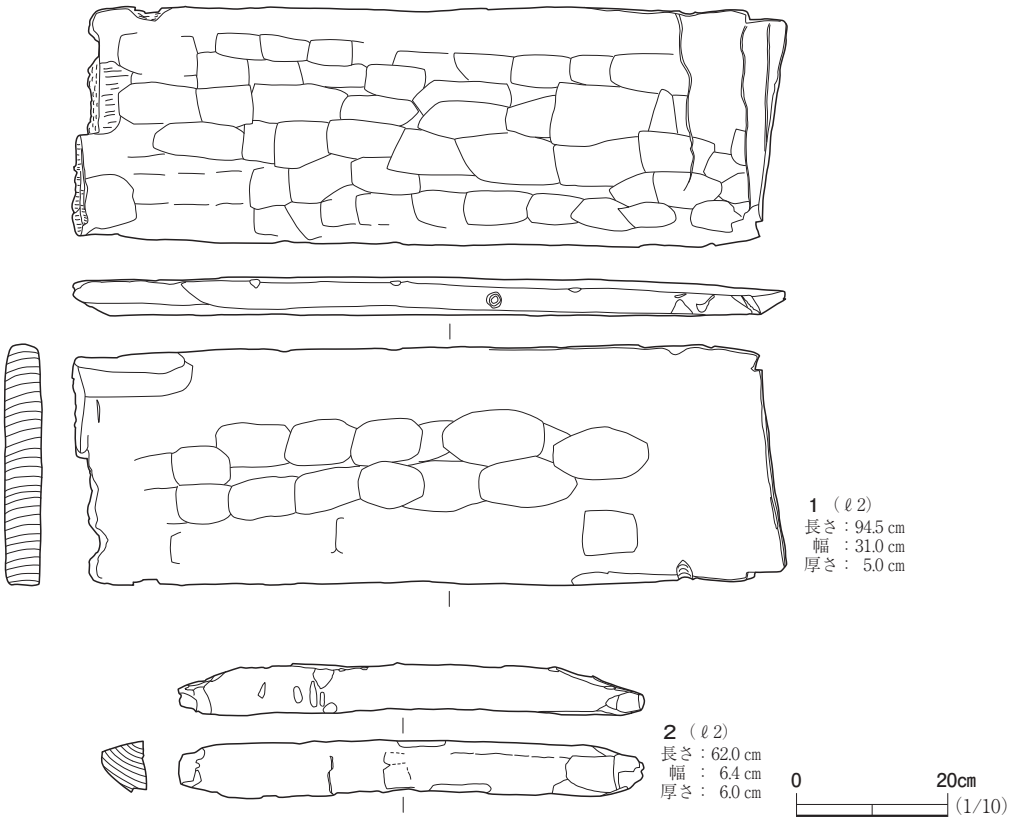


図27　1号井戸跡出土遺物（3）井戸部材

ことは考えにくく，使用するならば砂のほうが適している。ℓ７が砂層であることをから，ℓ８も本来間詰めとして砂を使っていたが，現時点では，溶出・流入したℓ９埋め土が砂と置き換わった可能性が強いと推定している。

さらに，調査中の観察において，ℓ４はℓ５の上に直接堆積しており，廃井までこまめに井戸浚いが行なわれていたことをうかがわせる。

次に井戸側を構成する木製部材について記す。今回の調査では，桟木は隅柱の下端で確認できたのみであるが，腐食によって消滅した上端でも連結して，立方体の枠を形作っていたことが想定できる。

これらの立方体枠の外側に長方形の側板を横にして，残存数で４～６枚積み重ね，井壁との間を既述の粘土と砂を混ぜた土で埋めている。加えて，北面下半には，側板の崩落を防ぐためか，井壁に杭を水平に打ち込み，一方で側板を支えている状況が確認できたが，他の面では検出できなかった。この杭については，既述のとおり，巻き土として砂を利用し，礫も多く入れて補強していることが分かった。さらに，この部分については，井戸側の内面ではあるが，桟木と側板の間に薄い板材を間詰めとして使用しており，他では見られないことから，杭を打ち込んで側板を支える何らかの必要性があったことは間違いなく，その理由として以下のことが想定できる。

- 構築過程での合理的理由がある。
- 湧水等で緊急的に補強の必要があった。

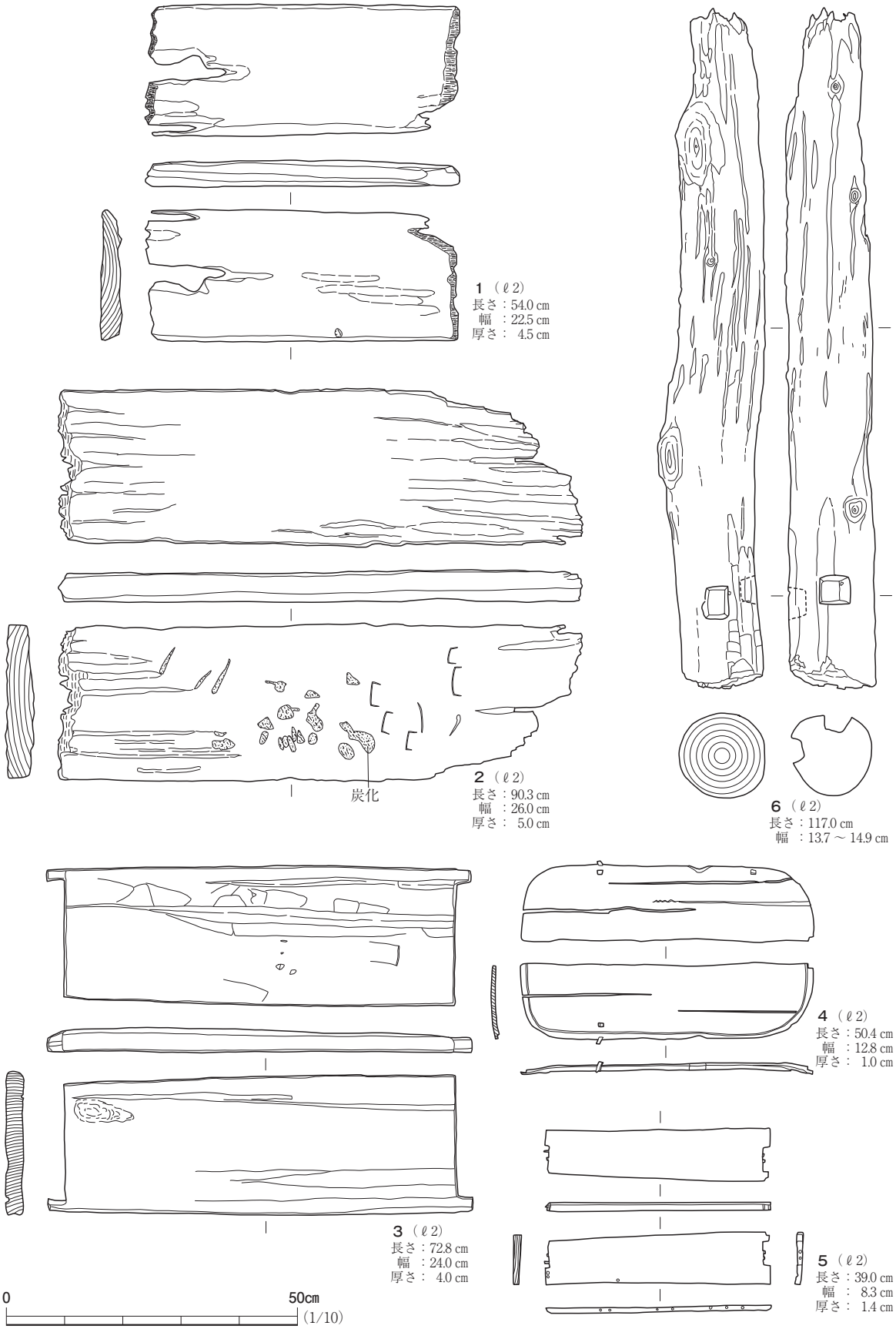


図28　1号井戸跡出土遺物（4）井戸部材

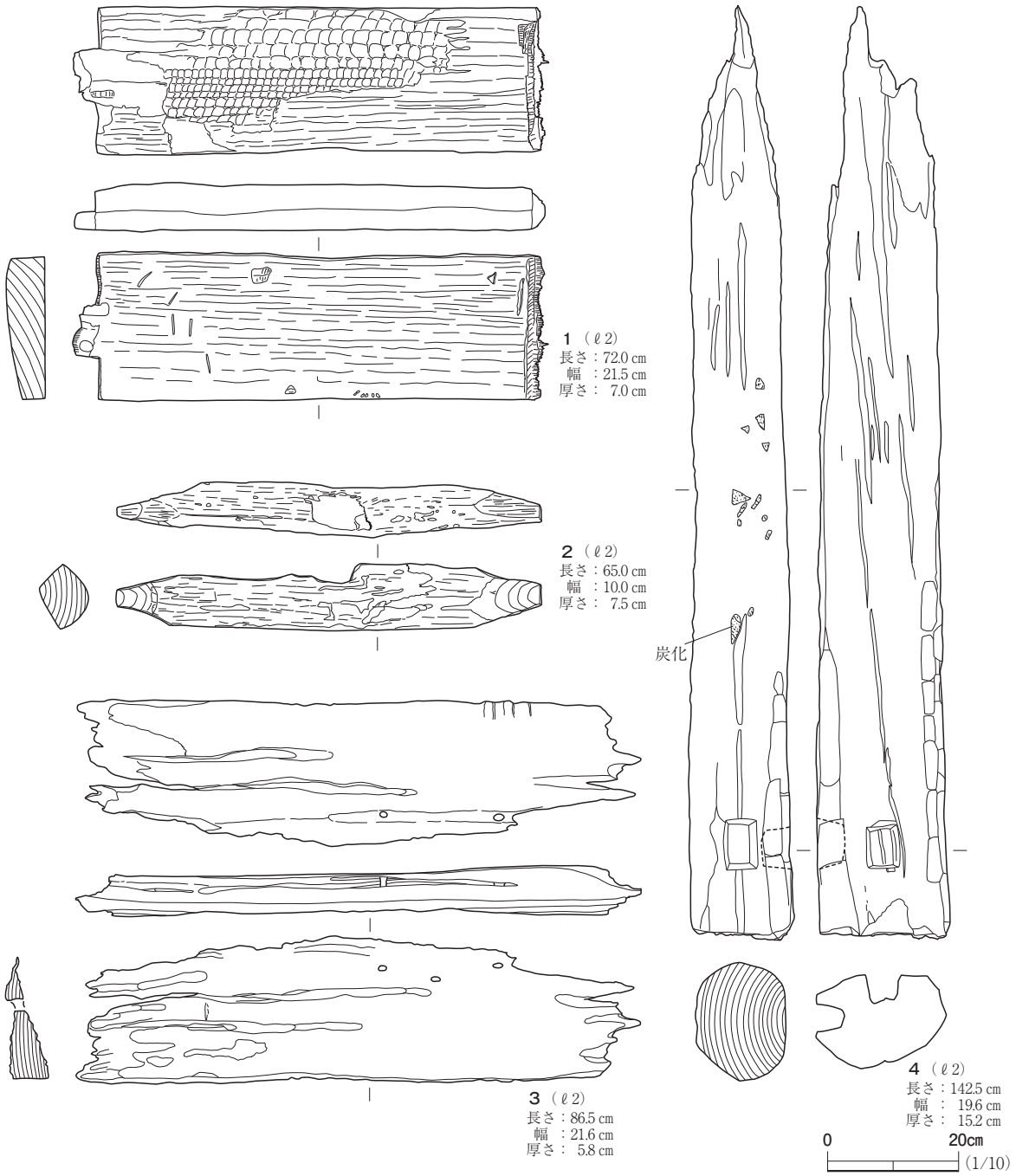


図29　1号井戸跡出土遺物（5）井戸部材

などで，これらについては，さらなる検討の必要がある。

遺物では土師器6点図25－1～6，須恵器4点図25－7～10，井戸側部材28点図26～33を掲載する。図25－6と10は井戸底からの出土で，それ以外は堆積土ℓ1～3中からの出土である。

1・2は杯で，整形・調整は2点とも同様である。底部は回転糸切り離し，外面体部下端はヘラ削り，上半は回転ナデである。内面はヘラミガキで黒色処理をしている。3も杯であるが，磨滅が著しいため，整形・調整とも観察できない。

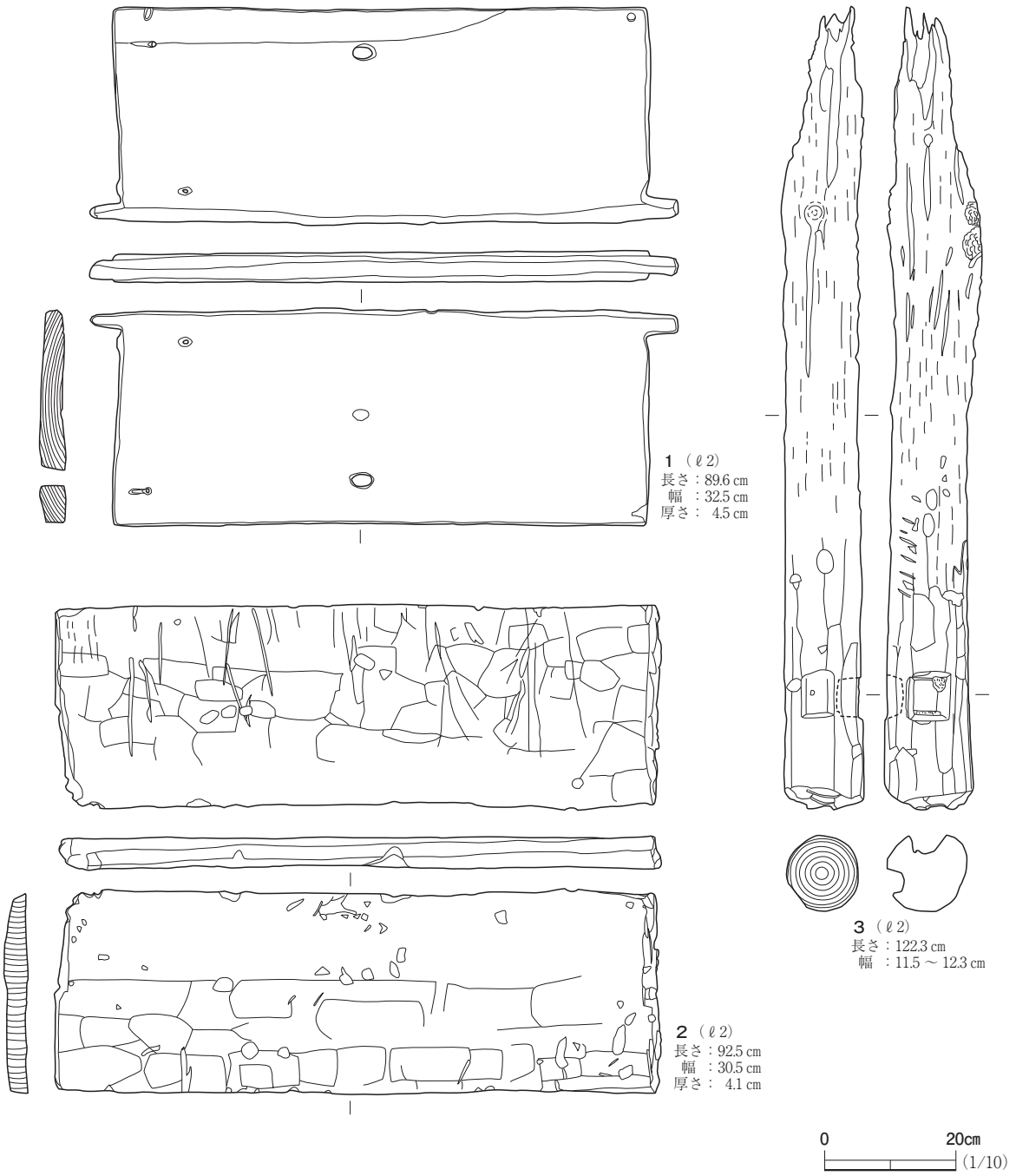


図30　１号井戸跡出土遺物（６）井戸部材

４・５は甕の口縁から体部上端にかけての破片である。４は頸部から口縁部下半にかけて大きく外反し，上半は直立する複合口縁状の甕である。成形は頸部直上で口縁部を貼り付けており，整形は内外面とも回転ナデを施す。５は４のように口縁部上半が直立せず，外上方に短く延びる。整形は４と同じである。

６は小壺または甕の体部下半から底部にかけての破片である。外面体部下端はヘラ削り，それ以外は内外面とも回転ナデである。

７は杯で，底部外面はヘラ削り後，部分的なユビナデを施しているが，他は回転ナデである。

８は広口壺の口縁部から体部上端にかけての破片である。口縁部端はツマミ上げているが，整形は内外面とも回転ナデである。

９は甕底部片である。体部外面は回転ヘラ削り，内面はユビナデを施す。

10は長頸瓶の頸部から体部上端にかけての破片である。頸部内外面と体部外面には灰釉を施してあり，頸屈曲部には，大戸窯跡に特徴的な突帯を廻らせる。

本遺構で使用している井戸側部材は，ほとんどが建物や容器などに使われていたものの転用部材である。以下，個々の特徴について概述する。

まず隅柱は，樹種の特定ができていないものもあるが，クリが多い。残存長は117～149.5㎝，基底部のほぞ穴付近の太さは，大きいもので16.5～19.7㎝，小さいもので11.3～12.4㎝を計り，周辺は手斧等で面取り加工を施している。ほぞ穴は鑿で穿ってあり，開口部の長さは４～7.7㎝，幅は4.3～6.4㎝，奥行きは2.5～4.4㎝である。上端は腐食によって芯だけが残って尖ったり，逆に芯がなくなって空洞になったりしているが，何れも元々は柱や梁材といっ

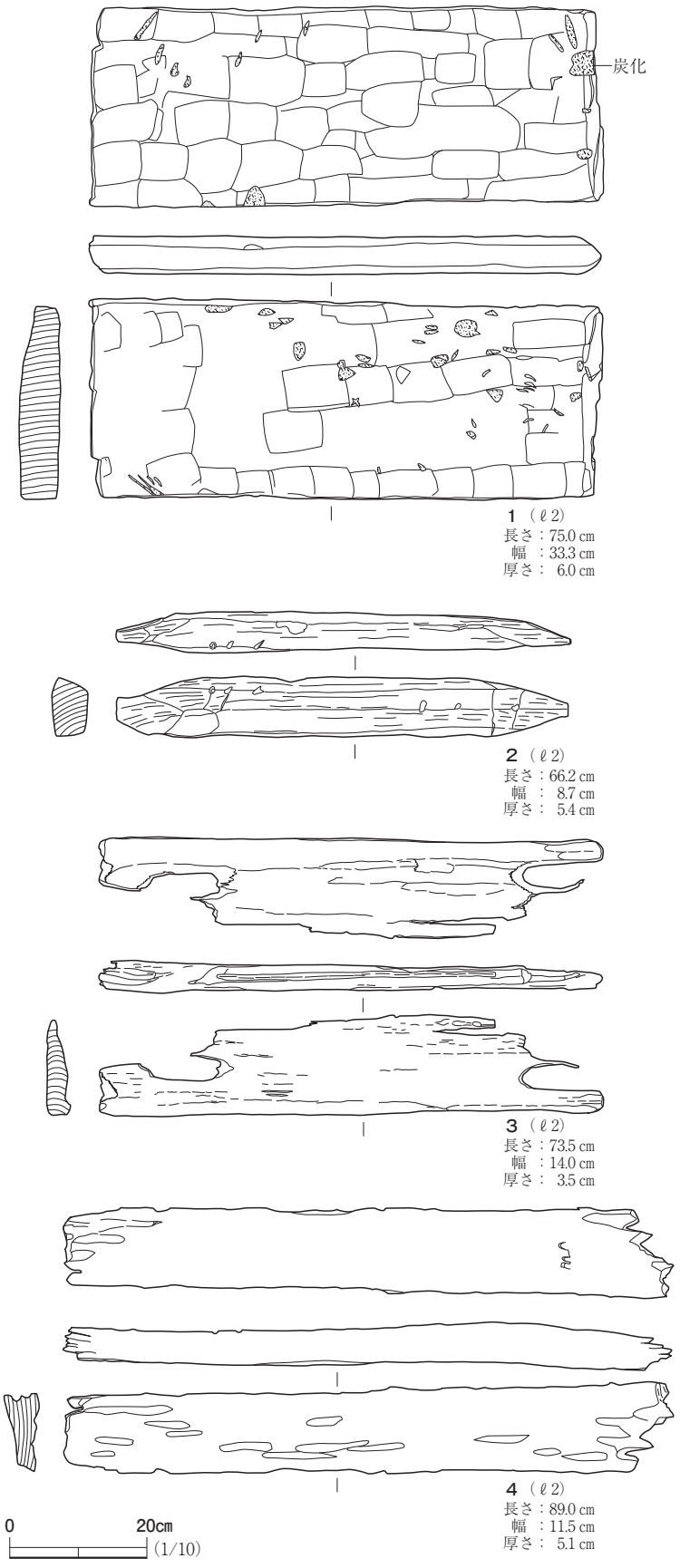


図31　１号井戸跡出土遺物（７）井戸部材

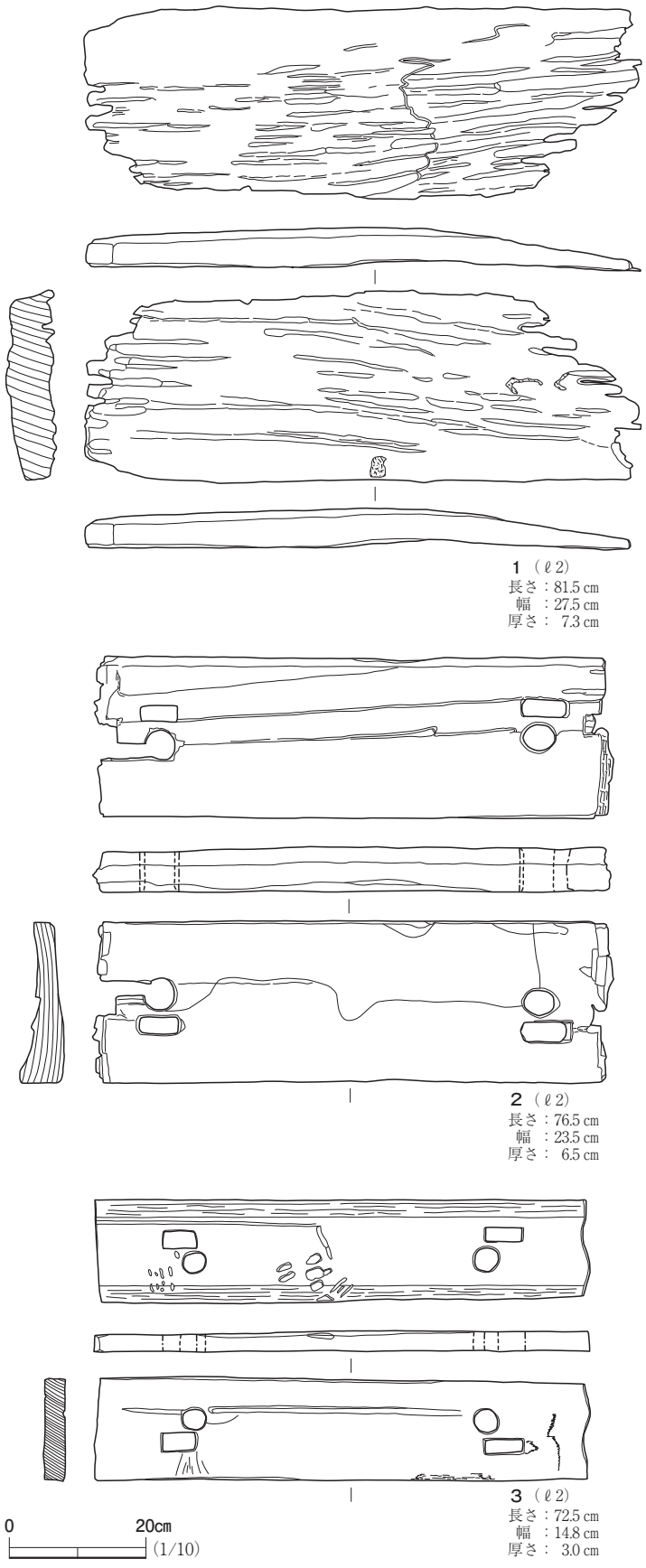


図32　1号井戸跡出土遺物（8）井戸部材

た建物の建築部材からの転用と推定できる。

桟木は4点図27－2・図29－2・図31－2・図33－2とも丸太を4分割したような割り材を利用しており，樹種はクリが多い。両端は隅柱のホゾ穴に挿入しやすいよう，杭先状に尖らせている。長さは62～66.2㎝，幅6.4～10㎝，厚さ5.4～8㎝である。

側板は，長さが39～102㎝，幅8.3～38㎝，厚さ1～7.3㎝を計る。樹種は未同定のものもあるが，クリを中心にスギ・ヒノキ・コナラ等がある。

このうち，図28－4・5は長方形曲物の底板および箱の側板の転用で，北面側板と桟木図29－1・2の間詰めとして使用しており，他の側板よりも小さく，薄い。

その他，図33－1の側板は，南面側板と桟木図32－3・図33－2の隙間を外側から覆うように配置しており，大きさは他の側板とあまり変わらない。しかし，非常に薄くこれも上記2点と同じように，間隙を埋める補強材と捉えたい。表面の仕上げも丁寧で，建築部材以外のものを想定する必要がある。

他の側板は，厚さが3㎝以上あり，大半は4～6㎝の範囲におさまる。他の特徴として，各面とも最上段のものは，幅が狭く，非常に腐食が進んでいることがわかる。これより下

は板幅も広く，残存状態がきわめてよい。加えて，本報告で図示はしなかったが，井戸側内に落ち込んでいた，側板の可能性のある板材はいずれも幅が狭く，厚みのないものである。これらのことから，井戸側下半は大きく厚みのある板材で上からの重圧を支え，上半は重量の軽い板材で下方への圧力を軽減していたと推定できる。

側板の中には，両端に突起状軸を持つ扉板図28－3・図30－1やその軸受枠板図31－3，図32－2・3，小口に枘組みの突起を持つものといった，明瞭に転用材とわかるもののほか，加工痕として手斧痕を残す板図26－2・3，図27－1，図31－1も多く含まれ，厚みのある大きな板は，壁板などの建築部材であった可能性が高い。

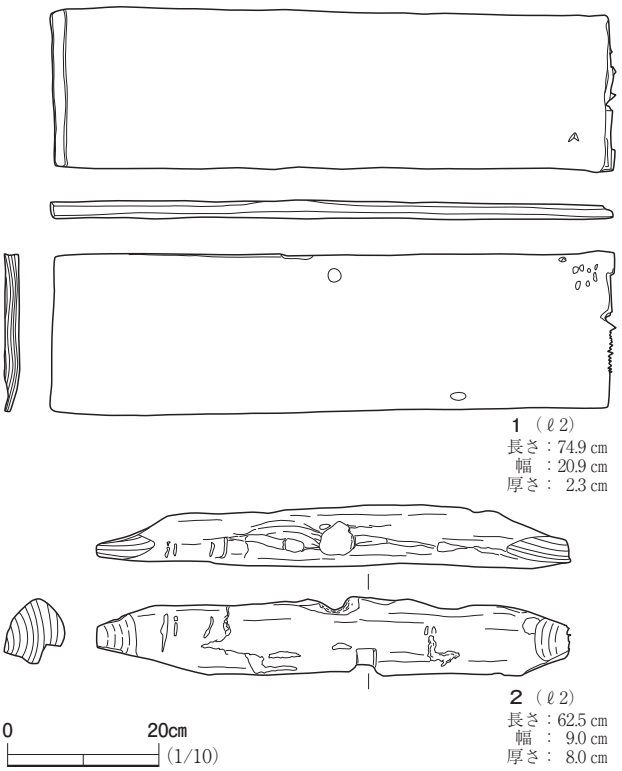


図33　1号井戸跡出土遺物（9）井戸部材

このように，側板はほとんどが転用材であるが，転用にあたって長さを調整するために，突付とよばれる，繊維直交方向に鑿で切断したのではないかと推定できる小口を持つものがある図26－2・図27－1・図29－1・図30－2・図31－1。

それ以外に，表面が大きく焼け焦げているもの図29－1や部分的に火を受けているもの図26－3・図31－1のほか，転用前に受けた生活痕または製材中の手鉤による傷跡図28－2・図30－2等を持つものなどがある。　（作　田）

第５節　周溝状遺構

今回の調査では，調査区内で溝跡が25条検出されているが，他に周溝状遺構が１基検出されている。

１号周溝状遺構（図34，写真25）

１号周溝状遺構は，Ⅱ区北西のＦ・Ｇ３グリッドで検出された。北側が調査区北壁にかかっており調査区外に延びるが，検出時の形態が環状の一部を呈していた。そこで，今回は，溝ではなく周溝状遺構として報告した。周辺には南側に13号溝跡，その更に南側に12号溝跡が位置している。遺構周辺は，平坦でＬⅡが明瞭に露呈している地区となっており，１号周溝状遺構はそのＬⅡ上面で検出された。調査区外壁には，調査の作業工程上，排水溝をめぐらしており，本遺構はその断面にもかかっていた。

遺構の全長は，西側排水溝端部から東側排水溝端部までで5.8ｍとなっている。平面形は，北西側が急な形で，南東側が緩やかな形で曲がる形状を呈している。北西部と中央より東側で広くなっており，その幅は40㎝となっている。また，東端が狭くなっており，その幅は25㎝となっている。溝跡の断面形は，Ｕ字形を呈しており，検出面からの深さは10～20㎝となっている。溝跡内の堆積土は黒色粘質土１層で，堆積状況は自然堆積と考えられる。

遺物は，堆積土中から須恵器の細片が出土している。図示した資料は甕の体部で，外面にタタキ痕が残っている。

本土坑の時期は，出土遺物と堆積土より建物跡群と同じ平安時代９世紀であると推定されるが，その性格については不明である。　（藤　谷）

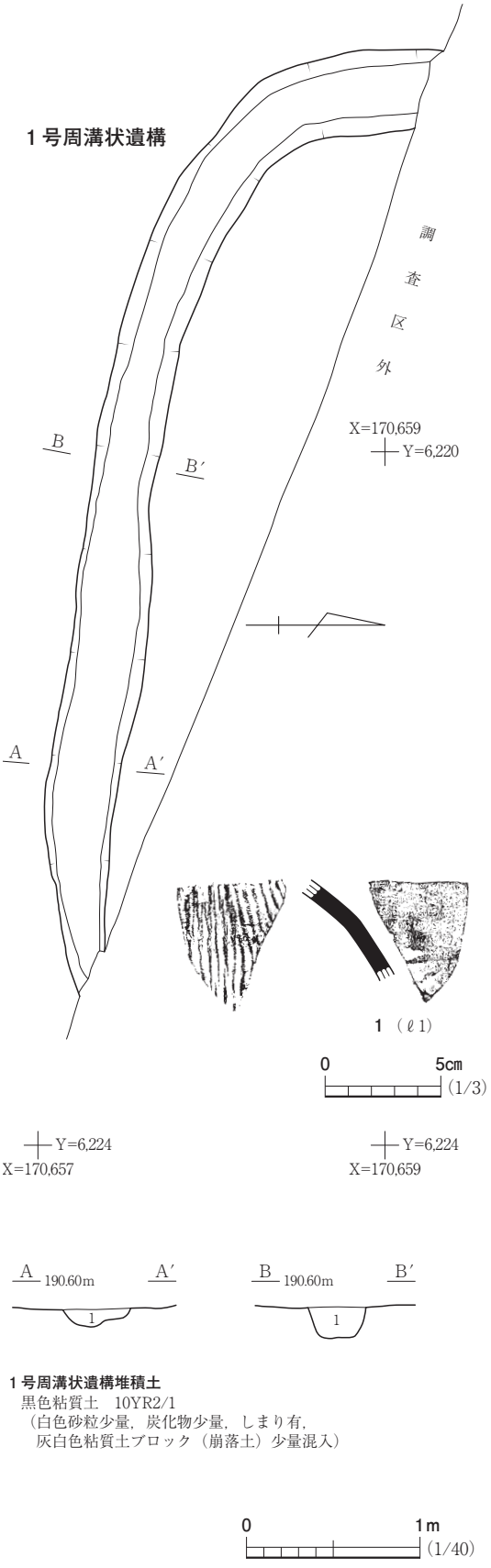


図34　１号周溝状遺構，出土遺物

第6節　　溝　　跡

今回の調査では，合計25条の溝跡が検出されている。このうち，古代のものと思われるのが，10・12～14号溝跡で，古代から中世のものと思われるのが6号溝跡である。他については，近世以降のものであると思われる。

1号溝跡　ＳＤ01（図35～37，写真21・54）

Ｉ区の北西隅，Ａ１・Ｂ１グリッドに位置する。検出面はＬⅡ上面である。南側で２号土坑と重複しており，本溝跡のほうが新しい。主軸方向はＮ15°Ｅで，南側流路の３号流路跡とはほぼ同じ方向に流れている。

検出された溝跡の長さは4.6ｍで，東西とも調査区外に延びるが，東端で北へ曲がるものと思われる。幅は1.2ｍ前後，検出面からの深さは33㎝で，壁はなだらかに立ち上がる。底面は中央が平坦で標高差はほとんどない。底面南寄りには1.5ｍの間隔で２本の杭が打たれている。堆積土は２層に分層したが，レンズ状の自然堆積である。

遺物は，図37－１の椀１点を図示した。他に須恵器細片なども出土しているが，堆積土の特徴やℓ２から染付の碗が出土していることから，近世以降の溝跡であると考えられる。　　（佐　藤）

2号溝跡　ＳＤ02（図35～37，写真21）

Ｉ区西側の中央北，Ｂ１～４グリッドに位置する。検出面は１・３号流路跡及び２号流路跡氾濫部の最終堆積土ℓ１上面である。東側には近接して３・４号溝跡が南北に延びる。

検出された溝跡の長さは32.1ｍである。北端は３号流路跡堆積土の中央付近で西に折れて消失する。南端については１号流路堆積土部分の表土除去の際に削ってしまったが，西側の調査区境に溝跡の断面が確認されており，わずかにカーブしながら調査区外へ延びていく。幅は北側では２ｍほどあるが，南側は1.1ｍと狭くなる。底面は中央が平坦で，壁はなだらかに立ち上がる。検出面からの深さは33㎝で，底面のレベルは南側がわずかに低い。堆積土は基本的に上層の砂層と下層の黒褐色土の２層で，自然堆積と考えられる。

遺物は図37－２～８の６点を図示した。２は土師器で古墳時代中期の高杯脚部，３～５は須恵器で，３は瓶の高台底部，４・５は甕の胴部破片で，４は外面タタキとカキメ，内面カキメ，５は外面タタキ，内面同心円文の当具痕が残る。６は赤褐色の陶器の擂鉢破片である。７・８は木製品で，７は楕円形の頭部を作り出し，先端をやや尖らせた棒状のもの，８は両端の上部を削って丸みを作り出し，下部に四角の孔をあけた薄い板材である。このほか土師器や須恵器の細片も少量出土しているが，検出面から平安時代の流路が完全に埋没した後の溝であること，破片ではあるが６などの近世陶器が出土していることから，近世以降の溝跡と考えられる。　　（佐　藤）

図35　溝跡位置図（1）1～6・10～12号溝跡

３～５号溝跡　ＳＤ03～05（図36・37，写真21・22・58）

３～５号溝跡については，調査当初，試掘調査のトレンチで切れていたことから，別々の溝跡として扱ったが，調査の結果，堆積土の特徴や出土した遺物などから，調査区内を南から北にＳ字状に流れる同一溝跡で，調査区内総延長70ｍであることが明らかとなった。

３号溝跡とした部分は，Ⅰ区北西，Ｃ１～３・Ｂ３グリッドに位置する。検出面は２号流路跡ℓ１上面である。北側は調査区境から試掘調査で切れている南側Ｂ３グリッドの部分までで，長さは14.8ｍである。幅は70㎝で，Ｃ２グリッドの中央付近で２ｍほど北西に延びる。検出面からの深さは北側の残りの良いところで33㎝である。底面は中央が平坦で，壁はなだらかに立ち上がる。

溝の底面の標高差は概ね10㎝ほど南側が高く，南から北へ流れていたと考えられる。

４号溝跡とした部分は，Ⅰ区の中央西側，Ｂ３・４，Ｃ４グリッドに位置する。検出面は２号流路跡氾濫部の最終堆積土ℓ１上面である。北側は試掘調査のトレンチで上面が削られており，３号溝跡の南端まで2.5ｍほど溝跡は消えていること，Ｂ３グリッド中央で先端が若干北西に折れていることから，当初別の溝跡として扱った。南側は試掘調査のトレンチにより大きく削られているが，ほぼ中央で，南から南南東にやや方向を変えている。検出された長さは12.5ｍ，幅は65㎝で，検出面からの深さは23㎝である。底面は中央が平坦で，壁はなだらかに立ち上がり，断面は扁平な逆台形である。溝底面の標高差はほとんど認められない。

５号溝跡とした部分は，Ⅰ区の中央南側，Ｃ５，Ｄ５～７，Ｅ６・７グリッドに位置する。検出面は１号流路跡及び２号流路跡氾濫部の最終堆積土ℓ１上面である。北端は試掘調査のトレンチで切られており，４号溝跡とした南端からは11ｍほど欠失している。１号流路跡の右岸と平行して，２ｍほどの間隔で南東（Ｎ50°Ｗ）にはしり，Ｄ・Ｅ６グリッドの中央付近で，南に方向を変え，調査区外まで延びる。幅は100㎝前後，検出面からの深さは33㎝である。溝底面の標高は，南東方向にはしる北側はほぼ同じ高さであるが，南北に方向を変える南側では，14㎝ほど南側が高く，南から北に向かって流れがあったものと考えられる。

３～５号溝跡の堆積土については，基本的には上層の砂層と下層の黒褐色粘質土の２層で，自然堆積と考えられる。４号溝跡とした部分では，最下層に薄い砂の堆積層がみられる。

出土遺物は，３号溝跡は銭貨２点，４号溝跡は陶器の破片と砥石の２点，５号溝跡は全面炭化物の付着した円礫の半欠品との煙管の雁首の２点を図示した。図37－９は北宋銭の「政和通寶」，10は「寛永通寶」の文銭（新寛永）である。11は外面がにぶい橙色の甕の底部，12は凝灰岩製の砥石で表面の剥落が著しい。ほかに，３号溝跡からは土師器２点・須恵器６点，擂鉢などの陶磁器11点の細片，４号溝跡からは漆器の椀の細片，５号溝跡からは土師器・須恵器の細片14点，擂鉢などの陶磁器破片９点，木製品の細片６点が出土している。

本溝跡については，検出面が平安時代の１・２号流路跡が完全に埋没した後の堆積土を掘り込んでいること，出土遺物に近世陶器が一定量含まれることから近世以降の溝跡と考えられる。（佐　藤）

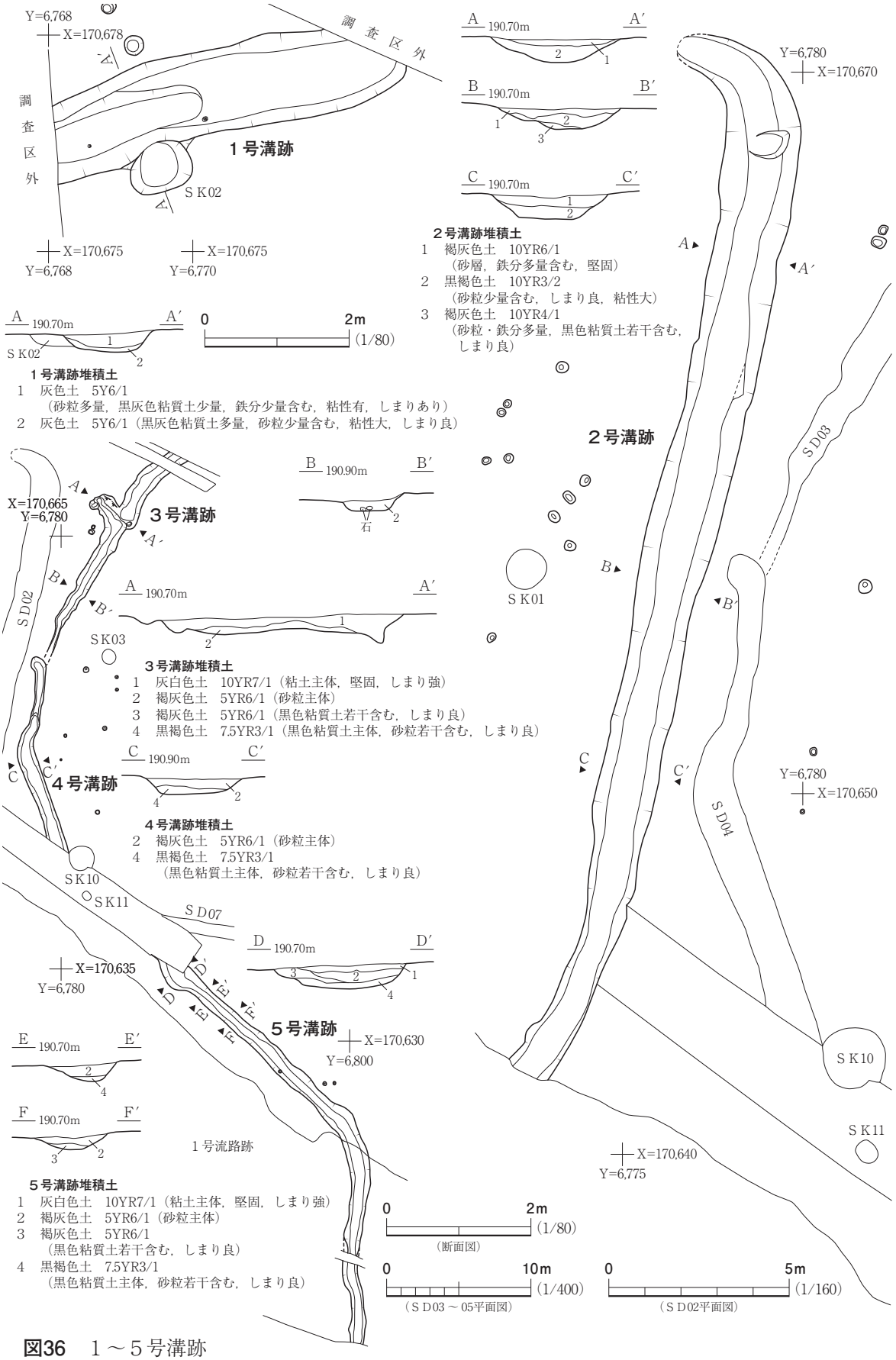

Y=6,768
X=170,678
調査区外
調査区外
1号溝跡
SK02
X=170,675
Y=6,768
X=170,675
Y=6,770
A 190.70m A′
B 190.70m B′
C 190.70m C′
2号溝跡堆積土
1 褐灰色土 10YR6/1
（砂層，鉄分多量含む，堅固）
2 黒褐色土 10YR3/2
（砂粒少量含む，しまり良，粘性大）
3 褐灰色土 10YR4/1
（砂粒・鉄分多量，黒色粘質土若干含む，しまり良）
A 190.70m A′
SK02
0 2m
(1/80)
1号溝跡堆積土
1 灰色土 5Y6/1
（砂粒多量，黒灰色粘質土少量，鉄分少量含む，粘性有，しまりあり）
2 灰色土 5Y6/1（黒灰色粘質土多量，砂粒少量含む，粘性大，しまり良）
Y=6,780
X=170,670
2号溝跡
SD03
SK01
X=170,665
Y=6,780
3号溝跡
B 190.90m B′
石
A 190.70m A′
SD02
SK03
3号溝跡堆積土
1 灰白色土 10YR7/1（粘土主体，堅固，しまり強）
2 褐灰色土 5YR6/1（砂粒主体）
3 褐灰色土 5YR6/1（黒色粘質土若干含む，しまり良）
4 黒褐色土 7.5YR3/1（黒色粘質土主体，砂粒若干含む，しまり良）
C 190.90m C′
4号溝跡
4号溝跡堆積土
2 褐灰色土 5YR6/1（砂粒主体）
4 黒褐色土 7.5YR3/1
（黒色粘質土主体，砂粒若干含む，しまり良）
SK10
SK11
SD07
D 190.70m D′
X=170,635
Y=6,780
5号溝跡
X=170,630
Y=6,800
E 190.70m E′
F 190.70m F′
1号流路跡
5号溝跡堆積土
1 灰白色土 10YR7/1（粘土主体，堅固，しまり強）
2 褐灰色土 5YR6/1（砂粒主体）
3 褐灰色土 5YR6/1
（黒色粘質土若干含む，しまり良）
4 黒褐色土 7.5YR3/1
（黒色粘質土主体，砂粒若干含む，しまり良）
SD04
Y=6,780
X=170,650
SK10
SK11
X=170,640
Y=6,775
0 2m
(1/80)
（断面図）
0 10m
(1/400)
（SD03～05平面図）
0 5m
(1/160)
（SD02平面図）

図36　1～5号溝跡

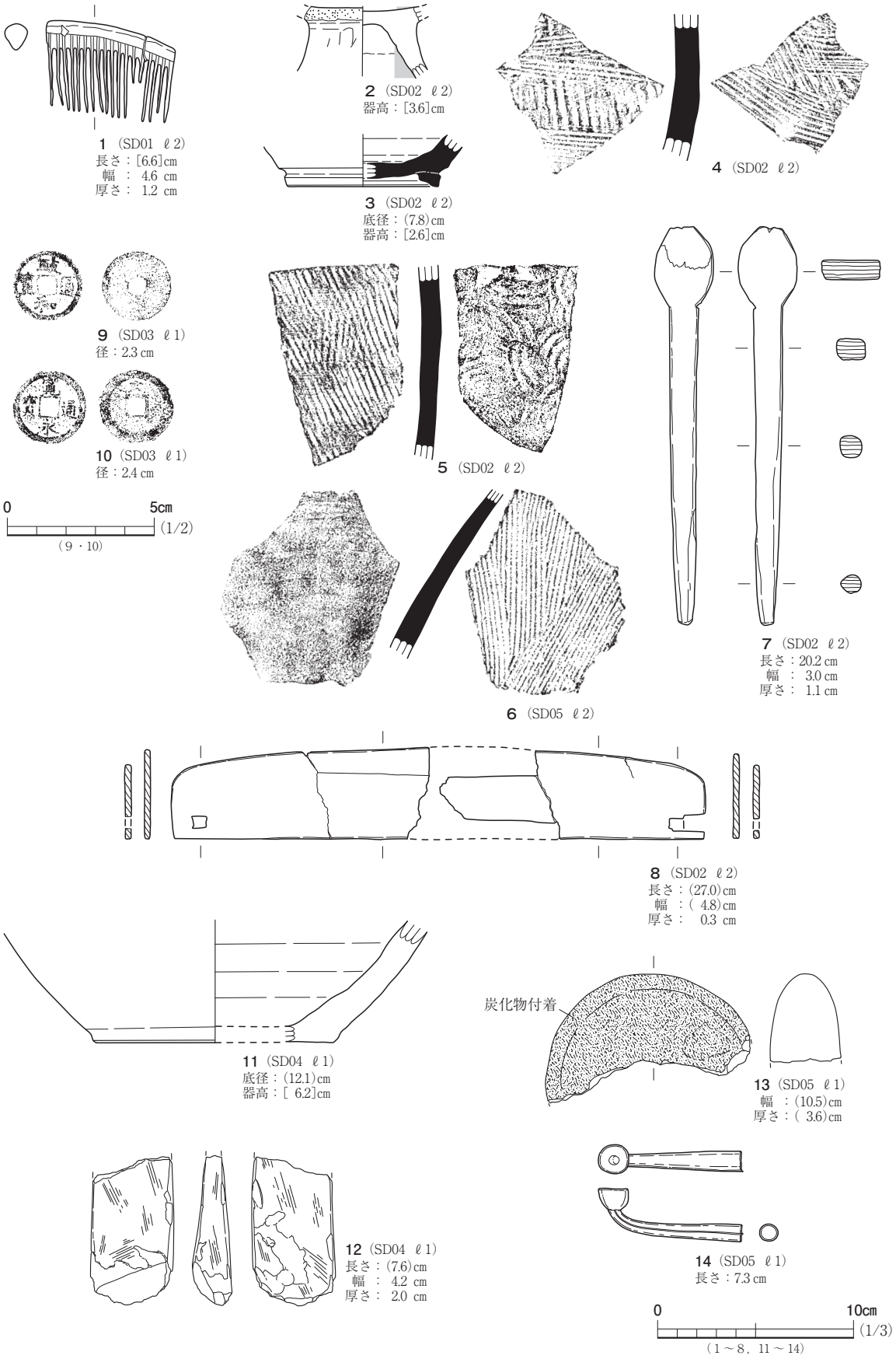


図37　1～5号溝跡出土遺物

６号溝跡　ＳＤ06（図38・39，写真22・23・47・52）

Ⅰ区の東側，Ｅ２～６グリッドに位置する。検出面は，北半はＬⅡ上面，南側は２号流路跡ℓ１上面である。南側のＥ５グリッド中央で７号溝跡と重複するが，本溝跡のほうが古い。なお，東側農道部分は稲の刈入後，調査を行った。

検出された溝跡の長さは37ｍで，主軸方向はＮ10°Ｅである。北側は調査区外へ延び，南側は７号溝跡と重複する南側付近から不明瞭となり，２号流路跡の氾濫部のＥ６グリッドで消える。幅は1.2ｍ前後で，北側は農道下であったためか上端が潰れている部分が多い。検出面からの深さは北側で54㎝あるが，南側は徐々に浅くなっていく。底面は中央が平坦で，壁はなだらかに立ち上がり，断面は逆台形である。溝底面の標高は北端に比べ南側のＥ５グリッド中央付近で20㎝ほど浅く，南から北へ流れがあったものと考えられる。堆積土は基本的には３層で，黒色粘質土を主体としており，自然堆積である。

遺物は須恵器破片２点と木製品２点を図示した。他に土師器８点，須恵器５点の細片が出土している。図38－１は須恵器甕の頸部，２は胴部の破片で，外面はタタキの痕跡が残っている。４は両端が焦げている火付木，３は高台をわずかに削りだした漆器の椀の破損品で，内外面黒漆で仕上げられ，内面に赤漆で文様が描かれている。

時期は，南側が２号流路跡の堆積土上面で確認されているが，南へいくほど不明瞭になること，堆積土の特徴が近世以降の１～５号溝跡とは異なり古代から中世の堆積土に近似すること，破片も含め出土遺物に近世以降のものを含まないことなどから，１号流路跡に合流する古代ないしは中世の溝跡と考えられる。　（佐　藤）

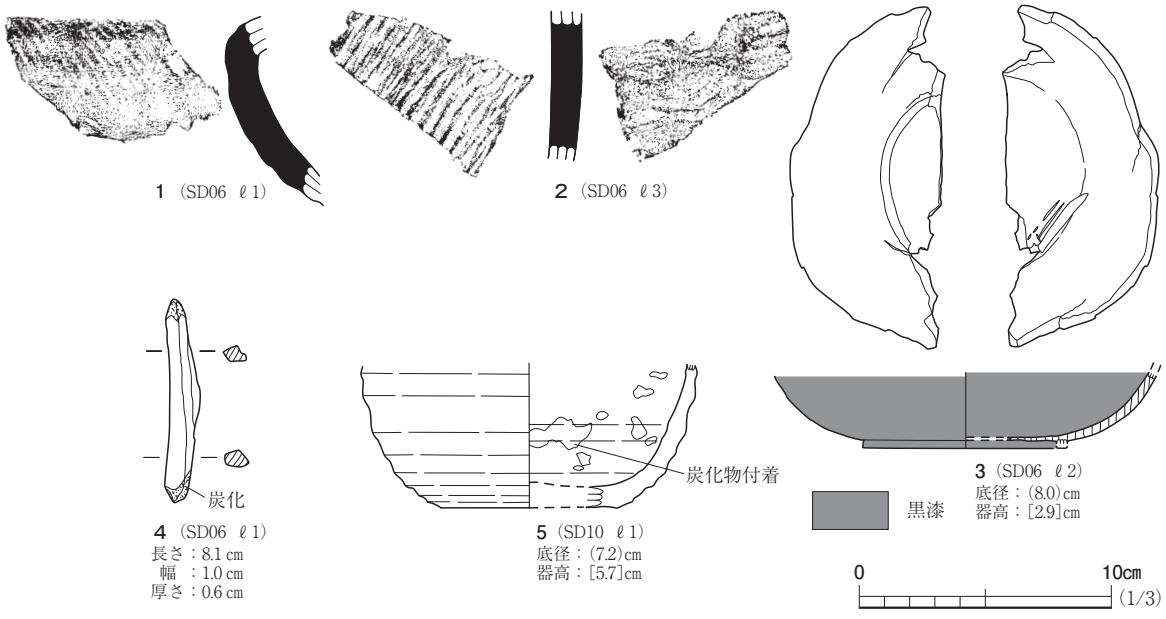


図38　６・10号溝跡出土遺物

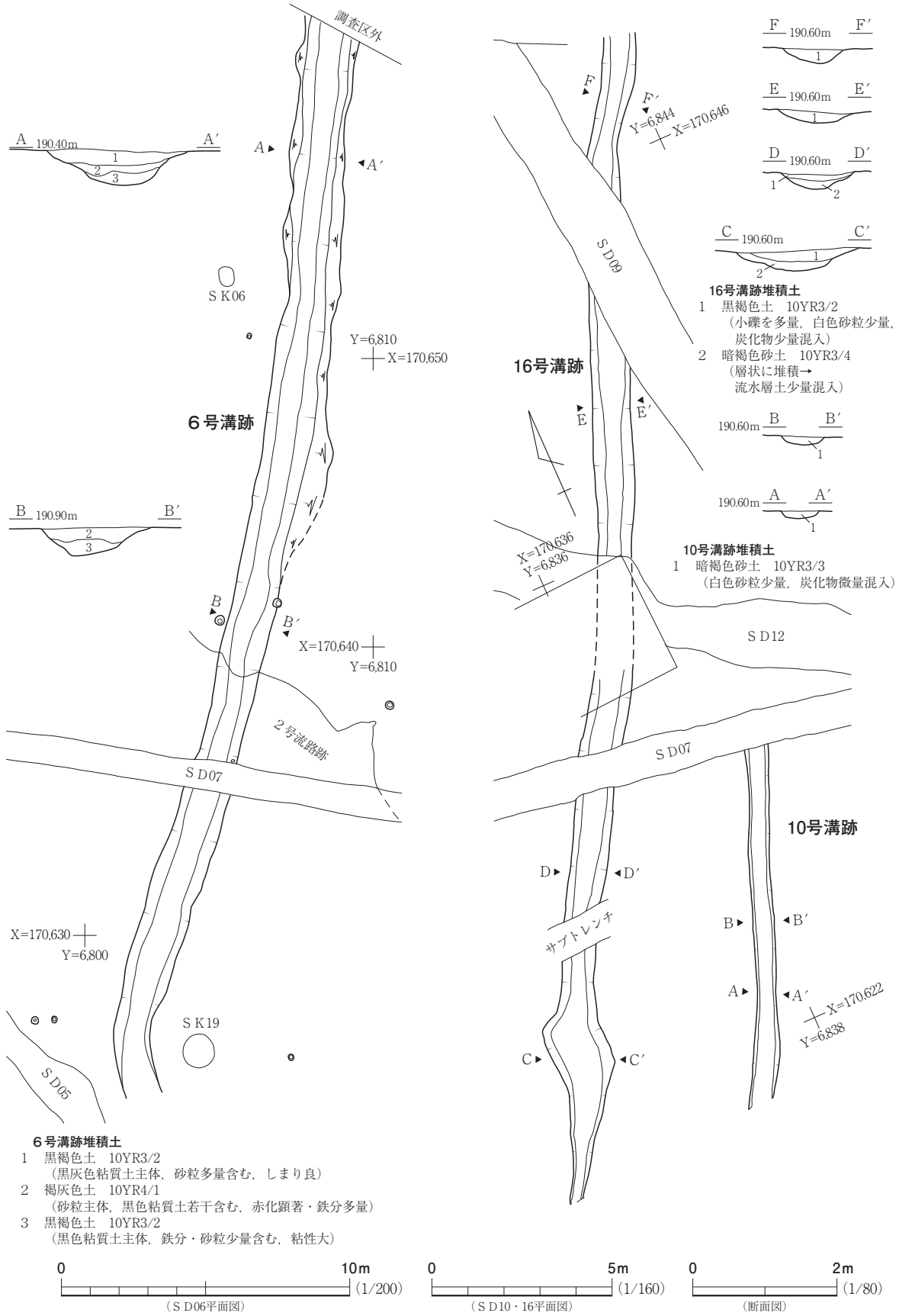


図39　6・10・16号溝跡

10号溝跡　ＳＤ10（図38・39，写真23）

10号溝跡は，Ⅱ区中央よりやや西側で検出された溝跡で，７号溝跡と重複関係にあり，それに切られている。周辺には西側５ｍ付近に本溝跡と並行するように16号溝跡が位置している。遺構検出面は沢部に堆積している黒褐色土上面となっている。

その規模は，長さ9.5ｍであり，上部の幅が52～72㎝である。断面形は鍋底形を呈し，検出面からの深さは最深部で11㎝である。溝底面の高さは南側が北側より高く，北流していたと思われる。溝跡内には白色砂粒を含む暗褐色砂土１層が堆積しており，堆積状況は自然堆積と考えられる。

遺物は，堆積土からロクロ土師器が出土している。図38－５に図示した資料は，ロクロ土師器甕の底部で内面には炭化物が付着していた。

本溝跡は，検出面がＬⅢ上面で，16号溝跡と並行するところから，それと同時期の所産と思われる。出土遺物に中・近世以降のものを含まないところから，古代の遺構と考えられるが，その性格については不明である。（藤　谷）

11号溝跡　ＳＤ11（図40・41，写真23）

11号溝跡は，Ⅱ区の調査区北壁より，Ⅲ区南壁に向かって，北西から南東方向に真っ直ぐ延びる全長82ｍの溝跡である。９・12・23号溝跡と重複関係にあり，12号溝跡を切り，９・23号溝跡に切られている。遺構検出面はＬⅢ上面となっている。

溝跡上部の幅は36～64㎝である。断面形は鍋底形から逆台形を呈し，検出面からの深さは最深部で29㎝である。溝底面の高さは北西側が南東側よりわずかに高く，その比高差は５～10㎝で，北流していたと考えられる。

遺物は，堆積土からロクロ土師器と須恵器が出土している。図40に図示した資料は，１・２が須恵器長頸瓶の口縁部と底部の破片，３が古墳時代の土師器甕の口縁部，４が土師器筒形土器の口

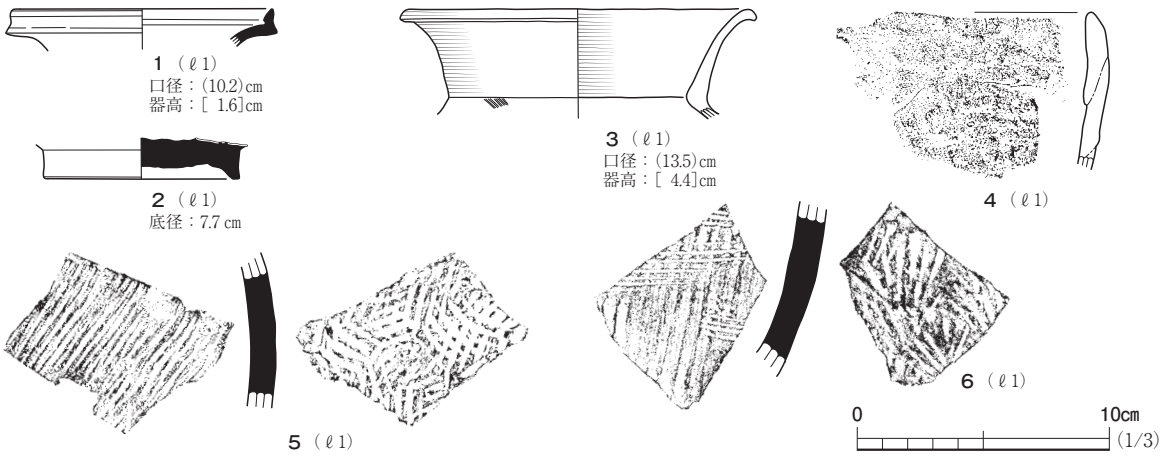


図40　11号溝跡出土遺物

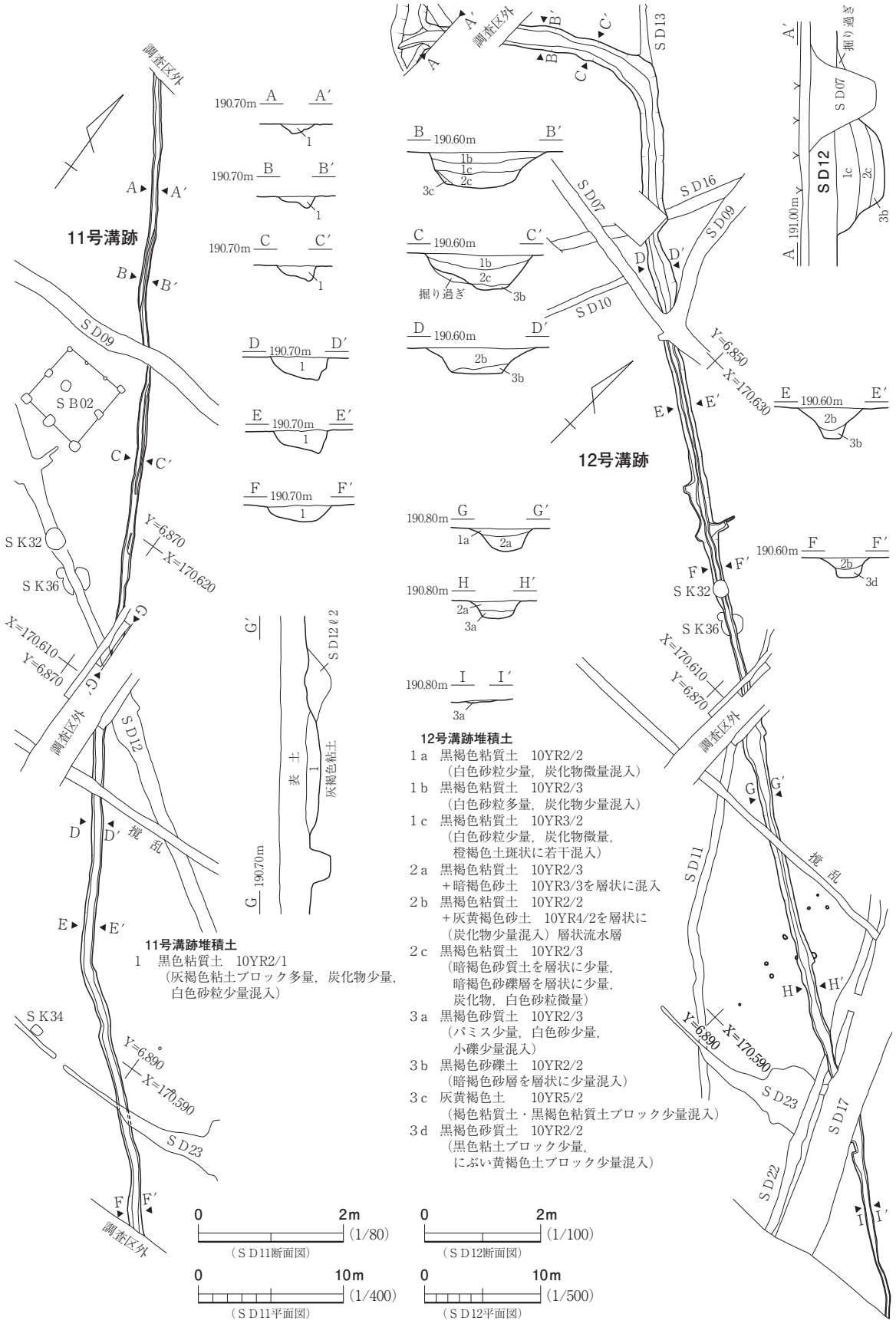

11号溝跡
12号溝跡
SD09
SD10
SD07
SD16
SD13
SD12
SD11
SD23
SD17
SD22
SB02
SK32
SK36
SK34
調査区外
撹乱
掘り過ぎ
X=170,610
Y=6,870
X=170,620
Y=6,850
X=170,630
Y=6,890
X=170,590
11号溝跡堆積土
1　黒色粘質土　10YR2/1
（灰褐色粘土ブロック多量，炭化物少量，
白色砂粒少量混入）
12号溝跡堆積土
1a　黒褐色粘質土　10YR2/2
（白色砂粒少量，炭化物微量混入）
1b　黒褐色粘質土　10YR2/3
（白色砂粒多量，炭化物少量混入）
1c　黒褐色粘質土　10YR3/2
（白色砂粒少量，炭化物微量，
橙褐色土斑状に若干混入）
2a　黒褐色粘質土　10YR2/3
＋暗褐色砂土　10YR3/3を層状に混入
2b　黒褐色粘質土　10YR2/2
＋灰黄褐色砂土　10YR4/2を層状に
（炭化物少量混入）層状流水層
2c　黒褐色粘質土　10YR2/3
（暗褐色砂質土を層状に少量，
暗褐色砂礫層を層状に少量，
炭化物，白色砂粒微量）
3a　黒褐色砂質土　10YR2/3
（パミス少量，白色砂少量，
小礫少量混入）
3b　黒褐色砂礫土　10YR2/2
（暗褐色砂層を層状に少量混入）
3c　灰黄褐色土　10YR5/2
（褐色粘質土・黒褐色粘質土ブロック少量混入）
3d　黒褐色砂質土　10YR2/2
（黒色粘土ブロック少量，
にぶい黄褐色土ブロック少量混入）
0　2m　(1/80)
（SD11断面図）
0　2m　(1/100)
（SD12断面図）
0　10m　(1/400)
（SD11平面図）
0　10m　(1/500)
（SD12平面図）

図41　11・12号溝跡

縁部である。５・６は外面にタタキ痕，内面に当具痕が残された須恵器の甕である。

本溝跡は，堆積土中から中・近世以降の遺物が全く出土せず，堆積土も古代の遺構と近似するところから，同様の平安時代９世紀頃のものと推定される。性格については，直線的な溝であるところから，建物跡群構築前の道路等の側溝の可能性を考えたい。（藤　谷）

12号溝跡　ＳＤ12（図41～43，写真23・24・34・36～40・43・46・58）

12号溝跡は，Ⅱ区の北西部からⅢ区南東部にかけて，Ⅱ・Ⅲ区を西北西－東南東方向に縦断する形で延びている。Ⅱ区北西部では13号溝跡と連結し，その部分で西南西方向に曲がり，２号流路跡に連結する形となっている。１・９号掘立柱建物跡，32・36号土坑，７・11・16・17・22号溝跡と重複関係にある。建物跡の柱穴の一部は本溝跡の堆積土を掘り込んで作られており，32号土坑と各溝跡は，本溝跡を切って構築されている。この中で36号土坑のみ，本溝跡に切られている。遺構検出面はＬⅡ上面となっている。

溝跡の全長は，屈曲部も含めて125ｍで，上場の幅は，Ⅲ区南東部が狭く20～40㎝，Ⅱ区東半部で90～130㎝，Ⅱ区北西部で１～1.7ｍとなっている。断面は逆台形から鍋底状を呈し，検出面からの深さは，Ⅲ区南東部付近の最深部で37㎝，Ⅱ区東半部付近で約50㎝，Ⅱ区北西部で約60㎝となっている。溝底面の高さは，Ⅰ区２号流路跡流れ込み付近で189.6ｍ，Ⅱ区東側で190ｍ，Ⅲ区南東側で190.1ｍである。南東から北西方向に北西側が南東側より高く，その比高差は50㎝で，北流していたと考えられる。

遺物は，堆積土から土師器と須恵器，砥石が出土しており，一部を図42・43に示した。図42－１・２は非ロクロ成形の土師器杯で内面にヘラミガキ･黒色処理が施されている。３～８は土師器甕で，３が器高の低いロクロ成形のもの，４・５が口縁部が「く」の字状に屈曲するもの，６が外面にタタキ痕を残すもの，７が内外面にヘラナデ，外面にヘラケズリの痕跡の残るもの，８が小型で体部下端にヘラケズリが施されたものある。９が須恵器蓋，10～12，図43－１～４・６が須恵器杯で，４の底部には「田万」の墨書がある。器形のわかるものでは，口径に対して底径が大きめである特徴を持っている。図43－５についは，底部に糸切り痕を残す須恵器の鉢あるいは甕と推定される。７・８は須恵器高台杯である。９・10は須恵器長頸瓶である。11～13は須恵器甕で，11が口縁部，12と13は同一個体の体部である。14は凝灰岩製の砥石である。

本溝跡は，出土遺物から８世紀後半から機能していた溝であり，建物跡群が作られたと推定される９世紀代には埋まっていたものと推定される。鶴沼Ｃ遺跡の古代の遺構の中でも，初源期を特定する遺構である。また，２号流路跡に連結しており，断面等の状況から同時期に機能していたものと思われる。また，第２編に収録した西坂才遺跡でも，同じ方向に延びる14号溝跡が検出されている。本溝跡は，そこにつながる可能性があり，道路の側溝的な機能をもっていた可能性が考えられる。また，２号流路跡と同時存在したところから，鶴沼Ｃ遺跡の調査区付近では，川の北側に沿って道路があったことも推定されうる。（藤　谷）

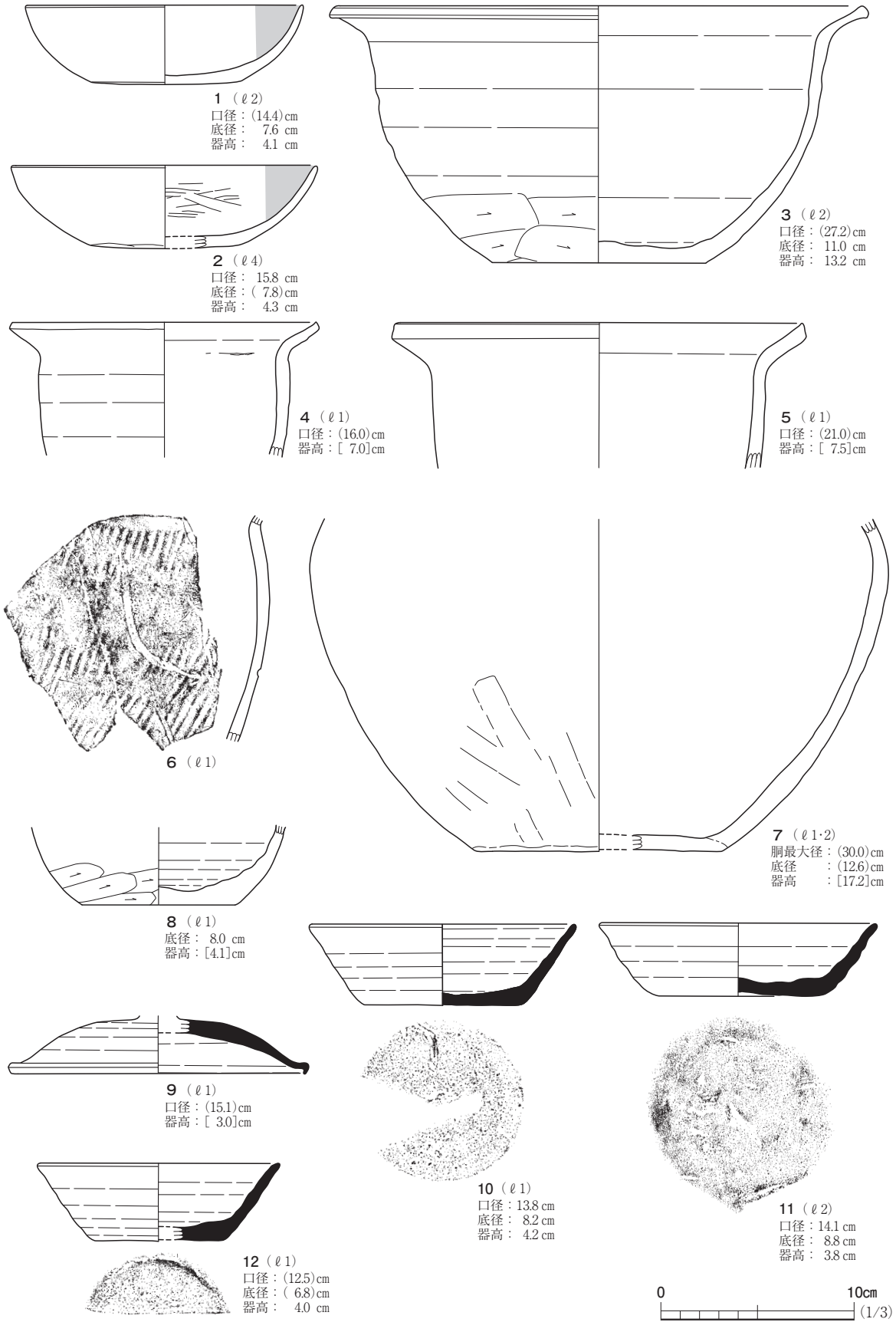


図42　12号溝跡出土遺物（１）

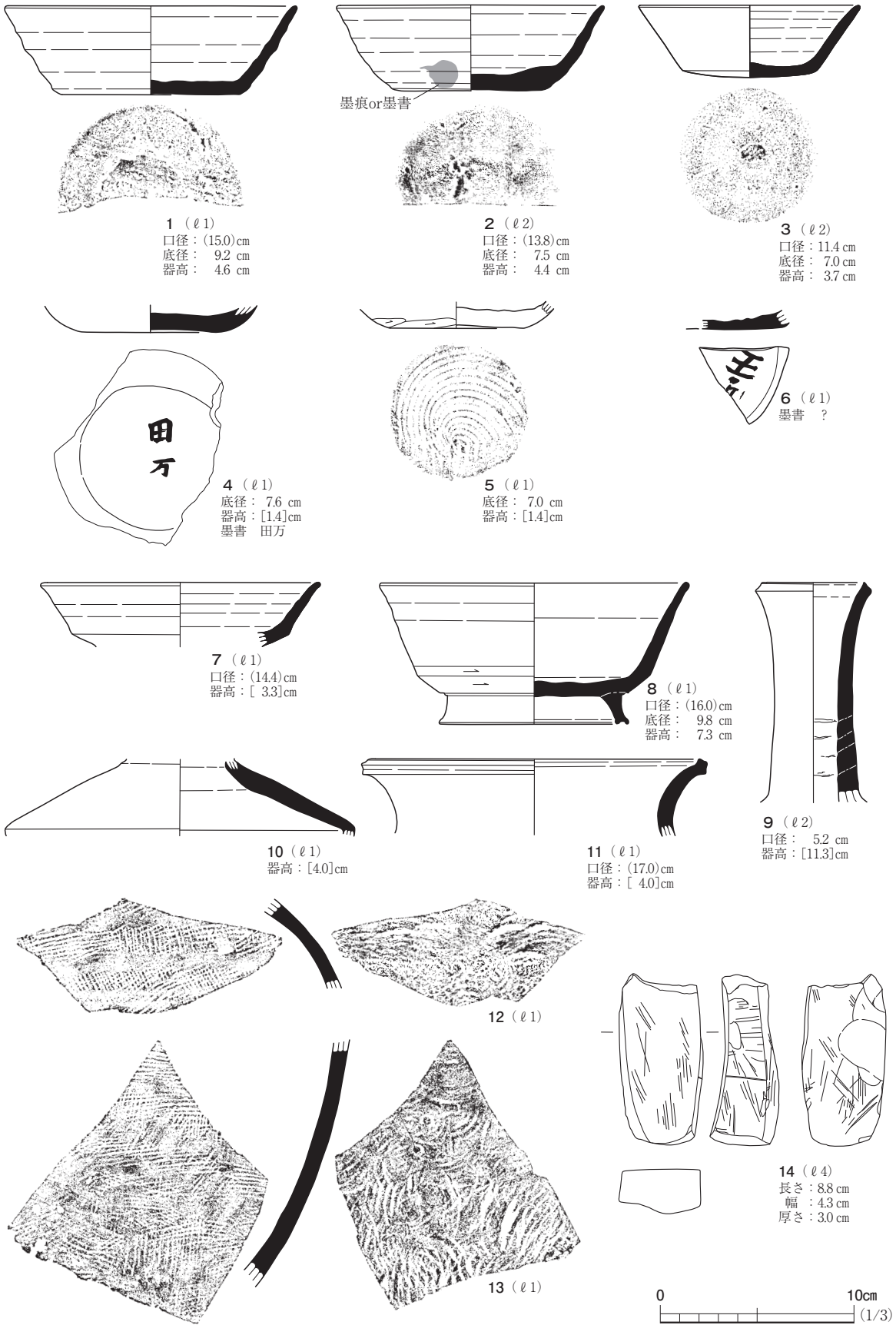


図43　12号溝跡出土遺物（2）

13号溝跡　ＳＤ13（図45，写真24）

13号溝跡は，Ⅱ区の北西部で12号溝跡と同じ方向に延び，東側でそれに連結する溝跡である。断面の状況から12号溝跡の方が新しいと推定される。周辺には北側に１号周溝状遺構が位置している。遺構検出面はＬⅡ上面となっている。

溝跡の全長は14.8ｍで，上場の幅は52～88㎝である。断面は薬研状を呈し，検出面からの深さは最深部で30㎝である。堆積土は黒褐色粘質土１層で，堆積状況は自然堆積と推定される。

遺物は，堆積土から土師器と須恵器の細片が出土している。

本溝跡は，12号溝跡と方向も一致するものの，重複関係が認められるところから，12号溝跡を２号流路跡方面に拡幅して連結する前に存在した溝跡である可能性がある。その時期は８世紀後半以前と考えられる。（藤　谷）

14号溝跡　ＳＤ14（図45，写真24）

14号溝跡は，Ⅱ区北西側のＧ・Ｈ４グリッドで検出された溝跡で，南側には12号溝跡が位置している。遺構検出面はＬⅡ上面となっている。

その規模は，南北方向の全長が5.1ｍであり，上部の幅が24～50㎝である。断面形は鍋底形を呈し，検出面からの深さは最深部で17㎝である。溝跡内の堆積土は黒褐色粘質土１層で，堆積状況は自然堆積と推定される。

本溝跡から遺物は出土していないが，堆積土が建物跡群と近似するところから平安時代の遺構である可能性が高い。また，その性格は不明である。（藤　谷）

15号溝跡　ＳＤ15（図45）

15号溝跡は，Ⅱ区中央よりやや東側で検出された溝跡で，途中で屈曲する形態となっている。当初北側のみが検出されたが，調査区を東西に走っている農道撤去後に南側も検出された。北側で31号土坑と西側で24号土坑と隣接している。遺構検出面はＬⅡ上面となっている。

その規模は，屈曲部も含めた全長が13.2ｍであり，上部の幅が24～32㎝である。断面形は鍋底形を呈し，検出面からの深さは最深部で６㎝である。溝跡内の堆積土はブロック土を含む黒褐色粘質土１層で，堆積状況は人為堆積と推定される。

遺物は，出土していない。堆積土が他の平安時代の遺構と異質であるところから，近世以降の溝跡であると推定されるが，性格は不明である。（藤　谷）

16号溝跡　ＳＤ16（図39，写真24）

16号溝跡は，Ⅱ区中央よりやや西側で検出された溝跡で，７・９・12号溝跡と重複関係にあり，各溝跡に切られている。周辺には東側５ｍ付近に本溝跡と並行するように10号溝跡が位置してい

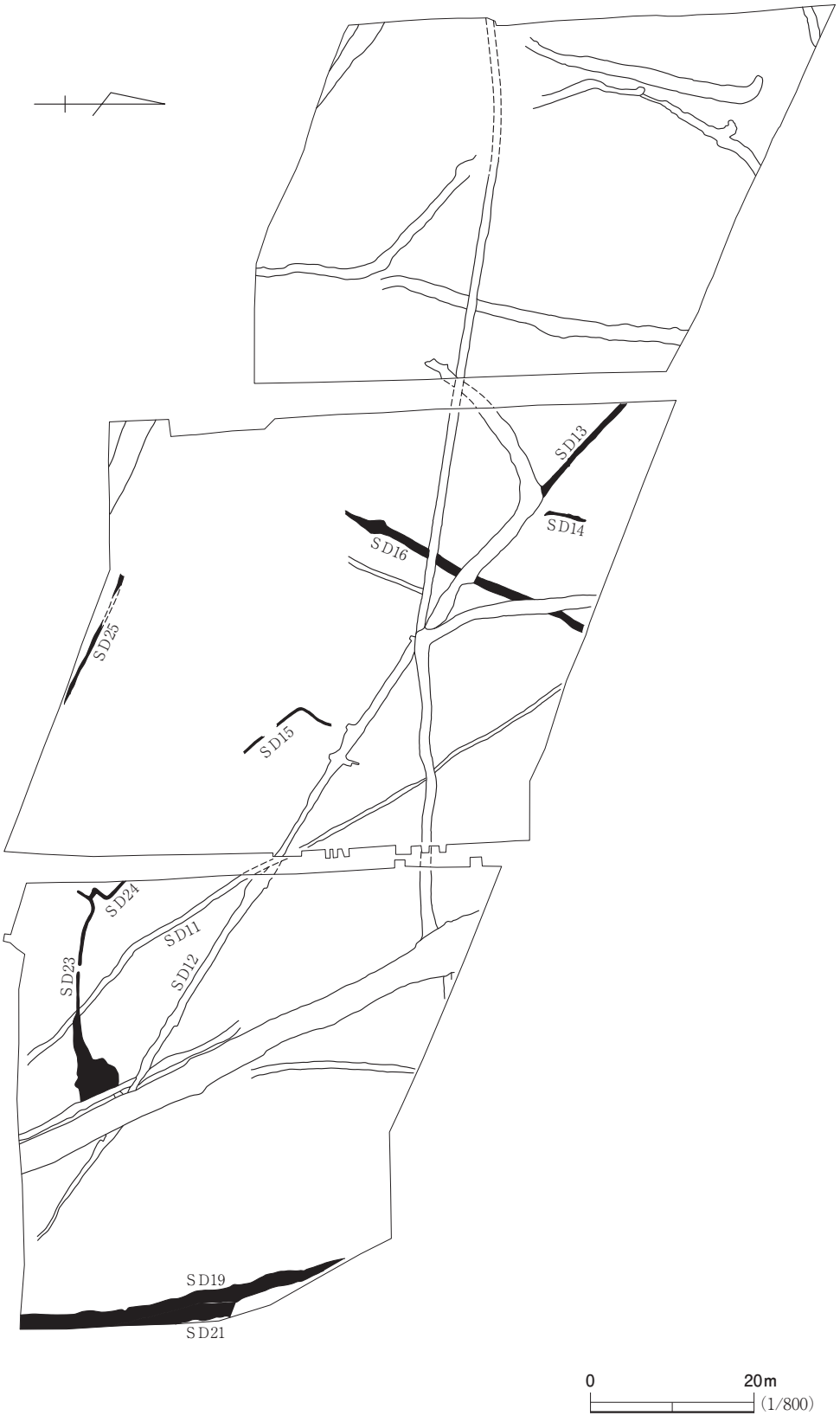


図44　溝跡位置図（2）13～16・19・21・23～25号溝跡

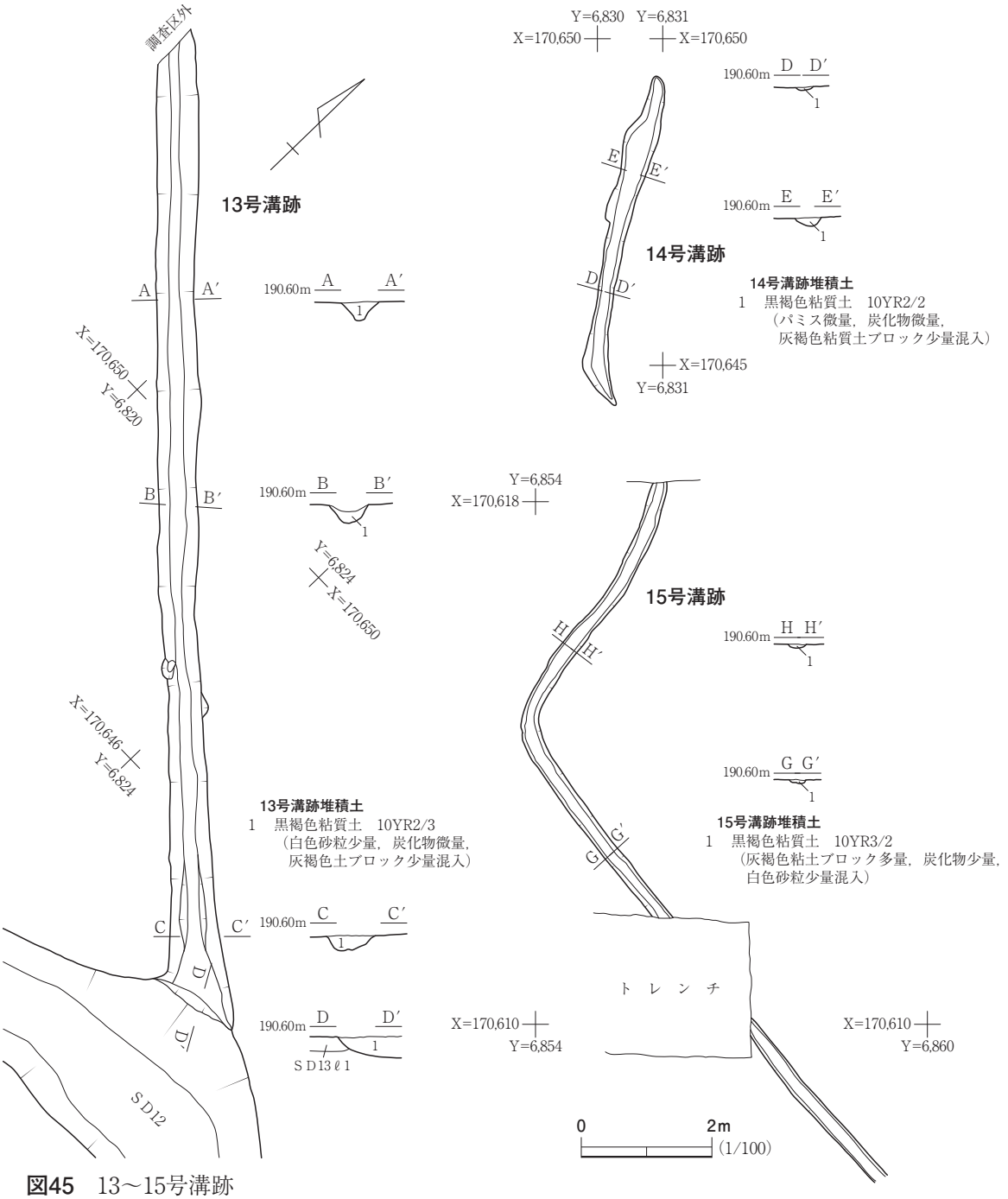


図45　13～15号溝跡

る。遺構検出面は沢部に堆積している黒褐色土上面となっている。

その規模は，南北方向の全長が32.8ｍであり，上部の幅が88～172㎝である。断面形は鍋底形を呈し，検出面からの深さは最深部で29㎝である。溝底面の高さは南側が北側より高く，北流していたと思われる。溝跡内の堆積土は２層で，下部に堆積する暗褐色砂土は流水層であり，その上部は堆積状況で形成された黒褐色土となっている。

遺物は，堆積土からロクロ土師器の細片が出土している。

本溝跡は，検出面がＬⅢ上面で，10号溝跡と並行することから，それと同時期の所産と思われる。

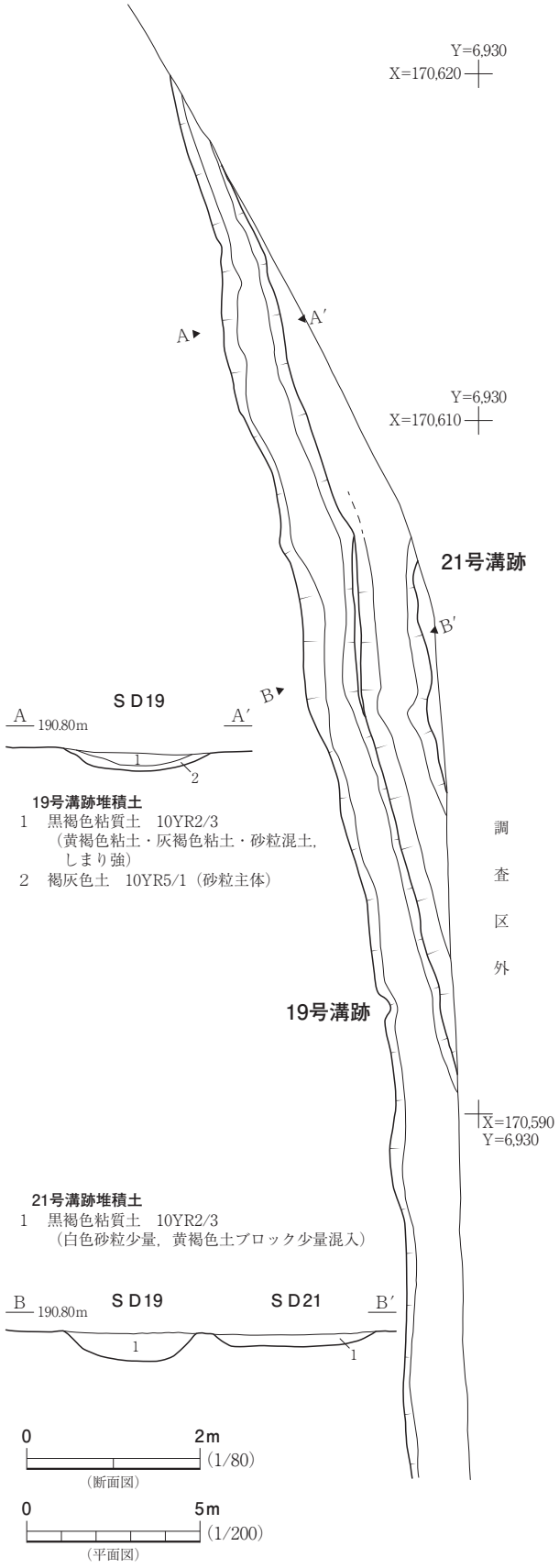


図46　19・21号溝跡

重複関係より，古代の遺構である可能性が高い。また，その性格については不明である。　（藤　谷）

19号溝跡　ＳＤ19

（図46・47，写真25・43）

Ⅲ区の東端，Ｑ６～10グリッドに位置する。検出面はＬⅡ上面である。東側で21号溝跡と重複しており，本溝跡の方が古い。

検出された溝跡の長さは40ｍである。主軸方向はＮ10°Ｗで，ほぼ南北に走り，南北とも調査区外まで延びる。幅は2.1ｍ前後であるが，北側は狭くなり1.4ｍほどになる。検出面からの深さは37㎝である。底面は鍋底状で南北の標高差はほとんどない。堆積土はレンズ状の自然堆積で，上層の粘質土と下層の砂層の２層に分層した。

遺物は，図47－１の須恵器杯蓋と２・３の須恵器甕胴部破片の３点を図示した。他に土師器22点，須恵器35点の破片が出土しているが，近世以降の陶磁器片も13点出土しており，堆積土の特徴などからも近世以降の用水路などの水利施設と考えられる。　（佐　藤）

21号溝跡　ＳＤ21（図46）

Ⅲ区の東端，Ｑ７～９グリッドに位置する。検出面はＬⅡ上面である。西側で19号溝跡と重複しており，本溝跡の方が新しい。

検出された溝跡の長さは18ｍで，主軸方向はほぼ真北である。北側は調査区

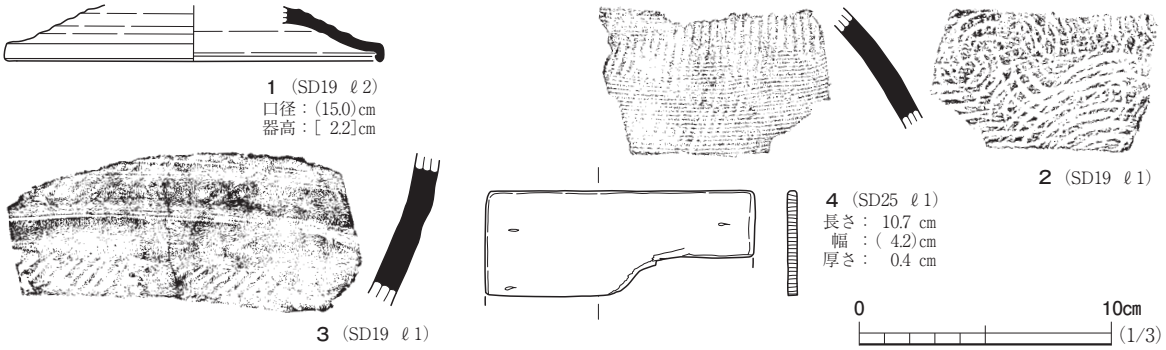


図47　19・25号溝跡出土遺物

外に延び，南側は19号溝跡の覆土中で消える。幅は1.6ｍ前後で，北側は狭くなり1.4ｍほどになる。検出面からの深さは67㎝である。底面は鍋底状で標高差はほとんどない。堆積土は１層で，自然堆積土と判断した。

遺物は出土しなかったが，19号溝跡より新しく，また堆積土の特徴などからも近世以降の用水路などの水利施設と考えられる。（佐　藤）

23号溝跡　ＳＤ23（図48，写真25）

23号溝跡は，Ⅲ区南西側で検出された溝跡で，24号溝跡に西側で連結している。溝は中央よりやや西側付近で一部途切れているが，方向から同一の溝とした。また11・22号溝跡と重複関係にあり，11号溝跡を切り，22号溝跡に切られている。周辺には，北側には34号土坑が隣接して位置している。遺構検出面はＬⅡ上面となっている。

その規模は，東西の全長が30.2ｍであり，上部の幅が24～35㎝である。東側の22号溝跡と接する部分は南北に広がる形となっており，その幅は4.8ｍである。断面形は鍋底形を呈し，検出面からの深さは最深部で13㎝である。堆積土は暗褐色土１層で，堆積状況は自然堆積と推定される。

遺物は出土していないが，堆積土が他の近世以降の遺構と近似しているところから，近世以降のものと推定されるが，その性格は不明である。（藤　谷）

24号溝跡　ＳＤ24（図48，写真25）

24号溝跡はⅢ区南西側で検出された溝跡で，23号溝跡に東側で連結しており，西側でⅡ区とⅢ区間の用水路で切られており，Ⅱ区側では検出されなかった。遺構検出面はＬⅡ上面となっている。

溝跡は，西側から２重に屈曲して23号溝跡に連結する形で，その規模は，屈曲部も含めた全長が5.5ｍであり，上部の幅が32～72㎝である。断面形は逆台形を呈し，検出面からの深さは最深部で７㎝である。溝跡内の堆積土は暗褐色土１層で，堆積状況は自然堆積と推定される。

遺物は出土していないが，堆積土が他の近世以降の遺構と近似しているところから，23号溝跡同様，近世以降の時期のものと推定されるが，その性格は不明である。（藤　谷）

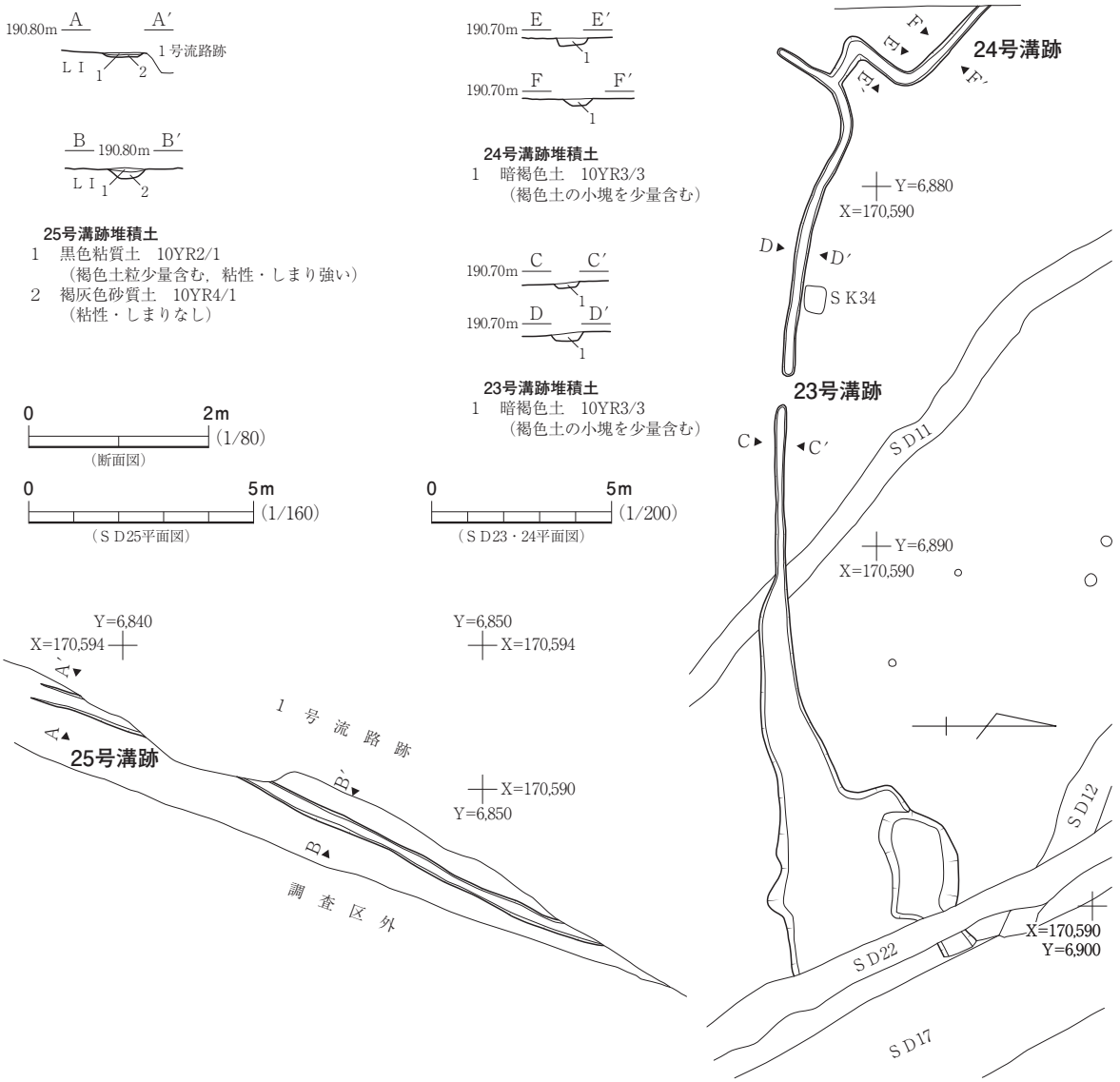


図48　23～25号溝跡

25号溝跡　ＳＤ25（図47・48）

Ⅱ区の中央南端，Ｈ・Ｉ９，Ｉ・Ｊ10グリッドに位置する。検出面はＬⅡ上面である。１号流路跡と重複し，本溝跡が新しい。

検出された溝跡の長さは16.6ｍ，幅は30㎝前後である。主軸方向はＮ65°Ｗで，北西から南東に延びる。検出面からの深さは残りの良い部分で11㎝あるが，西側は徐々に浅くなり消失する。断面はＵ字状で，底面の標高差はほとんどない。堆積土はレンズ状の自然堆積で，上層の粘質土と下層の砂層の２層に分層した。

遺物は，図47－４の板状木製品と土師器・須恵器の細片が５点出土したのみである。検出状況や堆積土の特徴から近世以降の溝跡と考えられる。（佐　藤）

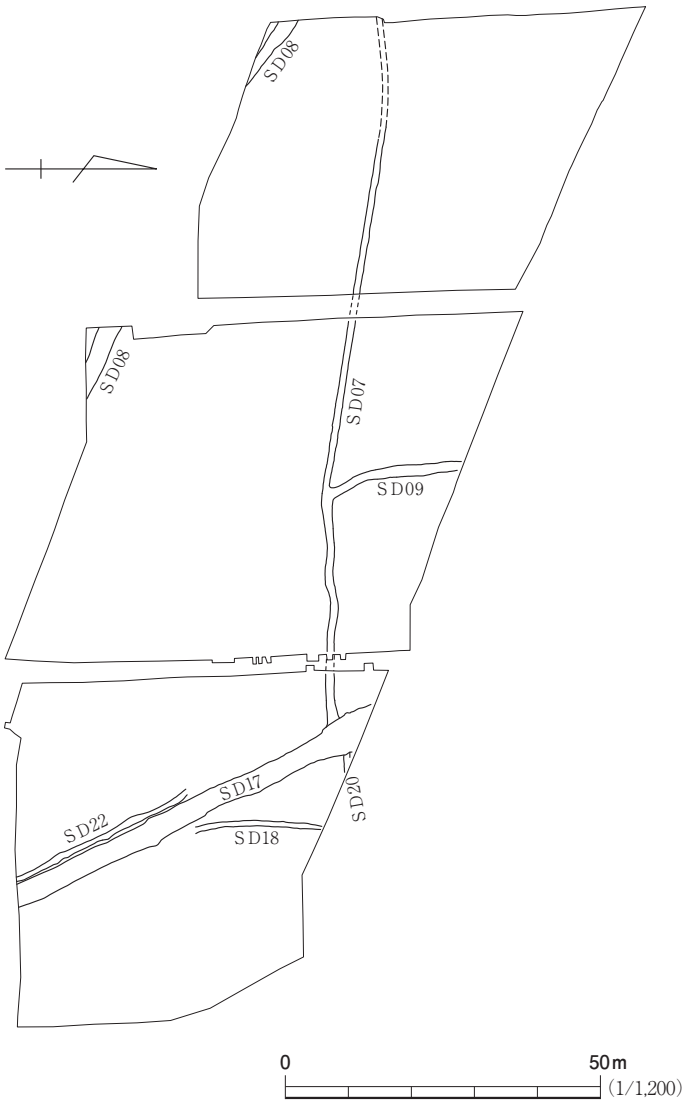


図49　溝跡位置図（３）７～９・17・18・20・22号溝跡

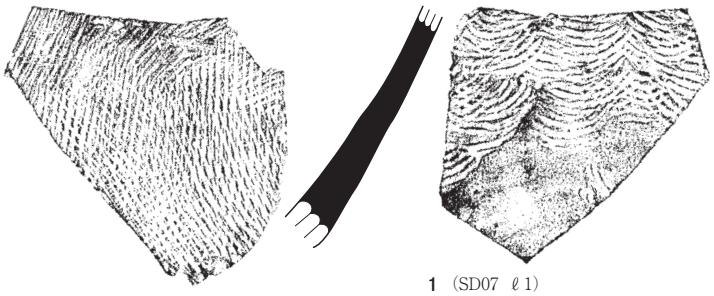
近代以降の溝跡と出土遺物
（図49・50，写真43）

今回の調査した溝跡で，明らかに明治期以降のものと思われる溝跡は，７～９・17・18・20・22号溝跡の７条である。堆積土中に近代以降の遺物が多く含まれていたり，旧ほ場整備で利用されたと思われるコンクリート製の堰状遺構が検出されたりしている。

調査区内における位置を図49に示した。Ⅲ区を東西に走り，コンクリート製の堰状遺構を持つ17号溝跡を中心に，それに流れ込むか，それに平行する位置関係のものがほとんどである。

これらの溝跡には，堆積土中から古代のものを含む遺物が出土しているものがあった。古代や近世以降の遺構と重複しており，その時期のものが流れ込んだものと思われる。図50にその一部を示した。

１・２・８・９は，須恵器の甕である。８が頸部，２が底部，１・９が体部破片であり，外面にはタタキ痕が，１・９の内面には当て具痕が残されている。４・５は磁器埦の底部で，４は内外面に花弁状の文様の染付が施されている。５は外面に型紙による染付が施されている。６・７・10～13は木製の挽物椀で，ともに内外面に漆塗りが施されている。７を除き高台が付く形態で，うち11にはそれが明瞭に残っている。形態は底径に対して器高がやや高く深手のもの11・12や浅手のもの10・13がある。３は寛永通宝である。14と15は凝灰岩製の砥石で，外面には明瞭な擦痕が認められる。（藤　谷）

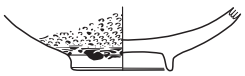


1（SD07　ℓ1）

2（SD07　ℓ1）

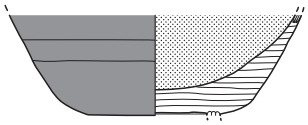
3（SD07　ℓ1）
径：2.4cm

0　3cm
（1/2）
（3）



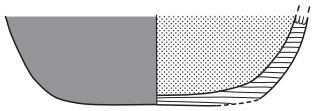
4（SD08　ℓ2）
底径：　2.1 cm
器高：［2.5］cm

5（SD08　ℓ2）
底径：（4.0）cm
器高：［2.5］cm

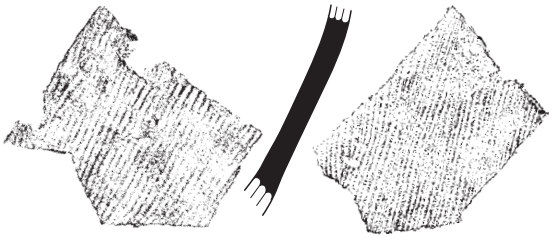


6（SD08　ℓ3）
底径：（5.2）cm
器高：［4.0］cm

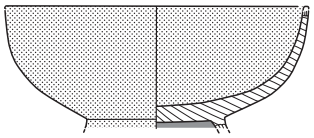
8（SD09　ℓ1）



7（SD08　ℓ1）
底径：（4.8）cm
器高：［3.5］cm

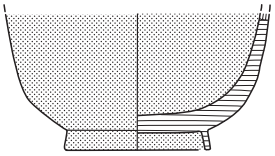


9（SD09　ℓ1）

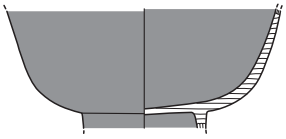


10（SD17　ℓ2）
口径：（12.0）cm
底径：（ 5.6）cm
器高：［ 4.9］cm

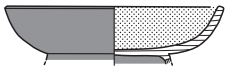
黒漆
赤漆



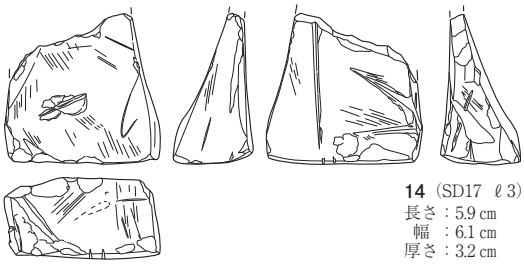
11（SD17　ℓ3）
底径：（5.8）cm
器高：［5.5］cm



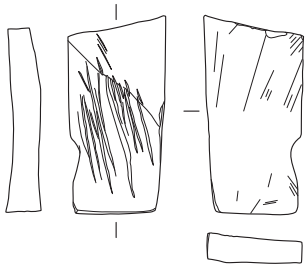
12（SD17　ℓ3）
底径：（5.0）cm
器高：［4.8］cm



13（SD17　ℓ3）
口径：　8.7 cm
底径：（4.9）cm
器高：［2.2］cm



14（SD17　ℓ3）
長さ：5.9 cm
幅　：6.1 cm
厚さ：3.2 cm



15（SD17　ℓ3）
長さ：7.4 cm
幅　：3.9 cm
厚さ：1.4 cm

0　10cm
（1/3）
（1～2，4～15）

図50　7～9・17号溝跡出土遺物

第7節　流　路　跡

今回の調査で，流路跡は3か所で確認することができた。いずれも古代に機能したものと推定される。1号流路跡は，Ⅰ区とⅡ区にまたがっており，2号流路跡と重複関係にあり，それを切って作られている。3号流路跡がⅠ区北西隅で一部が検出されている。1・2号流路跡については，西側の底面の高さが東側のそれより低いので，北西へ流れていたものと推定される。

1号流路跡

遺　　構（図51～55・72，写真26～28）

1号流路跡は，Ⅰ区南側のＢ5グリッド付近から，Ⅱ区のＫ10グリッド付近に向けて，北西から南東方向で検出された流路跡で，一部Ⅲ区南東隅に延びている。調査区内での全長は123ｍとなっている。調査はまず農道を除くⅠ区を優先し，Ⅱ区側を後で行う形となった。Ⅰ区の東側については農道を撤去後に調査を実施した。

Ⅰ区の遺構を検出する段階で，一番南側で，地山検出面と思われるＬⅡとその北側の土層が明確に分離された。そこで，流路跡の存在を想定し，サブトレンチを入れたところ，不明瞭ながらも北側で立ち上がりが確認された。サブトレンチでは，底面付近から須恵器の完形品等の遺物が出土し，上面からの遺物の出土はごく少なかった。そこで，上面の土層については，下部40㎝程度を残して，重機を用いて堆積土の削除作業を実施し，下部の層について，手掘りで調査を実施した。

Ⅰ区での流路跡の規模は，調査区内での長さが約50ｍ，東側での幅が約7.5ｍ，西側での幅10.5ｍである。流路跡は，北西から東西方向に延びるが，Ｄ7グリッド付近では，南東方向へ分岐している箇所がある。その方向から流れてきた流路跡と合流したものと思われる。壁面の立ち上がりは，北側壁がやや急であった。遺構検出面からの深さは，西側で1.2～1.3ｍ，東側で1.5～1.6ｍとなっている。また，東西の高低差は25㎝で西側が低く，西側に流れていたものと推定される。堆積土を10層に分層した。このうちℓ1～3・10が機能停止後の自然堆積層，ℓ4～8が流水作用によって堆積した層，ℓ9が底面上の礫層で，それぞれⅡ区のℓ2・ℓ3・ℓ4層に対応する。断面のＥ－Ｅ′付近では，2号流路跡の流水堆積物の層を切る形で1号流路跡の堆積物が堆積しており，1号流路跡が2号流路跡よりも新しい状況を明瞭に観察された。

Ⅱ・Ⅲ区については，当初上面の遺物を含む土層ℓ1を谷部に堆積する遺物包含層である可能性が高いものとして調査を実施していた。しかし，Ⅰ区の調査が進むにつれて，Ⅱ区にも流路跡が広がることが予想されたため，流路の方向に直行するサブトレンチを2本設定して，土層の状況を確認した。その結果，Ⅱ区にも明らかに流路跡が広がることがわかり，更にⅠ区同様に上部土層に遺物がほとんど含まれていないことが確認できた。そこで，上面の土層については，重機を用いて掘削作業を行った。上部の土層除去後に，遺物の含まれている流水作用による層の下部と底面上に堆

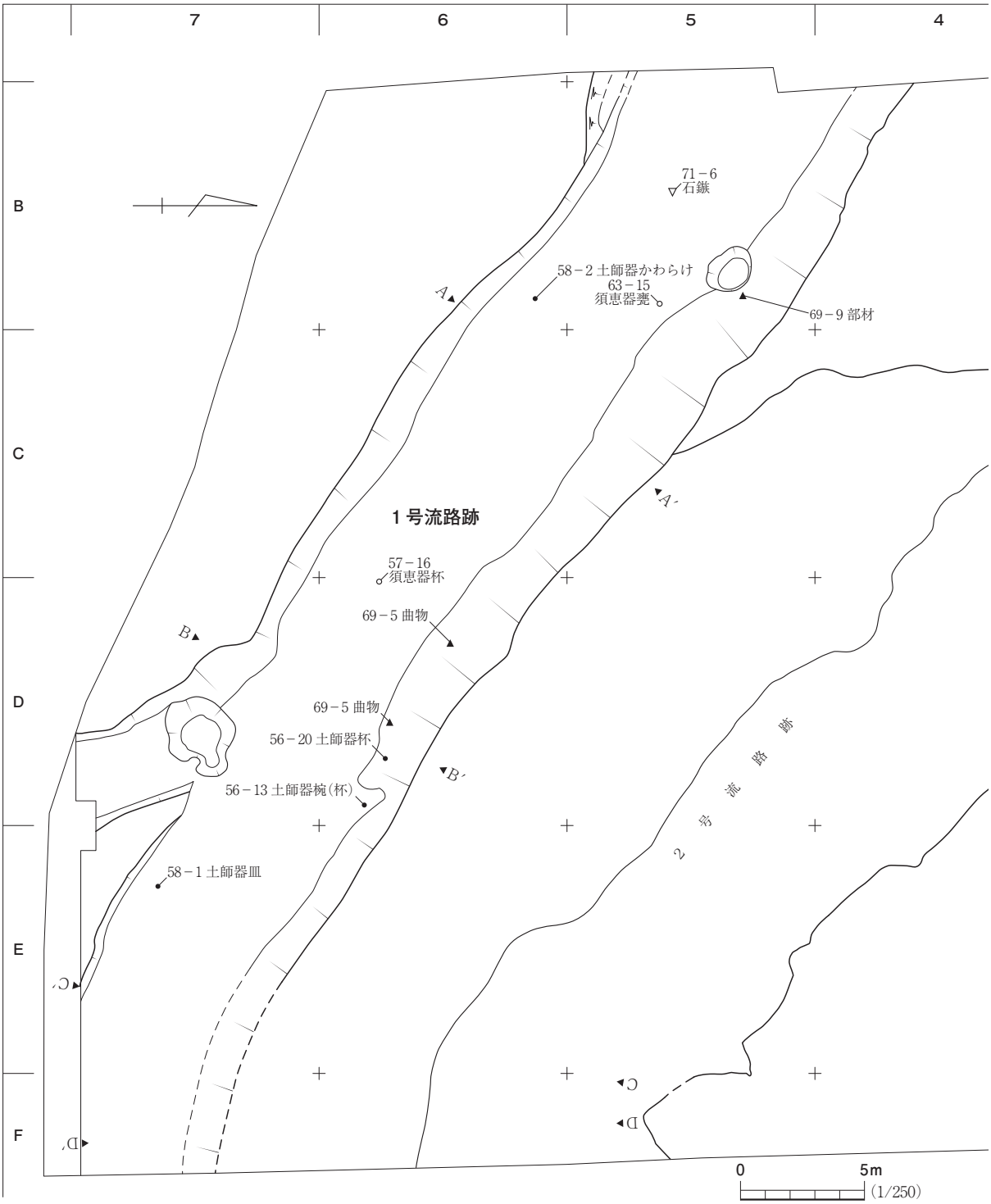
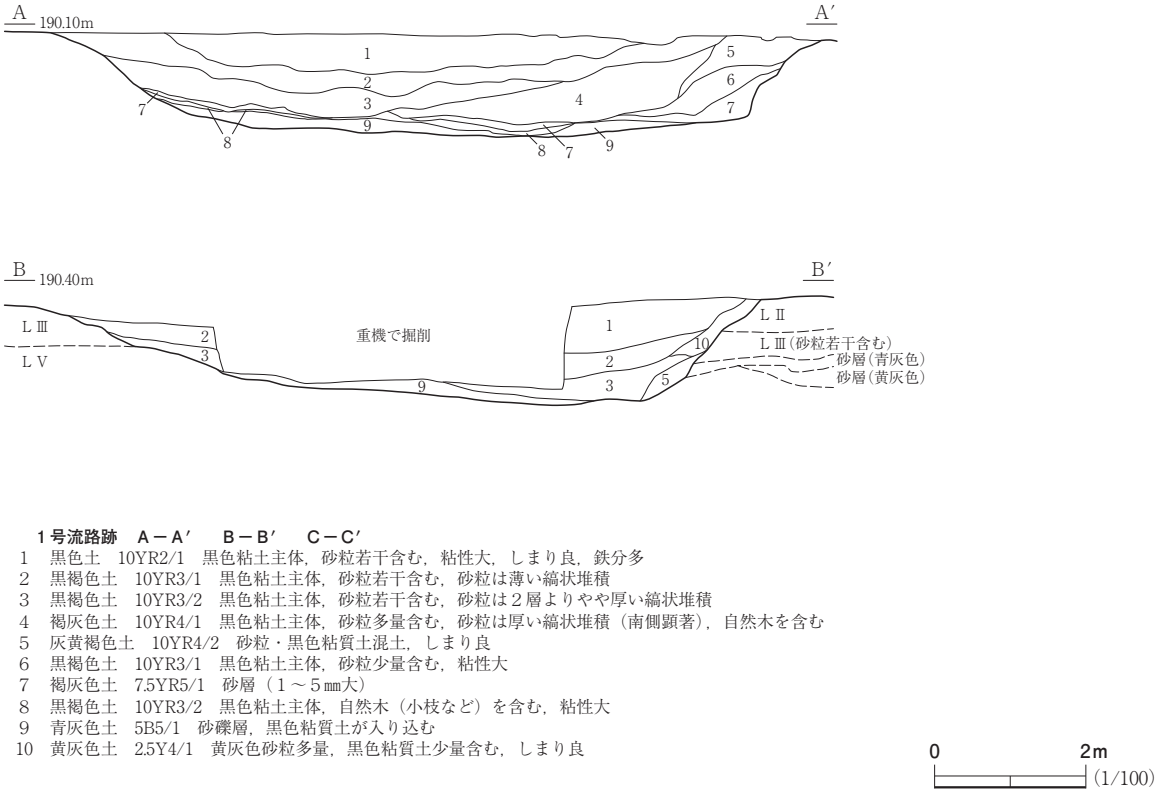


図51　1号流路跡（1）Ⅰ区平面図

積する最下部の礫層を手掘りで調査した。

Ⅱ・Ⅲ区での流路跡の規模は，調査区内での長さが約50m，東側での幅が約7.5m，西側での幅10.5mである。J 10グリッド付近より東側は南壁が調査区外となっている。壁面の立ち上がりは，南壁と北壁の西端と東端付近がやや急であり，北壁の中央部分は緩やかとなっている。遺構検出面からの深さは，西側で1.6～2.0m，東側で1.2～1.4mとなっている。また，東西の高低差は約40㎝



1号流路跡　A－A′　B－B′　C－C′

1　黒色土　10YR2/1　黒色粘土主体，砂粒若干含む，粘性大，しまり良，鉄分多
2　黒褐色土　10YR3/1　黒色粘土主体，砂粒若干含む，砂粒は薄い縞状堆積
3　黒褐色土　10YR3/2　黒色粘土主体，砂粒若干含む，砂粒は2層よりやや厚い縞状堆積
4　褐灰色土　10YR4/1　黒色粘土主体，砂粒多量含む，砂粒は厚い縞状堆積（南側顕著），自然木を含む
5　灰黄褐色土　10YR4/2　砂粒・黒色粘質土混土，しまり良
6　黒褐色土　10YR3/1　黒色粘土主体，砂粒少量含む，粘性大
7　褐灰色土　7.5YR5/1　砂層（1～5㎜大）
8　黒褐色土　10YR3/2　黒色粘土主体，自然木（小枝など）を含む，粘性大
9　青灰色土　5B5/1　砂礫層，黒色粘質土が入り込む
10　黄灰色土　2.5Y4/1　黄灰色砂粒多量，黒色粘質土少量含む，しまり良

図52　1号流路跡（2）Ⅰ区断面図

で西側が低い。流路内には，黒色粘質土をはじめ砂層や砂礫層など様々な堆積物が認められ，これらを大きく4層に分層した。ℓ1は最上面に堆積する白色砂粒を混入する土層，ℓ2はその下部に堆積する黒色の粘質土，ℓ3は流水あるいは崩落作用によって堆積した層，ℓ4が底面上の礫層で，ℓ1・2については，機能停止後に自然に堆積したものと推定される。遺物はℓ3の下部及びℓ4に認められた。また，断面ではA－A′面で2号流路跡との重複関係が明瞭に観察されたが，B－B′面では，それが不明瞭であった。その付近より東では，1号流路跡の氾濫によって2号流路跡は壊されたと推定される。

遺　　物（図56～71，写真33～47・50・52～54・58）

縄文・弥生土器　図56－1～3は縄文土器で，1・2が早期の土器，3が後期のものである。4・5が弥生時代中期の甕，6が同じ時期の高杯である。

土 師 器　図56－7は古墳時代中期の高杯である。図56－8～20，図57－1～4・6～13は杯である。杯は全て内面黒色処理されたロクロ成形のもので，底部から体部下端に回転ヘラケズリ調整が施されるもの図56－8～20，図57－4，体部下端に手持ちヘラケズリが施され底部に糸切り痕を残すもの図57－8や体部下端に調整痕を持たず糸切り痕のみを残すもの図57－9がある。体部下端に回転ヘラケズリ痕が残るものには，底径に対して器高が高い器形のもの図56－8・13がある。体部及び底面に墨書があるものも多く存在し，図57－13は底部付近に連続した文章が認められる。「仁沓カ□食應下　□丸早□」と読める。図58－3～9は高台杯で，内外面にミガキの入

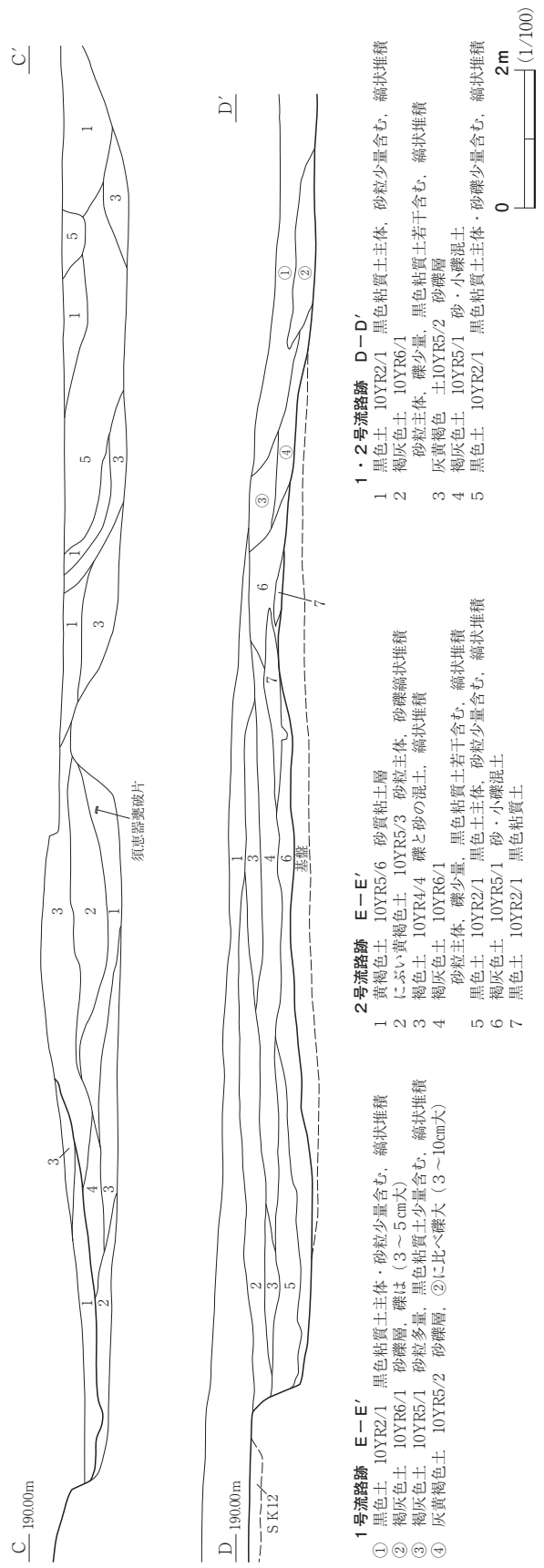


図53　1・2号流路跡Ⅰ区断面図

るもの3もある。図58－10～15，図59－1はロクロ成形の甕である。口縁部では，それが「く」の字状に外反するもの図58－10・11とそれ以外のものがある。図59－2～4は筒形土器である。

赤焼土器・かわらけ　図57－14～16は内外面に調整痕を持たない赤焼土器の杯で，図58－4は高台杯である。図58－1・2は皿状のかわらけと推定されるものである。

須恵器　図59－5～16，図60～62は，須恵器の杯である。器形は底径に対して器高が低く，口径に対して底径がおおぶりのもの図60－5～9，口径に対して底径が小さ目のもの図61－5・6で，器種にはかなりのバラエティーがある。墨書がある土器も多数あり，本遺跡に特徴的な文字には「今」図56－9・16，図59－15，図60－2・15，図61－6，図62－8・17がある。また，遺跡の性格に関連する文字には「戸主」図60－1や「吏」図62－3，「氏」図61－14，図62－6，「舘」図62－12がある。図63－1・2は高台杯，3は蓋である。図63－4～12は長頸瓶，4～9が口縁部，10～12が底部である。口縁部では，頸部にリング状の凸帯が巡るもの5・9もある。図63－13は風字硯である。14は壺類の底部，15は大甕の口縁部である。図64－1は横瓶で外面にタタキ痕が残っている。図64－2～5は壺類の体部から底部，図65～68は甕類である。口縁部に波状文が巡るもの図65－1や丸底の底部図67－3がある。

木製品　図69－1～4が挽物の椀である。

1は高台部が作り出されており，体部下半が丸い形態となるものである。3は体部破片で，内外面に漆が塗られている。5・6は曲物の底部である。7は先端近くが削られ薄く作られて

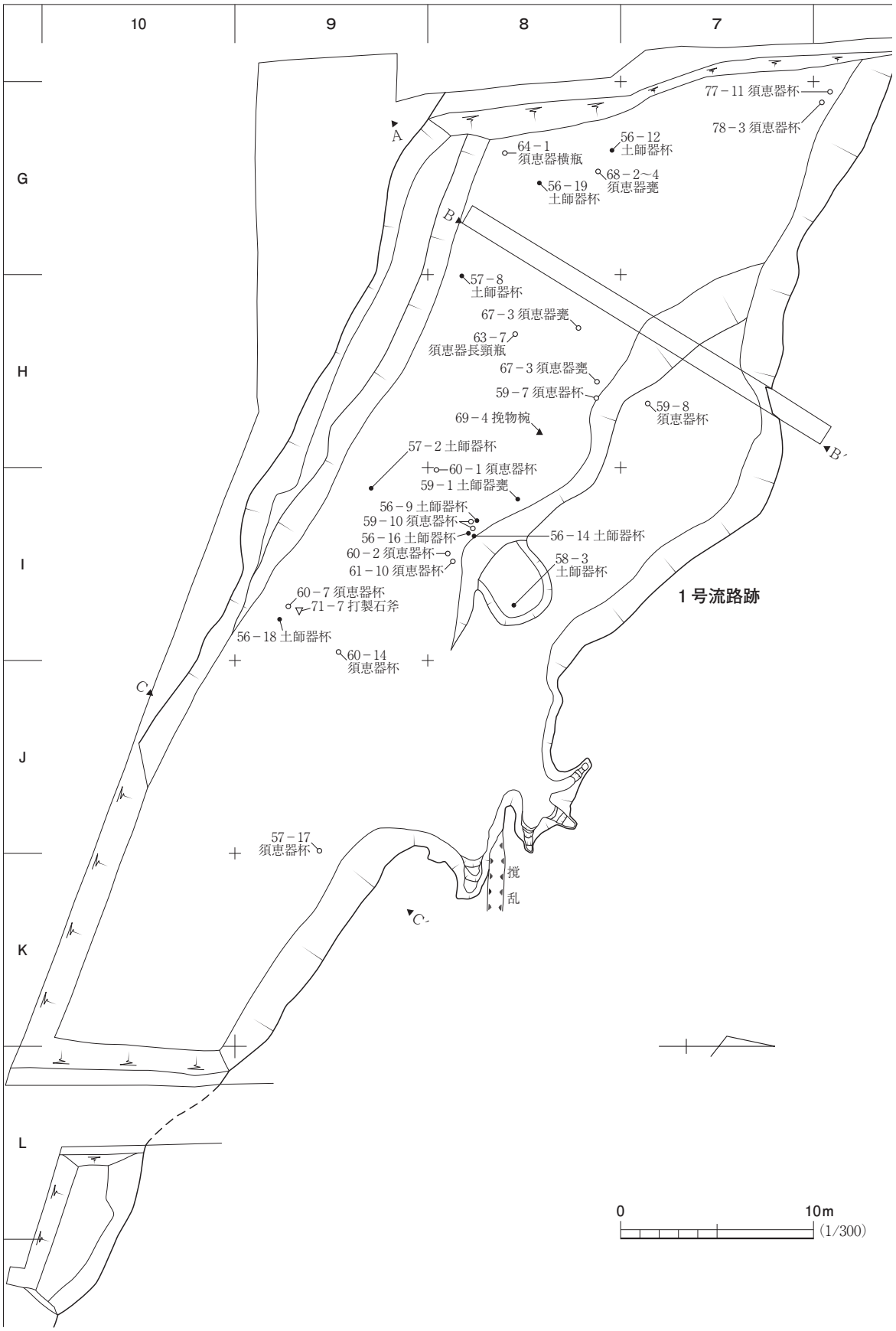
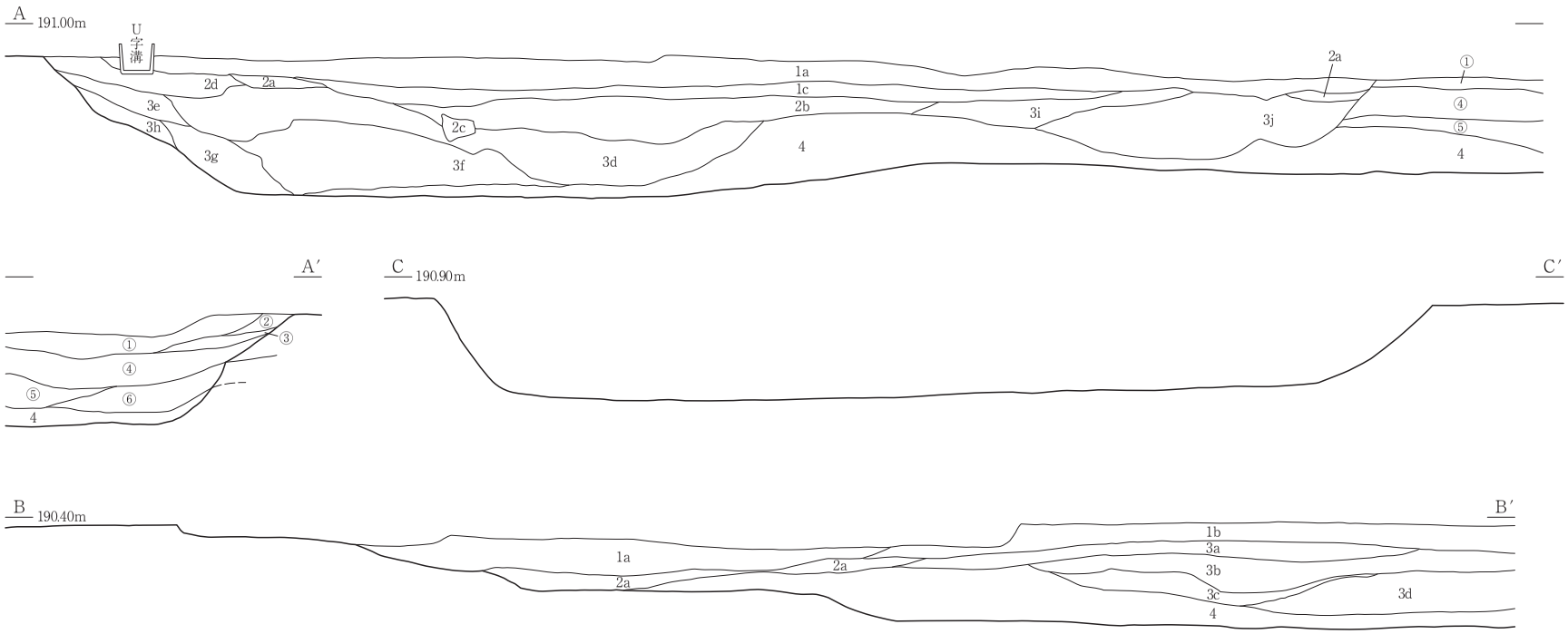


図54　1号流路跡（3）Ⅱ・Ⅲ区平面図

図55　１号流路跡（４）Ⅱ・Ⅲ区断面図



１号流路跡　Ⅱ・Ⅲ区

① 暗褐色砂質土　10YR3/3　（褐灰色砂土　10YR4/1を層状に含む）
② 黒褐色粘土　10YR2/3　（褐色粘土粒斑状に混入，炭化物微量混入）
③ 黒褐色粘土　10YR2/3　（褐色粘土粒斑状に混入，炭化物微量混入）
④ 黒褐色粘土　10YR3/2　褐灰色砂土　10YR4/1　褐色砂土　10YR4/3の互層，
厚さは幅２㎜～１cm位程度と細かい（間に砂礫層１条）
⑤ 黒褐色粘土　10YR3/2　褐灰色砂土　10YR4/1　褐色砂土　10YR4/3の互層，
砂礫層以外は幅２㎜～１cmと細かい，砂礫層は厚いところで10cm）
⑥ 黒褐色粘土　10YR3/2　褐灰色砂土　10YR4/1の互層，
植物遺有少量混入，厚さは幅２㎜～２cm位程度と細かい

１a 黒褐色粘質土　10YR3/1（白色砂粒少量，炭化物微量，褐色土粒斑状に混入）
１b 暗褐色土　10YR3/3（白色砂粒微量，炭化物少量，褐色土斑状に少量混入）
１c 黒褐色粘質土　10YR2/2（白色砂粒微量，炭化物微量，褐色土粒斑状に少量混入）
２a 黒褐色粘土　10YR3/2　暗褐色砂土　10YR3/4の互層，幅２㎜～１cm位（炭化物少量混入）
２b 黒褐色粘土　10YR2/3（灰黄褐色粘土粒　10YR5/2を斑状に，炭化物微量混入）
２c 黒色粘土　10YR1.7/1　粘性強く，炭化物少量，腐敗物を少量，黒褐色土ブロック少量混入）
２d 黒褐色粘質土　10YR3/2
３a 黒褐色粘土　10YR2/3　灰黄褐色粘土粒　10YR5/2の互層，
間は１㎜～５㎜と狭い，間に黄褐色土を層状に含む）
３b 黒褐色粘質土　10YR2/3
（灰黄褐色砂粒を層状に，炭化物少量，灰褐色粘土ブロック少量，褐色土斑状に混入）
３c 黒褐色粘土　10YR2/3　黒褐色砂土　10YR3/2の互層，間は１～３cm，炭化物少量混入）
３d 黒褐色粘土　10YR2/2　灰黄褐色粘土粒　10YR5/2の互層
（暗褐色砂質土　10YR3/3層状２cm混入，青色粒子（リン酸化小骨片を微量）
３e 暗褐色土　10YR3/3（酸化鉄を少量含む）
３f 灰黄褐色砂土　10YR4/2（黒色粘土　10YR2/1を層状に含む，厚さ５㎜～２cm）
３g 黒褐色土　10YR2/2
３h 褐灰色土　10YR4/1（酸化鉄を含む）
３i 黒褐色粘土　10YR3/2　褐灰色砂土　10YR4/1　にぶい黄褐色砂土　10YR4/3の互層，
厚さは幅２㎜～１cm位（間に砂礫層も入る）
３j 黒褐色粘土　10YR3/2（褐灰色砂土　10YR4/1を層状に，砂礫層を層状に，炭化物微量混入）
４ 黒褐色砂礫土　10YR3/2（２～５cm位の礫多量に混入，遺物含む）

0　5m
（1/100）

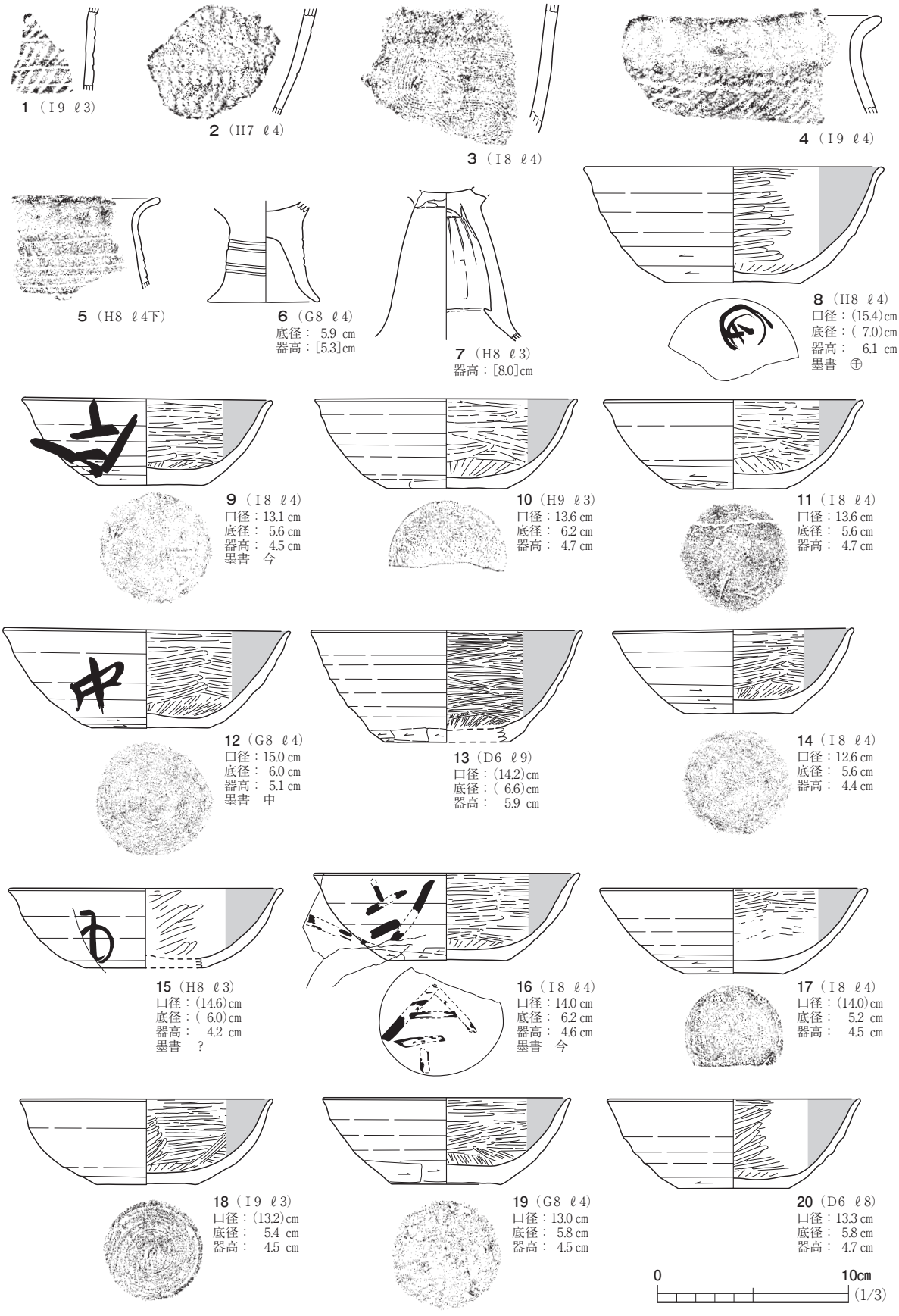


図56　1号流路跡出土遺物（1）土師器

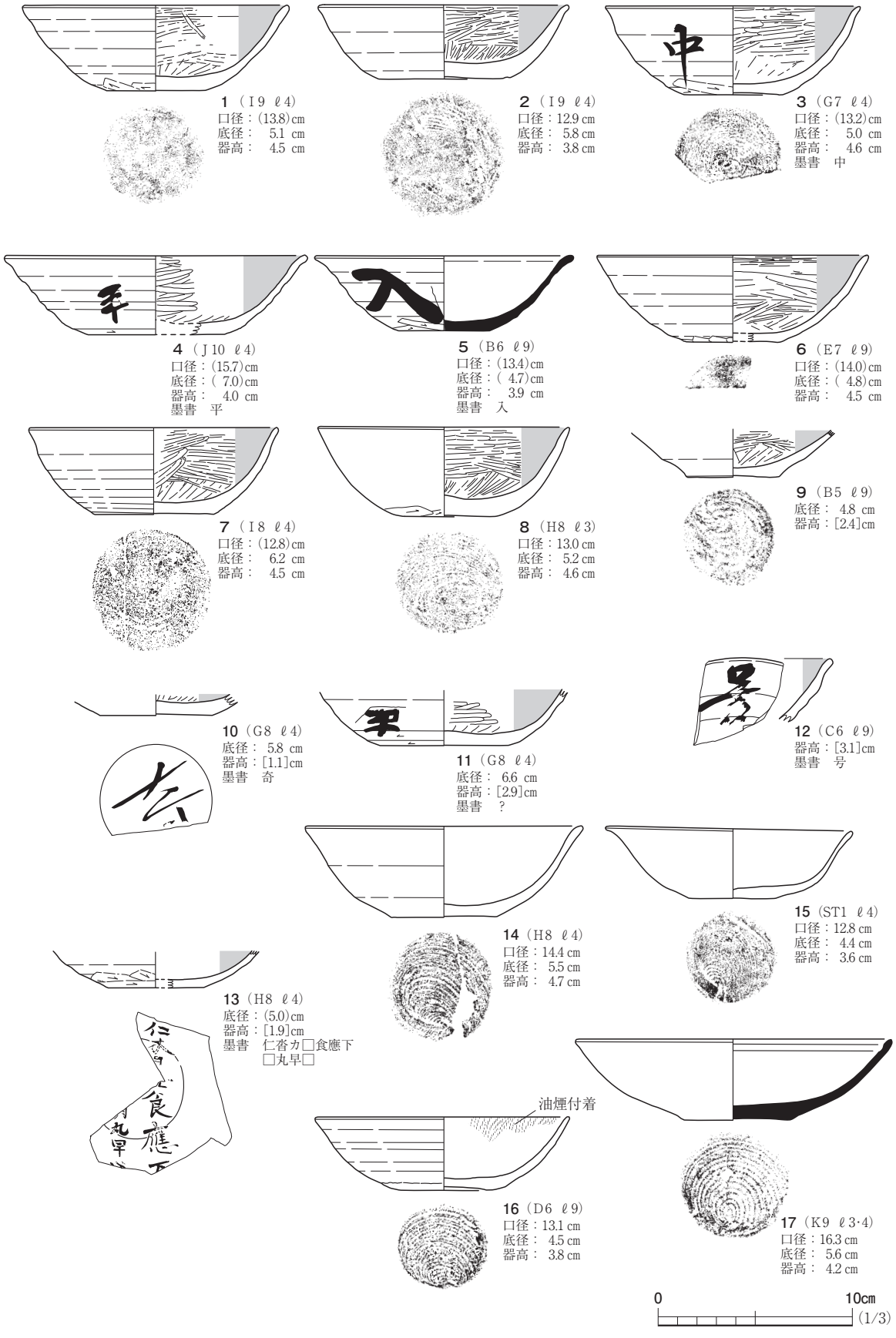


図57　1号流路跡出土遺物（2）土師器

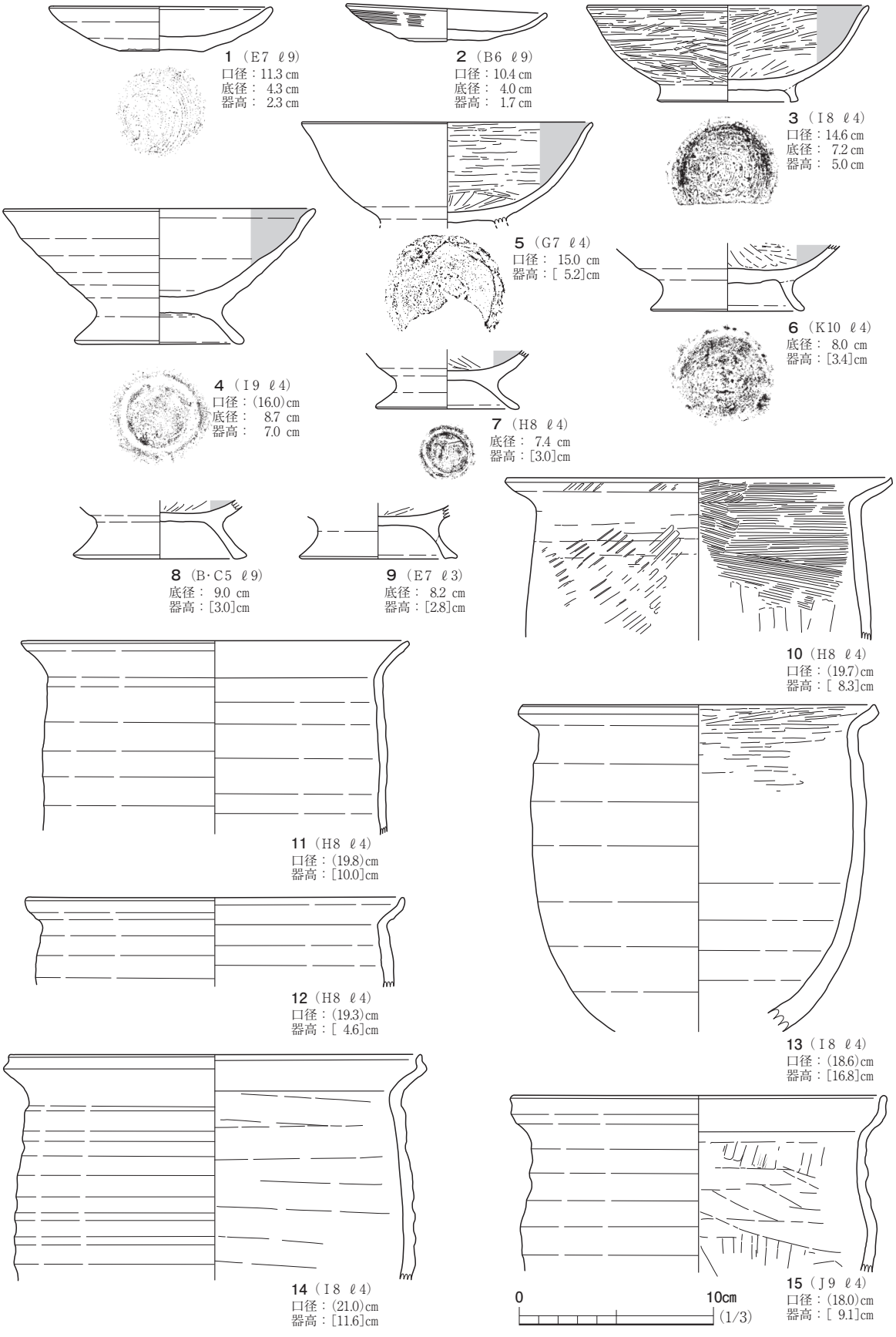


図58　1号流路跡出土遺物（3）土師器

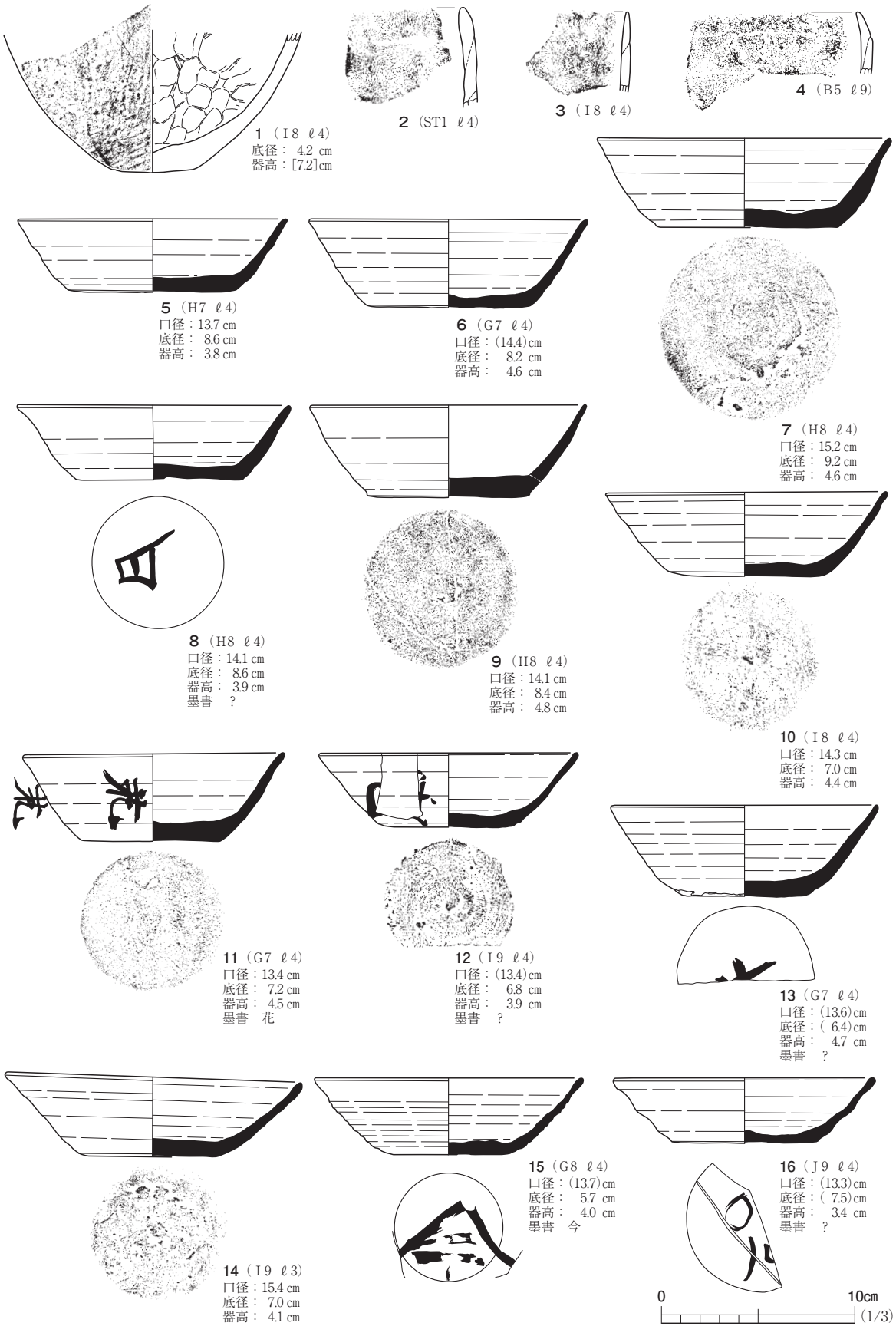


図59　1号流路跡出土遺物（4）土師器・須恵器

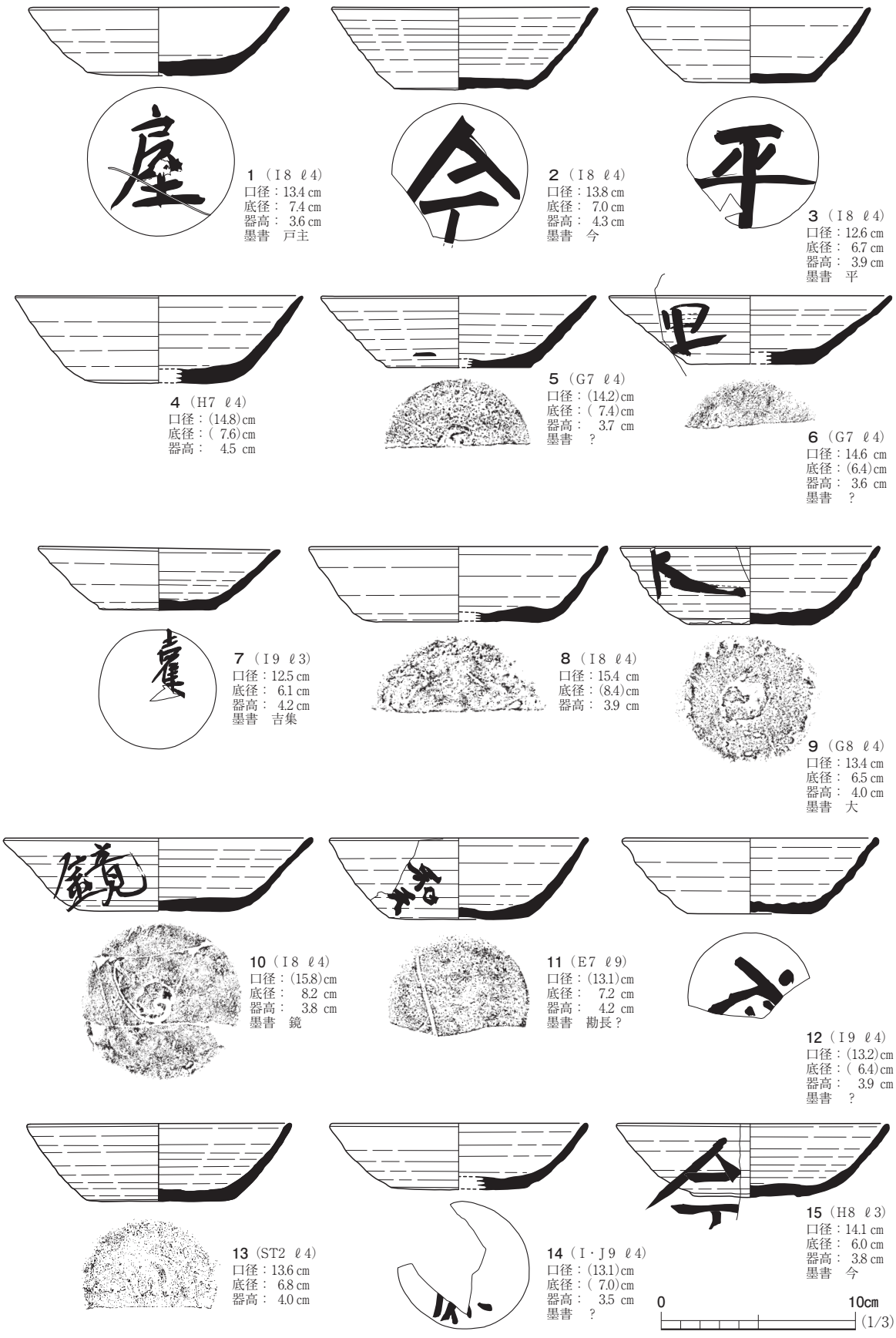


図60　1号流路跡出土遺物（5）須恵器

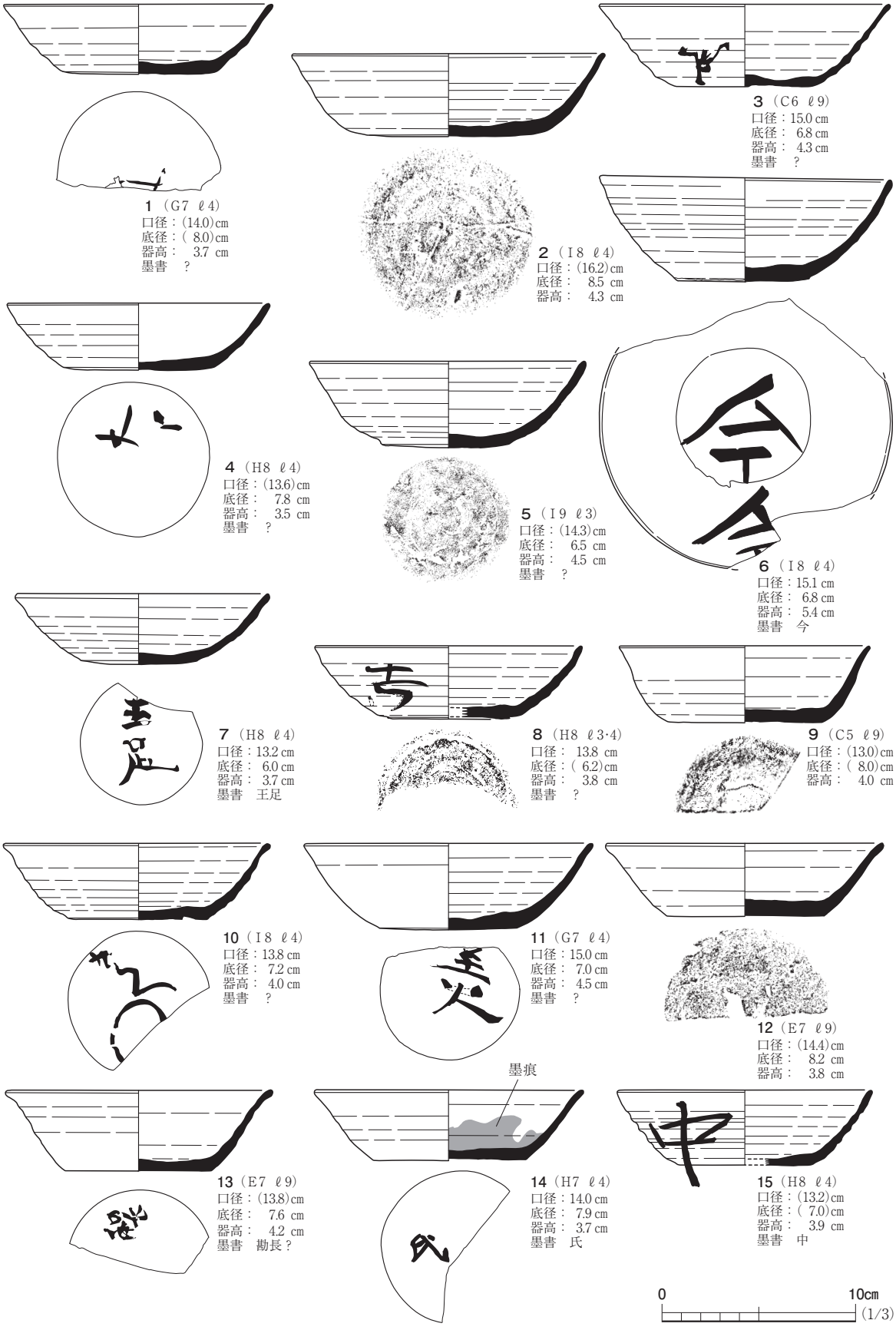


図61　1号流路跡出土遺物（6）須恵器

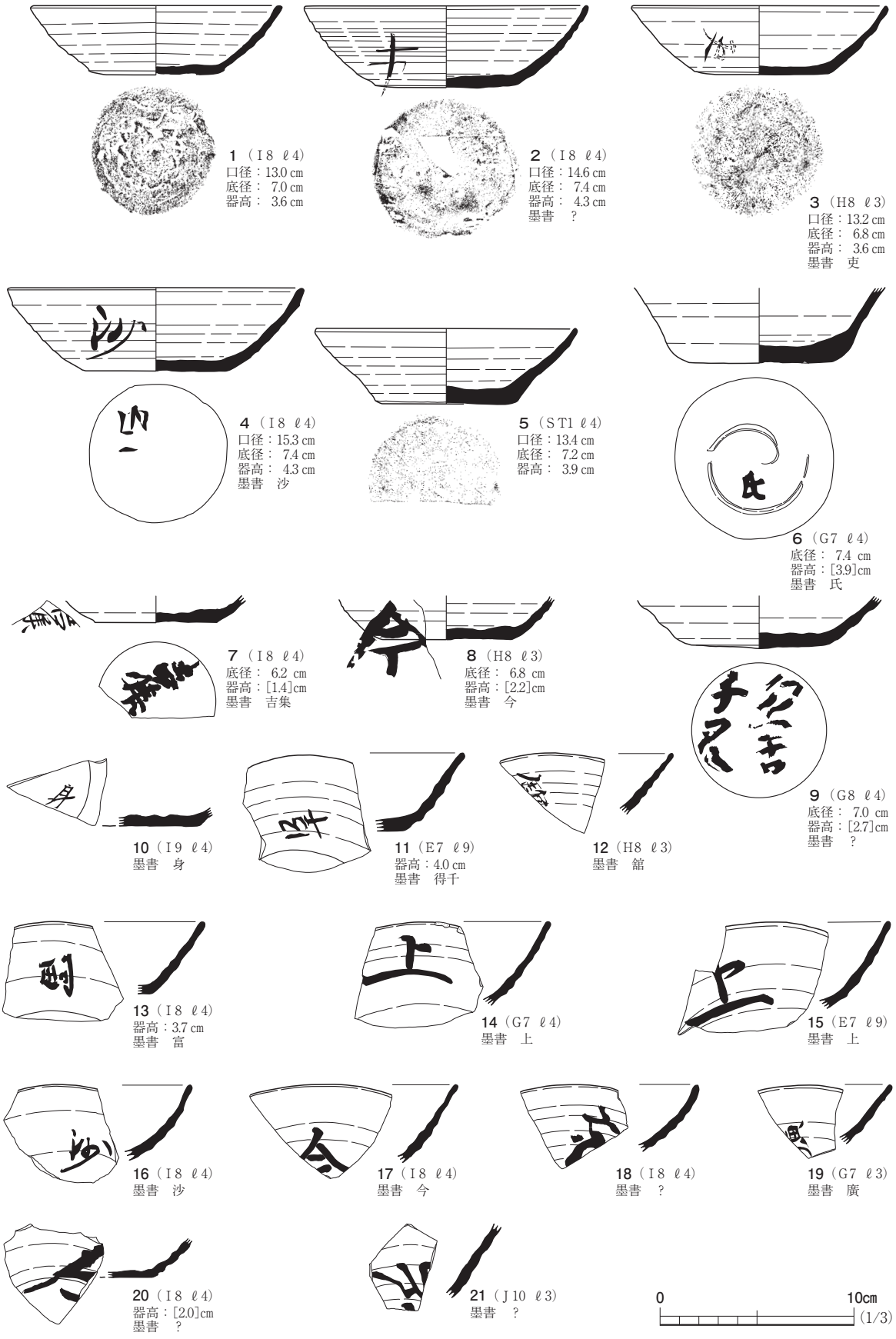


図62　1号流路跡出土遺物（7）須恵器

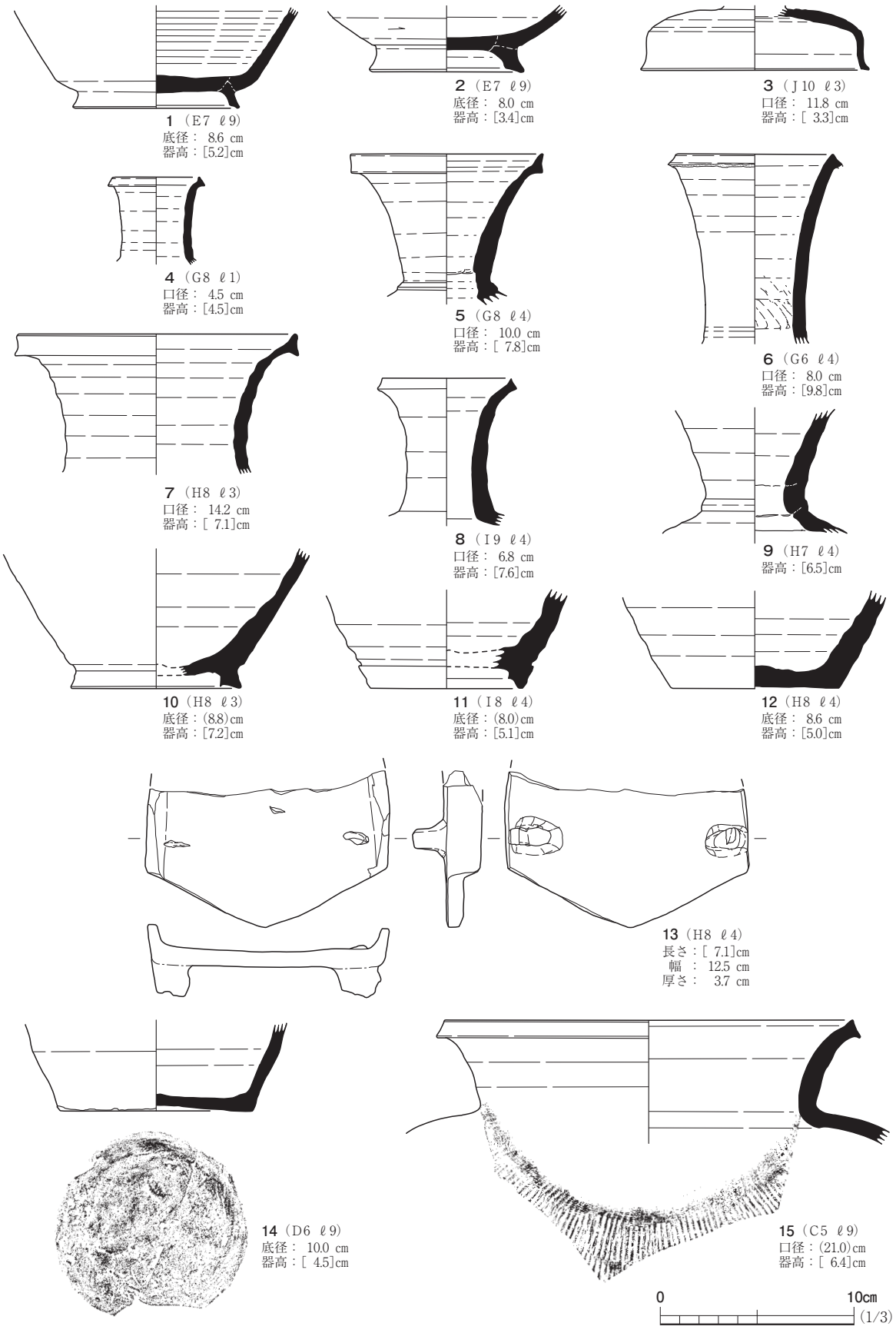


図63　1号流路跡出土遺物（8）須恵器

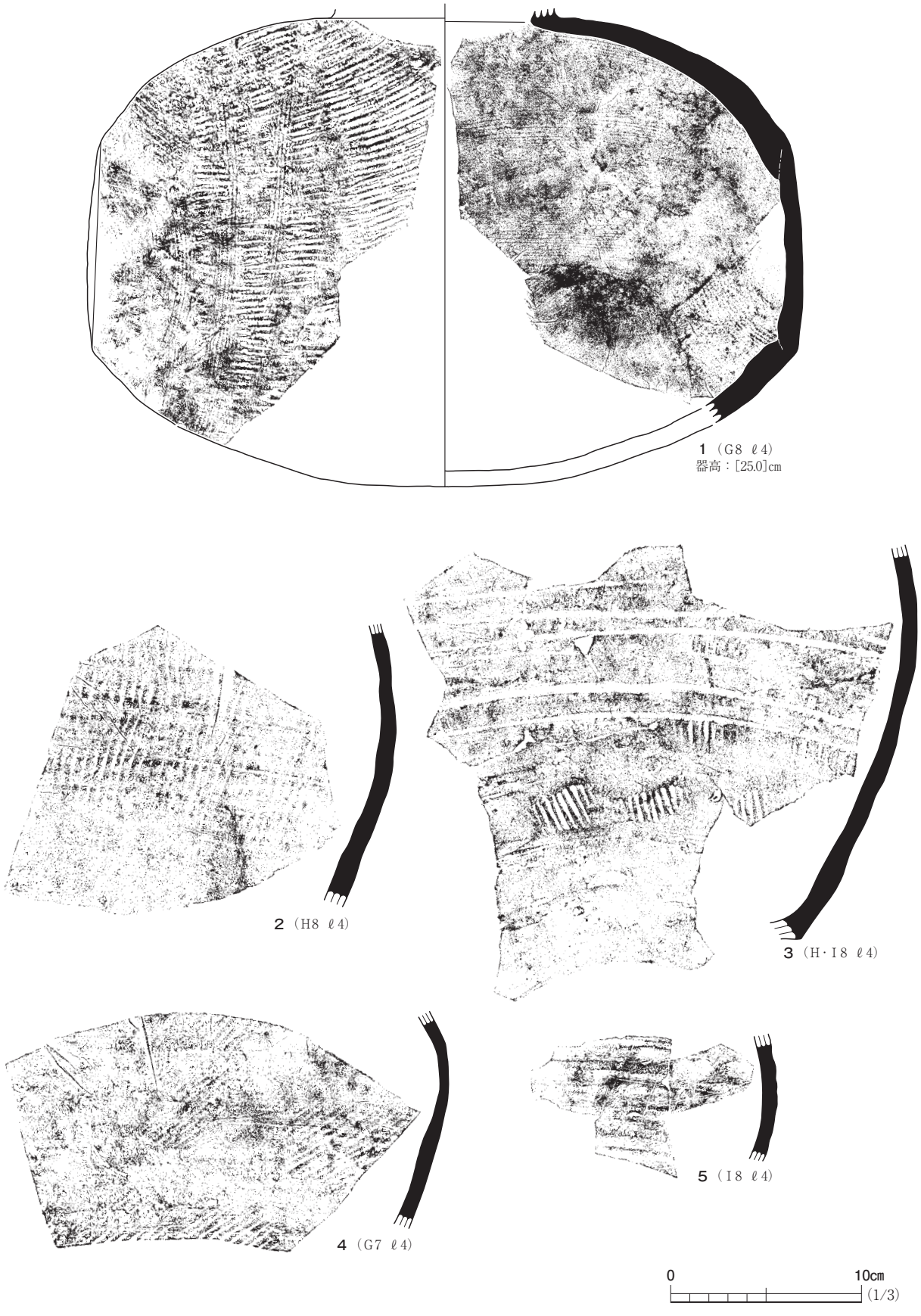


図64　1号流路跡出土遺物（9）須恵器

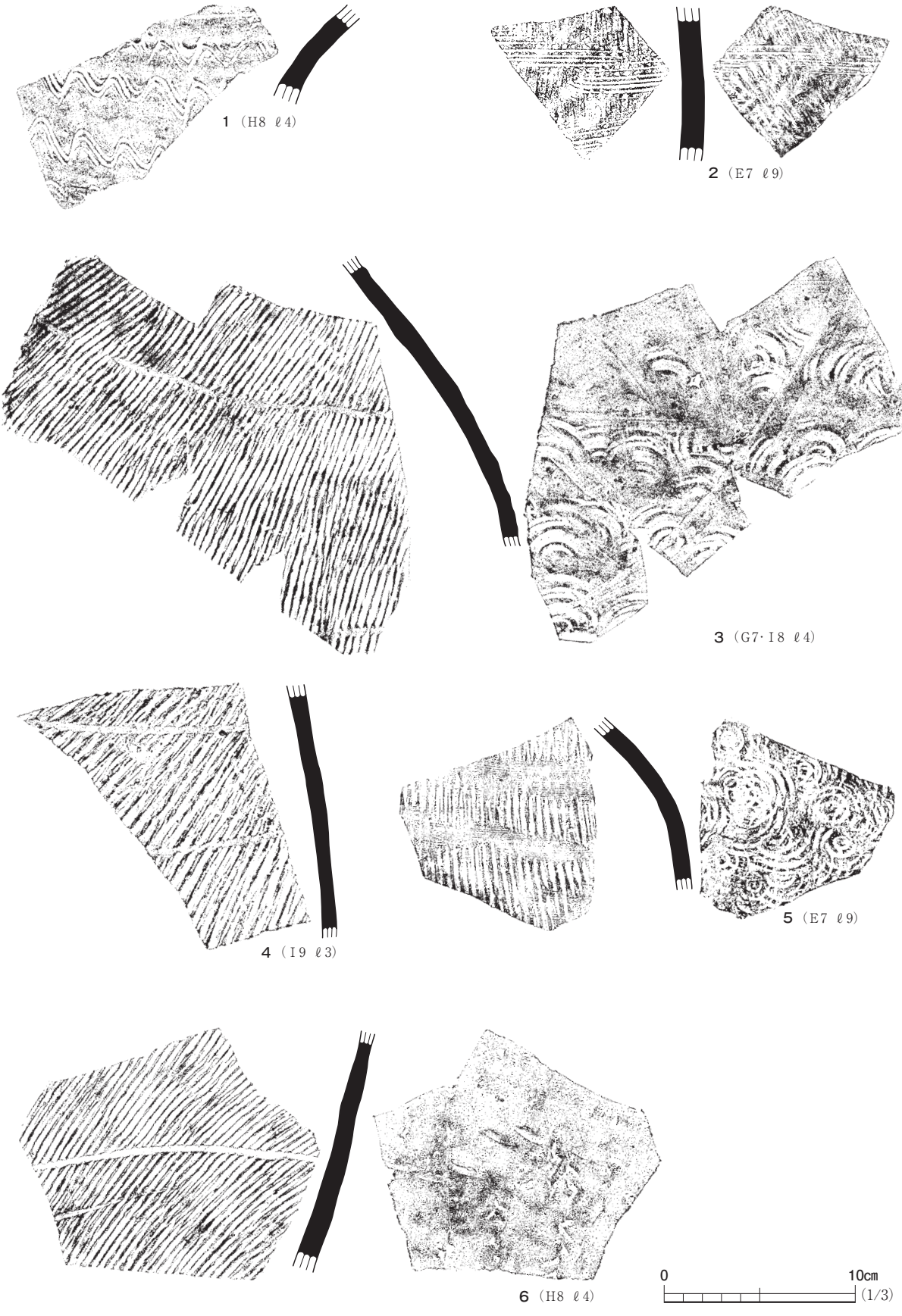


図65　1号流路跡出土遺物（10）須恵器

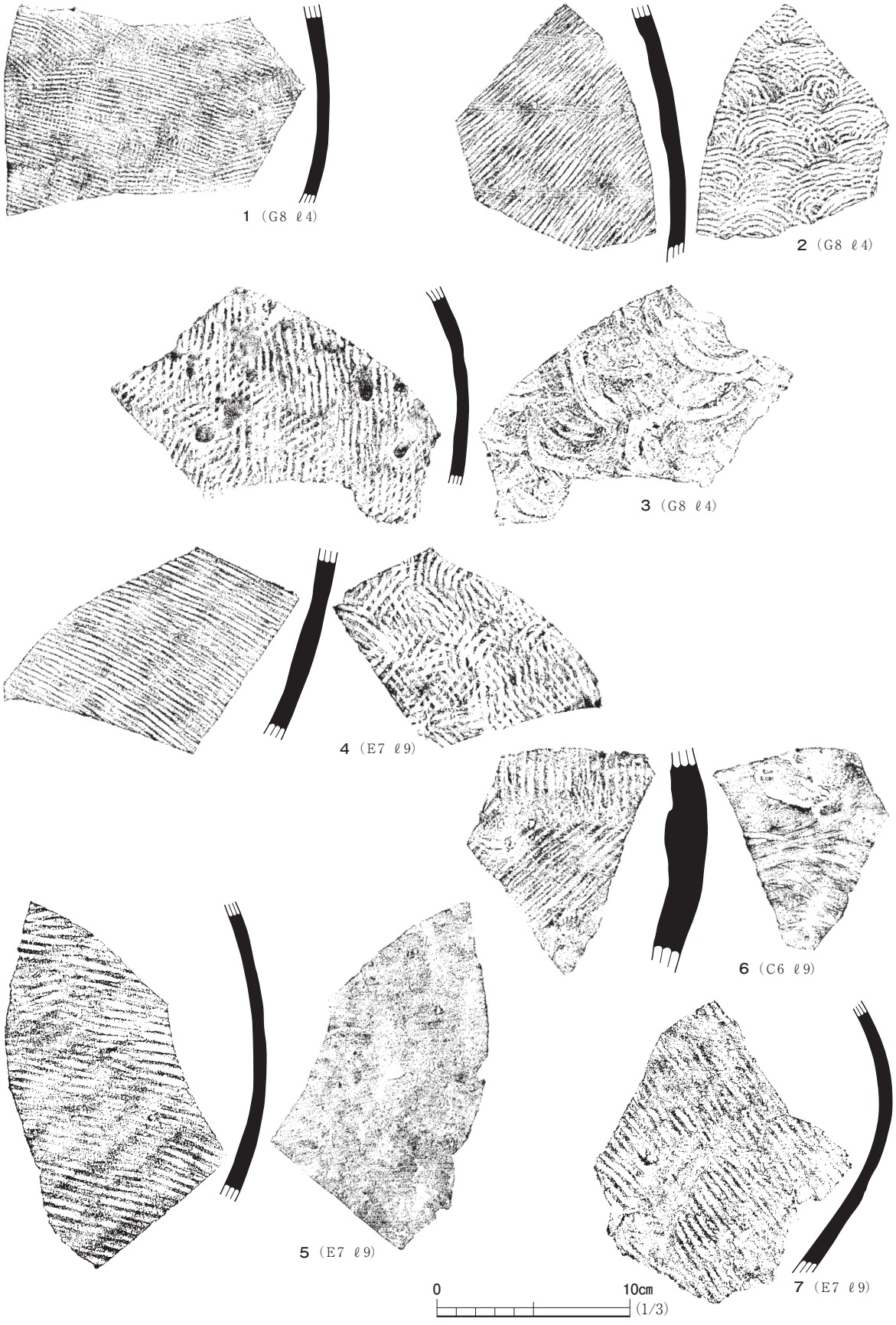


図66　1号流路跡出土遺物（11）須恵器

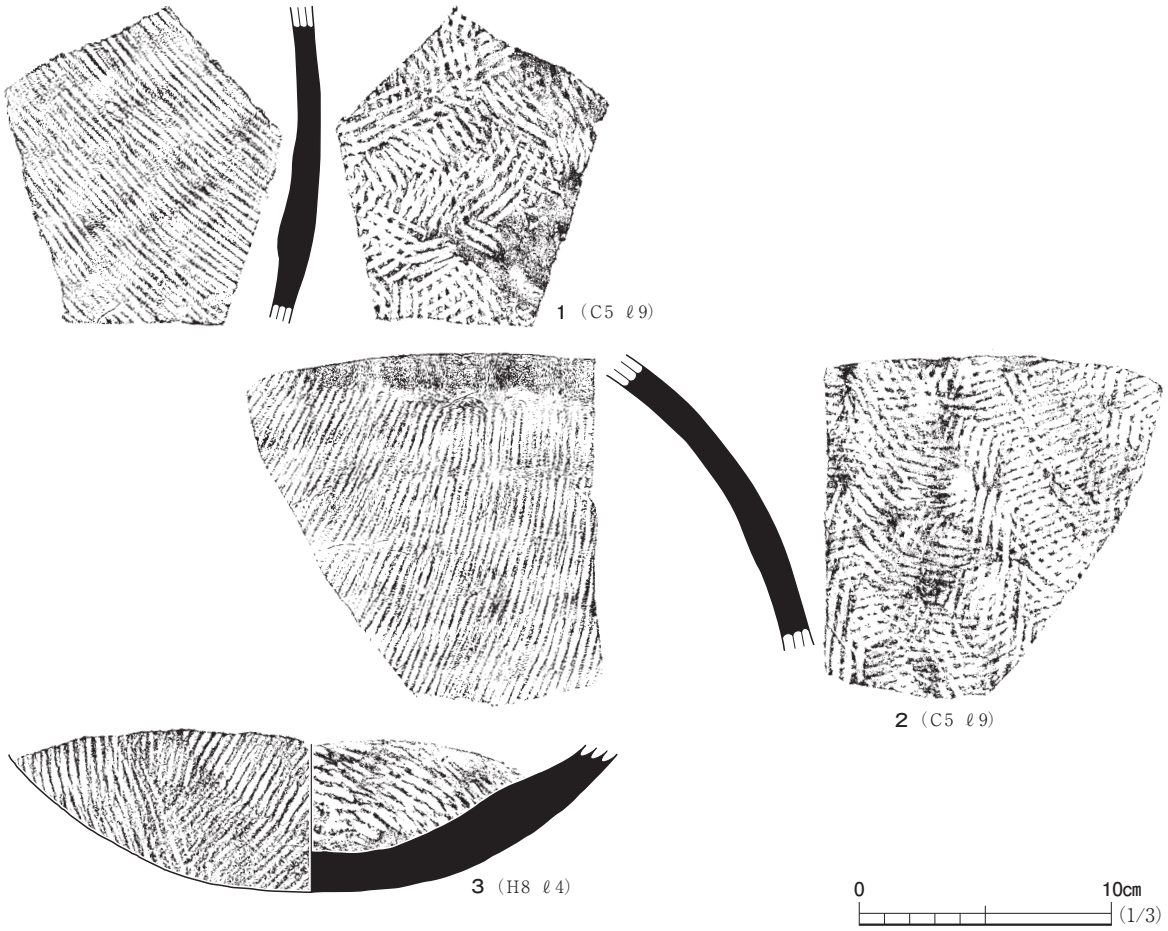


図67　１号流路跡出土遺物（12）須恵器

いるところから斎串となるかもしれない。８は串状の木製品，10は当初木簡と思われたが，文字がなかったところから付札状木製品としたい。９は精巧な作りで，舟底形の側面の一部にキザミ痕跡があるが，用途は不明である。11は薄い板状で，７と同様斎串となる可能性がある。12はヘラ状の木製品である。13は下駄の未成品と考えられる。14・15は火付木である。図70－１～６・８は板状の木製品で，１については両端部に加工痕のあるところから部材と思われる。７は杭で，芯持ち材の先端を削っている。図71－１・２は堆積土ℓ１～ℓ２に打ち込まれた状態で出土した大型の木製品で，１には明瞭なほぞ穴が開けられている。２は板状を呈しており，ともに建築部材と推定される。３・４も板状の部材であると思われる。

土 製 品　図71－５は，円柱状を呈した土製の支脚と思われる。

石　　器　図71－６はチャート製のアメリカ式石鏃である。流路跡からは弥生時代の土器も出土しており，その時期のものと思われる。７は頁岩製の打製石斧で，底面付近の礫層から出土した。片面の中央が高い形態に作られており，断面が三角形状を呈している。縄文時代草創期初めの神子柴・長者久保段階の石器と推定される。

鉄 製 品　図71－８は一番底面の礫層から出土した鍬または鋤先である。遺存部での全長が20.8㎝で先端部が欠損している。10は刀子で，中央部で折れ曲がっている。９は，断面が四角形で短冊

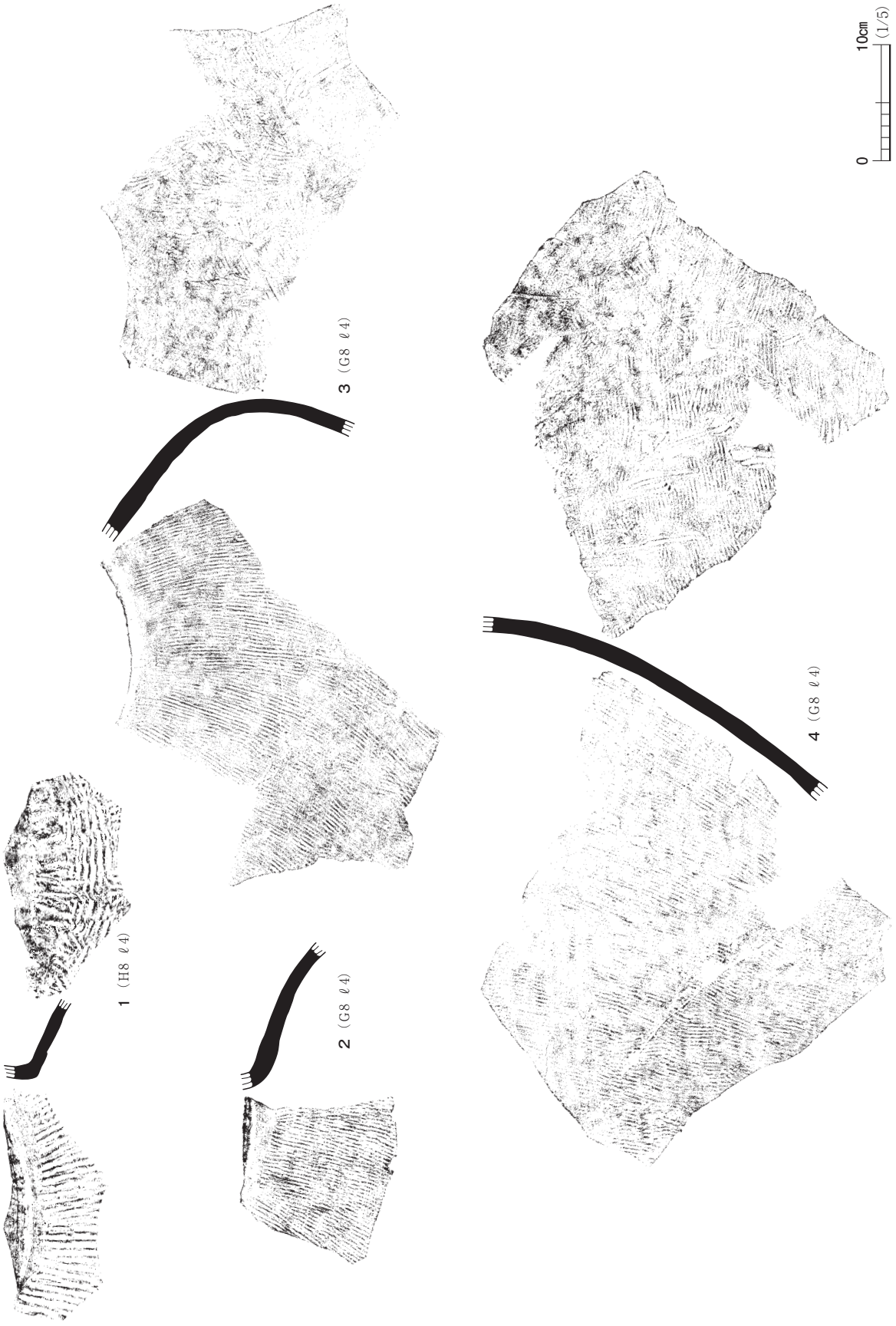
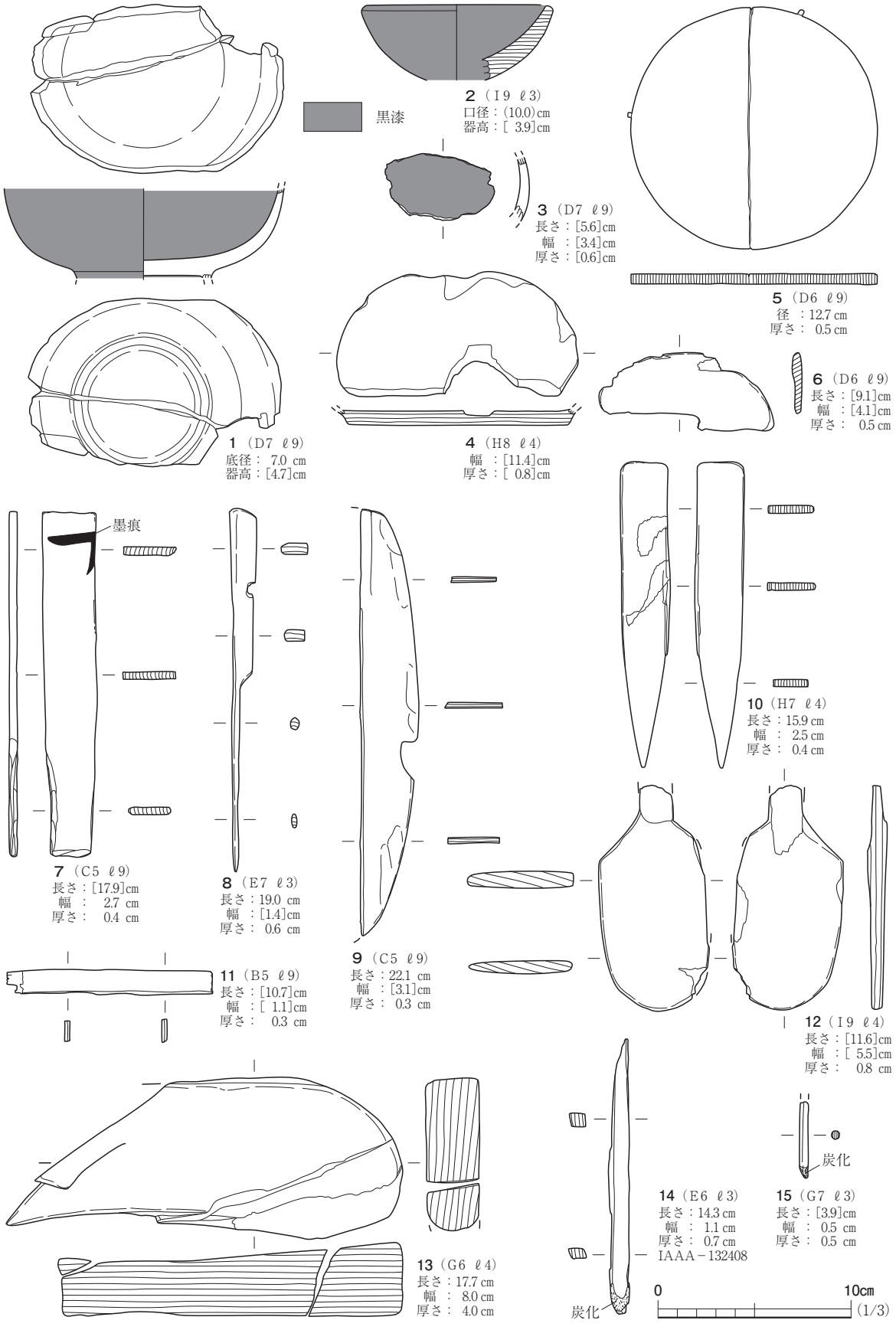


図68　1号流路跡出土遺物（13）須恵器



1（D7 ℓ9）
底径： 7.0 cm
器高：[4.7]cm

2（I9 ℓ3）
口径：(10.0)cm
器高：[3.9]cm

3（D7 ℓ9）
長さ：[5.6]cm
幅 ：[3.4]cm
厚さ：[0.6]cm

4（H8 ℓ4）
幅 ：[11.4]cm
厚さ：[0.8]cm

5（D6 ℓ9）
径 ：12.7 cm
厚さ： 0.5 cm

6（D6 ℓ9）
長さ：[9.1]cm
幅 ：[4.1]cm
厚さ： 0.5 cm

7（C5 ℓ9）
長さ：[17.9]cm
幅 ： 2.7 cm
厚さ： 0.4 cm

8（E7 ℓ3）
長さ：19.0 cm
幅 ：[1.4]cm
厚さ： 0.6 cm

9（C5 ℓ9）
長さ：22.1 cm
幅 ：[3.1]cm
厚さ： 0.3 cm

10（H7 ℓ4）
長さ：15.9 cm
幅 ： 2.5 cm
厚さ： 0.4 cm

11（B5 ℓ9）
長さ：[10.7]cm
幅 ：[1.1]cm
厚さ： 0.3 cm

12（I9 ℓ4）
長さ：[11.6]cm
幅 ：[5.5]cm
厚さ： 0.8 cm

13（G6 ℓ4）
長さ：17.7 cm
幅 ： 8.0 cm
厚さ： 4.0 cm

14（E6 ℓ3）
長さ：14.3 cm
幅 ： 1.1 cm
厚さ： 0.7 cm
IAAA－132408

15（G7 ℓ3）
長さ：[3.9]cm
幅 ： 0.5 cm
厚さ： 0.5 cm

図69　1号流路跡出土遺物（14）木製品

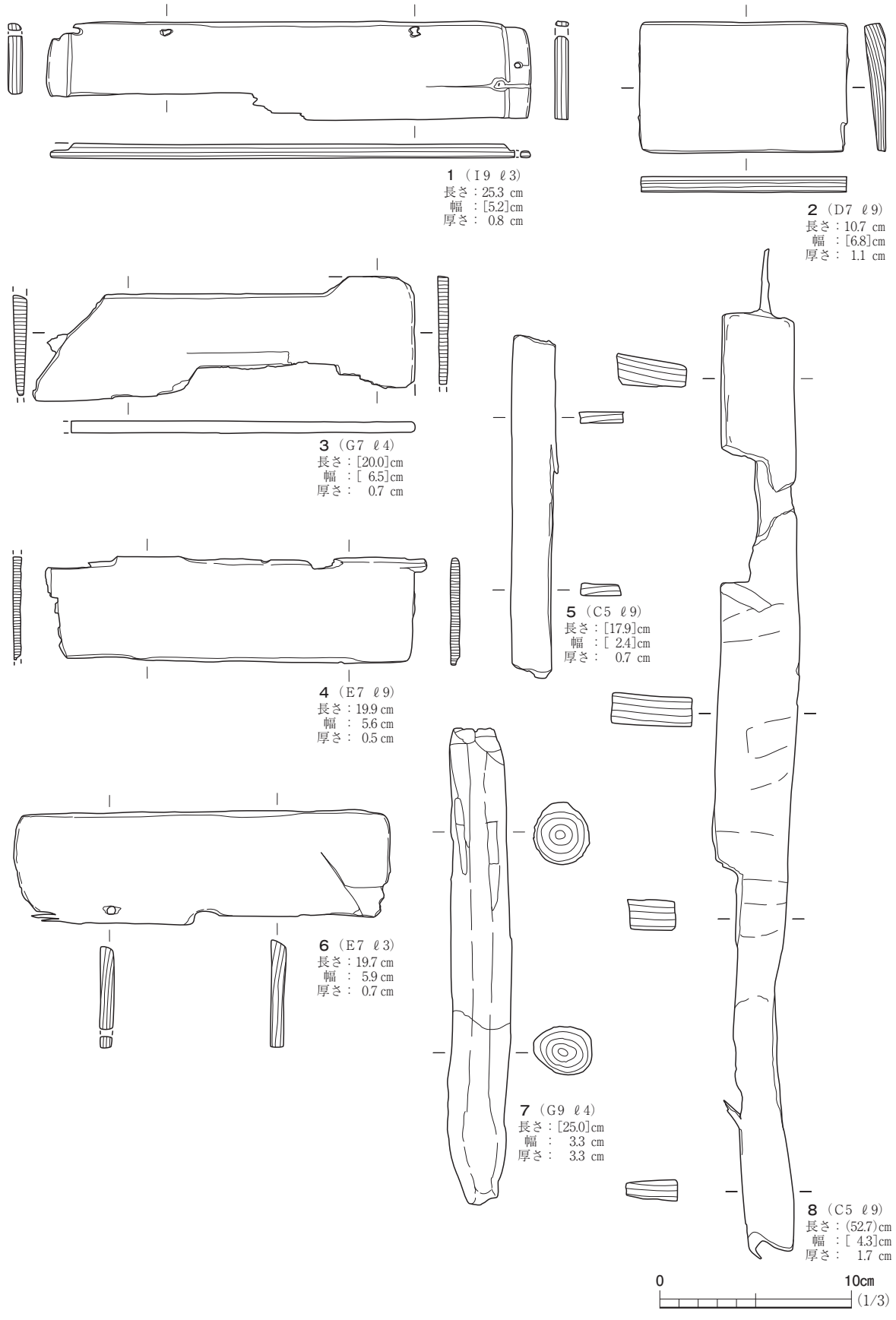


図70　1号流路跡出土遺物（15）木製品

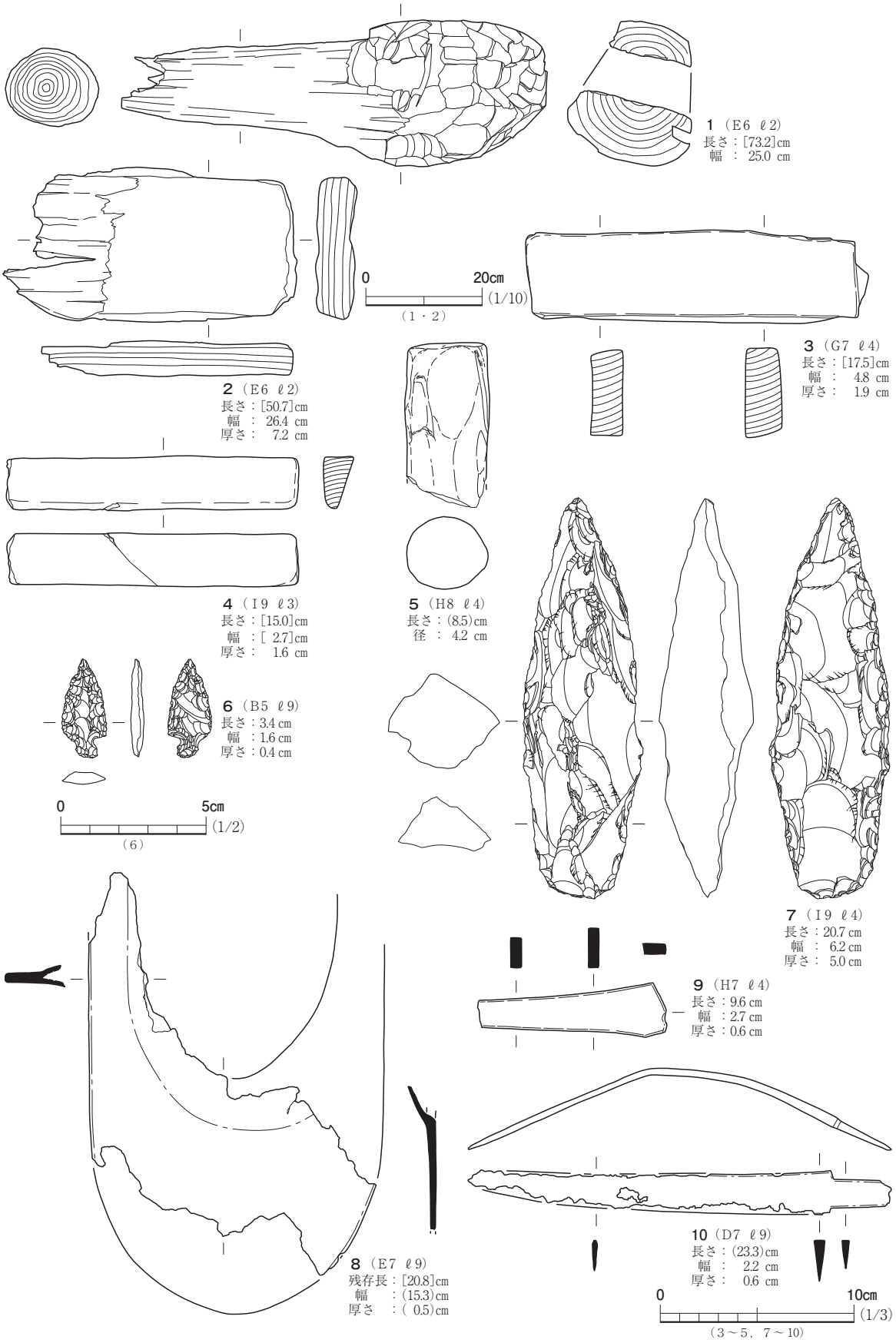
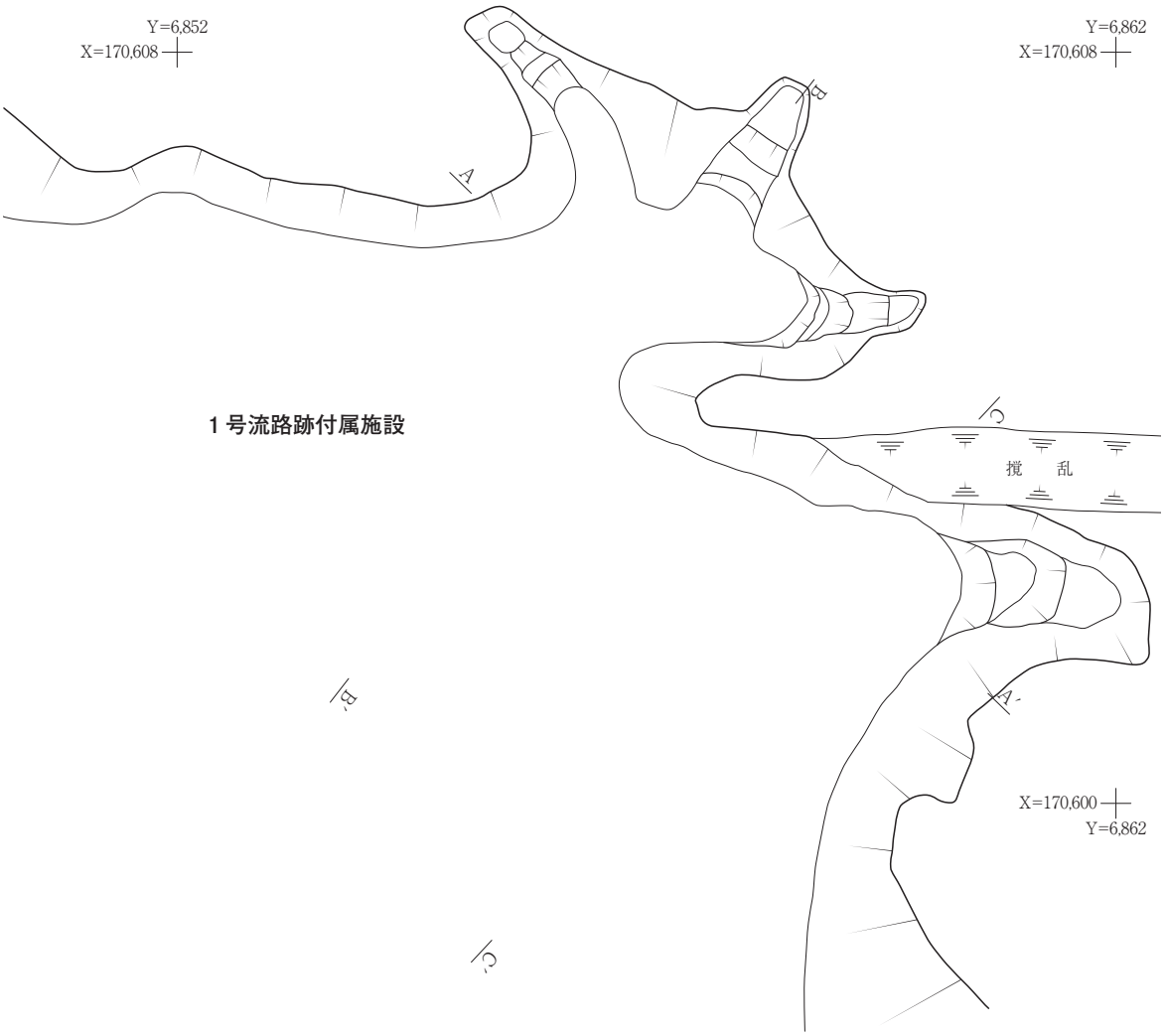
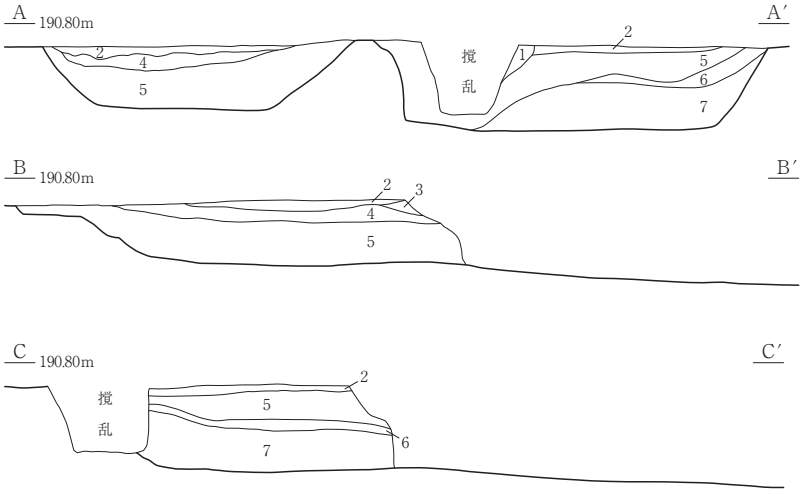


図71　1号流路跡出土遺物（16）木製品・石器・鉄製品





1号流路跡付属施設

1　黒褐色粘質土　10YR3/1
（1㎝大の小礫ごく少量含む）
2　黒褐色粘質土　10YR2/2
（酸化鉄をやや多く含む）
3　黒色粘質土　7.5YR2/1
（酸化鉄をやや多く含む）
4　黒色粘質土　10YR1.7/1
（炭化物粒を少量含む）
5　黒色粘質土　10YR2/1
（炭化物粒を少量含む）
6　暗褐色粘質土　7.5YR3/3
（酸化鉄を多く含む）
7　黒色粘土　10YR2/1

0　2m
（1/80）

図72　1号流路跡付属施設

形を呈するが，その性格については不明である。

附属施設（図72，写真27）

１号流路跡からは，Ⅱ区のＪ･Ｋ８グリッド付近から附属施設と思われる掘り込みが確認された。付近の壁面は，底面付近から北側に向かって一番緩く立ち上がる箇所になっており，その付近の１号流路跡の検出時に，上面の堆積土が連続しているところから，同一時期の遺構と判断した。

遺構は流路跡の北壁に連続する２か所の突出部となっている。その規模は，開口部分の幅が約11ｍ，そこから北側突出部先端までの長さが4.6ｍ，南側突出部先端までの長さが4.2ｍとなっている。検出面から底面までの高さが，北側で65㎝，南側で96㎝となっている。流路跡底面から附属施設底面は連続するごく緩い緩斜面となっており，北側突出部では３方向にそれが張り出す形となっている。各方向の張り出しには２段のステップ状の平坦部がある。南側突出部でも２段の張り出し状のステップがある。

遺物は，堆積土中からロクロ土師器と須恵器の細片が出土している。

本遺構は，１号流路跡の河岸に降りる降り口と思われる遺構で，構築された部分が流路跡でも一番緩い立ち上がりを持つ部分であるところから，先に船溜まり等の施設があった可能性がある。その時期は１号流路跡同様，９世紀を中心とする年代と考えられる。また，位置関係から掘立柱建物跡群と同時に存在し利用されていた可能性も考えられる。

ま と め

本流路跡の底面礫層からその上面の砂層で出土した遺物は，平安時代９世紀を中心とするものと推定される。また，８世紀後半に機能開始したと思われる２号流路跡よりも新しいことから，本流路跡は９世紀を中心とする年代に機能したものと推定される。また，附属施設が建物跡群側の壁面に構築されている状況等から，北側建物跡群と同時に存在していた可能性も考えられる。（藤　谷）

２号流路跡

遺　　構（図73・74，写真28～30）

２号流路跡は，Ⅰ区で検出された流路跡で，一部Ⅱ区にも広がっている。Ⅰ区の上面の土坑･ピットを調査する段階で，検出面は北東側の灰黄褐色粘質土（ＬⅡ）とは異なる検出面となっていた。上面の調査を終了後，サブトレンチを設定し，下部の土層を確認したところ，砂層や礫層から須恵器の完形品などの遺物が出土した。そこで，１号流路跡と同様に上部土層を重機で削除し，下部の土層について，手掘りで調査を実施した。

２号流路跡はメインの流路がＣ・Ｄ２グリッド付近のⅠ区北壁から20ｍ程南側で南東方向へ曲がる形状をしている。その南側の１号流路跡との境界までと３号流路跡との間は，河川の氾濫によって形成された礫層の凹凸状地形がある。また，Ｂ４グリッド付近の若干の凹凸部分は，東から流れた流路跡の流れによって運ばれた礫を含む層が堆積した部分で更に西に広がることも予想される。

Ⅰ区での流路跡主流の規模は，長さ約48ｍ，幅6.4～11.5ｍである。壁面の立ち上がりは，東壁

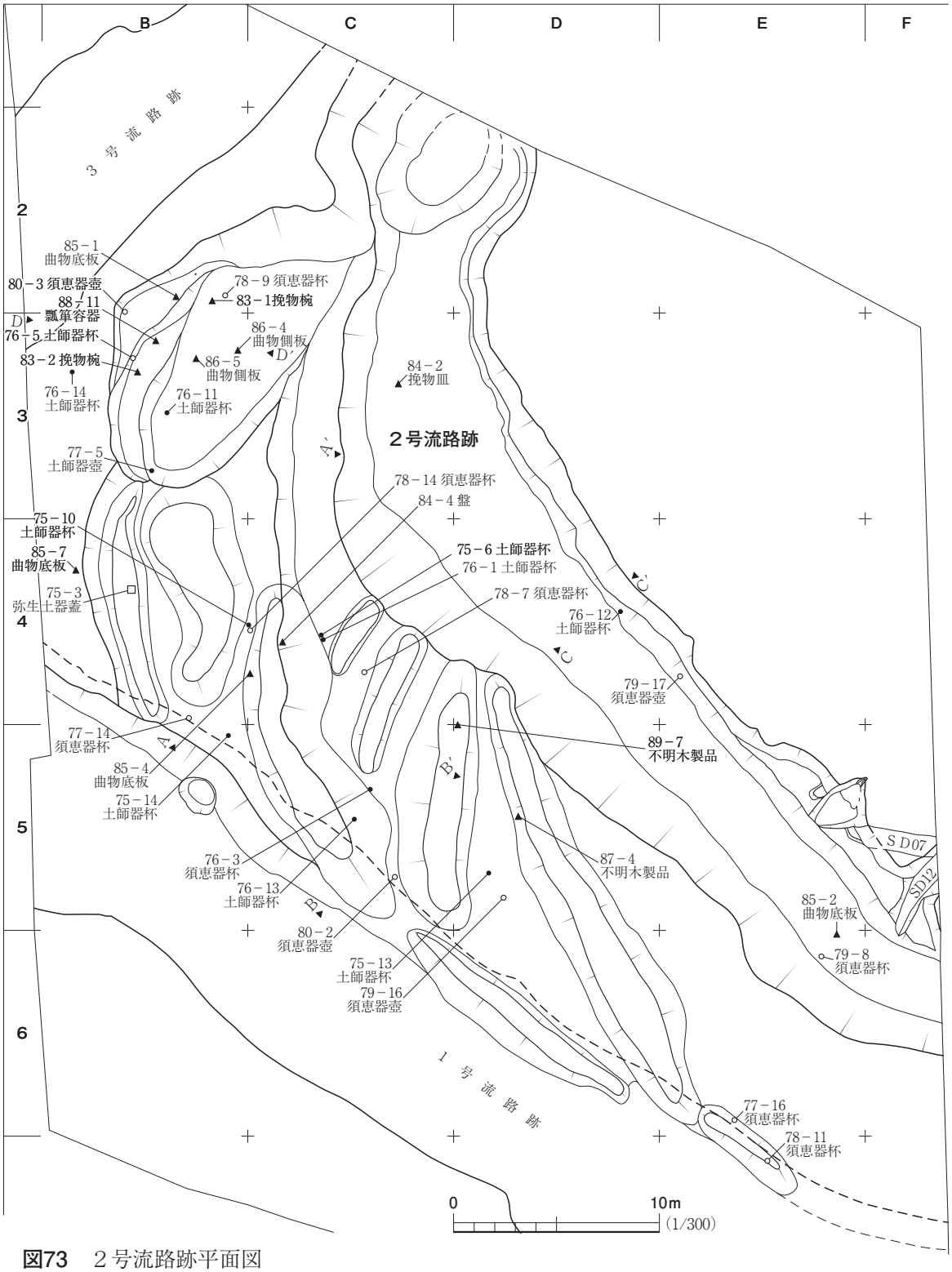
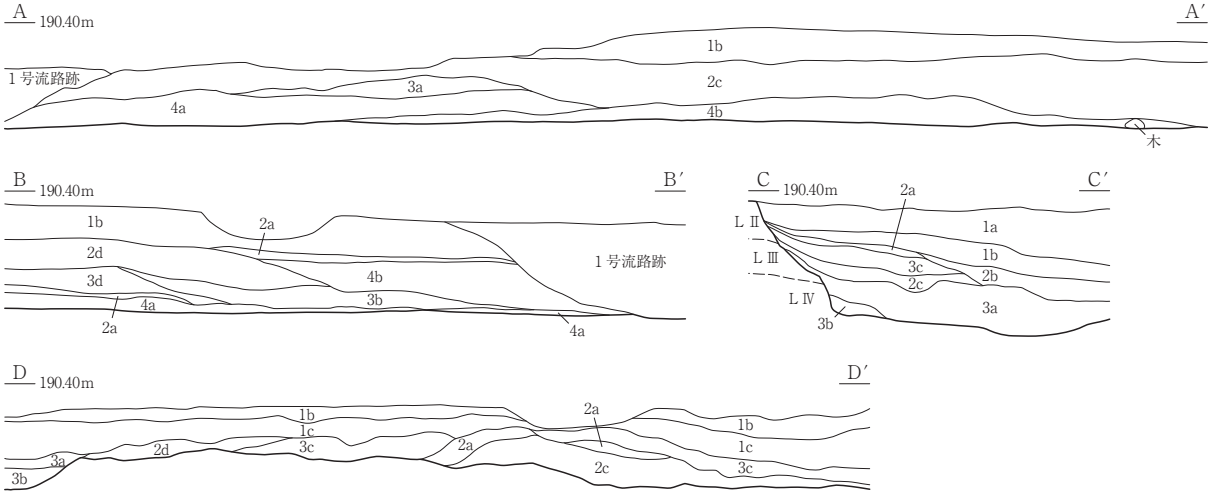


図73　2号流路跡平面図

がやや急で，遺構検出面からの深さは最深部で1.7ｍ。また，南北の高低差は45㎝で北側が低い。堆積土を４層に分層した。このうちℓ１・２が，機能停止後の自然堆積層，ℓ３が流水作用によって堆積した層，ℓ４が底面上の礫層となっている。１号流路跡との重複関係は，Ⅰ・Ⅱ区境界の壁断面で観察され，それを切っている。Ⅱ区については，断面より14ｍ程東側に設置したサブトレ



２号流路跡土層注記

１ａ　黒褐色土　10YR3/2　砂層，粘土化，上方赤化
１ｂ　灰黄褐色土　10YR6/2　砂層
１ｃ　褐灰色土　10YR4/1
　砂粒主体，黒色粘質土少量（下方），炭化物若干含む，しまり良
２ａ　黒色土　10YR2/1　黒色粘質土主体，砂粒若干含む
２ｂ　にぶい黄褐色土　10YR7/2　黄褐色粘質土
２ｃ　黒褐色土　10YR3/2　黒色粘質土主体，砂粒少量含む，縞状堆積
２ｄ　黒褐色土　10YR3/1　黒色粘質土主，砂粒縞状堆積
３ａ　褐灰色土　10YR6/1　砂層，黒色粘質土縞状堆積
３ｂ　にぶい黄褐色土　10YR4/3
　砂粒主体（0.1～0.3㎜大の均質な砂粒）しまり良
３ｃ　灰黄褐色土　10YR5/2　黒色粘質土・砂粒・縞状堆積（砂粒主体）
３ｄ　褐色土　10YR4/4　砂粒，小礫混土，黒色粘質土縞状堆積
３ｅ　褐灰色土　10YR5/1　砂粒主，礫・黒色粘質土ブロック少量含む
３ｆ　青灰色土　5B6/1　砂層
４ａ　褐灰色土　10YR4/1　砂粒主体，黒色粘質土ブロック状に部分的に堆積，
　植物質物質少量含む，礫少量含む
４ｂ　灰黄褐色土　10YR6/2　砂層

図74　２号流路跡断面図

ンチ断面で重複関係が明確でなかったため，その間で１号流路跡に切られたものと思われる。

遺　　物（図75～89，写真33～41・43～54）

縄文・弥生土器　図75－１は縄文前期後半の鋸歯状の貼り付けを持つ深鉢，２が弥生土器甕，３が弥生土器蓋である。

土 師 器　図75－４が古墳時代の高杯の脚部である。図75－５～17，図76，図77－１～３が内面黒色処理されたロクロ成形の杯である。底部から体部下半にかけて回転ヘラケズリ調整されたものがほとんどで，その他，手持ちヘラケズリが施され，底部糸切り痕が残るもの図76－12も出土している。墨書されたものもあり，本遺跡特有の文字「今」が書かれたもの図77－１・２や遺跡の性格に関する文字「北家足」が書かれたもの図76－８もある。図77－４が小型の壺，図77－５がロクロ成形の小型の甕，７・９・10がややロクロ成形の長胴甕であり，10には外面にタタキ痕が残されている。図77－６は筒形土器の口縁部である。

須 恵 器　図77－11～16，図78，図79－１～６が杯である。口径に対して底径が大ぶりなもの図77－11～13から底径が小ぶりのものまでバラエティーがある。墨書や線刻が認められるものも出土しており，遺跡の性格に関するものに「倉人」図78－３や「田家」図78－９がある。また，図78－14・15は内面に墨痕が残されている。図79－７～９が高台杯，10が盤である。11は内面に平滑な研磨痕があり墨痕もあるところから，蓋の転用硯であると考えられる。図79－12・13が小型の壺である。図79－14～16，図80－１～３が長頸瓶で，頸部が明瞭に残るものにはリング状の凸帯が付いている。図80－４は大甕の口縁部，５・６が底部である。図80－７，図81・82は大甕ある

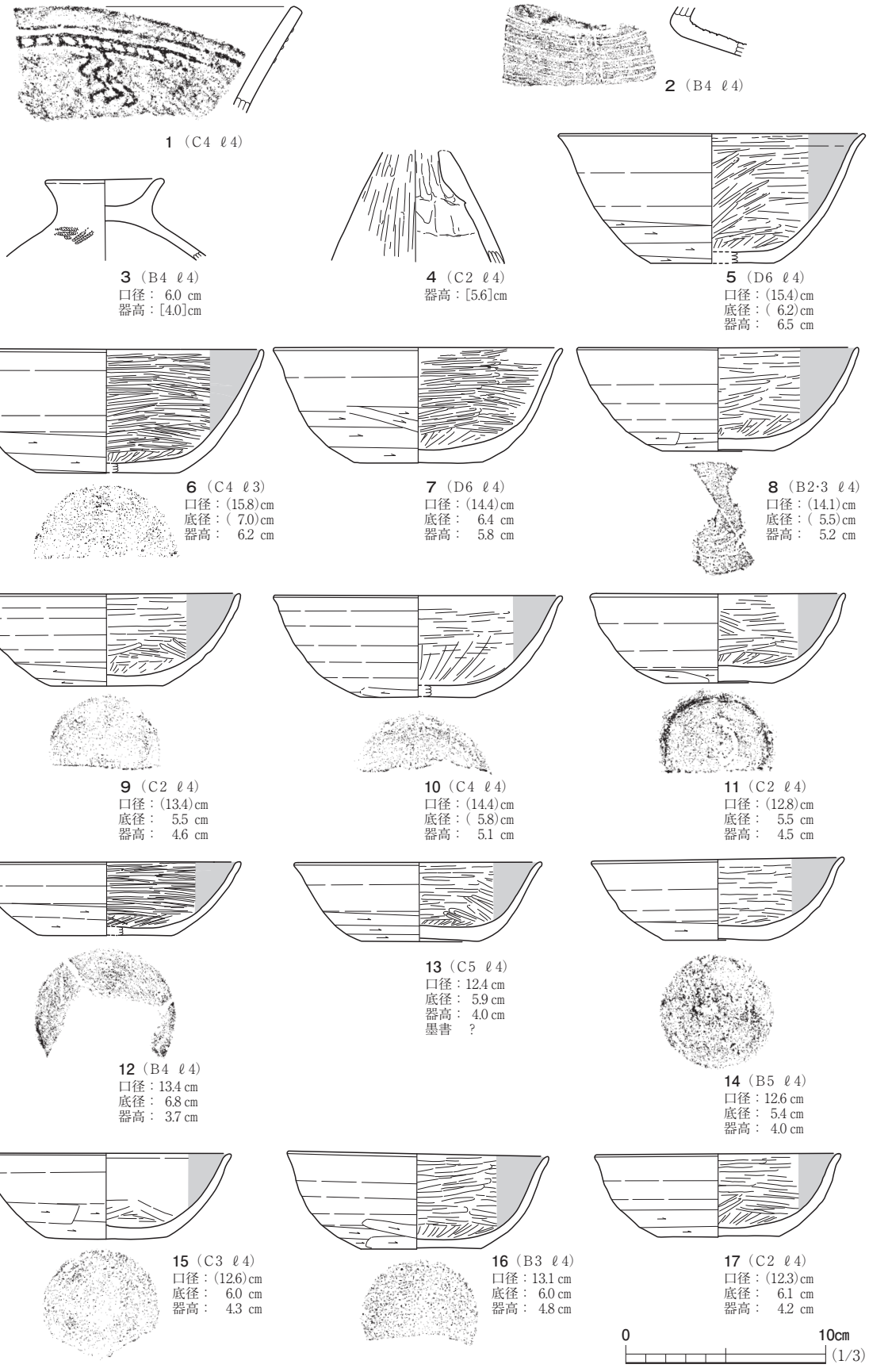


図75　2号流路跡出土遺物（1）縄文土器・弥生土器・土師器

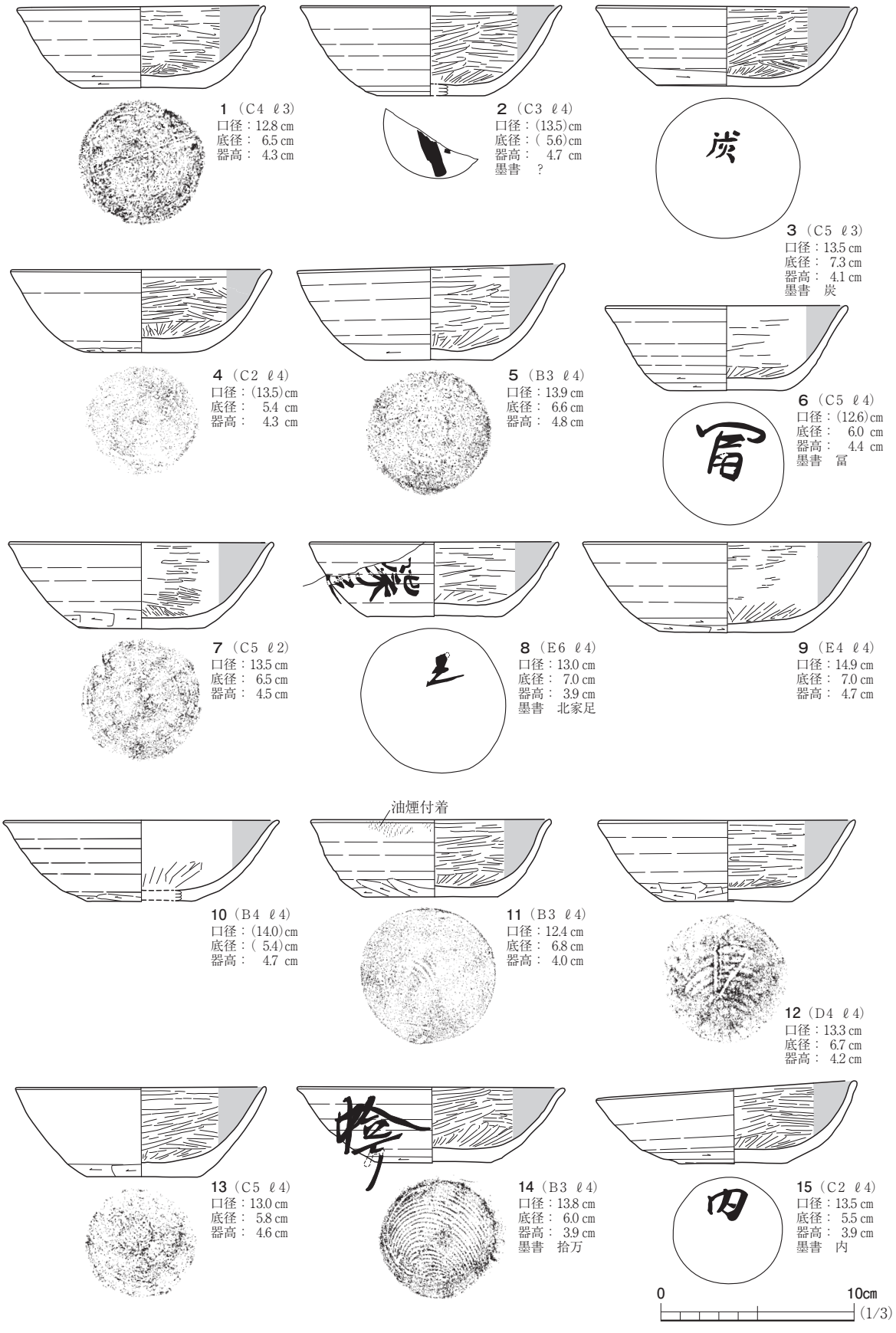


図76　2号流路跡出土遺物（2）土師器

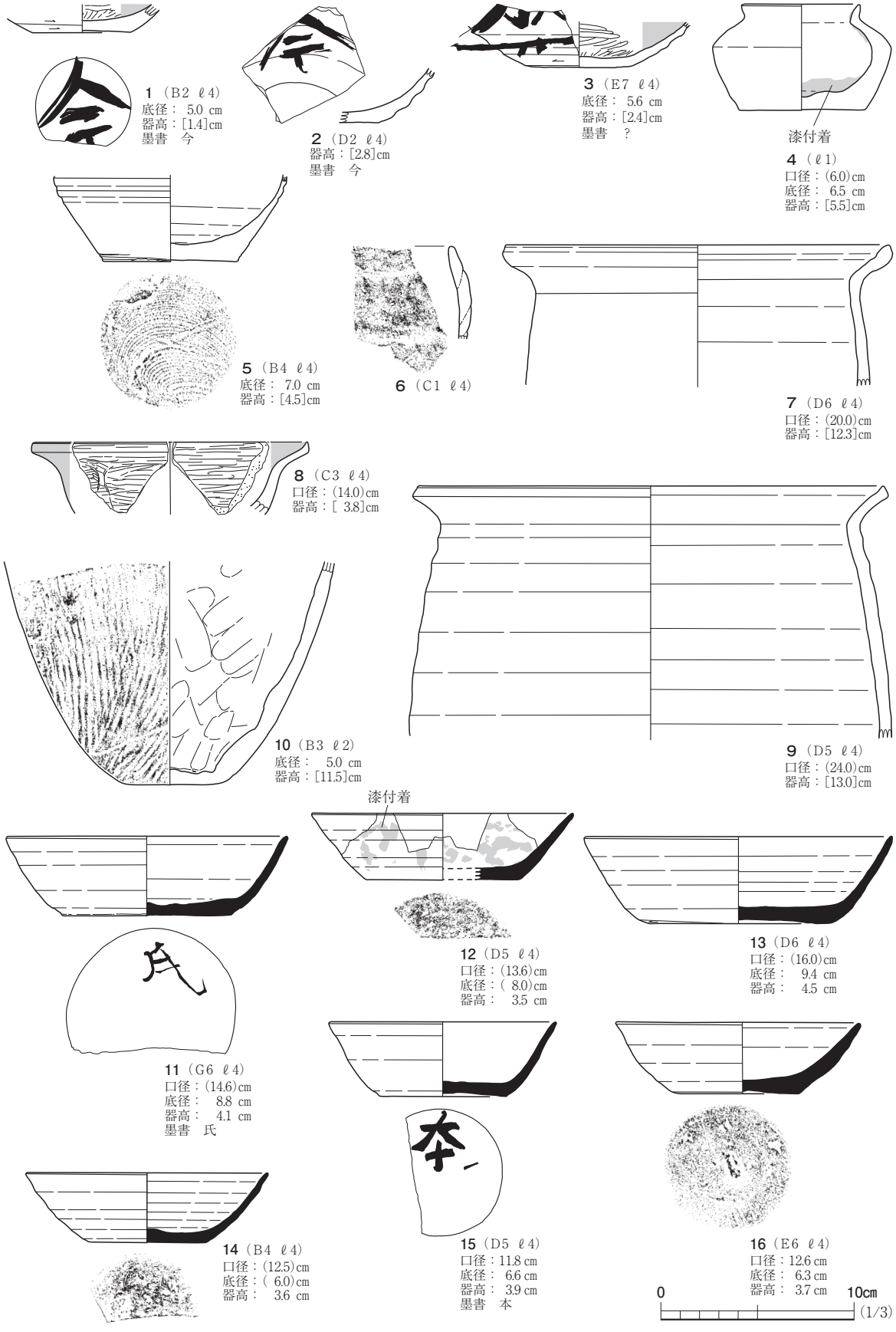


図77　2号流路跡出土遺物（3）土師器・須恵器

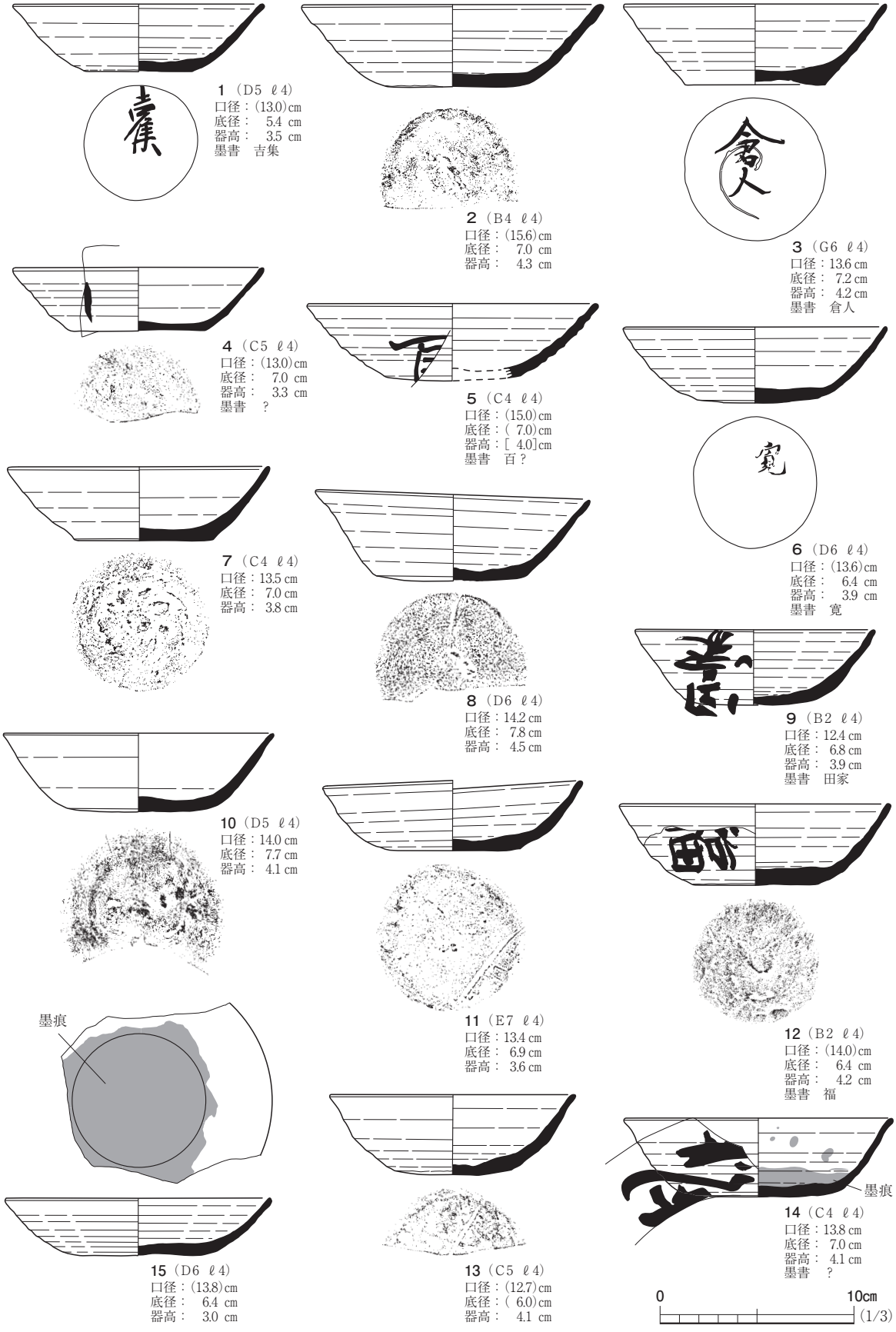


図78　2号流路跡出土遺物（4）須恵器

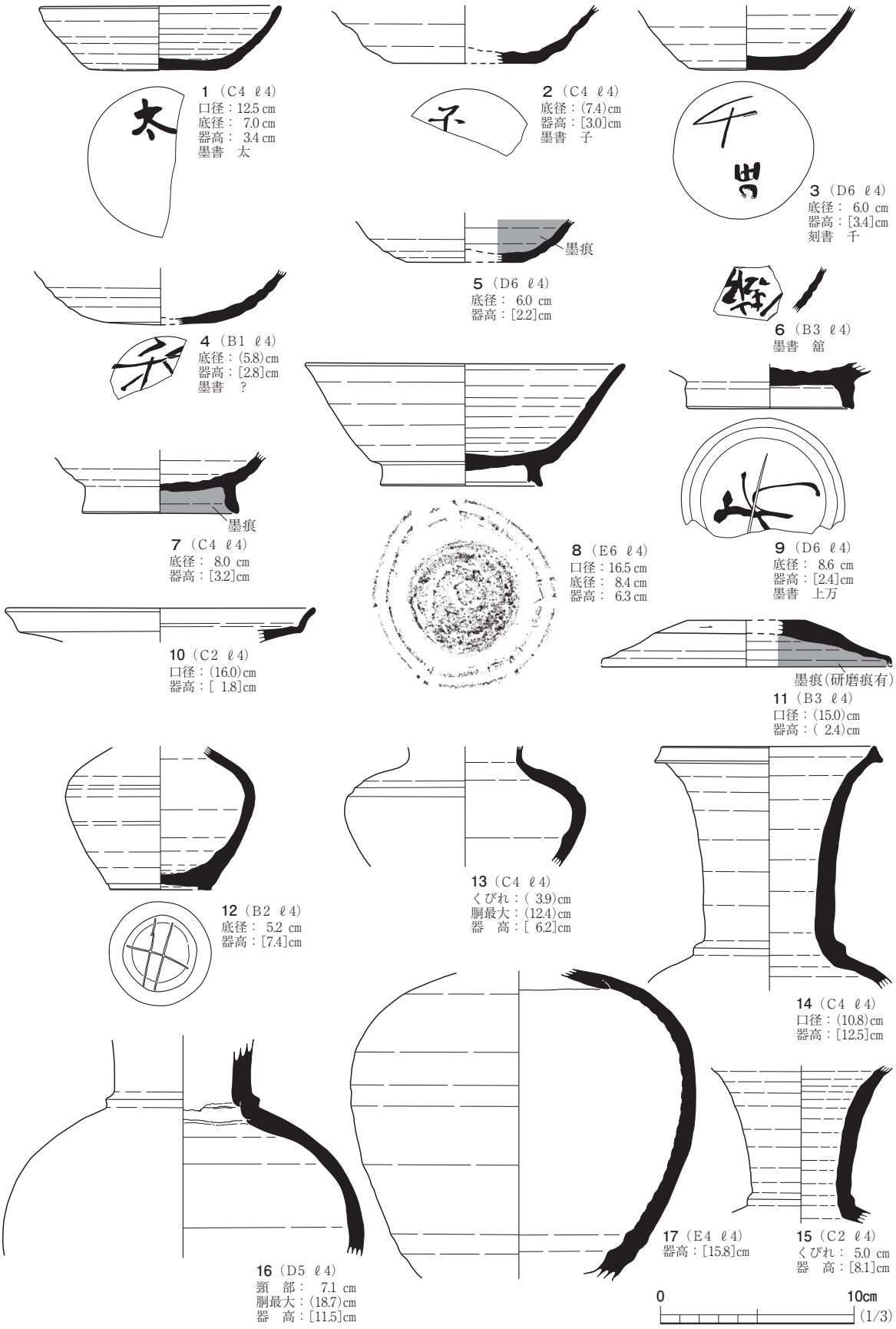


図79　2号流路跡出土遺物（5）須恵器

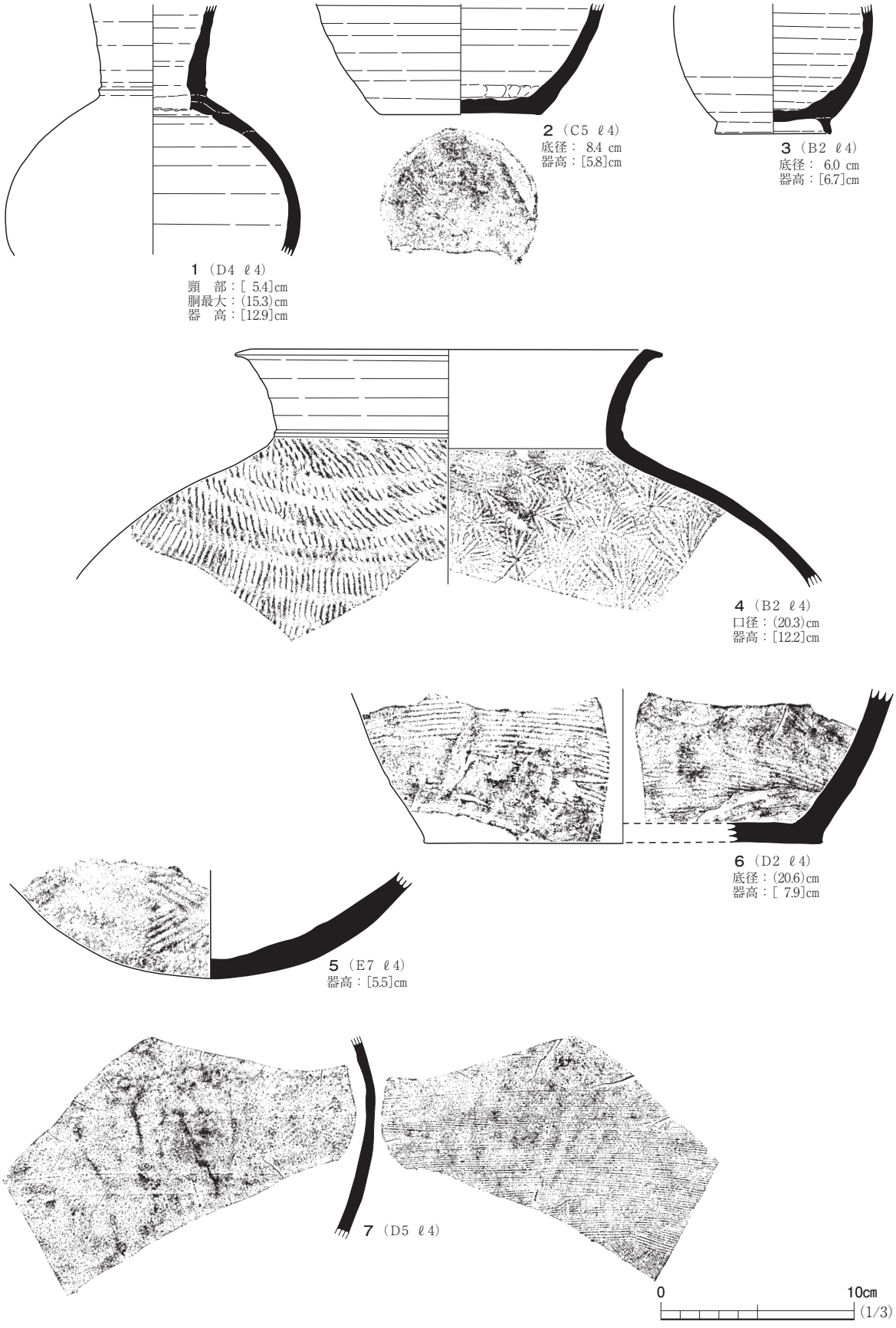


図80　2号流路跡出土遺物（6）須恵器

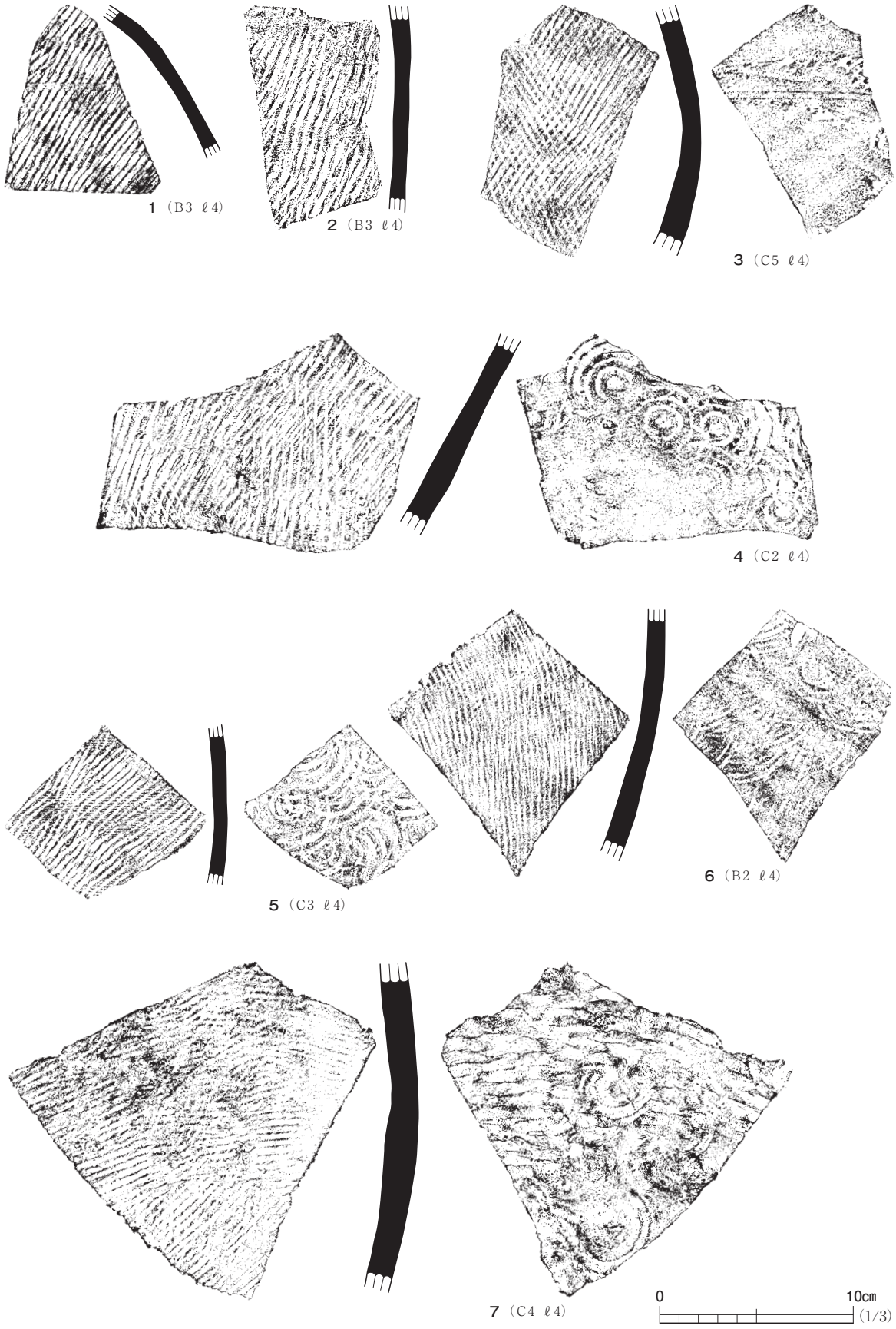


図81　２号流路跡出土遺物（７）須恵器

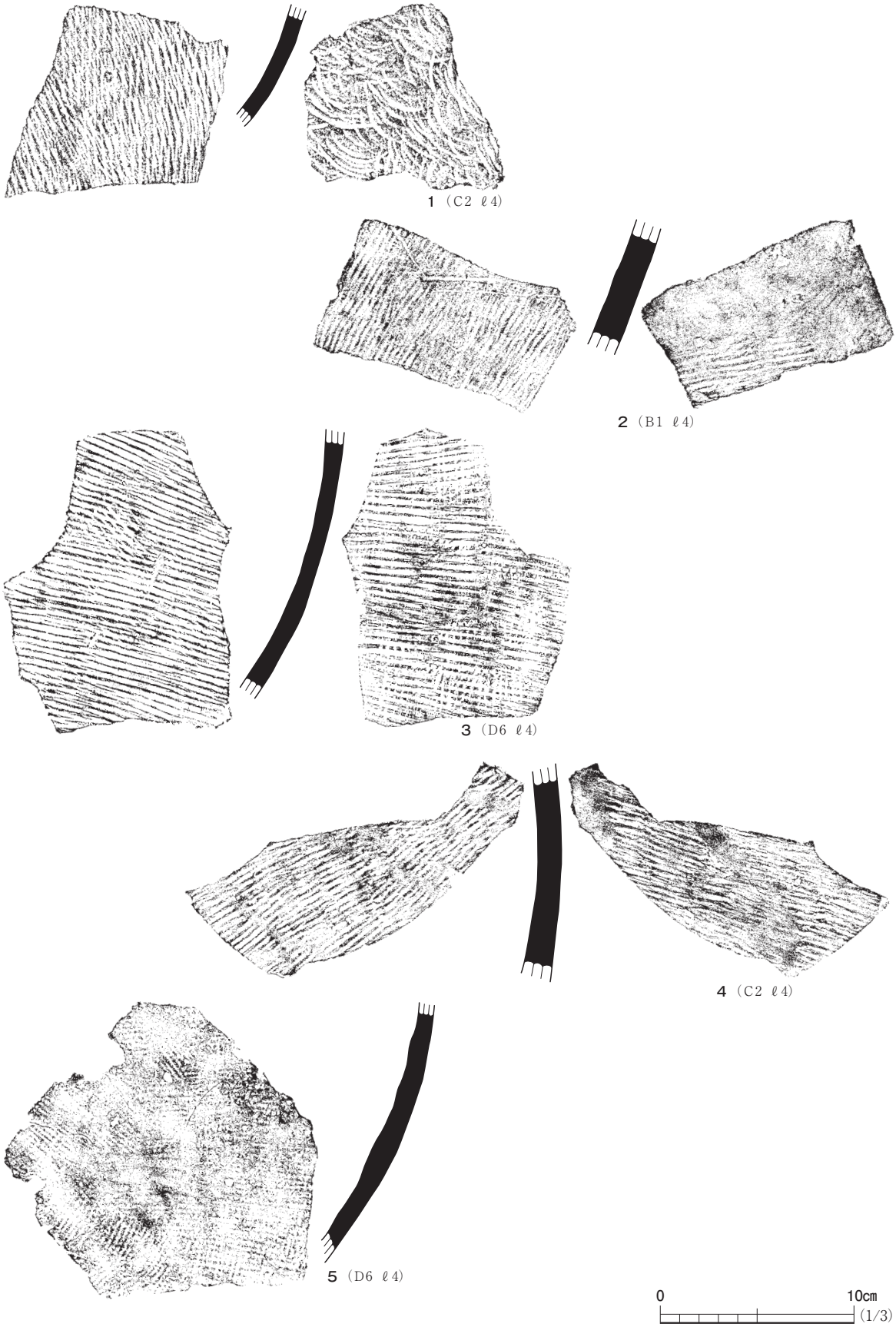


図82　2号流路跡出土遺物（8）須恵器

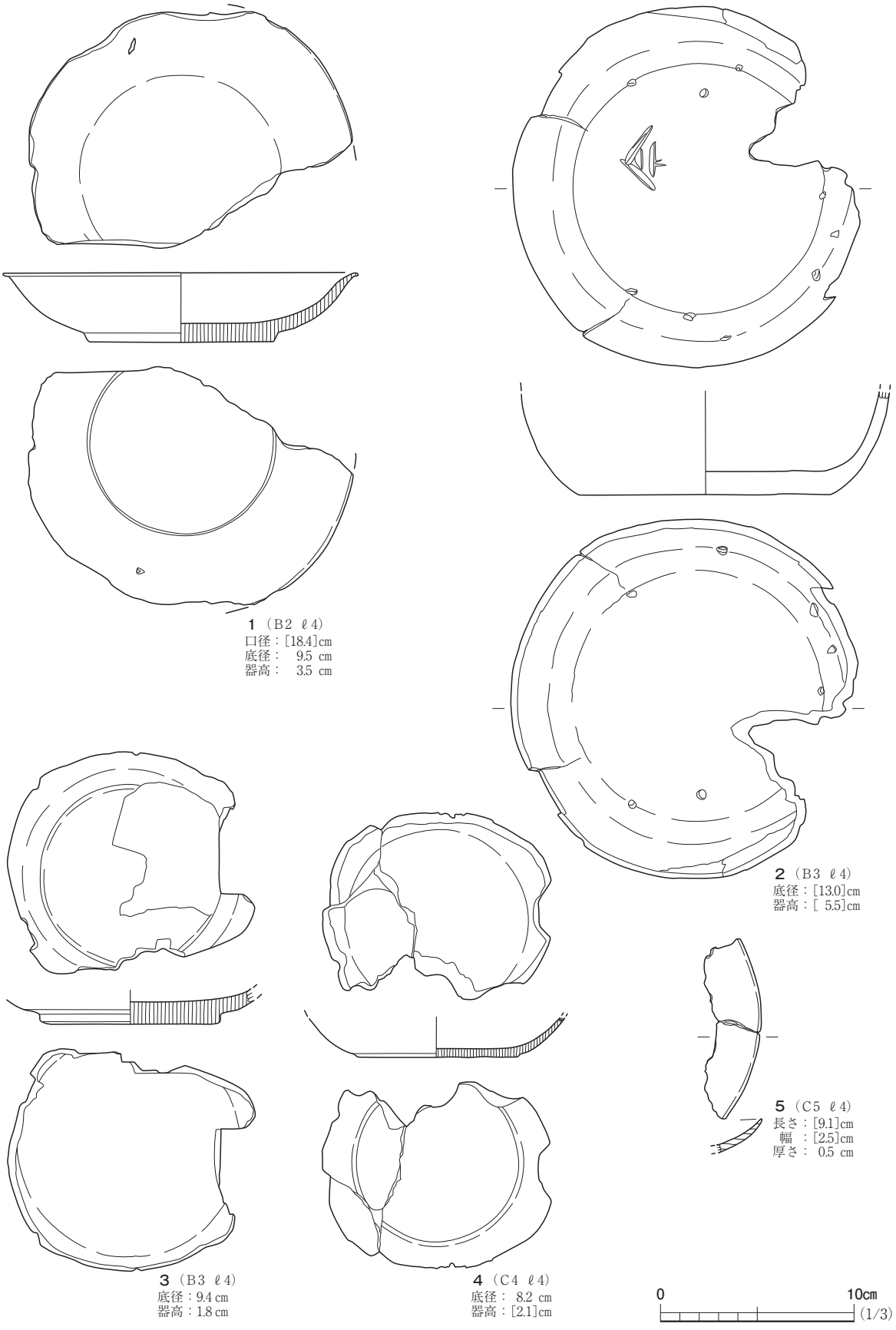


図83　2号流路跡出土遺物（9）木製品

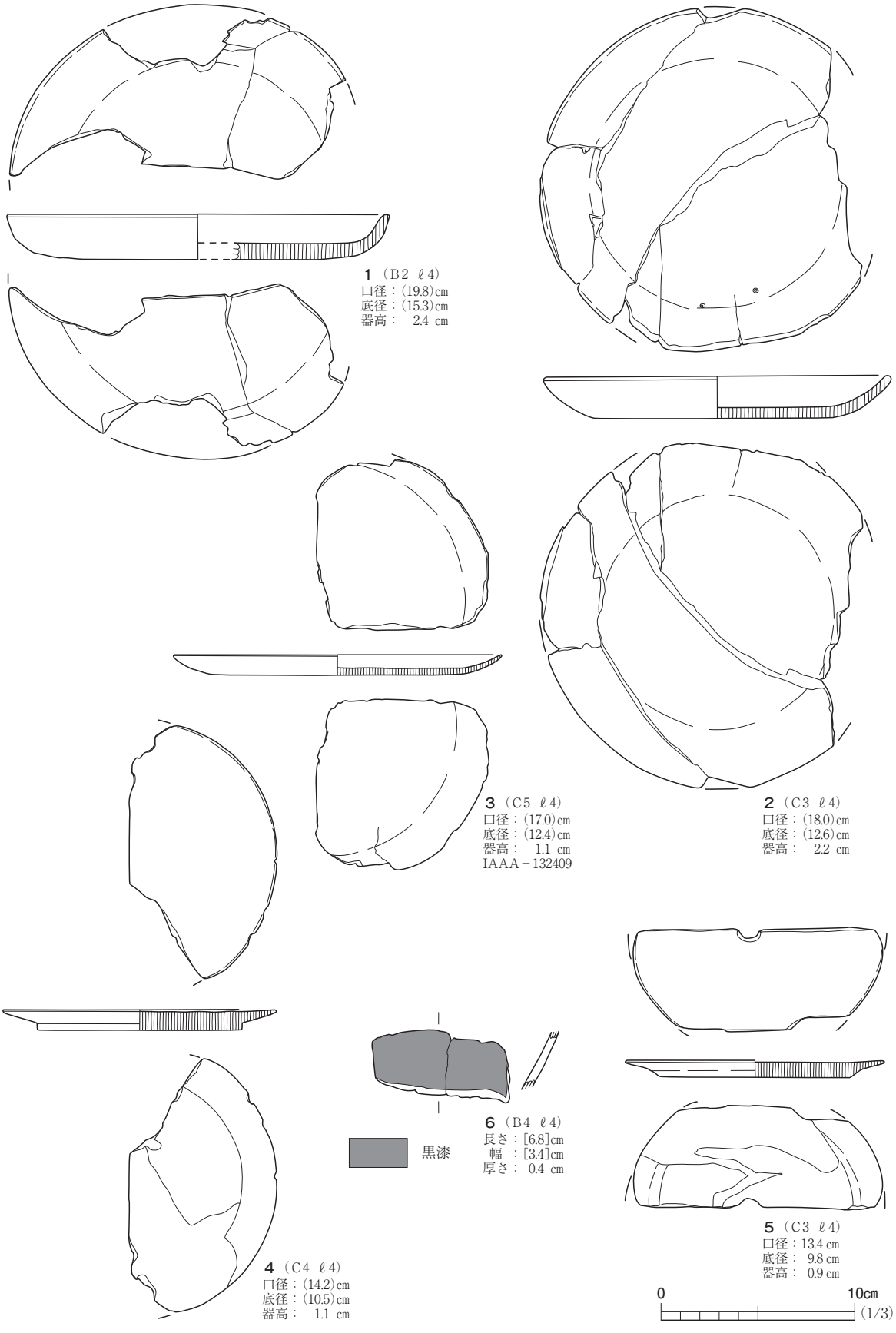


図84　2号流路跡出土遺物（10）木製品

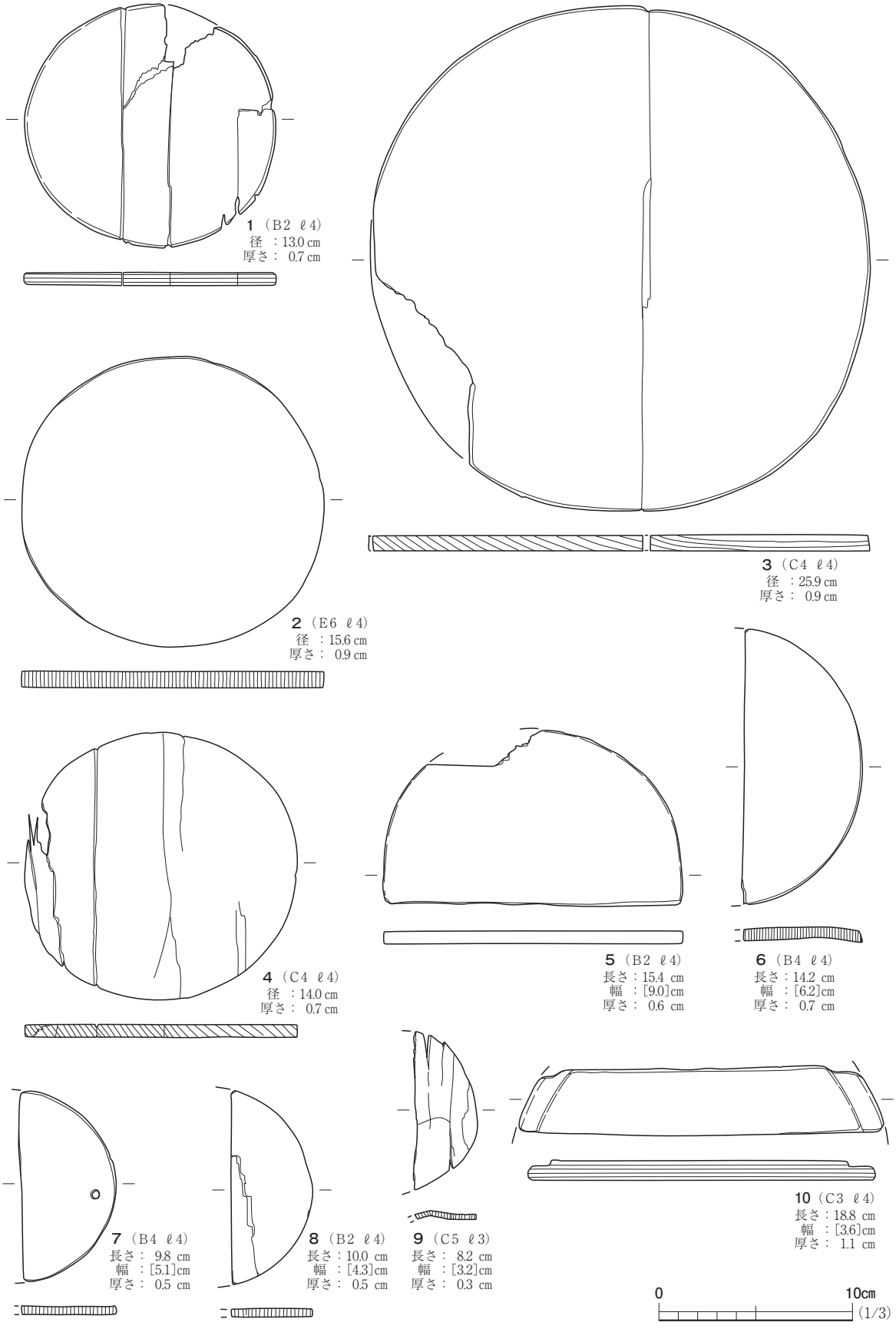


図85　2号流路跡出土遺物（11）木製品

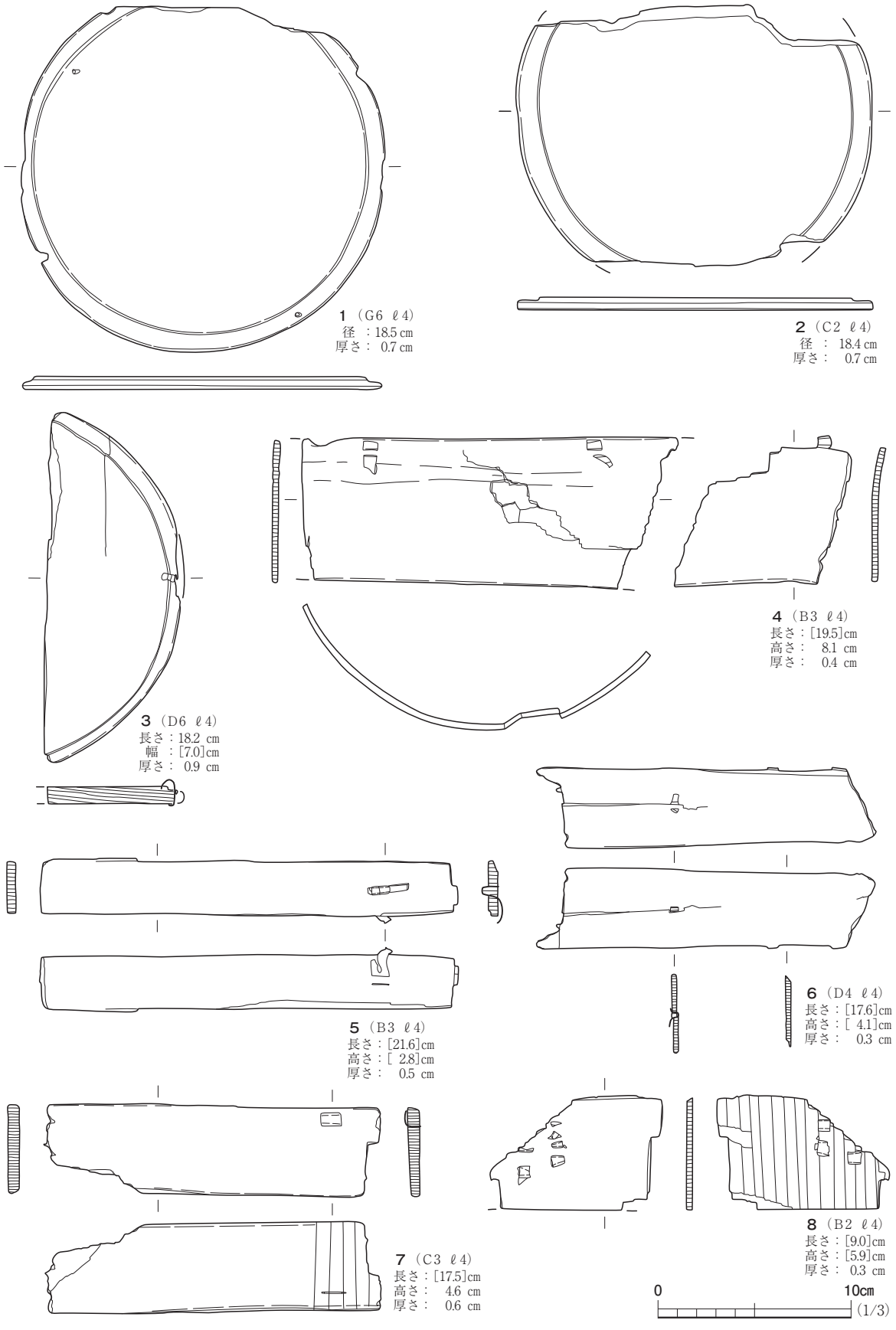


図86　2号流路跡出土遺物（12）木製品

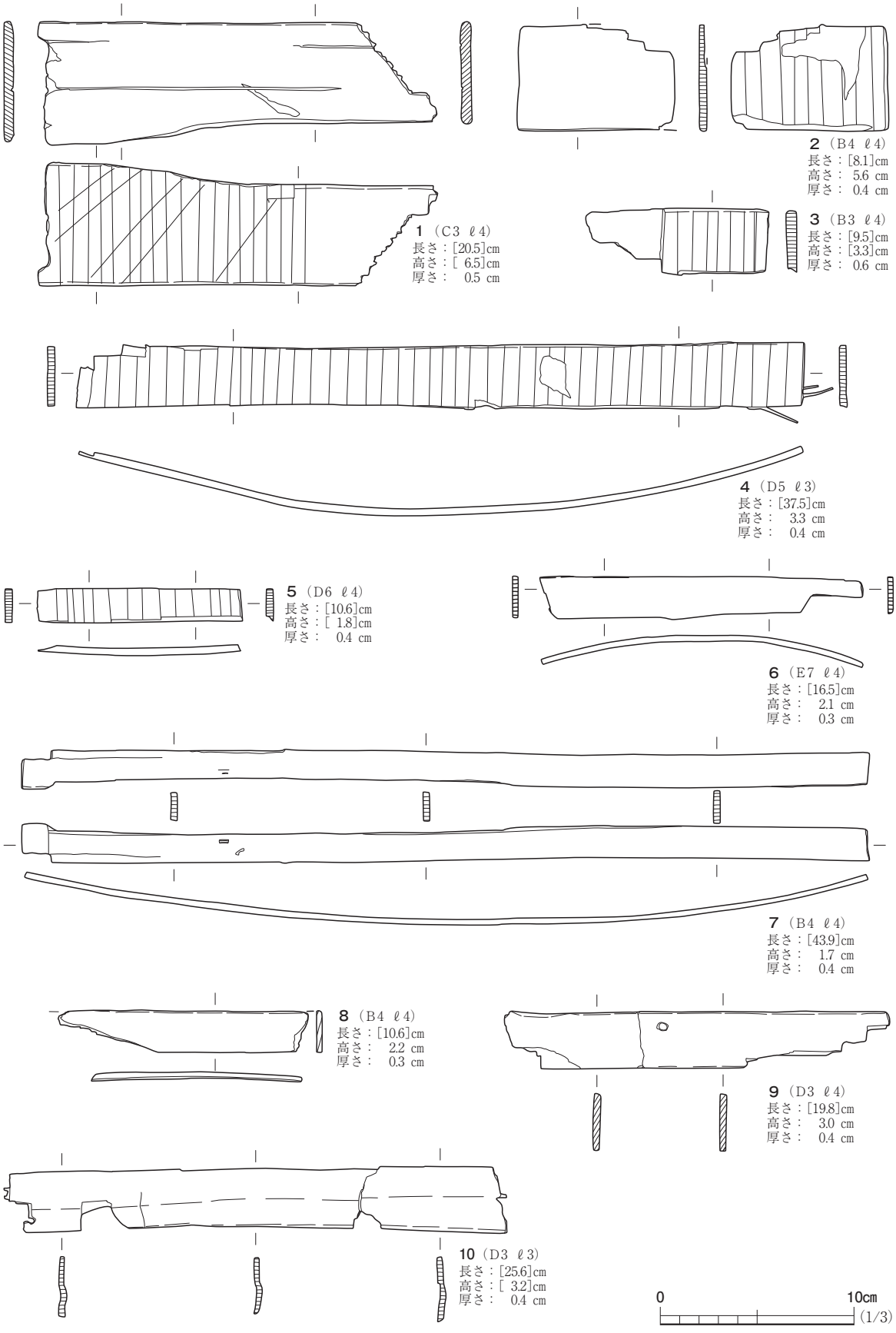


図87　2号流路跡出土遺物（13）木製品

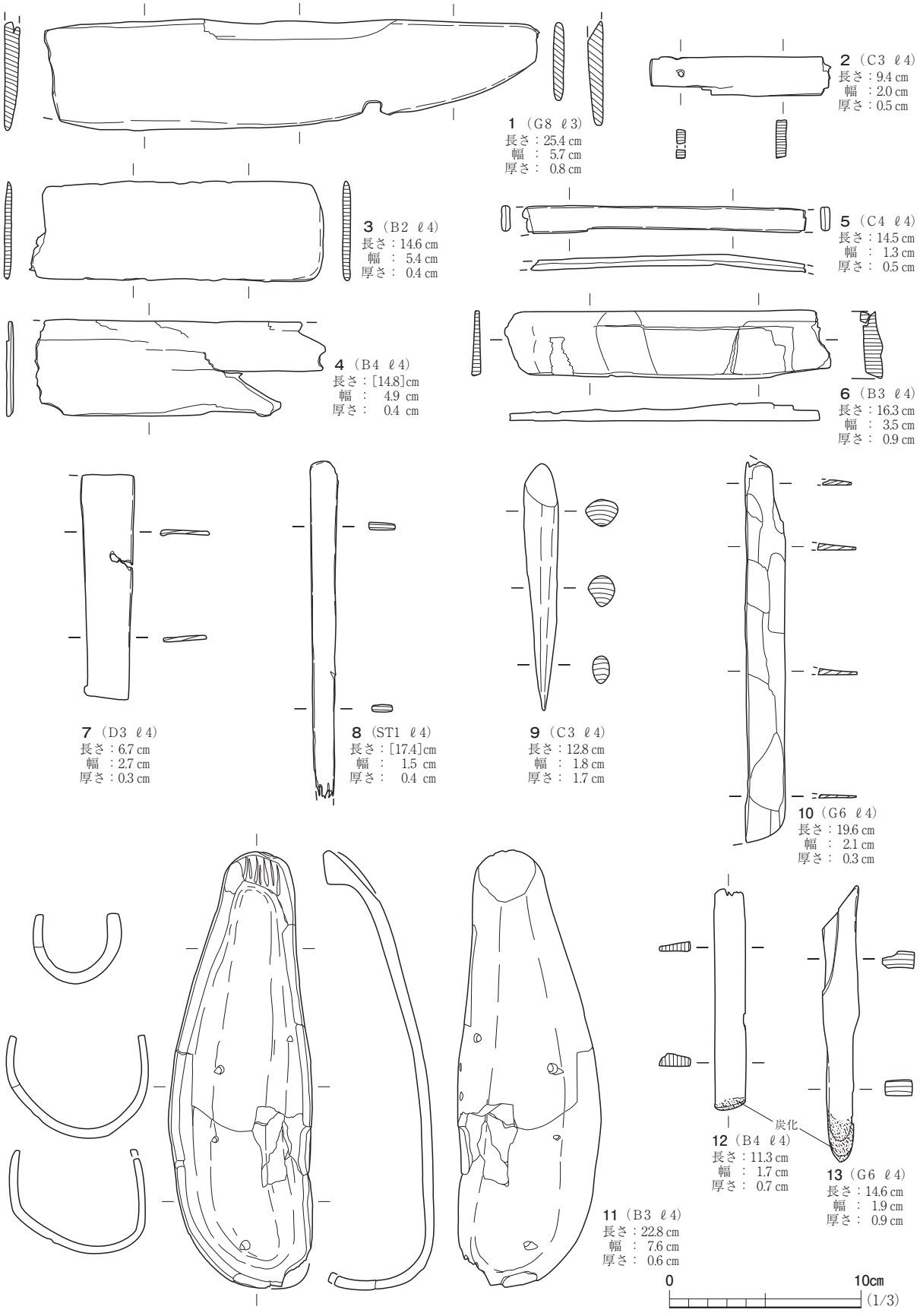


図88　2号流路跡出土遺物（14）木製品

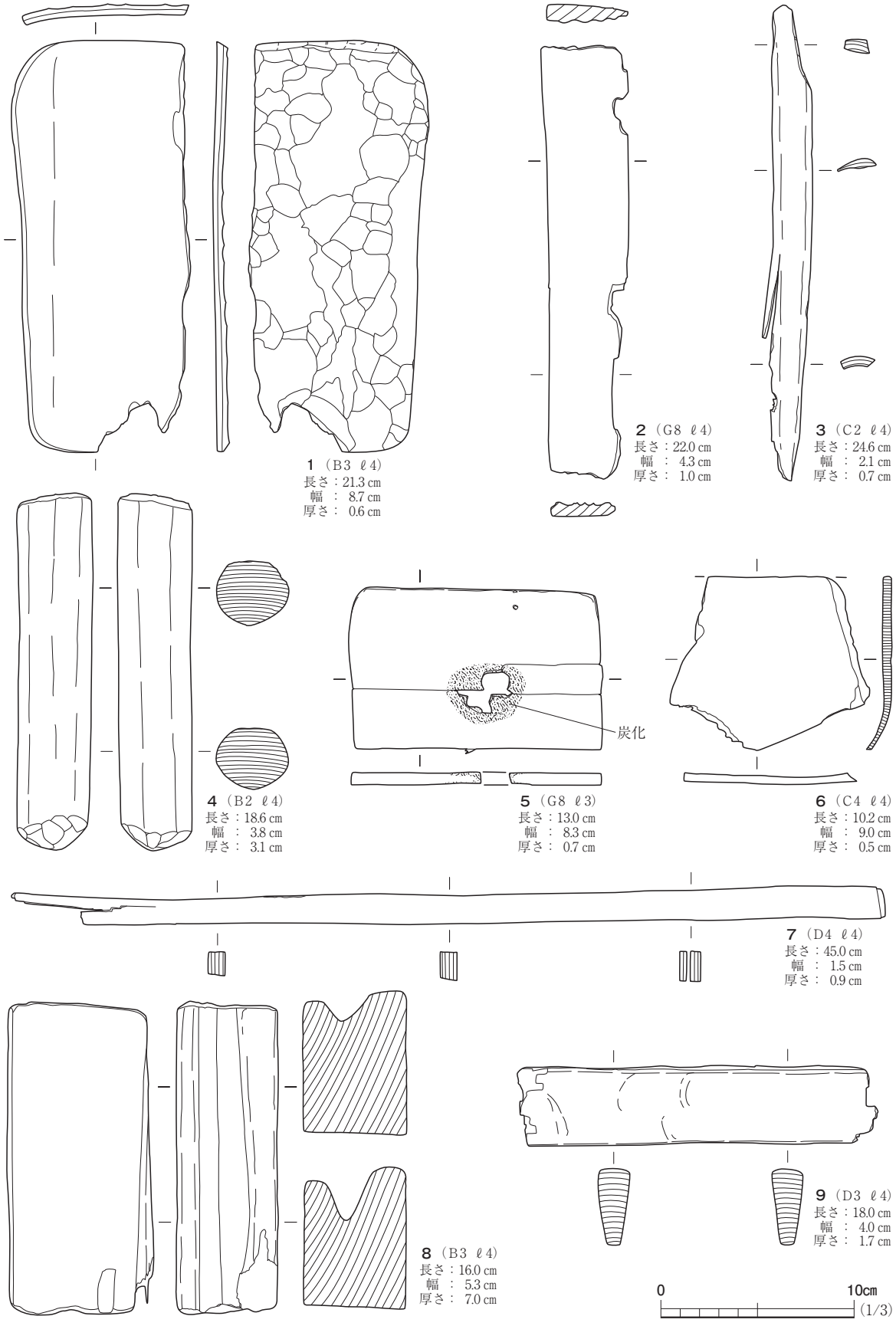


図89　2号流路跡出土遺物（15）木製品

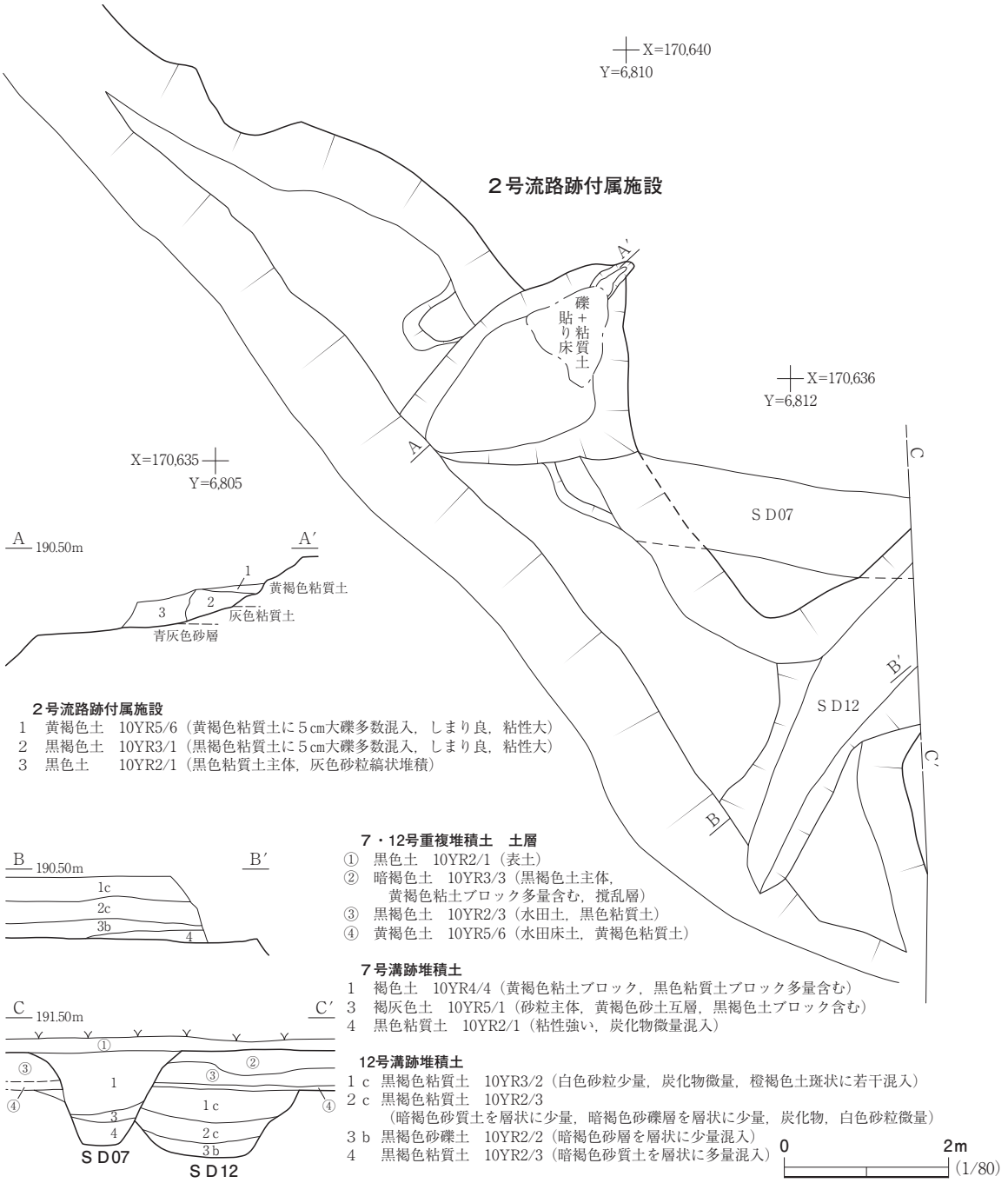


図90　２号流路跡付属施設・12号溝跡接続部

いは甕の体部破片で，外面にタタキ痕，内面に当て具痕が残るものである。

木 製 品　図83－１～５，図84－６が挽物椀で，図84－６は漆が塗られている。図84－１～３が挽物皿，４・５が挽物盤である。図85，図86－１～３が曲物底板である。外周部に段があるものとないものがある。図86－４～８，図87が曲物側板である。内面にケビキ線の残っているもの図86－８，図87－１～５や側板を止める木皮が残っているもの図86－５・７・８がある。図88－１は一部にキザミの入る使途不明のものである。図88－２～６は板状木製品である。図88－７・８・10は薄く平らに削られた板状の木製品で斎串になるかもしれない。図88－９は串状木製品である。

11はひょうたんを半裁して作った，なす状を呈する容器，12・13は火付木である。図89－１は樹皮側を使った刳り物の皿である。図89－６も刳り物の皿状木製品である。図89－２・３・７は板状木製品である。図89－４は下部が削られた棒状で，製品の脚部となる可能性がある。図89－５・８は建築に関連した部材で，５は中央部に炭化痕跡がある。８は溝が切ってある。

付属施設（図90，写真29）

２号流路跡からも東壁から附属施設と思われる掘り込みが見つかっている。12号溝跡流れ込み部を東側に取り込み，長さ約14ｍ，幅約２ｍに渡って平坦面が作り出されており，中央よりやや北側には長さ3.3ｍの一段低い部分が作られている。堆積土は２号流路跡と共通するもので，同時期（８世紀後半頃）に機能していたものと推定される。機能は12号溝跡と２号流路跡を利用するための足場的なものと考えている。

ま と め

２号流路跡は，出土遺物や連結する12号溝跡の年代から８世紀後半にはすでに機能していたと考えられる。また，その機能停止時期は，出土遺物に赤焼土器が含まれていないところから，９世紀前半には，その川筋が１号流路跡に変わったものと考えられる。（藤　谷）

３号流路跡

遺　　構（図91，写真30・31）

３号流路跡は，Ⅰ区北西隅で検出された流路跡で，西壁から北壁にかけて南西－北東方向で検出された流路跡である。他の流路跡や溝跡と重複関係はなく，周辺には北西側に２号溝跡，東側に２号流路跡が位置している。

調査区内での長さは約16ｍで，幅は6.5～8.5ｍとなっている。検出面はＬⅡ上面で，検出面からの深さは1.3～1.5ｍとなっている。壁面の立ち上がりは緩やかで，大きく４層の土層が堆積していた。１・２が上面の自然埋没過程で堆積した層，３が流水作用によって堆積した層，４が底面上に堆積した礫層である。

遺　　物（図92～96，写真43・48・52・53・58）

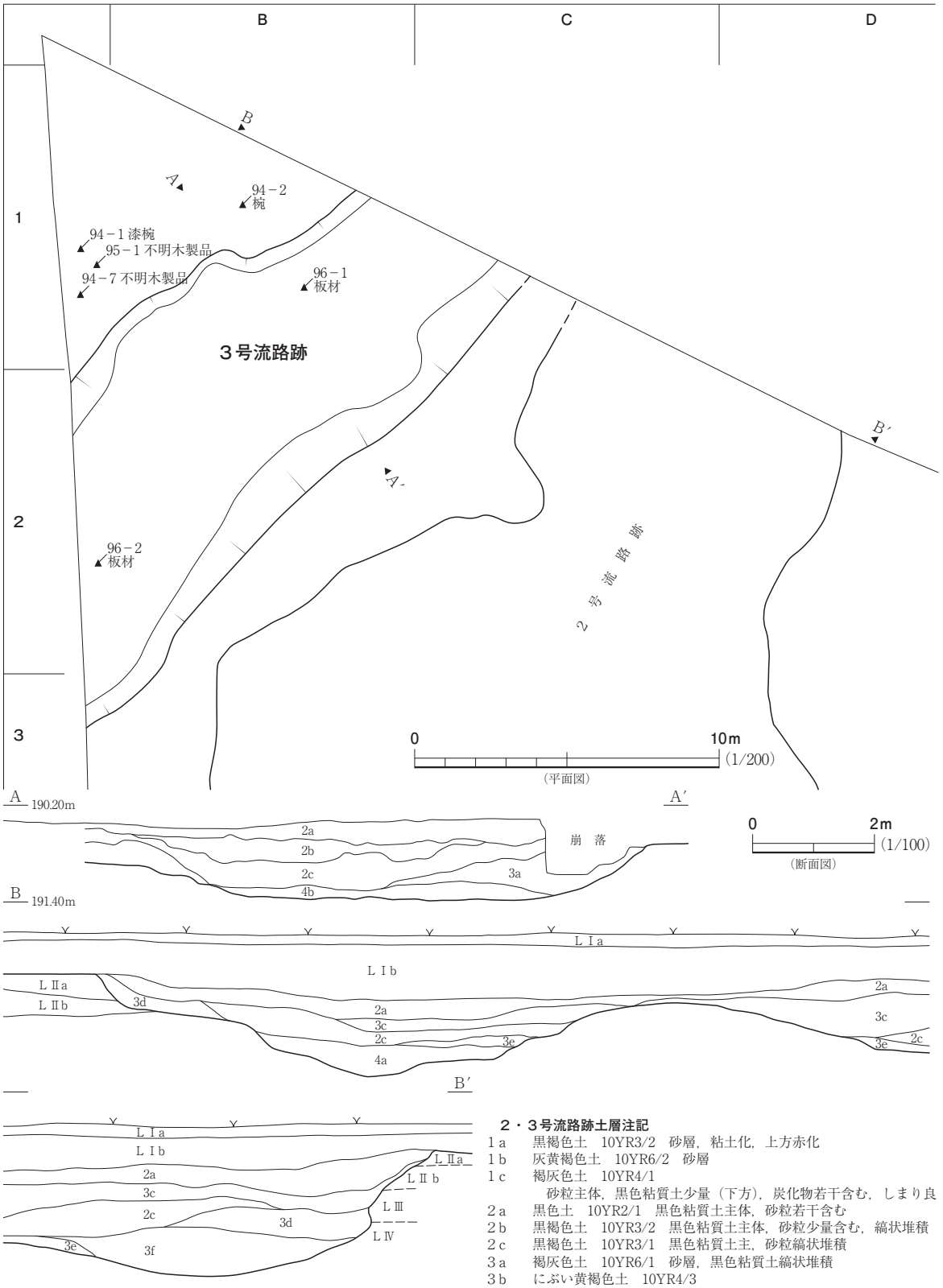
縄文土器　図92－１～３は縄文前期の深鉢と考えられる。

土 師 器　図92－４・５は内面黒色処理・ヘラミガキされたロクロ成形の杯である。８は高台杯である。９は，ロクロ成形の甕である。

赤焼土器　図92－６・７は底部に糸切り痕を残し，内外面に調整痕を持たないロクロ成形された杯である。

須 恵 器　図92－10～12は杯で12には底面に墨書がある。13～15が長頸瓶で，13が頸部，14・15が底部の破片である。図92－16･17，図93は大甕で，外面にタタキ痕，内面に当て具痕がある。

木 製 品　図94－１～３は挽物椀である。４～８，図95－１～８が曲物側板で，このうち図94－４以外は同一個体である。図95－９は削り出しで作られた下駄で鼻緒の孔が３か所で残っている。



LⅠa　暗褐色土　10YR3/3　表土
LⅠb　黒褐色土　10YR2/3　黒色粘質土主体，鉄分により赤化
LⅡa　にぶい黄褐色土　10YR5/3　砂粒主体，鉄分により赤化
LⅡb　明黄褐色土　10YR6/6　黄褐色粘質土
LⅢ　黒褐色土　10YR3/2　黒色粘質土主体，砂礫若干含む
LⅣ　褐灰色土　7.5YR5/1　砂礫主体，しまり良

2・3号流路跡土層注記

1a　黒褐色土　10YR3/2　砂層，粘土化，上方赤化
1b　灰黄褐色土　10YR6/2　砂層
1c　褐灰色土　10YR4/1
　砂粒主体，黒色粘質土少量（下方），炭化物若干含む，しまり良
2a　黒色土　10YR2/1　黒色粘質土主体，砂粒若干含む
2b　黒褐色土　10YR3/2　黒色粘質土主体，砂粒少量含む，縞状堆積
2c　黒褐色土　10YR3/1　黒色粘質土主，砂粒縞状堆積
3a　褐灰色土　10YR6/1　砂層，黒色粘質土縞状堆積
3b　にぶい黄褐色土　10YR4/3
　砂粒主体（0.1～0.3㎜大の均質な砂粒）しまり良
3c　灰黄褐色土　10YR5/2　黒色粘質土・砂粒・縞状堆積（砂粒主体）
3d　褐色土　10YR4/4　砂粒，小礫混土，黒色粘質土縞状堆積
3e　褐灰色土　10YR5/1　砂粒主，礫・黒色粘質土ブロック少量含む
3f　青灰色土　5B6/1　砂層
4a　灰黄褐色土　10YR6/2　砂層

図91　3号流路跡

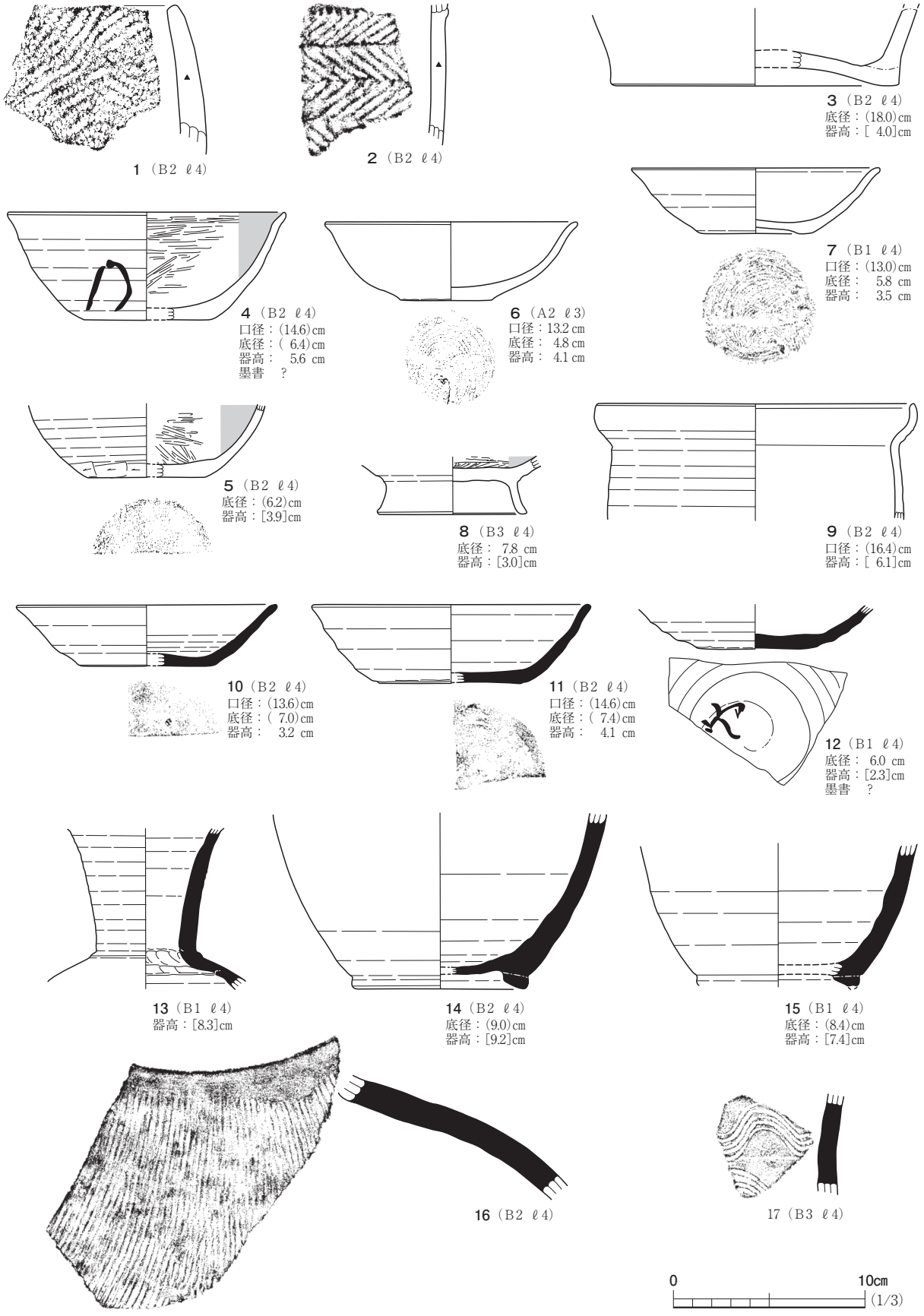


図92　3号流路跡出土遺物（1）縄文土器・土師器・須恵器

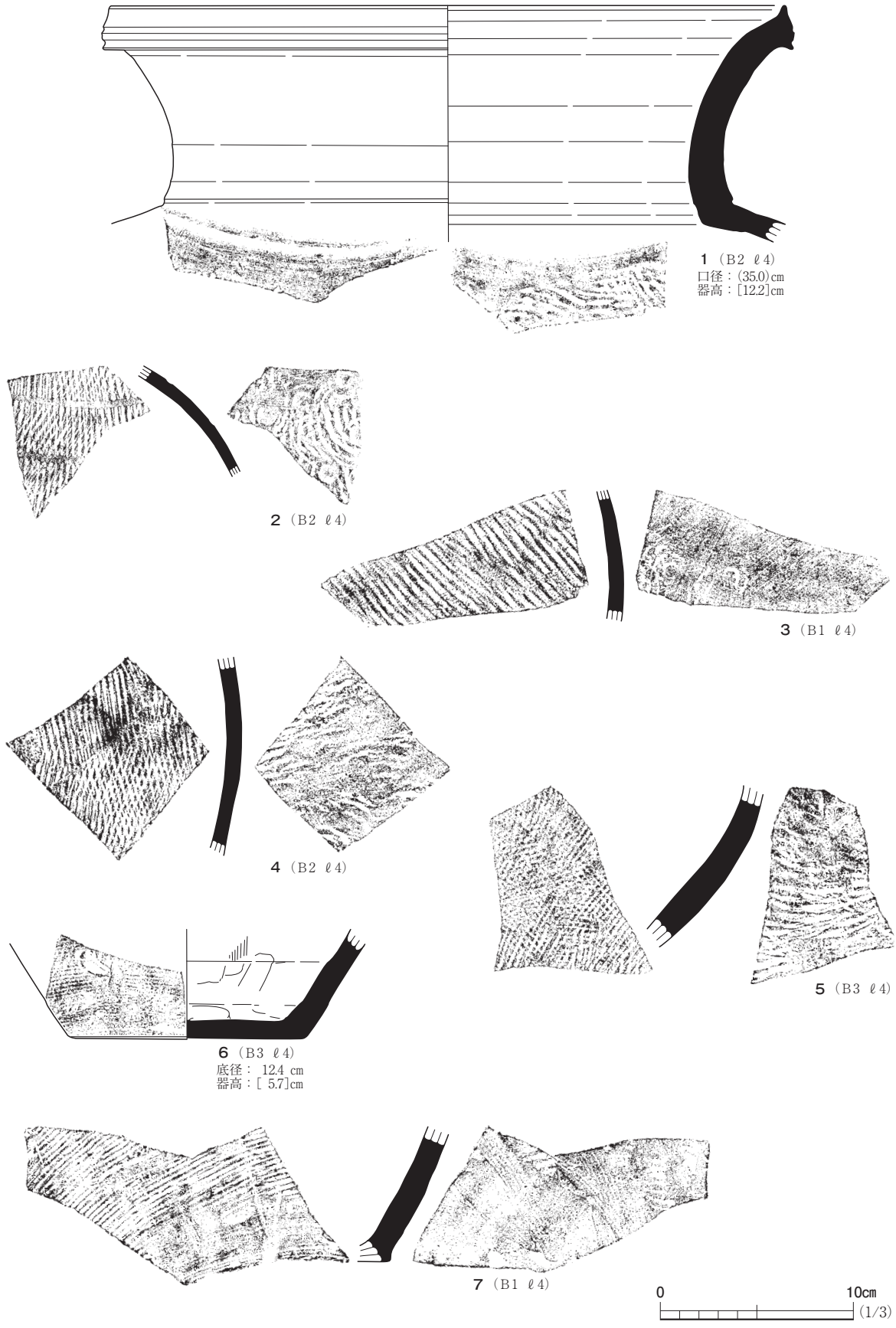


図93　3号流路跡出土遺物（2）須恵器

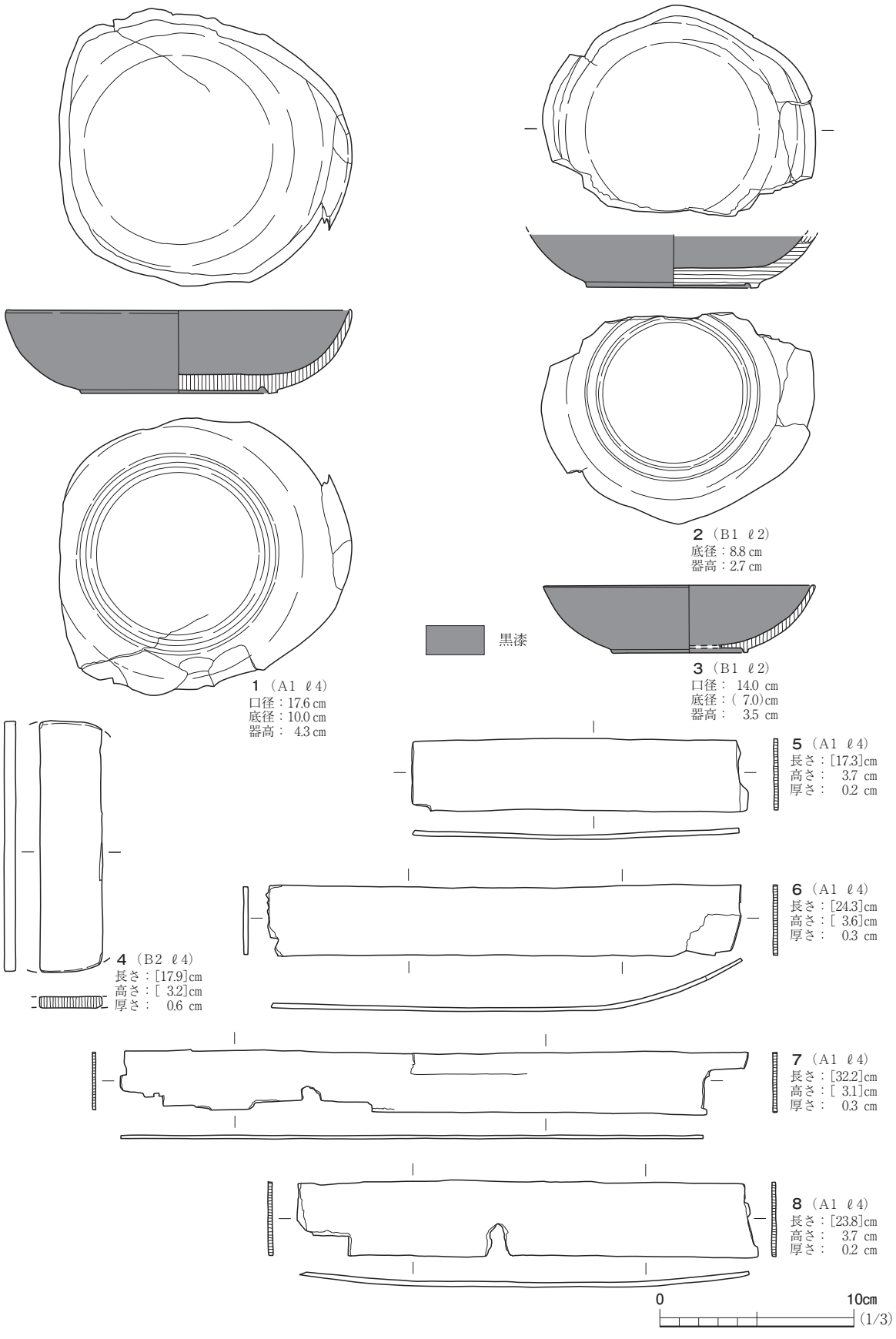


図94　3号流路跡出土遺物（3）木製品

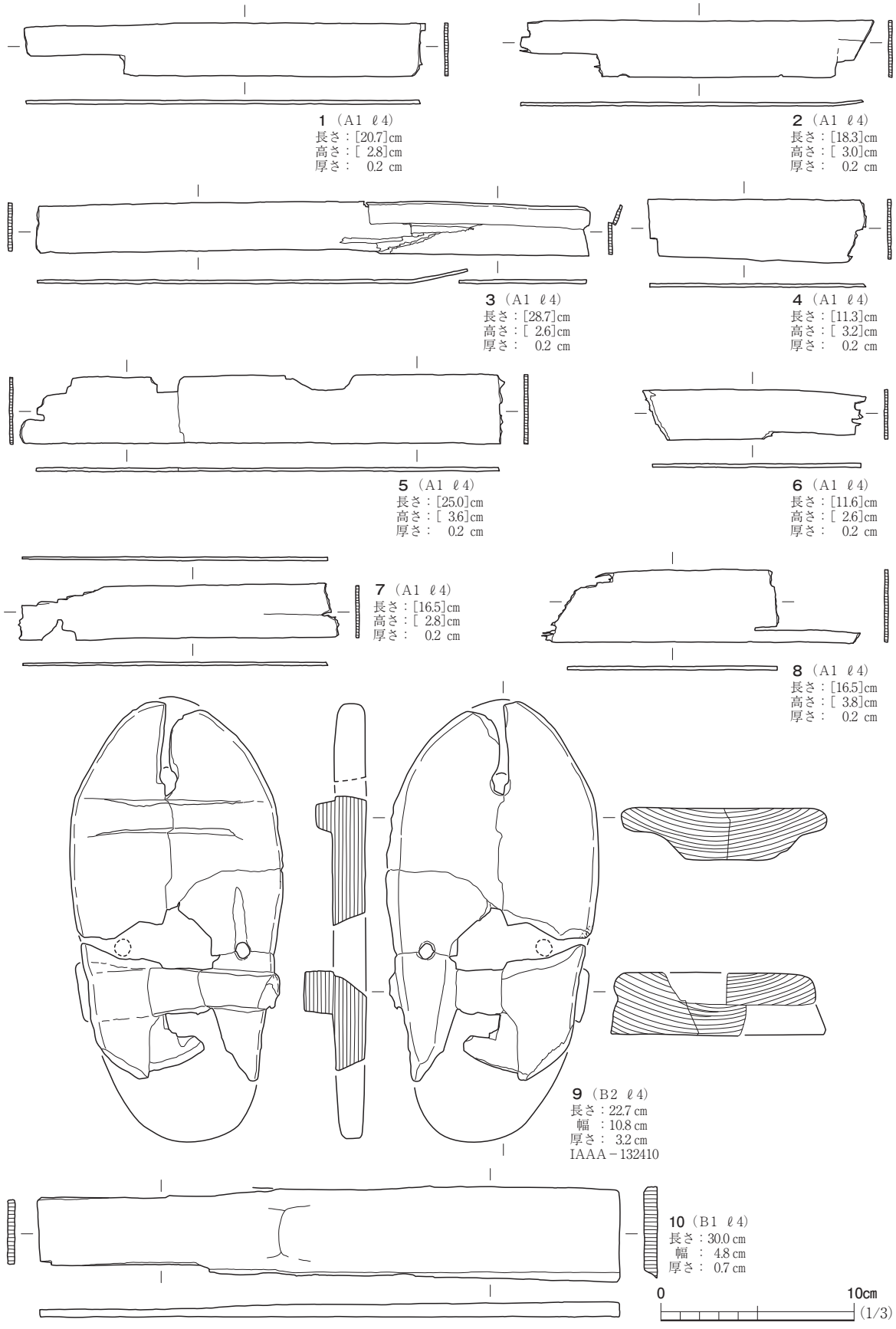


図95　3号流路跡出土遺物（4）木製品

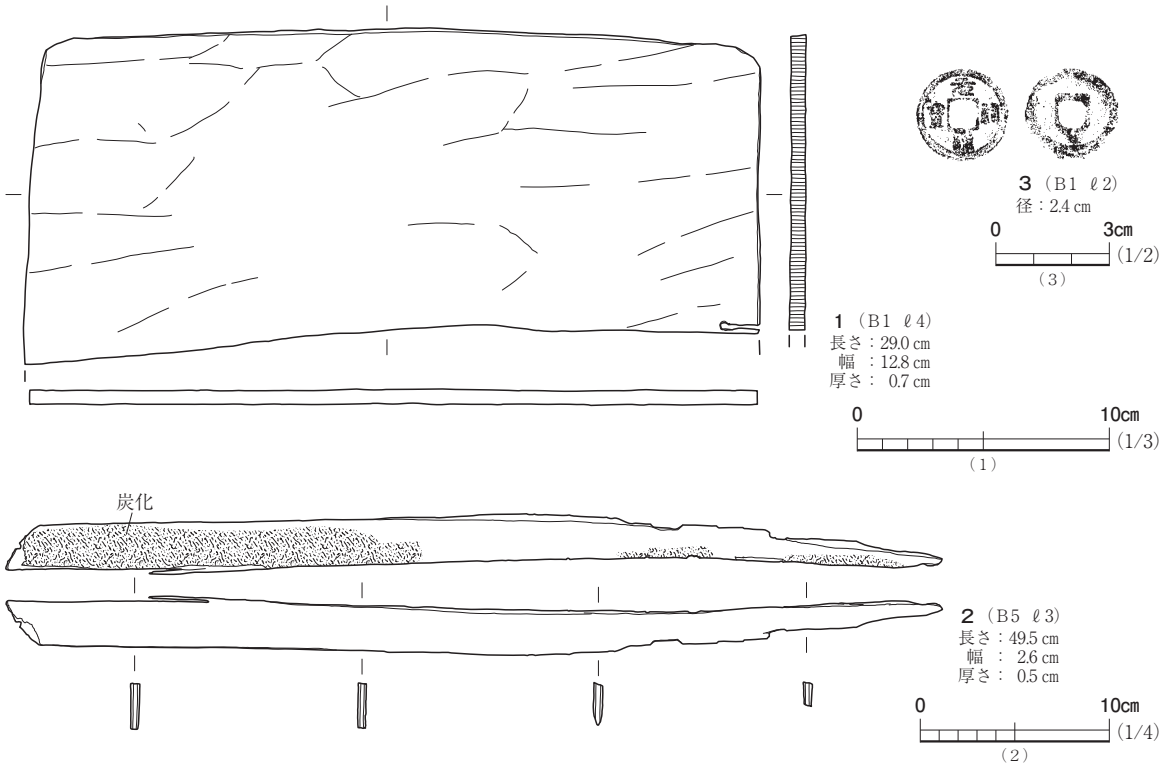


図96　３号流路跡出土遺物（５）木製品・古銭

図95－10，図96－１・２は板状の木製品で，１にはケズリの痕跡が残されている。

古　　銭　図96－３は北宋銭の「元祠通寶」で，11世紀末に鋳造されたものである。

ま と め

３号流路跡は，最下層の礫層から赤焼土器が出土しており，他の流路跡よりも新しい時期の流路である可能性がある。また，埋没過程の堆積土中から12世紀後半以降に流通した北宋銭が出土しているところから，埋まりきったのはそれ以降の年代と思われる。　（藤　谷）

第８節　性格不明遺構

１号性格不明遺構　ＳＸ01（図97・98，写真32）

Ⅲ区の北東端，Ｏ６・Ｐ６グリッドに位置する。検出面はＬⅡ上面である。遺構は南側の一部を確認したのみで，大半は北東側調査区外に延びるものと考えられる。南側2.7ｍに29号土坑，南西1.5ｍに30号土坑が位置する。

形状や規模は調査区外に延びるため明確ではないが，東西方向にやや湾曲して延びる溝状の遺構の南東部に，ランダムに重複して掘られた土坑状の遺構が接続するような形状で，調査区内での規模は，東西12.6ｍ，南北5.6ｍである。溝状の部分には括れがあり，西側で長さ５ｍ，幅２ｍ，深さは西側で25㎝，東に向かって深くなり45㎝となる。東側は幅3.5ｍと広く，深さは40㎝前後で，

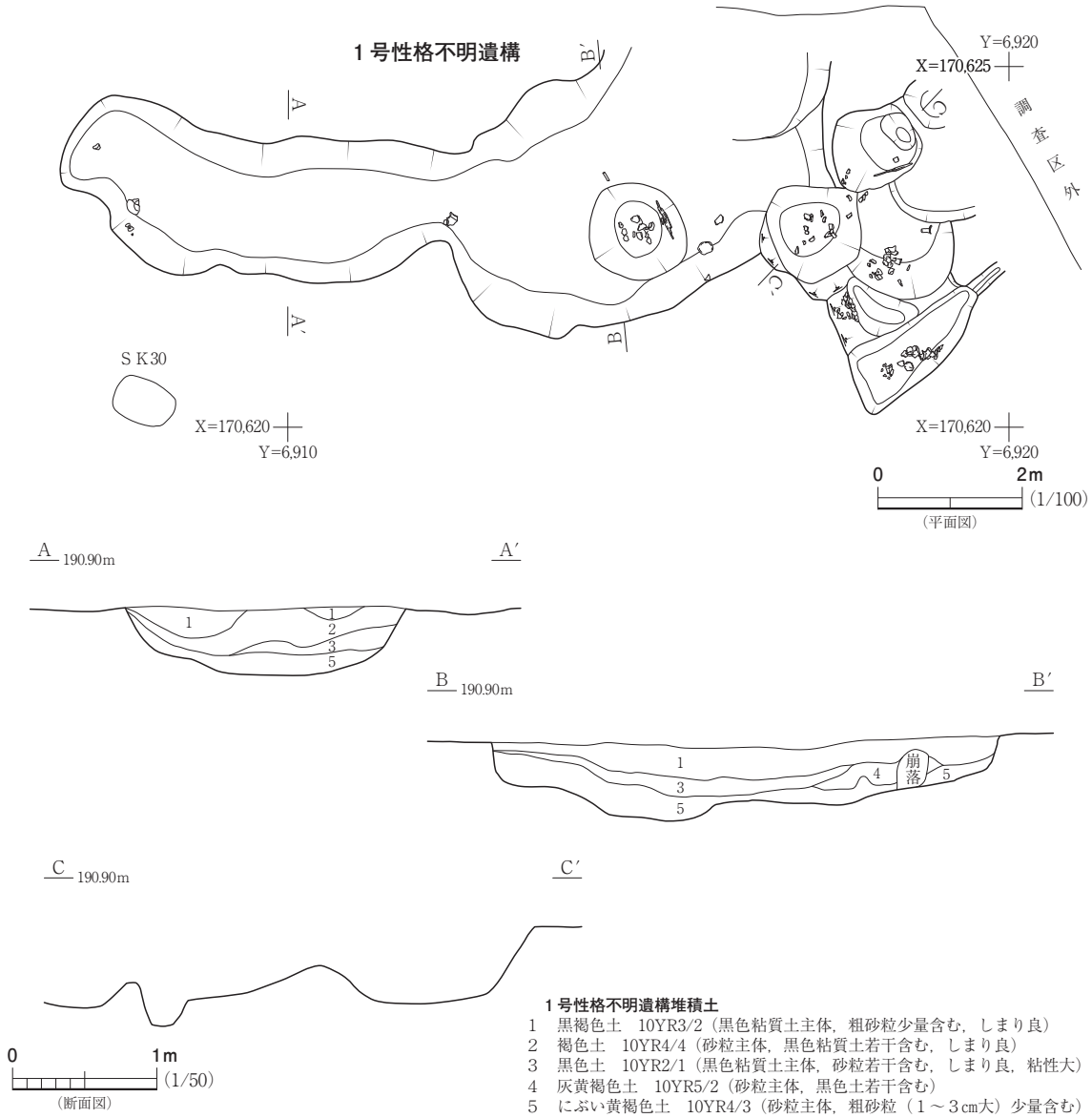


図97　１号性格不明遺構

北東方向に湾曲していく。南側底面には直径1.5ｍ，深さ20㎝ほどの鍋底状の窪みが確認されている。南東部分は底面が多数の土坑が重複するような凹凸となるものの，南辺・西辺とも直線的である。検出面からの深さは20～70㎝とさまざまで，北東ほど深くなる傾向が認められる。

堆積土については，溝状の部分の中央と西側の２本のセクションを図示し５層に分層した。西側でℓ１とℓ３の間に砂粒主体で黒色粘質土を若干含むℓ２の堆積がみられるが，基本的には砂粒を主体とするℓ４・５が堆積した後，粘性のある黒色土を主体とするℓ１・３が堆積しており，自然堆積と考えられる。南東部分については，堆積土からは明確な先後関係は認められなかった。基本的には溝状部分の堆積と同じくℓ５が堆積した後，ℓ１･３とほぼ同じ黒色粘質土が堆積していた。

遺物は，破片資料であるが，壺・高杯・小型器台・甕などの土師器が多数出土している。遺構内から万遍なく出土しており，特に東側からの出土が多い。摩滅が著しく接合は難しいが，中央の土

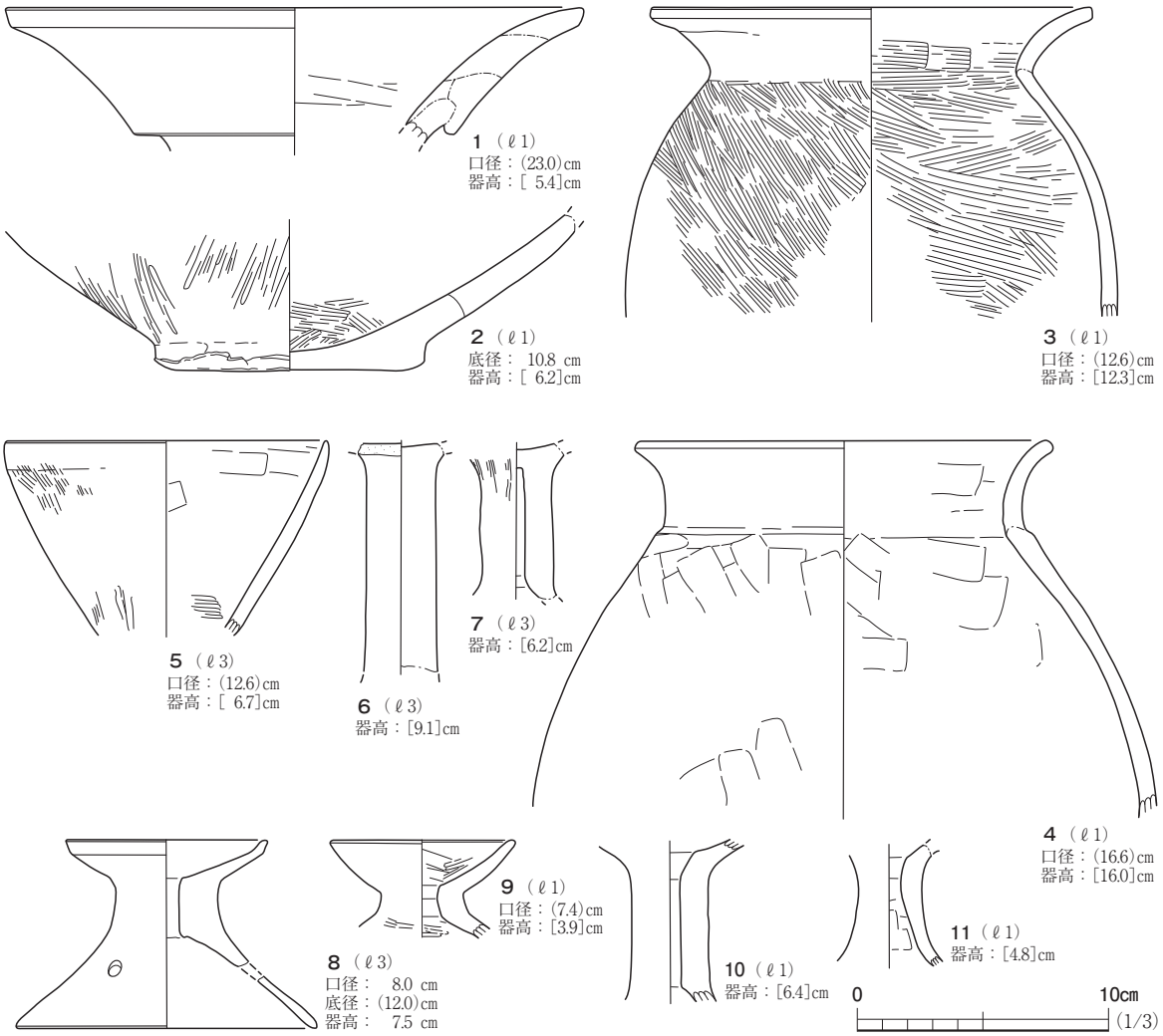


図98　1号性格不明遺構出土遺物　土師器・高杯

坑状の部分には壺，東側には５の小型壺や３の甕などの破片がまとまって出土した。

図98－１・２は壺の破片で，１は二重口縁部，２は外面にヘラミガキ，内面にハケメが施される底部の破片である。３・４は甕で，３は口唇部に面取りがみられ，胴部内外面にはハケメが施される。５は直口壺の口縁部で，直接接合しないが付近から胴部破片も出土している。６・７は高杯の柱状脚部で，６は柱状のものである。８～11は小型器台。８・９は器受部から裾が大きく広がるタイプ，８は唯一全形がうかがえるもので，裾部には円孔が穿たれている。10・11は柱状タイプの脚部である。

本遺構は，出土遺物から本調査区内唯一の古墳時代前期の遺構と考えられる。しかし，性格については，削平された周溝の一部とも考えられるものの，南東の凹凸部分からも同時期の遺物が出土していること，調査した部分が遺構全体の一部であることなどから，不明とする。　（後　藤）

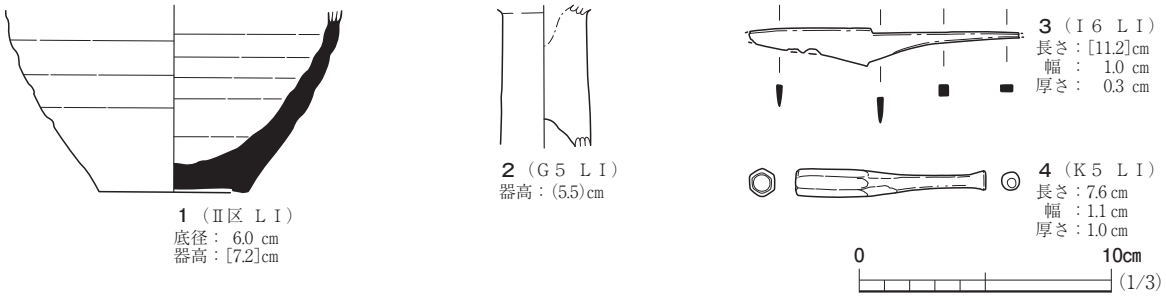


図99　遺構外出土遺物　土師器・須恵器・鉄製品

第９節　ピット群と遺構外出土遺物

第８節まで記載した遺構の他に，各調査区からはピットが検出されている。以下で調査区ごとに概観したい。

Ⅰ区では，北半部に集中する傾向があり，Ｃ･Ｄ３グリッド付近で一番濃密な分布が認められる。ピットの径は25㎝前後，深さは20㎝前後のものが多く，明確な柱痕を持つものはＣ３グリッドの１個のみで，他のものに柱痕跡は認められなかった。検出面は１・２号流路跡の堆積土上にあるものは，その堆積土上面，それ以外はＬⅡとなっている。また，中世のものと思われる土坑群の分布とも重なりが認められた。これらピット群の作られた時期は，土坑同様中世と推定できる。その性格については，配列が認められず建物とする積極的な根拠に乏しい。しかし，建物群の一部となる可能性を完全に否定することはできないと考えられる。

Ⅱ区では，１・２号掘立柱建物跡周辺と３・４号掘立柱建物跡西側に分布がある。遺構検出面はＬⅡ上面となっており，堆積土は他の平安時代の建物跡と近似するものであった。建物跡周辺のピットについては，建物跡に関連する性格が推定される。また，３・４号建物跡西側に分布するピットについては，完全な配列が認められず，堆積土にも若干の違いがあったところから平安時代の建物跡として報告しなかったが，その可能性については残るものと考えている。

Ⅲ区では，ＬⅡ上面で検出されており，７号掘立柱建物跡周辺と27号土坑周辺に分布している。建物跡周辺のピットについては，その柱穴と堆積土が共通しており，建物跡に関連する遺構と考えられる。27号土坑周辺のピットについては，時期，性格ともに不明である。

今回の調査では，遺構検出時に遺構外からも遺物が出土している。主要なものを図99に図示した。図99－１は，須恵器壺類の体部下半から底部にかけての資料で，内外面に明瞭なロクロナデの痕跡が残されている。２は古墳時代の土師器高杯の脚部である。３は刀子で刃部の遺存長が５㎝，茎部の長さが5.3㎝と茎部がやや長い形状を呈している。４はキセルの吸い口部分で，全長が7.6㎝，最大径が1.1㎝である。　（藤　谷）

第３章　　総　　括

第１節　遺物について

今回の調査では，特に流路跡や溝跡から大量の遺物が出土している。これらの遺物について，ある程度の年代を推定するとともに，大量に出土した墨書土器についても簡単にまとめたい。

12号溝跡出土遺物（図100上段）

１・９号掘立柱建物跡に切られている，調査区の中でも古い段階の遺構である。土師器杯では，非ロクロ成形のものが含まれていた。須恵器杯では底径が大きく，器高が低いタイプのものが中心となる。須恵器高台杯では，体部下端がやや膨らむ形態のものがある。蓋では，体部上半から摘み部にかけてやや丸みを帯びる形態のものがある。長頸瓶では頸が細く口縁の広がりの弱いものがある。これらの遺物は，８世紀後半の南原33号窯に比定される時期のものであると考えられる。

２号流路跡底面礫層出土遺物（図100中段）

断面の状況から１号流路跡より古いもので，土師器杯では，含まれているほとんどが底部から体部の1/3程度まで回転ヘラケズリ調整されており，中には器高が高いものもある。土師器甕では，

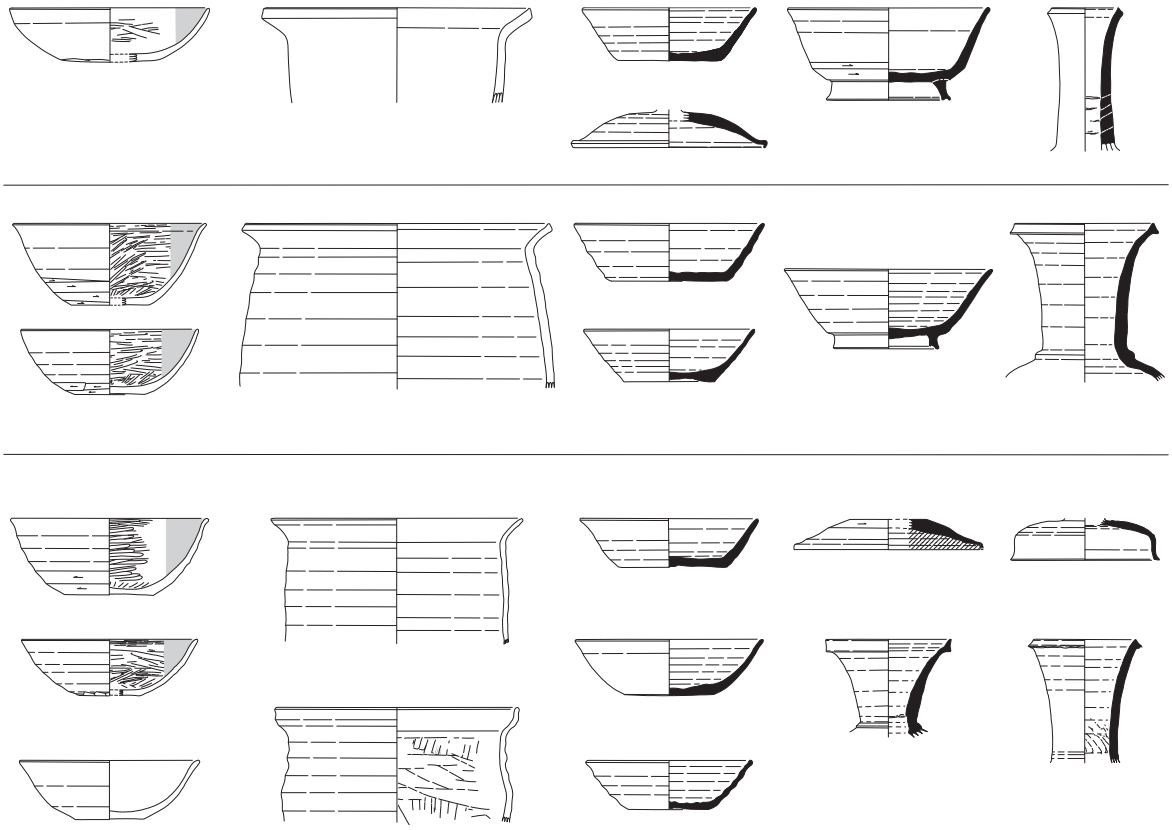


図100　12号溝跡，１・２号流路跡出土土器

口縁部が「く」の字状に括れ，口縁外面を面取りしているものである。須恵器杯では，12号溝跡同様に口径に対して底径が大きく，器高が低いタイプのものや，ほぼ同様の器高で口径に対して底径がやや小さめのものがある。また，須恵器高台杯では，高台部と体部との境界から直線的に開く形態である。須恵器長頸瓶では，頸部にリング状の凸帯が巡り，口縁部の上部がやや開く形態である。一部に８世紀後半と推定されるものがあるが，９世紀前半頃を中心とする年代のものが多く，機能が停止する時期は９世紀中頃と推定される。

１号流路跡底面礫層出土遺物（図100下段）

重複関係により２号流路跡を切っているものである。土師器杯では，２号溝跡にみられた器高が高く，体部下半に回転ヘラケズリ調整されるものがある。他に器高が高くなく，体部端に回転ヘラケズリが施されたもの，体部下端に手持ちヘラケズリが施されたものや無調整のものがある。また，内外面に再調整を施さない赤焼土器杯もある。土師器甕では，口縁部が「く」の字状に外反するものに加えて，口縁部をつまみ上げるタイプのものも出現する。須恵器杯では，12号溝跡出土の底径が大きく，器高が低いタイプのもの以外に，器形にかなりバラエティーが認められる。須恵器長頸瓶では，頸部が細く口縁部の外反が弱いものと頸部から口縁部に向けてやや広がる形態のものがある。概ね９世紀半ば～後半を中心とする年代のものが多くを占めるが，古くは８世紀後半のものがあり，新しいものでは10世紀以降と思われるものも含まれる。

墨書土器について

今回の調査で墨書土器（線刻文字含む）は，合計186点出土しており，その中の82点を報告書に収録した。１～２文字の書かれているものの文字別の一覧を表１にまとめた。文字数で最も多いのが「今」で，墨書土器以外にも木製品の挽物椀に線刻されたものもあり，本遺跡の特徴ともなっている。本年度調査した隣接する西木流Ｃ遺跡からは「梓　今来」と線刻された須恵器も出土しており，共通する文字として興味深い。複数出土の文字には「中」「氏」「上」「勘長？」「吉集」「平」「冨」「千」があり，吉祥句的なものが多い。

１点のみの出土品の中には，遺跡の性格の手がかりとなるものが含まれている。「北家」「田家」「舘」は建物を示すもの，「倉人」「吏」は役職等を示すもの，「戸主」は律令制下での戸籍単位を示すものと考えられる。（藤　谷）

表１　墨書土器一覧表

文字	点数	文字	点数	文字	点数
今	11	氏	3	内	1
中	3	子	1	本	1
上	2	得千	1	百	1
勘長？	1	福	1	入	1
吉集	3	号	1	花	1
平	2	炭	1	鏡	1
冨	2	王足	1	奇	1
千	2	和天	1	寛	1
北家・足	1	沙	1	廣	1
田家	1	沙〇	1	太	1
舘	1	拾万	1	身	1
倉人	1	上万	1		
吏	1	田万	1		
戸主	1	大	1		

第２節　井戸跡について

本節では，詳論する紙幅はないので，本文中で記した構造の補足及び周辺遺跡の類例を示すとともに，使用された転用部材のうち特異なものを抽出して，若干の推定を述べていきたい。

本節で取り上げる鶴沼Ｃ遺跡１号井戸跡（ＳＥ01）は，本文でも記したとおり，素掘りの掘形に井戸側を持っている遺構である。

今年度の調査では，湯川村桜町遺跡から会津若松市西坂才遺跡まで，約2.5㎞の路線長の中で６遺跡の調査を行ったが，井戸遺構は南東寄りの鶴沼Ｃ遺跡と西坂才遺跡から各１基を検出したのみである。このうち，西坂才遺跡ＳＫ03は素掘りの井戸で，井戸側等の構造物は検出していない。これに伴う可能性のある建物跡としてはＳＢ04のみである。

構造について

井戸側及び掘形・埋め土・井戸底のろ過構造等については，本文中で触れたので，ここでは省略するが，側板については西面と東面の板が長く，隅柱からそれぞれ南北にはみ出しており，北面と南面の側板がその内側に収まることを補足する。

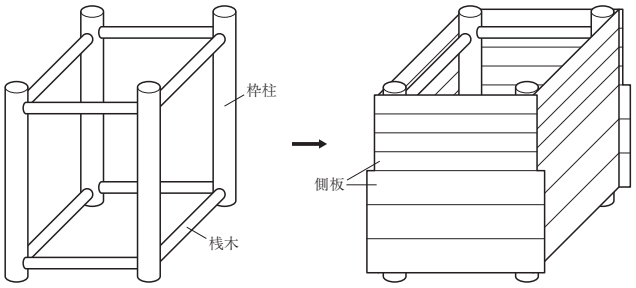


図101　井戸枠復元模式図

井戸側の復元想定図は，図101のとおりである。桟木は２段だけにしているが，井戸側上半部が残っていないので，実際はもう何段かの桟木があった可能性はある。さらに井戸側の上に乗る井桁についても，その有無や構造について同様の理由で明らかにすることはできなかった。

本遺構を確認した面が，すでに昭和30・31年のほ場整備事業等で大きく改変を受けているため，上屋構造物や排水用溝が存在した痕跡すら確認できなかった。

以上のように，構造全体については不明な点が多いが，残存していた井戸側下半部の構造，すなわち四隅に柱を立て，桟木（横桟）で固定した上で，側板（横板）を積み上げるというのは，平城京でも類似のものを一定数検出しており，宇野氏が“ＢⅤｂ類横板組隅柱どめ”，篠原豊一氏が“Ｅ類方形横板組隅柱横桟どめ”という型式に分類しているものに該当する。側板については，本遺構と同じように特別な細工をしないまま積み上げるものと，上下の板の接着面に雇枘（太枘）を設けて連結するものとがある。

周辺に目を転じると，井戸側を持つ遺構はあるが，構造的に同じものは見当たらない。９世紀代の本遺構の前後，多少時間的幅を持ってみると，桜町遺跡４次調査や屋敷遺跡・郡山遺跡で井籠組の“横板組”や“曲物”を，矢玉遺跡では“刳り貫き”井戸を検出している。

この他，西坂才遺跡ＳＫ03のように，井戸側等の構造物を持たない素掘り井戸も多く検出しているが，それぞれ周辺にはおおむね３棟以上の掘立柱建物跡があり，それらに伴う井戸と判断できる。これらの中には２段掘りのものも多く，桜町遺跡４次調査163号土坑や屋敷遺跡３号井戸跡のように井戸底に水溜構造を持つものもある。

本遺跡の周辺を概観すると，“横板組”を主体とする遺跡（本遺構もこの型式のバリエーションのひとつである。），“刳り貫き”を主体とする遺跡という構造の違いを認めることができる。これが時期差・時間差に起因するものか，各建物群を構成する集団の歴史的性格や郡衙レベルでの地域内における性格・格差などに起因するものなのかは，今後の検討課題としたい。

いずれにしても，会津地域における10世紀前葉までの時期は，数棟以上の掘立柱建物群に１基の井戸が伴うことで，それは官衙の存在をうかがわせるものと言えるかも知れない。

転用材について

続日本紀には，「神火」や正倉を管轄している国司・郡司らが，税納入の虚偽であることをそらすために正倉を焼き払っているといった記事が見え（註７），過失・放火を問わず，出火によって損害が出た場合は，彼らの給与に当たる「公廨」から補填させるようにという勅が出たりしている。

このような勅が出ること自体，そのような事故・事件が頻発していた証左であり，その結果として，建物廃材等が生じることが多かったと推定できる。

そのような建築部材や容器部材等のうち，再利用可能なものについては，大事に保管した上で，本遺構のような，とくに専用部材が必要でないものに，若干の加工を加えながら転用していたことが推定できる。

本遺構の井戸側に使用した部材は，ほぼ全てがこのような転用材と判断している。

このうち側板に使用したものは，建築部材のうちの壁板や床板といったものが中心であると想定しているが，その中で，両開きの扉板と扉枠板が２点ずつ出土しているので，その復元想像図を掲げておく。両種の板とも大小があり，１点ずつがセットになる。つまりどちらも，片方の扉板と上下どちらかの扉枠板が出土しているのみである。ただし，井戸側南面に使用している１枚図32－３も扉枠板になる可能性はある。しかし腐食が著しく，かろうじて板の両端に穿孔らしきものを認めうるのみで，現時点で断定はできない。

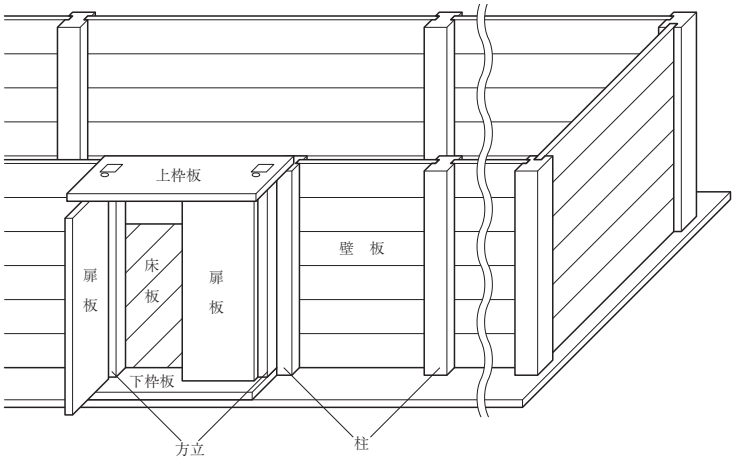


図102　扉板復元想像図

扉板は片方の端に断面円形の軸が上下にあり，扉枠板には，その軸を受ける円孔とその横に

“方立”という，扉板に荷重がかかって開閉が困難になることを防ぐ板を取り付けるための，長方形の枘穴を穿っている。図では方立枘穴が扉板軸受孔の後ろ側に来るようにしたが，方立は柱と扉板との隙間をなくすという役割も持つことから，このように配置した。これらのことから方立は枘穴よりも一回り大きい柱状のものが想定できる。

これらの部材を使った構造物については，扉板が４～4.5㎝の厚みがあり，厨子のような精緻なものとは推定できず，大きさ・形状からみても，伝統的な高床式倉庫の扉板に近いものである。瓦塔などを納める祠などの祭祀的構造物の可能性も否定はできないが，現時点では実用的な建物の部材と判断している。（作　田）

第３節　建物群と遺跡の性格について

今回の調査では，９棟の掘立柱建物跡が検出されており，建物跡の主軸方向から大きく２つのグループに分けることができた。すなわち，真北より８°程東寄りとなっている２～５号掘立柱建物跡（Ａ群）と主軸がほぼ真北である１・６・７号掘立柱建物跡（Ｂ群）である。これらの建物群については，直接の新旧を示すような重複関係は認められず，そこから，直接変遷をたどることはできなかった。しかし，遺物でみると，Ａ群に含まれる２号掘立柱建物跡から比較的古い時期と推定される円面硯図６－３が出土し，Ｂ群に含まれる１号掘立柱建物跡から口縁部が大きく開く比較的新しいタイプの長頸瓶図６－２が出土している。このことから，大きくはＡ群→Ｂ群の変遷を辿ったと推定される。遺構の特徴で見ると，柱穴掘形・柱痕が大きく規格が比較的明瞭な５号掘立柱建物跡を中心とした建物群から，規模は大きいが柱穴掘形・柱痕が小さい１号掘立柱建物跡を中心とした建物群への変遷がたどれる。

建物跡の実年代については，12号溝跡出土遺物の一部図43－８・９が上雨屋12号窯（８世紀第４四半期～９世紀第１四半期）に比定されるところから，上限は９世紀第２四半期頃と推定される。下限は，１号掘立柱建物跡から出土した長頸瓶が，10世紀第１四半期に比定される南原73号窯跡よりも古い要素を持っており，高台杯も出土しているところから，それ以前の９世紀第４四半期頃と推定される。したがって，建物跡群の時期は，９世紀第２四半期～第４四半期頃と考えている。

鶴沼Ｃ遺跡は，会津盆地の中でも会津郡衙推定地郡山遺跡に直線距離で約1.5㎞と近い距離にある。遺跡周辺には，近年同じ時期の遺構が確認された屋敷遺跡，矢玉遺跡，上吉田遺跡，西木流Ｃ遺跡等がある。これらの遺跡からは，竪穴住居跡が検出されておらず，掘立柱建物群からなる遺構が中心となっている。性格自体も木簡が出土したり，区画溝内に整然と建物跡が配置されたり，郡衙建物との関連を示す墨書土器が出土するなど，郡衙との関連性が色濃く残る性格がうかがえる。また，本年度同じ事業で調査した本遺跡の東側に位置する西坂才遺跡についても，掘立柱建物群のみから構成される遺跡で，同様な性格であると推定される。

本遺跡についても，同じような歴史的・地理的文脈の上で捉えられる遺跡であると考えている。

その中でも掘立柱建物群と流路跡から出土した墨書土器について着目すると，建物跡群の柱穴と柱痕が比較的小さく，間尺も完全な統一性が取れていないこと，墨書土器では建物や役職，戸籍を示すものが出土していること等の特徴が認められる。これらを勘案すると，郡衙機能を補足するような役所的な建物空間を想定するよりも，官人層の居宅としての空間を想定した方が合理的と思われ，鶴沼Ｃ遺跡はそのような性格を持った遺跡であると推定される。また，これらの居宅が流路跡周辺に立地し，流路自体を利用していた痕跡が認められたことも興味深い。

また，建物跡群が建つ以前の時期では，東の西坂才遺跡から直線的に続く12号溝跡が検出されている。12号溝跡の時期は，流路跡の古い段階とも重なり，端部でそれに流れ込む形態となっている。それを意識した会津郡衙周辺の道路等交通に関連する場所であったと推定される。（藤　谷）

註

註１・２・５　宇野隆夫　1982「井戸考」『史林』第65巻第５号　史学研究会　の中で使用している名称を引用した。

註３・４　上記文献中で，「横桟」・「井戸側」という用語を使用していることから，個々の部材の呼称として「横桟の木」・「井戸側の板」という意味で，「桟木」・「側板」とした。

註６　植村昌子　2009「建築部材刃痕にみる古代の鑿の形状と工作技術」『竹中大工道具館研究紀要』20

註７　『続日本紀　巻第三十二 宝亀四年八月庚午条，巻第三十九 延暦五年六月己未朔条，同八月甲子条，巻第四十 延暦十年二月癸卯条他』

参考文献

（財）福島県文化センター　1991「東北横断自動車道遺跡調査報告12　屋敷遺跡」『福島県文化財調査報告書』第262集　福島県教育委員会

（財）福島県文化センター　1991「東北横断自動車道遺跡調査報告９　船ヶ森西遺跡　上吉田遺跡」『福島県文化財調査報告書』第241集　福島県教育委員会

（財）福島県文化振興事業団　2012「会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告12　桜町遺跡（４次）」『福島県文化財調査報告書』第485集　福島県教育委員会

会津若松市教育委員会　1999「若松北部地区県営ほ場整備発掘調査報告書Ⅰ　矢玉遺跡」『会津若松市文化財調査報告書』第61号

会津若松市教育委員会　2000「若松北部　県営ほ場整備発掘調査報告書Ⅱ」『会津若松市文化財調査報告書』第66号

会津若松市教育委員会　2004「屋敷遺跡－弥生時代中期から古墳時代前期，一町四方の平安時代の大集落－」『会津若松市文化財調査報告書』第94号

会津若松市教育委員会　2004「会津　大戸窯　南原73号窯跡」『会津若松市文化財調査報告書』第87号

会津若松市教育委員会　2005「東高久遺跡－奈良・平安時代「多具郷」の有力な推定地－」『会津若松市文化財調査報告書』第104号

会津若松市教育委員会　2006「金屋遺跡　郡山遺跡Ⅱ－河東西部地区県営経営体育成基盤整備事業に伴う発掘調査－」『会津若松市文化財調査報告書』第107号

篠原豊一　1990「平城京の井戸とその祭祀」『奈良市埋蔵文化財調査センター紀要』奈良市教育委員会

付　章　自然科学分析

第１節　出土炭化物等の放射性炭素年代測定について

（株）加速器分析研究所

１　測定対象試料

鶴沼Ｃ遺跡は，福島県会津若松市高野町大字中沼字鶴沼に所在する。測定対象試料は，遺構から出土した木製品５点である（表３）。木製品は，AW-TRN・C-1が曲物の柄杓，AW-TRN・C-2が火付木，AW-TRN・C-3が木製皿，AW-TRN・C-4が下駄，AW-TRN・C-5が井戸の枠杭（枠杭１）とされる。AW-TRN・C-1は曲物縁の崩れた部分から残存最外年輪部３～５年輪分，AW-TRN・C-2は火付木先端付近の炭化した部分から残存最外年輪部２～３年輪分，AW-TRN・C-3は木製皿の残存最外年輪部約３年輪分，AW-TRN・C-4は下駄の残存最外年輪部約５年輪分，AW-TRN・C-5は杭の中程から残存最外年輪部約３年輪分を，各々測定用の木片試料として採取した。AW-TRN・C-3については，形状と年輪幅から採取試料より外側にさらに約50年輪程度あったと推定される。

２　測定の意義

遺構の年代を明らかにする。

３　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い，根・土等の付着物を取り除く。

（２）酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA 処理における酸処理では，通常1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001M から1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1M に達した時には「AAA」，1M 未満の場合は「AaA」と表１に記載する。

（３）試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（Ｃ）を生成させる。

（６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

4　測定方法

加速器をベースとした^{14}C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し，^{14}Cの計数，^{13}C濃度（^{13}C/^{12}C），^{14}C濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOxⅡ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5　算出方法

（1）δ^{13}C は，試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。

（2）^{14}C年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中^{14}C濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C年代はδ^{13}Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に，補正していない値を参考値として表2に示した。^{14}C年代と誤差は，下1桁を丸めて10年単位で表示される。また，^{14}C年代の誤差（$\pm 1\sigma$）は，試料の^{14}C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

（3）pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の^{14}C濃度の割合である。pMCが小さい（^{14}Cが少ない）ほど古い年代を示し，pMCが100以上（^{14}Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとする。この値もδ^{13}Cによって補正する必要があるため，補正した値を表1に，補正していない値を参考値として表2に示した。

（4）暦年較正年代とは，年代が既知の試料の^{14}C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の^{14}C濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，1標準偏差（$1\sigma = 68.2\%$）あるいは2標準偏差（$2\sigma = 95.4\%$）で表示される。グラフの縦軸が^{14}C年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，δ^{13}C補正を行い，下一桁を丸めない^{14}C年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い，OxCalv4.2較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暦年較正年代は，^{14}C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

6　測定結果

測定結果を表1・2に示す。

試料の^{14}C年代は，AW-TRN・C-1が600 ± 20yrBP，AW-TRN・C-2が1150 ± 20yrBP，AW-TRN・C-3が1250 ± 20yrBP，AW-TRN・C-4が1070 ± 20yrBP，AW-TRN・C-5が1230 ± 20yrBPである。暦年較正年代（1 σ）は，AW-TRN・C-1が1309～1397cal ADの間に３つの範囲，AW-TRN・C-2が779～961cal ADの間に３つの範囲，AW-TRN・C-3が695～771cal ADの間に３つの範囲，AW-TRN・C-4が972～1015cal ADの範囲，AW-TRN・C-5が713～863cal ADの間に５つの範囲で示される。

試料の炭素含有率はすべて50％を超え，化学処理，測定上の問題は認められない。

文　献

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51（1），337-360

Reimer, P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 55(4), 1869-1887

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ^{14}C data, *Radiocarbon* 19（3），355-363

表２　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-132407	AW-TRN・C-1	SK17　ℓ5（最下層）図23-1	木製品	AAA	-25.37 ± 0.22	600 ± 20	92.79 ± 0.26
IAAA-132408	AW-TRN・C-2	1号流路跡　ℓ4（最下層）図69-14	木製品	AAA	-26.8 ± 0.25	1,150 ± 20	86.63 ± 0.23
IAAA-132409	AW-TRN・C-3	2号流路跡　ℓ4（最下層）図84-3	木製品	AAA	-29.02 ± 0.27	1,250 ± 20	85.55 ± 0.23
IAAA-132410	AW-TRN・C-4	3号流路跡　ℓ4（最下層）図95-9	木製品	AAA	-30.26 ± 0.28	1,070 ± 20	87.55 ± 0.23
IAAA-132411	AW-TRN・C-5	1号井戸跡　ℓ2 図26-4	木製品	AAA	-28.69 ± 0.3	1,230 ± 20	85.77 ± 0.22

表３　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C未補正値，暦年較正用^{14}C年代，較正年代）

測定番号	δ^{13}C補正なし		暦年較正用（yrBP）	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-132407	610 ± 20	92.72 ± 0.25	601 ± 22	1309calAD-1330calAD（26.9%） 1339calAD-1361calAD（28.5%） 1387calAD-1397calAD（12.7%）	1299calAD-1370calAD（73.3%） 1380calAD-1406calAD（22.1%）
IAAA-132408	1,180 ± 20	86.32 ± 0.22	1,152 ± 21	779calAD-789calAD（ 6.8%） 869calAD-902calAD（29.4%） 920calAD-961calAD（32.1%）	776calAD-793calAD（ 8.5%） 801calAD-907calAD（51.1%） 915calAD-968calAD（35.7%）
IAAA-132409	1,320 ± 20	84.85 ± 0.22	1,253 ± 21	695calAD-702calAD（ 7.6%） 709calAD-746calAD（51.5%） 764calAD-771calAD（ 9.2%）	676calAD-778calAD（90.8%） 792calAD-804calAD（ 1.7%） 815calAD-823calAD（ 0.7%） 841calAD-860calAD（ 2.2%）
IAAA-132410	1,150 ± 20	86.61 ± 0.22	1,067 ± 21	972calAD-1015calAD（68.2%）	900calAD-922calAD（12.5%） 948calAD-1020calAD（82.9%）
IAAA-132411	1,290 ± 20	85.13 ± 0.22	1,232 ± 20	713calAD-744calAD（29.0%） 765calAD-778calAD（12.3%） 791calAD-805calAD（ 8.4%） 812calAD-826calAD（ 6.6%） 840calAD-863calAD（11.9%）	691calAD-749calAD（38.6%） 761calAD-781calAD（14.7%） 787calAD-878calAD（42.1%）

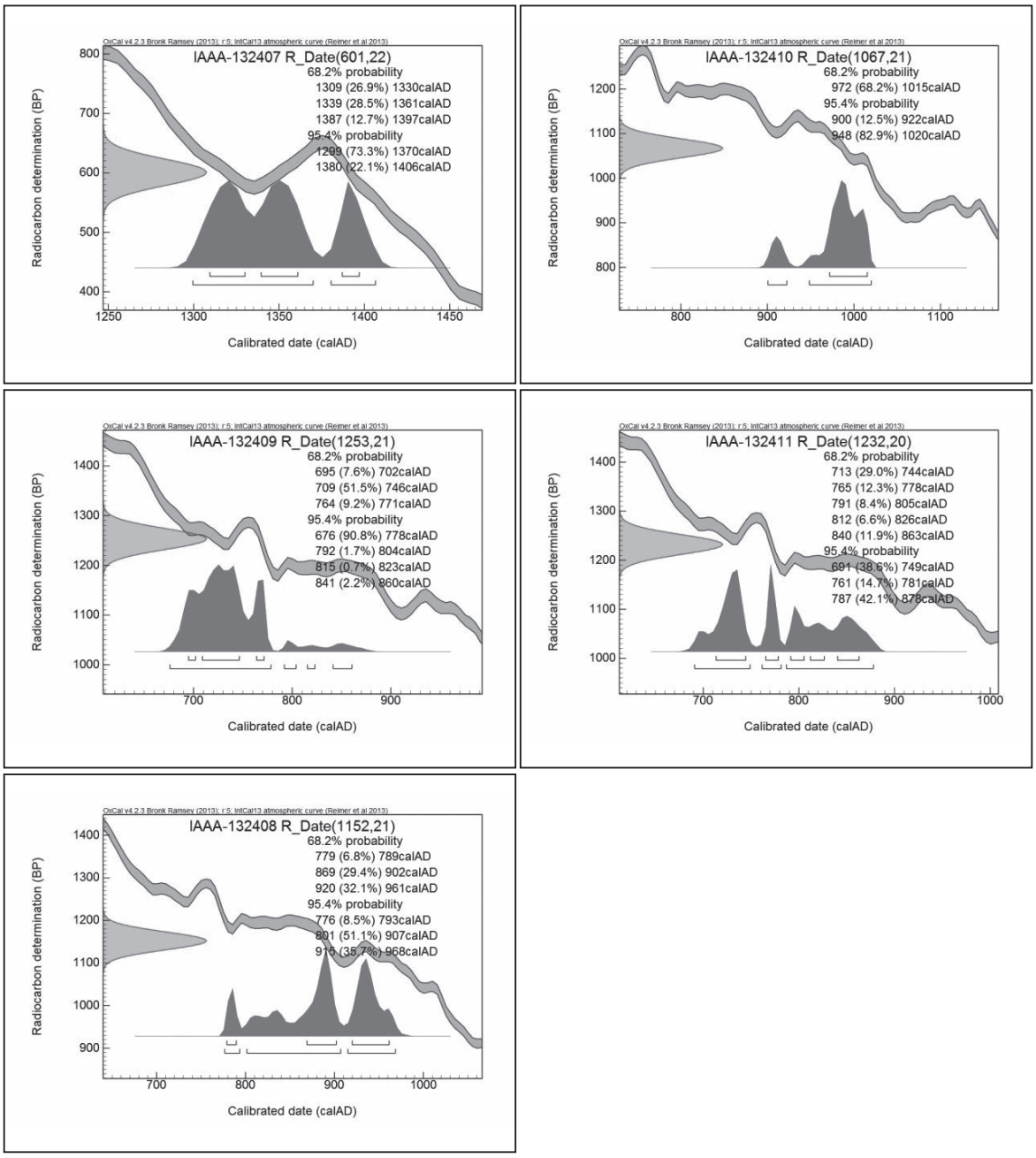
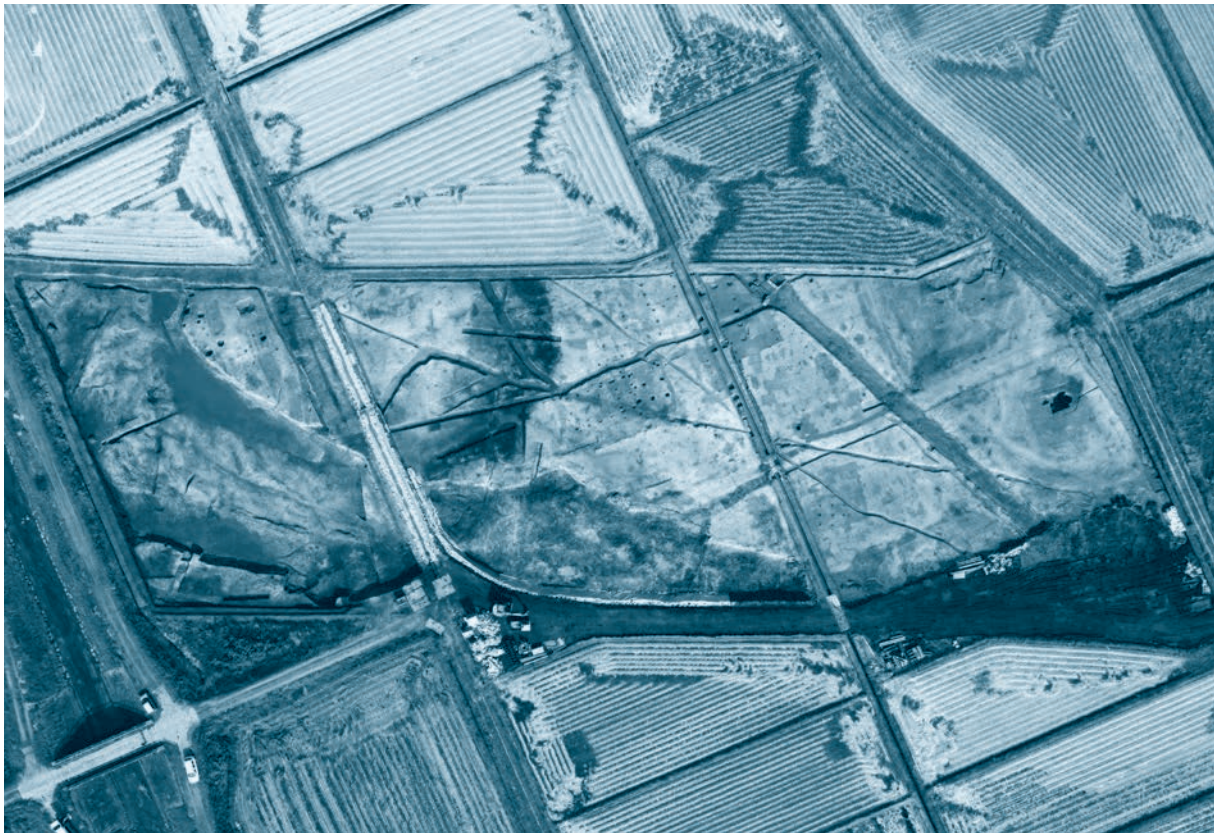


図103　暦年較正年代グラフ

写　真　図　版

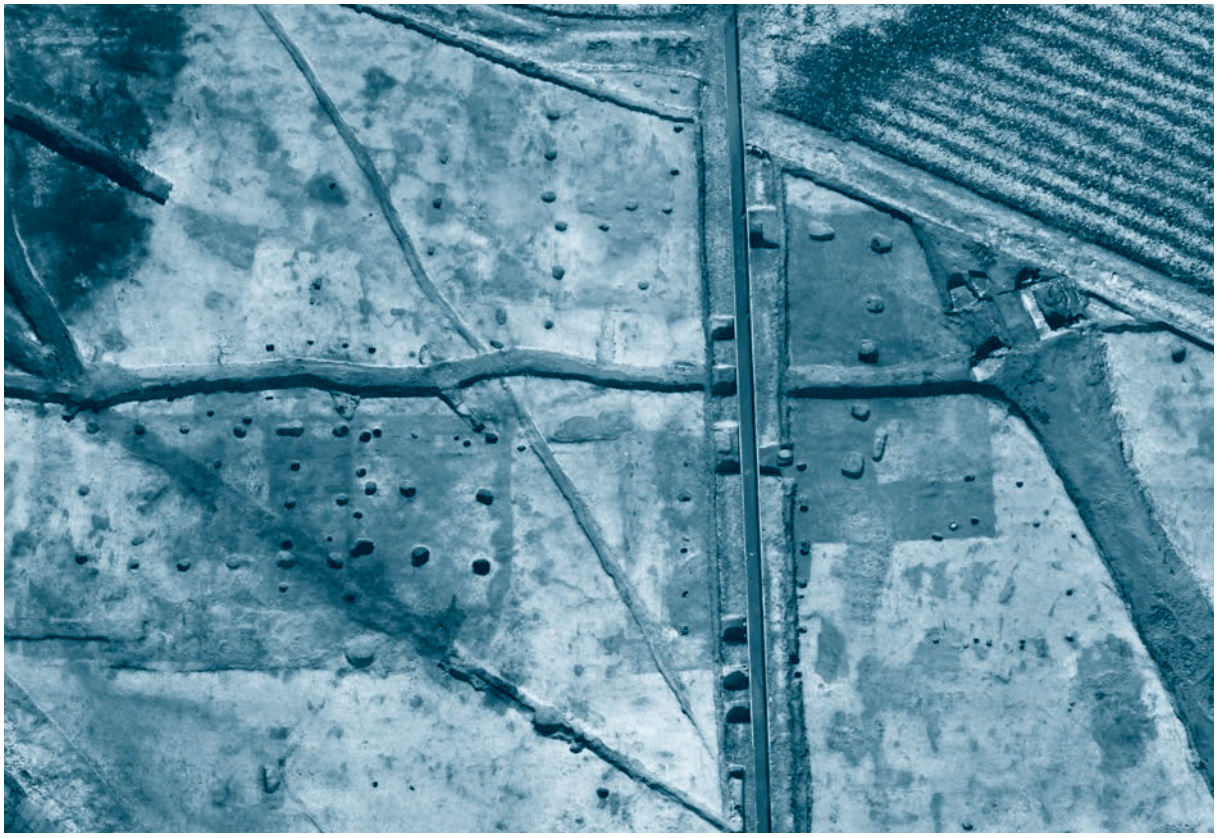
第１編　鶴沼Ｃ遺跡

1　調査区遠景（南から）

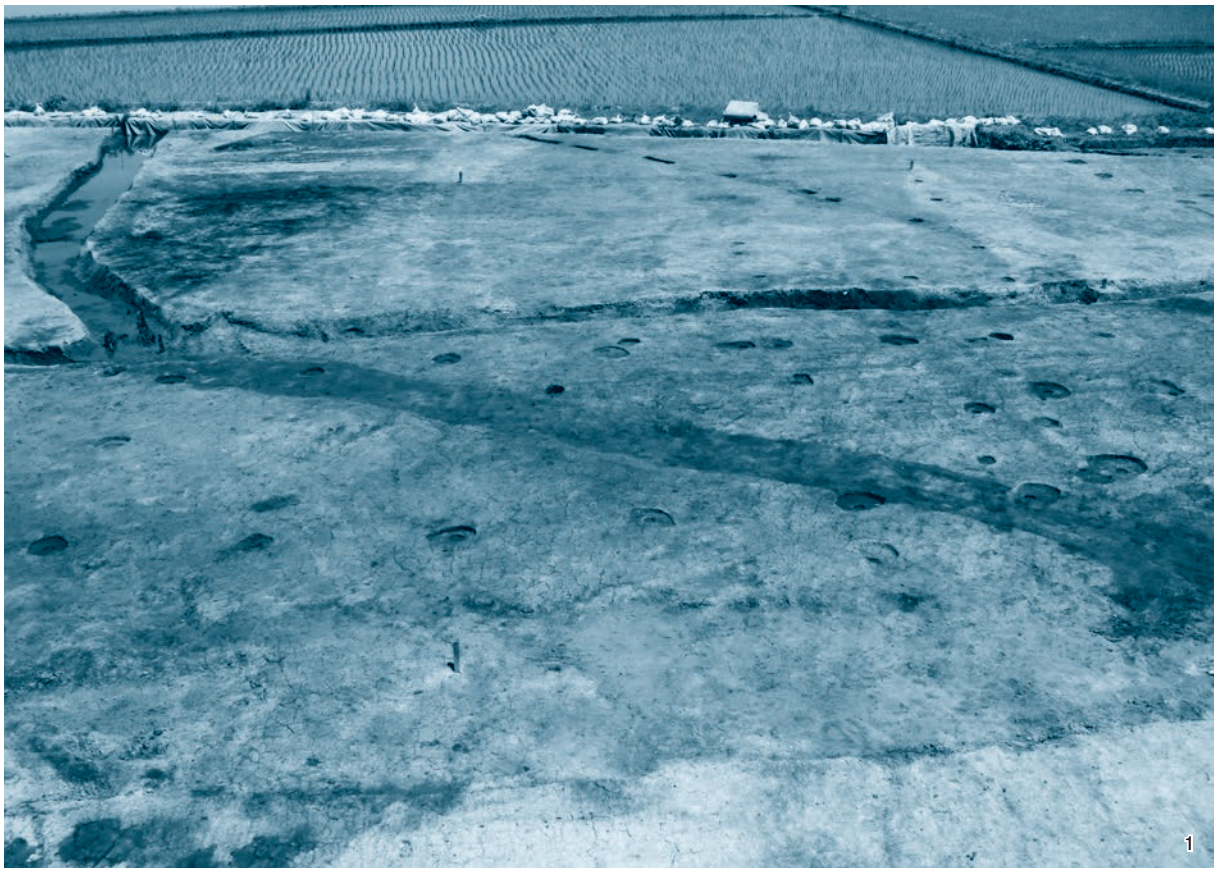


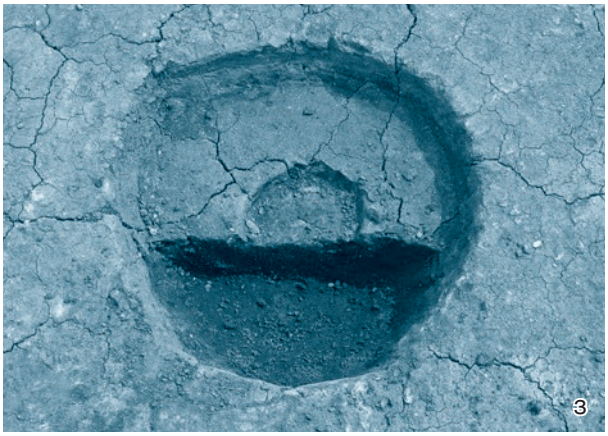
2　調査区全景（真上から）

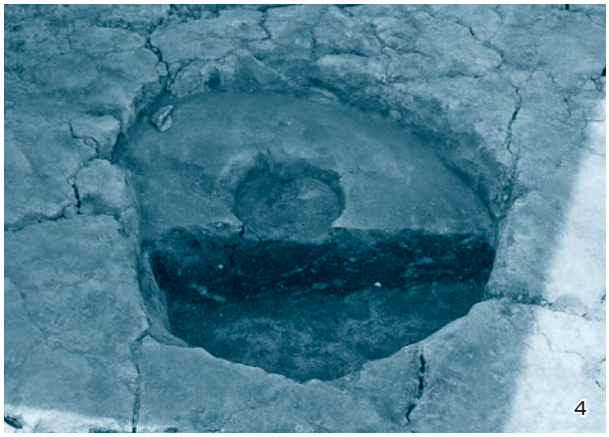
3　Ⅰ区２・３号流路跡掘込前全景（真上から）



4　Ⅱ・Ⅲ区　掘立柱建物跡群（真上から）

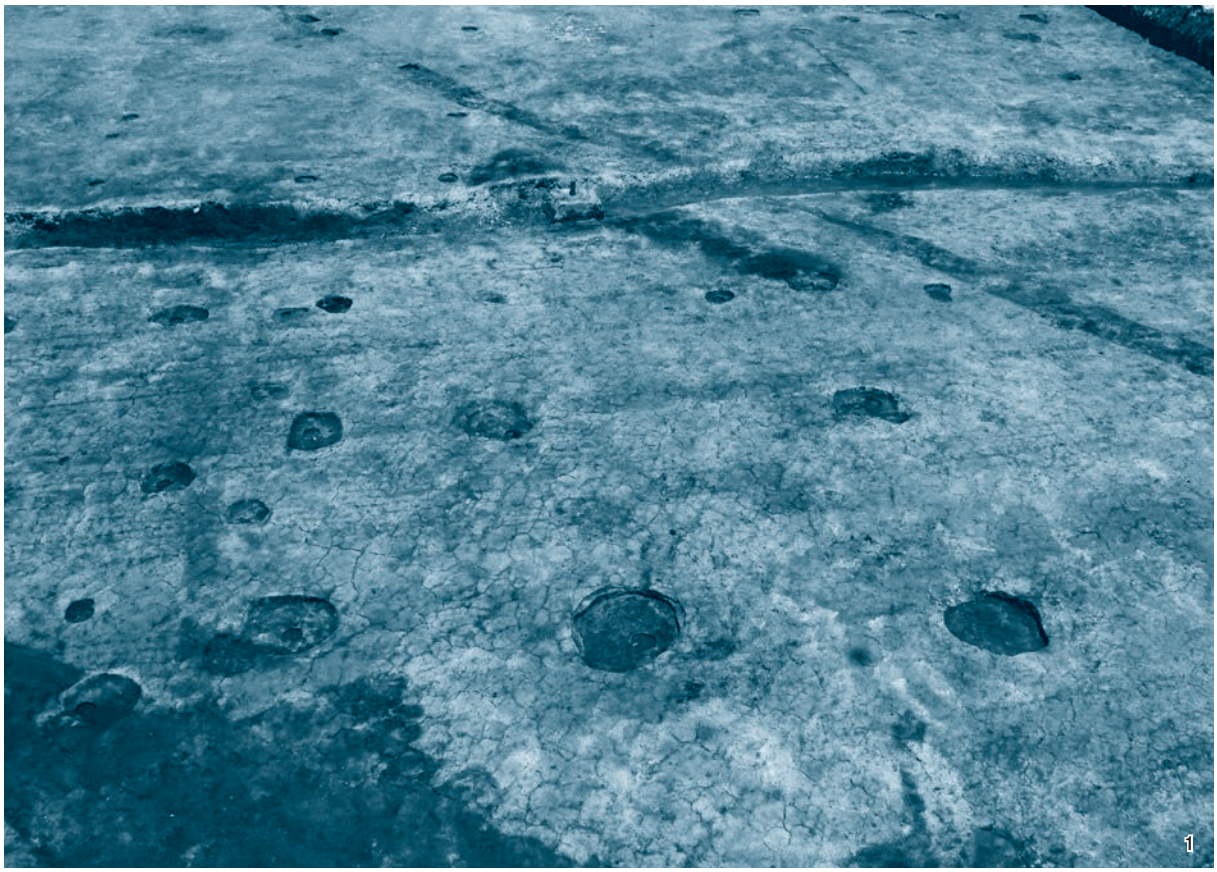


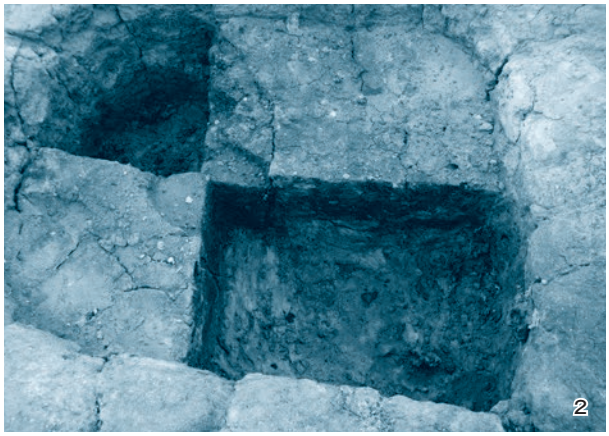


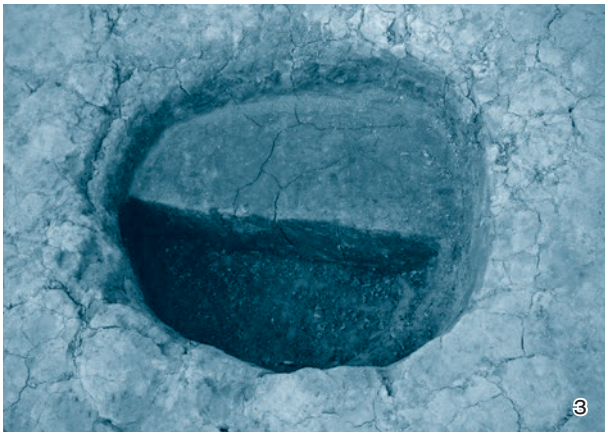


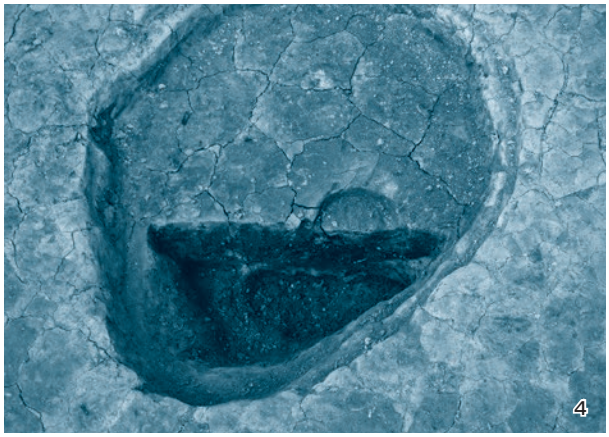
5　1号掘立柱建物跡

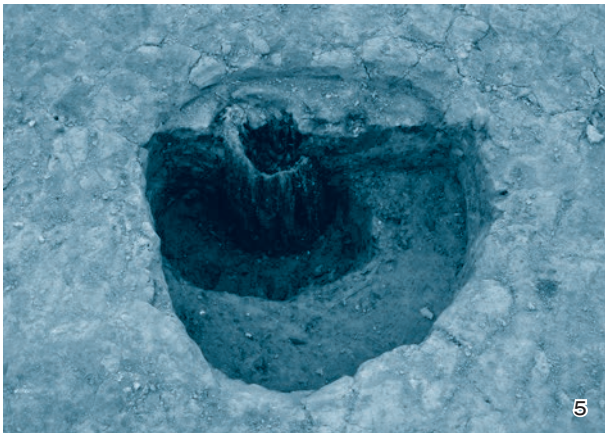
1　全景（南から）
2　P1断面（北東から）
3　P2断面（北から）
4　P8断面（東から）
5　P14断面（南東から）





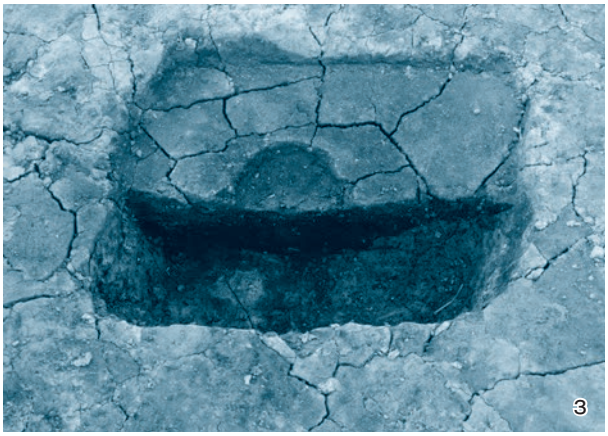


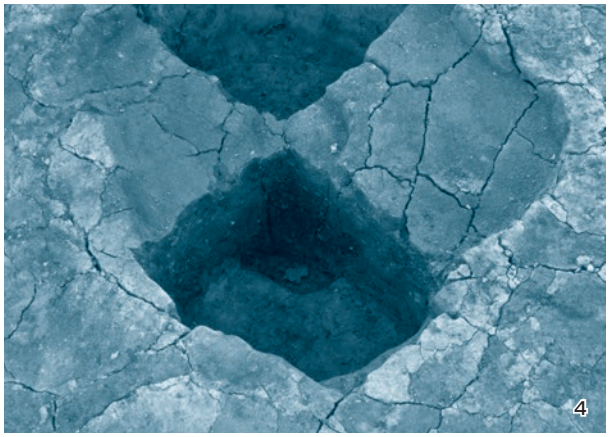




6　２号掘立柱建物跡

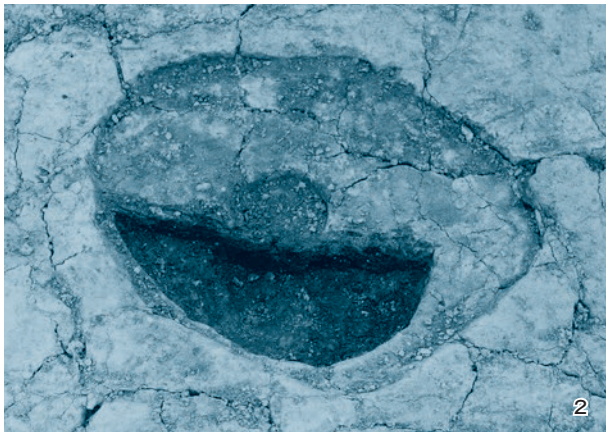
1　全景（南から）
2　Ｐ４断面（北から）　**3**　Ｐ６断面（南から）
4　Ｐ７断面（南から）　**5**　Ｐ10断面（北から）

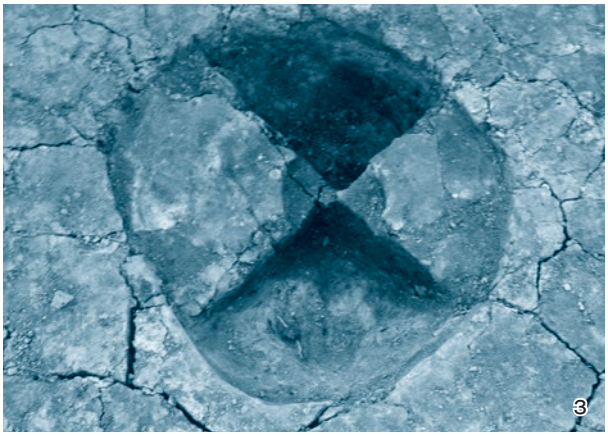


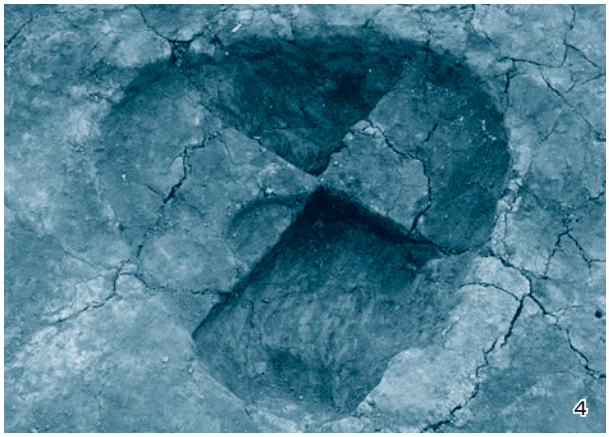


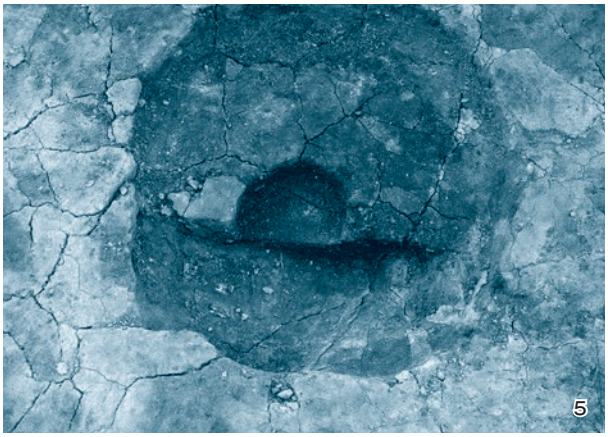
7　3号掘立柱建物跡

1　全景（南から）
2　P 7 断面（南西から）
3　P 8 断面（南から）
4　P 10 断面（南東から）
5　P 11 断面（西から）



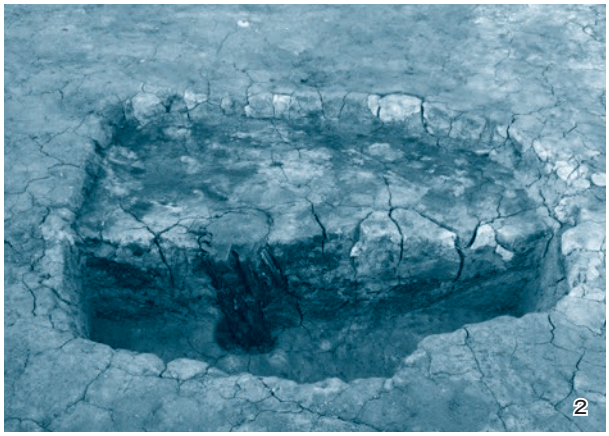


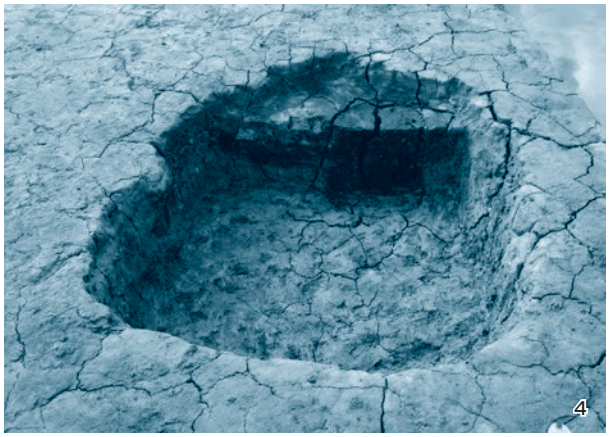


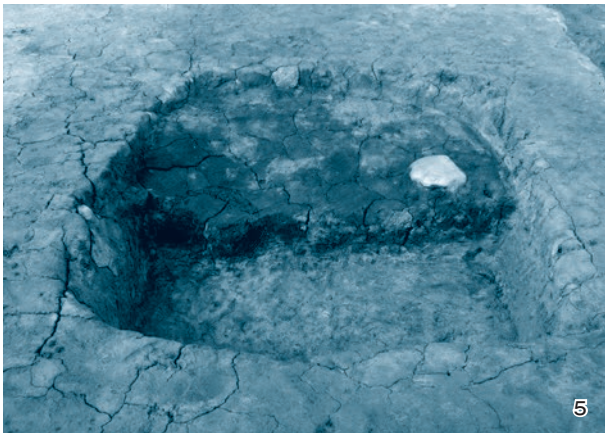


8　４号掘立柱建物跡

1　全景（南から）
2　Ｐ１断面（西から）
3　Ｐ３断面（北西から）
4　Ｐ５断面（北東から）
5　Ｐ６断面（東から）

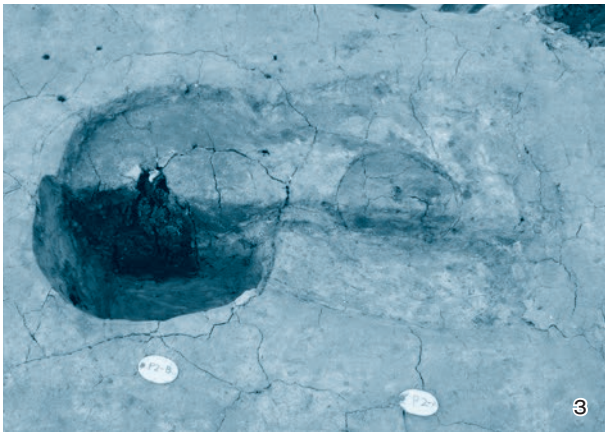


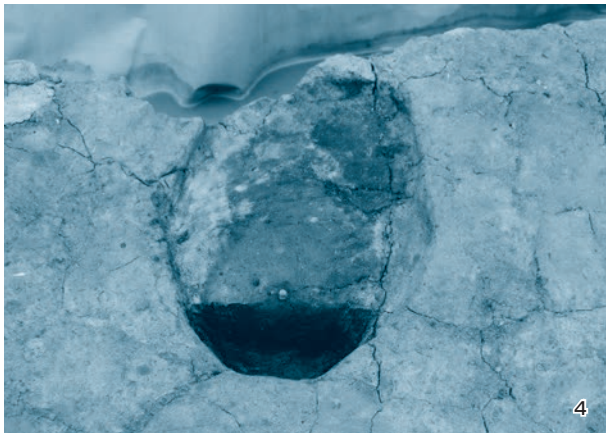




9　5号掘立柱建物跡

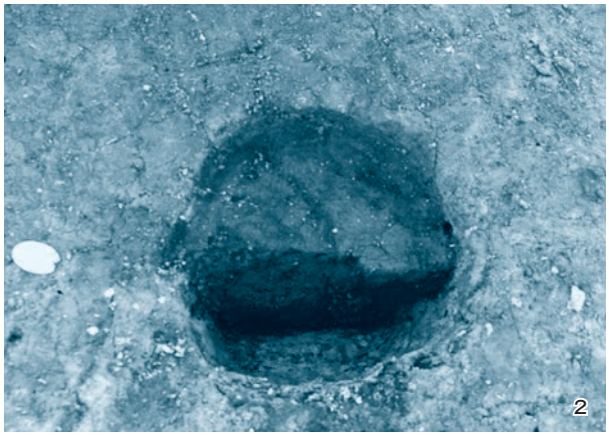
1　全景（南から）
2　P２断面（南から）　**3**　P４断面(東から)
4　P５断面（東から）　**5**　P６断面(南から)

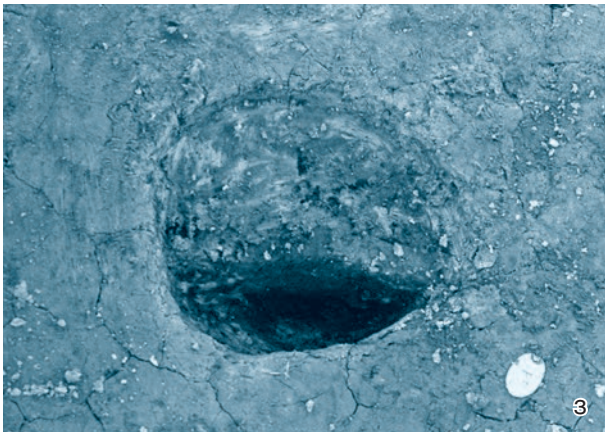


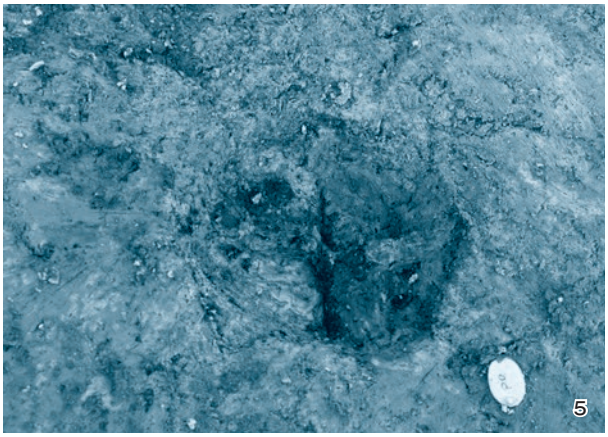


10　６号掘立柱建物跡

1　全景（南から）
2　Ｐ１断面（東から）　**3**　Ｐ２－Ａ･Ｂ断面(東から)
4　Ｐ５断面（東から）　**5**　Ｐ６断面（東から）

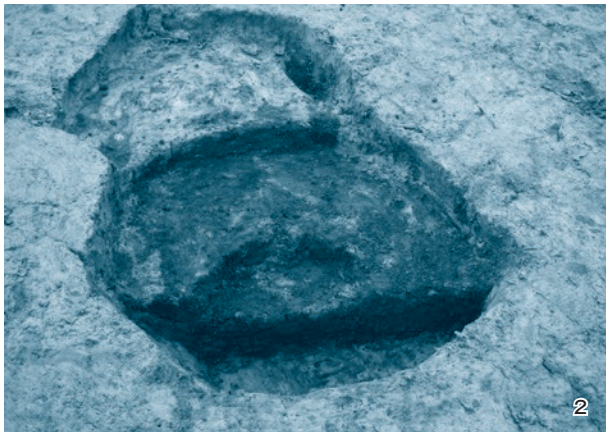


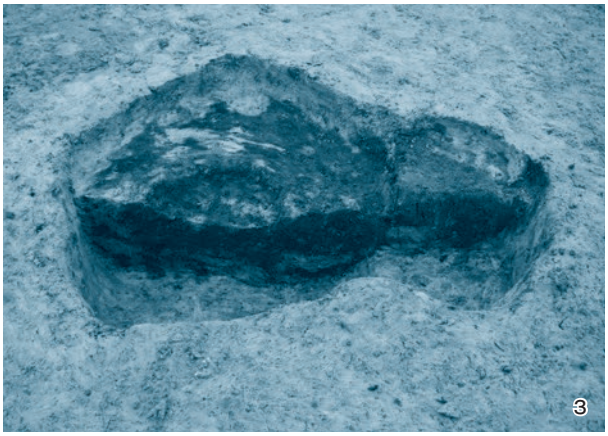


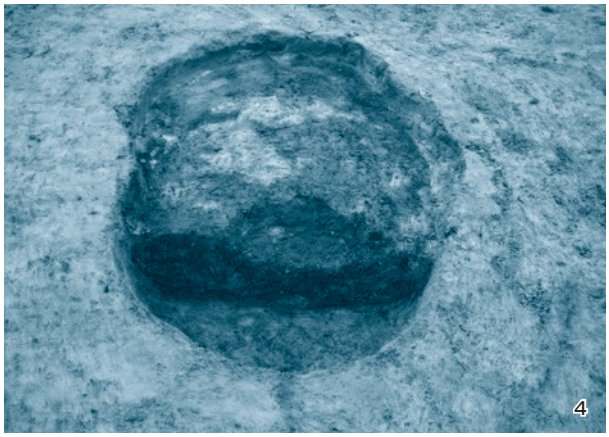


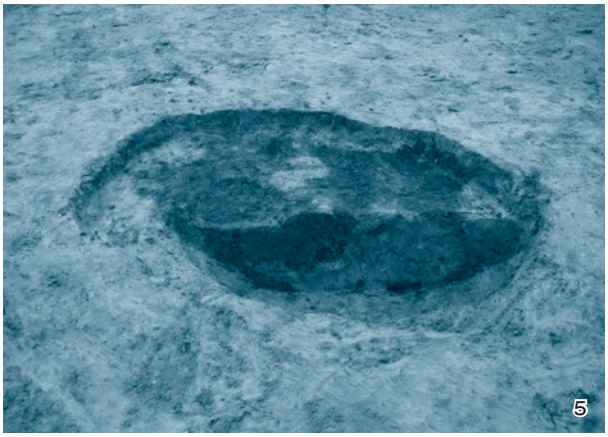
11　７号掘立柱建物跡

1　全景（南から）
2　Ｐ３断面（北から）　**3**　Ｐ５断面（東から）
4　Ｐ６断面（南から）　**5**　Ｐ９断面（南から）



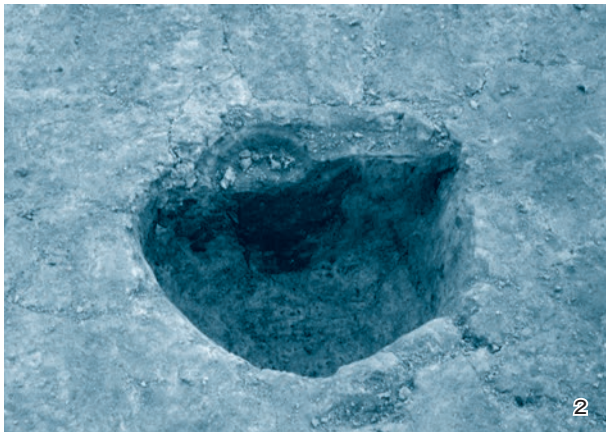


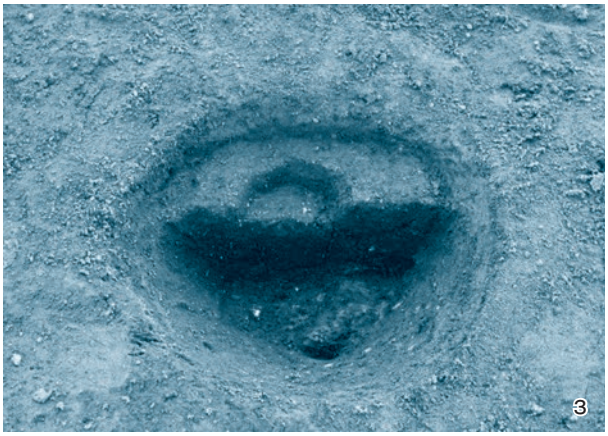


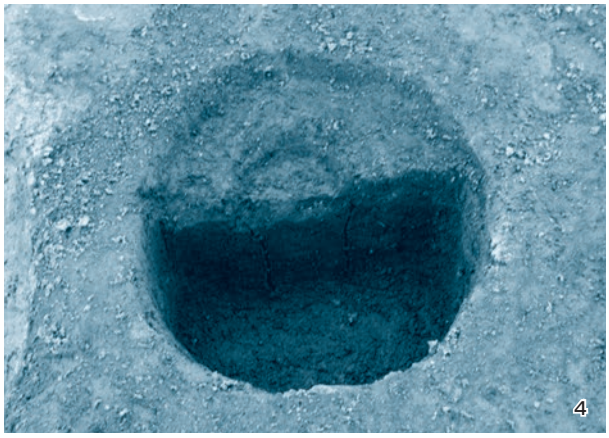


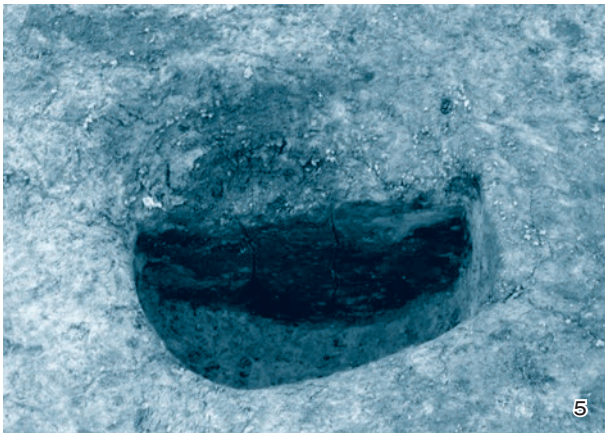
12　8号掘立柱建物跡

1　全景（南から）
2　Ｐ２断面（南から）
3　Ｐ６断面(南から)
4　Ｐ７断面（南から）
5　Ｐ８断面(南から)



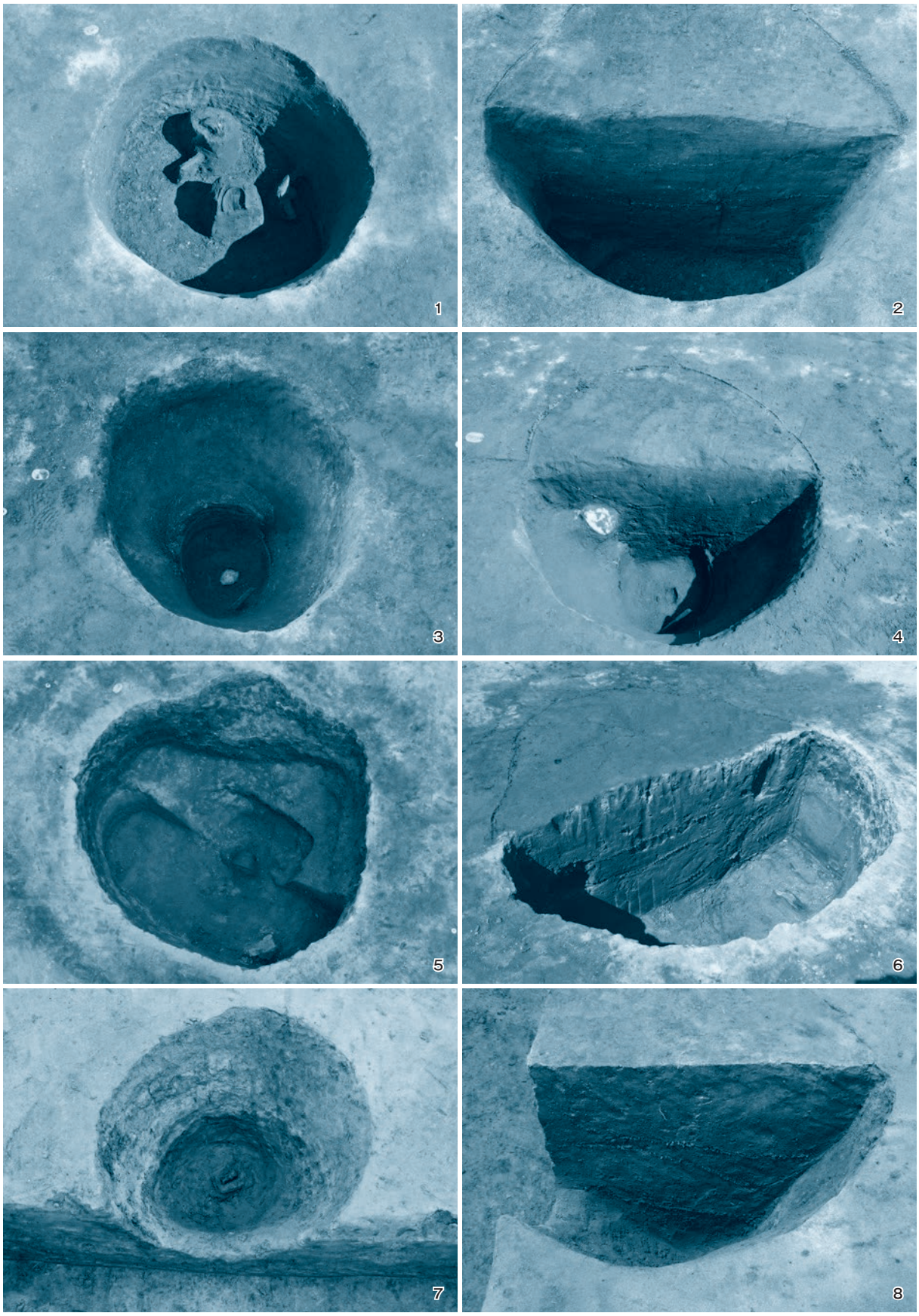






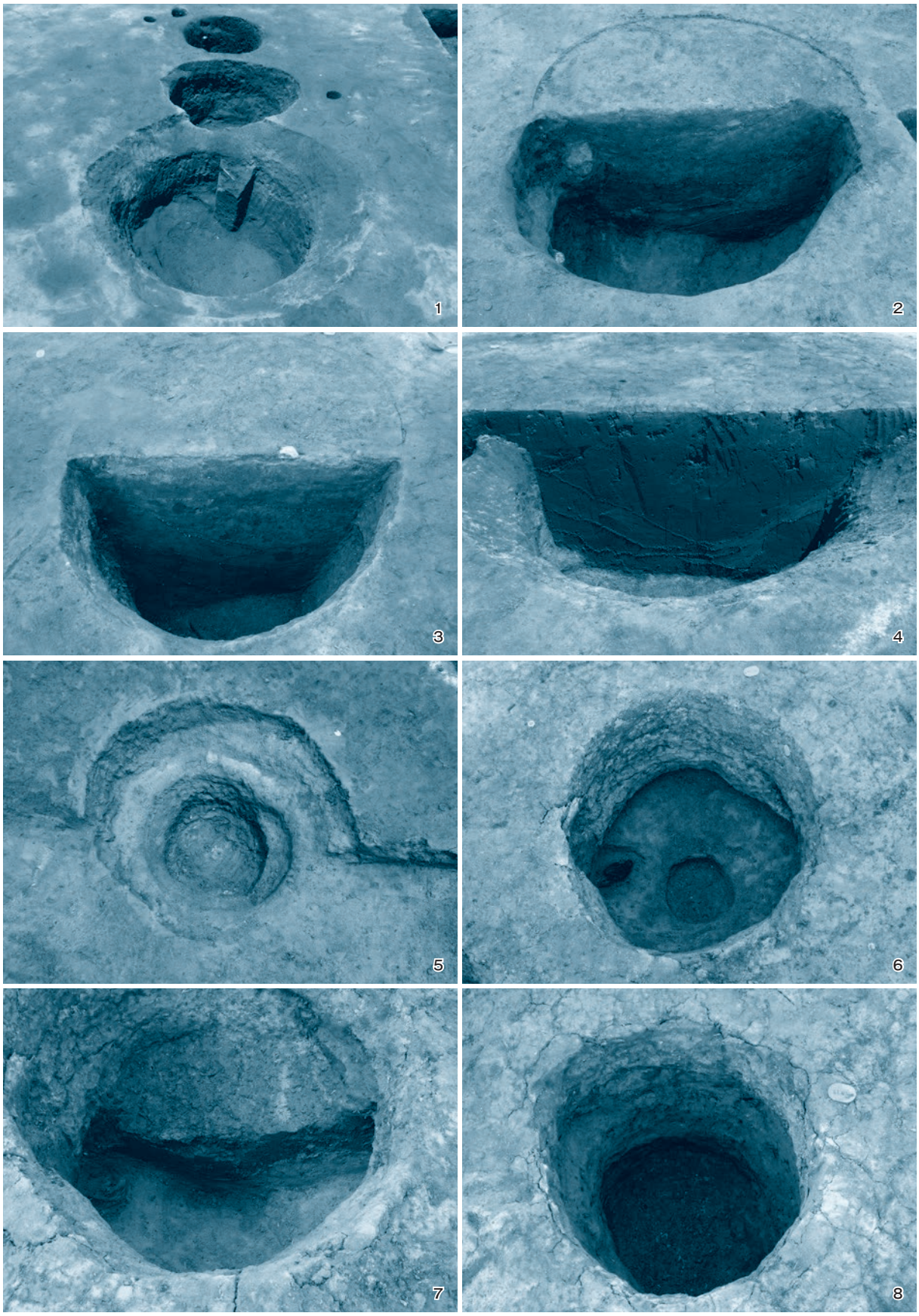
13　９号掘立柱建物跡

1　全景（南から）
2　Ｐ３断面（西から）　**3**　Ｐ５断面(西から)
4　Ｐ７断面（東から）　**5**　Ｐ９断面(東から)



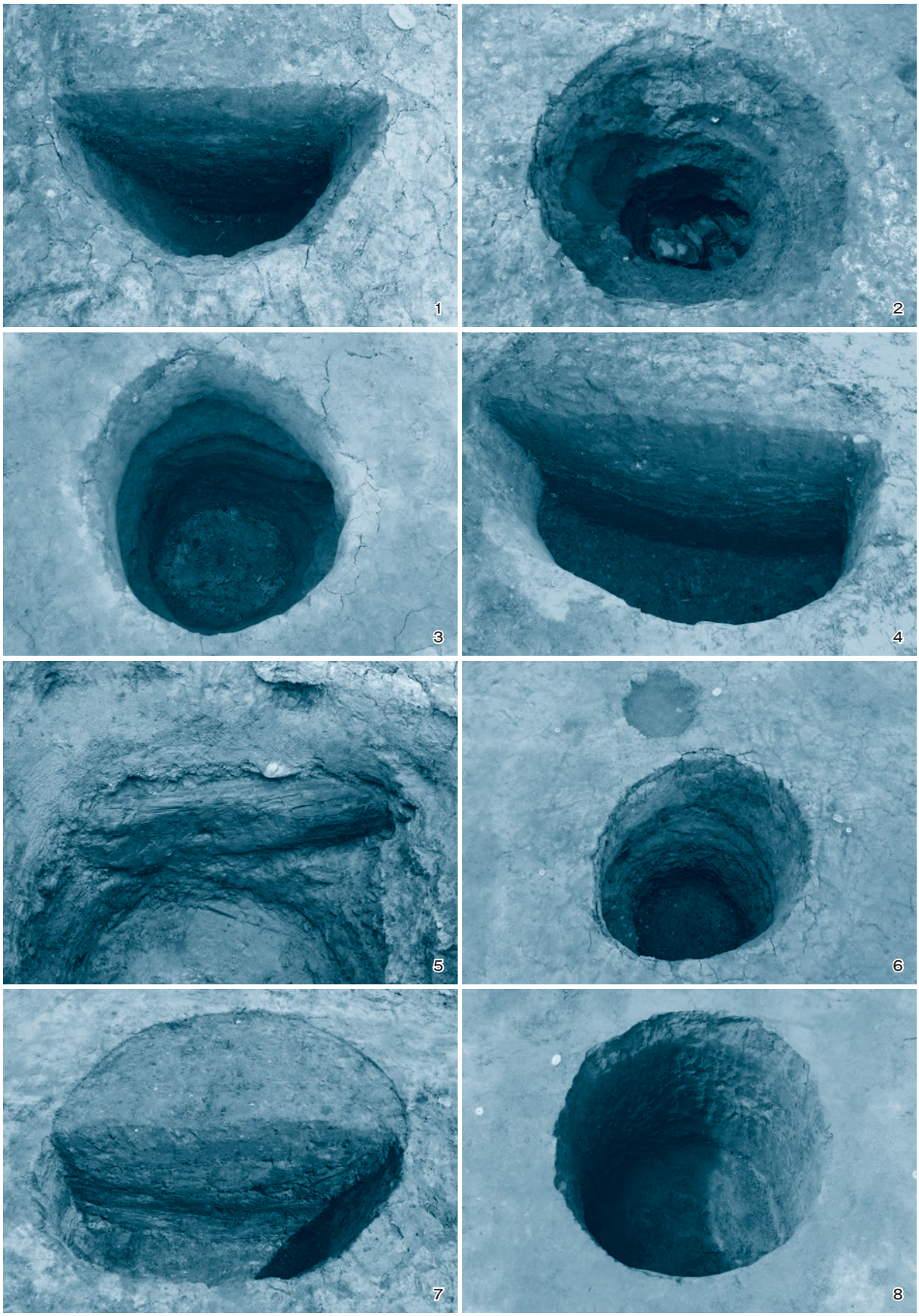
14　１・３～５号土坑

1　１号土坑全景（南から）　**2**　１号土坑断面（南から）
3　３号土坑全景（南から）　**4**　３号土坑断面（南から）
5　４号土坑全景（南から）　**6**　４号土坑断面（南から）
7　５号土坑全景（南から）　**8**　５号土坑断面（東から）



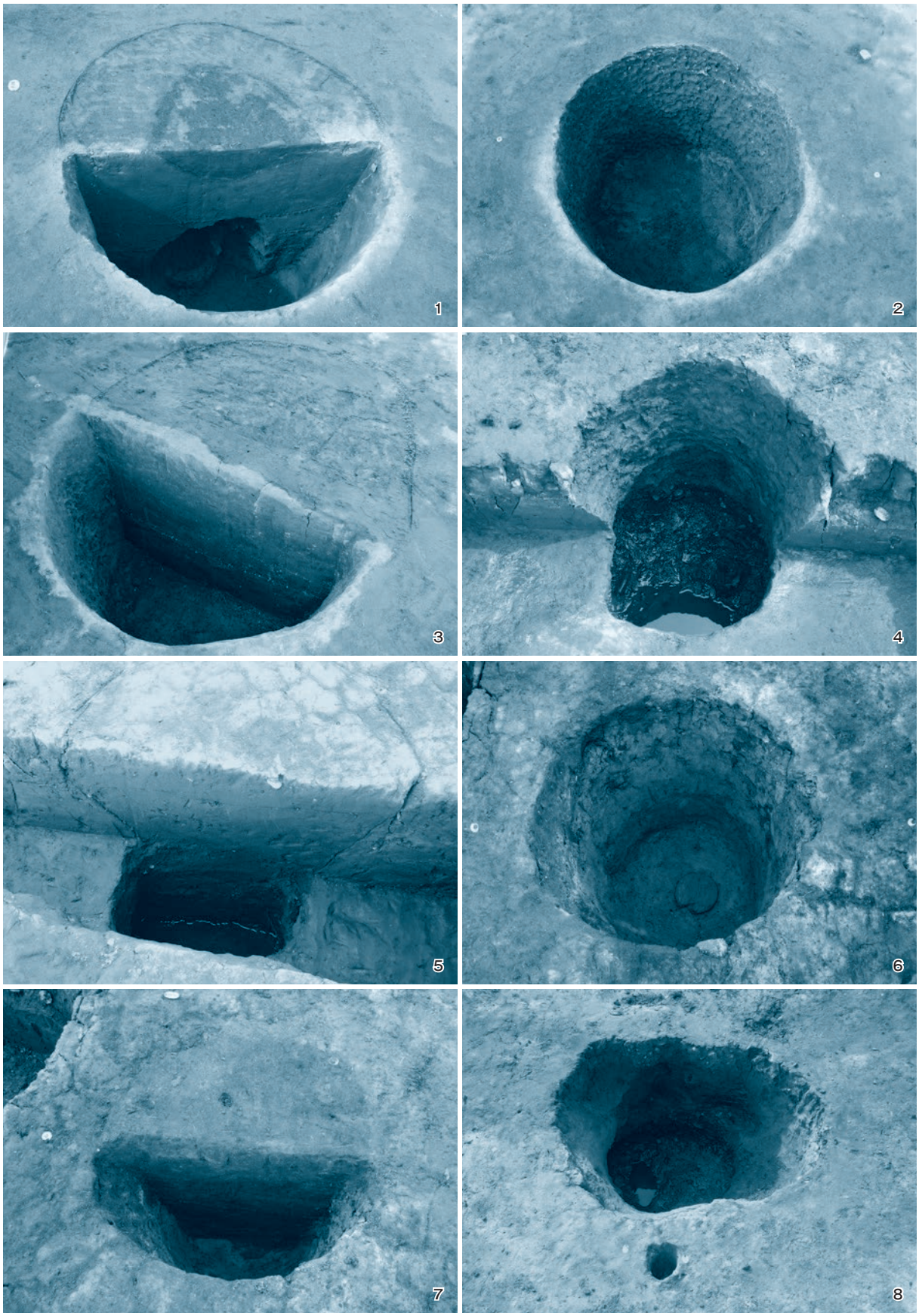
15　7～10・12・13号土坑

1　7～9号全景（東から）　**2**　7号土坑断面（南から）
3　8号土坑断面（南から）　**4**　9号土坑断面（南から）
5　10号土坑全景（南から）　**6**　12号土坑全景（南から）
7　12号土坑断面（南から）　**8**　13号土坑全景（南から）



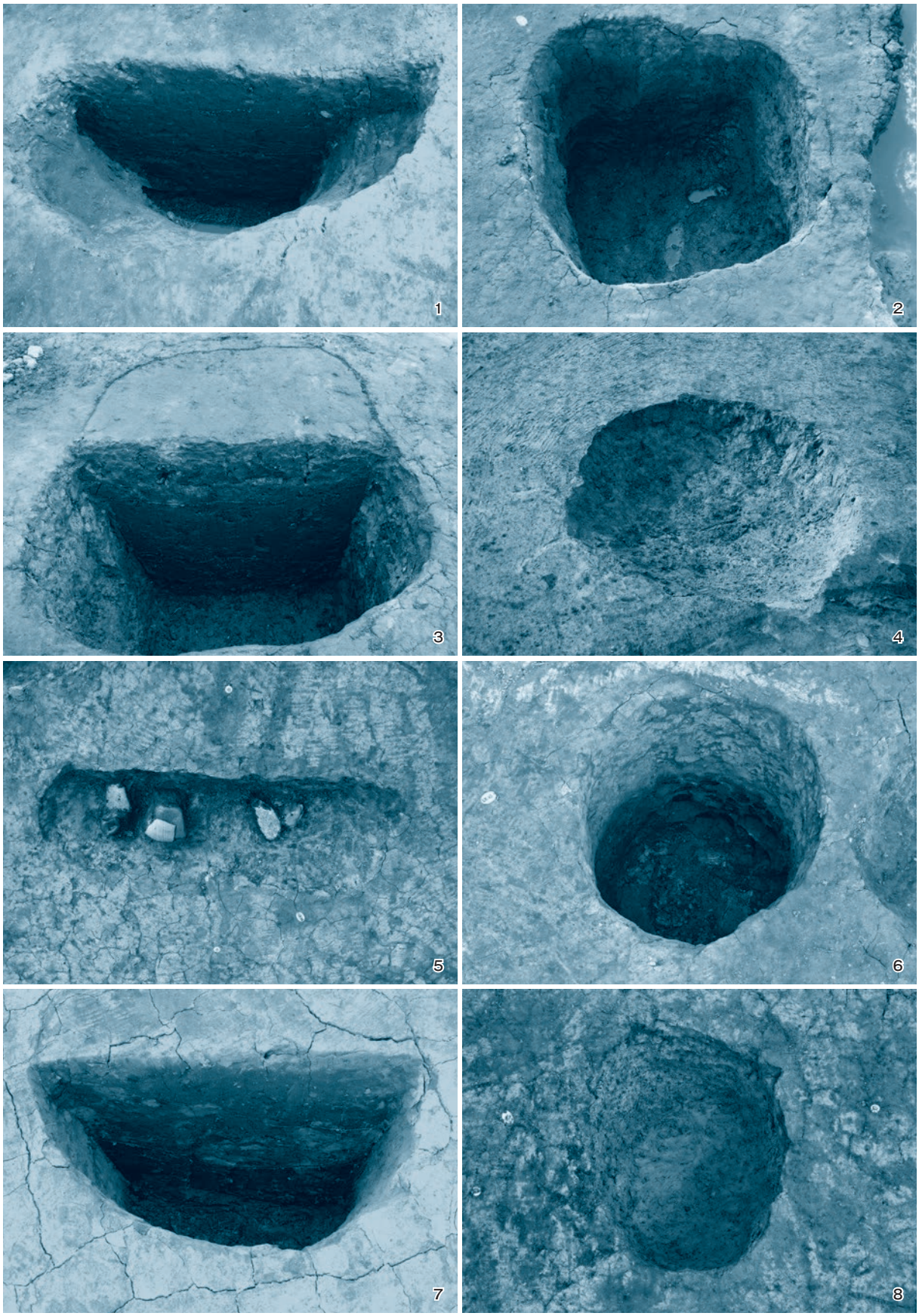
16　13～18号土坑

1　13号土坑断面（南から）
2　14号土坑全景（北から）
3　15号土坑全景（南から）
4　15号土坑断面（南から）
5　15号土坑北壁アップ（南から）
6　16・17号土坑全景（南から）
7　17号土坑断面（南から）
8　18号土坑全景（南から）



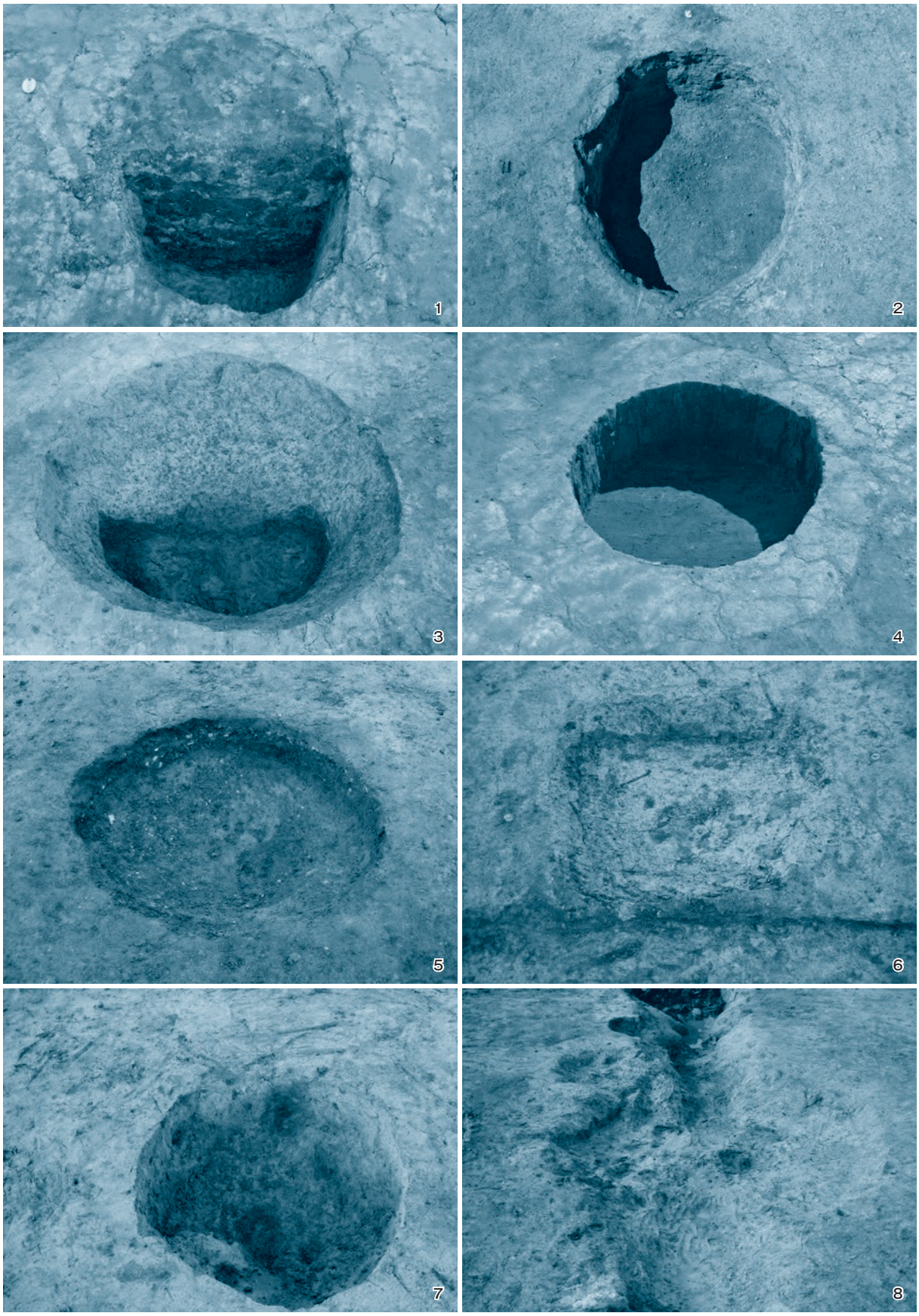
17　18～22号土坑

1　18号土坑・55号ピット断面（南から）
2　19号土坑全景（南から）
3　19号土坑断面（南から）
4　20号土坑完掘（南から）
5　20号土坑断面（南から）
6　21号土坑全景（南から）
7　21号土坑断面（南から）
8　22号土坑全景（東から）



18　22～24・26～28号土坑

1　22号土坑断面（南から）
2　23号土坑全景（東から）
3　23号土坑断面（南から）
4　24号土坑完掘（東から）
5　26号土坑全景（東から）
6　27号土坑全景（東から）
7　27号土坑断面（南から）
8　28号土坑全景（南から）

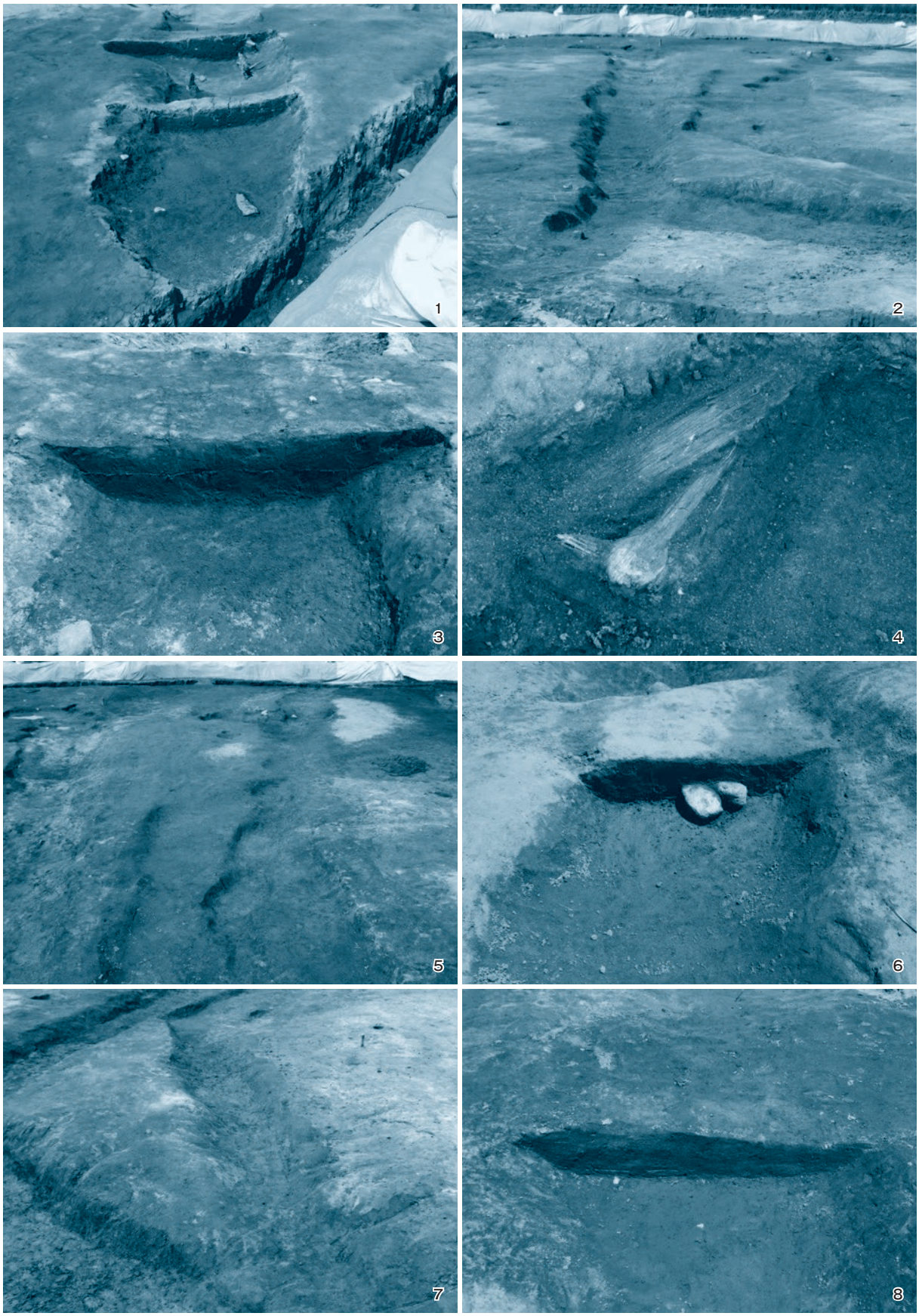


19　28・29・31～36号土坑

1　28号土坑断面（南から）　2　29号土坑全景（東から）
3　31号土坑断面（南から）　4　32号土坑桶検出状況（西から）
5　33号土坑全景（南から）　6　34号土坑全景（南から）
7　35号土坑全景（南から）　8　36号土坑全景（東から）

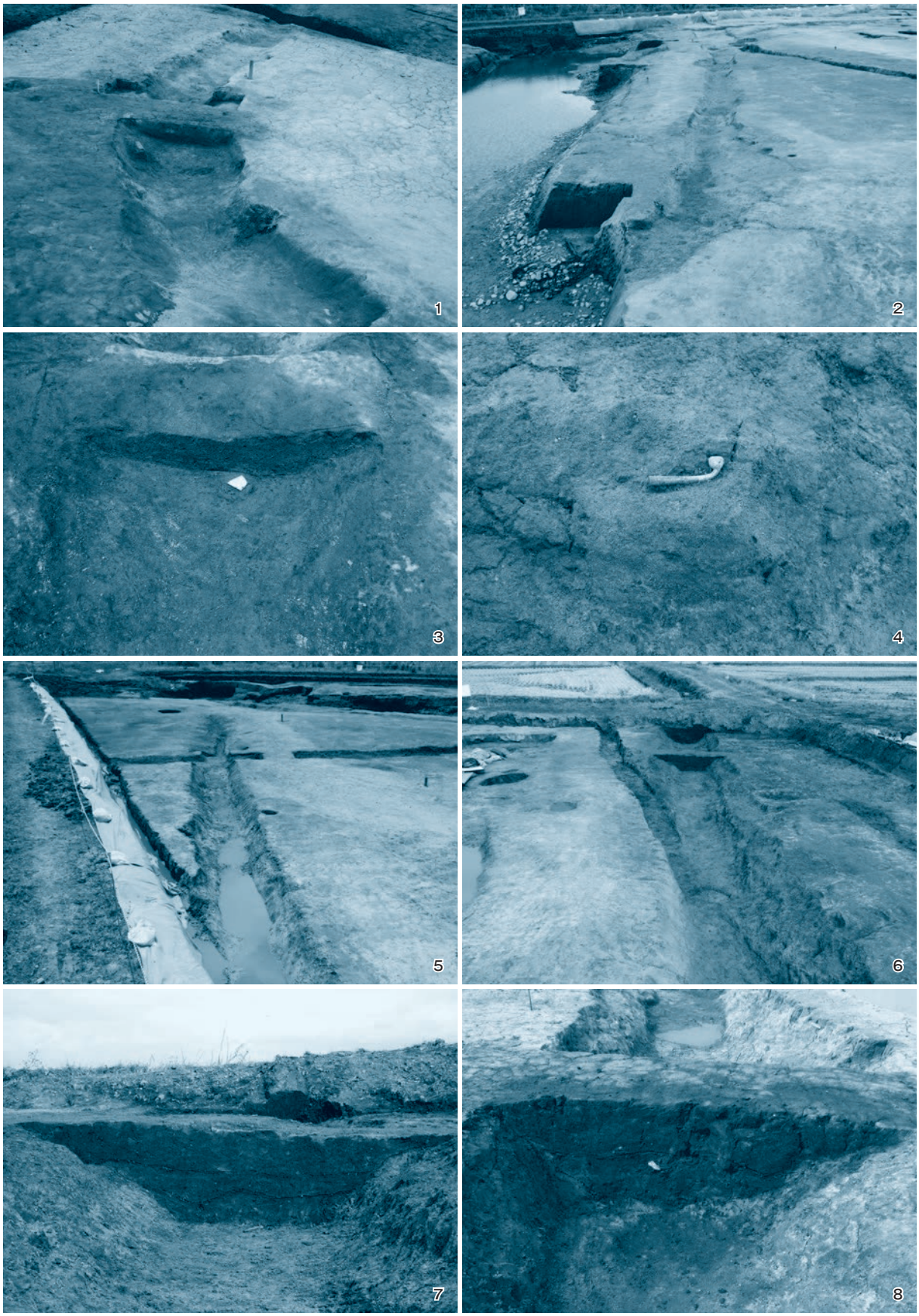
20　1号井戸跡

1　全景（西から）　2　立面（南から）
3　立面（西から）　4　断割立面（西から）
5　完掘全景（西から）



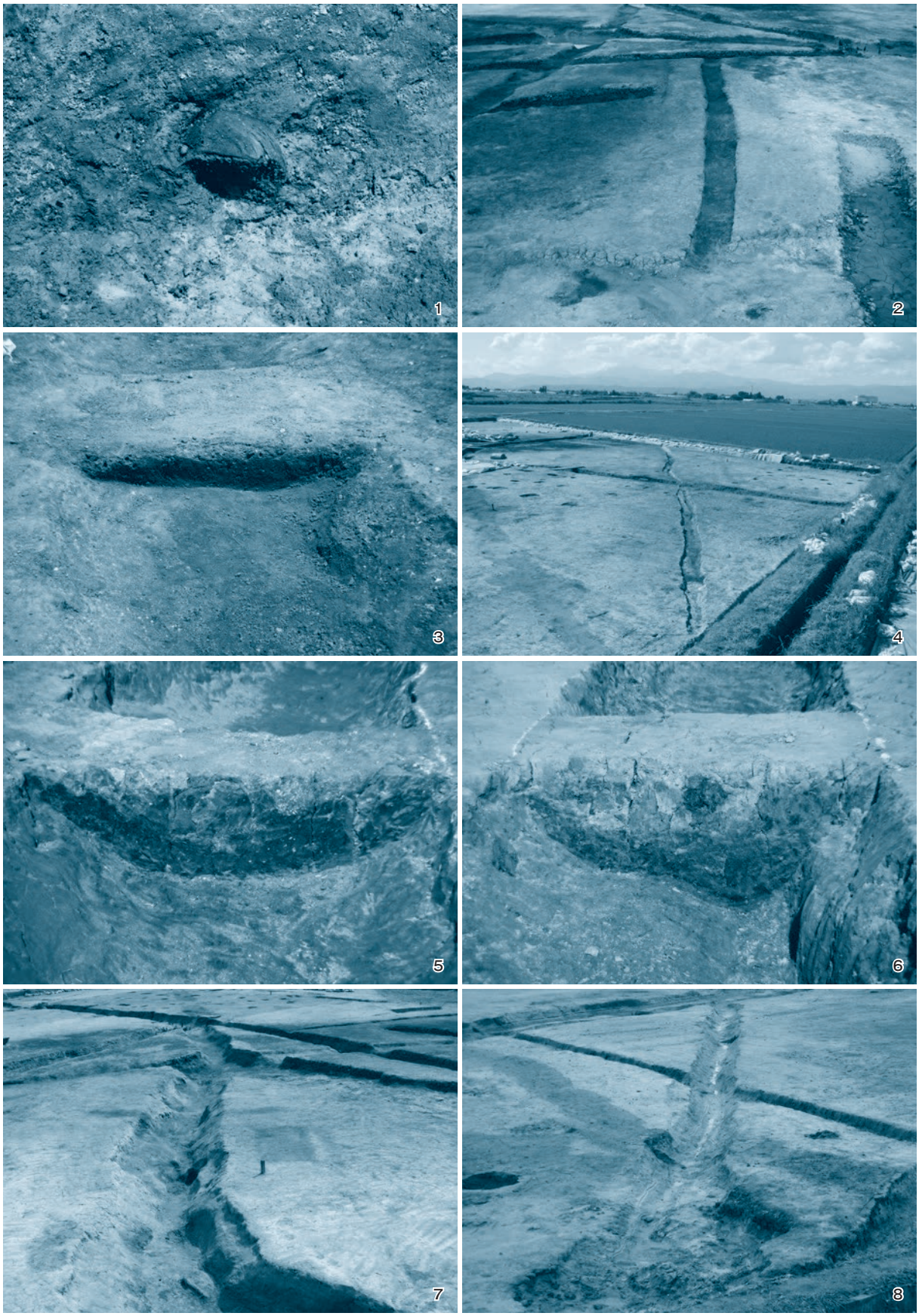
21　1～4号溝跡

1　1号溝跡全景・断面（東から）
2　2号溝跡全景（南から）
3　2号溝跡断面C－C′（南から）
4　2号溝跡木製品出土状況図37－7（南から）
5　3号溝跡全景（南から）
6　3号溝跡断面B－B′（南から）
7　4号溝跡全景（南から）
8　4号溝跡断面C－C′（南から）



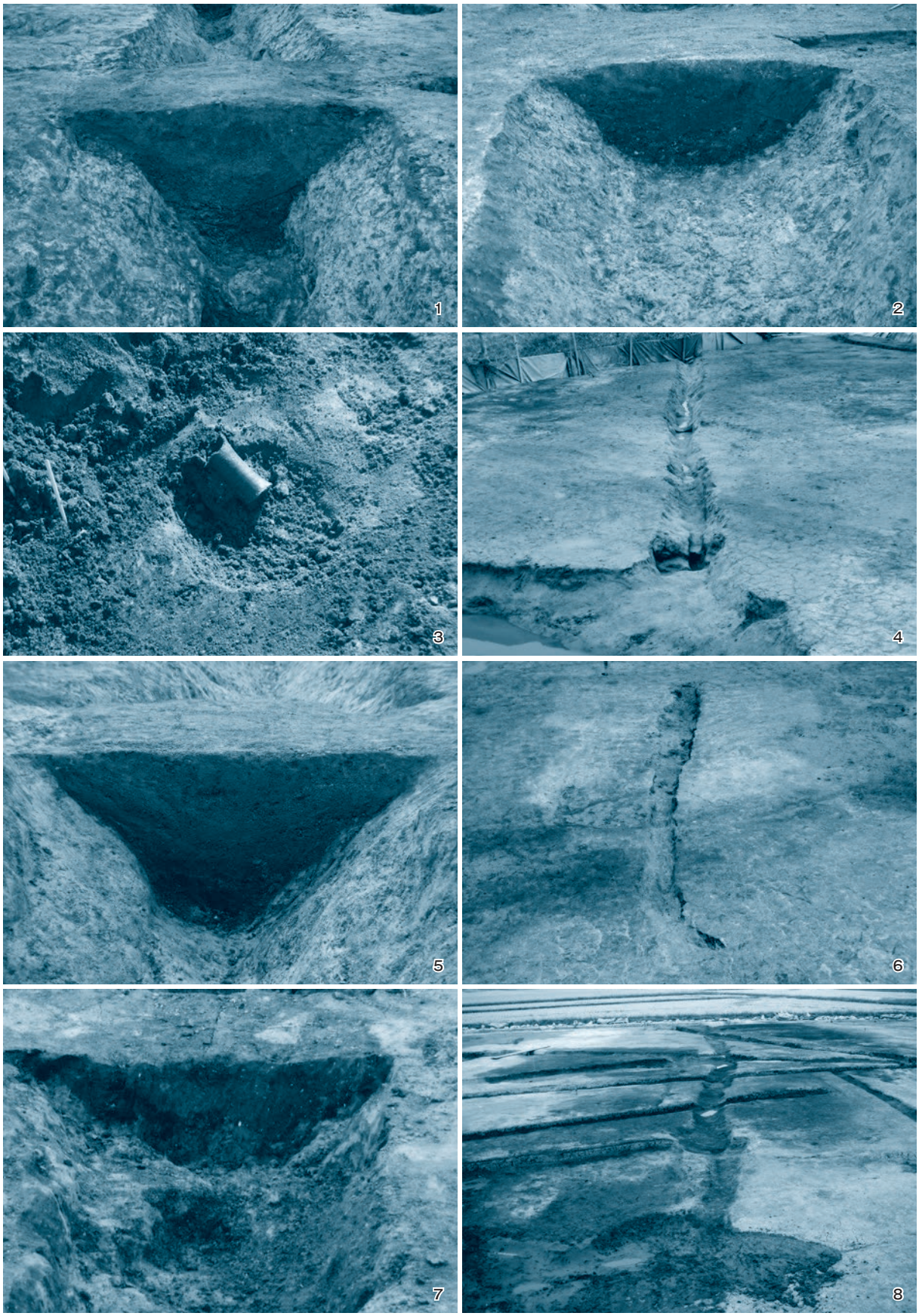
22　５・６号溝跡

1　５号溝跡南側全景（北から）　**2**　５号溝跡北側全景（東から）
3　５号溝跡断面Ｆ－Ｆ′（西から）　**4**　５号溝跡煙管出土状況図37－14（西から）
5　６号溝跡南側全景（北から）　**6**　６号溝跡北側全景（南から）
7　６号溝跡断面Ａ－Ａ′（南から）　**8**　６号溝跡断面Ｂ－Ｂ′（西から）



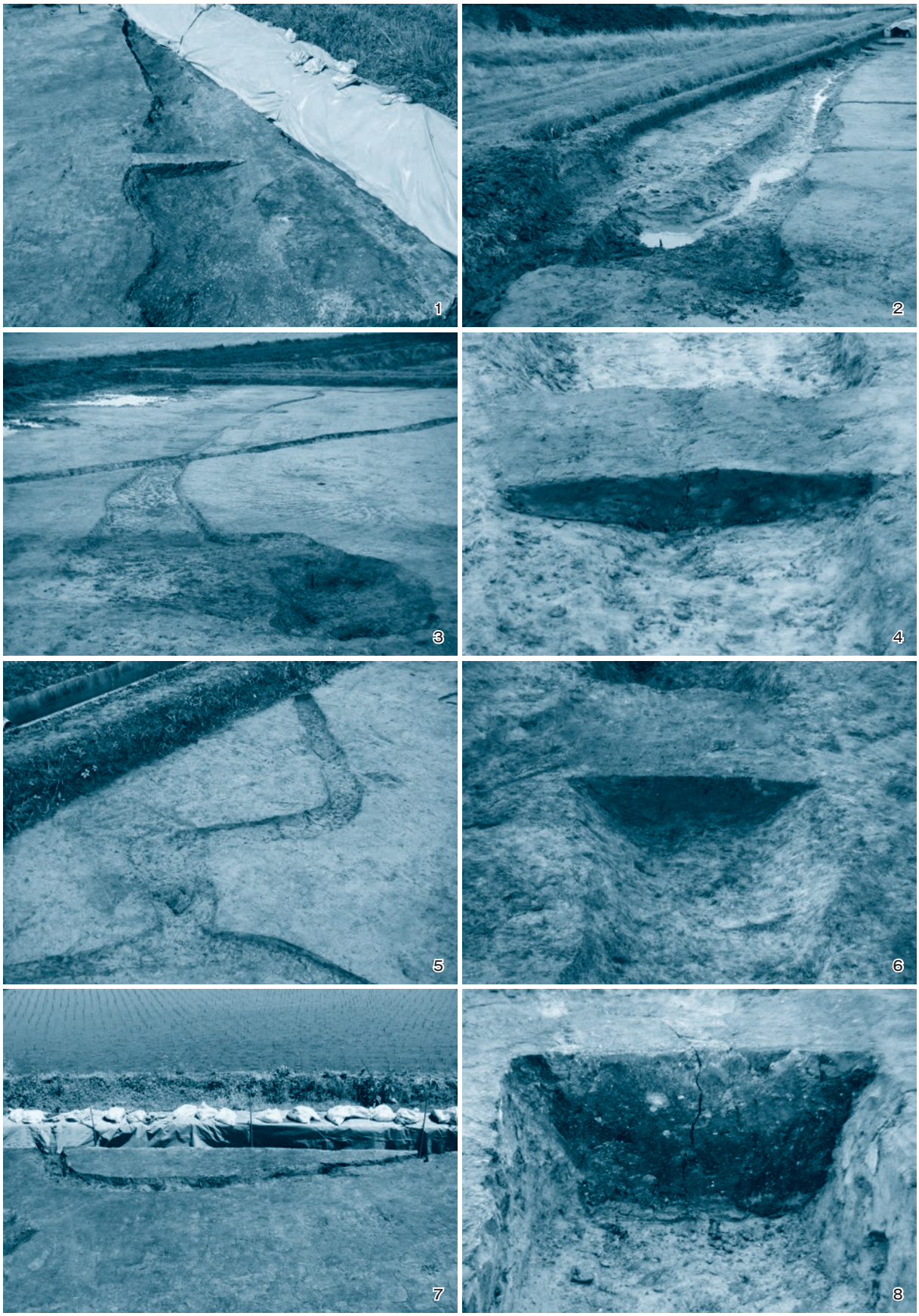
23　6・10～12号溝跡

1　6号溝跡漆器碗出土状況図37－5（南から）
2　10号溝跡全景（南から）
3　10号溝跡断面B－B′（南から）
4　11号溝跡全景（Ⅱ区南東から）
5　11号溝跡断面A－A′（Ⅲ区南から）
6　11号溝跡断面D－D′（Ⅲ区南から）
7　12号溝跡断面E－E′（南東から）
8　12号溝跡全景（Ⅲ区西から）



24　12～14・16号溝跡

1　12号溝跡断面Ｅ－Ｅ′（南東から）
2　12号溝跡断面Ｈ－Ｈ′（Ⅲ区南東から）
3　12号須恵器長頸瓶出土状況図43－9（北から）
4　13号溝跡全景（東から）
5　13号溝跡断面Ａ－Ａ′（東から）
6　14号溝跡全景（南から）
7　14号溝跡断面（南から）
8　16号溝跡全景（南から）

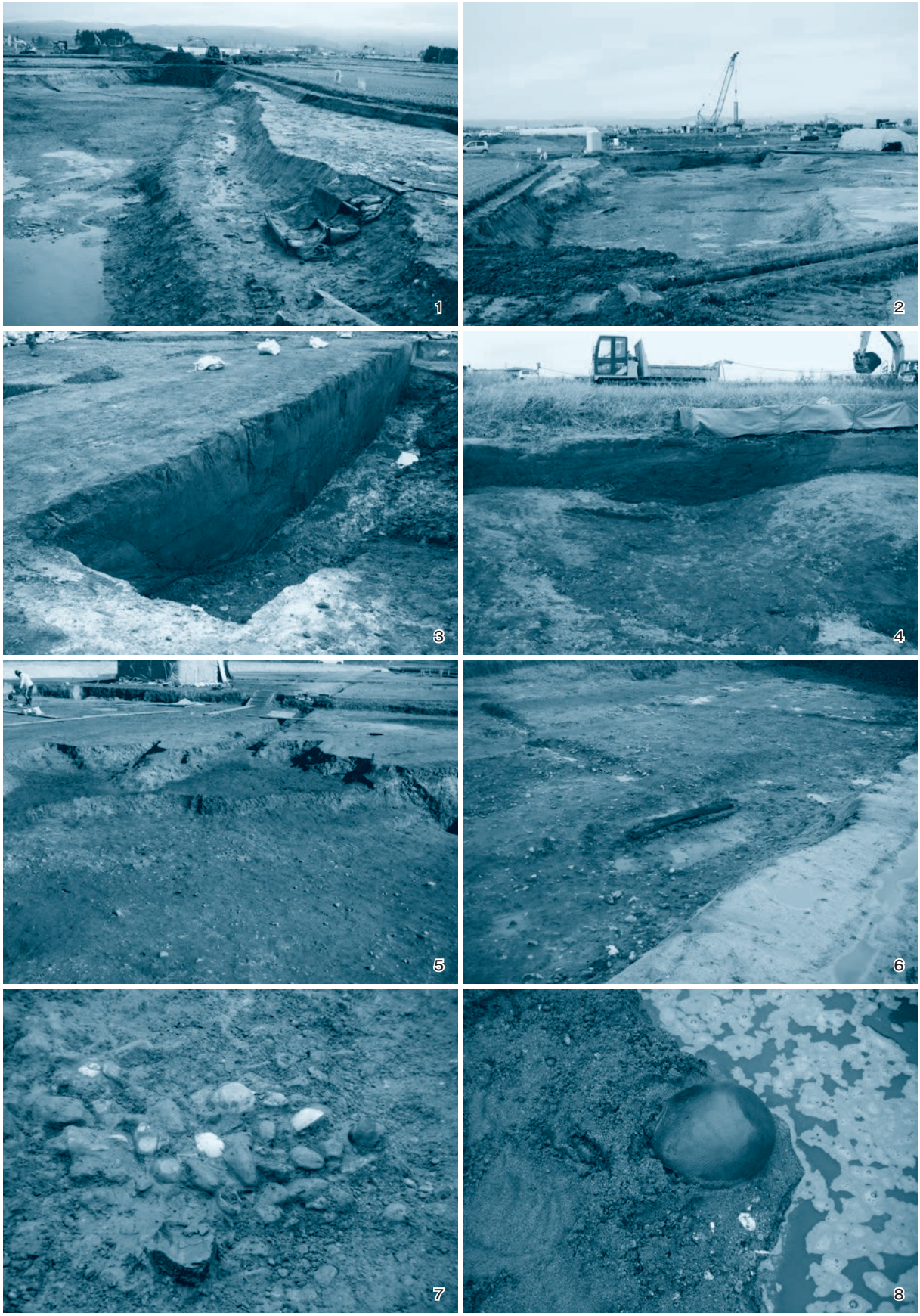


25　19・23・24号溝跡，1号周溝状遺構

1　19号溝跡北側全景（南から）
2　19号溝跡南側全景・21号溝跡全景（北から）
3　23号溝跡全景（東から）
4　23号溝跡断面C－C′（東から）
5　24号溝跡全景（南東から）
6　24号断面F－F′（南から）
7　1号周溝状遺構全景（南から）
8　1号周溝状遺構断面B－B′（東から）

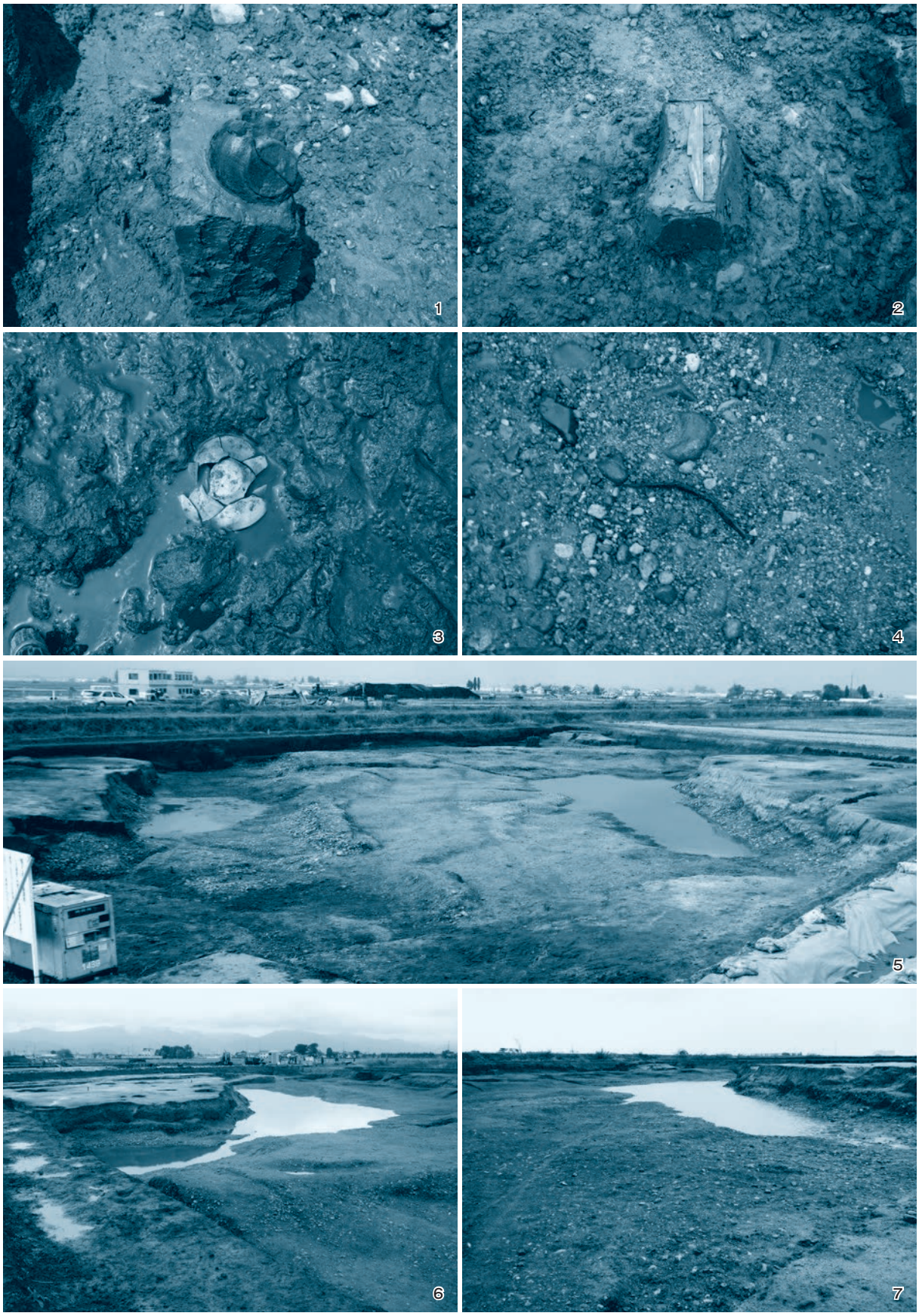
26　１号流路跡（１）

1　Ⅰ区全景（西から）
2　Ⅱ区北壁立上り状況（北西から）



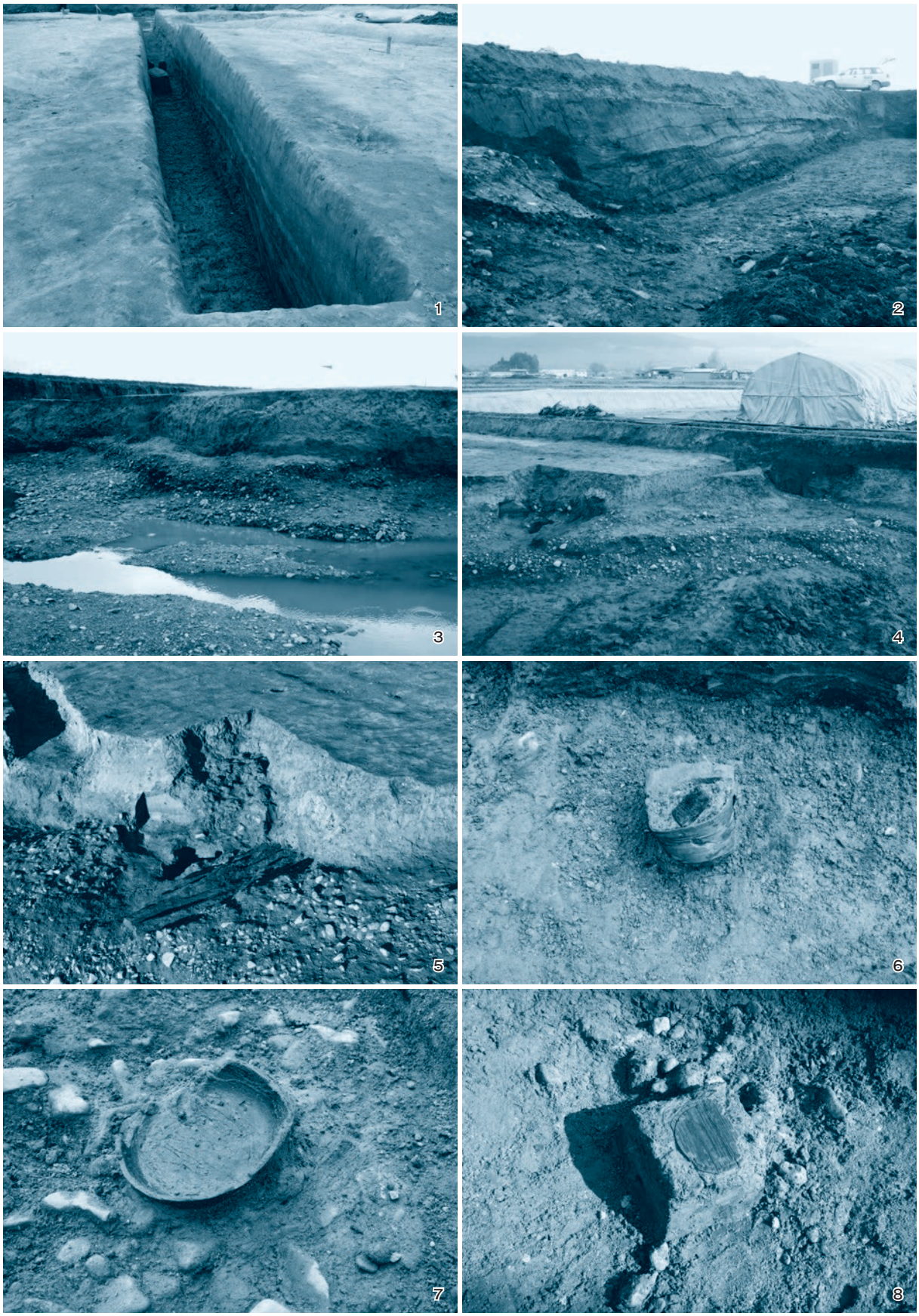
27　1号流路跡（2）

1　Ⅱ区南壁立上り状況（西から）
2　Ⅱ区全景（東から）
3　Ⅰ区断面Ａ－Ａ′（北西から）
4　Ⅱ区断面Ａ－Ａ′（東から）
5　Ⅱ区付属施設全景（南西から）
6　Ⅱ区南壁下木材出土状況（南西から）
7　Ⅱ区Ⅰ８グリッド遺物出土状況（北から）
8　Ⅱ区須恵器横瓶出土状況図64－１（北から）



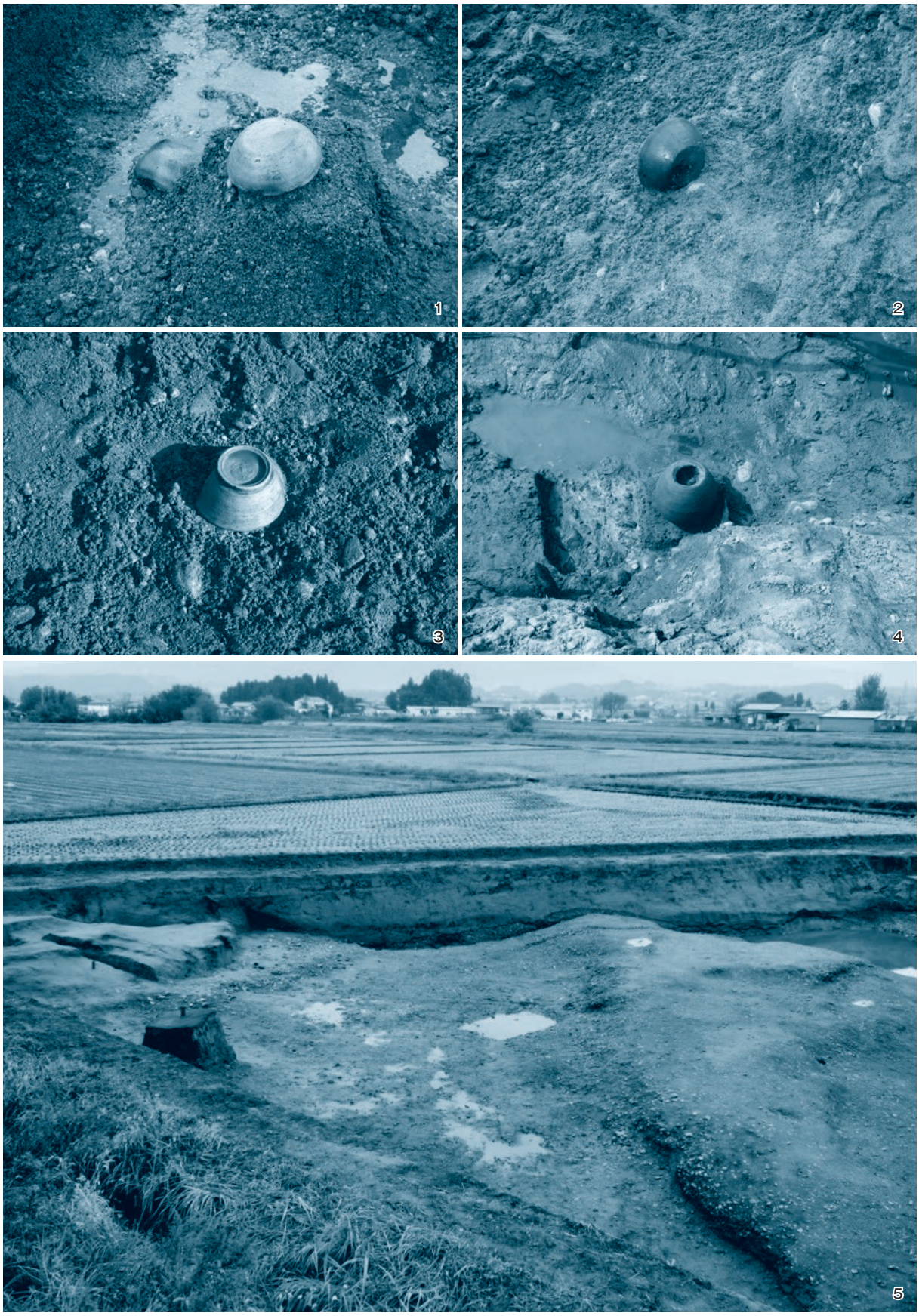
28　１号流路跡（３）・２号流路跡（１）

1　Ⅰ区１号流路跡木器椀出土状況図69－１（東から）
2　Ⅰ区１号流路跡木製品出土状況図69－９（北から）
3　Ⅰ区１号流路跡土師器皿出土状況図58－２（西から）
4　Ⅰ区１号流路跡刀子出土状況図71－10（北から）
5　１・２号流路跡全景（南東から）
6　２号流路跡全景（北西から）　7　２号流路跡全景(南東から)



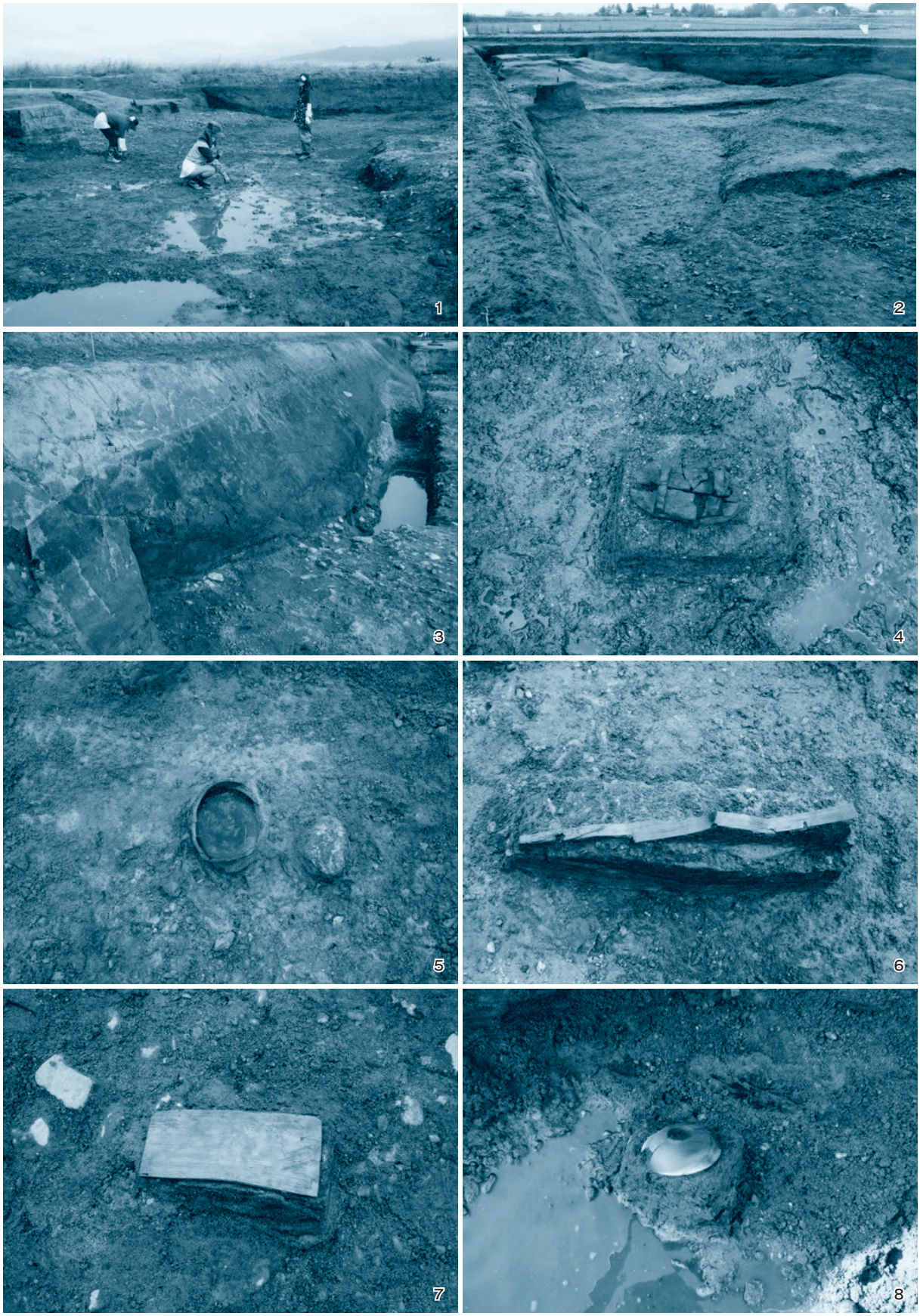
29　２号流路跡（２）

1　断面Ａ－Ａ′（北東から）
2　断面Ｃ－Ｃ′（西から）
3　東壁立上り状況（南西から）
4　南東壁立上り状況（北西から）
5　付属施全景（南西から）
6　柄杓出土状況図86－４（西から）
7　木器椀出土状況図83－２（東から）
8　曲物底板出土状況図86－２（西から）



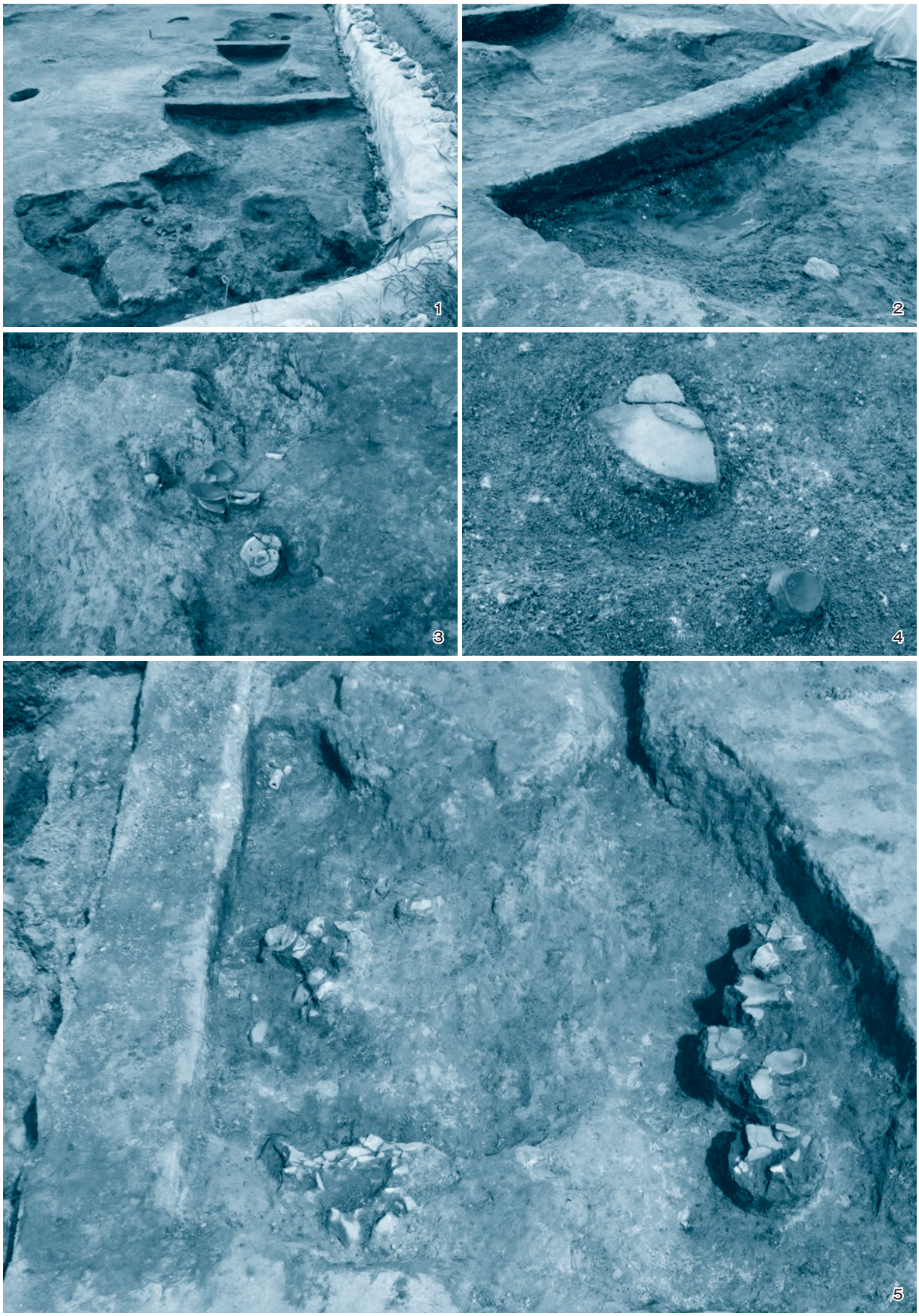
30　２号流路跡（３）・３号流路跡（１）

1　２号流路跡土師器杯出土状況図76－１（西から）
2　２号流路跡土師器杯出土状況図76－12（南東から）
3　２号流路跡須恵器高台杯出土状況図79－８（東から）
4　２号流路跡須恵器壺出土状況図79－17（北から）
5　３号流路跡全景（南西から）



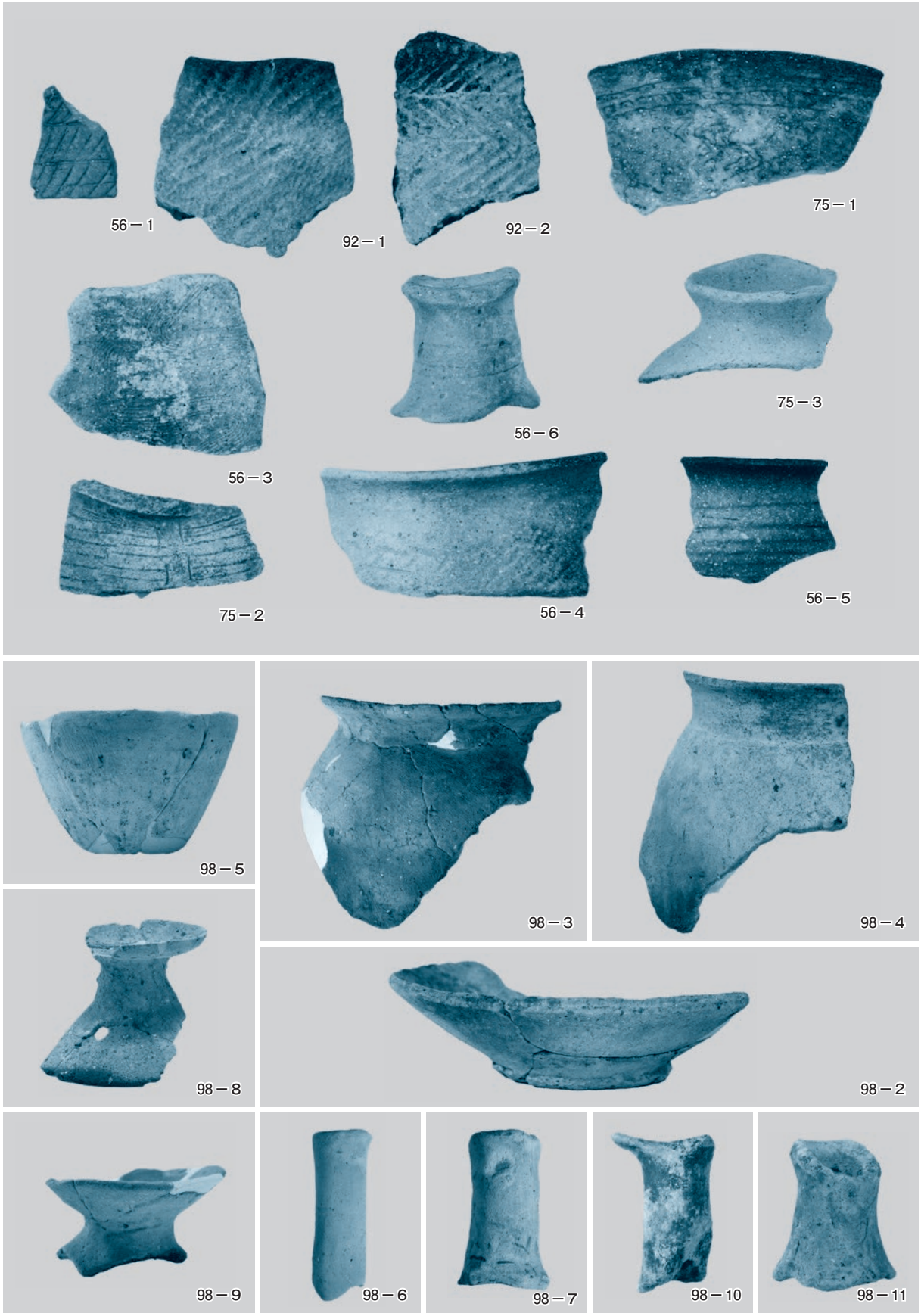
31　３号流路跡（２）

1　全景（南西から）
2　全景（南西から）
3　断面Ｂ－Ｂ′（南西から）
4　下駄出土状況図95－９（南から）
5　木器椀出土状況図94－１（南から）
6　曲物側板出土状況図94－５～８（西から）
7　板状木製品出土状況図96－１（南から）
8　赤焼土器出土状況図92－６（東から）

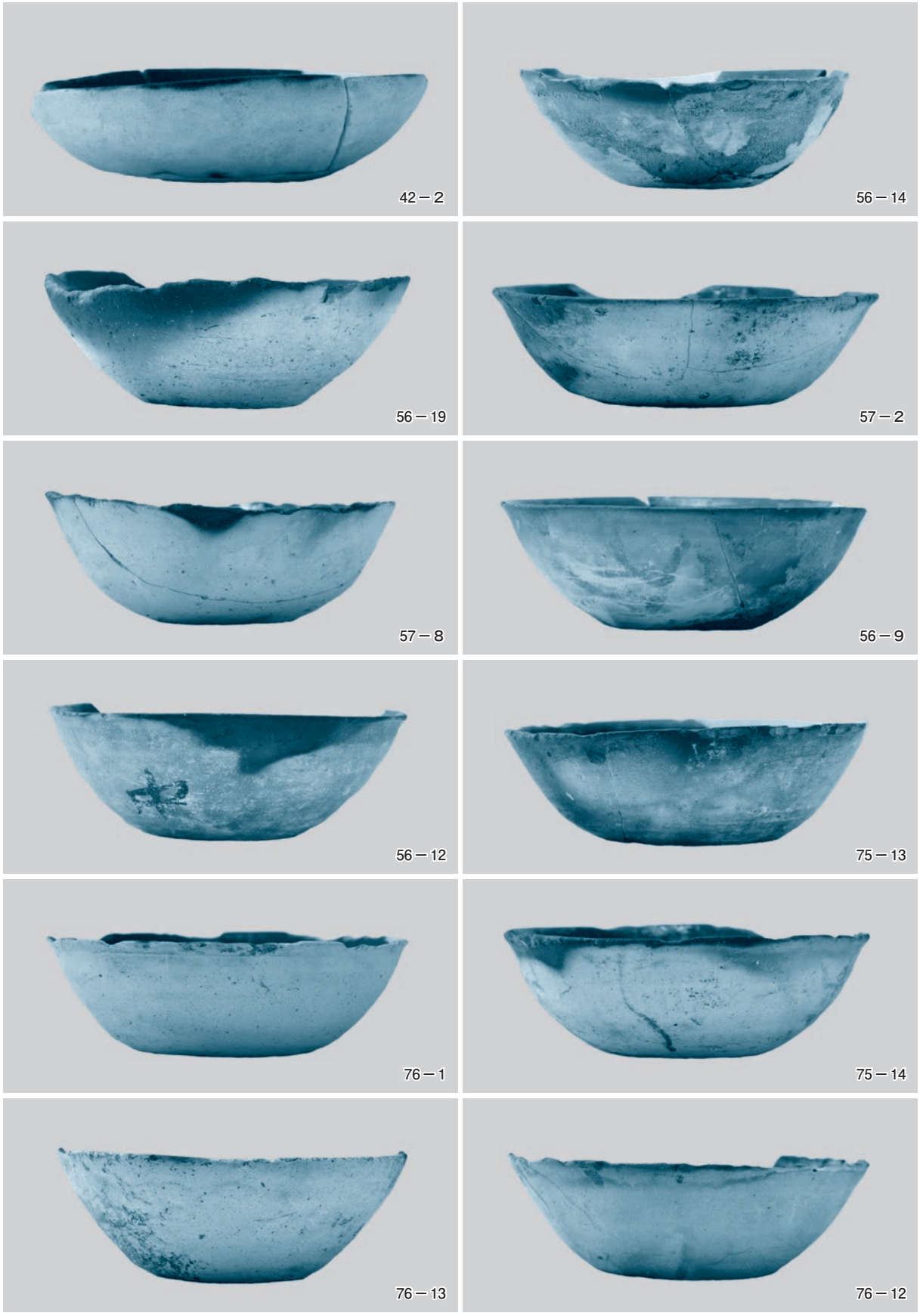


32　１号性格不明遺構

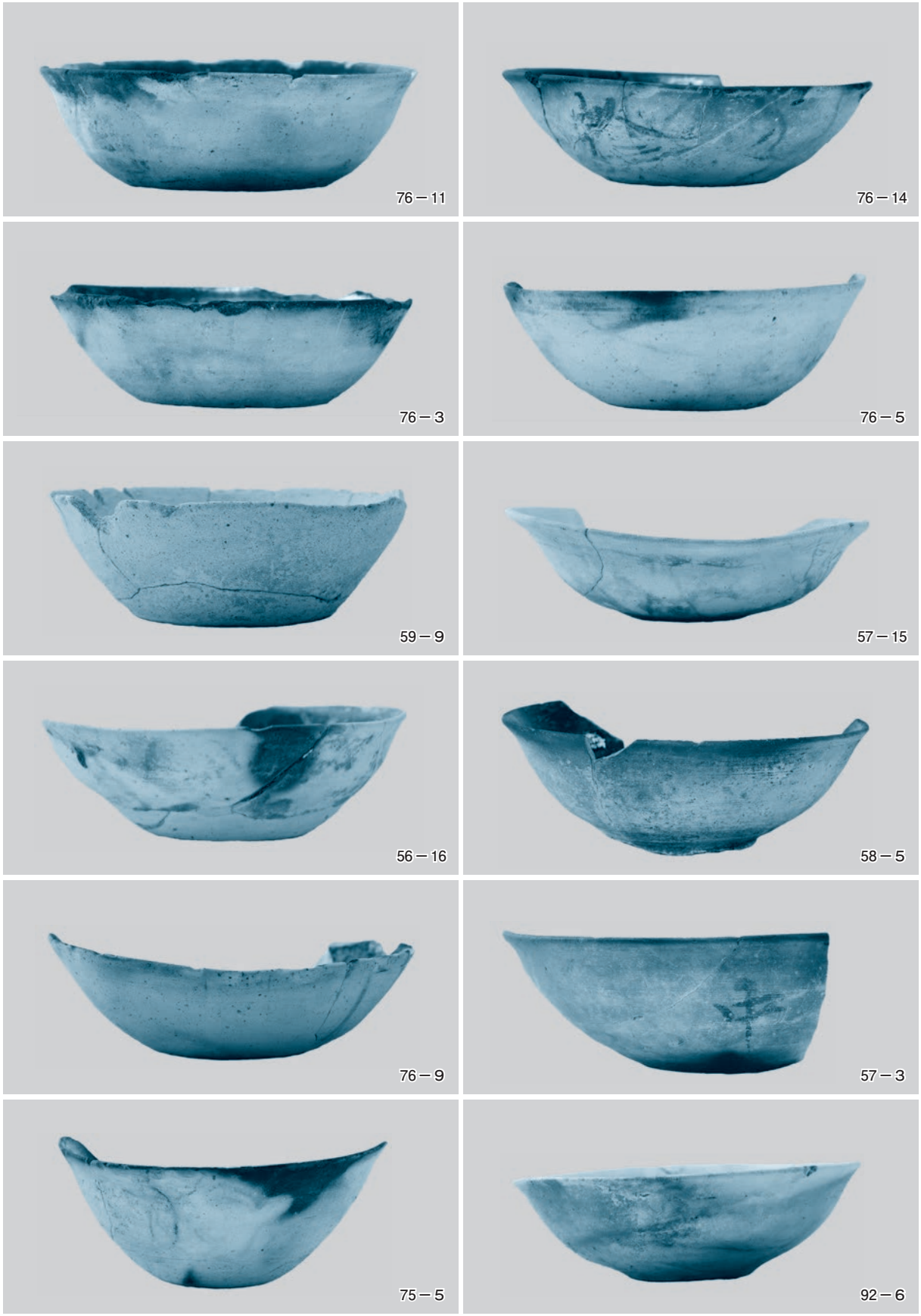
1　全景（東から）
2　断面Ｂ－Ｂ′（東から）
3　土師器器台出土状況（図98－８：西から）
4　土師器壺・器台出土状況図98－２・98－９（北から）
5　南東部遺物出土状況（西から）



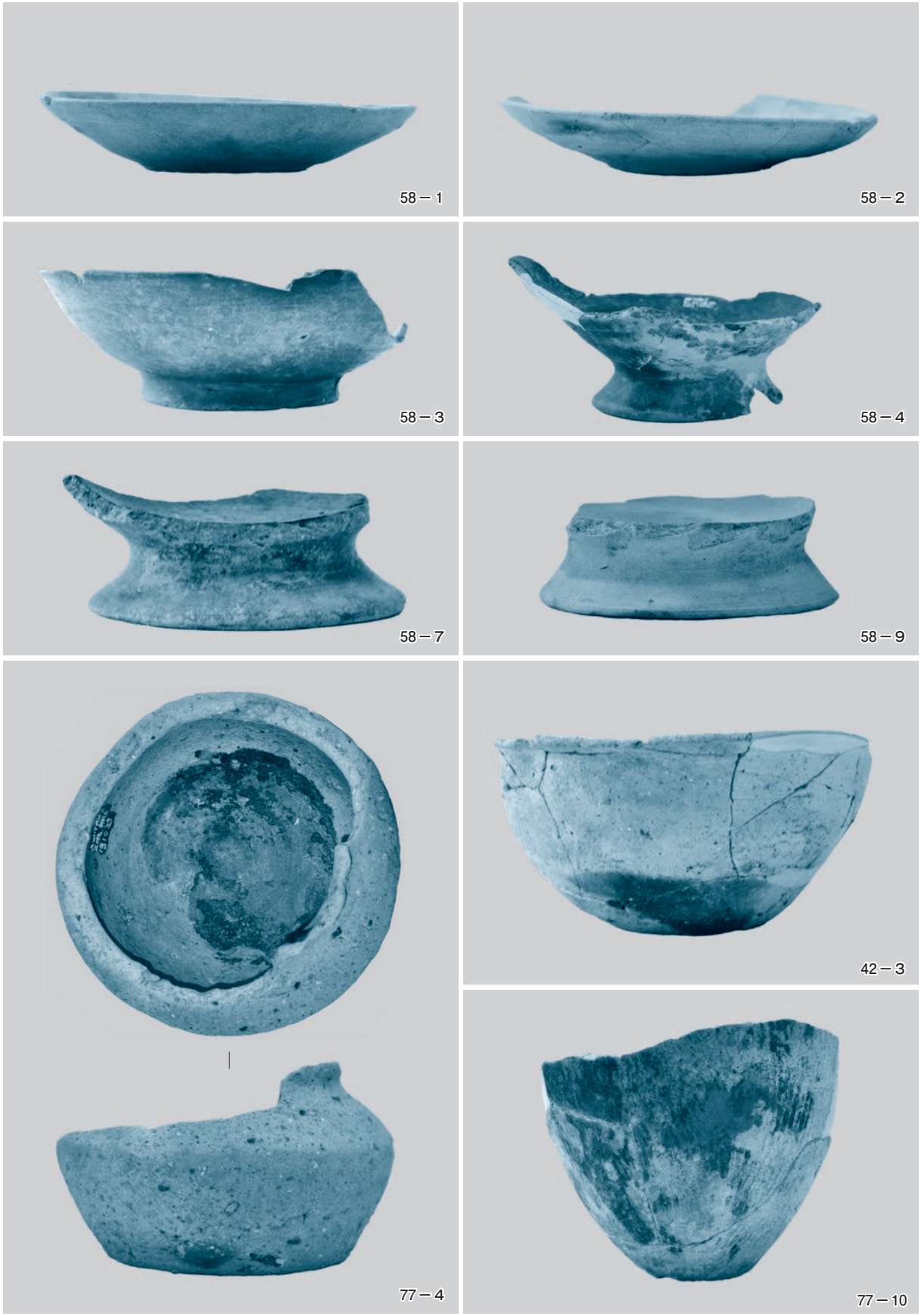
33　縄文土器，弥生土器，土師器



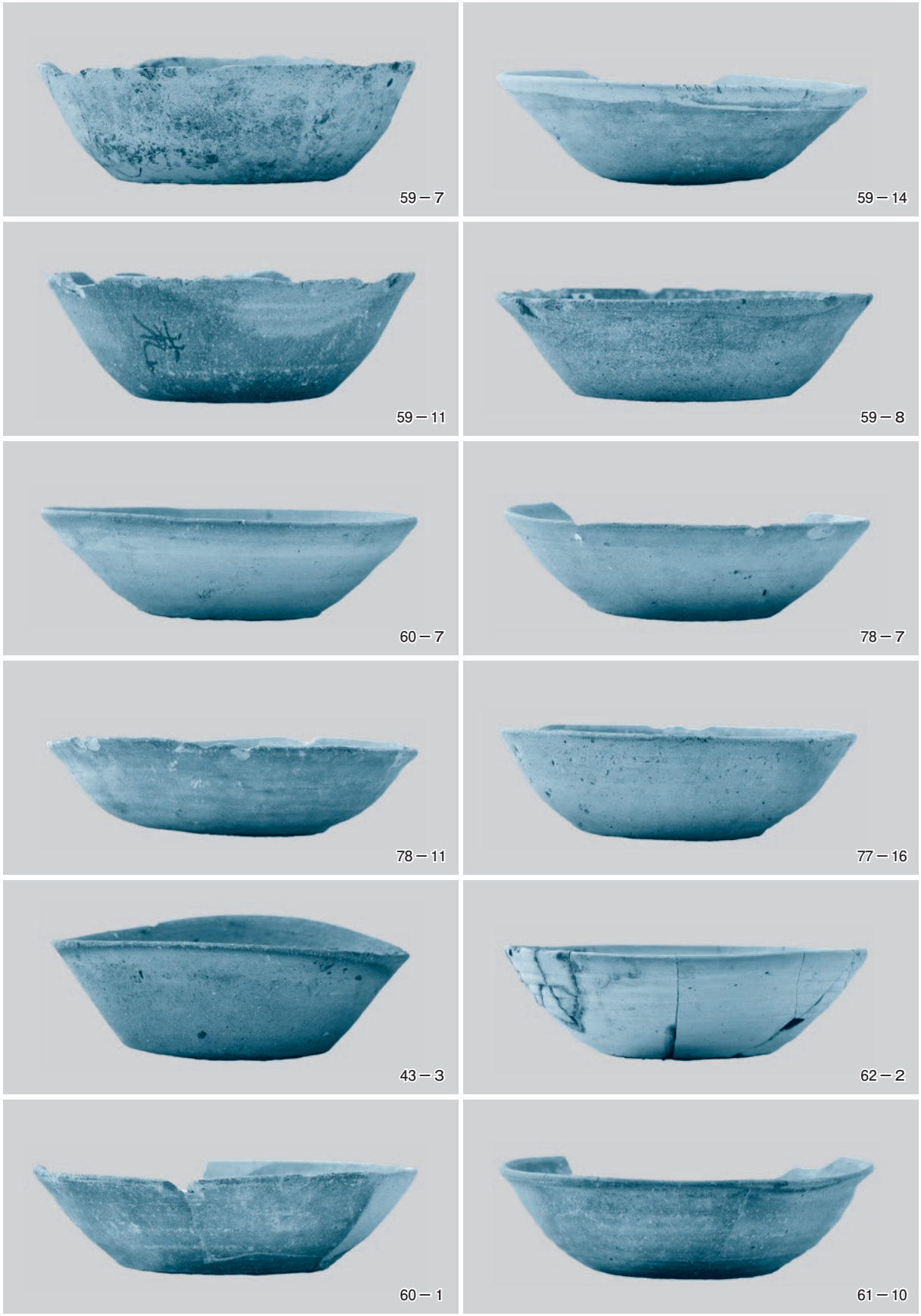
34　土師器（1）杯



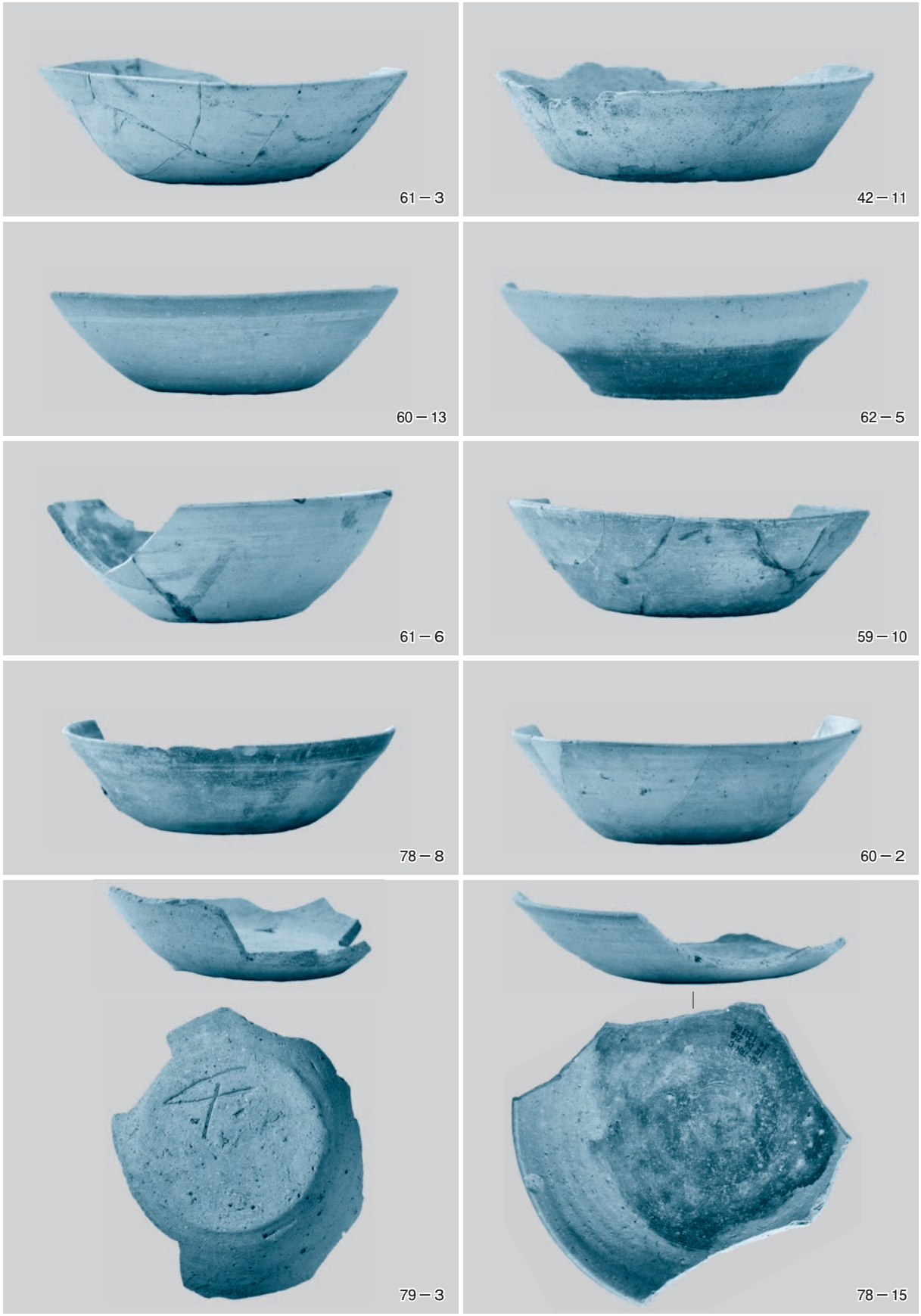
35　土師器（2）杯・埦，赤焼土器



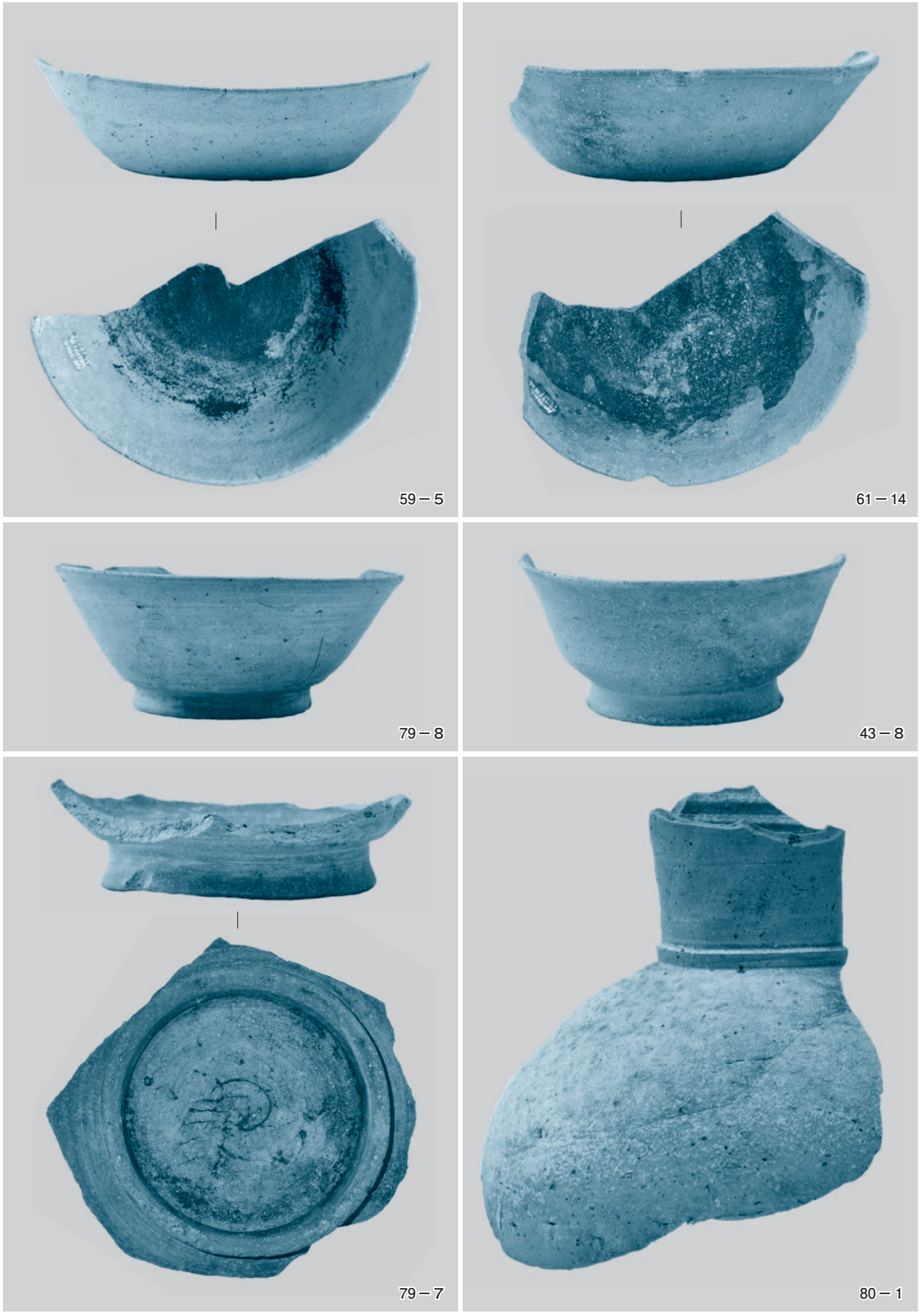
36　土師器（３）皿・高台杯・壺・甕



37　須恵器（1）杯

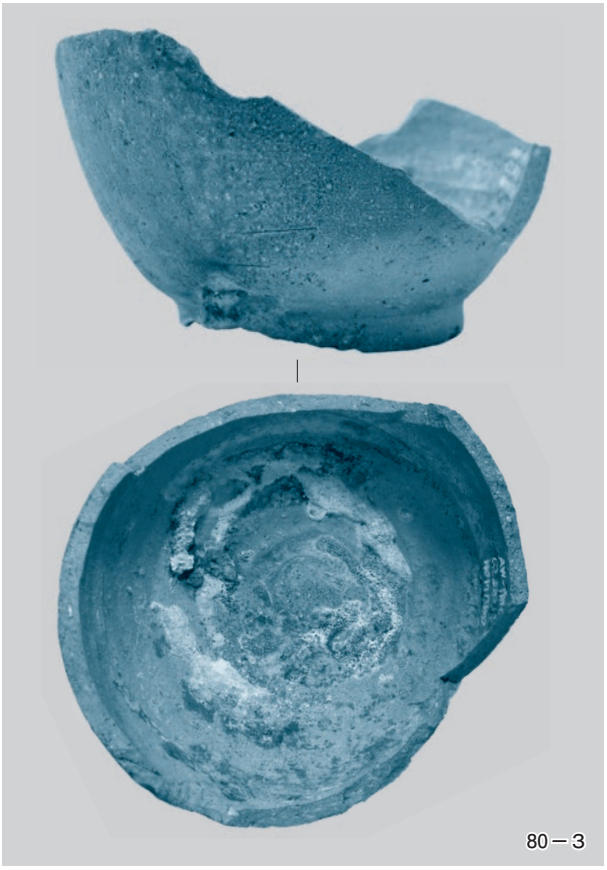


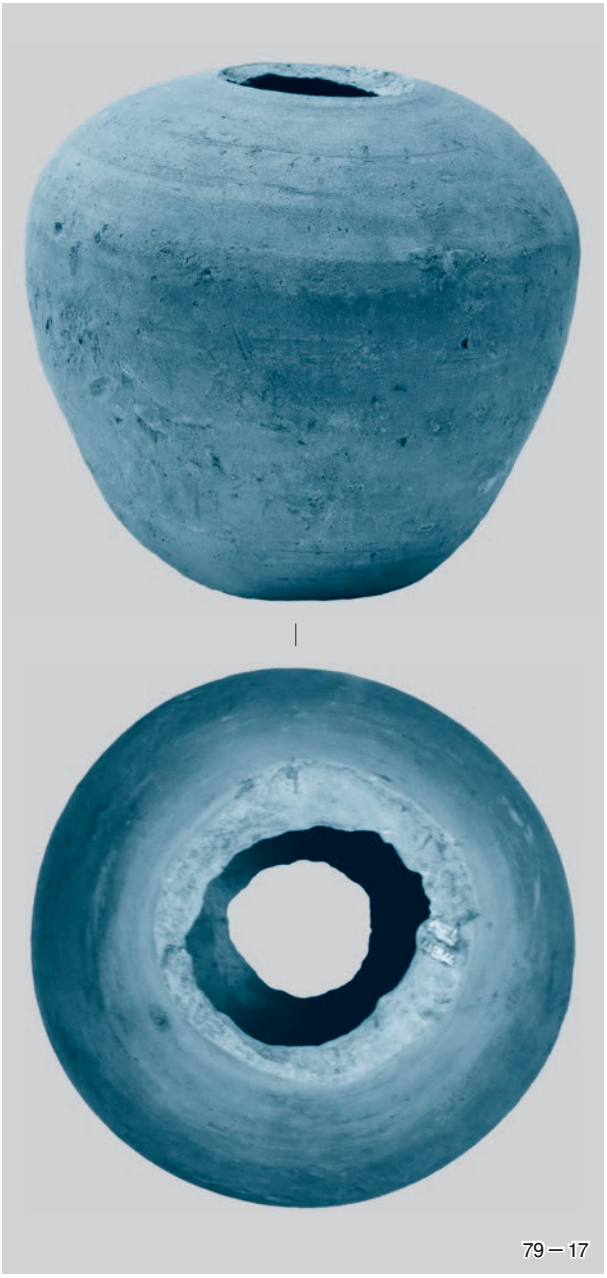
38　須恵器（2）杯

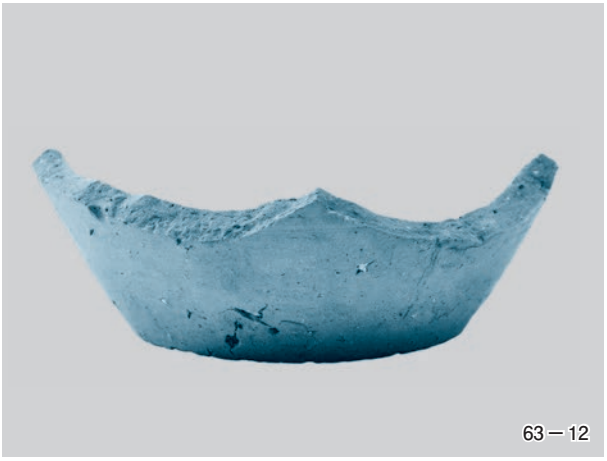


39　須恵器（3）杯・高台杯・長頸瓶

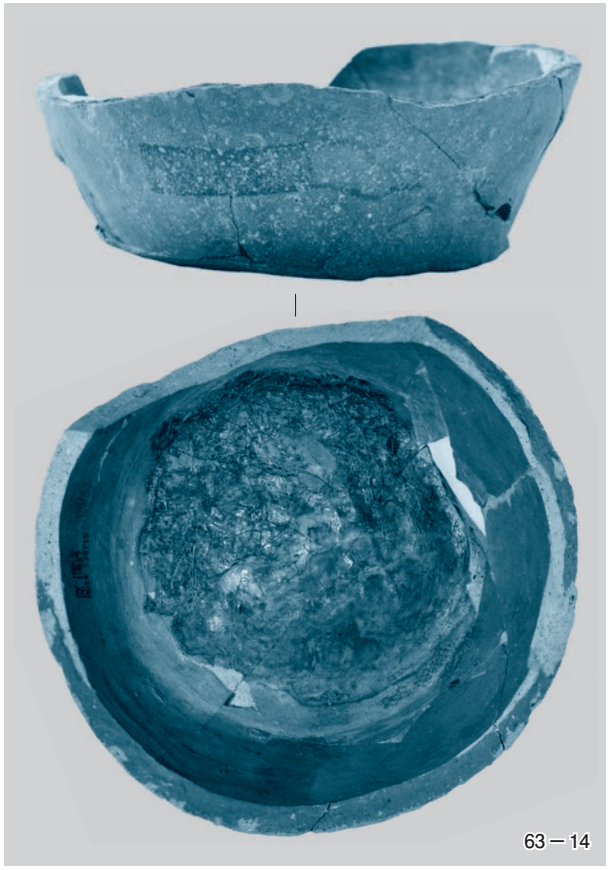
40　須恵器（4）長頸瓶・壺

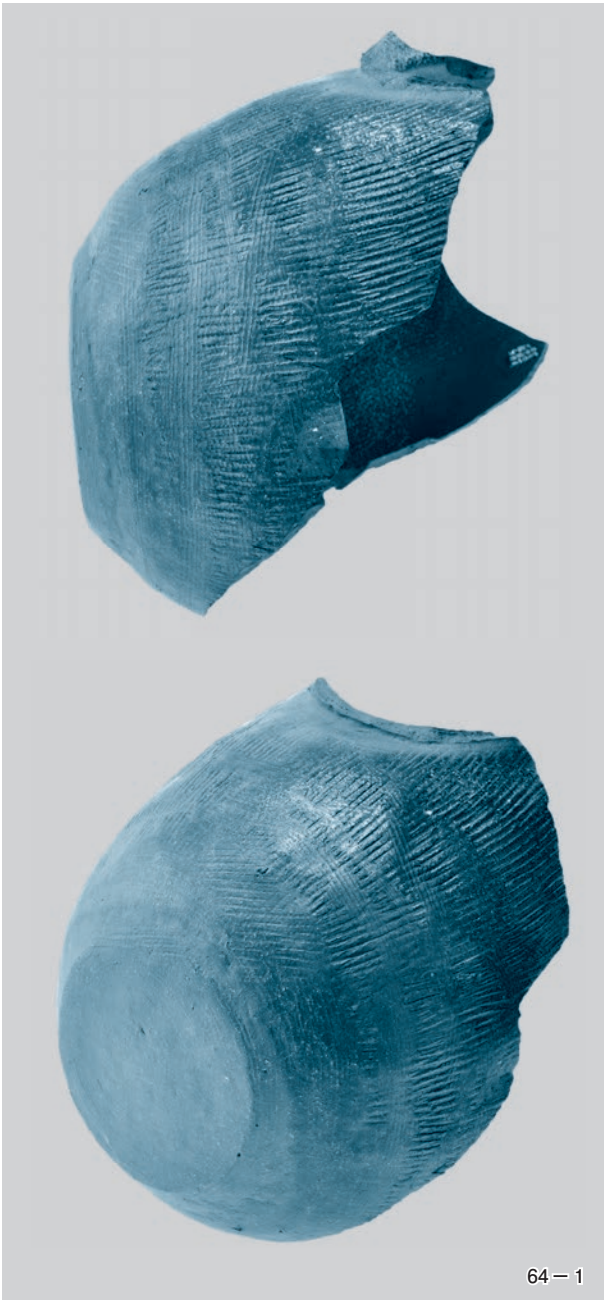


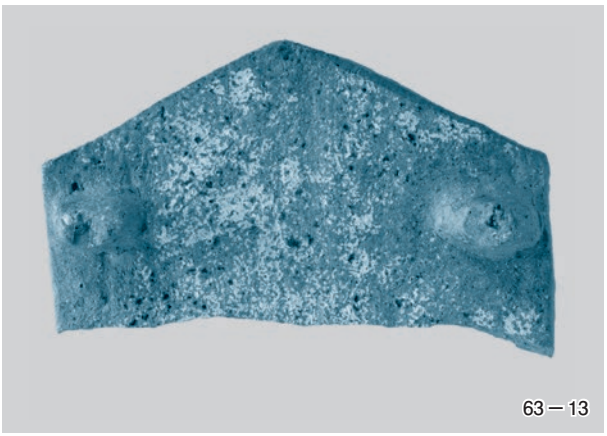




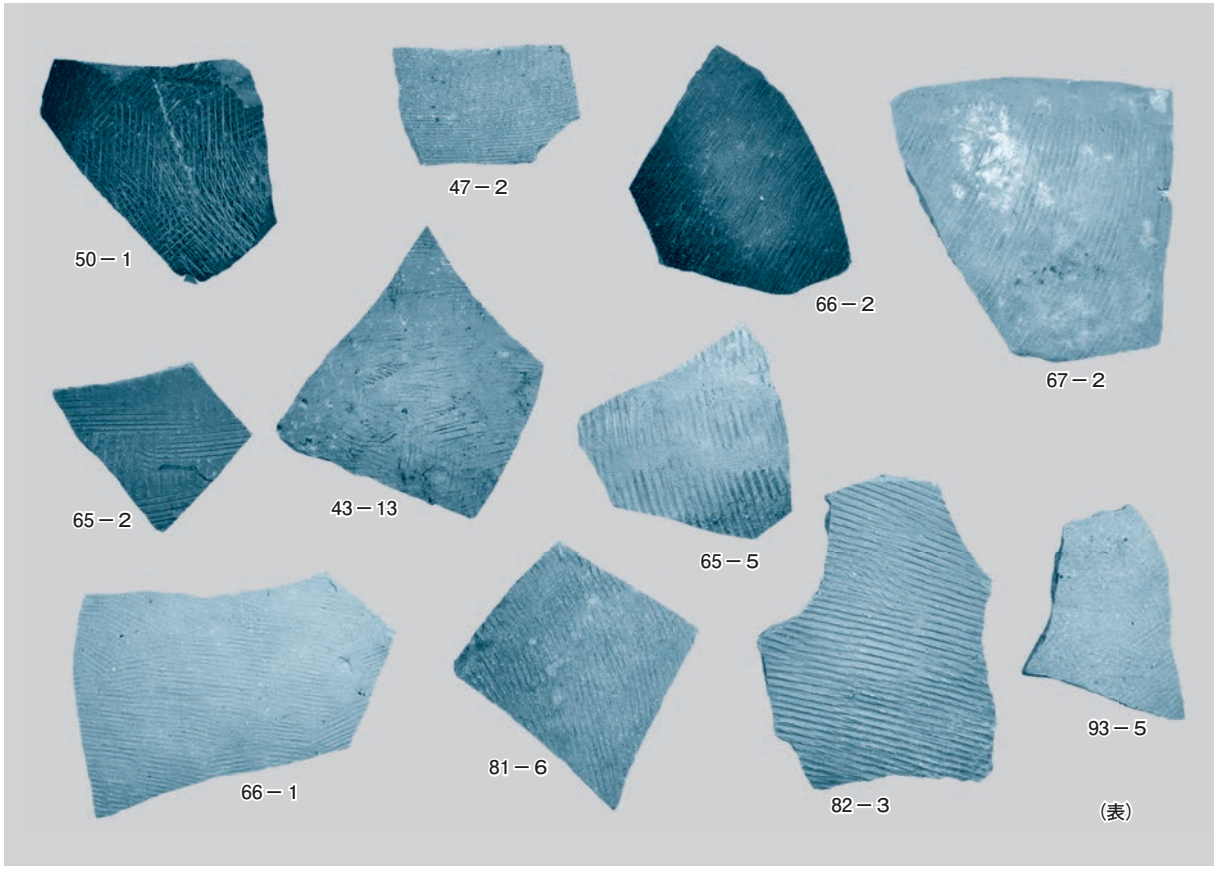
41　須恵器（5）壺・甕

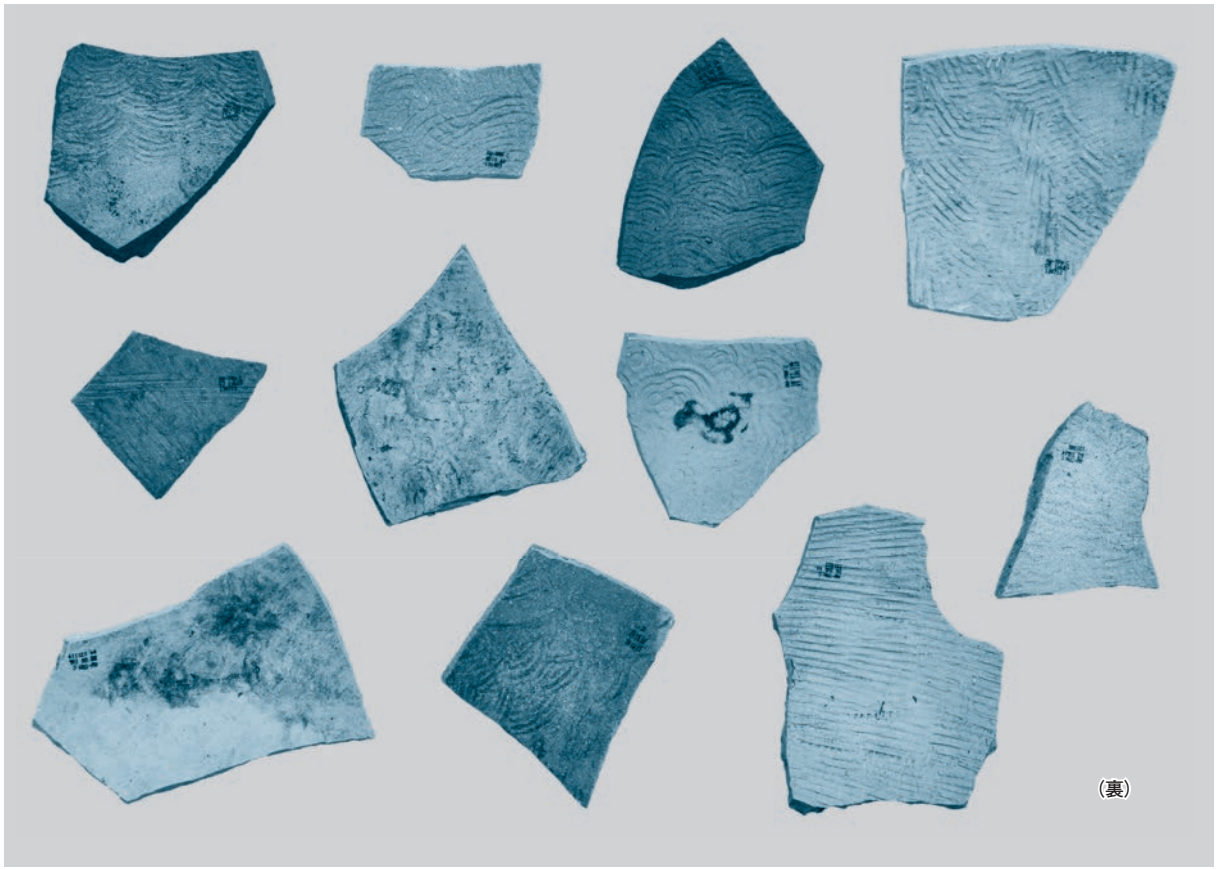




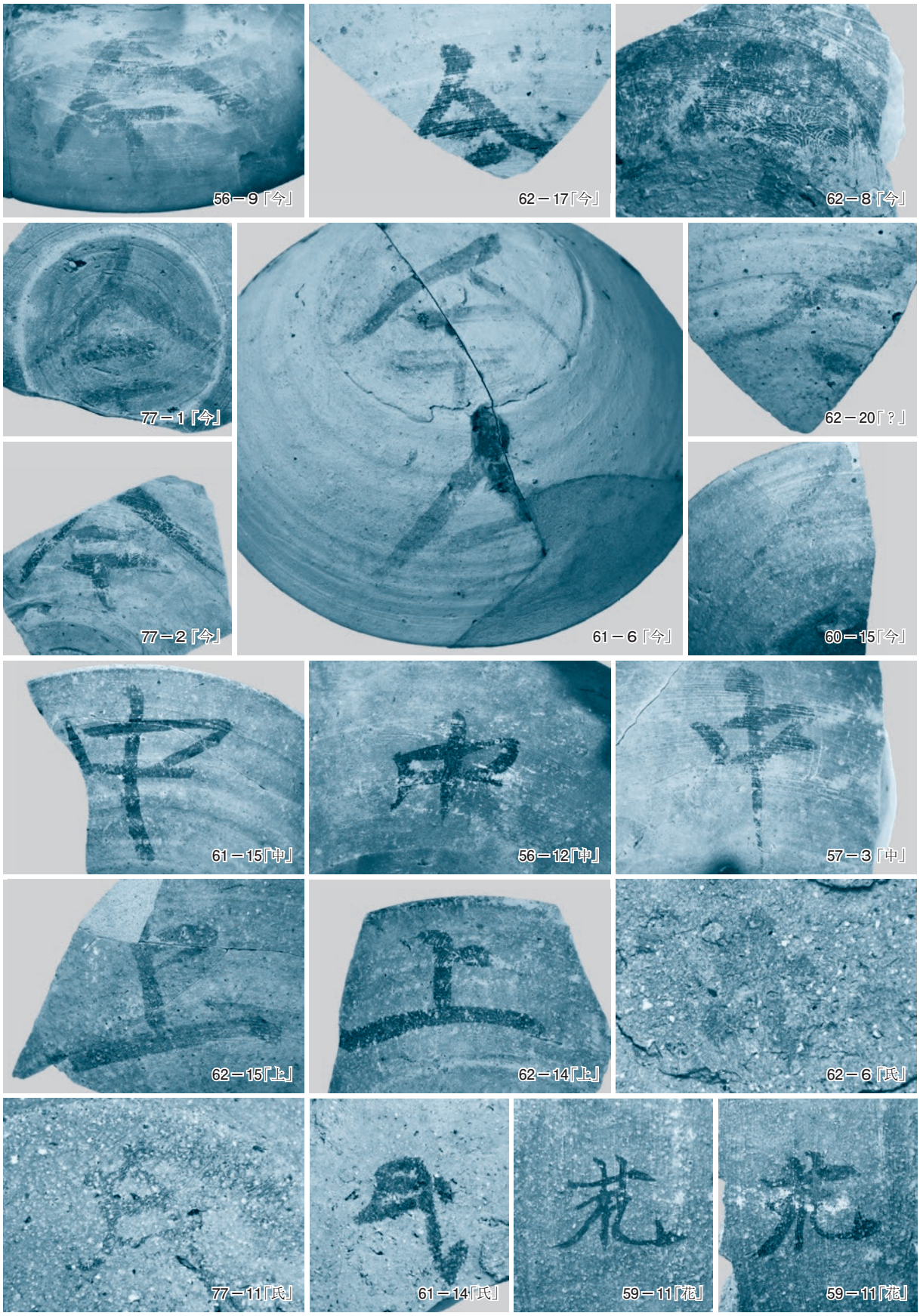


42　須恵器（６）甕・横瓶・硯

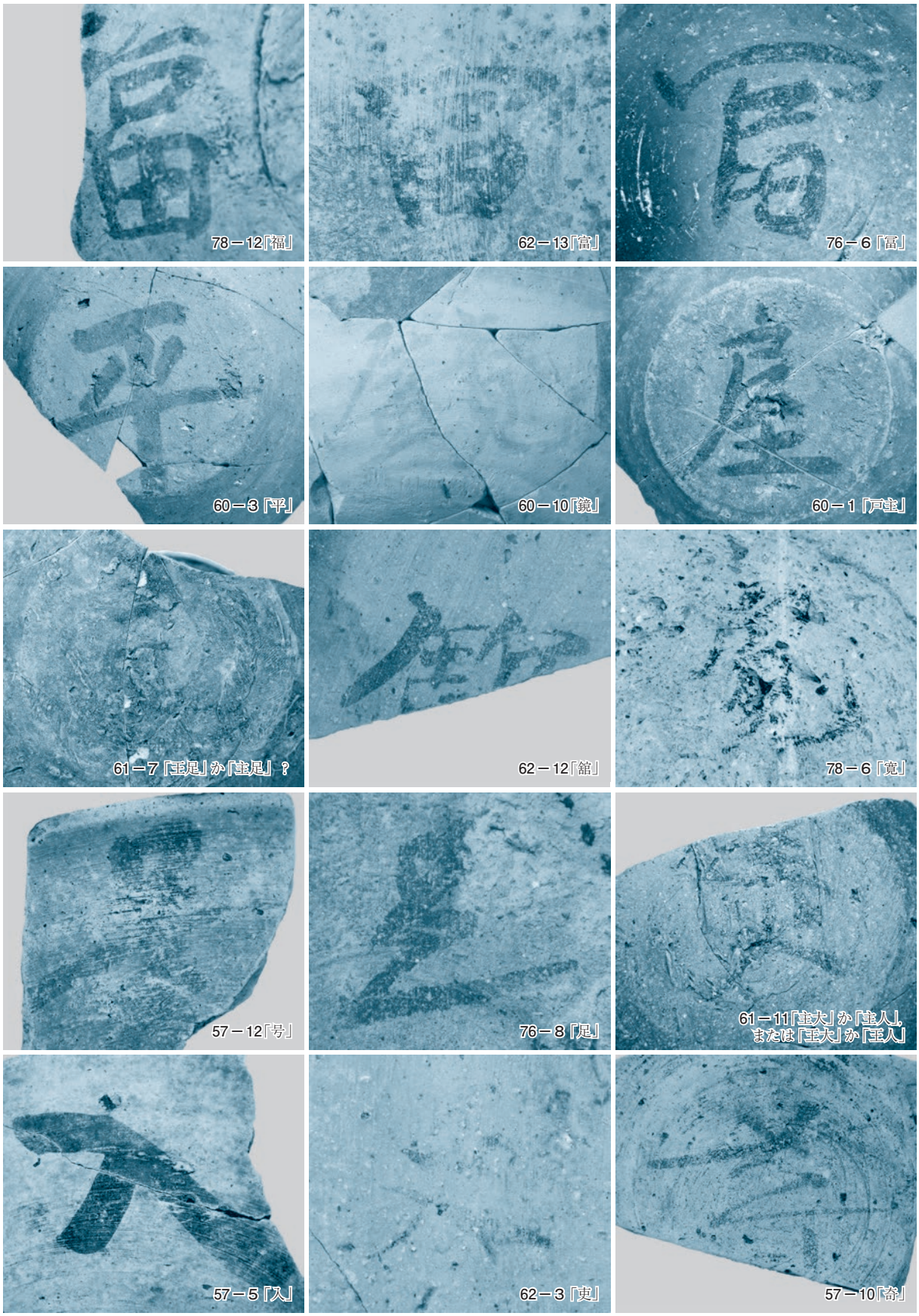




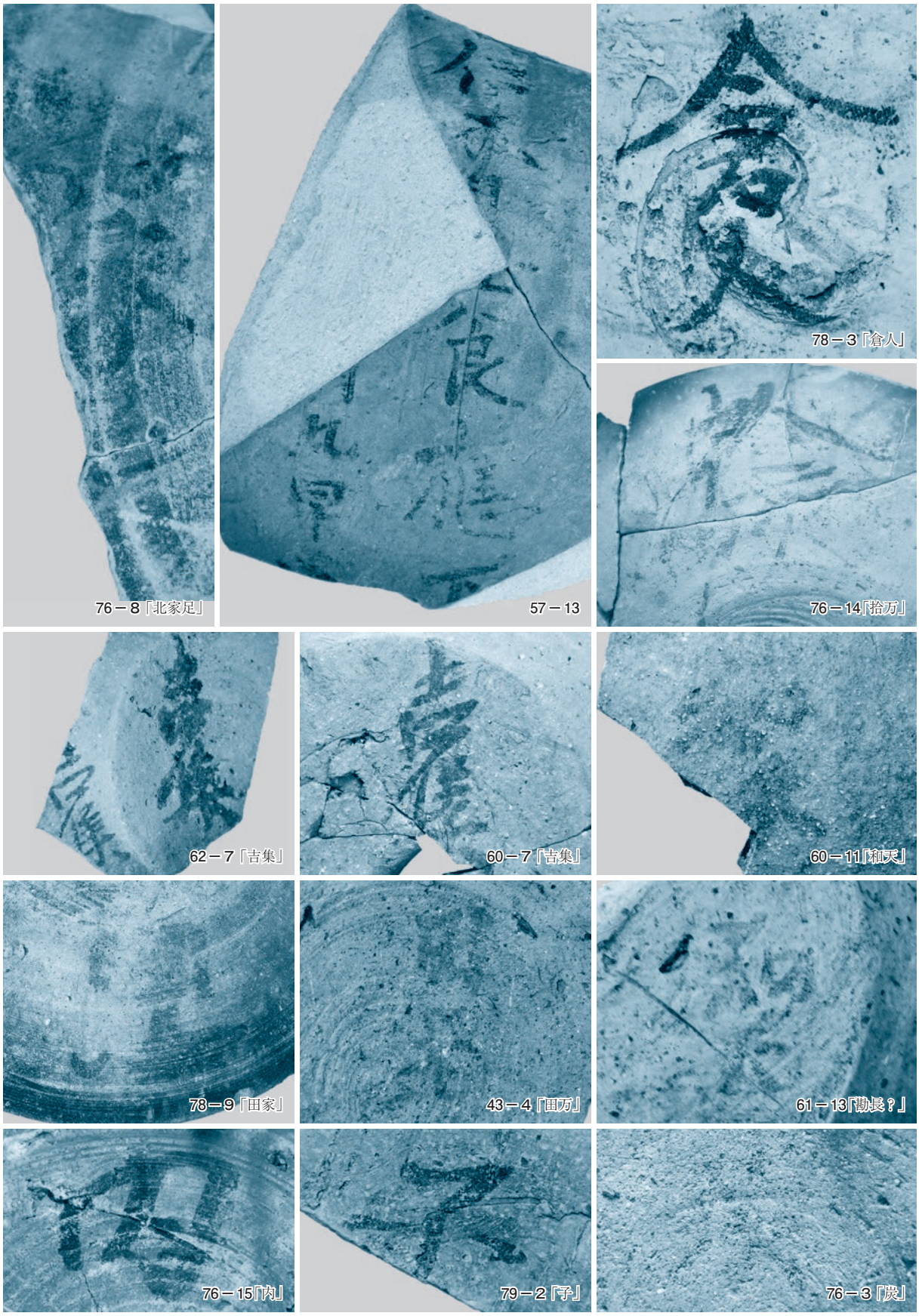
43　須恵器片


56－9「今」
62－17「今」
62－8「今」
77－1「今」
62－20「？」
77－2「今」
61－6「今」
60－15「今」
61－15「申」
56－12「申」
57－3「中」
62－15「上」
62－14「上」
62－6「民」
77－11「民」
61－14「民」
59－11「花」
59－11「花」

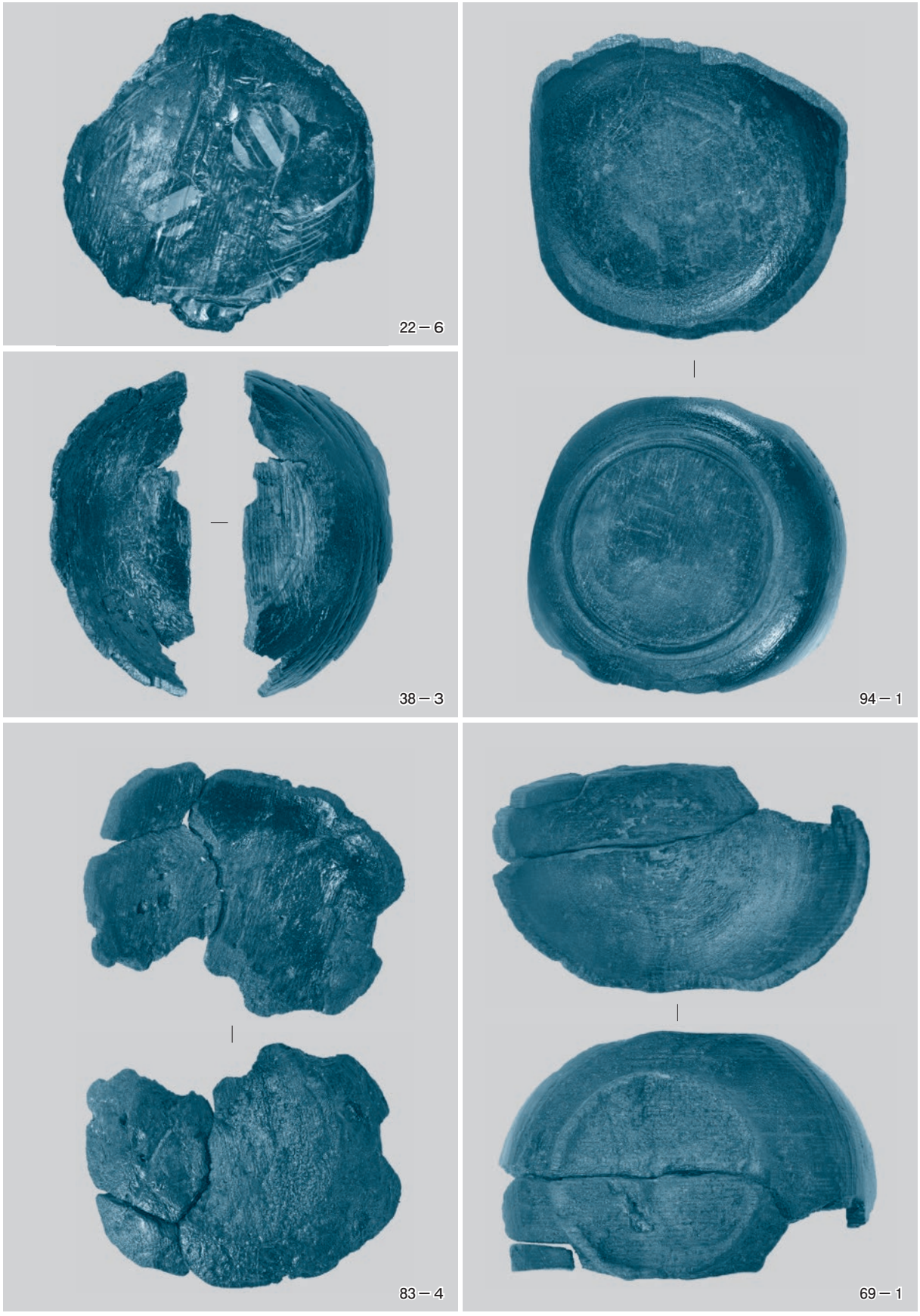
44　墨書土器（1）


78－12『福』
62－13『富』
76－6『富』
60－3『平』
60－10『鏡』
60－1『戸主』
61－7『主足』か『主足』？
62－12『舘』
78－6『寛』
57－12『号』
76－8『足』
61－11『主大』か『主人』，
または『王大』か『王人』
57－5『入』
62－3『吏』
57－10『奇』

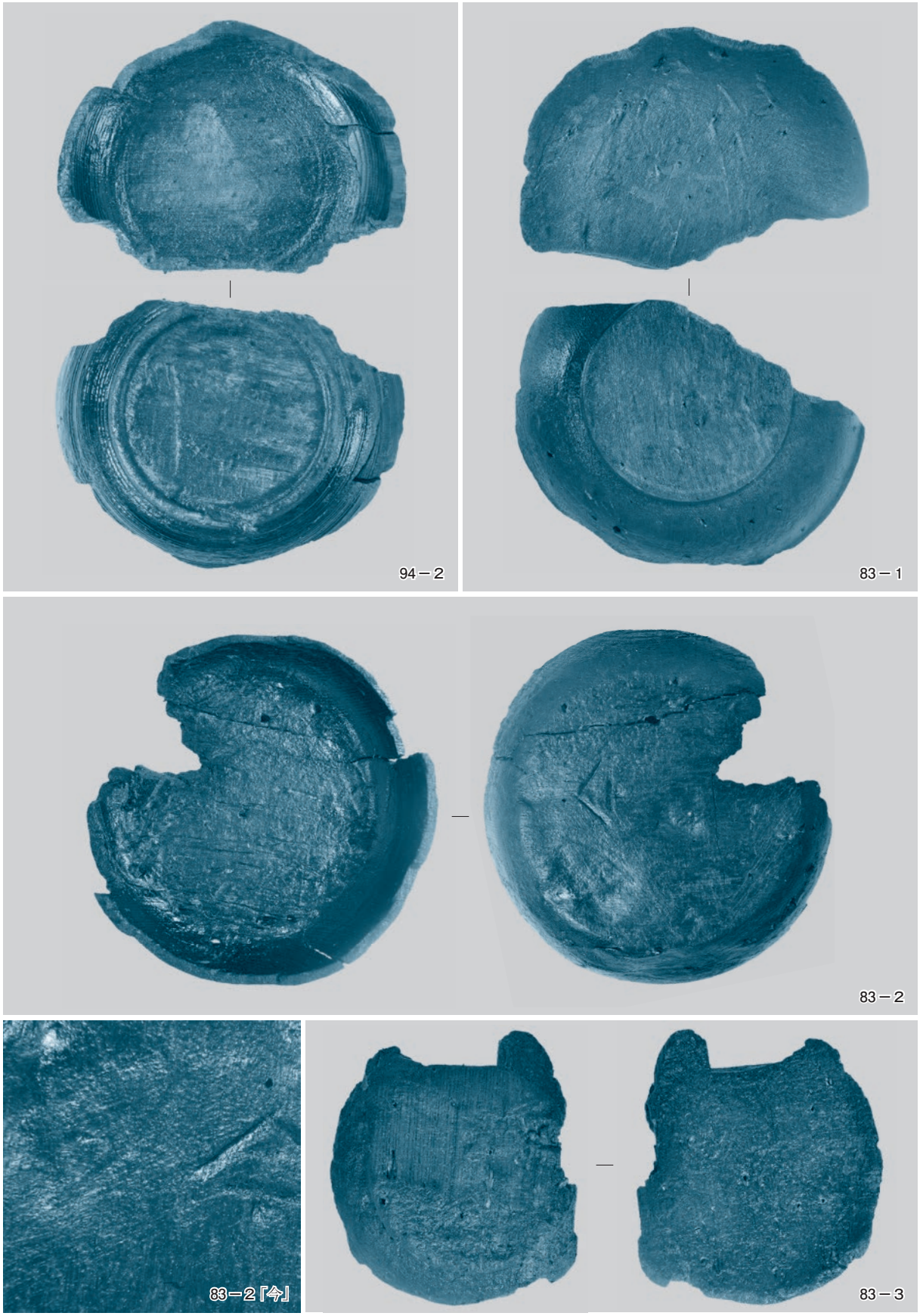
45　墨書土器（２）


76－8「北家足」
57－13
78－3「倉人」
76－14「拾万」
62－7「吉集」
60－7「吉集」
60－11「和天」
78－9「田家」
43－4「国万」
61－13「勘長？」
76－15「内」
79－2「子」
76－3「炭」

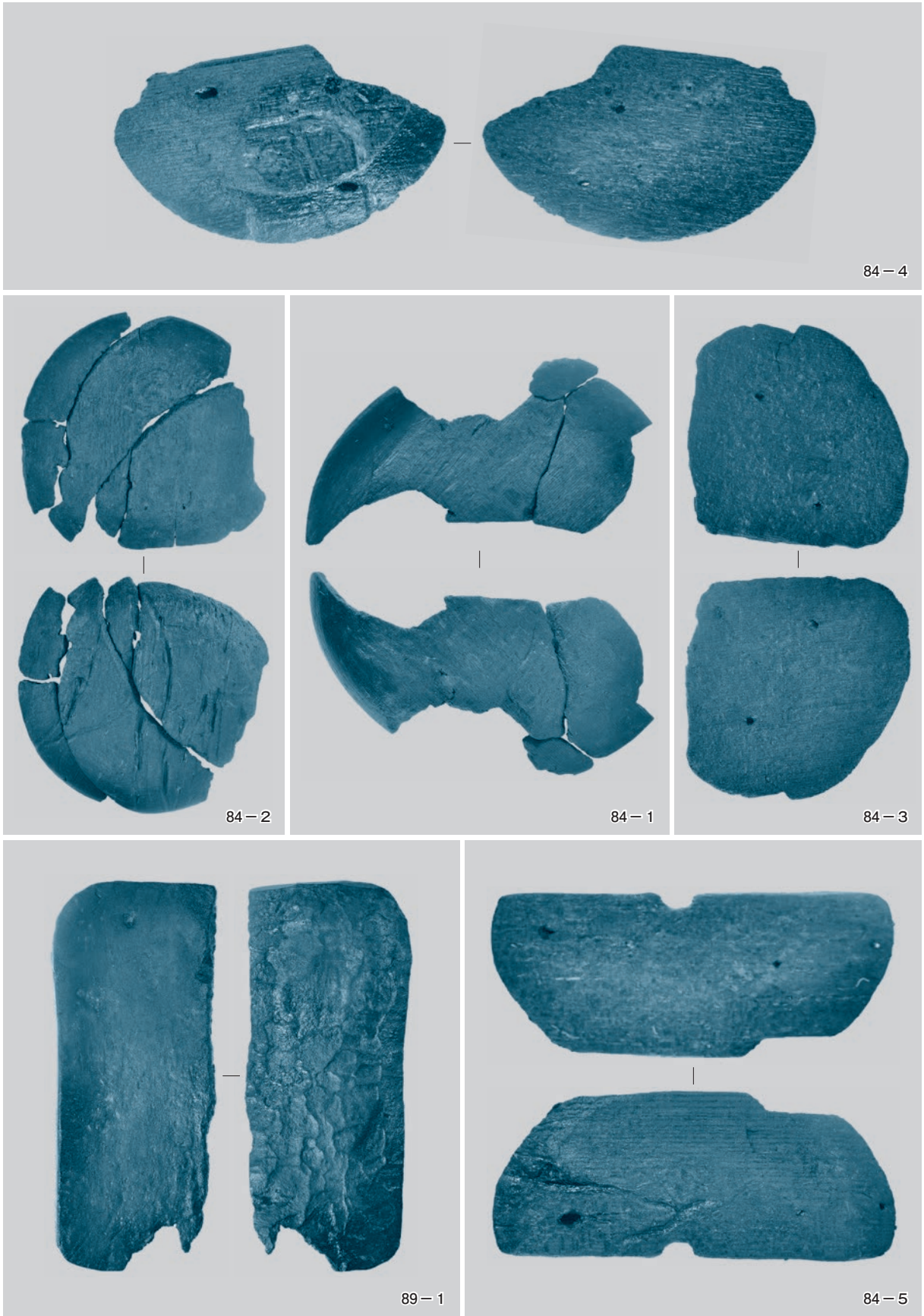
46　墨書土器（３）



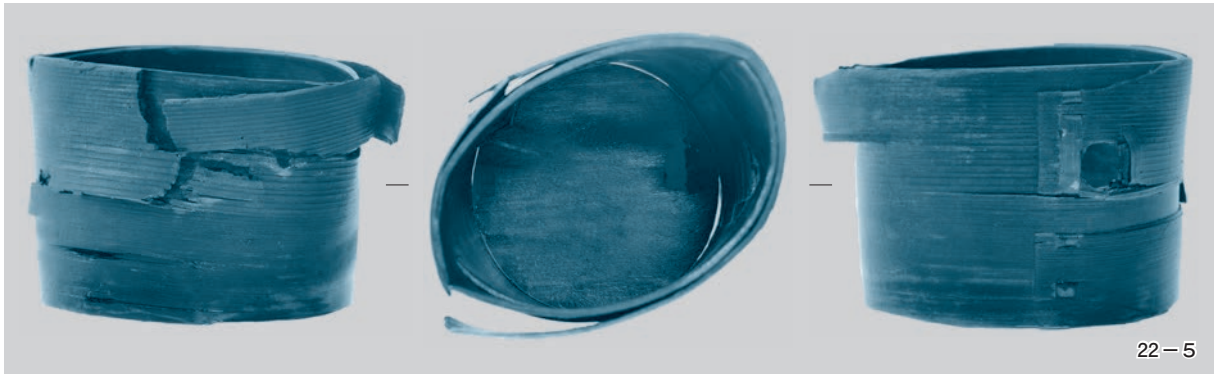
47　木製品（1）　椀

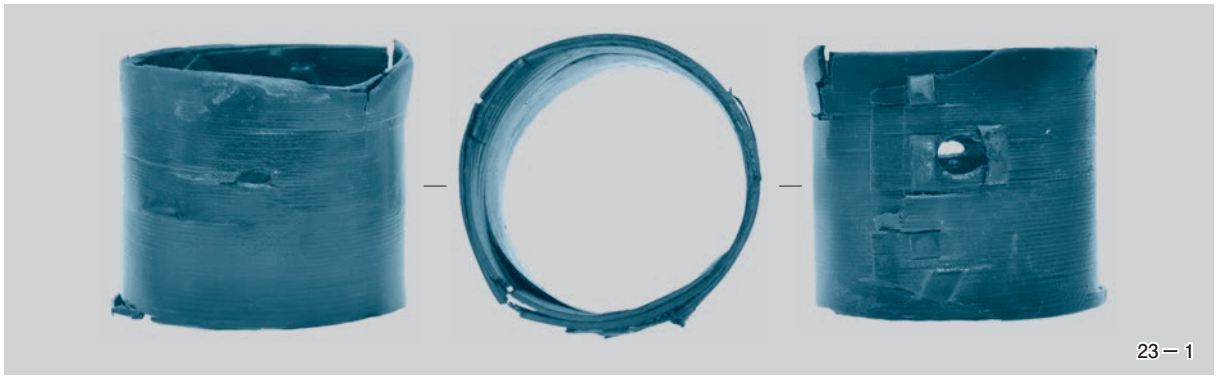


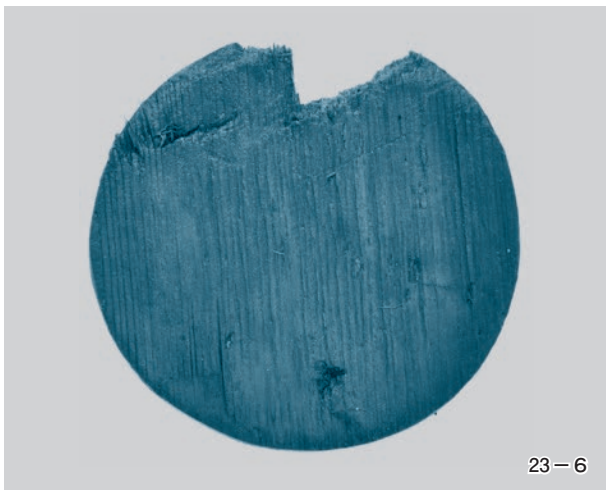
48　木製品（２）　椀

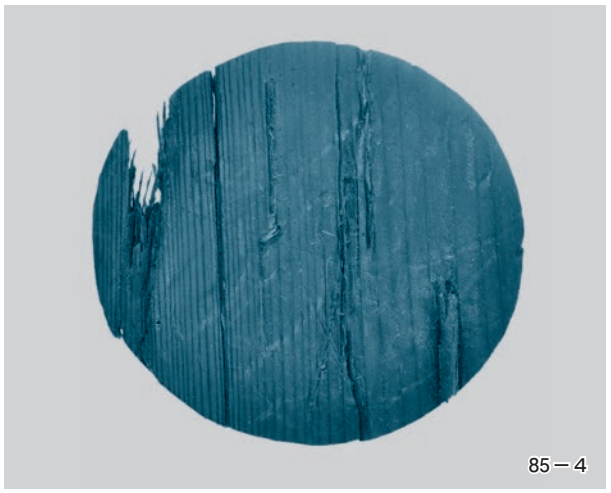


49　木製品（3）　椀・皿・盤

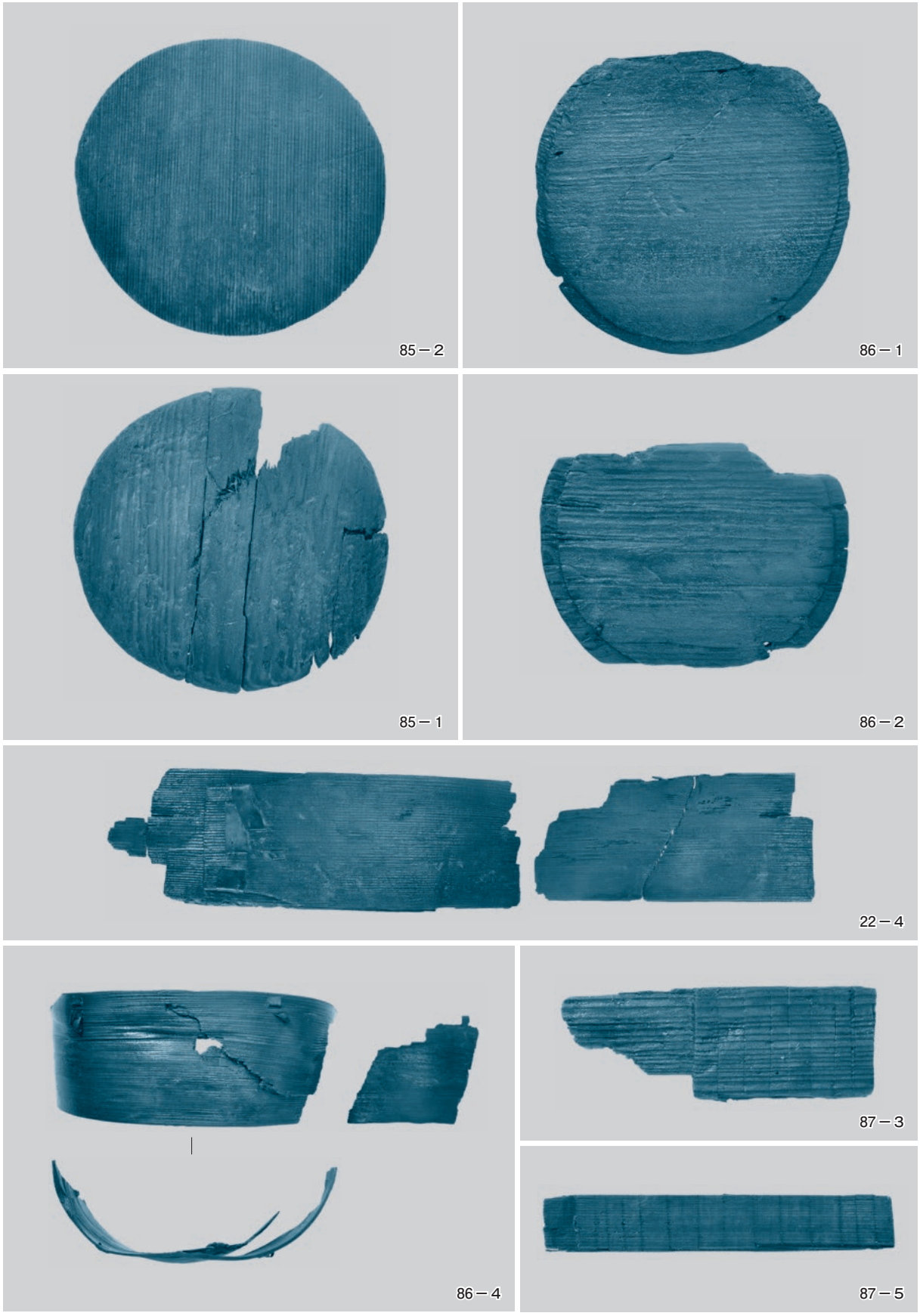




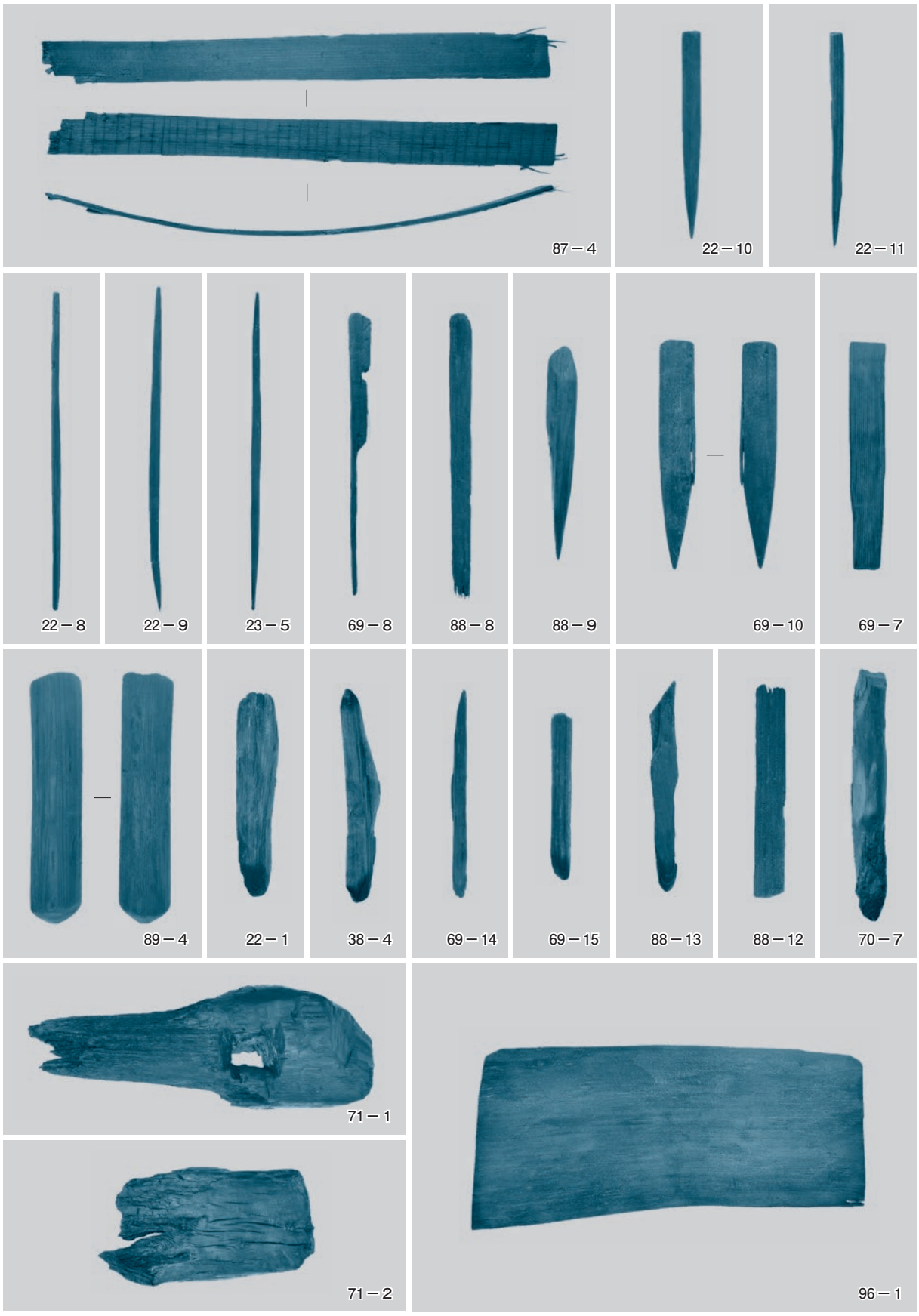




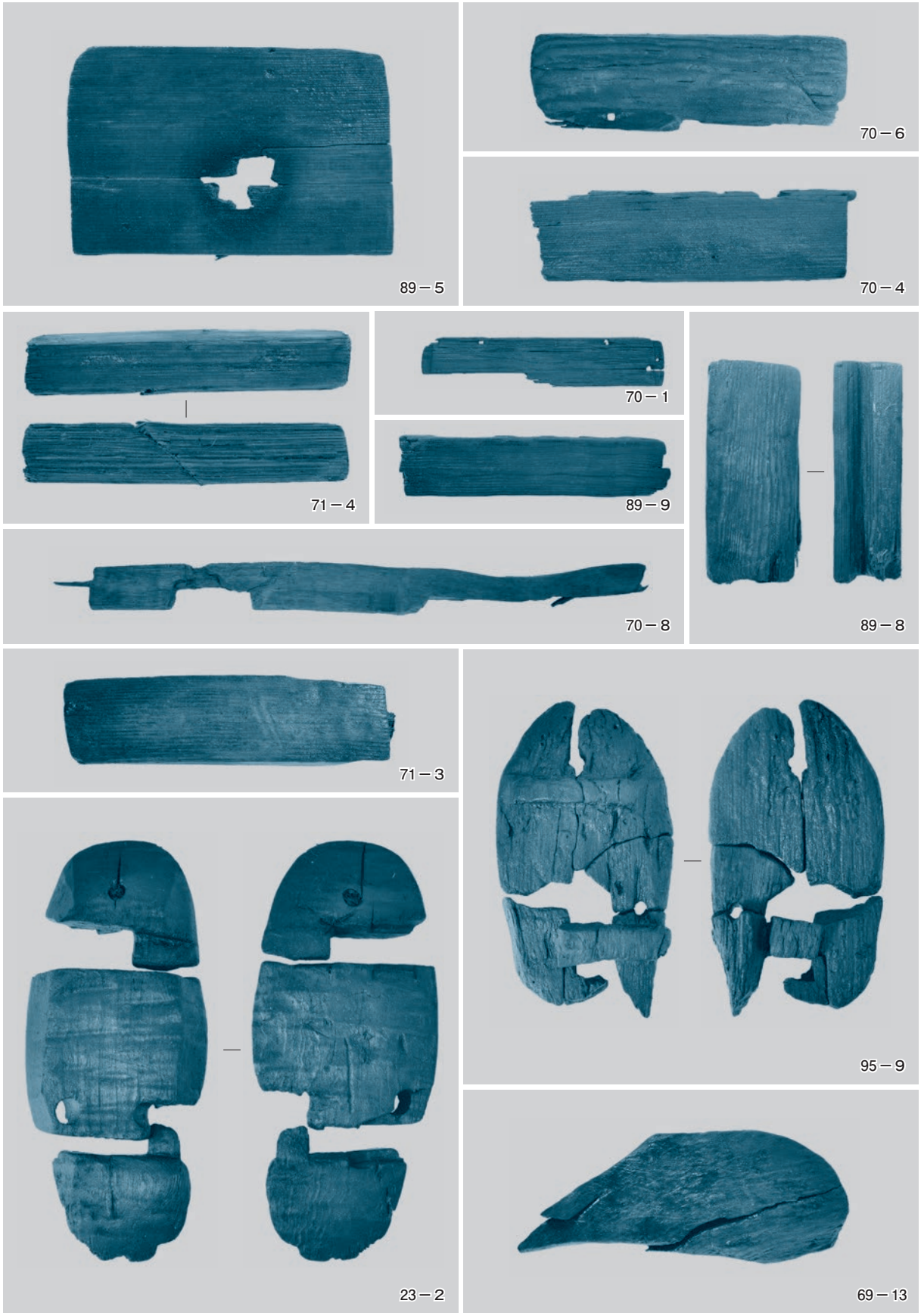
50　木製品（4）　曲物　柄杓・底板



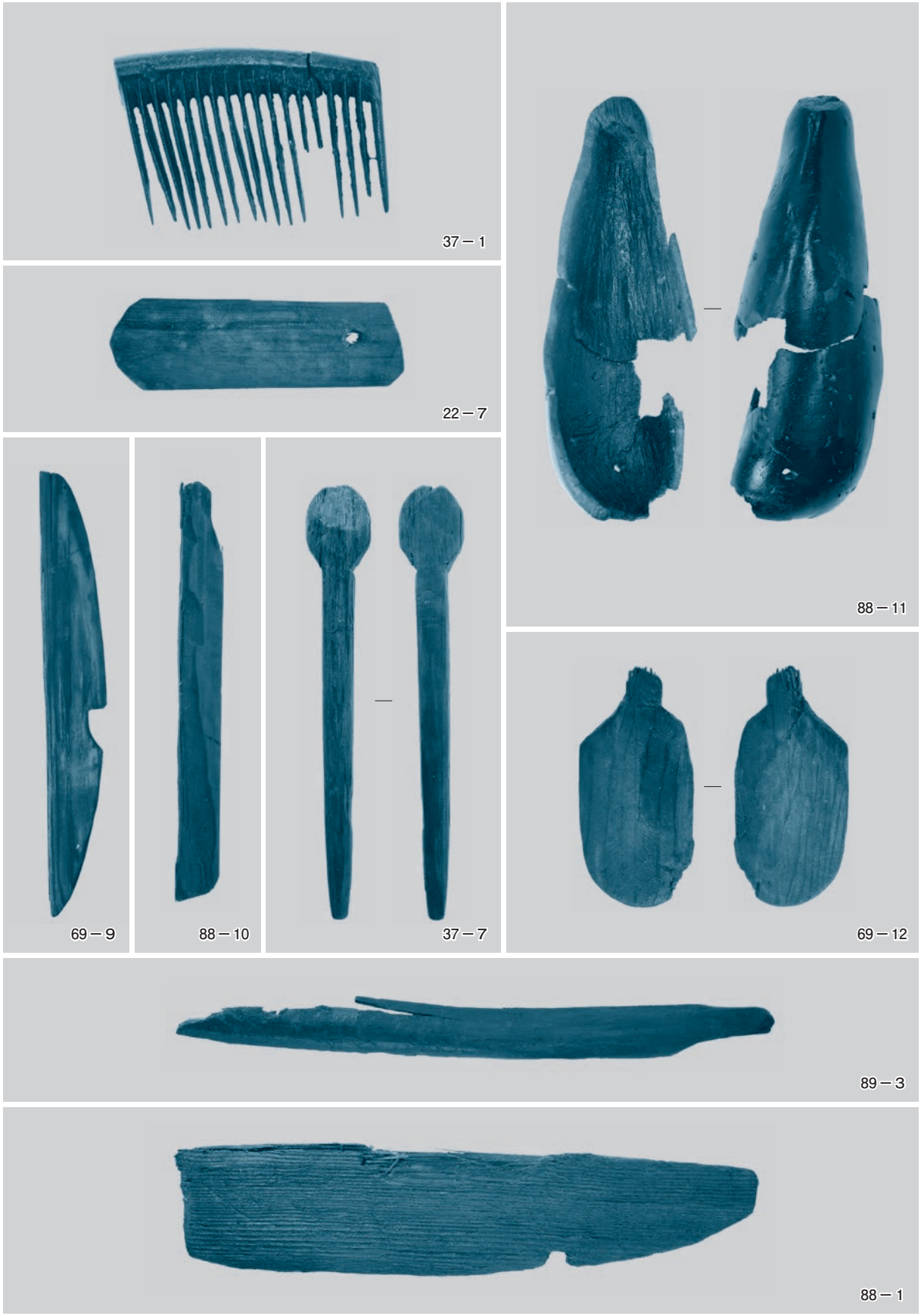
51　木製品（５）　曲物　底板・側板



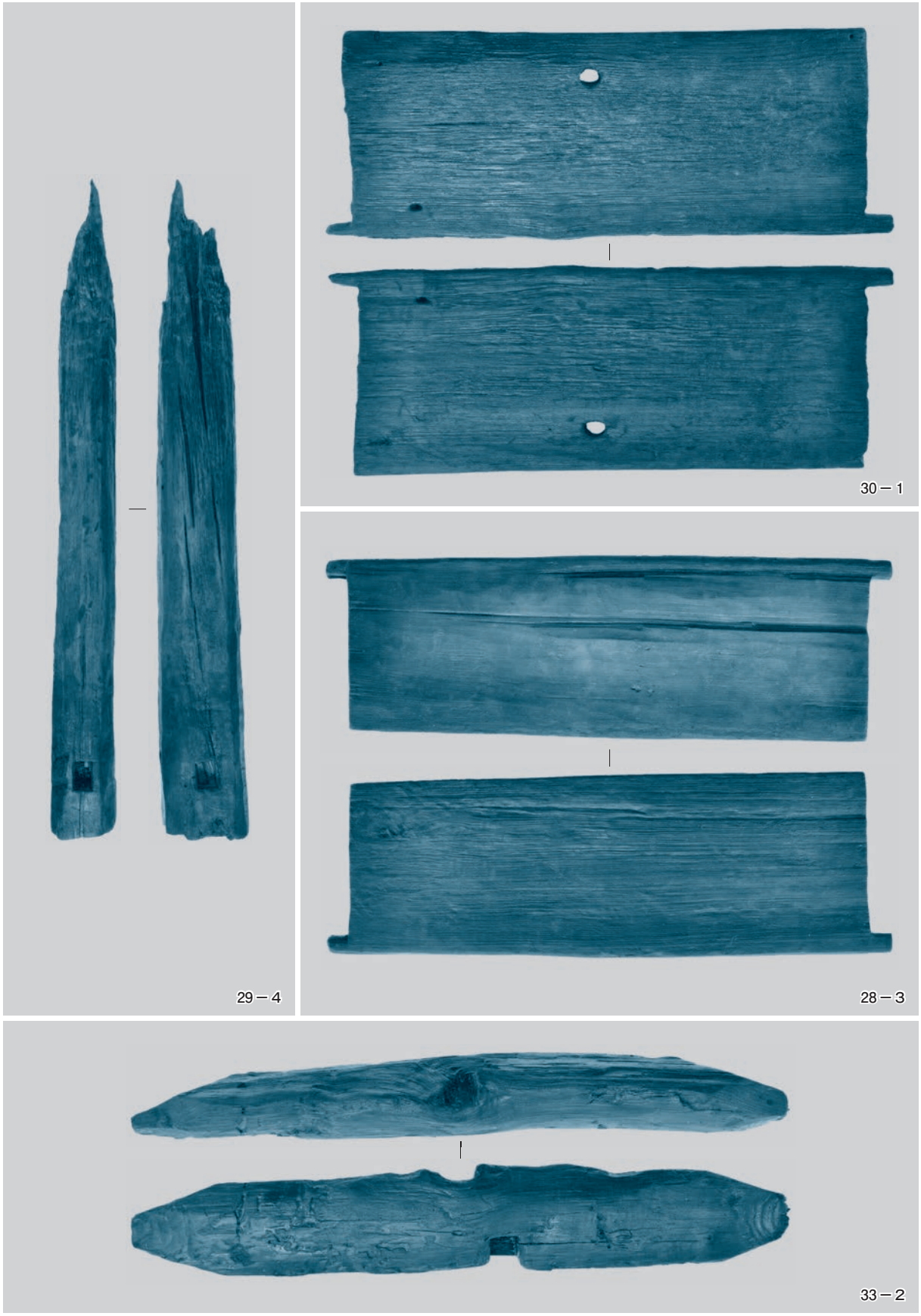
52　木製品（6）　曲物　側板，串・木簡・串状木製品・棒状木製品・火付木・板状木製品



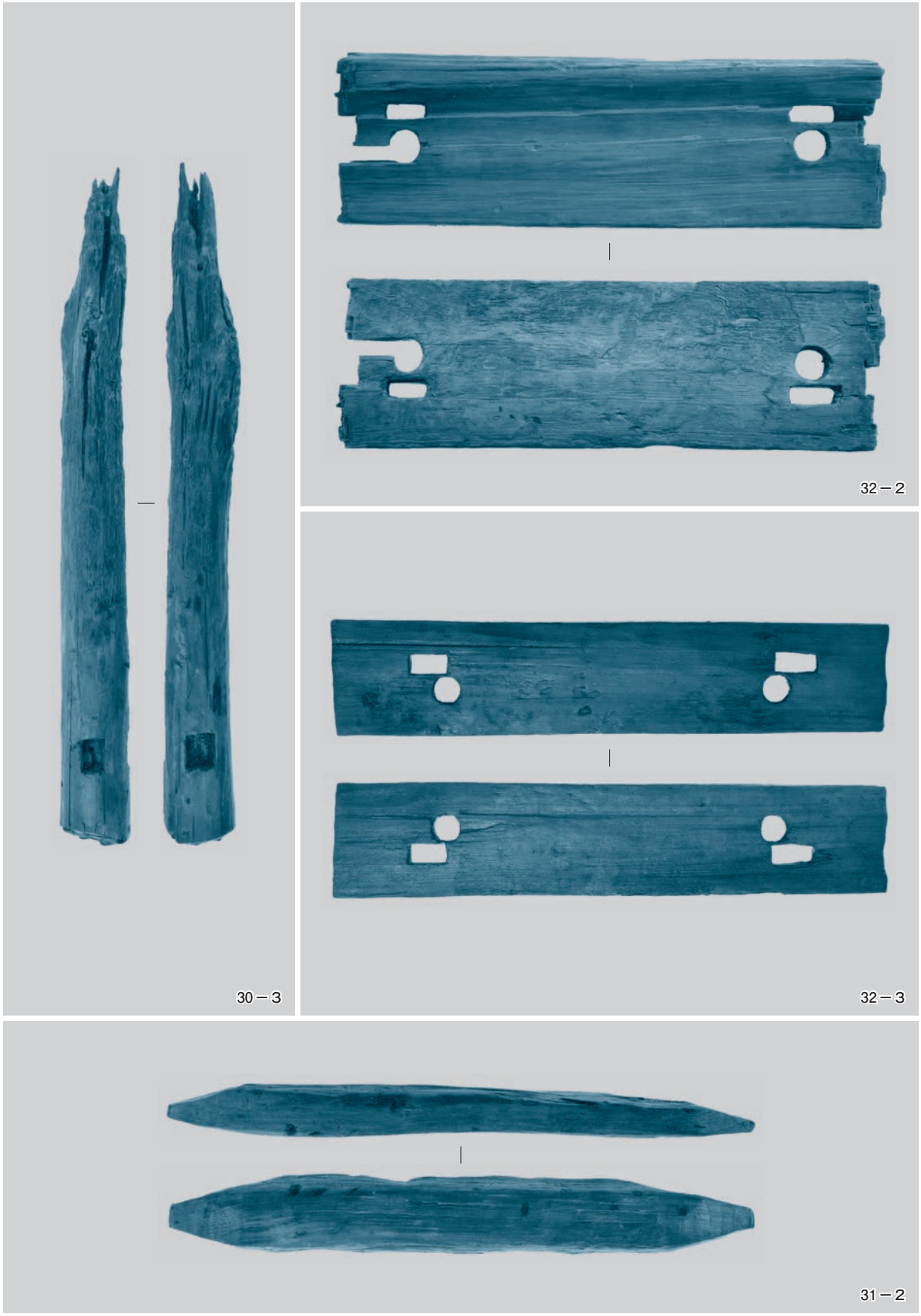
53　木製品（7）　板状木製品・建築部材・下駄



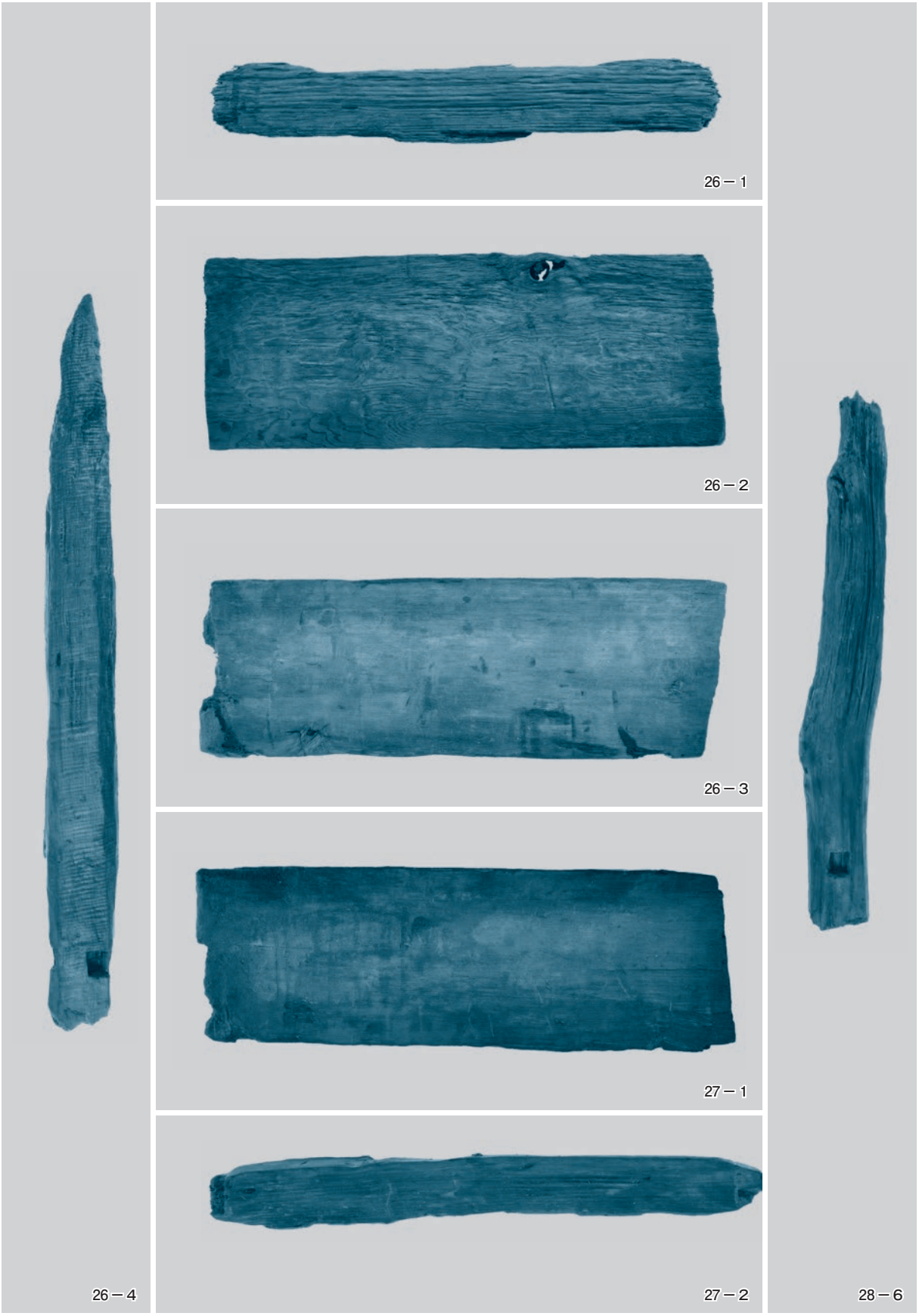
54　木製品（８）　櫛，荷札，瓢箪容器，性格不明木製品



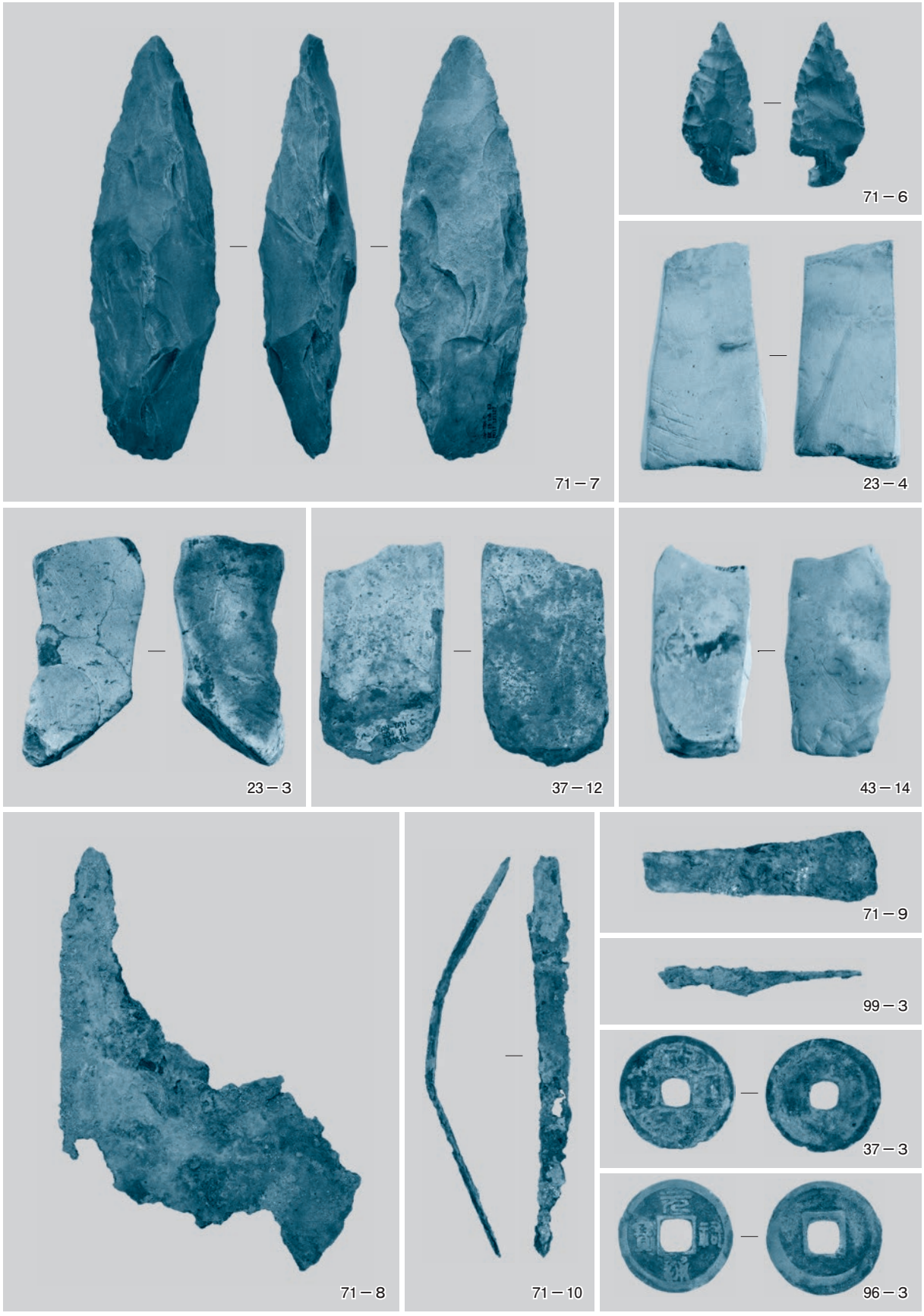
55　木製品（9）　1号井戸跡出土部材



56　木製品（10）　1号井戸跡出土部材



57　木製品（11）　1号井戸跡出土部材



58　石製品，金属製品，古銭

第2編　西 坂 才 遺 跡（1次）

第１章　遺跡の位置と調査経過

第１節　遺 跡 の 位 置

西坂才遺跡は，会津若松市福島県会津若松市高野町大字中沼字西坂才甲に所在し，北緯37° 30′ 6～12″，東経139° 54′ 48～53″に位置する。本遺跡は，溷（せせなぎ）川の西岸に面した低位段丘面とされる河岸段丘上に位置し，その標高は約192ｍである。本遺跡の北西側には，同じく平成25年（2013年）に調査した鶴沼Ｂ・Ｃ遺跡が，溷川に沿って連続して続いている。本遺跡のすぐ東側には，国道121号が南北に延び，磐越自動車道路の会津若松インターチェンジまでは約１㎞のところに位置している。

第２節　調 査 経 過

西坂才遺跡は，平成24年度に実施した会津縦貫北道路の建設予定地を対象とした表面調査の結果確認され，その広がりは溷川の西岸を中心に11,600㎡と提示された。平成24年11月には，財団法人福島県文化振興財団（現公益財団法人福島県文化振興財団　以下同様）が，建設用地内の一部5,800㎡を対象に試掘調査を実施した。その結果，試掘対象面積が，そのまま発掘調査の範囲となった（福島県教委2013）。その後，発掘調査が必要となった範囲に接した用地2,000㎡を追加買収し，要保存面積に加算され合計7,800㎡が平成25年度分の発掘調査（１次調査）対象面積となった。

調査範囲の現況は，国道121号に合流する市道幹Ⅱ－１号線（以下，市道）の北側（以下，便宜上「Ａ区」と呼称する）に面した範囲は宅地と水田で，その南側の範囲（以下，便宜上「Ｂ区」と呼称する）は畑地であった。南側のＢ区内には，排水のために掘られた比較的深い水路が東西・南北に数本延びており，調査範囲の西縁を北流する用水へと排水できるようになっていた。

平成25年度は，４月３日に関係機関による現地協議を実施し，調査対象範囲と調査計画を確認した。調査対象範囲は，東西に走る市道を挟んで南北のＡ・Ｂ両区に分かれている。発掘調査面積については，Ａ区を3,800㎡，そしてＢ区を4,000㎡の合計7,800㎡を対象とした。Ａ・Ｂ両区については，西端工事境界から10ｍ幅の範囲を上半期中に引き渡し，工事用仮設道路を敷設したい旨，工事側より要請があった。そのため，財団法人福島県文化振興財団は職員３名を配置し，Ａ・Ｂ区共に調査区西側から発掘調査に着手することとした。

４月１日から発掘調査にかかる諸手続きを進め，４月11日からＢ区西半分の表土除去と，調査区境の確認と縄張りなど現地作業を開始した。４月下旬までには，調査事務所の設置や駐車場の造成，発掘機材の搬入などの条件整備を行い，引き続きＡ区西および南側の表土除去を継続した。４月26日には，32名の作業員を雇用し，遺構確認作業を開始した。５月14～17日，Ｂ区南に隣接し

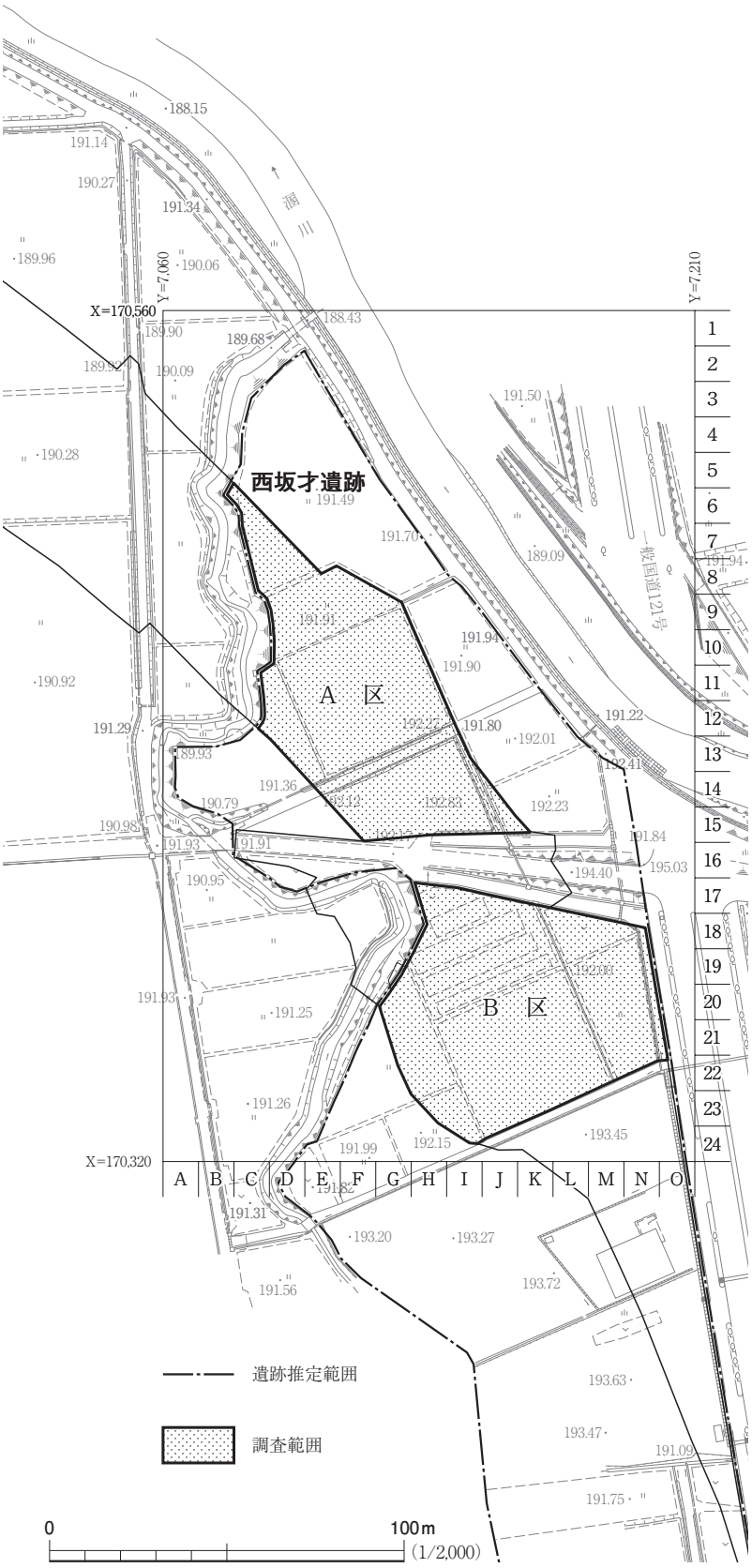


図１　遺跡調査範囲・グリッド配置図

た未試掘調査範囲2,700㎡について，予備調査としてトレンチ７本を設定し遺跡範囲の確認を実施した。その結果，遺構・遺物は確認できず発掘調査の必要はないが，工事にあたっては慎重に対応してもらうこととなった。６月12日からは10名の作業員を追加し，主にＢ区の遺構確認作業を進めた。Ｂ区は，畑地として利用されながらも，もともと水はけの悪い土地で，排水のことに配慮しつつ表土除去作業を継続した。５月中旬になり，遺構の確認作業が本格化し，Ａ・Ｂ両区において平安時代の土坑や溝跡の他，時期不明の小穴群などが複雑に重複している状況が分かり始めた。しかし，Ｂ区では，遺跡の基盤をなす黄褐色粘質土（第２章で「Ⅲ層」と呼称）が，乾燥すると非常に硬く，雨水などで濡れると軟弱で粘り気を増す土質のため，遺構確認作業にかなり苦労した。Ａ区では，黄褐色粘質土の上に堆積した黒褐色粘質土（第２章で「Ⅱ層」と呼称）上面で，遺構の確認を実施することになり，地面が乾燥すると土色の違いでの遺構の見極めが非常に難しかった。

６・７月に入ると，Ｂ区西側の先行引渡し部分について遺構確認および精査が進んだ。引き渡しに向けて，先んじて地形測量と，遺構図の作成，そして７月３日には１回目の空中撮影を実施した。７月10日，工事用仮設道路取り付け工事に伴い，Ｂ区西側部分500㎡について引き渡しを行った。

７月中旬～８月にかけて，Ａ区の東・北側そしてＢ区東半分について表土除去を開始し，その間作業員は２つの調査区を移動しつつ遺構確認および精査を継続した。Ａ区のうち北側三分の一ほどについては，ほ場整備の段階で深くまで地形の改変を受け，遺構は残っていないことが分かった。

８月下旬～９月にかけて，調査は順調に進み，９世紀代の建物跡群の並びなどが次第に明らかになってきた。建物に付属した雨落ち溝からは，脚部の装飾が目立つ円面硯が出土し，注目された。また，建物跡群が建てられる以前に掘られていた３条の溝跡なども確認され，そのうちの１条は西隣りの鶴沼Ｃ遺跡まで直線距離にして約450ｍも延伸していることなども分かってきた。

遺跡の全体像の分かりつつあった10月２日には，二度目の空中撮影を実施した。この頃になると，西坂才遺跡での遺構精査が概ね終了し，遺構の実測図の作成と地形測量が主になってきた。この間，作業員は隣接する鶴沼Ｂ・Ｃ遺跡での遺構確認および精査に合流させるなど調整し，別の遺跡での発掘調査の展開の準備を併行して実施した。

10月19日には，鶴沼Ｃ遺跡と西坂才遺跡の２現場を対象に，現地での説明会を実施した。当時の見学者は約70余名を数えた。説明会後，事務所・休憩用プレハブは10月21日に撤去した。10月22日には，関係機関３者で，調査成果を確認し，10月29日からはＡ・Ｂ両区の埋め戻しを開始した。埋め戻しの終了した11月８日には，西坂才遺跡での本年度の現地作業をすべて終了した。

平成26年度の西坂才遺跡の２次調査は，Ａ・Ｂ区に挟まれた市道下が対象となる。

第２章　遺 構 と 遺 物

第１節　遺構の分布と基本土層

遺構の分布（図２～５）

西坂才遺跡（１次調査）の発掘調査は，国道121号に接続する市道が，調査範囲の真ん中を南北に分断している。今回の調査は，市道を挟んで南北に分かれた調査区面積7,800㎡を対象に実施した。

調査範囲の現況は，市道北側のＡ区は畑地・水田および宅地で，南側のＢ区は畑地・水田である。このうち，両調査区とも，近年の造成により部分的に地形の改変が著しかった。Ａ区の最北端と西側の用水縁の10ｍ幅部分については，近年の造成が深くまでおよんでいた。また，Ｂ区では畑地の排水用に東西に延びる深い水路が複数掘られていた。

市道北側のＡ区で確認した遺構は掘立柱建物跡７棟（ＳＢ01～03・05～08），土坑５基，建物跡に付随したものも含めた溝跡６条（ＳＤ13～16・18・23）である。Ａ区にある建物跡はすべて平安

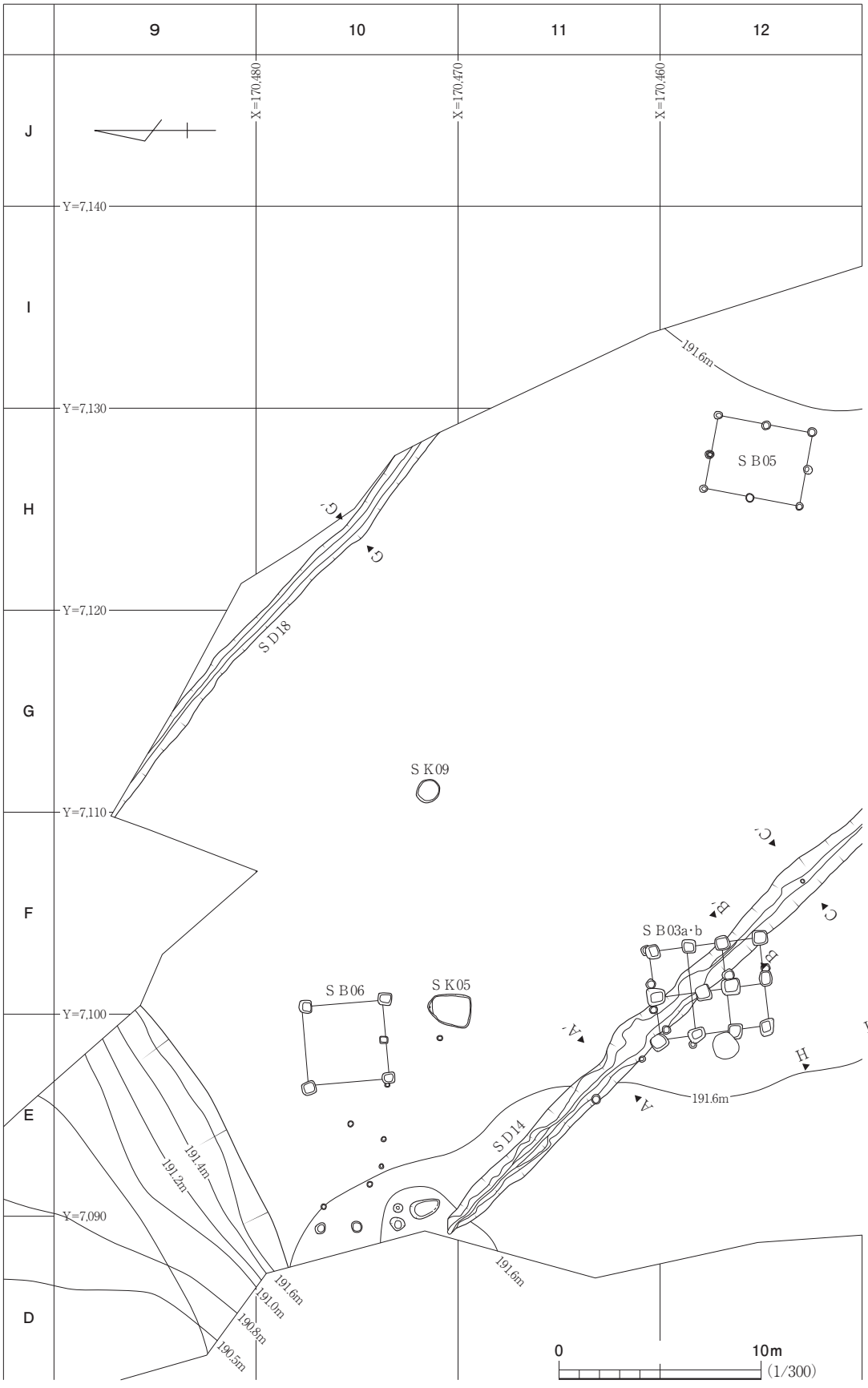

9
10
11
12
J
I
H
G
F
E
D
X=170,480
X=170,470
X=170,460
Y=7,140
Y=7,130
Y=7,120
Y=7,110
Y=7,100
Y=7,090
SB05
SB06
SB03a·b
SK09
SK05
SD18
SD14
191.6m
191.4m
191.2m
191.0m
190.8m
190.5m
0
10m
(1/300)

図2　A区遺構配置図（1）

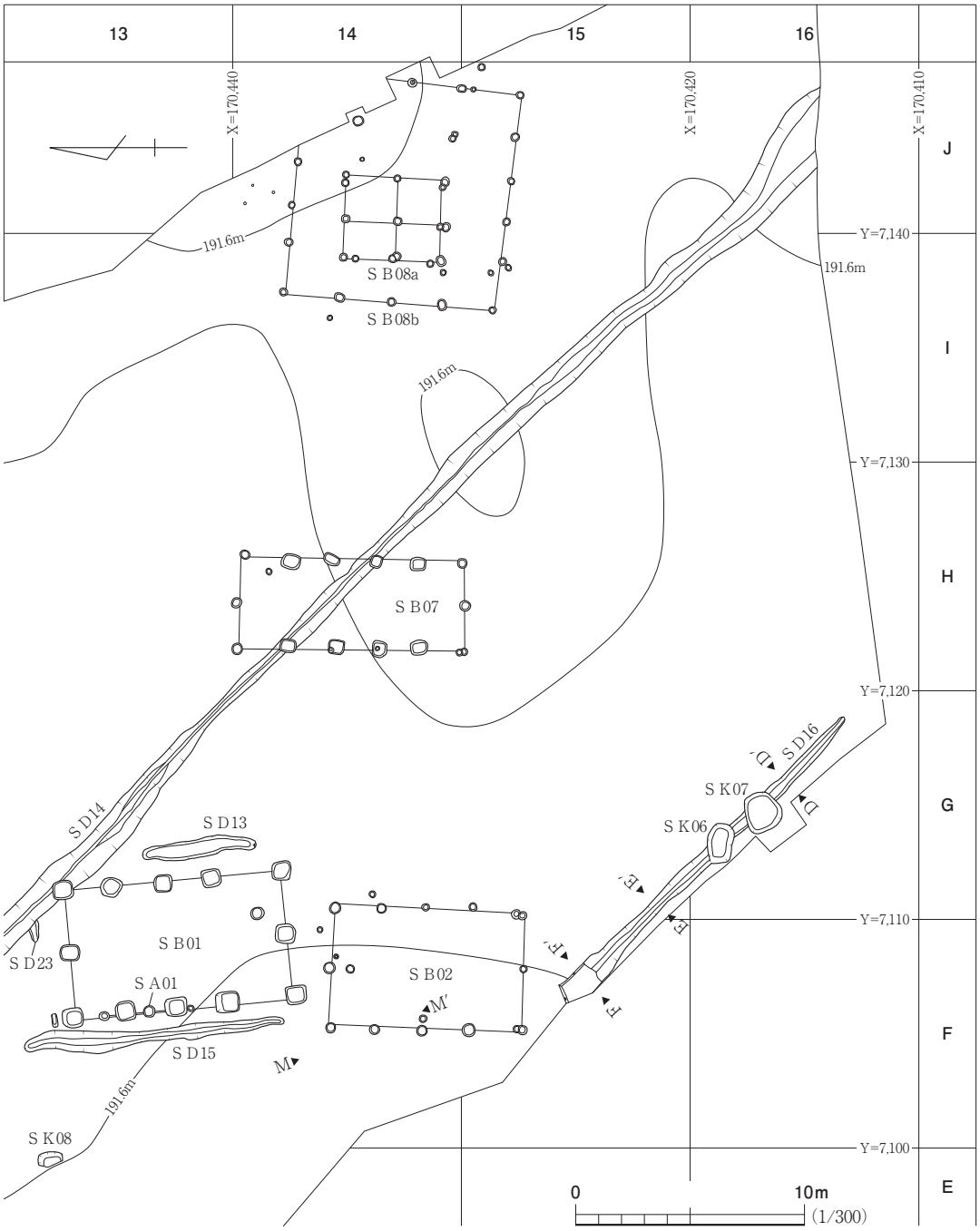


図３　Ａ区遺構配置図（２）

時代の遺構と考えている。建物跡群は，どれも切り合うことなく配置されていた。建物群は，柱穴の平面形の違いや直径の違い，また配置方向の違いから概ね２グループに分かれると考えている。また，Ａ区で確認できた溝跡のうち，14号溝跡は建物跡群よりも古くから機能していたことが分かり，北西側に隣接した鶴沼Ｃ遺跡まで総延長にして約450ｍあまり延伸していた。

南側のＢ区の遺構は，溝跡18条（ＳＤ01～12・14・17・19～22），土坑５基（ＳＫ01～04・11），掘立柱建物跡１棟（ＳＢ04）を確認した。溝跡のうち，14号溝跡はＡ区から引き続き南東方向へと続いている古代の遺構である。多くの溝跡は，北西から南東あるいは北東から南西方向へ向かって

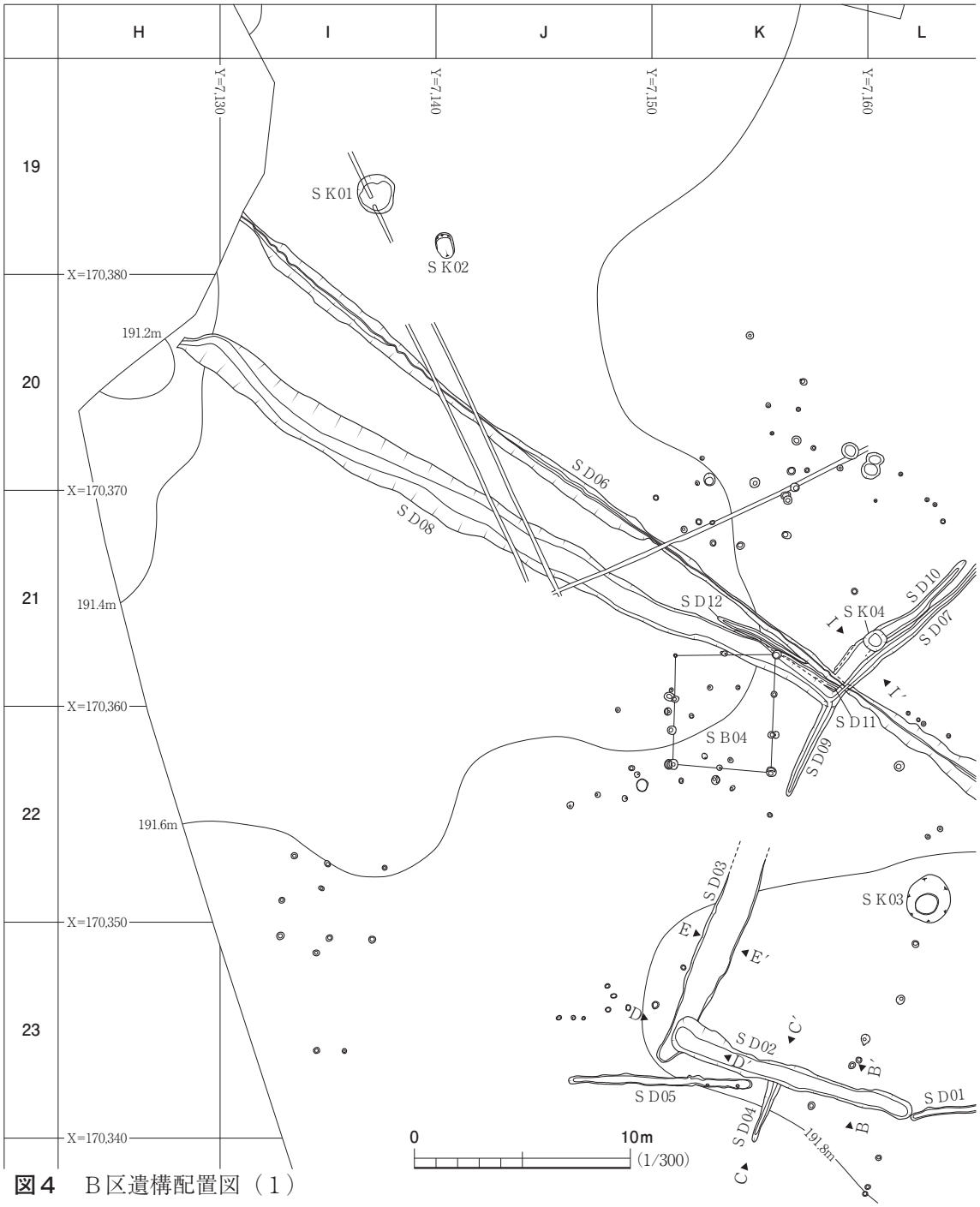


図4　B区遺構配置図（1）

掘られているものが多く，大半は近現代のものと考えている。調査区中央部には，4号掘立柱建物跡とした側柱建物跡と1基の井戸跡（SK03）がある。4号掘立柱建物跡の年代は，その軸線方向が，真東・真北方向に向かって延びる1・5・17・21号溝跡の延伸方向と一致していることから，平安時代に属すると考えている。

A・B区からの出土遺物は，縄文時代の石器，平安時代の土師器・須恵器や硯などが出土している。しかしながら，縄文の遺物は極僅かに出土しているものの，縄文時代の遺構は確認できていない。

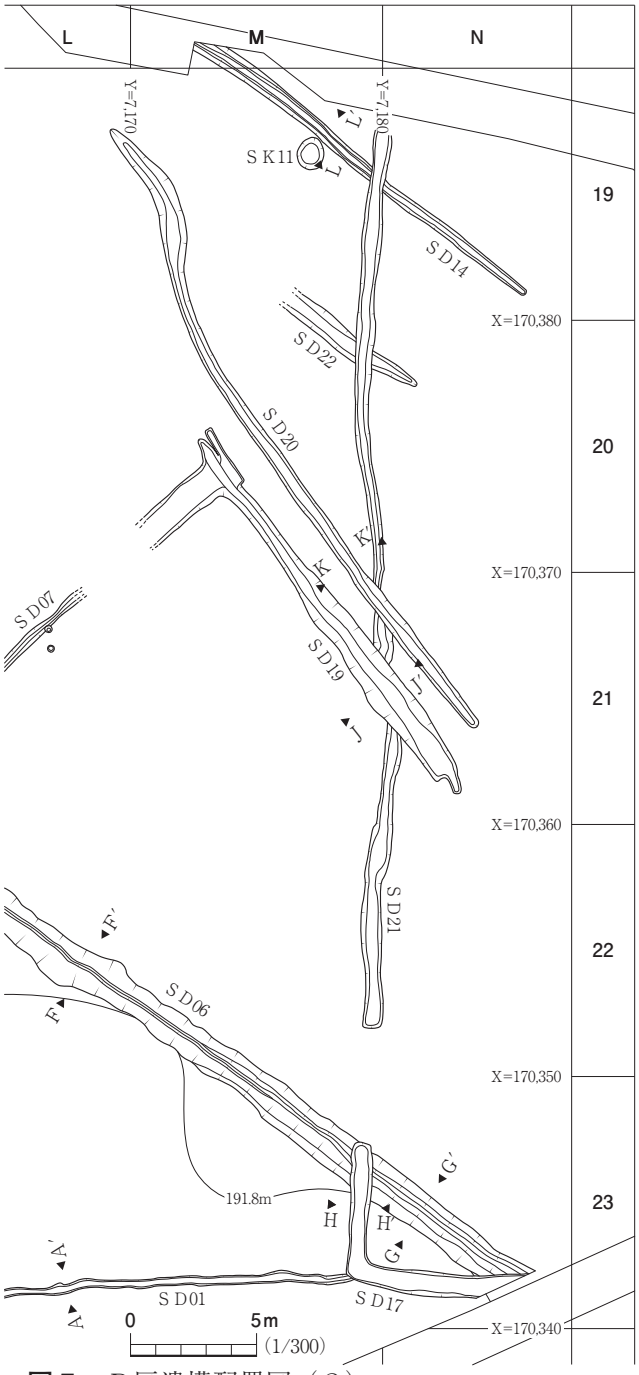


図５　Ｂ区遺構配置図（２）

基本土層（図２・３・６）

西坂才遺跡の調査では，基本土層の表記に，アルファベットの大文字Ｌをつけて，これにローマ数字とアルファベットの小文字を組み合わせて「ＬⅡａ」と表記した。しかし，この層位は，第１編の鶴沼Ｃ遺跡で使用されている基本土層の表記とは完全に一致していない。

ＬⅠ　この層は暗褐色粘質土で，Ａ・Ｂ区での耕作土兼表土層である。土色・土質ともにＡ・Ｂ区において概ね共通している。特に，Ａ区南端は宅地として利用され，比較的高く盛り土されていた。また，市道南側のＢ区で，主に畑地であった範囲については，現地表から比較的深めに掘削などがおよんでいたため，Ａ区よりも表土除去時の掘削深度が深くなった場所もある。

ＬⅡａ～ｃの３層は，Ａ区西側のＳＢ01～03・05周辺に残存していた。この範囲について，ＬⅡを試験的に２か所掘り下げたところ，筋状の落ち込みが，西から東，ＳＢ01からＳＢ05の方向へと延びていることを確認した。試験掘りを実施した結果，落ち込みの深さは約50～60cm，断面形状は浅い皿状をなし，土中から遺物は出土していない。土層観察確認した結果，落込み内に常時水が流れていたという状況は確認できなかった。堆積層は，ＬⅡａ～ｃ層が上から順に堆積し，図６に示した状況と概ね同じ堆積状況であった。

ＬⅡａ　この層は，黒色粘質土である。削平を免れたＡ区中央部のみで確認できた旧表土層に相当する土層である。層厚は薄く10～15cm程度である。ＬⅡａの分布状況は，建物跡群を確認した調査区中央に部分的に遺存していた。土中からは，平安時代の土師器細片の他，５㎜前後の炭化物が僅かに含まれている。Ａ区にある７棟の掘立柱建物跡のうち５棟（ＳＢ01～03・05）は，この層上面で確認した。

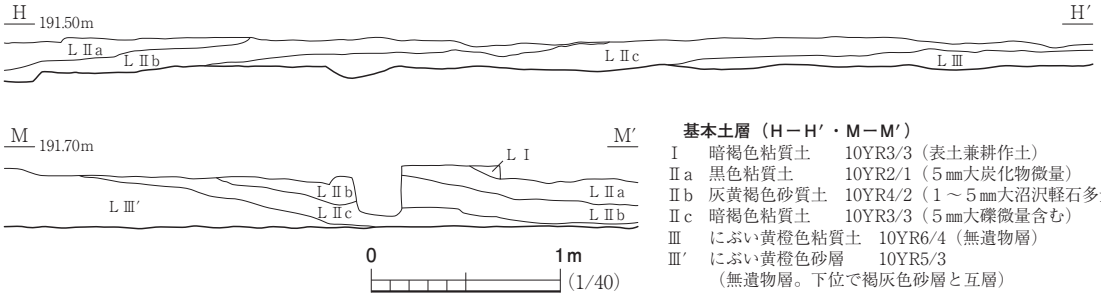


図６　Ａ区基本土層

ＬⅡｂ　この層は，灰黄褐色砂質土である。上位のＬⅡａ層同様，削平を免れたＡ区中央部でのみで確認できた土層である。１～５㎜大の沼沢火山噴出物（ＮＰ）を比較的多く含んだ土層である。ＬⅡａ層の周辺および下層から確認されることが多い。弥生時代より古い旧表土である。層厚は10～15cmと薄い。沼沢火山噴出物は，風化などで白色の細粒になった状態であるため，水成堆積による二次堆積と考えられる。この層中に遺物は含まれていない。

ＬⅡｃ　この層は，暗褐色粘質土である。層厚は10cm前後と，上位のＬⅡａ・ｂ層よりも薄く堆積している。この層の分布状況も部分的で，１号掘立建物跡を確認したＡ区中央にわずかに残っていた。この層中に遺物は含まれていない。

ＬⅢ　この層は，にぶい黄橙粘質土で，深さによって多少白みがかったり，黄色が濃かったり色の違いが若干ある。層厚は70～80cm。遺跡内のほぼ全域で確認でき，大半の遺構はこの上面で確認した。この土については，火山ガラスおよび軽石の分析を行った結果（福島県教委2013）によると，土中には沼沢湖堆積物起源の火山泥流（ラハール）に由来する砕屑物がさらに再堆積して形成された可能性がある。そのため，上層のＬⅡｂ層にはＬⅢ層に由来する粒子の細かい砕屑物が多量に含まれている。この層中に遺物は含まれていなかった。この下層には，ＬⅢ′層としたにぶい黄橙砂層が，30cm程の厚さで堆積していた。ＬⅢ′層は，３号土坑を深く掘り土層観察を行った際，下層で確認した（図25右下）。この層中に遺物は全く含まれていなかった。

ＬⅣ　この層は，灰褐色粘質土で水成堆積土層である。この層は，３号土坑を深く掘り土層観察を行った際に確認した（図25右下）。ＬⅢ′層の下に堆積し，別層としたがＬⅢ′層の下部に含まれる可能性もある。雨の時期には，この層からの湧水が著しい。また，３号土坑の掘削の際，この層中から長さ45cmほどの木材が１点出土した。この木材片の放射性炭素年代測定を行ったところ7,180 ± 30yrBP という結果を得ている（付章自然科学分析参照）。このことから，紀元前4,000年頃には，溷川西岸周辺の標高の低かった場所はＬⅣ層で覆われていた可能性が高い。

沼沢火山の噴火は，紀元前3,400年頃（山元1995）とされる。この時の火山噴出物は，会津盆地中央部の低地において，水成堆積の粘土層中で確認されている。このことから，縄文時代前期末（大木６式期）には会津盆地の広い範囲が大きく湖沼化し，縄文人にとっては居住に適さない土地になっ

たと考えられている。しかし，第１編の鶴沼Ｃ遺跡の自然流路跡底より，旧石器時代末から縄文時代草創期の石器が流入していることなどを考え合わせると，溷川周囲には点在した微高地状の高まりがあり，その地において縄文時代前期末以前から既に人々の生活が営まれ続けていたとも推測できる。（阿　部）

第２節　掘立柱建物跡

西坂才遺跡の１次調査では，合計９棟の掘立柱建物跡を確認した。これらのうち，４号掘立柱建物跡についてはＢ区中央部に１棟だけ存在し，残りの８棟についてはすべてＡ区で確認されている。建物跡については，すべて平安時代のものと考えている。

また，１号掘立柱建物跡については，周囲に３条の雨落ち溝が巡っていた。調査時の都合上，溝跡には各々ＳＤ13・15・23と番号をつけているが，１号掘立柱建物跡に付属する施設として本節中でまとめて報告し，新旧関係が不明な１号柱列跡についても併記した。なお，報告する柱間距離は柱痕遺存の場合は芯々距離，その他は掘形中央間を計測値とした。

１号掘立柱建物跡
ＳＢ01，ＳＤ13・15・23，ＳＡ01（図７～９，写真６・７・15・22）

遺　　構（図７・８，写真６・７・15）

本建物跡は，Ａ区中央部のＦ13・14，Ｇ13・14グリッドにまたがって位置し，ＬⅡａおよびＬⅢ上面で検出した。14号溝跡の一部と重複し，本建物跡が新しい。南１ｍに２号掘立柱建物跡，西４ｍに８号土坑が存在する。また，３個の柱穴からなる１号柱列跡とも重複するが，本建物跡との新旧関係については分からないものの，両者の柱穴は並ぶ方向を揃えて作られている。掘立柱建物跡の外周にあたる東・西・北側の３方向には，それぞれ１条ずつ溝跡（ＳＤ13・15・23）が巡っている。

本建物跡は，東西２間，南北４間，平面形は長方形となる。東西軸のＰ１－Ｐ３とＰ７－Ｐ９は約5.6～5.7ｍ，南北軸のＰ１－Ｐ９とＰ３－Ｐ７は9.5～9.6ｍを測る。四隅を柱穴で囲まれた範囲の面積は約54.1㎡，その南北軸を主軸とした時の方位はＮ６°Ｗとなる。柱穴の平面形は隅丸方形または長方形である。柱穴の規模は一辺0.8～１ｍ，確認面からの深さは41～68㎝を測る。柱穴の掘形内堆積土は，ＬⅡａ・ｂ層の土を多く含んだ暗褐色土を基調とし，土に締まりがある。柱痕はすべての柱穴で確認でき，その直径は20～25㎝であった。堆積土中から遺物は出土していない。

柱穴の東西北側の外周には，３条の溝跡（ＳＤ13・15・23）が掘り込まれている。これらの溝跡の残存規模は，長さは西側の15号溝跡が最も長く約11.5ｍ，13号溝跡は約５ｍ，北側の23号溝跡については断片的にしか確認できていない。３条の溝跡と柱穴との距離は，掘形縁から約６～50㎝と近接しており，確認面から深さは６～10㎝とかなり浅い。溝跡内堆積土は，柱穴同様にＬ

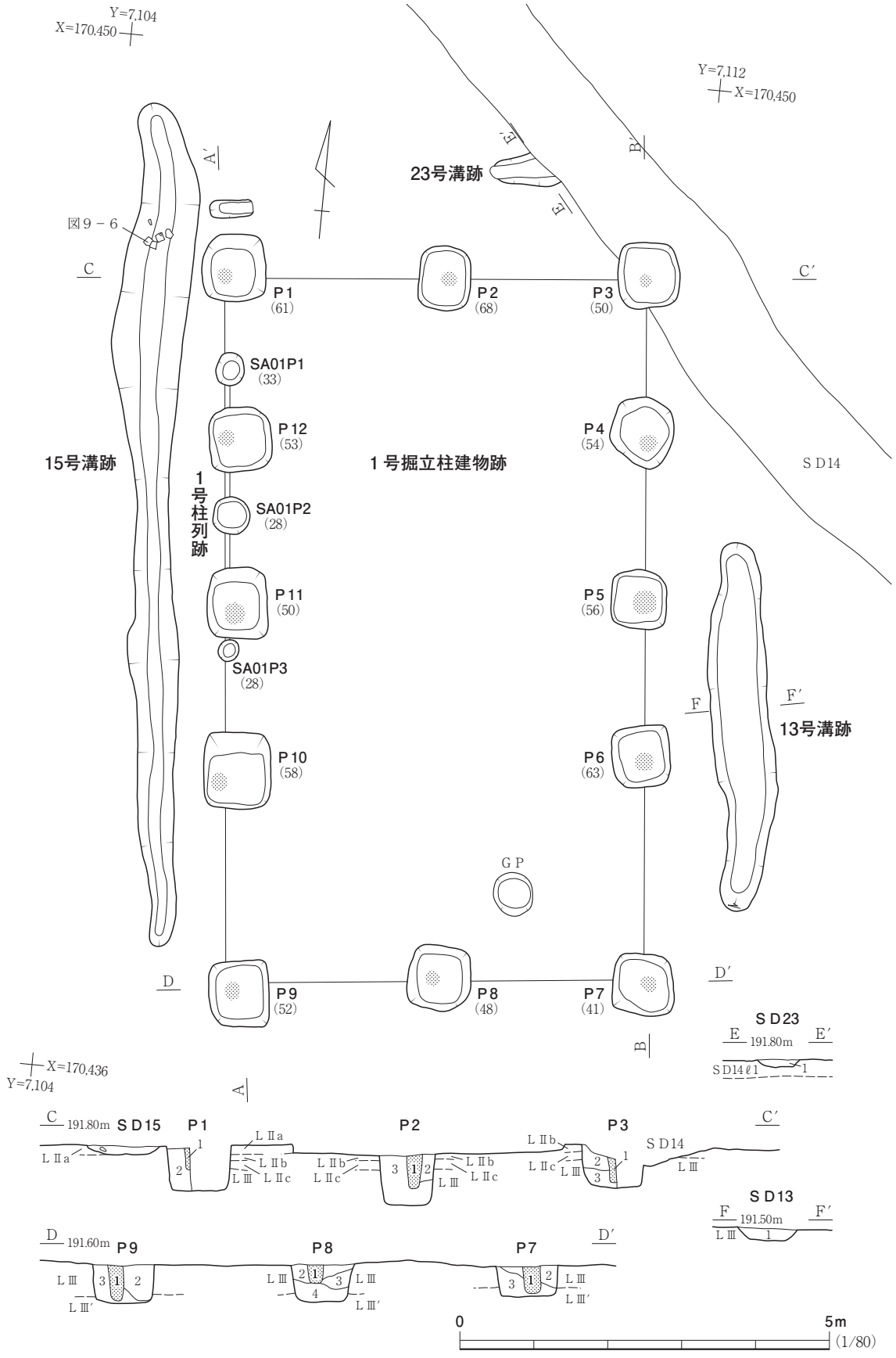
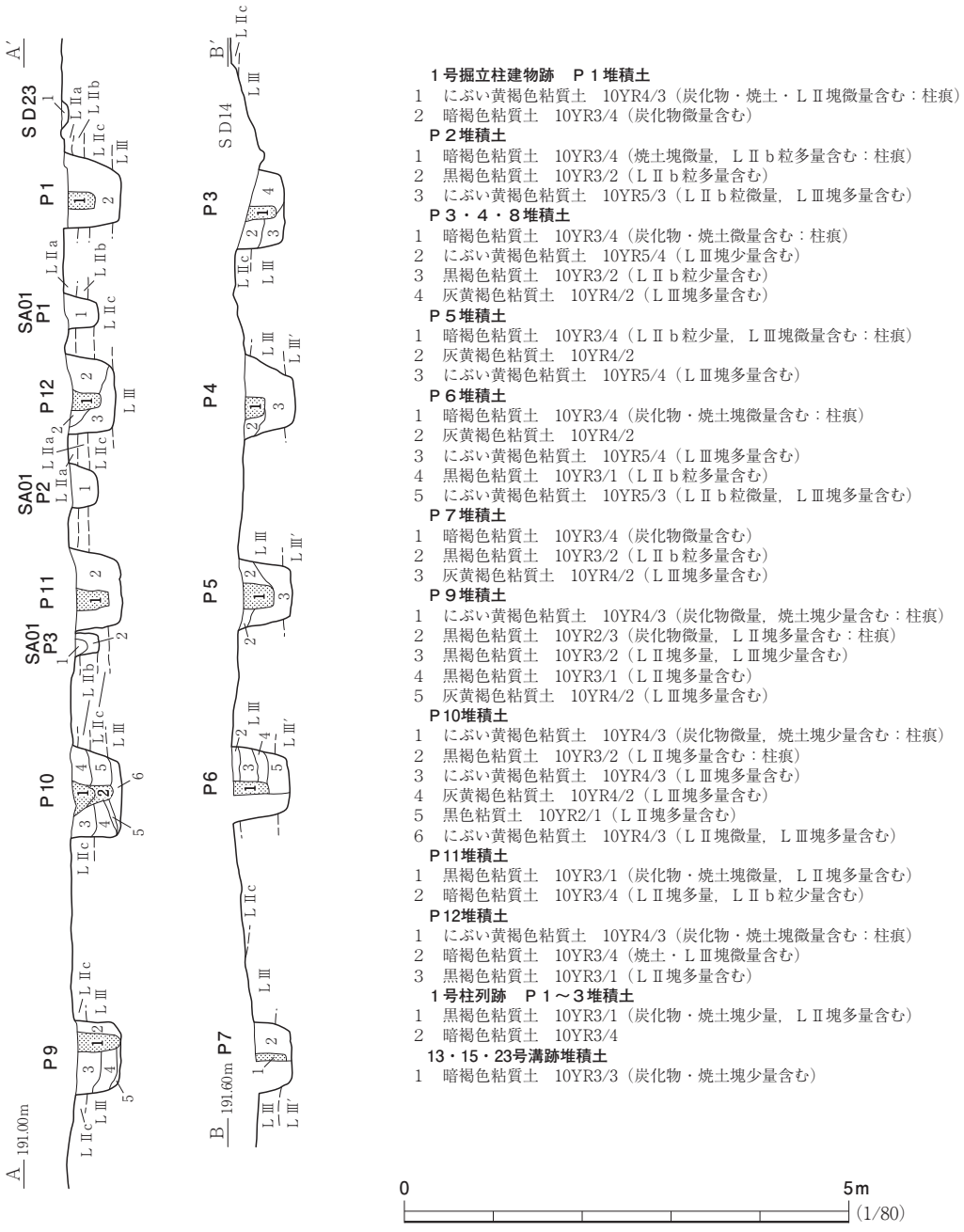


図7　1号掘立柱建物跡，13・15・23号溝跡，1号柱列跡（1）



1号掘立柱建物跡　P１堆積土
1　にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3（炭化物・焼土・ＬⅡ塊微量含む：柱痕）
2　暗褐色粘質土　10YR3/4（炭化物微量含む）

P２堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/4（焼土塊微量，ＬⅡｂ粒多量含む：柱痕）
2　黒褐色粘質土　10YR3/2（ＬⅡｂ粒多量含む）
3　にぶい黄褐色粘質土　10YR5/3（ＬⅡｂ粒微量，ＬⅢ塊多量含む）

P３・４・８堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/4（炭化物・焼土微量含む：柱痕）
2　にぶい黄褐色粘質土　10YR5/4（ＬⅢ塊少量含む）
3　黒褐色粘質土　10YR3/2（ＬⅡｂ粒少量含む）
4　灰黄褐色粘質土　10YR4/2（ＬⅢ塊多量含む）

P５堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/4（ＬⅡｂ粒少量，ＬⅢ塊微量含む：柱痕）
2　灰黄褐色粘質土　10YR4/2
3　にぶい黄褐色粘質土　10YR5/4（ＬⅢ塊多量含む）

P６堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/4（炭化物・焼土塊微量含む：柱痕）
2　灰黄褐色粘質土　10YR4/2
3　にぶい黄褐色粘質土　10YR5/4（ＬⅢ塊多量含む）
4　黒褐色粘質土　10YR3/1（ＬⅡｂ粒多量含む）
5　にぶい黄褐色粘質土　10YR5/3（ＬⅡｂ粒微量，ＬⅢ塊多量含む）

P７堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/4（炭化物微量含む）
2　黒褐色粘質土　10YR3/2（ＬⅡｂ粒多量含む）
3　灰黄褐色粘質土　10YR4/2（ＬⅢ塊多量含む）

P９堆積土
1　にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3（炭化物微量，焼土塊少量含む：柱痕）
2　黒褐色粘質土　10YR2/3（炭化物微量，ＬⅡ塊多量含む：柱痕）
3　黒褐色粘質土　10YR3/2（ＬⅡ塊多量，ＬⅢ塊少量含む）
4　黒褐色粘質土　10YR3/1（ＬⅡ塊多量含む）
5　灰黄褐色粘質土　10YR4/2（ＬⅢ塊多量含む）

P10堆積土
1　にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3（炭化物微量，焼土塊少量含む：柱痕）
2　黒褐色粘質土　10YR3/2（ＬⅡ塊多量含む：柱痕）
3　にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3（ＬⅢ塊多量含む）
4　灰黄褐色粘質土　10YR4/2（ＬⅢ塊多量含む）
5　黒色粘質土　10YR2/1（ＬⅡ塊多量含む）
6　にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3（ＬⅡ塊微量，ＬⅢ塊多量含む）

P11堆積土
1　黒褐色粘質土　10YR3/1（炭化物・焼土塊微量，ＬⅡ塊多量含む）
2　暗褐色粘質土　10YR3/4（ＬⅡ塊多量，ＬⅡｂ粒少量含む）

P12堆積土
1　にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3（炭化物・焼土塊微量含む：柱痕）
2　暗褐色粘質土　10YR3/4（焼土・ＬⅢ塊微量含む）
3　黒褐色粘質土　10YR3/1（ＬⅡ塊多量含む）

1号柱列跡　P１～３堆積土
1　黒褐色粘質土　10YR3/1（炭化物・焼土塊少量，ＬⅡ塊多量含む）
2　暗褐色粘質土　10YR3/4

13・15・23号溝跡堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/3（炭化物・焼土塊少量含む）

図８　１号掘立柱建物跡，23号溝跡，１号柱列跡（２）

Ⅱａ・ｂ層の土を多く含み，暗褐色系の土のみとなっていた。堆積土中からは，平安時代の土師器・須恵器細片の他に，クルミ大から拳大ほどの大きさの焼土塊が多く含まれていた。３条の溝跡については，その配置と深さから，建物に付随する雨落ち溝と考えられる。

１号柱列跡については，規則的な配列が認められた３個の小穴（ＳＡ01Ｐ１～３）について柱列と考えた。小穴の確認面はＬⅡａ上面である。柱列は，南北軸Ｐ１－Ｐ９とその軸線方向を合わせているものの，確認面および土層の観察状況からは，その新旧関係を明らかにできなかった。３個の小穴の平面形状は円形であった。その規模は，Ｐ１－Ｐ３間の長さは約3.8ｍ，小穴の直径は28～44㎝，確認面から深さは28～33㎝を測る。小穴内堆積土から遺物は全く出土していない。

遺　　物（図９・23，写真22）

遺物は，本建物跡の西側にある15号溝跡からのみ出土した。堆積土中からは，平安時代の土師器甕・杯細片26点，須恵器甕・瓶・硯片37片，そしてクルミ大から拳大ほどの大きさの焼土塊が合わせて約4.5kg出土した。15号溝跡の周辺からは，遺物包含層と勘違いするほど，土師器・須恵器の細片が多く出土した。本来は15号溝跡に伴っていた遺物が，調査時に回収されたものと考えられる。ちなみに，本建物跡の西側，主にＦ・Ｇ13グリッドからは平安時代の土師器杯・甕の細片64点，須恵器甕・瓶・杯片24点，そして焼土塊200ｇが出土しており，すべて15号溝跡周辺から回収している。これらのうち，図化可能な７点について図９に示した。

図９－１は，ロクロ成形された土師器杯である。内外面共に摩滅が著しく調整が不明瞭である。内面にはヘラミガキ後黒色処理を施している。同図４は，ロクロ成形された土師器甕の口縁部～胴部上位にかけての破片である。同図２・３・５～７は，大戸地区にある大戸古窯跡群（以下，大戸窯跡）産の須恵器片である。２は，須恵器杯で，底面から口縁部に向かって直線的に開く器形である。３

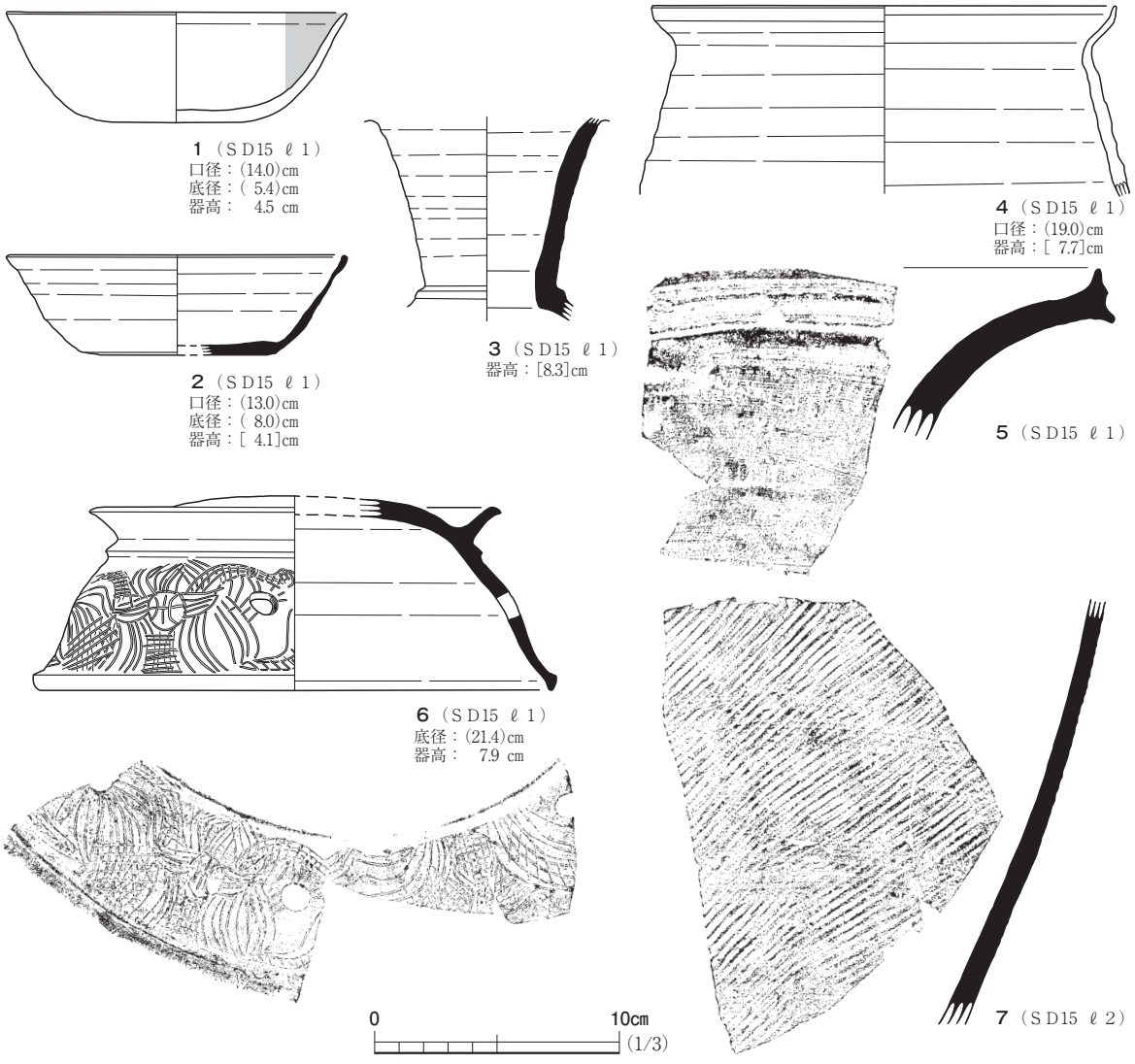


図９　１号掘立柱建物跡（15号溝跡）出土遺物

は，長頸瓶の頸部片で，頸部にリング状の凸帯を貼り付けている。５は大甕の口縁部片で，外面は平行タタキした後ナデ調整されている。７は大甕の胴部片で，外面に平行叩きをした後，横方向に筋状のナデ調整を施している。６は円面硯で，器形は高台埦を逆さにした形状で，硯部外縁には凸帯を貼り付け，擦った墨液をためおく部位(海部)を成形する。脚部には円形の透孔を３～４個穿った後，脚部外面を埋め尽くすように曲線と直線で，花柄のような文様を描いている。細部をみると，脚部端には使用によるこすれた痕跡は無く，上部の凸面(硯面)には墨を擦った黒ずみもなかった。

また図示していないが，大量に出土した焼土塊については，表面・断面を観察してもスサなどの混和材は見られなかった。色調は，表面は土師器などと同じ明黄褐色で，断面中央部には黒く焼けむらが残っている。

ま と め

１号掘立柱建物跡は，東・西・北側に雨落ち溝を伴った２×４間の側柱建物跡である。本建物跡の軸線方向は，北側にある３・６号掘立柱建物跡とほぼ同じである。年代は，15号溝跡から出土した土器の特徴と，本建物跡の柱穴･雨落ち溝が14号溝跡を壊していることなどを考え合わせると，９世紀前半頃と考えられる。

また，同じ雨落ち溝から出土した多量の焼土塊については，次の２つの可能性を考えている。①建物跡に用いられた土壁など建築材として使用されたものが火災などによって火を受け廃棄されたもの，あるいは②北側に隣接した土器焼成坑(ＳＫ05)で生じ，不要となった構築粘土などを，当時まだ埋まり切らなかった雨落ち溝の窪地に捨てた可能性を考えている。いずれが正しいかについては，明確にできなかった。（阿　部）

２号掘立柱建物跡　ＳＢ02（図10，写真８）

本建物跡は，Ａ区南西側のＦ14・15，Ｇ14・15の４グリッドにまたがって位置し，ＬⅡａおよびＬⅡｃ上面で検出した。南２ｍに16号溝跡，北１ｍに１号掘立柱建物跡が存在する。

本建物跡は，東西２間，南北４間，平面形は長方形となる。本建物を構成する柱穴は14個確認し，うち南東隅と南西隅の柱穴は建て直しの重複がみられる。北東隅をＰ１とし，時計回りにＰ14まで呼称した。東側のＰ３とＰ４は，建物の南北軸線からやや東に逸脱するが，それ以外の柱穴はほぼ直線状に並ぶ。その規模は，東西軸のＰ１－Ｐ13とＰ５－Ｐ８は5.0ｍ，南北軸のＰ１－Ｐ５とＰ８－Ｐ13は8.3～8.5ｍを測る。柱間寸法は，東西軸で平均2.1ｍ，南北軸で平均2.6ｍと，後者の柱間寸法がやや長い。四隅を柱穴で囲まれた範囲の面積は約43.2㎡，その南北軸を主軸とした時の方位はＮ３°Ｅとなる。

柱穴の平面形は，ほぼ円形である。柱穴の規模は，直径32～56㎝，確認面からの深さは20～58㎝を測る。柱穴の掘形内堆積土は，ＬⅡａ・ｂ層の土を多く含んでいるため暗褐色系の土色を基調とし，土に締まりがある。柱痕は，Ｐ１～３・９・14で確認でき，その直径は10～20㎝ほどであった。Ｐ１底面付近からは，礎石として用いた扁平な河原石が出土している。遺物は，Ｐ４の

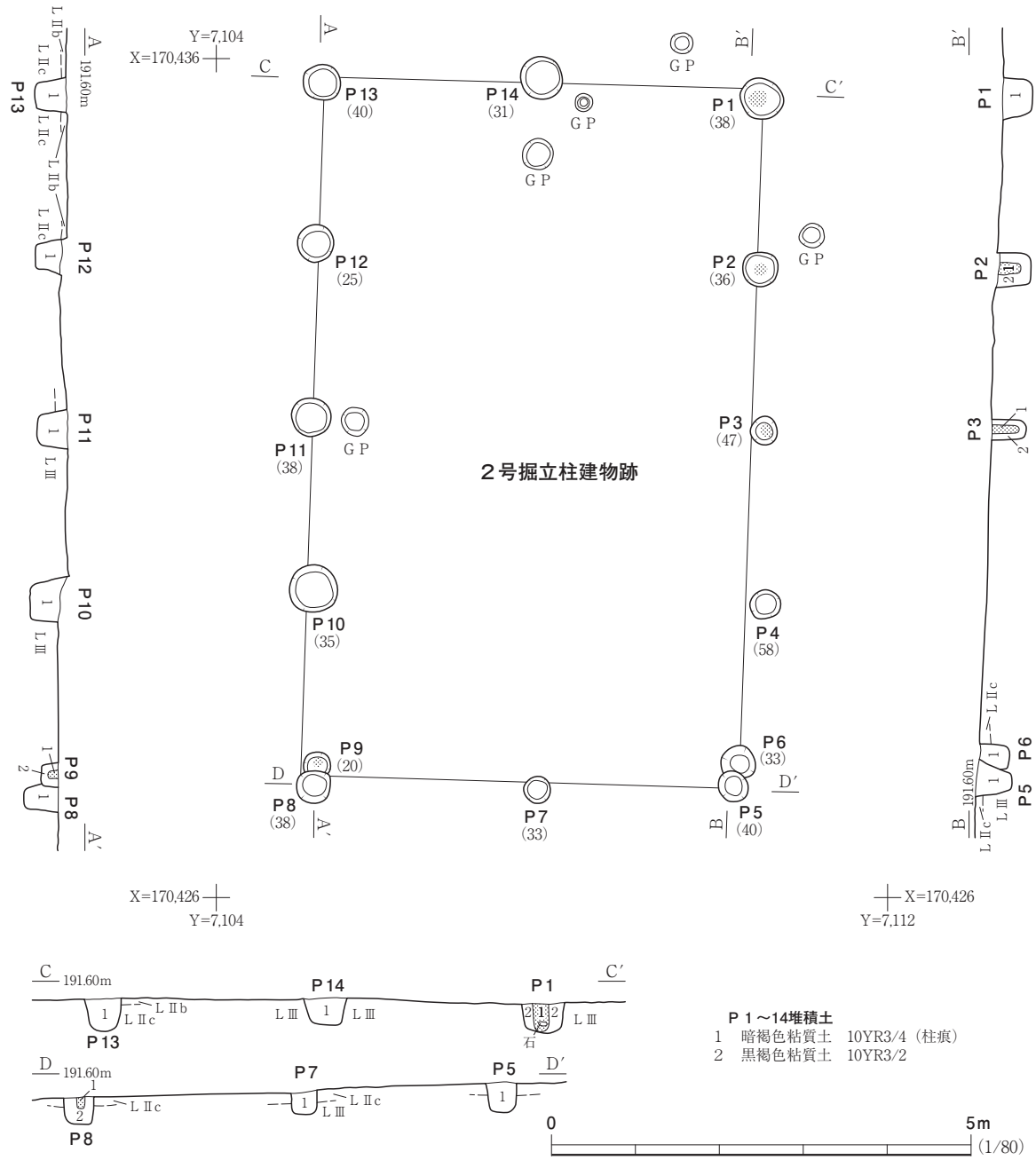


図10　２号掘立柱建物跡

２層から平安時代の土師器甕片が８点出土しているが，細片のため図示できなかった。

本建物跡は，２×４間の側柱建物跡である。本建物跡の軸線方向は，１号掘立柱建物跡とは軸線が明確に異なり，柱穴の規模や構造から判断しても，周辺の１・３・６号掘立柱建物跡とは所属時期が異なると考えている。一方，東側にある７・８号掘立柱建物跡とはほぼ同じ軸線方向である。本建物跡の年代については，出土遺物が少なく明確ではないが，平安時代に属すと考えている。

（菊　田）

３ａ・ｂ号掘立柱建物跡　ＳＢ03ａ・ｂ（図11，写真９）

本建物跡は，Ａ区中央部のＥ・Ｆ12の２グリッドにまたがって位置し，ＬⅡｃおよびＬⅢ上面で検出した。14号溝跡の一部と重複し，本建物跡が新しい。また，西側のＰ10が小穴に壊されていたが，本建物跡のほうが古い。南７ｍに１号掘立柱建物跡，北13ｍに６号掘立柱建物跡と５号土坑が存在する。また，本建物跡は，一度建て替えられており，Ｐ１～12の柱穴については，５個の柱穴（Ｐａ～ｅ）を壊して作られている。ここでは便宜上，前者のＰ１～12を用い新しく建て替えられたものを３ａ号掘立柱建物跡と呼称し，後者を３ｂ号掘立柱建物跡と呼ぶことにする。

３ａ号掘立柱建物跡

新たに建て替えられた３ａ号掘立柱建物跡は，東西２間，南北３間，平面形は長方形となる。規模は，東西軸のＰ１－Ｐ３，Ｐ４－Ｐ10，Ｐ５－Ｐ９，Ｐ６－Ｐ８は4.6ｍ，南北軸のＰ１－Ｐ８，Ｐ２－Ｐ７，Ｐ３－Ｐ６は5.6～5.7ｍを測る。四隅を柱穴で囲まれた範囲の面積は約26.2㎡，その南北軸を主軸とした時の方位はＮ６°Ｗとなる。柱穴の平面形はすべて型くずれした隅丸方形である。柱穴の規模は一辺42～89㎝，確認面からの深さは20～62㎝を測る。柱穴の掘形内堆積土は，ＬⅡａ・ｂ層の土を多く含んでいるため暗褐色系の土色を基調とし，土に締まりがある。柱痕は，すべての柱穴で確認でき，その直径は12～23㎝ほどであった。ただし，気になる点は，中央にあるＰ11が確認面からの深さが浅く，しかも東西の軸線からずれている。

遺物は，南西側にあるＰ９の２層から図11－１に図示した平安時代の須恵器甕片が１点出土した。

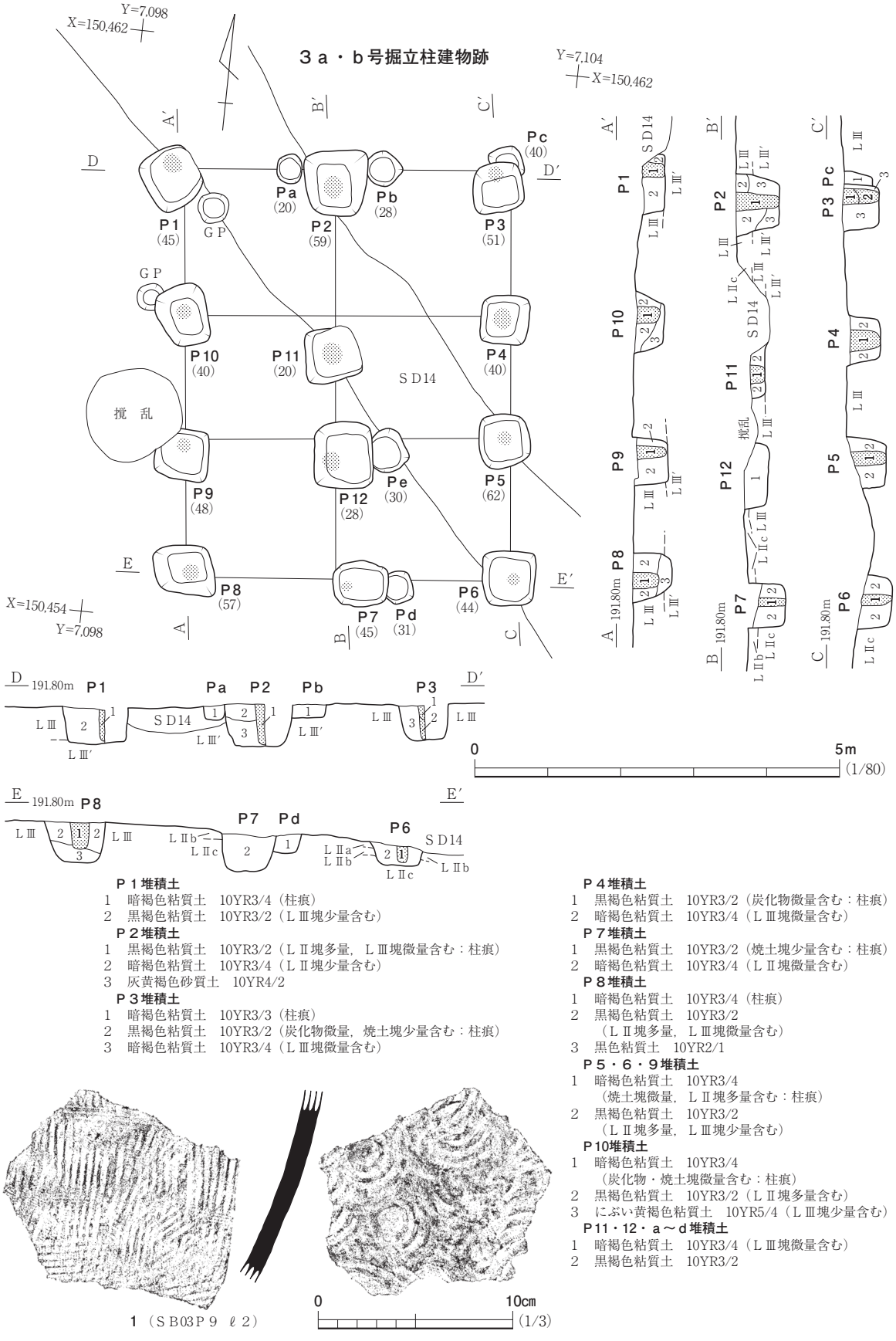
３ｂ号掘立柱建物跡

先行して立てられていた３ｂ号掘立柱建物跡については，規則的な配列が認められたＰａ～ｅの５個の柱穴を建物跡と判断した。Ｐ３・７・12との重複を土層の観察から判断すると，３ｂ号掘立柱建物跡のほうが古い。柱穴の軸線方向，柱間距離そして平面形は，３ａ号掘立柱建物跡とほぼ同一であったと思われる。確認できた柱間距離は，南北軸のＰｂ－Ｐｄは5.6ｍ，残存した東西軸のＰａ－Ｐｃは3.0ｍを測る。Ｐａは南北軸線上で柱間距離がずれていることから，３ｂ号掘立柱建物跡に伴わない可能性も考えられる。掘形内堆積土中から遺物は出土していない。

本建物跡は，一度建て替えられた２×３間の総柱建物跡である。本建物跡の軸線方向は，南側にある１号掘立柱建物跡と，北にある６号掘立柱建物跡とほぼ同じであった。年代については，出土遺物が少なく明確ではないが，軸線方向が同一であった１・６号掘立柱建物跡と同一時期の９世紀前半頃と考えている。（阿　部）

４号掘立柱建物跡　ＳＢ04（図12，写真10）

本建物跡は，Ｂ区中央部のＫ21・22の２グリッドにまたがって位置し，ＬⅢ上面で確認した。８号溝跡の一部と重複し，本建物跡のほうが新しい。遺構周辺には柱痕を伴うグリッドピットが多



P1堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/4（柱痕）
2　黒褐色粘質土　10YR3/2（LⅢ塊少量含む）

P2堆積土
1　黒褐色粘質土　10YR3/2（LⅡ塊多量，LⅢ塊微量含む：柱痕）
2　暗褐色粘質土　10YR3/4（LⅡ塊少量含む）
3　灰黄褐色砂質土　10YR4/2

P3堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/3（柱痕）
2　黒褐色粘質土　10YR3/2（炭化物微量，焼土塊少量含む：柱痕）
3　暗褐色粘質土　10YR3/4（LⅢ塊微量含む）

P4堆積土
1　黒褐色粘質土　10YR3/2（炭化物微量含む：柱痕）
2　暗褐色粘質土　10YR3/4（LⅢ塊微量含む）

P7堆積土
1　黒褐色粘質土　10YR3/2（焼土塊少量含む：柱痕）
2　暗褐色粘質土　10YR3/4（LⅡ塊微量含む）

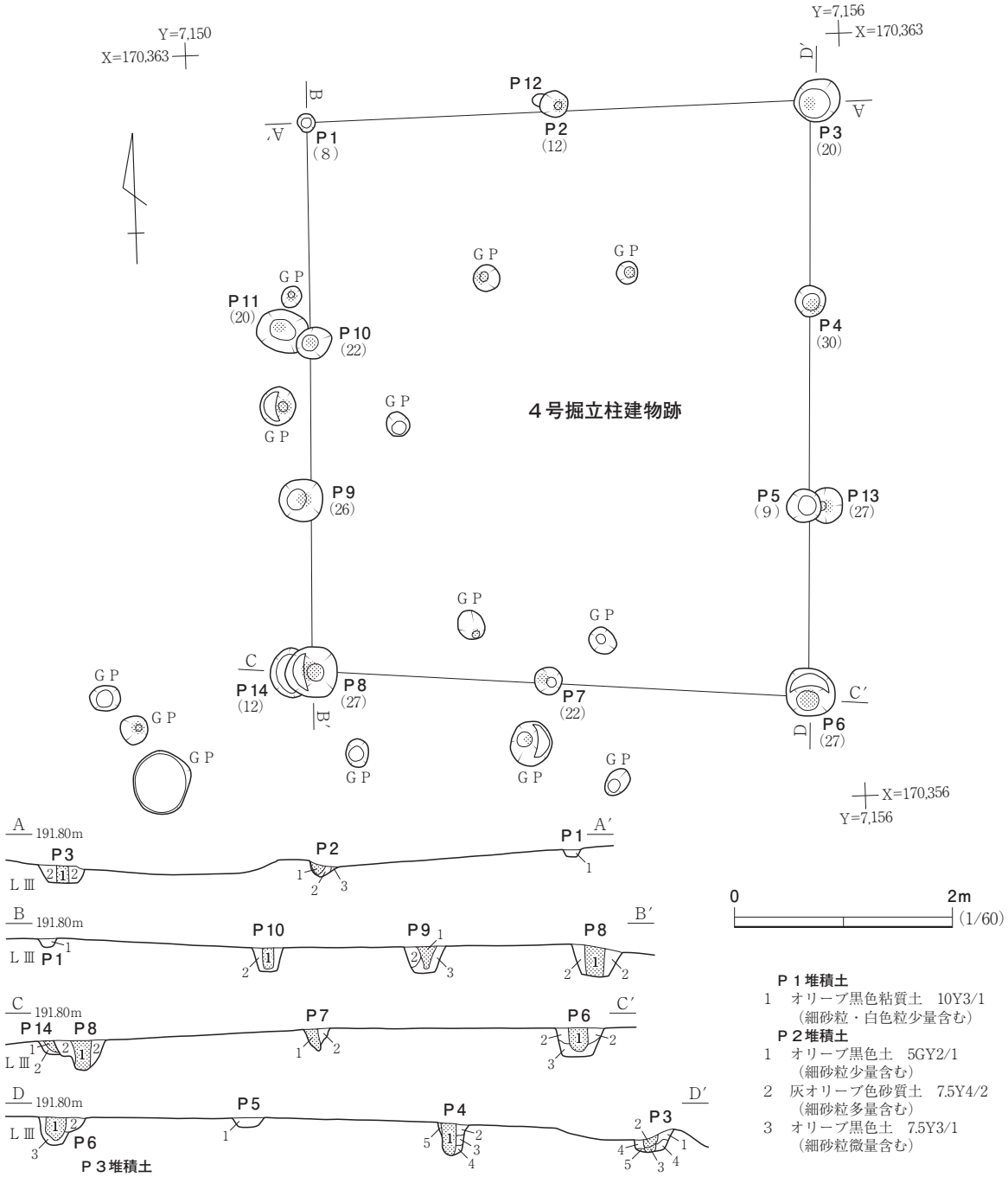
P8堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/4（柱痕）
2　黒褐色粘質土　10YR3/2
（LⅡ塊多量，LⅢ塊微量含む）
3　黒色粘質土　10YR2/1

P5・6・9堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/4
（焼土塊微量，LⅡ塊多量含む：柱痕）
2　黒褐色粘質土　10YR3/2
（LⅡ塊多量，LⅢ塊少量含む）

P10堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/4
（炭化物・焼土塊微量含む：柱痕）
2　黒褐色粘質土　10YR3/2（LⅡ塊多量含む）
3　にぶい黄褐色粘質土　10YR5/4（LⅢ塊少量含む）

P11・12・a～d堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/4（LⅢ塊微量含む）
2　黒褐色粘質土　10YR3/2

図11　3a・b号掘立柱建物跡・出土遺物



P１堆積土
1　オリーブ黒色粘質土　10Y3/1（細砂粒・白色粒少量含む）

P２堆積土
1　オリーブ黒色土　5GY2/1（細砂粒少量含む）
2　灰オリーブ色砂質土　7.5Y4/2（細砂粒多量含む）
3　オリーブ黒色土　7.5Y3/1（細砂粒微量含む）

P３堆積土
1　オリーブ黒色粘質土　5GY2/1（細砂粒・ＬⅢ塊少量含む）
2　灰色粘質土　7.5Y5/1　（細砂粒・ＬⅢ塊少量含む）
3　オリーブ黒色粘質土　5GY2/1（細砂粒少量，ＬⅢ塊微量含む）
4　灰色粘質土　7.5Y4/1（細砂粒微量，ＬⅢ塊多量含む）
5　褐色砂質土　10YR4/6（ＬⅢ塊多量含む）

P４堆積土
1　オリーブ黒色粘質土　10Y3/1（細砂粒・白色粒少量含む）
2　黒色土　10Y2/1（細砂粒・白色粒微量含む）
3　黒色土　10Y2/1（細砂粒・白色粒微量，灰色土塊少量含む）
4　灰色砂質土　7.5Y5/1（細砂粒多量含む）
5　褐色砂質土　10YR4/6（ＬⅢ塊多量含む）

P５堆積土
1　オリーブ黒色粘質土　7.5Y3/1（細砂粒少量，ＬⅢ塊多量含む）

P６堆積土
1　暗オリーブ灰色粘質土　5GY3/1（細砂粒微量，ＬⅢ塊多量含む）
2　灰色砂質土　7.5Y4/1（細砂粒多量含む）
3　オリーブ黒色砂質土　10Y3/2（細砂粒多量含む）

P７堆積土
1　オリーブ黒色粘質土　7.5Y3/1（細砂粒・白色粒少量含む）
2　黒色土　10Y2/1（細砂粒微量，ＬⅢ塊多量含む）

P８堆積土
1　黒褐色粘質土　10YR3/1（細砂粒微量含む）
2　黒褐色土　10YR3/2（細砂粒少量，ＬⅢ塊微量含む）

P９堆積土
1　オリーブ黒色土　5Y2/2（細砂粒・ＬⅢ塊微量含む）
2　オリーブ黒色粘質土　10Y3/1（細砂粒少量，ＬⅢ塊微量含む）
3　暗オリーブ灰色土　5GY3/1（細砂粒微量含む）

P10堆積土
1　オリーブ黒色土　10Y3/2（細砂粒微量，ＬⅢ塊多量含む）
2　灰色砂質土　10Y4/1（細砂粒多量含む）

P14堆積土
1　灰色砂質土　7.5Y4/1（細砂粒多量含む）
2　黒褐色土　7.5YR3/2（細砂粒少量含む）

図12　４号掘立柱建物跡

数存在し，それらのうち規則的に配列した14個の柱穴を建物跡と考えた。北西隅をＰ１とし，時計回りにＰ10まで呼称し，さらに重複した柱穴にそれぞれＰ11～14と呼称した。本建物跡は，一度建て替えられたことを確認しており，南西隅のＰ８はＰ14を壊して作られている。

本建物跡は，東西２間，南北３間，平面形は長方形となる。柱穴で囲まれた範囲の面積は約24.1㎡，その南北軸を主軸とした時の方位はＮ２°Ｅとなる。その規模は，東西軸はＰ１－Ｐ３とＰ６－Ｐ８は4.5～4.6ｍ，南北軸ではＰ１－Ｐ８で5.0ｍ，Ｐ３－Ｐ６で5.6ｍと，その差が大きい。柱間寸法は，東西軸で2.1～2.5ｍ，南北軸で1.4～2.0ｍ，それらの間隔にもややばらつきがある。

柱穴の平面形はすべて円形である。南東・南西隅にあたるＰ６・Ｐ８はやや大型で直径45㎝である。それ以外は，概ね直径30～40㎝，北西隅のＰ１のみ15㎝と小さい。確認面からの深さは，８～30㎝を測る。柱痕は，Ｐ１・Ｐ５以外で確認し，その直径は10～15㎝である。遺物は，掘形内堆積土から全く出土していない。

本建物跡は，２×３間の側柱建物跡である。年代については，出土遺物が無く明確にできないが，Ａ区にある２号掘立柱建物跡と主軸方向が概ね同一であることと，東西・南北の軸線方向が同じの１・５・７・21号溝跡のことも考え合わせると，９世紀前半頃に属すと考えている。　（阿　部）

５号掘立柱建物跡　ＳＢ05（図13，写真11）

本建物跡は，Ａ区中央部東側のＨ12グリッドに位置し，ＬⅡａおよびⅢ上面で検出した。他遺構との重複はなく，また周辺10ｍ以内に小穴などの遺構も存在しない。北15ｍに18号溝跡，南15ｍに７号掘立柱建物跡がある。

本建物跡は，東西２間，南北２間，平面形は長方形となる。柱穴は８個確認し，北西隅をＰ１として，時計回りにＰ８まで呼称した。東西軸のＰ１－Ｐ３とＰ５－Ｐ７は3.6～3.7ｍ，柱間間隔は平均1.8ｍを測る。南北軸のＰ１－Ｐ７とＰ３－Ｐ５は4.8ｍ，柱間間隔は平均2.4ｍを測る。四隅を柱穴で囲まれた範囲の面積は約17.8㎡，その南北軸を主軸とした時の方位はＮ11°Ｅとなる。

柱穴の平面形はすべて円形である。柱穴の規模は直径30～44㎝，確認面からの深さは28～45㎝を測る。柱穴の掘形内堆積土は，ＬⅡａ・ｂ層の土を多く含んでいるためか暗褐色系の土色を基調としている。柱痕は，Ｐ４・６を除いた柱穴から確認され，その規模は直径10～25㎝である。遺物は，掘形内堆積土から全く出土していない。

本建物跡は，平面形が長方形となる２×２間の側柱建物跡である。機能時期については，出土遺物がなく明確ではなく，さらに西・南・北側にある建物跡の軸線方向とも異なり周囲の建物跡との関連性に疑問も残るが，平安時代に属すと考えている。　（菊　田）

６号掘立柱建物跡　ＳＢ06（図14，写真12）

本建物跡は，Ａ区北側のＥ・Ｆ10グリッドにまたがって位置し，ＬⅢ上面で検出した。南２ｍには５号土坑が隣接し，さらに南13ｍに３号掘立柱建物跡が位置している。

本建物跡は，東西２間，南北１間，平面形は正方形となる。東西･南北軸はいずれも4.0ｍを測る。四隅を柱穴で囲まれた範囲の面積は16㎡，その南北軸を主軸とした時の方位はＮ４°Ｗとなる。柱穴の平面形は，すべて型くずれした隅丸方形である。柱穴の規模は一辺55～65㎝，確認面からの深さはＰ４が最も浅く20㎝，その他は38～48㎝を測る。柱穴の掘形内堆積土は，ＬⅢ層の土を多く含んだ土と，ＬⅡａ・ｂ層の土を含んだ暗褐色系の土の互層となっていた。柱痕は，Ｐ４を除いた柱穴で確認でき，その直径は15～20㎝ほどであった。東西軸Ｐ３－Ｐ５だけ２間となっているが，削平によってその他の軸線上にあった中間の柱穴は壊されてしまったと考えられる。本来は，東西南北とも２×２間であったとも考えられる。遺物は，掘形内堆積土中から全く出土していない。

本建物跡は，２×２間の側柱建物跡であったと考えている。本建物跡の軸線方向は，南側にある１・３号掘立柱建物跡とほぼ同じである。本建物跡の年代については，出土遺物が無く明確ではないが，１・３号掘立柱建物跡と同一時期の９世紀前半頃と考えている。（阿　部）

７号掘立柱建物跡　ＳＢ07（図15，写真13）

本建物跡は，Ａ区南側のＨ14グリッドに位置し，ＬⅢ上面で検出した。14号溝跡と重複し，本建物跡が新しい。西側９ｍに１・２号掘立柱建物跡，東側11ｍには８ａ・ｂ号掘立柱建物跡がある。

本建物跡は，東西２間，南北５間，平面形は長方形となり，母屋が１間×３間分，加えて南北両側には１間×２間分の間仕切りがそれぞれ付属する。本建物跡は一度建て替えられたことを確認しており，南西隅のＰ９はＰ８を壊して作られている。その規模は，東西軸のＰ４－Ｐ15，Ｐ７－Ｐ12，Ｐ１－Ｐ３，Ｐ８－Ｐ11は3.5～3.7ｍ，南北軸のＰ１－Ｐ11，Ｐ３－Ｐ８は8.6～8.7ｍを測る。四隅を柱穴で囲まれた範囲の面積は35.7㎡，その南北軸を主軸とした時の方位はＮ４°Ｅとなる。柱穴の平面形は２種類ある。Ｐ１～３･８～11は円形，それ以外は型崩れした隅丸方形である。柱穴の規模は，前者は直径30～45㎝，後者は一辺50～82㎝を測る。確認面からの深さは，平面形が円形ものはＰ２が最も浅く４㎝，その他は12～20㎝を測る。平面形が隅丸方形の深さは，Ｐ14が最も浅く８㎝，その他は24～46㎝を測る。柱穴の掘形内堆積土は，ＬⅡａ・ｂ層の土を含んだ暗褐色を基調としている。柱痕は確認できず，遺物も掘形内堆積土中から全く出土していない。

本建物跡は，２×５間の側柱建物跡で，その南北両側には１×２間分の間仕切りが付属する。本建物跡の軸線方向は，西側にある２号掘立柱建物跡，東側の８ａ・ｂ号掘立柱建物跡と概ね同じである。本建物跡の年代については，出土遺物が無く明確ではないが，２・８号掘立柱建物跡と同一時期の平安時代に属すると考えている。（阿　部）

８ａ・ｂ号掘立柱建物跡　ＳＢ08ａ・ｂ（図16・17，写真14）

本建物跡は，Ａ区南東側のＩ14・15，Ｊ14・15グリッドにまたがって位置し，ＬⅢ上面で検出した。西側５ｍには14号溝跡，さらに11ｍに７号掘立柱建物跡がある。本建物跡の東側については，調査区の外側へと延びているため，想定された柱穴の続きを追い求め，周囲の田畑や水路に影響の

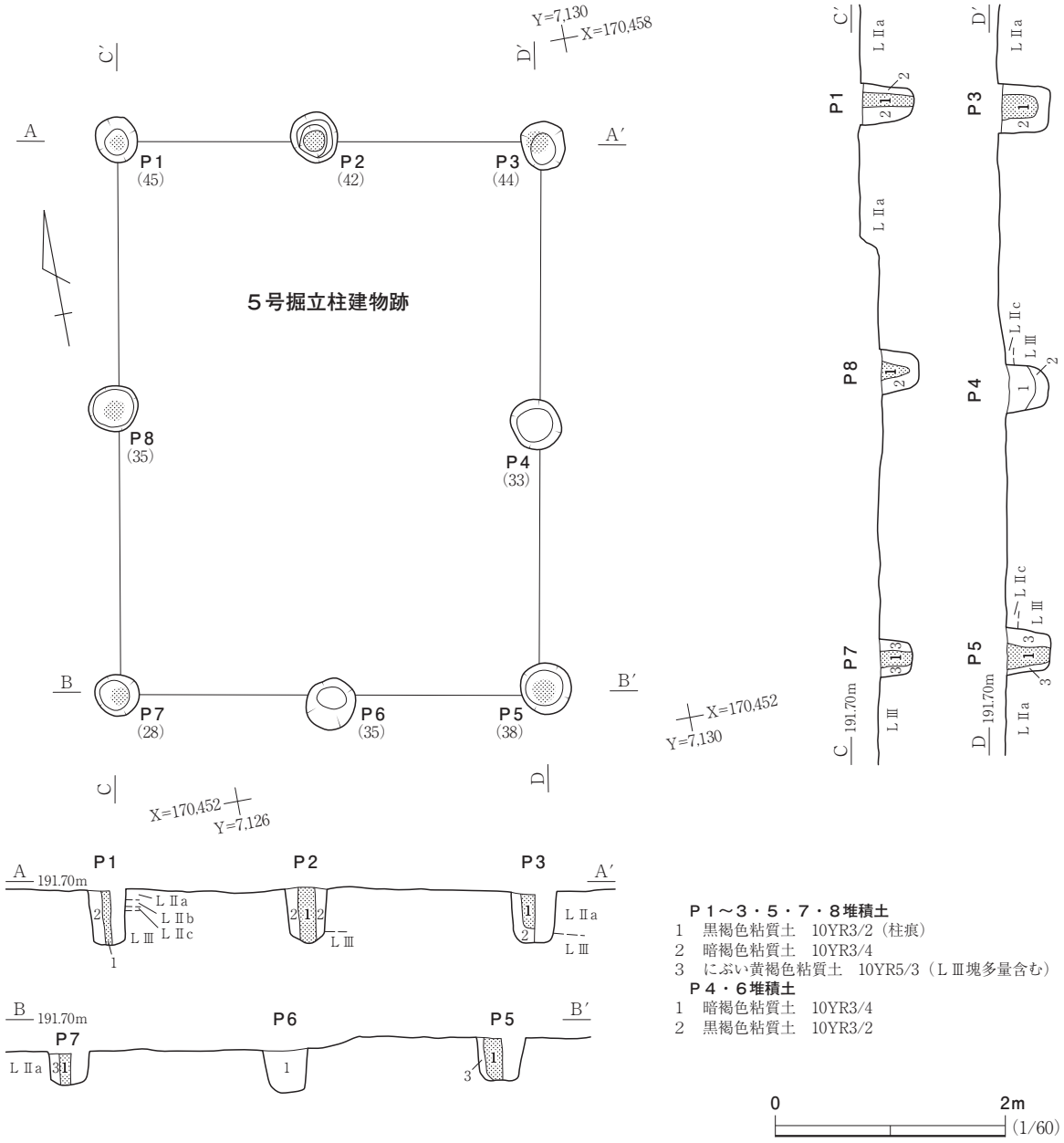


図13　５号掘立柱建物跡

出ない範囲で拡張し調査した。

本建物跡については，東西２間×南北２間の総柱建物跡の外側を，東西５間×南北４間の側柱建物跡が囲むような配置となっている。ここでは，便宜上，前者の総柱建物跡については８ａ号掘立柱建物跡と呼称し，後者については８ｂ号掘立柱建物跡と呼ぶことにする。

しかし，南北軸を主軸として見た時の方向と，両者間の空間をよく見ると，軸線方向には僅かなズレがあり，さらに両者間の東西南北で距離がそれぞれ異なっていることが分かる。このことから，両者の新旧関係は分からないが，建て替えが行われた結果と考えている。

８ａ号掘立柱建物跡

８ａ号掘立柱建物跡は，東西２間，南北２間，平面形は長方形となる。その規模は，東西軸のＰ

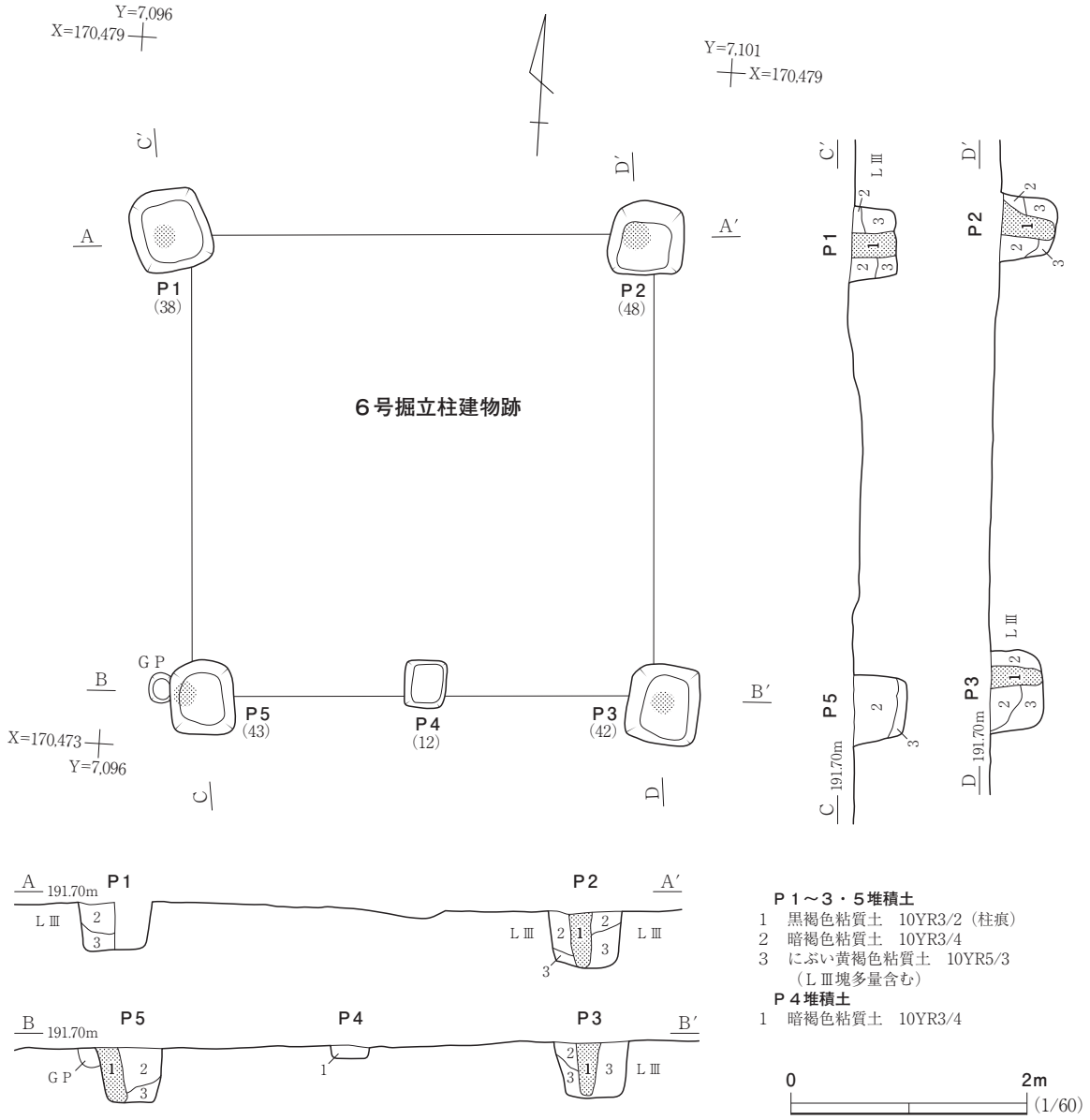


図14　６号掘立柱建物跡

３－Ｐ14，Ｐ８－Ｐ12，Ｐ６－Ｐ13は3.5～3.7ｍ，南北軸のＰ12－Ｐ14，Ｐ２－Ｐ10，Ｐ３－Ｐ８はいずれも4.3ｍを測る。柱間寸法は，東西軸で1.7～2.0ｍ，南北軸で2.0～2.3ｍと，後者の間隔のほうが僅かに広い。四隅を柱穴で囲まれた範囲の面積は約15.9㎡，その南北軸を主軸とした時の方位はＮ４°Ｗとなる。

本建物跡では，一度の建て替えを行ったものと考える。図16に示した８ａ号掘立柱建物跡の平面形は，古い段階の柱穴を線引きしている。西側中央の柱穴Ｐ５がＰ６を，南側Ｐ９がＰ10を，南東隅のＰ11がＰ12を壊して掘っている。以上のことから，８ａ号掘立柱建物跡の建て替え後の柱穴配置はＰ１－Ｐ２－Ｐ３－Ｐ５－Ｐ７－Ｐ９－Ｐ11－Ｐ13－Ｐ１となる。建て替え後の平面形は，図16に線を引いた総柱建物跡より一回り小さい長方形（面積約12.9㎡）であったものと考えている。

８ａ号掘立柱建物跡の柱穴の平面形は，楕円形のＰ８・12以外は円形である。その規模は直径

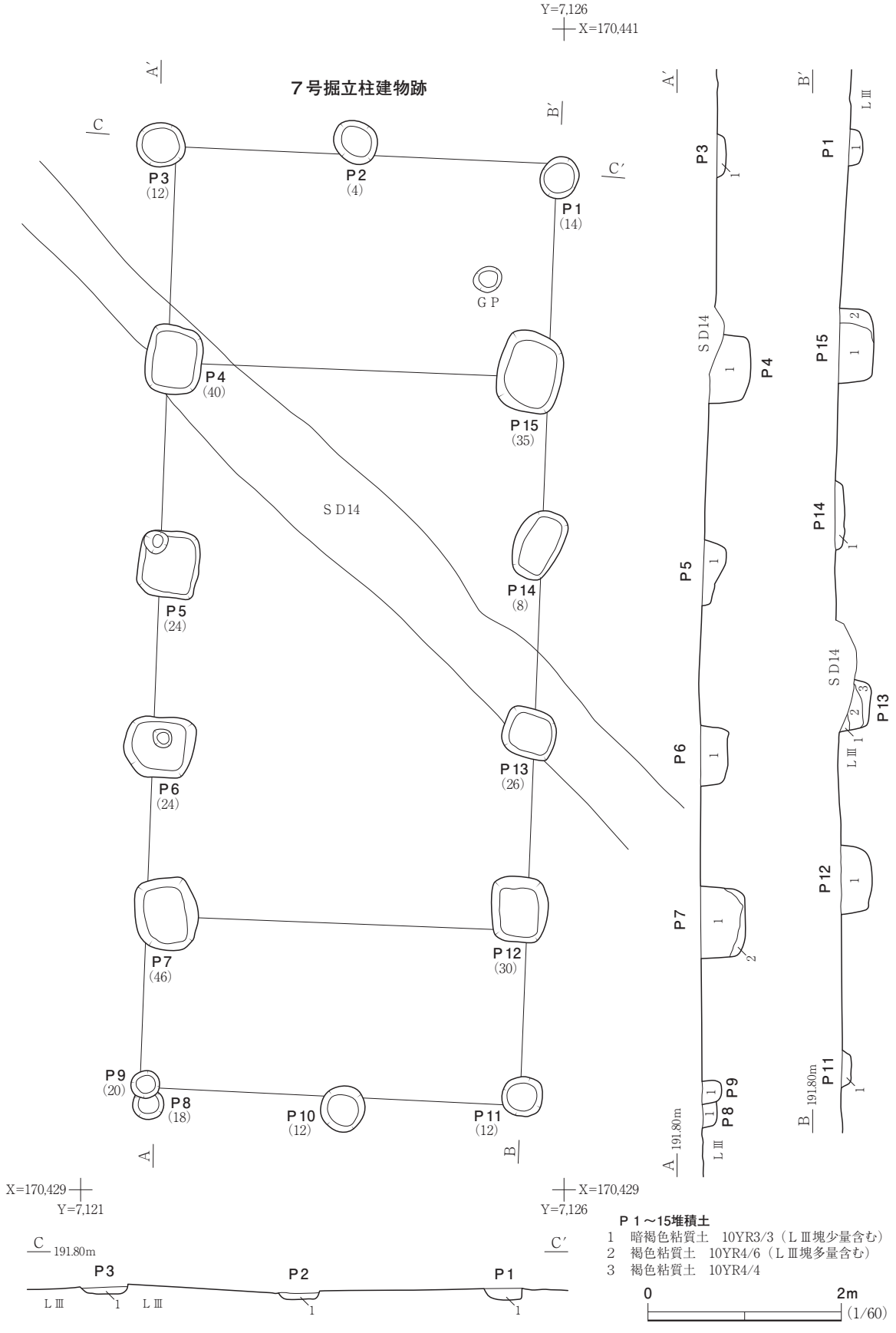


図15　7号掘立柱建物跡

図16　８ａ・ｂ号掘立柱建物跡（１）

32～40㎝，確認面からの深さは15～32㎝を測る。柱穴の掘形内堆積土は，ＬⅡａ・ｂ層の土を多く含み暗褐色系の土色を基調とし，締まりがある。柱痕は，Ｐ３・４・13・14で確認でき，その直径は12～15㎝ほどであった。また，西側のＰ５・６・７底面付近からは，礎石として用いた扁平な河原石がそれぞれ出土している。遺物は，柱穴の掘形内堆積土から礎石以外出土していない。

ちなみに，Ｐ12の西側にある重複したＰ16とＰ17については，Ｐ16のほうが新しく，東西の同一軸線上にあり，柱間寸法も２ｍ前後と同じであった。

８ｂ号掘立柱建物跡

８ａ号掘立柱建物跡の外周を囲む８ｂ号掘立柱建物跡については，東側が調査区の外へ延びて

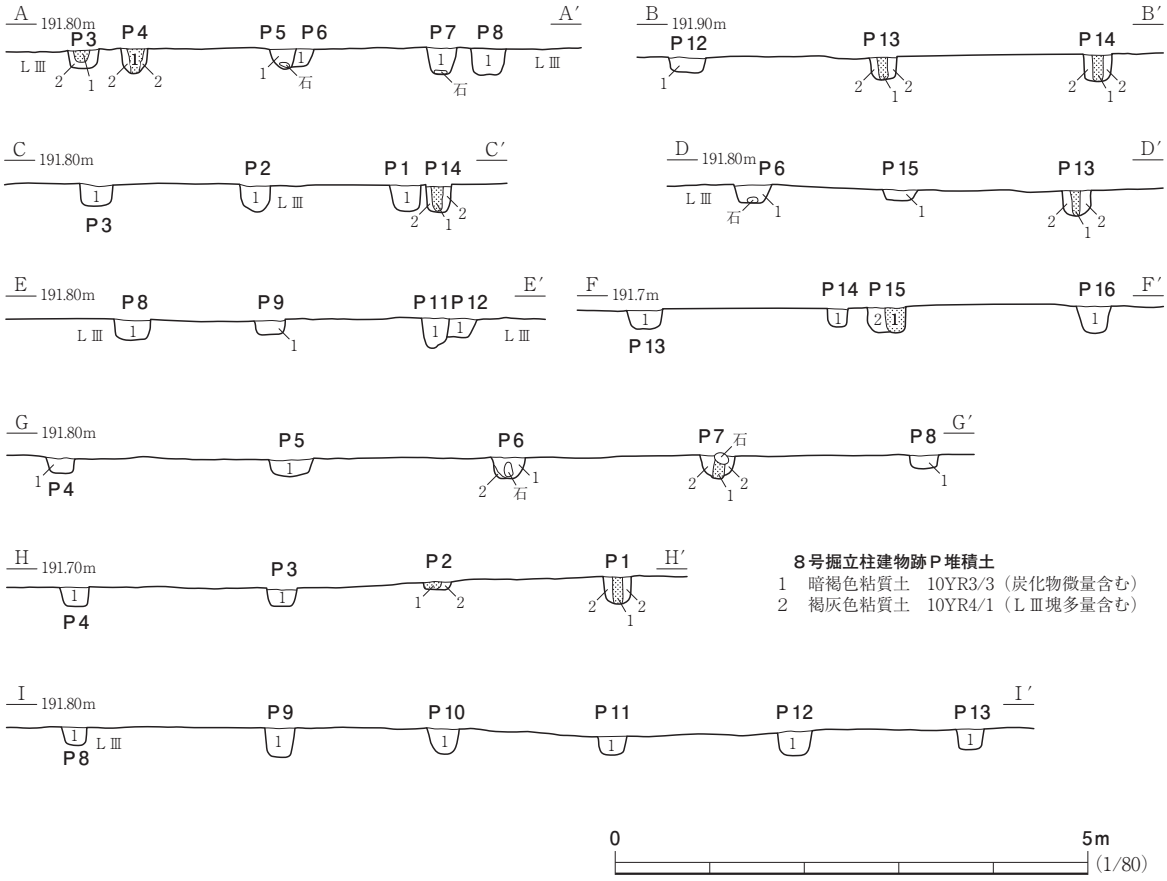


図17　８ａ・ｂ号掘立柱建物跡（２）

いってしまうためその全体像は不明である。確認できた本建物跡は，東西５間，南北４間の側柱建物跡で，平面形は長方形となる。その規模は，東西軸のＰ８－Ｐ13は9.7ｍ，柱間寸法は1.8～2.2ｍを測る。一方，南北軸のＰ４－Ｐ８は7.1ｍ，柱間寸法は2.2～2.5ｍを測る。柱間寸法をみると，８ａ号掘立柱建物跡と同様，南北軸のほうが僅かに広い特徴が共通している。四隅を柱穴で囲まれた範囲の面積は約68.9㎡，その南北軸を主軸とした時の方位はＮ５°Ｅとなる。すべての掘形内堆積土中から遺物は出土していない。

ま と め

８ａ号掘立柱建物跡については，２×２間の総柱建物跡である。少なくとも一度の建て替えを行っている。また，南東側にあったＰ16・Ｐ17の２個の柱穴の存在から以下の２つの解釈ができると考えている。①Ｐ16（Ｐ17）の柱穴は，２間×２間の総柱建物跡に付属した施設の一部として機能した。もう一つの考えとして，②北東側に削平で失われた２個の柱穴が存在し，東に１間×２間分広くなり本来は東西３間×南北２間の総柱建物跡であった可能性が指摘できる。しかしここでは，調査で確認できたものを優先し，８ａ号掘立柱建物跡については２×２間であったと考えたい。８ｂ号掘立柱建物跡については，４×５間の側柱建物跡と考えている。８ａ号掘立柱建物跡が前述したように２×２間であったとすると，外側の８ｂ号掘立柱建物跡との間に空いた東西の空間が異なりすぎ，８ａ号掘立柱建物跡を囲む塀などの機能をしたと考えるには，無理がある。このことから，

８ａ・ｂ号掘立柱建物跡は，その新旧関係は不明だが，８ａ号掘立柱建物跡から８ｂ号掘立柱建物跡へ，または８ｂ号掘立柱建物跡から８ａ号掘立柱建物跡へと建て替えられた可能性が高い。

２棟の建物跡の軸線方向は，西側にある２・７号掘立柱建物跡と概ね同じである。本建物跡の年代については，出土遺物が少なく明確ではないが，２・７号掘立柱建物跡と同一時期の平安時代に属すと考えている。（阿　部）

第３節　溝　跡

西坂才遺跡の１次調査では，合計23条の溝跡を確認した。これらのうち，Ａ区にある13・15・23号溝跡については，１号掘立柱建物跡に付属した雨落ち溝であることが分かり，第２節中で報告していることから，本節中での説明は割愛した。残りの20条については，年代によって２つに大別できる。①古代に属する８条の溝跡（ＳＤ01・05・06・14・16～18・21），そして②近世以降の排水溝と考えている12条の溝跡（ＳＤ02～04・07～12・19・20・22）に分けられる。以下，類別に記述し，必要に応じて遺構番号別に説明を加える。

古代の溝跡（図２～５・18～24，写真１・４・５・16～18）

奈良・平安時代に属すと考えているのは，１・５・６・14・16～18・21号溝跡の８条である。これらのうち溝跡同士の新旧関係が分かっているものは，Ｂ区にある次の溝跡である。古：１号溝跡＞新：17号溝跡，古：14号溝跡＞新：21号溝跡，古：６号溝跡＞新：17号溝跡の４条であった。

また，これらの溝跡の延伸方向を次に整理する。６・14・16・18号溝跡は，概ね平行関係にある。６号溝跡と16号溝跡はＢ区南東で交差する可能性がある。次に，真北方向に延びる溝跡と，それに直行する溝跡は，17・21号溝跡が真北方向に，これと直行する溝跡は１・５・17号溝跡である。

以下に，遺物の出土した溝跡について個別に説明した後，奈良・平安時代の溝跡について整理する。遺物については，５・６・14・16～18号溝跡から出土し，図示可能であった遺物について報告する。

５号溝跡（図21・22，写真16）

本溝跡は，Ｂ区南側のＪ・Ｋ23の２グリッドにまたがり，ＬⅢ上面で確認した。その延伸方向はＮ約90°Ｅで，その東側には方向を概ね揃えた１・17号溝跡が位置する。その規模は，全長約8.5ｍ，溝幅は約50㎝，深さは９㎝と非常に浅い。その底面は平坦で，周壁は底面から急な角度で立ち上がり，断面形状は箱形をなす。溝跡内堆積土は黒褐色のＬⅡを基調とした粘質土である。堆積状況は，自然堆積で，溝内に水が流れたような堆積状況は認められない。本溝跡の東側から平安時代の須恵器片が散在し，どれも完全な形まで復元できるものはなかった。

本溝跡の出土遺物は，図22－１～８に図示した。本溝跡は，確認面から浅かったにも関わらず，須恵器長頸瓶，大・中型甕片が30点出土している。このうち，図22－３・７以外はすべて大戸窯

跡産である。同図１・４・５は長頸瓶の破片である。１は長頸瓶の口縁部から頸部の破片で，頸に低いリング状の突帯が巡る。４・５は長頸瓶の底部片で，台形状の高台を貼り付けている。同図２は内外面ナデ調整を施した甕口縁部片である。同図６は大型甕の胴部片で，外面に平行タタキ具を施した後，横方向に沈線状のナデを施し，内面には同心円文の当て具痕が観察できる。同図８は小型甕の胴部片で，外面に平行タタキ具痕を施した後，ナデ調整を施す。同図３・７の大甕については，器面の色調が光沢を帯びた黒褐色で，会津美里町（旧新鶴村）大久保窯跡産（以下，大久保窯跡産）と考えている。３の推定口径36㎝，口縁部外面には波状文と横線文の組合せを三段構成で施文している。７の胴部外面には平行タタキ具の痕跡が残る。

本溝跡の出土遺物をみると８世紀後葉～９世紀前半頃までの土器が混在する。このことから，本溝跡の機能時期については，東側にある１・17号溝跡と延伸方向が同一であることを考え合わせると，９世紀前半頃まで開口していたと考えている。

６号溝跡（図４・５・20・22，写真１・５・16）

本溝跡は，Ｂ区の北西から南東方向に延び，Ｂ区を南北に分断している。その延伸方向はＮ約55° Ｗであった。本溝跡はＬⅢ上面で確認できた。その中央部では近現代の複数溝跡と，南東側で17号溝跡に壊され，本溝跡のほうが古い。その規模は，全長約68.5ｍ，溝幅は最大約170㎝，深さは60㎝である。断面形状は幅の広い「Ｖ」字形で，周壁は底面から緩やかな角度で立ち上がる。溝跡内堆積土は，５層に分かれ，黒褐色のＬⅡａを基調とした粘質土で，特に上位の１・２層は非常に締まりがあり，底面近くには黒色の砂が堆積していた。堆積状況から自然堆積と考えており，底面付近に砂の堆積があったことから，溝内に水が流れていたようである。

６号溝跡の出土遺物は，図22－９・10・12に図示した。本溝跡堆積土の１および５層から，古墳時代または平安時代の土師器甕・高杯などの小破片14点が出土している。９は古墳時代の土師器甕の口縁部片である。10は杯部と脚部を欠損した古墳時代後期後半の土師器高杯片と思われ，杯部と思われる内面には密にヘラミガキを，脚部外面にはヘラケズリ調整を施す。12は器面の摩滅が著しい平安時代の土師器甕または鉢の底部片である。

６号溝跡は，出土遺物をみると古墳時代後期後半頃から平安時代の土師器片が混在していた。堆積土の土質の特徴と断面形状が14号溝跡と似て，本溝跡と14・16・18号溝跡の延伸方向は概ね平行であった。機能時期については，本遺構がＢ区南東側で17号溝跡に壊されていたことも考え合わせると，８世紀後葉頃～９世紀初め頃まで開口し，その後機能を失い埋没したと考えている。

14号溝跡（図２・３・５・18・20・24，写真１・３～５・17・22）

本溝跡は，Ａ区中央部とＢ区北東端で確認され，北西から南東に向かって連続して延びていた１条の遺構と考えている。その延伸方向はＮ約44～52° Ｗで，南西に僅かに弧を描き延びる。本溝跡はＬⅡａとＬⅢ上面で確認でき，Ａ区では建物跡（ＳＢ01・03・07，ＳＤ23）に壊され，Ｂ区においては21号溝跡に壊されていたことから，本溝跡のほうが古い。

その規模は，全長はＡ区で約80ｍ，Ｂ区では約16.8ｍ，溝幅はＡ区内で最大約1.7ｍ，深さは最

大60㎝である。断面形状は幅の広い「Ｖ」字形で，周壁は底面から緩やかな角度で立ち上がる。溝内堆積土は，５層に分かれ，黒褐色のＬⅡａを基調とした粘質土で，特に上位の１・２層は非常に締まりがあり，底面近くには黒色の砂が堆積していた。堆積状況から自然堆積と考えており，底面付近に砂の堆積があることから，溝内に水が流れていたようである。

本溝跡の１・２層から，奈良･平安時代の土師器甕片26点，平安時代の須恵器杯片２点，甕片６点，長頸瓶片１点が出土している。このうち，４点を図24－１～４に図示した。同図１は有段丸底の土師器杯で，ほぼ完全な形で出土した。底部外面は摩滅し，ヘラ削り調整が不明瞭になっている。内面には丁寧なヘラミガキ後に黒色処理を施す。２は丸底の土師器杯で，体部外面にヘラケズリ調整を，内面には丁寧なヘラミガキ後に黒色処理を施す。３・４は大戸窯跡産の須恵器である。３は杯で，底面は回転ヘラ切り後ナデ調整を施している。４は長頸瓶の胴部上半部片で，頸部にはリング状の凸帯を貼り付けている。

14号溝跡の出土遺物をみると，同図１・２のように７世紀後半～８世紀前半の土師器杯と，９世紀前半ごろの須恵器が混在している。本遺構は，堆積土の土質の特徴，断面形状が６号溝跡と似ていることから，６号溝跡と同じ頃に機能していた可能性が高い。また，本溝跡の延伸方向は，６・16・18号溝跡と概ね平行でもある。機能時期については，延伸方向，遺構および堆積土の特徴，そして遺構の重複関係も考え合わせると，建物跡群の建造以前の８世紀後葉頃～９世紀初め頃まで開口し，その後機能を失い埋没したと考えている。

16号溝跡（図３・18・19・22，写真１・４・17）

本溝跡は，Ａ区南西側で確認され，北西から南東に向かって延びている。その延伸方向はＮ約46°Ｗに向かって，概ね直線的に延びる。本溝跡はＬⅢ上面で確認でき，６・７号土坑に壊され，本溝跡のほうが古い。また南北側は，ほ場整備などによる地形の改変によって壊されていた。本溝跡の延伸方向は，６・14・18号溝跡と概ね平行する。

その規模は，全長は15.6ｍ，溝幅は最大約50㎝，深さは13㎝である。断面形状は浅い皿状で，周壁は底面から緩やかな角度で立ち上がる。溝跡内堆積土は単一層で，黒褐色のＬⅡａを基調とした粘質土であった。溝内に水が流れていた痕跡は認められなかった。

本溝跡の１層から，平安時代の土師器甕片４点，須恵器小型甕片６点が出土している。このうち，外面に平行タタキ具痕が残った須恵器甕胴部片を図22－13に図示した。

16号溝跡の機能時期は，９世紀前半頃の６・７号土坑に壊されていることと，延伸方向が６・14・18号溝跡と概ね同一であることなども考え合わせると，建物跡群の建造以前の８世紀後葉頃～９世紀初め頃まで開口し，その後機能を失い埋没したと考えている。

17号溝跡（図５・20・22・23，写真１・５・18）

本溝跡は，Ｂ区南東端で確認され，真西から真東へ延び，連続して真北方向へ直角に曲がる。本溝跡はＬⅢ中位面で確認でき，６号土坑を壊し本溝跡が新しい。その規模は，全長は東西9.8ｍ，南北7.0ｍ，溝幅は70㎝，深さは30㎝である。断面形状は箱状で，底面は中央部がわずかに凹み，

周壁は底面から急な角度で立ち上がっている。溝跡内堆積土は６層に分かれる。いずれの層も黒褐色のＬⅡを基調とした粘質土で，上位の１層は非常に硬く締まっていた。溝内に水が流れていた痕跡はなかった。また，遺物は溝が直角に曲がる付近からまとまって出土していた。

本溝跡の遺物は，溝内堆積土の１層からすべて出土し，古墳時代の土師器杯片１点，または平安時代の土師器杯片31点，甕片５点，須恵器甕片23点と瓶の破片２点を確認した。須恵器甕のうち，４点は器面色調が黒褐色に発色した大久保窯跡産の大甕片で，残りの19点についてはすべて大戸窯跡産であった。このうち，10点を図22－17・18，図23－２～９に図示した。図22－17は古墳時代の土師器杯の口縁部片である。同図18は内外面の摩滅が著しく，内面の黒色処理の有無も判別がつかない平安時代の土師器杯片である。図23－９は底部外面に平行タタキ具痕が残った土師器甕の破片である。図23－２～９は須恵器甕の破片である。２は外面色調が黒褐色に発色した大甕口縁部片で，外面に波状文が残る。３は器面を丁寧にナデ調整した大甕の口縁部片である。４は外面に平行タタキ具痕が残った甕の頸部片である。５・７・８は甕胴部片で，いずれも外面に平行タタキ具痕が観察できる。６は甕の底部片で，外面の平行タタキ具痕をナデ消している。

17号溝跡の出土遺物をみると，古墳時代の土師器と８世紀後葉～９世紀前半頃の須恵器が混在する。機能時期については，本溝跡が６号溝跡を壊していたことや，本溝跡から真北に延びる21号溝跡が14号溝跡を壊していたことを考え合わせると，９世紀前半頃まで開口したと考えている。

18号溝跡（図２・18・23，写真１・４・17・23）

本溝跡は，Ａ区北東端で確認され，北西から南東へ向かって延び，その延伸方向はＮ49°Ｗである。本溝跡はＬⅢ上面で確認できた。その規模は，全長は24.8ｍ，溝幅は110㎝，深さは14㎝である。断面形状は浅い皿状で，底面は平坦で，周壁は底面から緩やかな角度で立ち上がる。溝跡内堆積土は，黒褐色の単一層で，溝内に水が流れていた痕跡は認められなかった。

本溝跡の１層から，平安時代の土師器甕片２点，砥石１点そして13個のクルミが出土している。このうち，上部を欠損した細粒凝灰岩製の古代の砥石を図23－10に図示した。

18号溝跡の機能時期については，出土遺物は極僅かであったが延伸方向が６・14・16号溝跡と概ね同一であったこと，14号溝跡が21号溝跡に壊されていた事象などを考え合わせると，建物跡群の建造以前，８世紀後葉～９世紀初め頃まで開口し，その後機能を失い埋没したと考えている。

21号溝跡（図５，写真１・５・18）

本溝跡は，Ｂ区東側で確認され，真北方向へ向かって延びている。本溝跡はＬⅢ上面で確認できた。重複関係は，19・20号溝跡に壊され本溝跡が古い。14号溝跡を壊していることから本溝跡のほうが新しい。その規模は，全長は35.7ｍ，溝幅は80㎝，深さは14㎝である。断面形状は浅い皿状で，底面は平坦で，周壁は底面から緩やかな角度で立ち上がっている。溝跡内堆積土は単一層で，黒褐色のＬⅡａを基調とした粘質土であった。溝内に水が流れていた痕跡は認められなかった。

21号溝跡の遺物は細片のため図示できていない。遺物は遺構内堆積土の１層からすべて出土し，平安時代土師器杯片５点，須恵器甕片７点，瓶片１点，近代陶器片２点を確認した。須恵器甕のうち，

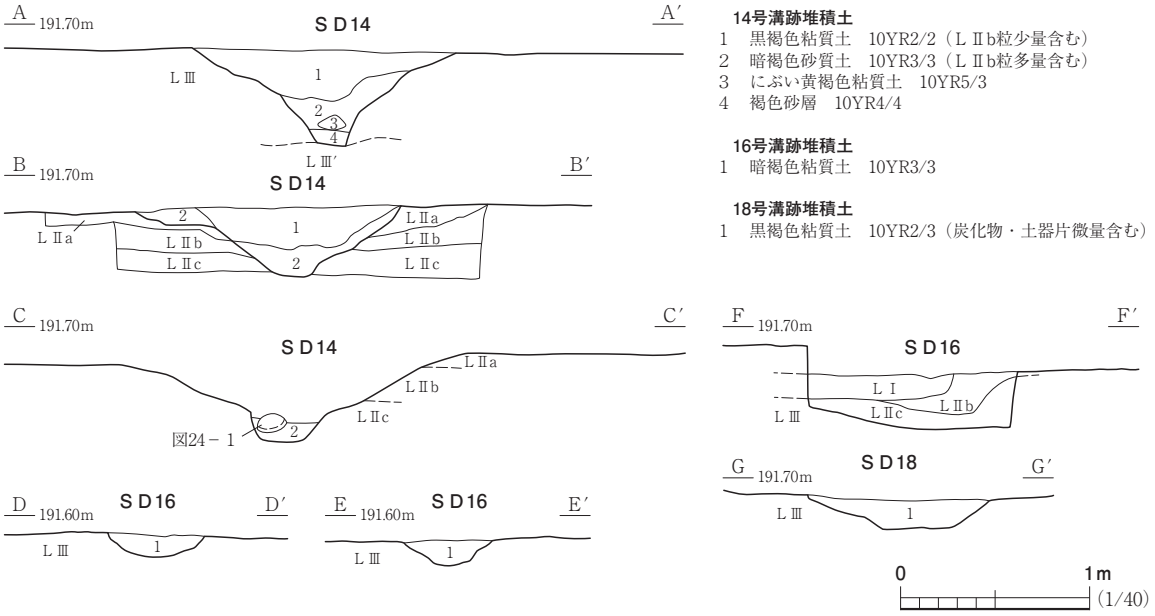


図18　A区溝跡

2点は器面色調が黒褐色に発色した大久保窯跡産の大甕片で,その他はすべて大戸窯跡産であった。

21号溝跡の機能時期については，本溝跡と同じ真北方向に延び，さらに直行した17号溝跡が6号溝跡を壊していたことや，本溝跡が14号溝跡を壊していたこと，そして本溝跡が17号溝跡の事象などを考え合わせると，9世紀前半頃まで開口していた溝跡と考えている。

ま と め

1・5・17・21号溝跡について，以下に整理する。

1号溝跡については，遺構内からの出土遺物は無いが，その延伸方向がN 90° Eで，17号溝跡と東西延伸方向が一致している。このことから，1号溝跡と17号溝跡については，前後関係があるというよりも，近い時期に機能していた可能性が考えられる。さらに東に位置した5号溝跡についても，概ね延長方向上にある1号溝跡そして17号溝跡と同時期に機能したと考えている。また，21号溝跡についてみると，直角に折れ曲がった17号溝跡の延長線上にある。21号溝跡の方向は，17号溝跡から概ね真北へ延びている。

以上のことから，9世紀前半頃には，真北および真東を意識した長い溝跡として1・5・17・21号溝跡が掘り込まれ，溷川の南岸が区画されていた可能性が高い。これら区画溝を意識して，A・B区にある7棟の建物跡（SB01～04・06～08），素掘りの井戸跡（SK03），廃棄坑（SK01・02・06～08）などが，あるまとまりをもって設けられたものと考えている。

次に，6・14号溝跡について，以下に整理する。

6・14号溝跡については，両溝跡の延伸方向は概ね同じで，2つの溝の断面形状も幅広の「V」字形である点，そして両者の堆積土最下面に黒色の砂層が堆積し排水機能を果たしていた点など共通点が複数認められた。また，6・14号溝跡に挟まれた空間幅は約31ｍであった。両溝跡の年代については，14号溝跡は，1・3・7号掘立柱建物跡と21号溝跡に壊され，本溝跡のほうが古い。

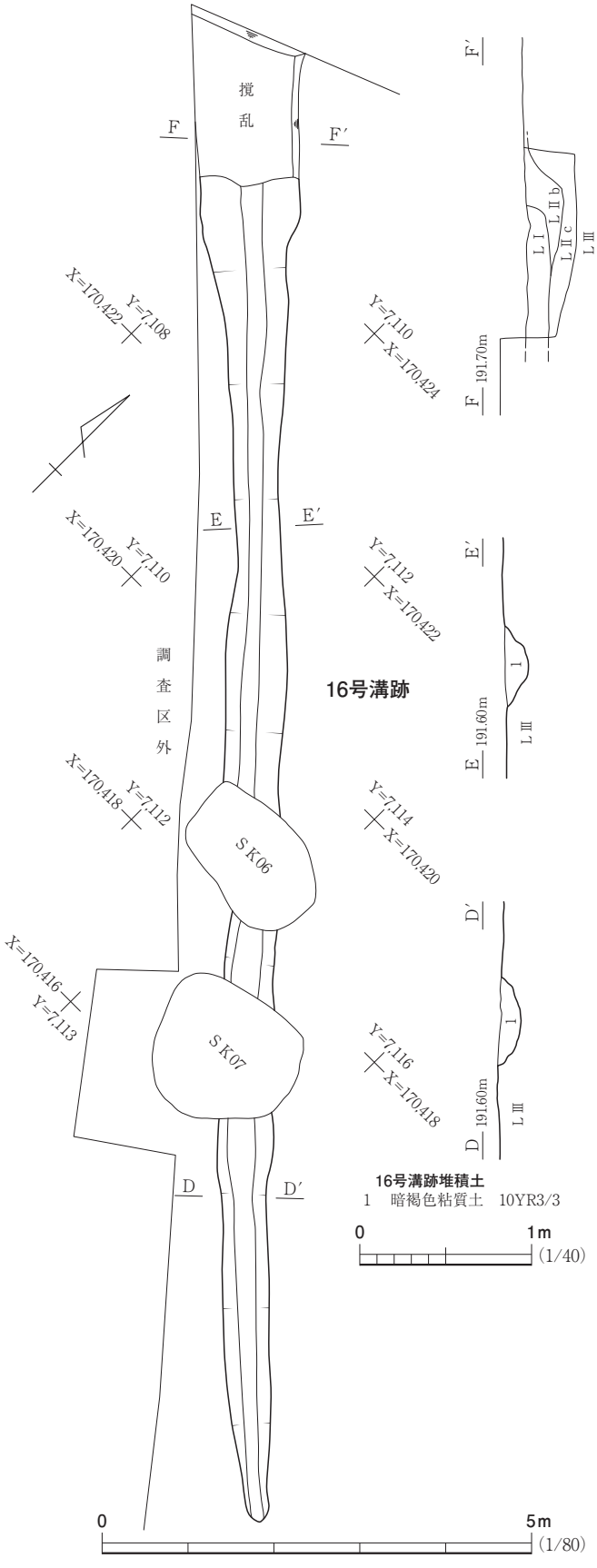


図19　16号溝跡

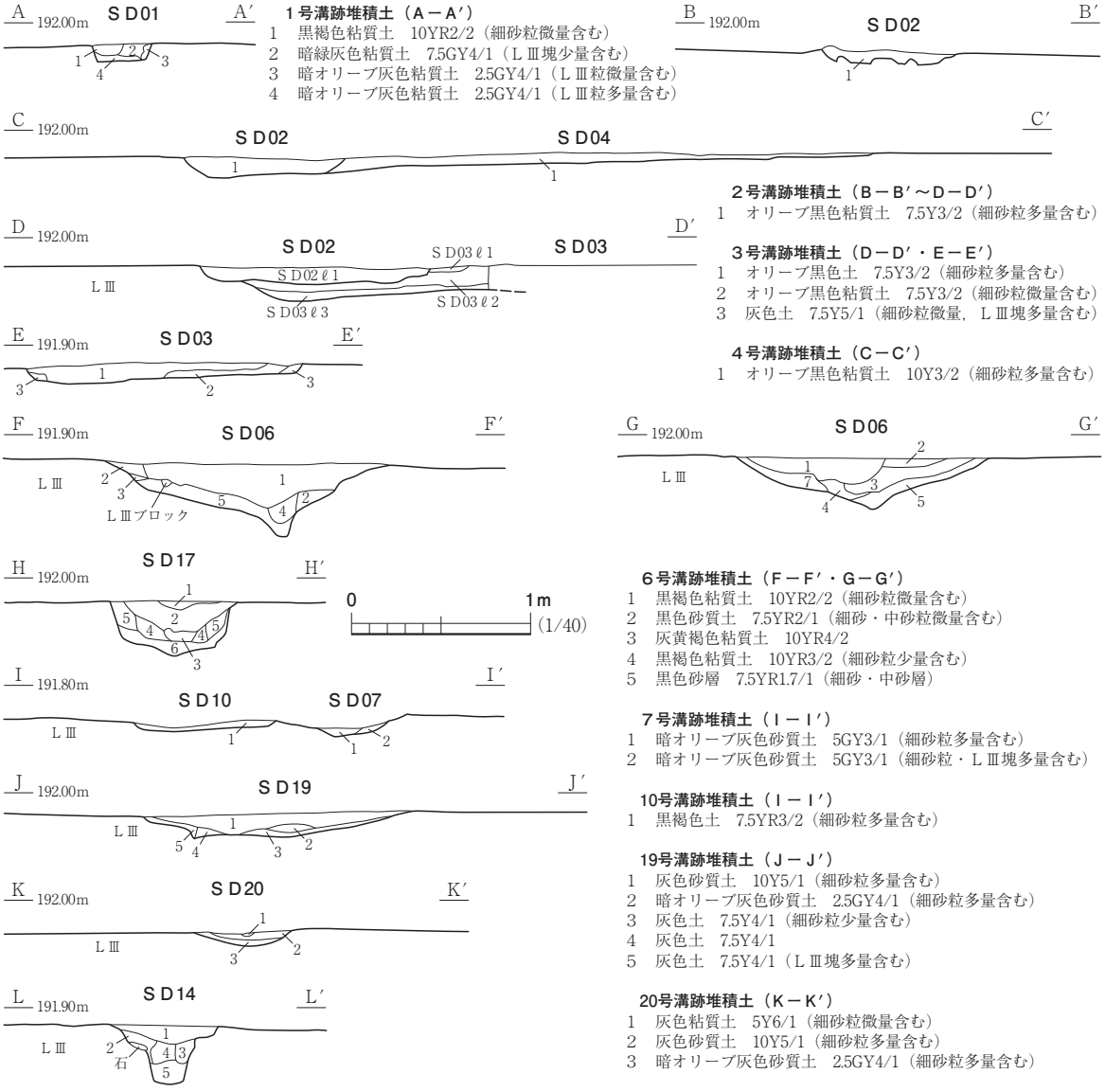
6号溝跡は，17号溝跡に壊され，本溝跡が古い。6・14号溝跡の年代については，出土遺物のほかに，断面形状や堆積土の共通点を考え合わせると，4条の区画溝（SD01・05・17・21）と8棟の建物跡が設営される前，8世紀後葉頃～9世紀初め頃まで開口し，その後機能を失い埋没したと考えている。

さらに，北西に向かって延びる4条の溝跡（SD06・14・16・18）を追いかけてゆくと，14号溝跡だけは，鶴沼C遺跡の12号溝跡と延伸方向が概ね一致し，一部の断面形状と溝底に黒い砂層が堆積するという堆積土の状況についても共通することが分かった。延伸方向を復元すると，図31のように西坂才遺跡から鶴沼C遺跡まで1連の排水機能を伴った溝跡として延びていた可能性が高い。2つの遺跡間には溜川の氾濫で抉られた谷地形が入り溝跡が途切れたようになるが，総延長約450mの溝は僅かに北側に弧を描くような形で続いていたと考えられる。

以上のことから，6・14号溝跡は，2条が近い時期に存在した排水施設で，共に北西から南東の方向へ延伸するように作られていた可能性が考えられる。また，6・14号溝跡間の幅は約31mもの広い空間が空いている。

最後に，16・18号溝跡について整理する。

6・14号溝跡と平行し，北西から南東に向かう延伸方向，機能時期も同じと考えている溝跡は，A区内に16・18号



1号溝跡堆積土（A－A′）
1　黒褐色粘質土　10YR2/2（細砂粒微量含む）
2　暗緑灰色粘質土　7.5GY4/1（LⅢ塊少量含む）
3　暗オリーブ灰色粘質土　2.5GY4/1（LⅢ粒微量含む）
4　暗オリーブ灰色粘質土　2.5GY4/1（LⅢ粒多量含む）

2号溝跡堆積土（B－B′～D－D′）
1　オリーブ黒色粘質土　7.5Y3/2（細砂粒多量含む）

3号溝跡堆積土（D－D′・E－E′）
1　オリーブ黒色土　7.5Y3/2（細砂粒多量含む）
2　オリーブ黒色粘質土　7.5Y3/2（細砂粒微量含む）
3　灰色土　7.5Y5/1（細砂粒微量，LⅢ塊多量含む）

4号溝跡堆積土（C－C′）
1　オリーブ黒色粘質土　10Y3/2（細砂粒多量含む）

6号溝跡堆積土（F－F′・G－G′）
1　黒褐色粘質土　10YR2/2（細砂粒微量含む）
2　黒色砂質土　7.5YR2/1（細砂・中砂粒微量含む）
3　灰黄褐色粘質土　10YR4/2
4　黒褐色粘質土　10YR3/2（細砂粒少量含む）
5　黒色砂層　7.5YR1.7/1（細砂・中砂層）

7号溝跡堆積土（I－I′）
1　暗オリーブ灰色砂質土　5GY3/1（細砂粒多量含む）
2　暗オリーブ灰色砂質土　5GY3/1（細砂粒・LⅢ塊多量含む）

10号溝跡堆積土（I－I′）
1　黒褐色土　7.5YR3/2（細砂粒多量含む）

19号溝跡堆積土（J－J′）
1　灰色砂質土　10Y5/1（細砂粒多量含む）
2　暗オリーブ灰色砂質土　2.5GY4/1（細砂粒多量含む）
3　灰色土　7.5Y4/1（細砂粒少量含む）
4　灰色土　7.5Y4/1
5　灰色土　7.5Y4/1（LⅢ塊多量含む）

20号溝跡堆積土（K－K′）
1　灰色粘質土　5Y6/1（細砂粒微量含む）
2　灰色砂質土　10Y5/1（細砂粒多量含む）
3　暗オリーブ灰色砂質土　2.5GY4/1（細砂粒多量含む）

14号溝跡堆積土（L－L′）
1　オリーブ黒色土　10Y3/1（細砂粒・白色粒少量含む）
2　オリーブ黒色土　7.5Y3/1（細砂粒・白色粒微量含む）
3　オリーブ黒色砂質土　5Y3/1（細砂粒・白色粒多量含む）
4　暗褐色土　7.5YR3/4（細砂粒少量，白色粒微量含む）
5　暗オリーブ灰色粘質土　2.5GY3/1
（細砂粒微量，白色粒少量，LⅢ塊多量含む）

17号溝跡堆積土（H－H′）
1　オリーブ黒色粘質土　7.5Y3/1（細砂粒微量含む）
2　灰色砂質土　7.5Y4/1（細砂粒多量含む）
3　暗オリーブ灰色粘質土　2.5GY3/1（細砂粒微量含む）
4　暗オリーブ灰色砂質土　2.5GY3/1（細砂粒多量含む）
5　オリーブ黒色砂質土　5Y3/2（細砂粒多量含む）
6　暗オリーブ灰色粘質土　5GY3/1（細砂粒微量，LⅢ塊多量含む）

図20　B区溝跡

溝跡の２条がある。しかし，図18下段にあるD－D′・E－E′・G－G′断面を見ると，16・18号溝跡の断面形状，確認面からの深さ，そして溝底にある堆積土の土質などを見比べると，前述した６・14号溝跡との異なり，両者が排水機能を伴ったとは断言できない。さらに，16号溝跡については，その延伸方向がB区南東側において６号溝跡と交差してしまう。また，16・18号溝跡に挟まれた空間幅は，50ｍを超えている。

以上のことから16・18号溝跡については，６・14号溝跡と延伸方向は概ね同じであったというだけで，６・14号溝跡と近い時期に存在し，同じ機能を果したとは考えにくい。16・18号溝跡の年代については，６・14号溝跡と同じく，８世紀後葉～９世紀初め頃まで開口したと考えられる。

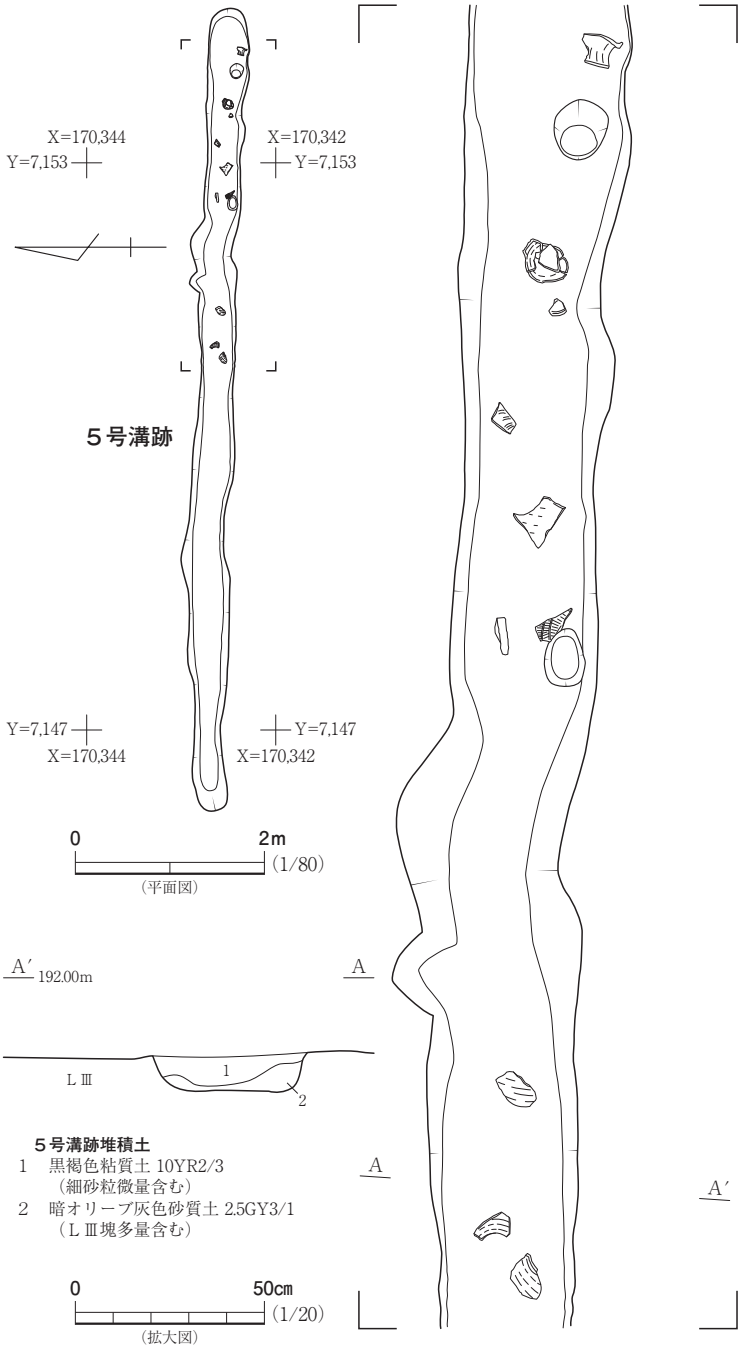


図21　５号溝跡

しかし，16・18号溝跡と６・14号溝跡との前後関係については，遺構の重複がなく，出土遺物からも明確にできなかった。16・18号溝跡の機能については，６・14号溝跡とは異なり，何らかの区画溝としての役目を果たしていたと考えている。

近世以降の溝跡

（図４・５・20～22，写真１・５）

近世以降の溝跡と考えているのは，Ｂ区で確認された２～４・７～12・19・20・22号溝跡の12条である。以下に，12条の溝跡についてまとめ書きし，遺物については７・８号溝跡から出土した図示できた遺物について報告する。

遺　　構

12条の溝跡について新旧関係が分かっているものは，次のものである。古：３号溝跡＞新：２号溝跡，古：12号溝跡＞新：８号溝跡，古：（６号溝跡＞）10号溝跡＞８号溝跡＞７号溝跡＞新：11号溝跡，古：８号溝跡＞９号溝跡＞新：11号溝跡の８条については，新旧関係が確認できた。重複関係から12条のうち最も古い溝跡は10・12号溝跡で，最も新しいのは11号溝跡となることが分かった。

12条の溝跡は，それらの延伸方向から，次の２つに大別できる。①北西から南東方向へ向かう７条の溝跡（ＳＤ02・08・11・12・19・20・22）と，②北東から南西に向かう５条の溝跡（ＳＤ03・04・07・09・10）の２方向である。また，20・22号溝跡を除く10条の溝跡については，延伸方向で分けた２つのグループが，Ｍ20・Ｋ21・Ｋ23グリッド付近で，概ね直角に交差している。これについては，Ｂ区北西端を北流する水路へ排水できるよう，耕作地の地境などに沿って掘り込まれた

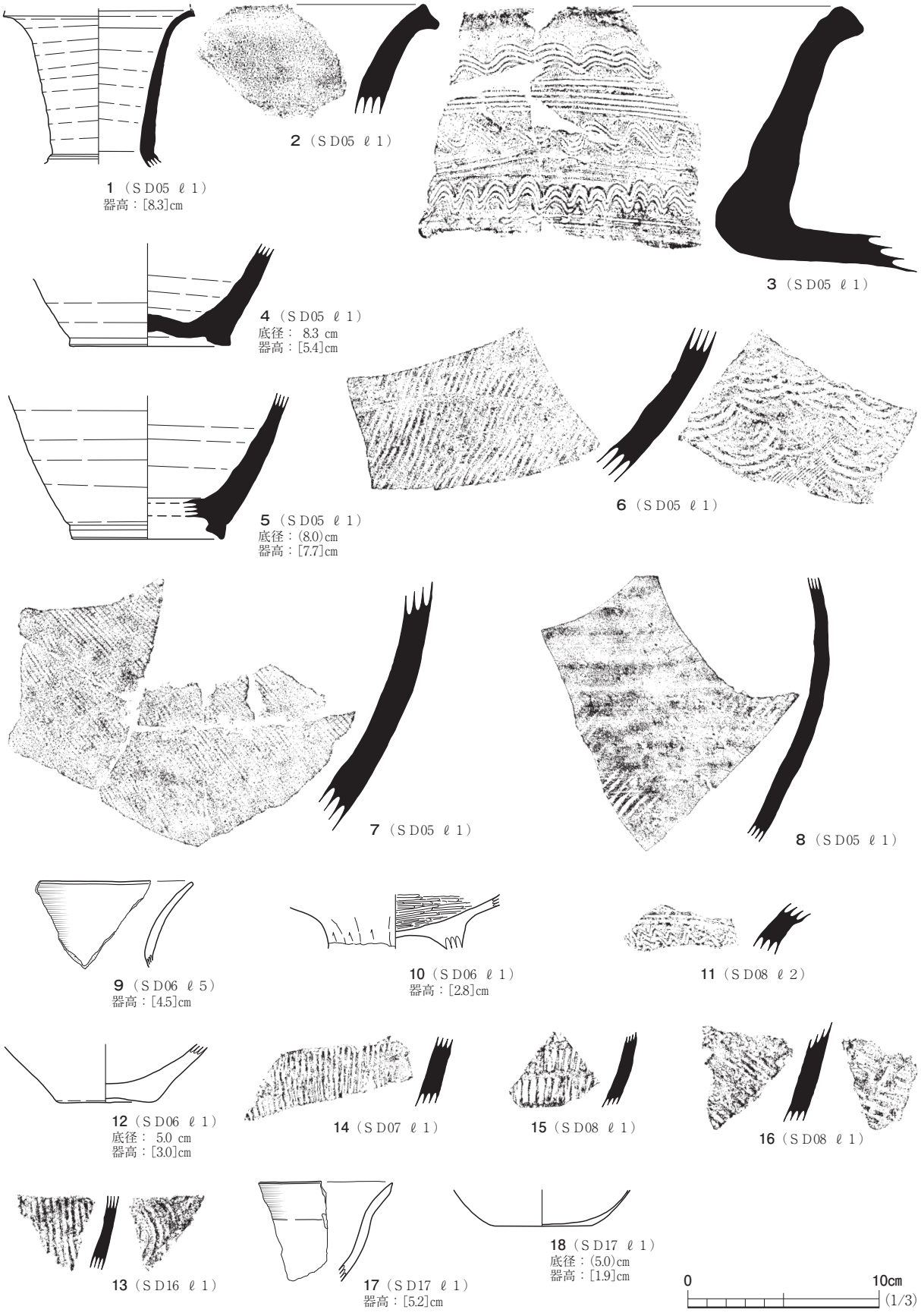

1（SD05 ℓ1）
器高：[8.3]cm
2（SD05 ℓ1）
3（SD05 ℓ1）
4（SD05 ℓ1）
底径： 8.3 cm
器高：[5.4]cm
5（SD05 ℓ1）
底径：(8.0)cm
器高：[7.7]cm
6（SD05 ℓ1）
7（SD05 ℓ1）
8（SD05 ℓ1）
9（SD06 ℓ5）
器高：[4.5]cm
10（SD06 ℓ1）
器高：[2.8]cm
11（SD08 ℓ2）
12（SD06 ℓ1）
底径： 5.0 cm
器高：[3.0]cm
14（SD07 ℓ1）
15（SD08 ℓ1）
16（SD08 ℓ1）
13（SD16 ℓ1）
17（SD17 ℓ1）
器高：[5.2]cm
18（SD17 ℓ1）
底径：(5.0)cm
器高：[1.9]cm
0
10cm
(1/3)

図22　溝跡出土遺物（1）

結果と考えている。

遺　　物（図22）

近・現代に属すと考えている12条の溝跡から出土した遺物は，図22に図化したもの以外に，縄文時代の石鏃，平安時代の土師器甕の小片，須恵器甕・瓶の小片の他に，近現代の陶磁器片や砥石などが少なからず含まれていた。7号溝跡から出土した遺物は，図22－14に図示した須恵器甕胴部片1点のみである。14の外面には平行タタキ痕が観察できる。

8号溝跡の1・2層からは，平安時代の土師器細片2点，須恵器小型甕・瓶の小片14点，そして近代陶器片1点が出土している。このうち，3点の須恵器片を図22－11・15・16に示した。同図11は大久保窯跡産の甕口縁部片で，外面に波状文が観察できる。同図15・16は大戸窯跡産の小型甕の胴部片で，いずれも外面に平行タタキ具痕が残る。　　（阿　部）

第4節　土　　坑

西坂才遺跡の1次調査では，合計10基の土坑を確認した。これらの土坑は近年のほ場整備や造

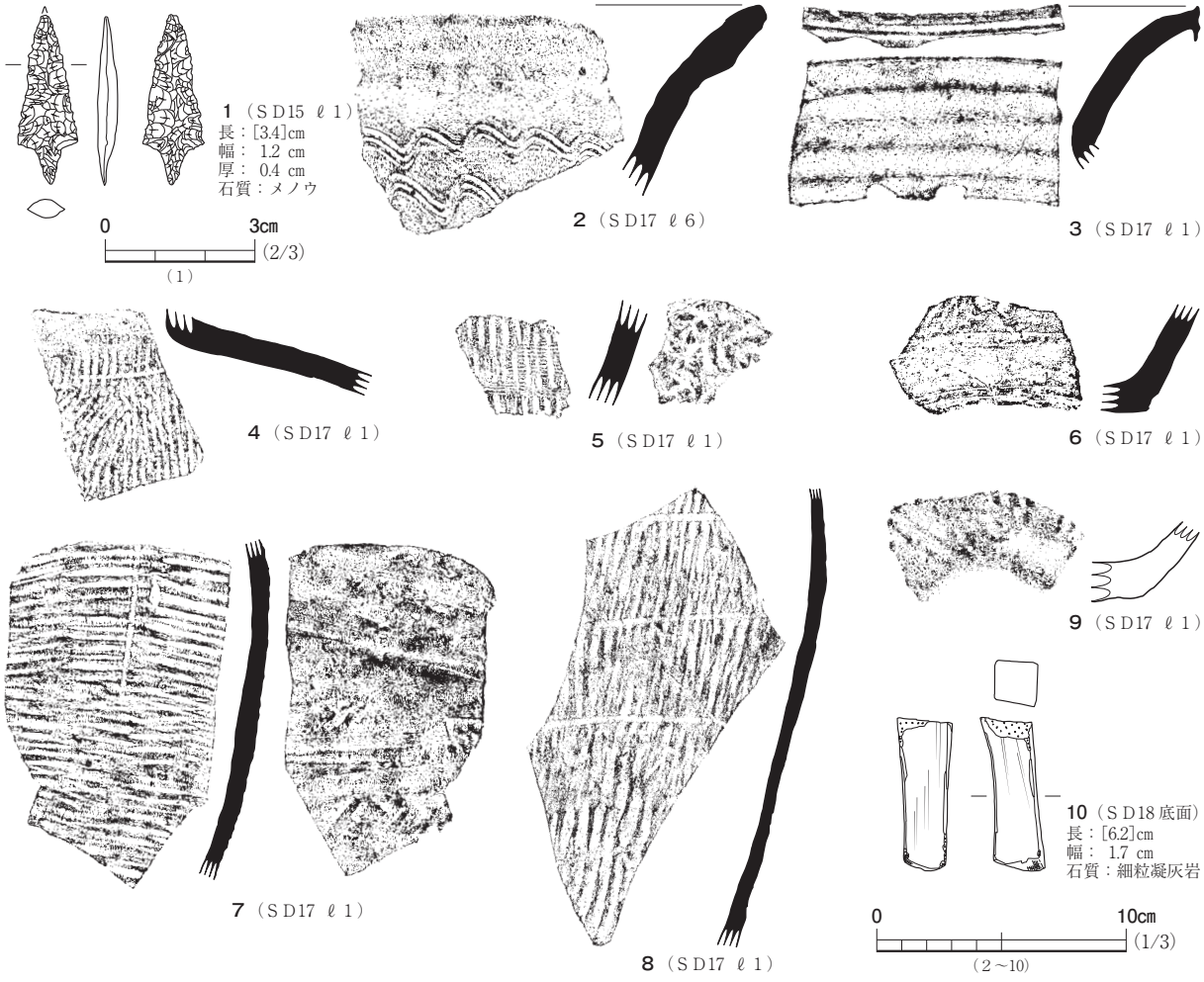


図23　溝跡出土遺物（2）

成による地形改変のため遺存状況が悪いものが多い。３号土坑については，素掘りの井戸跡と推定した。また，10番については欠番とした。

１号土坑　ＳＫ01（図25，写真19）

本土坑は，Ｂ区北側のＩ19グリッドに位置し，ＬⅢ上面で検出した。南東４ｍに２号土坑が存在する。平面形は不整円形であり，北西から南にかけて近現代の農作業用道路の轍と思われる撹乱溝が横切る。規模は，長軸180㎝，短軸160㎝，確認面からの深さは19㎝である。底面はほぼ平坦で，周壁は底面からなだらかに立ち上がる。堆積土は黒褐色土の単一層であった。

遺物は，平安時代の土師器細片２点，須恵器細片１点が出土した。本土坑は，遺存状況の悪い小型の土坑で，Ａ区に分布する建物群に伴う廃棄坑と考えている。年代は，出土遺物の特徴から９世紀前半頃と考えている。（阿　部）

２号土坑　ＳＫ02（図25・30，写真19）

本土坑は，Ｂ区北側のＪ19グリッドに位置し，ＬⅢ上面で検出した。平面形は，南北に長い小判形である。規模は，長軸120㎝，短軸84㎝，確認面からの深さは最大８㎝とかなり浅い。周壁は，底面から緩やかに立ち上がり，南側の壁は確認できなかった。堆積土は暗褐色土の単一層であった。

遺物は，平安時代の須恵器細片２点，土師器細片３点が出土した。そのうち須恵器杯１点を図30－１に示した。同図１の遺存度は全体の半分程度で，器高が比較的低く，口縁部が底部から直線的に開く器形となっている。本土坑は，遺存状況の極めて悪い小型の土坑で，Ａ区に分布する建物群に伴う廃棄坑と考えている。年代は，出土遺物の特徴から９世紀前半頃と考えている。（阿　部）

３号土坑　ＳＫ03（図25・30，写真19・22）

本土坑は，Ｂ区中央部のＬ22グリッドに位置し，ＬⅢ上面で検出した。北東６ｍほどに６号溝跡がある。平面形は不整円形で，規模は長軸2.2ｍ，短軸2ｍ，確認面からの深さは1.2ｍである。底面は概ね平坦に作られている。周壁は，底面から60～100㎝程度までほぼ垂直に立ち上がり，その後は崩落により傾斜を緩やかにしつつ立ち上がっている。堆積土は12層に分けられ，堆積状況から１層は自然堆積，それ以下は人為堆積と判断した。底面は，ＬⅣ層を掘り込んでいることから，雨の時期にはこの層からの湧水が著しい。

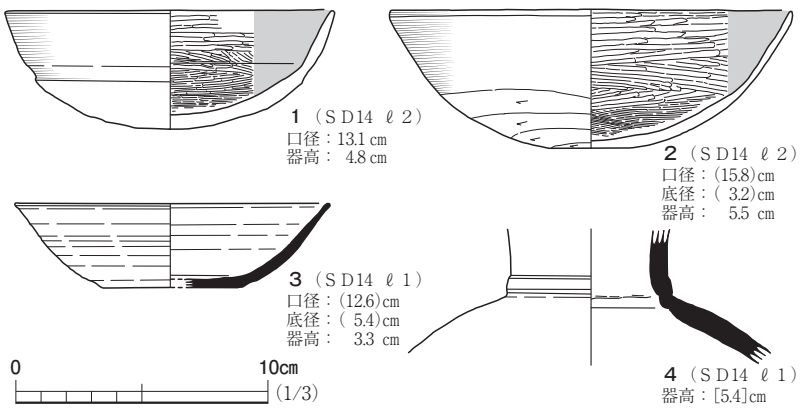


図24　14号溝跡出土遺物

遺物は，平安時代の土師器杯片46点，赤焼土器１点，須恵器杯片８点，須恵器甕または瓶胴部片８点の他に，欠損のない須恵器小型長頸瓶１点が出土している。遺物の多くは，特に中層の８層から出土している。このうち，11点を図30－２～12に図化した。

同図２はロクロ成形の土師器杯で，内面に黒色処理を施す。３もロクロ成形の土師器杯で，内外面とも摩滅が著しい。おそらく口縁部端に僅かに残った黒ずみから判断して，内面は黒色処理されていたと考えている。４はロクロ成形の赤焼土器杯である。成形は須恵器の作りで，焼成は酸化焼成のため色調が黄褐色に発色し，底面の調整は回転ヘラ切り後ナデている。７～12は須恵器片で，７・９は大戸窯跡産，それ以外は大久保窯跡産と考えられる。後者の須恵器の色調を観察すると，断面はいずれも赤紫色で，外面は暗褐色または濃い灰褐色に発色する。大戸窯跡産の７は小型の須恵器瓶で，欠損部が全くない。底部の調整は回転糸切り，胴部下位には回転ヘラ削りを施している。９は須恵器甕の胴部片で，外面に平行叩きを施している。大久保窯跡産の８・10～12は，すべて甕の口縁部または胴部の破片である。８は須恵器甕の口縁部片で，自然釉がかかり光沢のある暗褐色に発色する。10～12は須恵器甕の胴部片で，10は内外面ともに丁寧にナデ調整を施す。11・12は外面に平行叩き，内面に当て具痕が残る。11は平行叩きの後横方向のナデ調整を，10は内外面を丁寧にナデ調整している。

本土坑は，断面形状と湧水の状況などを考え合わせると，素掘りの井戸跡である。年代は，出土遺物から９世紀前半頃まで利用され，その後埋め戻されたと考えている。（阿　部）

４号土坑　ＳＫ04（図25，写真19）

本土坑は，Ｂ区中央部のＬ21グリッドに位置し，ＬⅢ上面で検出した。７号溝跡の一部，および10号溝跡と重複し，本土坑が新しい。平面形は不整円形で，規模は直径90～110㎝，確認面からの深さは46㎝である。底面はほぼ平坦で，周壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は５層に分けられ，１層は自然堆積，その他の層は人為堆積と判断した。

遺物は，１層から近代磁器碗の細片が発見されたのみであった。遺構の重複状況や堆積土の状況から，本土坑は近代の農作業に伴う作業坑ないし堆肥坑と考えている。（菊　田）

５号土坑　ＳＫ05（図26～28，写真21・23）

本土坑は，Ａ区のＥ10・Ｆ11グリッドにまたがって位置し，ＬⅢ上面で検出した。北３ｍに６号掘立柱建物跡がある。平面形は南北に長い釣鐘型で，規模は南北２ｍ，東西1.5ｍ，確認面からの深さは18㎝である。底面は平坦で，周壁は底面から急な角度で立ち上がる。堆積土は２層に分けられ，堆積状況からいずれも人為堆積と判断した。

遺物は１層中および底面から出土した。点数にすると，1,581点（10㎏入りの遺物収納箱にして約５箱分）もの大量の平安時代の土師器細片と，須恵器甕・瓶の破片９点，人頭大～拳大の扁平な石が４点出土した。これらのうち，17点を図27・28に示した。

遺物の出土状況は，本土坑の底面付近から10㎝前後の高さまで破片が隙間無く重なり合っていた。破片は土坑内にまんべんなく広がりつつも，中央部と東側に比較的まとまって出土した。出土した土師器を接合してみると，すべては接合できなかったものの，高さ30㎝前後の甕４個体分，杯４個体分，小型甕１個体分そして脚付き鉢１個体分の分量が含まれていたと考えている。接合の結果，ほぼ完全な形に復元できたのは，図27－８に示した土師器甕１個体のみであった。また，須恵器甕・瓶の破片は，口縁部や胴部など全体形状のごく一部分しか出土していない。

出土した土師器片の多くは，甕の破片で，それぞれしっかりと焼け締まっている。しかし，多くの破片は，厚さ５～10㎜ほどの破片が，厚さを二分するかのように，粘土の積み上げ痕付近から剥がれたような割れかた，あるいは土器の器面が破裂したような壊れかたをしているのが，特徴的である。以下に，図27・28に示した遺物について説明する。

図27－１・３は，ロクロ成形された赤焼土器杯である。両方とも器面の摩滅が著しく外面調整が不鮮明であった。内面には，いずれもコテ当て調整されており，見込み中央部に凸部が残っている。

同図２・４・５はロクロ成形された土師器である。２は杯で，器面が摩滅し底部の調整が不明瞭であった。４は高台部を欠損した高台杯である。２・４の内面には，ヘラミガキ後に黒色処理を施している。５は外傾した口縁部をもつ小型甕である。６～９は，ロクロ成形された土師器長胴甕で，いずれも別個体のものであった。完全な形まで復元できたものは８のみである。４個体の外面調整をみると，ほぼ同一であったと思われ，底部は平底で，口縁部から胴部中位までロクロナデ，胴部下位から底部付近にはロクロナデ後に平行タタキ具痕が観察できる。口縁部の形状から次の２種類に分けられる。①６・８では胴部上位から口縁部が大きく外反するタイプと，②７・９では前者のように胴部上位が外反した後，受け口状に端部がやや内傾するタイプの２つがある。

図28－１～３は，土師器脚付き鉢の３本の脚部片である。鉢部と接点があったのは１のみで，鉢部と思われた細片は大量に出土したものの接合できなかった。脚部は，３本１組で鉢部を支えたと考えている。鉢部下位の大きさと２本脚の間隔は，同図１右側と２を合わせた図の配置程度と考えている。鉢部外面には丁寧なナデを施され，ロクロ成形かどうかまでは分からなかった。１～３の脚部は，粘土紐を手で握りながら成形した痕が確認できる。脚部の付け根は，鉢部の曲面に直接貼り付けている。３以外の脚部は，先端に向かってすぼまるよう整形している。３の先端だけは，前後に突起の付いたブーツのような形を意図的に作り出していることから，３の脚が見える向きを正面にすることを意識して作ったのではないかとも考えさせる。

図28－４～８は，須恵器甕または瓶の破片である。７以外は，すべて大戸窯跡産と考えている。４は長頸瓶の口縁部片，５・６は大甕の口縁部片から胴部上位の破片である。５・６に接点はないが，特徴から同一個体の破片と考えている。５・６の胴部上位には平行タタキ具の痕跡が確認できる。８は大甕の胴部片で内外面に平行タタキ具の痕跡を残す。７は大久保窯跡産と考えられる大甕の胴部片である。７の器面色調は黒褐色で，断面色調は赤紫色に発色する。７の外面には平行タタキ具の痕跡が，内面のアテ具痕は同心円文が観察できる。

本土坑は，平面形状と土坑底面・壁面被熱変化状況などから土器焼成土坑と考えている。焼成土坑として機能しなくなった後，坑内に焼け損じなどを一括で廃棄したと考えている。年代は，出土遺物から９世紀末～10世紀初め頃と考えている。

会津若松市内で確認されている土師器焼成坑の事例は，本遺跡の他に，西木流Ｃ遺跡（石田他2000）では９世紀中葉頃の楕円形土坑１基（ＳＫ07）と，湊地区にある笹山原№16遺跡（会田2006）からは９世紀代の不整円形土坑３基（04土坑２，05土坑１・２），計４基が確認されている。このうち，西木流Ｃ遺跡と本遺跡の焼成坑については，底面の３分の１程度が被熱変色していたことから，長軸方向で幅の狭い側を焼成室としていたことが分かる。（阿　部）

６号土坑　ＳＫ06（図29・30，写真20・23）

本土坑は，Ａ区南西側のＧ16グリッドに位置し，ＬⅢ上面で検出した。16号溝跡と重複し，本土坑のほうが新しい。南東２ｍには７号土坑が隣接する。平面形は，東西に長い不整長方形で，規模は長辺170㎝，短辺110㎝，確認面からの深さは20㎝である。底面は平坦で，周壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は暗褐色粘質土の単一層であった。

遺物は，底面付近から平安時代の土師器甕・杯片が８点，須恵器甕細片が２点出土した。このうち，２点を図30－13・14に示した。同図13はロクロ成形の土師器杯で，個体の半分は隣の７号土坑の底面から出土し，接合できたものである。内面はミガキ・黒色処理され，底面の調整は回転ヘラ切りされている。同図14は大戸窯跡産の須恵器甕の底部片で，外面にはヘラ削りを施す。

本土坑は，北側にある建物群に伴う廃棄坑と考えている。南隣の７号土坑の底から出土した破片と接合した土師器杯図30－13が出土している。このことから，本土坑と７号土坑の新旧関係はよく分からないが，概ね同時期に開口していた廃棄坑と考えている。年代は，出土遺物の特徴から，９世紀前半頃と考えている。（阿　部）

７号土坑　ＳＫ07（図29・30，写真20・23）

本土坑は，Ａ区南西側のＧ16グリッドに位置し，ＬⅢ上面で検出した。16号溝跡と重複し，本土坑のほうが新しい。北隣に６号土坑がある。平面形は不整台形で，規模は長辺180㎝，短辺160㎝，確認面からの深さは16㎝である。底面は平坦で，周壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は，３層に分けられ，堆積状況から人為堆積と判断した。

遺物は，底面付近から平安時代の土師器杯・甕の破片が３点，須恵器杯・瓶の破片片が21点出土した。そのうち５点を図30－13・15～19に示した。13は土坑底面から出土したロクロ成形の土師器杯で，６号土坑から出土した破片と接合できた。15はロクロ成形された土師器小型甕で，内外面の摩滅が著しい。16～19は，大戸窯跡産の須恵器杯・甕そして長頸瓶である。16・17は須恵器杯で，いずれの底面も回転ヘラキリで切り離されている。17の底面には直線一条のヘラ書きがある。18は大甕の口縁部から胴部上位の破片で，外面に平行タタキ具の痕跡が残る。19は長頸瓶

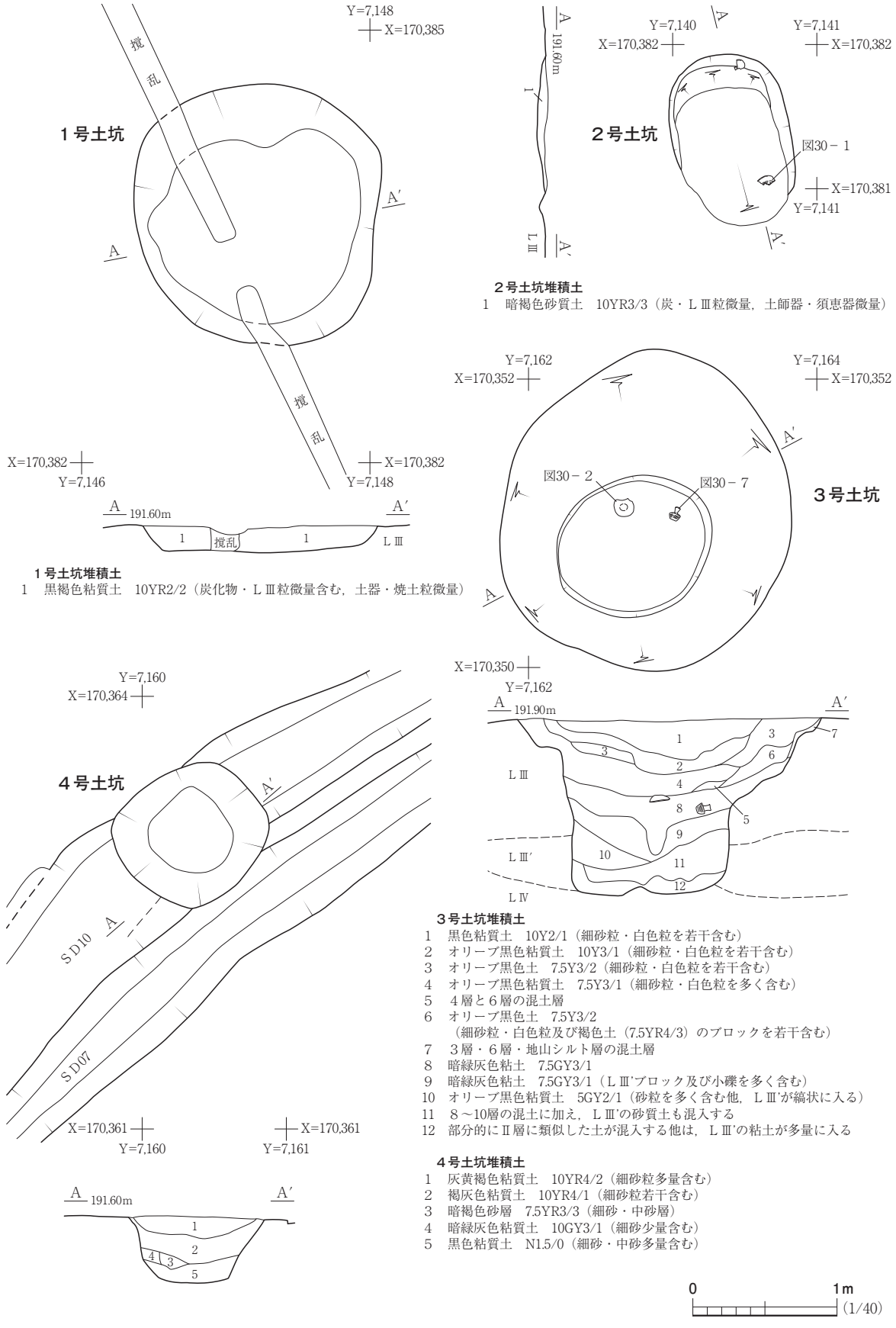

Y=7,148
X=170,385
撹乱
1号土坑
A
A′
X=170,382
Y=7,146
X=170,382
Y=7,148
191.60m
1
撹乱
L Ⅲ
1号土坑堆積土
1　黒褐色粘質土　10YR2/2（炭化物・L Ⅲ粒微量含む，土器・焼土粒微量）
Y=7,140
X=170,382
Y=7,141
X=170,382
2号土坑
図30－1
X=170,381
Y=7,141
2号土坑堆積土
1　暗褐色砂質土　10YR3/3（炭・L Ⅲ粒微量，土師器・須恵器微量）
Y=7,162
X=170,352
Y=7,164
X=170,352
図30－2
図30－7
3号土坑
X=170,350
Y=7,162
191.90m
L Ⅲ
L Ⅲ′
L Ⅳ
3号土坑堆積土
1　黒色粘質土　10Y2/1（細砂粒・白色粒を若干含む）
2　オリーブ黒色粘質土　10Y3/1（細砂粒・白色粒を若干含む）
3　オリーブ黒色土　7.5Y3/2（細砂粒・白色粒を若干含む）
4　オリーブ黒色粘質土　7.5Y3/1（細砂粒・白色粒を多く含む）
5　4層と6層の混土層
6　オリーブ黒色土　7.5Y3/2
（細砂粒・白色粒及び褐色土（7.5YR4/3）のブロックを若干含む）
7　3層・6層・地山シルト層の混土層
8　暗緑灰色粘土　7.5GY3/1
9　暗緑灰色粘土　7.5GY3/1（L Ⅲ′ブロック及び小礫を多く含む）
10　オリーブ黒色粘質土　5GY2/1（砂粒を多く含む他，L Ⅲ′が縞状に入る）
11　8～10層の混土に加え，L Ⅲ′の砂質土も混入する
12　部分的にⅡ層に類似した土が混入する他は，L Ⅲ′の粘土が多量に入る
Y=7,160
X=170,364
4号土坑
SD10
SD07
X=170,361
Y=7,160
X=170,361
Y=7,161
191.60m
4号土坑堆積土
1　灰黄褐色粘質土　10YR4/2（細砂粒多量含む）
2　褐灰色粘質土　10YR4/1（細砂粒若干含む）
3　暗褐色砂層　7.5YR3/3（細砂・中砂層）
4　暗緑灰色粘質土　10GY3/1（細砂少量含む）
5　黒色粘質土　N1.5/0（細砂・中砂多量含む）
0　1m
(1/40)

図25　1～4号土坑

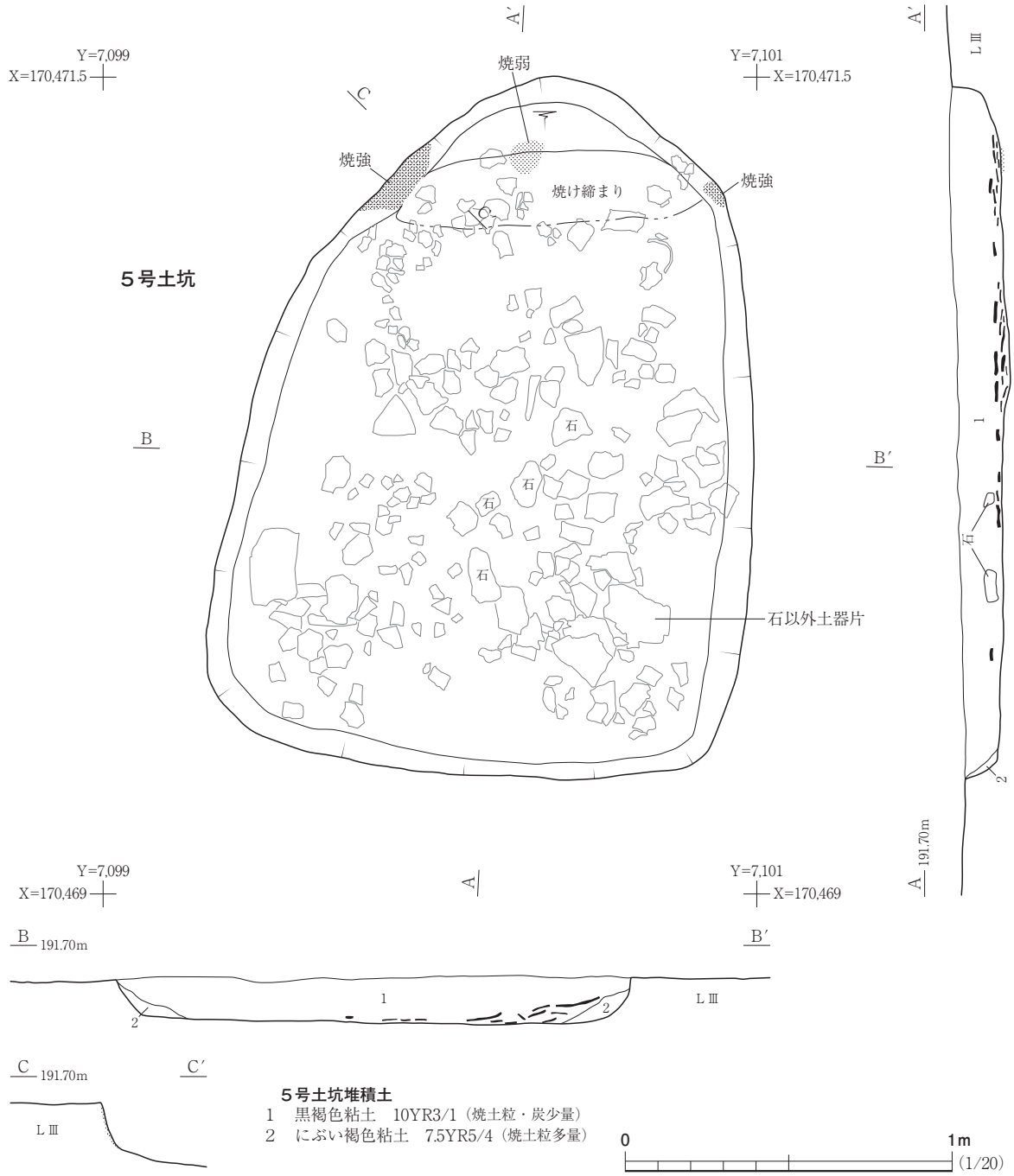


図26　５号土坑

の口縁部から胴部中位までの破片で，口縁端部を受け口状に形作っている。

本土坑は，６号土坑同様に建物跡群に伴う廃棄坑と考えている。また，北隣の６号土坑から出土した破片と接合した土師器杯図30－13が出土している。このことから，本土坑と６号土坑が機能した新旧関係はよく分からないが，概ね同時期に開口していた廃棄坑と考えている。年代は，出土遺物の特徴から，９世紀前半頃と考えている。（阿　部）

８号土坑　ＳＫ08（図29，写真20）

本土坑は，Ａ区西側のＥ13グリッドに位置し，ＬⅡａ上面で確認した。東５ｍに１号掘立柱建物跡，北５ｍに３号掘立柱建物跡がある。平面形は南北に長い隅丸長方形で，西辺は削平により消失している。規模は長辺108㎝，短辺は残存部最大で68㎝，確認面からの深さは18㎝である。底面はほぼ平坦な長方形で，周壁は底面から緩やかに立ち上がる。堆積土は，３層に分けられ，堆積状況から自然堆積と判断した。遺物は，１層中位から平安時代の土師器杯の細片が10点と，クル

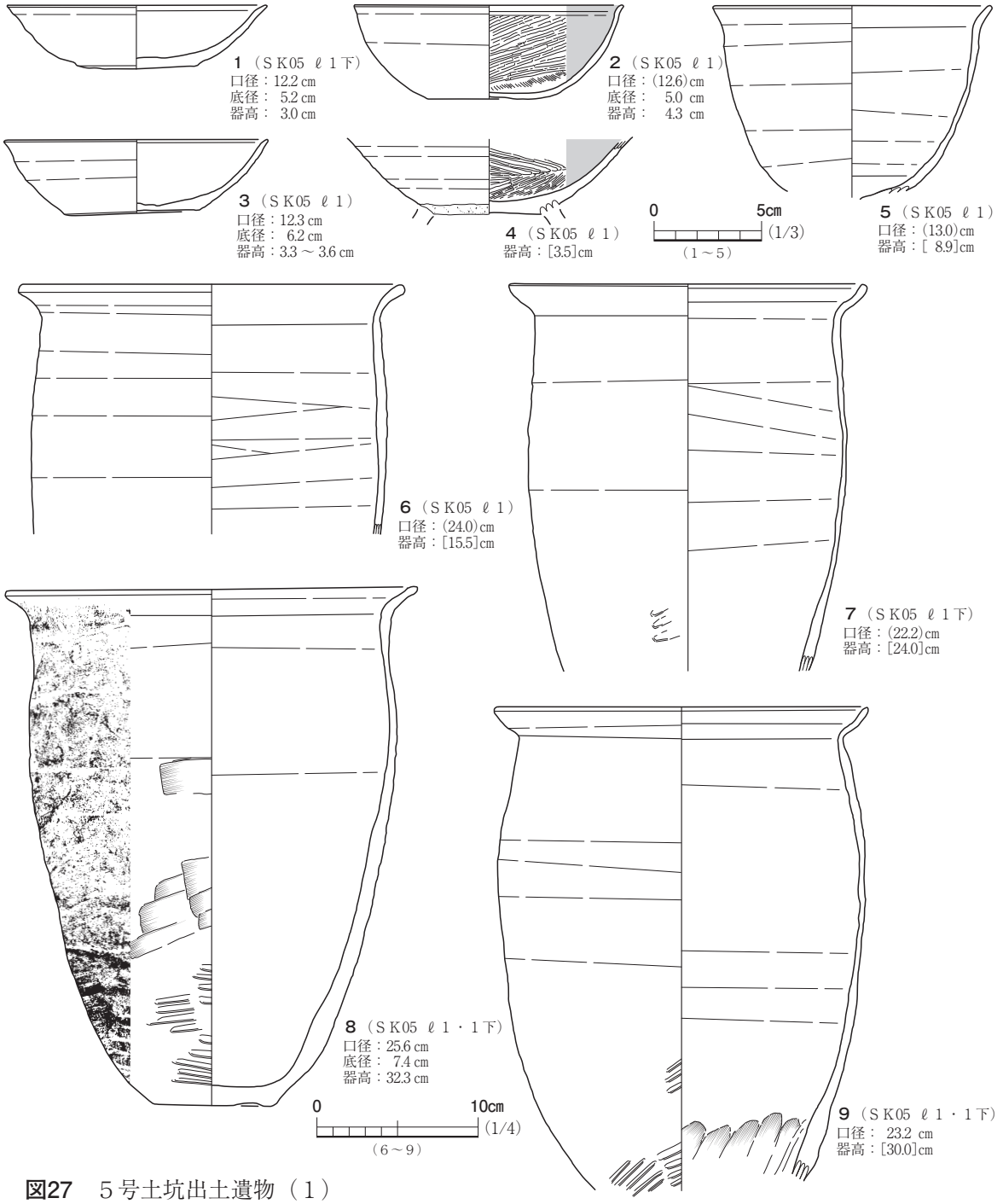


図27　５号土坑出土遺物（１）

ミ大の焼土塊が計200ｇほど出土した。本土坑周辺部のＬⅡａ上面で，同様の土師器細片が少なからず出土している。本土坑は，隣接する建物跡群に伴う廃棄坑と考えている。年代は，出土遺物が少なく明確ではないが，周辺の建物群と同時期の９世紀前半頃と考えている。

９号土坑　ＳＫ09（図29，写真20）

本土坑は，Ａ区北側のＧ10グリッドに位置し，ＬⅢ上面で検出した。北東12ｍに18号溝跡，西11ｍに５号土坑・６号掘立柱建物跡がある。平面形はほぼ円形で，直径は110～120㎝，確認面からの深さは26㎝である。底面は平坦で，周壁は底面からやや急角度に立ち上がる。堆積土はＬⅢ土塊を多く含んだ２層に分けられ，人為堆積と判断した。土中から遺物は出土していない。

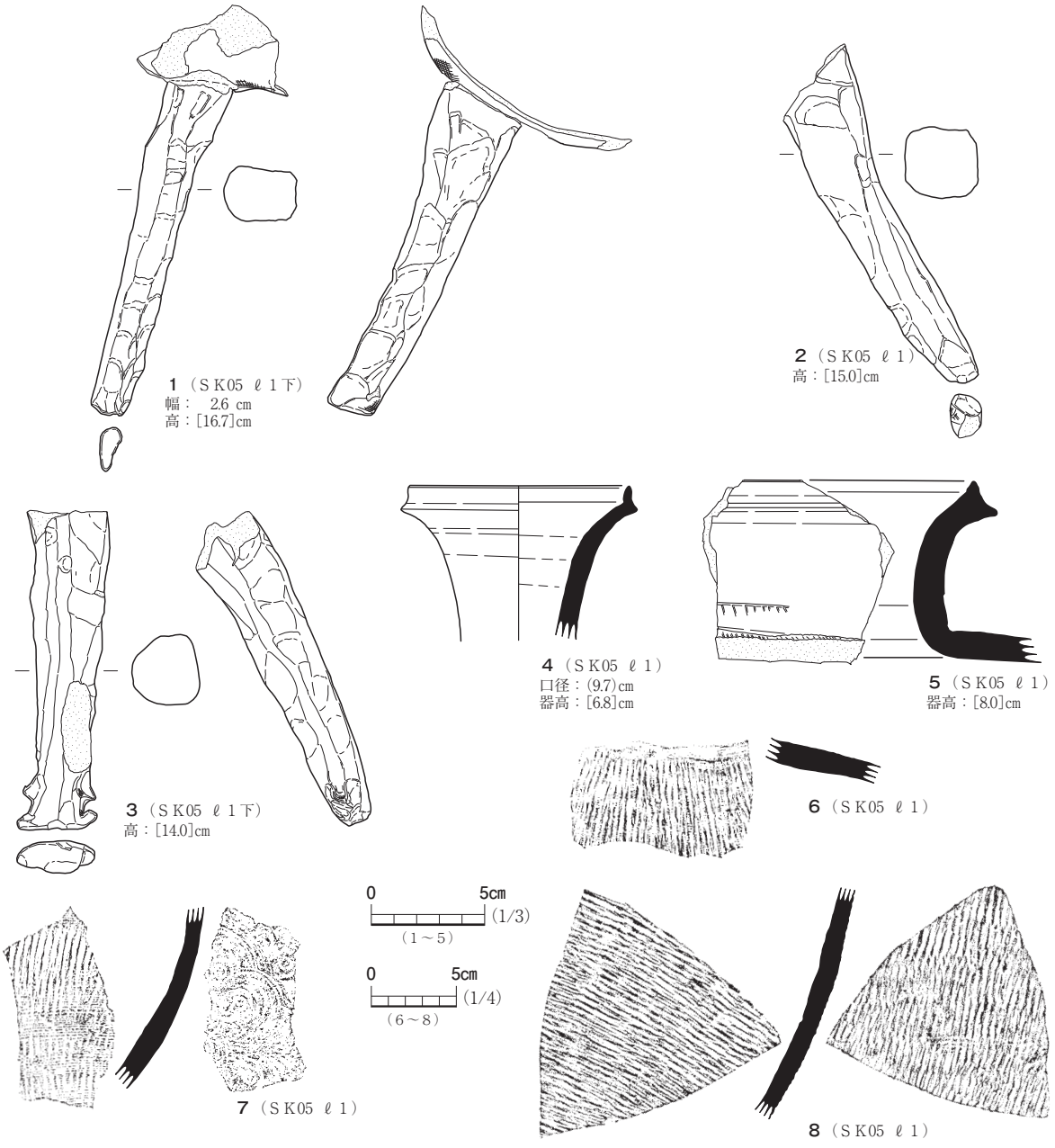
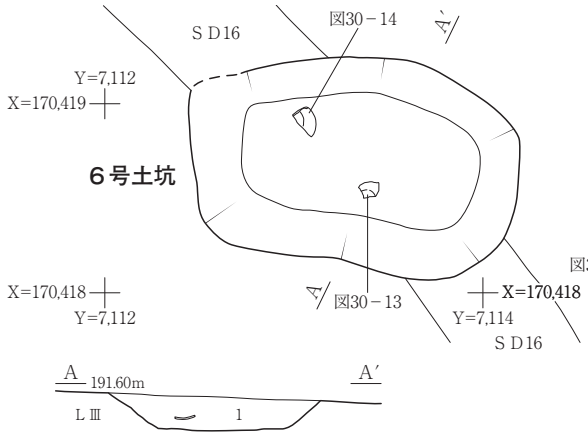
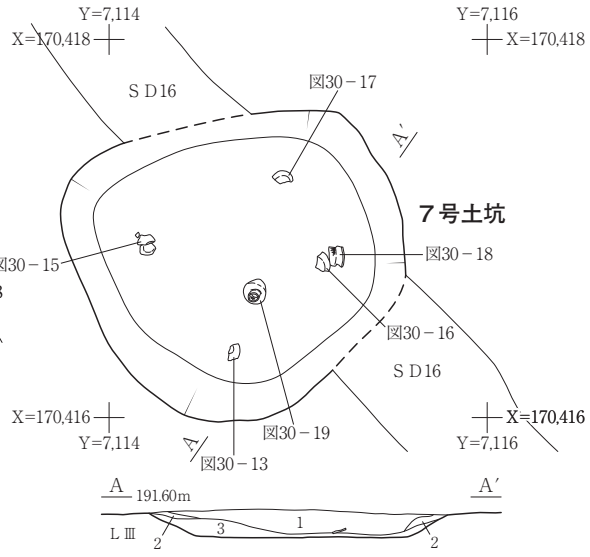


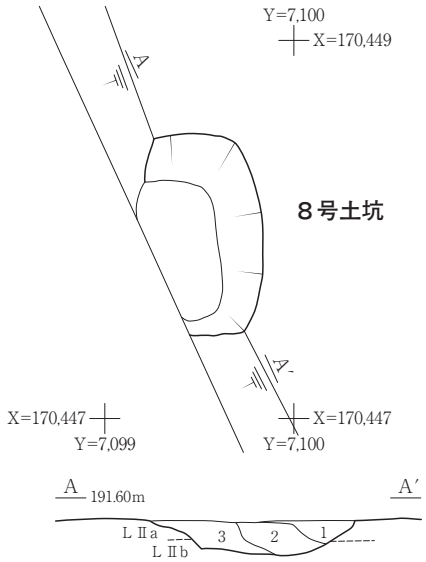
図28　５号土坑出土遺物（２）



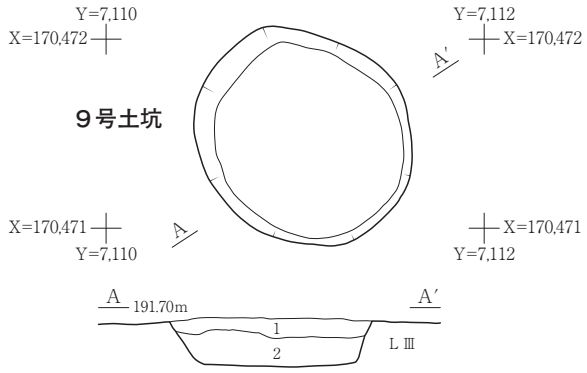
6号土坑堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/4（L Ⅲ塊微量含む）



7号土坑堆積土
1　暗褐色粘質土　10YR3/4（L Ⅲ粒微量含む）
2　黒褐色粘質土　10YR2/2（L Ⅱa粒微量含む）
3　黒色粘質土　10YR2/1（炭化物粒微量含む）

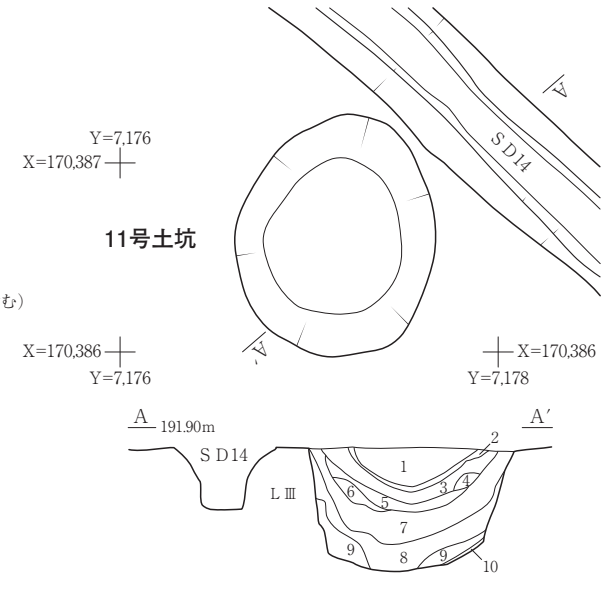


8号土坑堆積土
1　黒褐色粘質土　10YR3/2（焼土塊・炭化物粒微量含む）
2　暗褐色粘質土　10YR3/4（焼土塊・炭化物粒少量含む）
3　黒色粘質土　10YR2/1（炭化物粒微量含む）



9号土坑堆積土
1　にぶい黄褐色粘質土　10YR5/3（L Ⅲ塊多量含む）
2　灰黄褐色粘質土　10YR6/2（L Ⅱ塊少量，L Ⅲ塊多量含む）

11号土坑堆積土
1　暗オリーブ灰色砂質土　2.5GY4/1（細砂粒多量含む）
2　オリーブ黒色粘質土　7.5Y3/2（細砂粒微量含む）
3　暗オリーブ灰色砂質土　2.5GY4/1（細砂粒多量含む）
4　灰黄褐色粘質土　10YR4/2（細砂粒少量含む）
5　オリーブ黒色粘質土　7.5Y3/2（細砂粒微量含む）
6　にぶい黄褐色粘質土　10YR4/3（細砂粒少量含む）
7　オリーブ黒色粘質土　7.5Y3/2（細砂粒少量，L Ⅲ塊・粒多量含む）
8　暗オリーブ灰色砂質土　5GY4/1（細砂粒微量含む）
9　灰色砂質土　10Y4/1（細砂粒・L Ⅲ粒微量含む）
10　黒色土　10Y2/1（炭層）



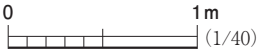


図29　6～9・11号土坑

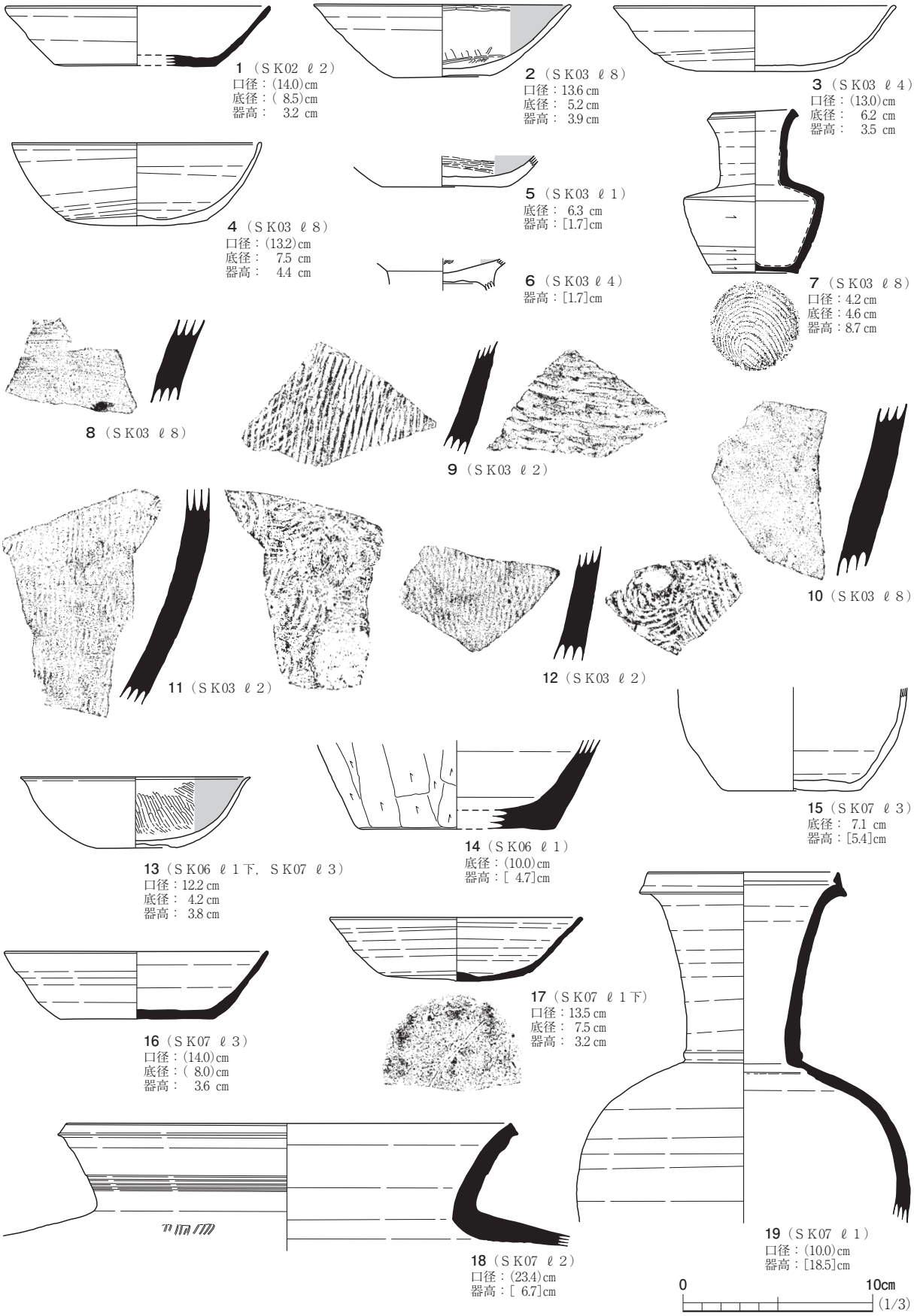

1（SK02 ℓ2）
口径：(14.0)cm
底径：(8.5)cm
器高： 3.2 cm
2（SK03 ℓ8）
口径：13.6 cm
底径： 5.2 cm
器高： 3.9 cm
3（SK03 ℓ4）
口径：(13.0)cm
底径： 6.2 cm
器高： 3.5 cm
4（SK03 ℓ8）
口径：(13.2)cm
底径： 7.5 cm
器高： 4.4 cm
5（SK03 ℓ1）
底径： 6.3 cm
器高：[1.7]cm
6（SK03 ℓ4）
器高：[1.7]cm
7（SK03 ℓ8）
口径：4.2 cm
底径：4.6 cm
器高：8.7 cm
8（SK03 ℓ8）
9（SK03 ℓ2）
10（SK03 ℓ8）
11（SK03 ℓ2）
12（SK03 ℓ2）
13（SK06 ℓ1下，SK07 ℓ3）
口径：12.2 cm
底径： 4.2 cm
器高： 3.8 cm
14（SK06 ℓ1）
底径：(10.0)cm
器高：[4.7]cm
15（SK07 ℓ3）
底径： 7.1 cm
器高：[5.4]cm
16（SK07 ℓ3）
口径：(14.0)cm
底径：(8.0)cm
器高： 3.6 cm
17（SK07 ℓ1下）
口径：13.5 cm
底径： 7.5 cm
器高： 3.2 cm
18（SK07 ℓ2）
口径：(23.4)cm
器高：[6.7]cm
19（SK07 ℓ1）
口径：(10.0)cm
器高：[18.5]cm
0
10cm
(1/3)

図30　土坑出土遺物

本土坑は，小型の円形土坑であるが，出土遺物がなく，周辺の遺構からも離れた位置にあるため，年代や性格を明確にすることはできなかった。

11号土坑　ＳＫ11（図29，写真20）

本土坑は，Ｂ区北東側のＭ19グリッドに位置し，ＬⅢ上面で検出した。直ぐ北に14号溝跡，東2.5ｍに21号溝跡がある。平面形は南北に長い楕円形である。規模は長軸1.2ｍ，短軸1.05ｍ，確認面からの深さは64㎝である。底面は中央部がやや窪み，周壁は底面から急角度で立ち上がる。堆積土は10層に分けられ，状況から自然堆積と判断した。堆積土中から遺物は出土していない。

本土坑は小型の円形土坑であるが出土遺物がなく，他遺構との重複もないため年代や性格を明確にすることはできなかった。（菊　田）

第３章　　総　　括

西坂才遺跡１次調査で確認した遺構は，建物跡８棟，溝跡20条(建物跡の雨落ち溝と考えたＳＤ13・15・23の３条は除外)，土器焼成坑１基，井戸跡１基そして土坑８基を確認した。ここでは，以下の４項目について若干の検討と事実報告の整理を加えて総括とする。

１．平安時代の遺構

ここでは，西坂才遺跡１次調査で確認した平安時代の遺構は，建物跡８棟(ＳＢ01～08)，溝跡11条(ＳＤ01・05・06・14・16～18。ＳＤ13・15・23の３条はＳＢ01の雨落ち溝)，土器焼成土坑１基(ＳＫ05)，井戸跡１基(ＳＫ03)が該当している。平安時代の遺構の変遷を以下に整理する。

①８世紀後半～９世紀初め頃　　ａ：６・14号溝跡(ＳＤ14は鶴沼Ｃまで延伸。排水用溝)
　　ｂ：16・18号溝跡
②９世紀前半頃　　ａ：１・５・17・21号溝跡(真北方向を意識した区画溝)
　　ｂ：１・３・６号掘立柱建物跡＋３号土坑(井戸跡)
　　ｃ：２・４・７・８号掘立柱建物跡＋３号土坑(井戸跡)
③９世紀末～10世紀初め頃　　ａ：５号土坑(土器焼成坑)

①の段階について整理する。南東から北西へと延びる４条の溝跡は，第３節で説明した通り，延伸方向が概ね一致しているものの，溝跡の断面形状と堆積土の違いから①ａと①ｂに分けることができた。しかし，①ａと①ｂの新旧関係と，本来的に２条１組であったのか，いずれも２条１組であったとしてどのような機能をはたしていたのか，排水用として機能した痕跡のない①ｂの機能は何かなど，複数の疑問が残る。

排水用として機能した①ａの６・14号溝跡に挟まれた空間幅を測ると，Ｂ区に南東において約31ｍであった。６・14号溝跡の２条が，道跡の両側の側溝として機能したとしても，官道でもない道幅が30ｍを超えるのはあまりに広すぎる。しかし，道として機能しないのであれば，排水用として機能した溝跡（ＳＤ14）が，北西に向かって鶴沼Ｃ遺跡12号溝跡まで延伸するものだろうか。

そこで，６・14号溝跡については，２本の道跡に伴った，どちらか一方の側溝と考えることはできないだろうか。それらの道跡の新旧関係は不明だが，一度作り替えがあり，同時に２本の道が機能したとは想定はしない。後世の削平によって，６号溝跡と対になる側溝と，14号溝跡と対になる側溝は，既に失われてしまっている状況が，西坂才遺跡で確認できた２条の溝跡と理解できないだろうか。想定される２本の道跡は，他の古道の類例から推定幅10ｍ未満と考えておきたい。

②の段階，９世紀前半代について整理する。①の段階で南東から北西に向かって延びる溝跡が埋没した後，真北(真東)方向を意識した区画溝跡(ＳＤ01・05・17・21)を掘り込んだ②ａ段階へと

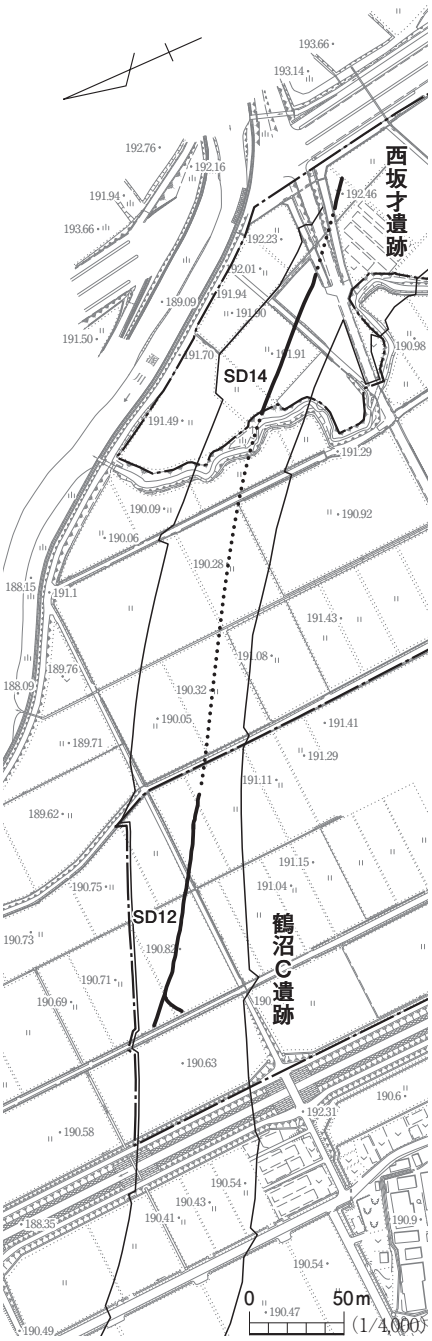


図31　古代溝跡位置図

移行する。この区画溝を意識して，②ｂ段階に南北方向に３棟，②ｃ段階に東西方向に４棟の建物跡を建てる。②ｂ・②ｃ段階の新旧関係については，遺構の重複がなく不明確である。また，ここで漏れている５号掘立柱建物跡については，軸線方向が異なり，②ｂ・②ｃのいずれにも属していない。おそらくもう一つの建物跡のまとまりがＡ区東側にあると考えられる。建物跡群の廃絶した後，③段階に５号土坑（土器焼成坑）が機能するという変遷案を考えている。

２．円面硯について（表１）

西坂才遺跡では，１号掘立柱建物跡に伴う雨落ち溝（ＳＤ15）から，円面硯片図９－６が１点出土している。この土器の細かい特徴は第２章第２節のとおりであるが，端的に高台付埦を上下逆さにし，高台端部内側を硯面に見立てて製作している。

西坂才遺跡の位置する周辺の遺跡からは，円面硯などの他に土器を転用した硯なども少なからず出土している。しかし，硯が出土したからといって，出土遺跡が郡衙に関連したとは容易には言い難い状況である。しかしながら，これらの硯をもてる者と，そうでない者が存在していた状況があったという背景は整理しておく必要がある。そこで，表１に本遺跡周辺から出土した円面硯と風字硯を集成した。その結果，計14遺跡から計34片出土している。また，大半の硯は大戸窯跡産で，これらの時期は８世紀末～９世紀代とやや幅がある。

すべての円面硯は，平城京出土陶硯分類（奈文研2007）によると，円面硯の中でも輪状の脚部がついた圏足円面硯に分類される。本遺跡から出土した円面硯は，細分類によると硯面から墨汁をためる凹みへ緩やかに下降する「圏足円面硯ｂ」にあてはまる。本遺跡以外から出土した硯も，その多くが本遺跡と同じ「圏足円面硯ｂ」か，硯面が平坦な「圏足円面硯ｃ」のいずれかにあてはまる。

これらの出土地点に注目すると，郡山遺跡を中心とした半径３㎞圏内の12遺跡（表１№１～28）から，陶硯が28点出土している。また，近辺の12遺跡のうち唯一，湯川村殿田遺跡のように竪穴住居跡と建物跡が併存して遺跡から出土する点も，陶硯の出土率と共に注視する必要があるようだ。

３．脚付き鉢について（表２）

５号土坑とした土師器焼成坑から出土した土師器脚付き鉢については，会津若松市内での出土例は少ない。脚付き鉢の機能としては，調理具でなく祭祀的な香炉などとして用いられていた可能性が高い。本遺跡も含め５遺跡において合計６例が出土している(表２)。この土器の器形は，郡山遺跡から出土している破片資料(五十嵐2006)が参考になる。郡山遺跡の資料は，推定口径は約26㎝，ロクロ成形の内湾した体部から口縁部が大きく外反し，脚部は体部下位に付く。脚の本数は，この器種が金属器の模倣であることから，基本３本１組で構成されていたと考えている。

脚部の形状，脚部・鉢部との接続方法を整理すると表２のようになる。脚部の形状は，①脚先に向かって幅を減じてゆく先細脚と，②脚の付け根から脚先まで幅に変化のない寸胴脚の２つがある。鉢部と脚の接合の仕方を見ると，ａ：本遺跡のように鉢部に脚をなでつけるタイプと，ｂ：殿田遺跡のように鉢部に孔をあけ，脚部を差し込むタイプの２つがある。出土した遺構の年代からすると，脚の接合形状が寸胴形(②)で，鉢に穿孔し脚を差し込んだ「ｂ」タイプの脚付き鉢が，９世紀前半代の殿田遺跡から出土しており，本遺跡近辺の中では古いタイプと考えられる。しかし，脚の接合方法「ｂ」については，山形県鶴岡市万治ケ沢遺跡(鈴木2009)での確認例をみると，10世紀前葉頃まで続いていることが分かり，脚を差し込んだ脚装着方法が古いとは簡単には言い難いようである。

この土器の分布は，前述した円面硯の分布と重なり，郡山遺跡を中心とした半径３㎞圏内で４遺跡見つかっている点も興味深い。

４．結　　語

平安時代の西坂才遺跡の周辺，溷川西岸の平安時代の遺跡について整理し結語とする。

溷川に流れ込む小河川が複雑に入り組んだ西岸の河岸段丘および自然堤防上には，西坂才遺跡を含めて複数の遺跡が，概ね同時期に集って立地している。また，本遺跡の他，鶴沼Ｃ・鶴沼Ｂ(木流)・西木流Ｃ遺跡の建物構成を見ると，中・小規模な側柱・総柱建物跡だけで構成されている。さらに，一般集落にない特殊な遺物(陶硯など)が，溷川西岸の９遺跡(表１№１～16，表２)から出土する。

以上のことから，溷川西岸に集中した平安時代の遺跡について類推すると，個々の遺跡でなんらかの職務を所管し，このあたり一帯(郡山遺跡を中心とした半径３㎞圏内)で一つの役所的な機能を果たしていたと仮定することはできないのだろうか。また，これらの所轄間の移動には，小船の利用も必要だが，やはり陸路(橋)の構築も必須であろうと考えている。　　(阿　部)

表１　会津若松市高野地区内　円面硯出土遺跡一覧

No.	出土遺跡	出土遺構	脚部外面線刻							透孔形状	圏足硯分類	備　考	時　期	序章図３中番号
			植物文？	斜＋縦	斜格子	縦線	三角文	ナデ	不明					
1	西坂才遺跡	１号掘立柱建物跡	○							丸	b		９世紀前葉	2
2	鶴沼Ｃ遺跡	１号流路跡										風字硯	９世紀	1
3	鶴沼Ｂ遺跡	北区１号流路跡			○					丸	－		９世紀	6
4	西木流Ｃ遺跡	Ⅰ・Ⅱ区遺構外										風字硯	９世紀後葉	4
5	下高野Ａ遺跡	１号住居跡		○						丸	－		９世紀前葉	91
6	上吉田遺跡	河川流路跡			○					丸	b		９世紀	92
7		河川流路跡										風字硯	９世紀	
8	上吉田Ｃ遺跡	ｂ区遺構外					○			丸	－		９世紀前葉	93
9		ｃ区55号土坑							○	－	c		８世紀末～９世紀前葉	
10		トレンチ(34T)				○				－			９世紀中葉	
11		トレンチ(53T)							○	－	c		９世紀中葉	
12	矢玉遺跡	３号溝跡							○	－	b		９世紀中葉	83
13		４号溝跡			○					－	b		９世紀前葉	
14		16号性格不明遺構			○					丸	b		８世紀末～９世紀前葉	
15		Ｃ区遺構外			○					－	－		９世紀中葉	
16	殿田遺跡	１号溝跡							○	－	c		９世紀	90
17	郡山遺跡	205号土坑						○		丸	b		９世紀	69
18		301号溝跡	○							－	－			
19		２号河川跡(Ｓ区)							○	長方形	c			
20		遺構外(Ｆ区)						○		長方形	a			
21		遺構外(Ｌ区Ｙ16-9)			○					－	b			
22		遺構外(Ｗ16)			○						－			
23	金屋遺跡	遺構外										風字硯	９世紀	89
24								○		丸	－		９世紀	
25					○					－	－		９世紀	
26	屋敷遺跡	遺構外										平頭風字硯	９世紀	94
27		12号特殊遺構										風字硯	９世紀後半	
28		22号掘立柱建物跡			○					丸	c	若松市2004	９世紀中葉	
29	大戸古窯群	上雨屋12号窯跡							○	－	c		８世紀末～９世紀前葉	－
30				○						－	c		８世紀末～９世紀前葉	
31						○				－	b		８世紀末～９世紀前葉	
32		南原67号窯跡								－	－		９世紀中葉	－
33					○					－	－		９世紀中葉	
34	船ケ森西遺跡	４号井戸跡						○		長方形	c		８世紀	－

表２　会津若松市高野地区周辺　脚付鍋出土遺跡一覧

No.	遺跡名	出土遺構	先細脚	寸胴脚	脚ナデ付	脚差込	時　期	備　考	序章図３中番号
1	西坂才遺跡	５号土坑	○		○		９世紀末～10世紀初		2
2	西木流Ｃ遺跡	６号溝跡	－	－	○		９世紀中葉		4
3	下高野Ａ遺跡	トレンチ（10T）	○				９世紀前葉		91
4		トレンチ（41T）			○		９世紀中葉		
5	殿田遺跡	２号住居跡		○		○	９世紀前半		90
6		２号河川跡（Ｑ区）		○			９世紀		
7	郡山遺跡	２号河川跡（Ｓ区）		○			９世紀	脚のみ計６本	69

参考文献

皆川隆男　1985　「大久保須恵器窯跡（試掘）」『新鶴村遺跡発掘調査報告書Ⅲ』　新鶴村教育委員会

藤谷　誠ほか　1990　「上吉田遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告９』　福島県教育委員会

小熊博治ほか　1990　「船ケ森西遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告９』　福島県教育委員会

藤谷　誠ほか　1991　「屋敷遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告12』　福島県教育委員会

古川利意　1998　『新鶴村遺跡試掘調査報告書』　新鶴村教育委員会

石田明夫ほか　1999　「矢玉遺跡」『若松北部県営ほ場整備発掘調査報告書Ⅰ』　会津若松市教育委員会

荒木 隆・
石田明夫ほか　2000　『若松北部県営ほ場整備発掘調査報告書Ⅱ』　会津若松市教育委員会

五十嵐純一　2004　『郡山遺跡Ⅰ』　河東町教育委員会

五十嵐純一　2006　『金屋遺跡・郡山遺跡Ⅱ』　会津若松市教育委員会

諸星良一ほか　2006　「殿田遺跡」『湯川中学校屋内運動場建設事業に伴う発掘調査報告書』　湯川村教育委員会

川越俊一ほか　2007　『平城京出土陶硯集成Ⅱ　平城京・寺院』　奈良文化財研究所

鈴木良仁　2009　『万治ケ沢遺跡発掘調査報告書』　財団法人山形県埋蔵文化財センター

福田秀生ほか　2011　「桜町遺跡（３次）」『会津縦貫北道路遺跡調査報告11』　福島県教育委員会

福島県教育委員会　2012　『福島県内遺跡分布調査報告18』，2012『福島県内遺跡分布調査報告19』，
2013　『福島県内遺跡分布調査報告20』

五十嵐純一　2013　『郡山遺跡Ⅷ（第10･11次調査）』　会津若松市教育委員会

矢木秀典　2013　『長谷地Ａ遺跡』　会津若松市教育委員会

付　章　自然科学分析

第１節　出土炭化物等の放射性炭素年代測定について

（株）加速器分析研究所

１　測定対象試料

西坂才遺跡は，福島県会津若松市高野町中沼字西坂才（北緯37° 32′ 12″，東経139° 59′ 48″）に所在する。測定対象試料は，遺構から出土した木炭等の合計５点である（表１）。

２　測定の意義

建物跡等遺構の継続期間を明らかにする。

３　化学処理工程

（１）メス・ピンセットを使い，根・土等の付着物を取り除く。

（２）酸－アルカリ－酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後，超純水で中性になるまで希釈し，乾燥させる。AAA 処理における酸処理では，通常1mol/ℓ（1M）の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い，0.001M から1M まで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1M に達した時には「AAA」，1M 未満の場合は「AaA」と表１に記載する。

（３）試料を燃焼させ，二酸化炭素（CO_2）を発生させる。

（４）真空ラインで二酸化炭素を精製する。

（５）精製した二酸化炭素を鉄を触媒として水素で還元し，グラファイト（C）を生成させる。

（６）グラファイトを内径１㎜のカソードにハンドプレス機で詰め，それをホイールにはめ込み，測定装置に装着する。

４　測 定 方 法

加速器をベースとした^{14}C-AMS 専用装置（NEC 社製）を使用し，^{14}C の計数，^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C），^{14}C 濃度（^{14}C/^{12}C）の測定を行う。測定では，米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx Ⅱ）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

５　算 出 方 法

（１）δ^{13}C は，試料炭素の^{13}C 濃度（^{13}C/^{12}C）を測定し，基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表１）。AMS 装置による測定値を用い，表中に「AMS」と注記する。

（2）^{14}C 年代（Libby Age：yrBP）は，過去の大気中 ^{14}C 濃度が一定であったと仮定して測定され，1950年を基準年（0yrBP）として遡る年代である。年代値の算出には，Libby の半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。^{14}C 年代は δ^{13}C によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に，補正していない値を参考値として表2に示した。^{14}C 年代と誤差は，下1桁を丸めて10年単位で表示される。また，^{14}C 年代の誤差（±1 σ）は，試料の ^{14}C 年代がその誤差範囲に入る確率が68.2％であることを意味する。

（3）pMC（percent Modern Carbon）は，標準現代炭素に対する試料炭素の ^{14}C 濃度の割合である。pMC が小さい（^{14}C が少ない）ほど古い年代を示し，pMC が100以上（^{14}C の量が標準現代炭素と同等以上）の場合 Modern とする。この値も δ^{13}C によって補正する必要があるため，補正した値を表1に，補正していない値を参考値として表2に示した。

（4）暦年較正年代とは，年代が既知の試料の ^{14}C 濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ，過去の ^{14}C 濃度変化などを補正し，実年代に近づけた値である。暦年較正年代は，^{14}C 年代に対応する較正曲線上の暦年代範囲であり，1標準偏差（1 σ = 68.2％）あるいは2標準偏差（2 σ = 95.4％）で表示される。グラフの縦軸が ^{14}C 年代，横軸が暦年較正年代を表す。暦年較正プログラムに入力される値は，δ^{13}C 補正を行い，下一桁を丸めない ^{14}C 年代値である。なお，較正曲線および較正プログラムは，データの蓄積によって更新される。また，プログラムの種類によっても結果が異なるため，年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは，暦年較正年代の計算に，IntCal13データベース（Reimer et al. 2013）を用い，OxCalv4.2較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暦年較正年代については，特定のデータベース，プログラムに依存する点を考慮し，プログラムに入力する値とともに，参考値として表2に示した。暦年較正年代は，^{14}C 年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを明示するために，「cal BC/AD」（または，「cal BP」）という単位で表される。

6　測定結果

測定結果を表1，2に示す。

試料の ^{14}C 年代は，AW-NZS-1が1590 ± 20yrBP，AW-NZS-2が1430 ± 20yrBP，AW-NZS-3が1170 ± 20yrBP，AW-NZS-4が7180 ± 30yrBP，AW-NZS-5が1310 ± 20yrBP である。SB01 P3から出土した2点の間には若干年代差がある。暦年較正年代（1 σ）は，古い方から順に AW-NZS-4が縄文時代早期後葉頃，AW-NZS-1が古墳時代中期から後期頃，AW-NZS-2が古墳時代終末期頃，AW-NZS-5が古墳時代終末期から古代頃，AW-NZS-3が古代頃に相当する（小林編2008，佐原2005）。

試料の炭素含有率を確認すると，AW-NZS-3～5はいずれも50％を超え，化学処理，測定上の問題は認められない。AW-NZS-1は，土塊から木炭を採取する際に，土を完全に除去できなかったことが観察され，炭素含有率は41％と若干低い値であった。AW-NZS-2は，土塊の表面より炭

化物と見られる黒色の物質を集めたが，炭素含有率は35％とやや低い値を示した。AW-NZS-1，2については，測定された炭素の由来に注意を要する。

文　献

Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates，Radiocarbon 51 (1)，337-360

小林達雄編 2008 総覧縄文土器，総覧縄文土器刊行委員会，アム・プロモーション

Reimer，P.J. et al. 2013 IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves，0-50,000 years cal BP，Radiocarbon 55 (4)，1869-1887

佐原眞 2005 日本考古学・日本歴史学の時代区分，佐原眞，ウェルナー・シュタインハウス監修，独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所編集，ドイツ展記念概説　日本の考古学　上巻，学生社，14-19

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of 14C data，Radiocarbon 19 (3)，355-363

表３　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 補正値）

測定番号	試料名	採取場所	試料形態	処理方法	δ^{13}C（‰）（AMS）	δ^{13}C 補正あり	
						Libby Age（yrBP）	pMC（%）
IAAA-132412	AW-NZS-1	SB01　P3　1層（ℓ 1）	木炭	AaA	-24.69 ± 0.28	1,590 ± 20	82.02 ± 0.22
IAAA-132413	AW-NZS-2	SB01　P3　1層（ℓ 1）	炭化物	AaA	-22.21 ± 0.29	1,430 ± 20	83.74 ± 0.21
IAAA-132414	AW-NZS-3	SK05　1層（ℓ 1）	木炭	AAA	-19.18 ± 0.27	1,170 ± 20	86.48 ± 0.23
IAAA-132415	AW-NZS-4	SK03　4層（ℓ 4）	木片	AAA	-28.62 ± 0.26	7,180 ± 30	40.92 ± 0.14
IAAA-132416	AW-NZS-5	SD15　1層（ℓ 1）	木炭	AAA	-25.45 ± 0.25	1,310 ± 20	85.00 ± 0.22

表４　放射性炭素年代測定結果（δ^{13}C 未補正値、暦年較正用^{14}C 年代、較正年代）

測定番号	δ^{13}C 補正なし		暦年較正用（yrBP）	1 σ暦年代範囲	2 σ暦年代範囲
	Age（yrBP）	pMC（%）			
IAAA-132412	1,590 ± 20	82.08 ± 0.22	1,592 ± 21	420calAD-434calAD（12.7%） 455calAD-469calAD（10.2%） 488calAD-534calAD（45.3%）	415calAD-537calAD（95.4%）
IAAA-132413	1,380 ± 20	84.22 ± 0.2	1,425 ± 19	617calAD-647calAD（68.2%）	599calAD-654calAD（95.4%）
IAAA-132414	1,070 ± 20	87.51 ± 0.23	1,167 ± 21	778calAD-791calAD（12.0%） 805calAD-842calAD（24.7%） 860calAD-894calAD（29.3%） 933calAD-936calAD（2.2%）	773calAD-899calAD（84.9%） 923calAD-948calAD（10.5%）
IAAA-132415	7,240 ± 30	40.62 ± 0.14	7,177 ± 27	6058calBC-6019calBC（68.2%）	6077calBC-6001calBC（95.4%）
IAAA-132416	1,310 ± 20	84.93 ± 0.22	1,305 ± 20	666calAD-695calAD（41.7%） 702calAD-709calAD（5.6%） 746calAD-764calAD（20.8%）	661calAD-721calAD（67.2%） 741calAD-768calAD（28.2%）

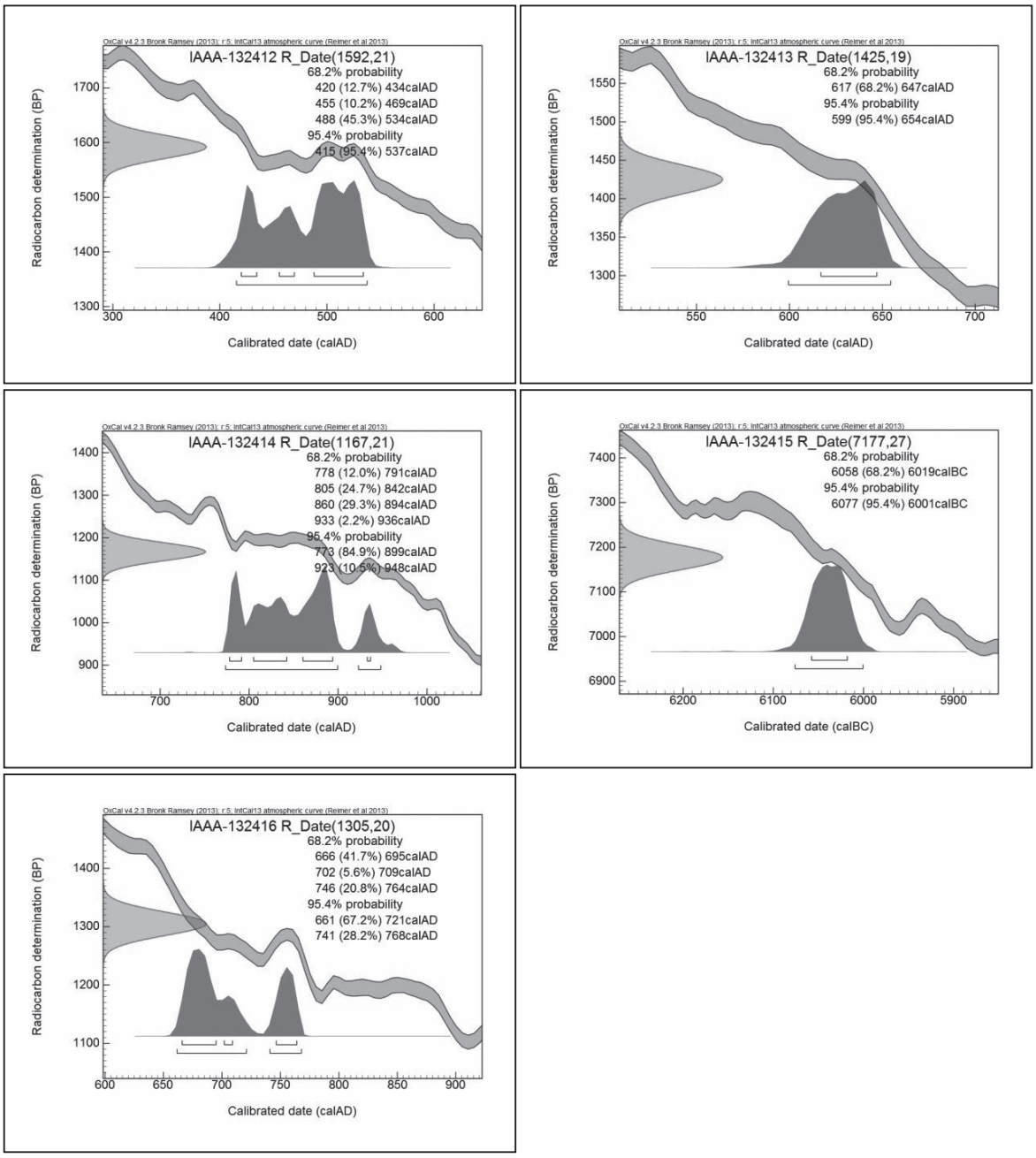


図32　暦年較正年代グラフ

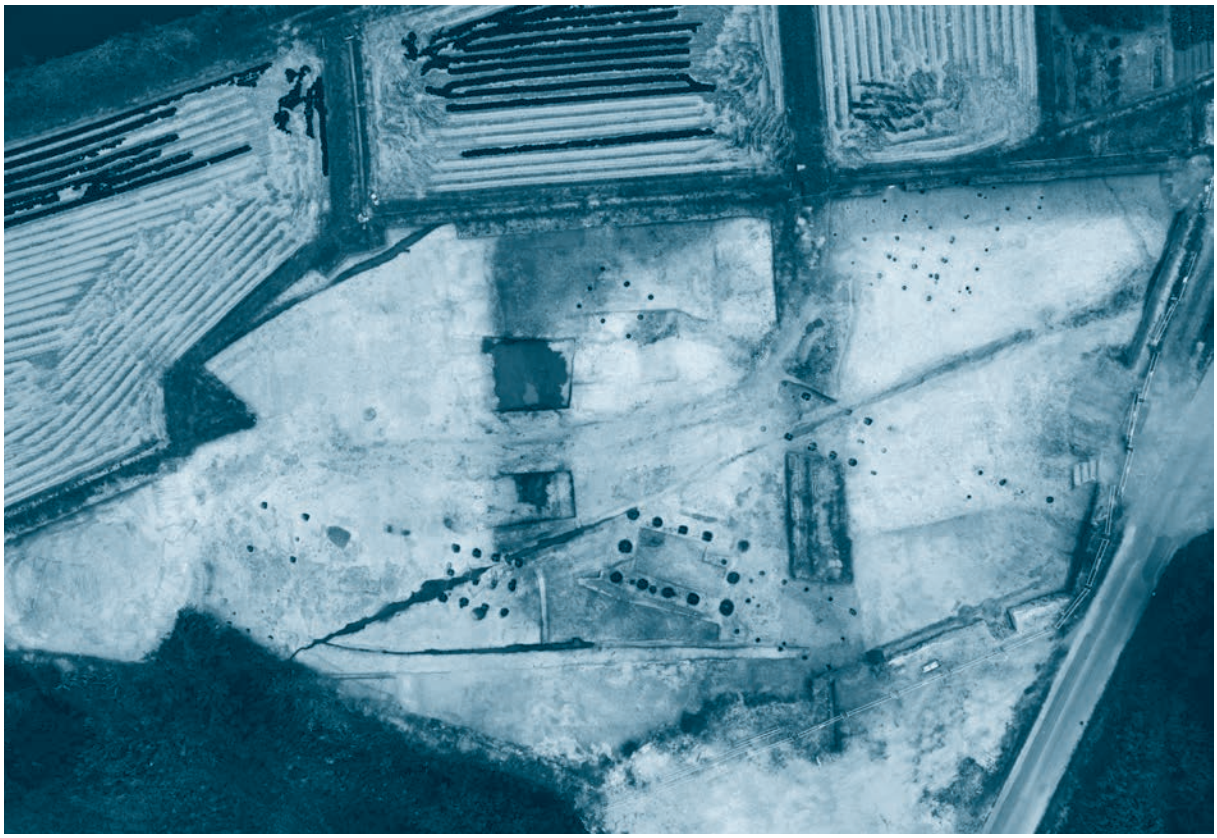
写　真　図　版

第２編　西坂才遺跡（１次）

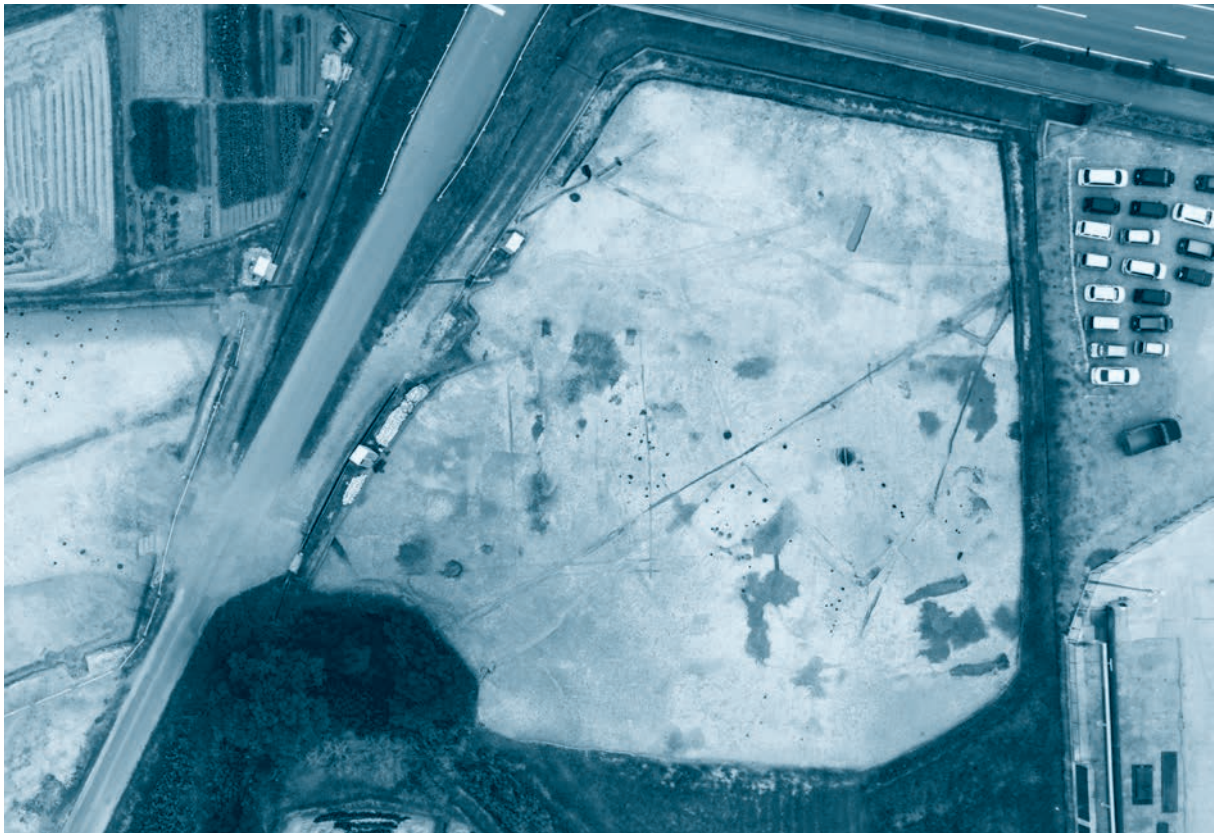
1　調査区全景（真上から）

２　調査区Ａ区調査前全景（南東から）

３　調査区全景（北西から）

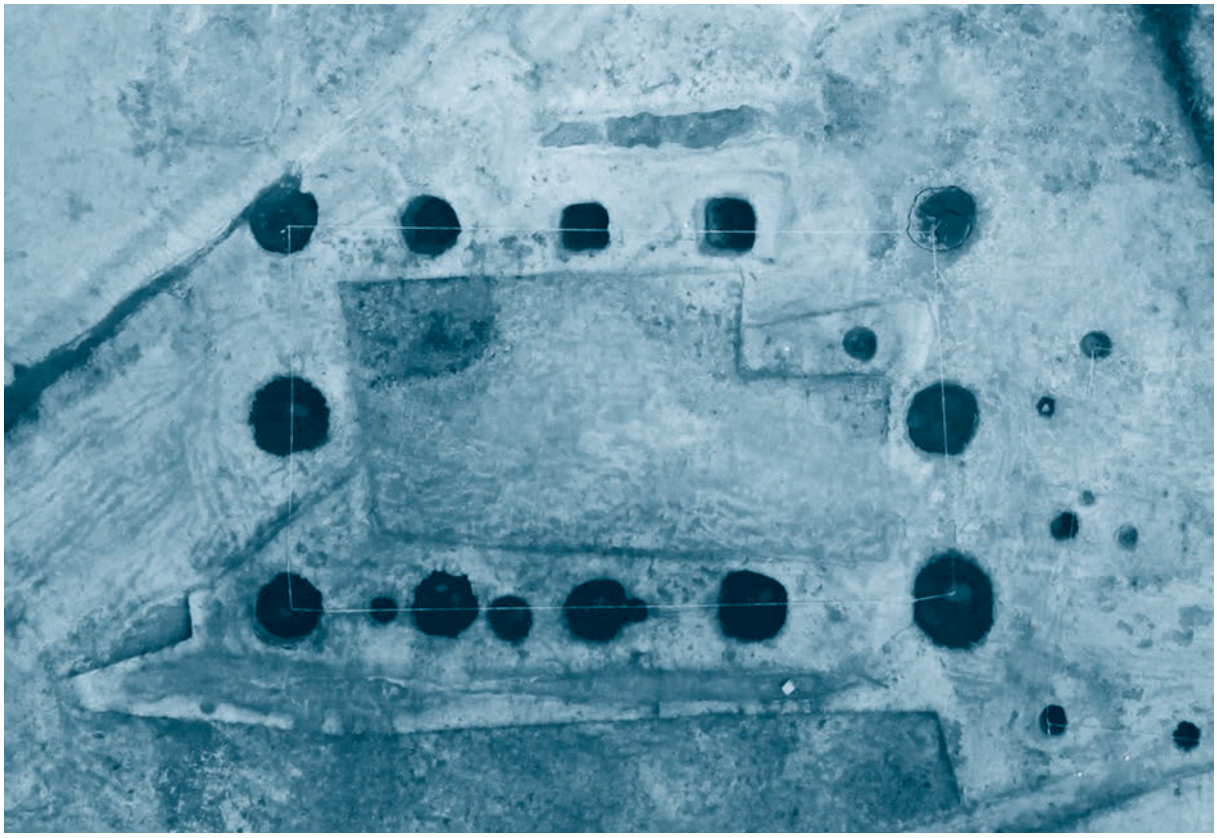


4　調査区Ａ区全景（真上から）

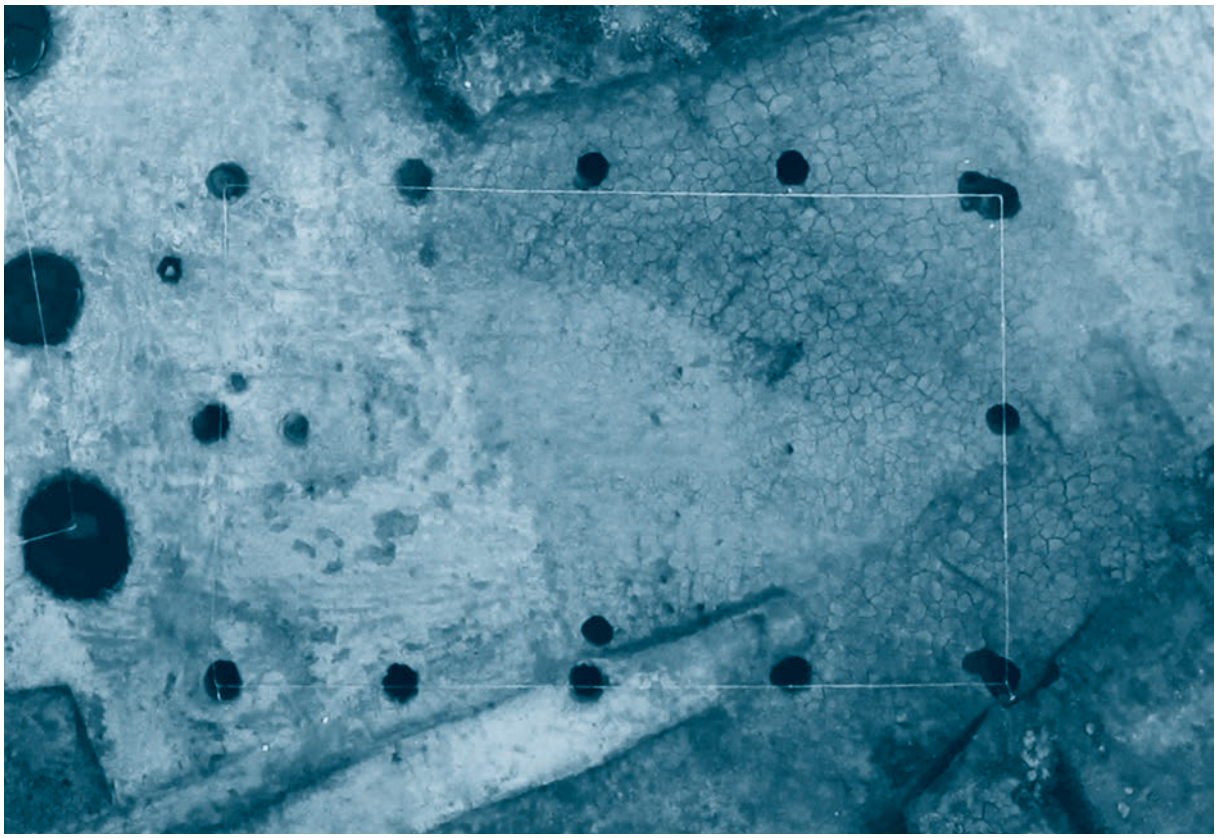


5　調査区Ｂ区全景（真上から）

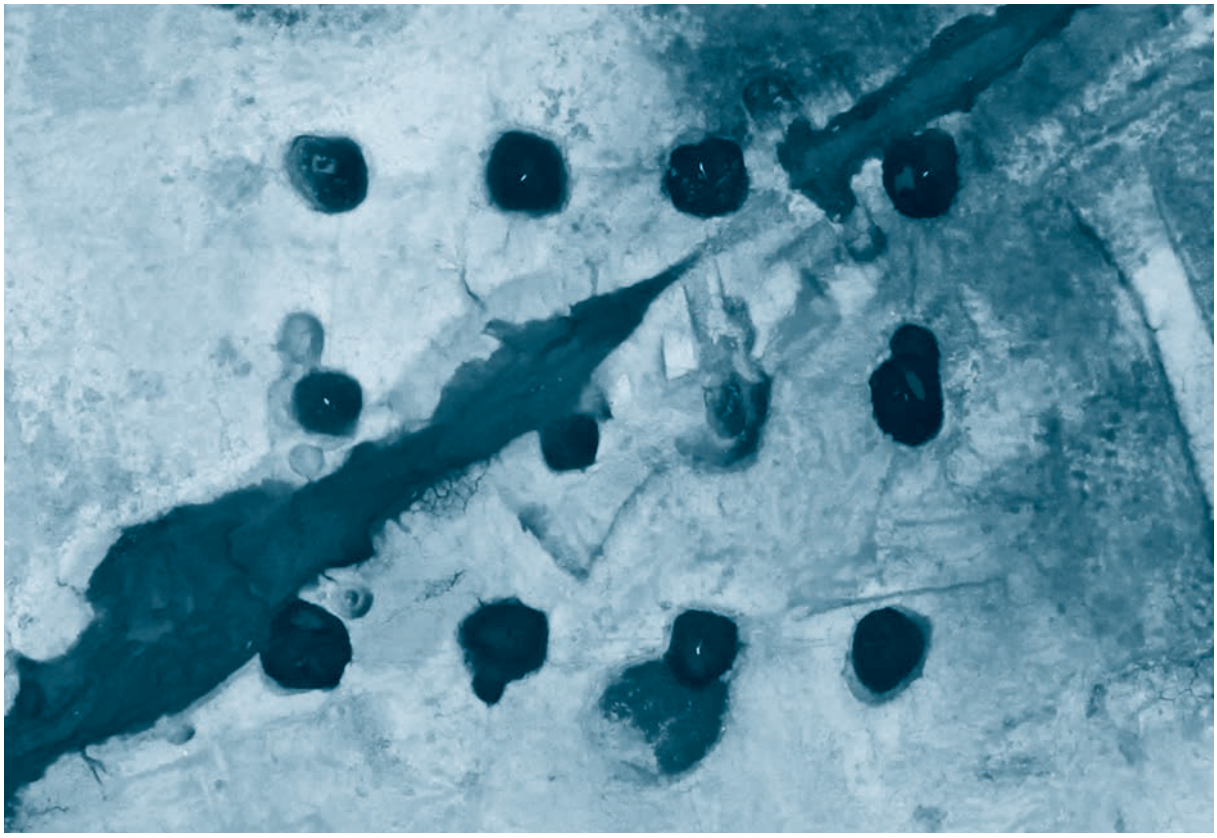
６　１・３号掘立柱建物跡（北から）



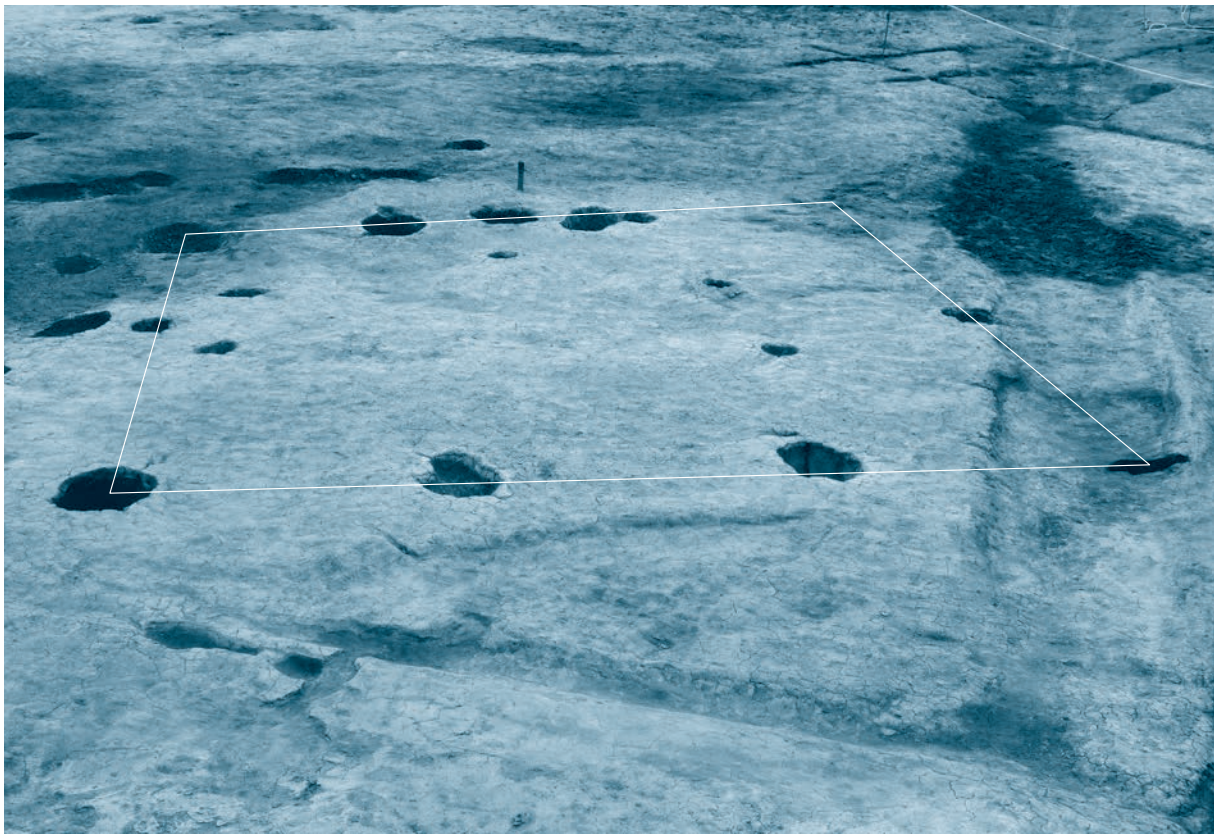
７　１号掘立柱建物跡（真上から）



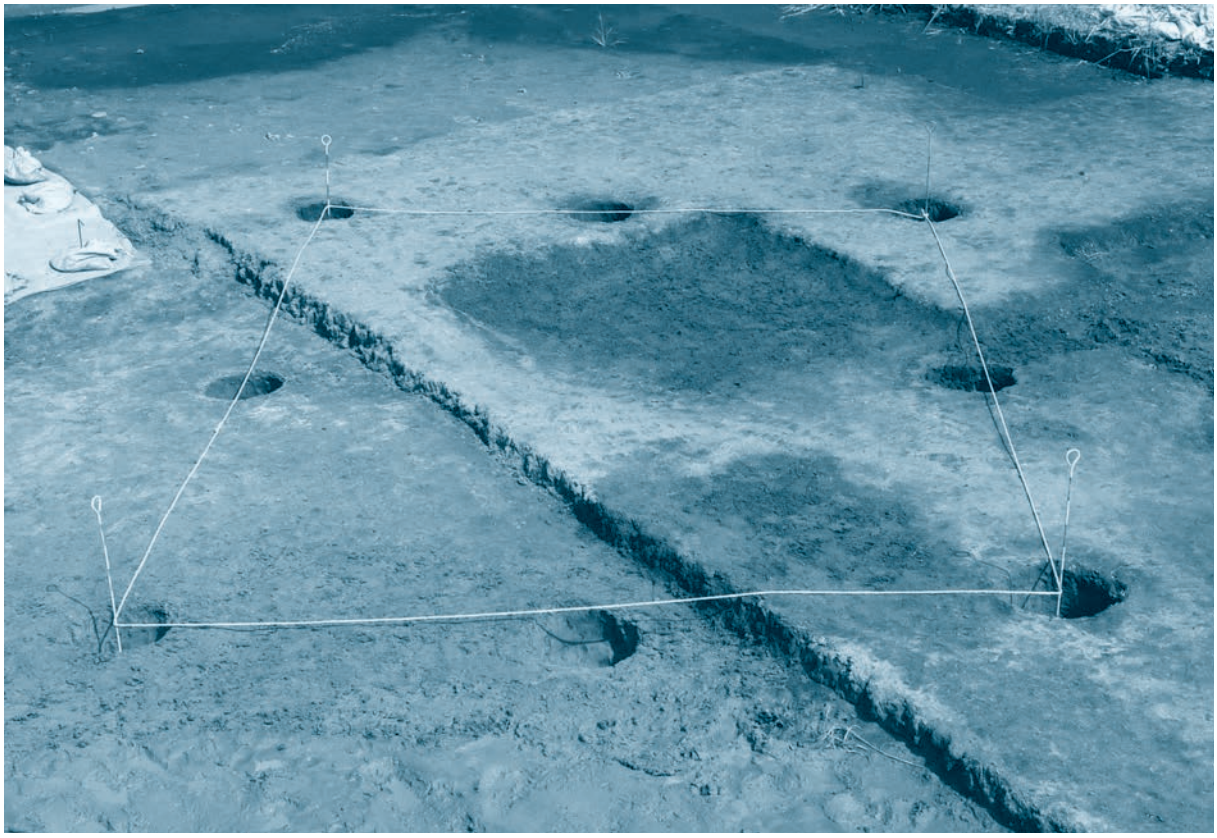
8　２号掘立柱建物跡（真上から）



9　３号掘立柱建物跡（真上から）

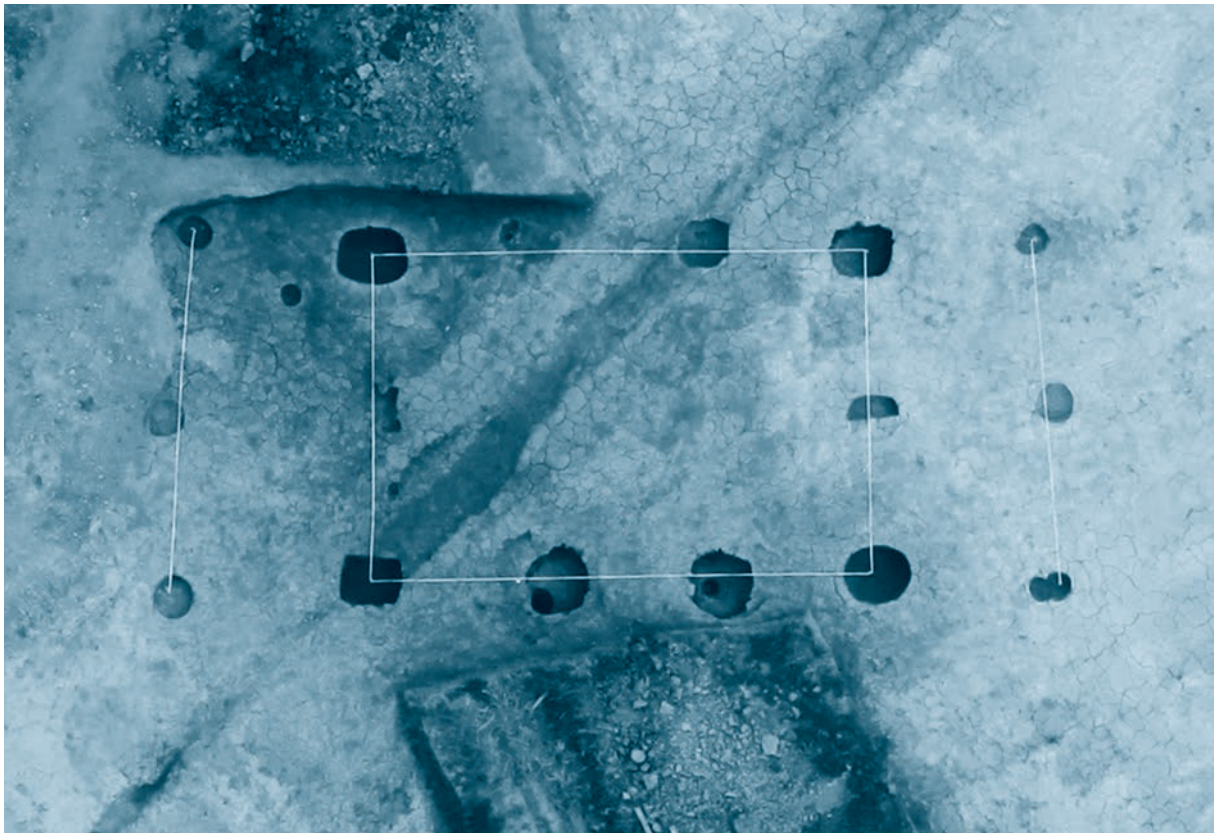


10　４号掘立柱建物跡（東から）

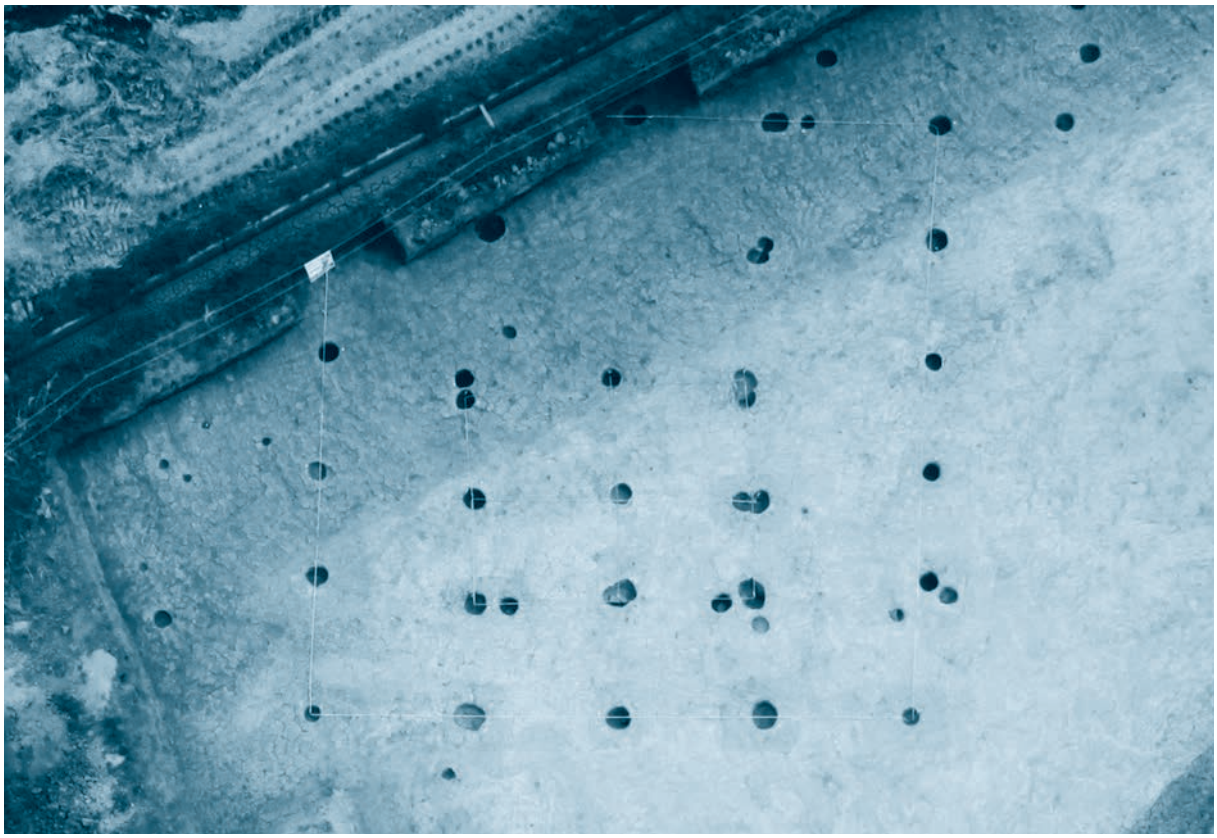


11　５号掘立柱建物跡（南から）

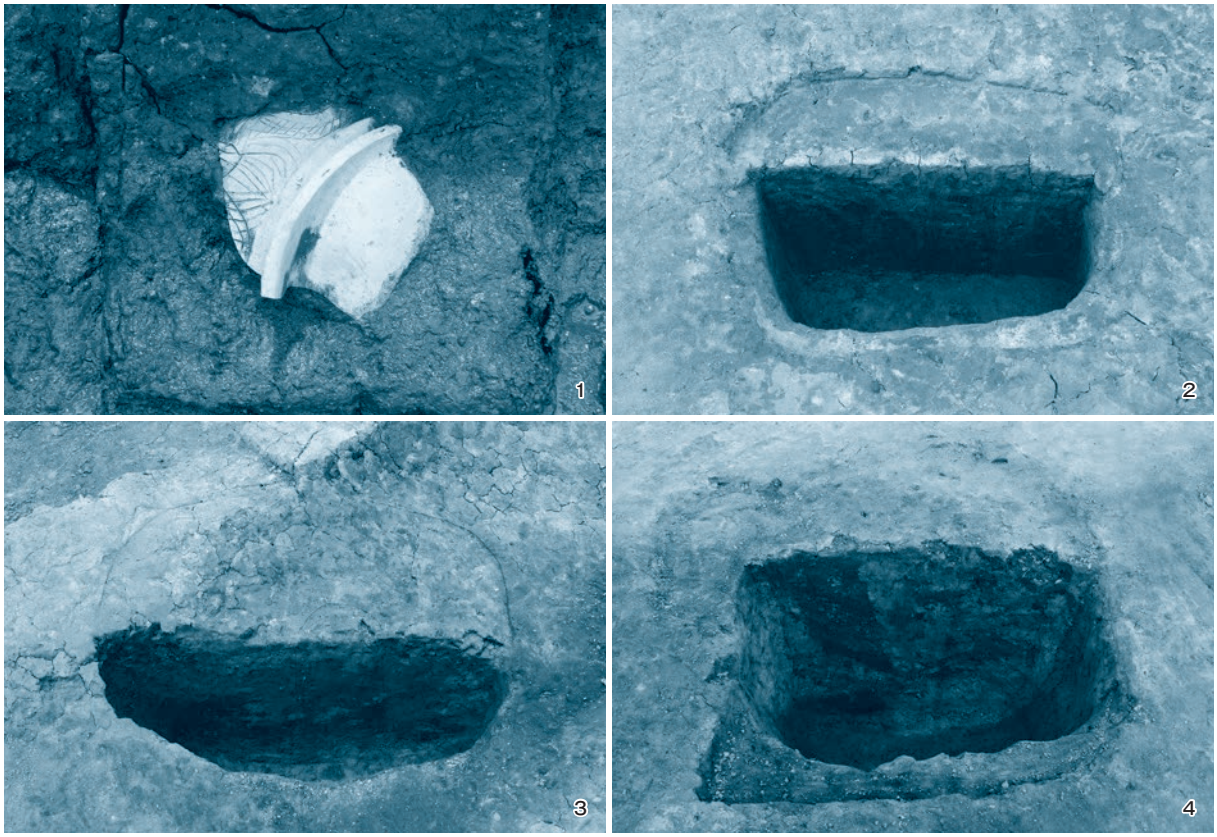
12　６号掘立柱建物跡（南から）



13　７号掘立柱建物跡（真上から）



14　８ａ・ｂ号掘立柱建物跡（真上から）



15　１・３・６号掘立柱建物跡

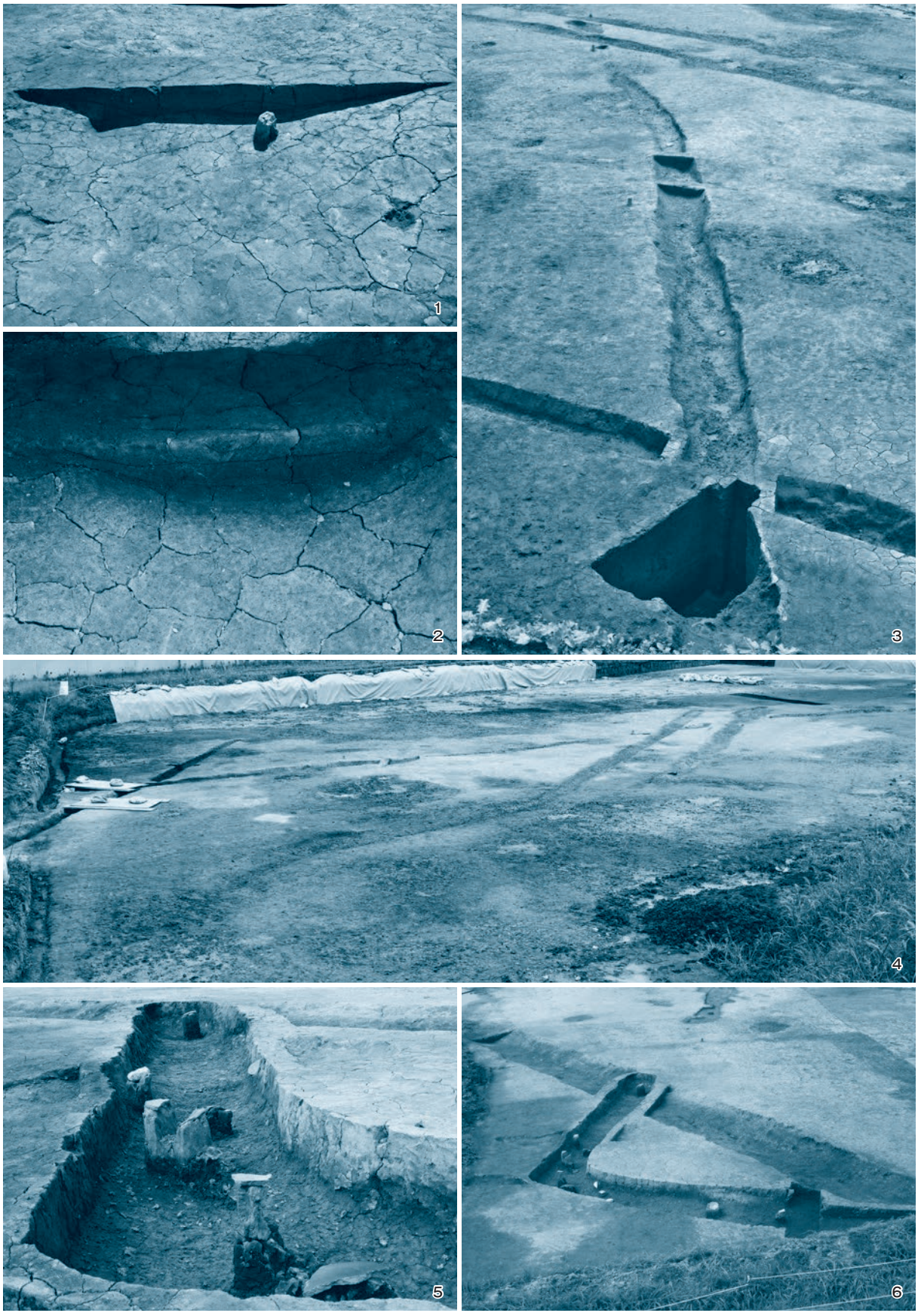
1　１号建物（ＳＤ15）遺物出土状況（東から）　**2**　３号建物Ｐ７土層断面（南から）
3　１号建物Ｐ３土層断面（東から）　**4**　６号建物Ｐ４（南から）

16　溝　　跡（1）

1　２号溝跡土層断面（東から）
2　５号溝跡遺物出土状況（北東から）
3　５号溝跡全景（東から）
4　５号溝跡遺物出土状況（東から）
5　６号溝跡土層断面（南から）
6　13号溝跡断面（南から）

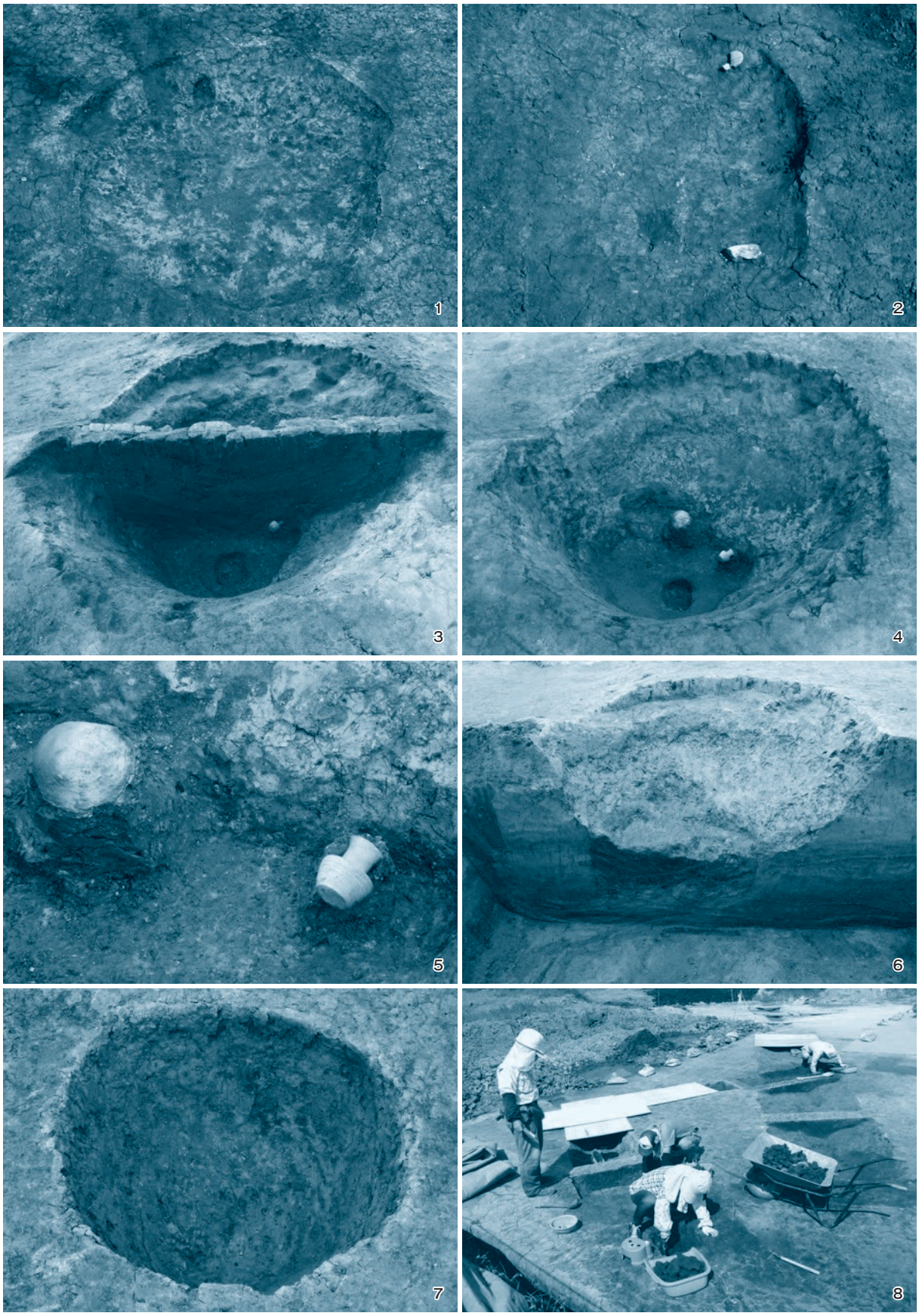
17　溝　　跡（２）

1　14号溝跡土層断面（東から）
2　14号溝跡土層断面（南から）
3　B区14号溝跡全景（北西から）
4　14号溝跡土層断面・遺物出土状況（南から）
5　16号溝跡全景（南から）
6　18号溝跡全景（南から）
7　18号溝跡土層断面（南から）



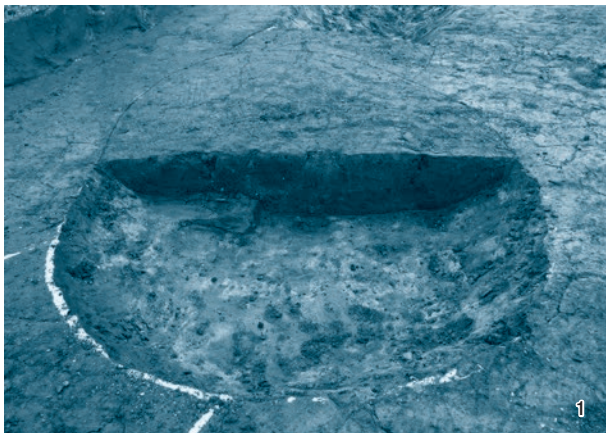
18　溝　　跡（3）

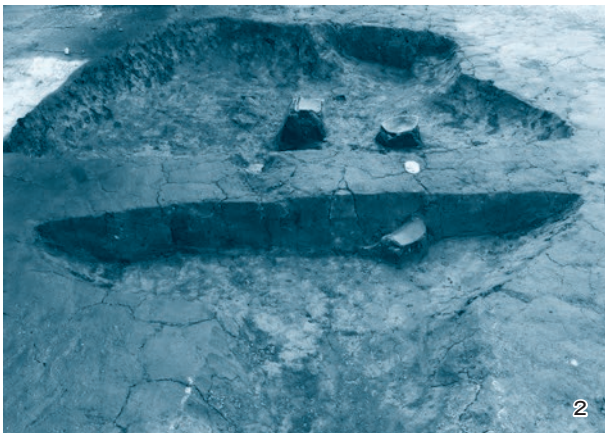
1　19号溝跡土層断面（北から）
2　20号溝跡土層断面（北から）
3　21・22号溝跡全景（北から）
4　7・10・19・20号溝跡全景（北西から）
5　17号溝跡遺物出土状況（南から）
6　1・6・17号溝跡全景（南から）

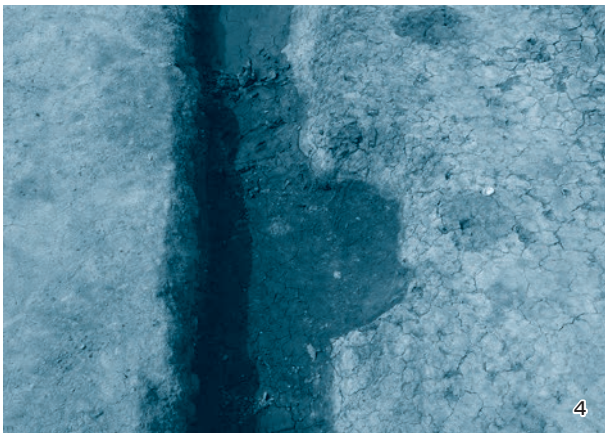


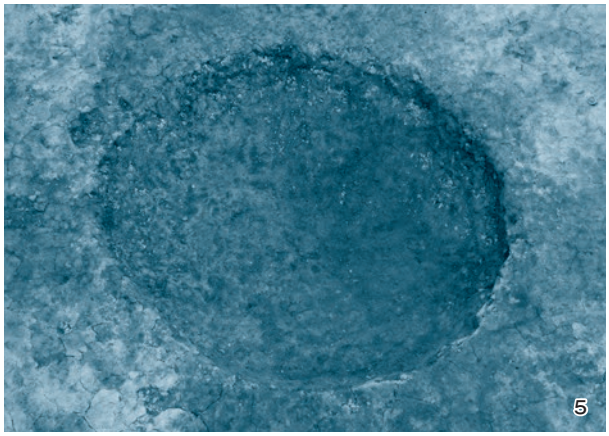
19　土　　坑（１）

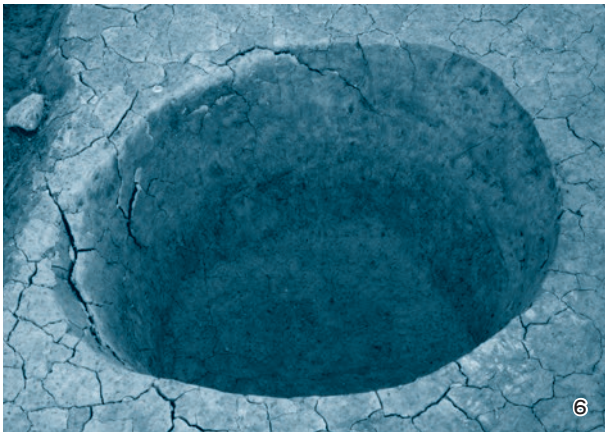
1　１号土坑全景（南から）
2　２号土坑全景（南から）
3　３号土坑土層断面（南から）
4　３号土坑全景（南から）
5　３号土坑遺物出土状況（南から）
6　３号土坑土層断面（南から）
7　４号土坑全景（南から）
8　作業風景（南から）





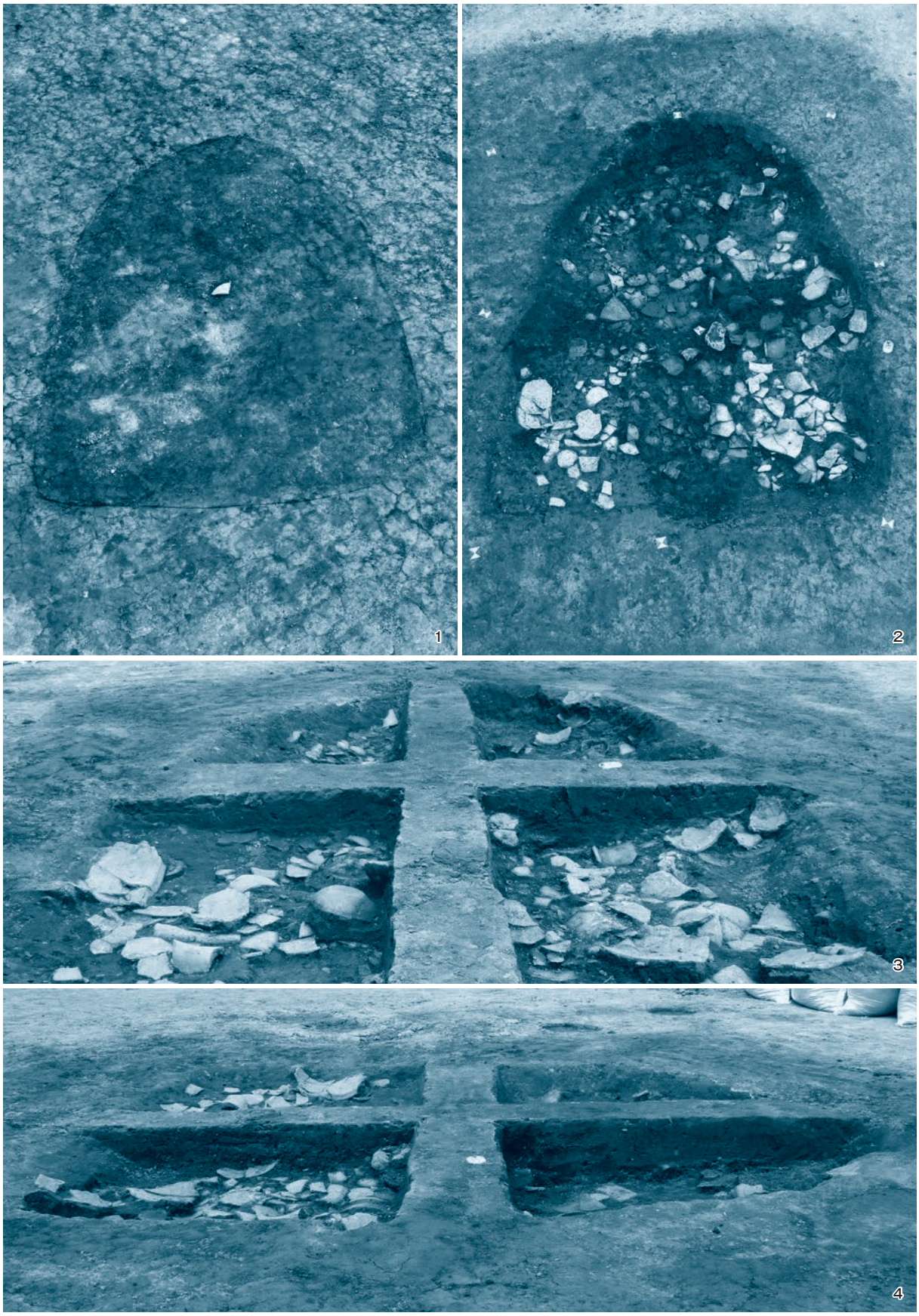






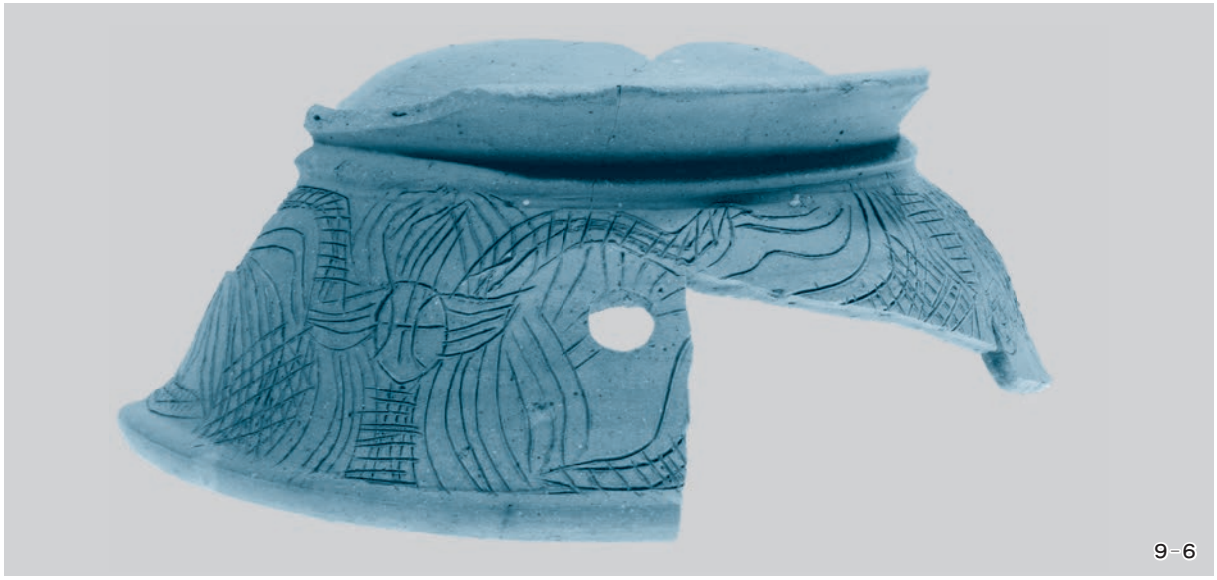
20 土　　坑（2）

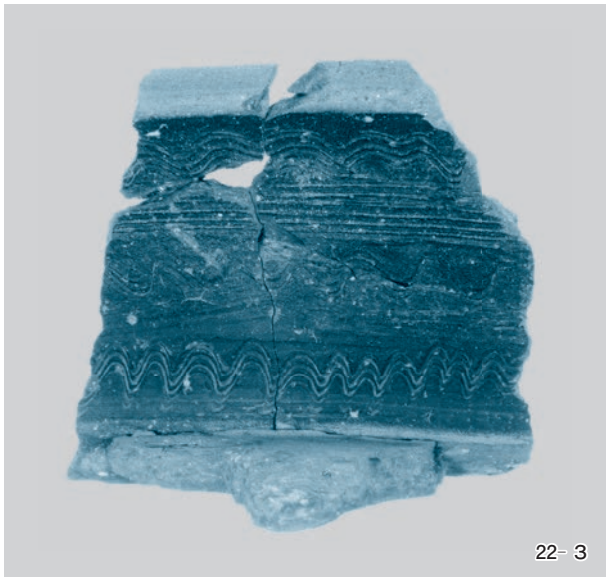
1　6号土坑土層断面（南から）
2　7号土坑土層断面（南から）
3　6・7号土坑全景（東から）
4　8号土坑全景（南から）
5　9号土坑全景（南から）
6　11号土坑全景（西から）
7　作業風景（南から）
8　作業風景（南から）

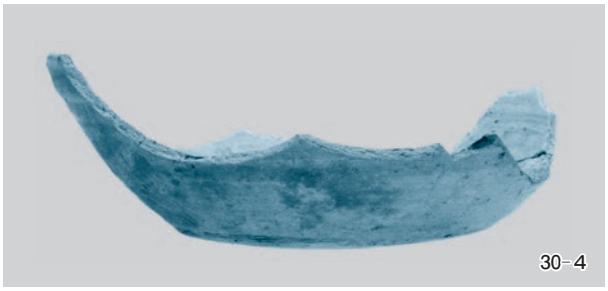


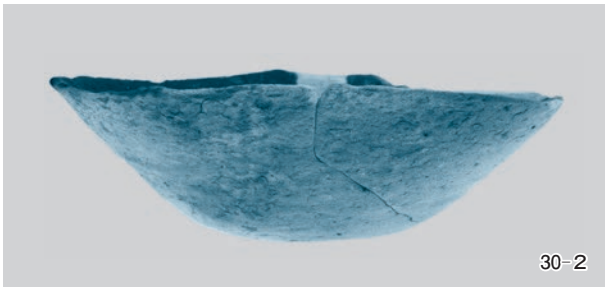
21　５号土坑

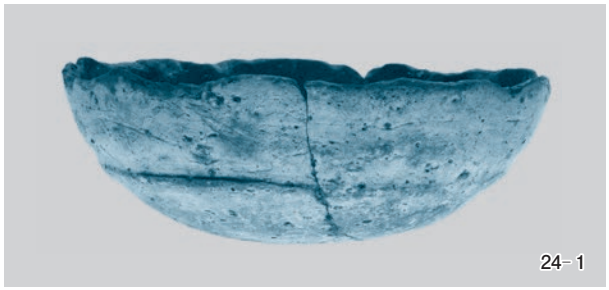
1　検出状況（南から）　2　遺物出土状況（南から）
3　土層断面（南から）　4　土層断面（東から）

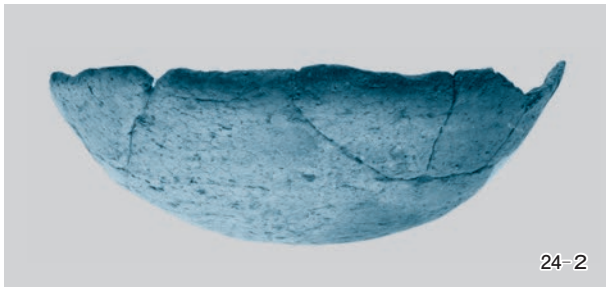




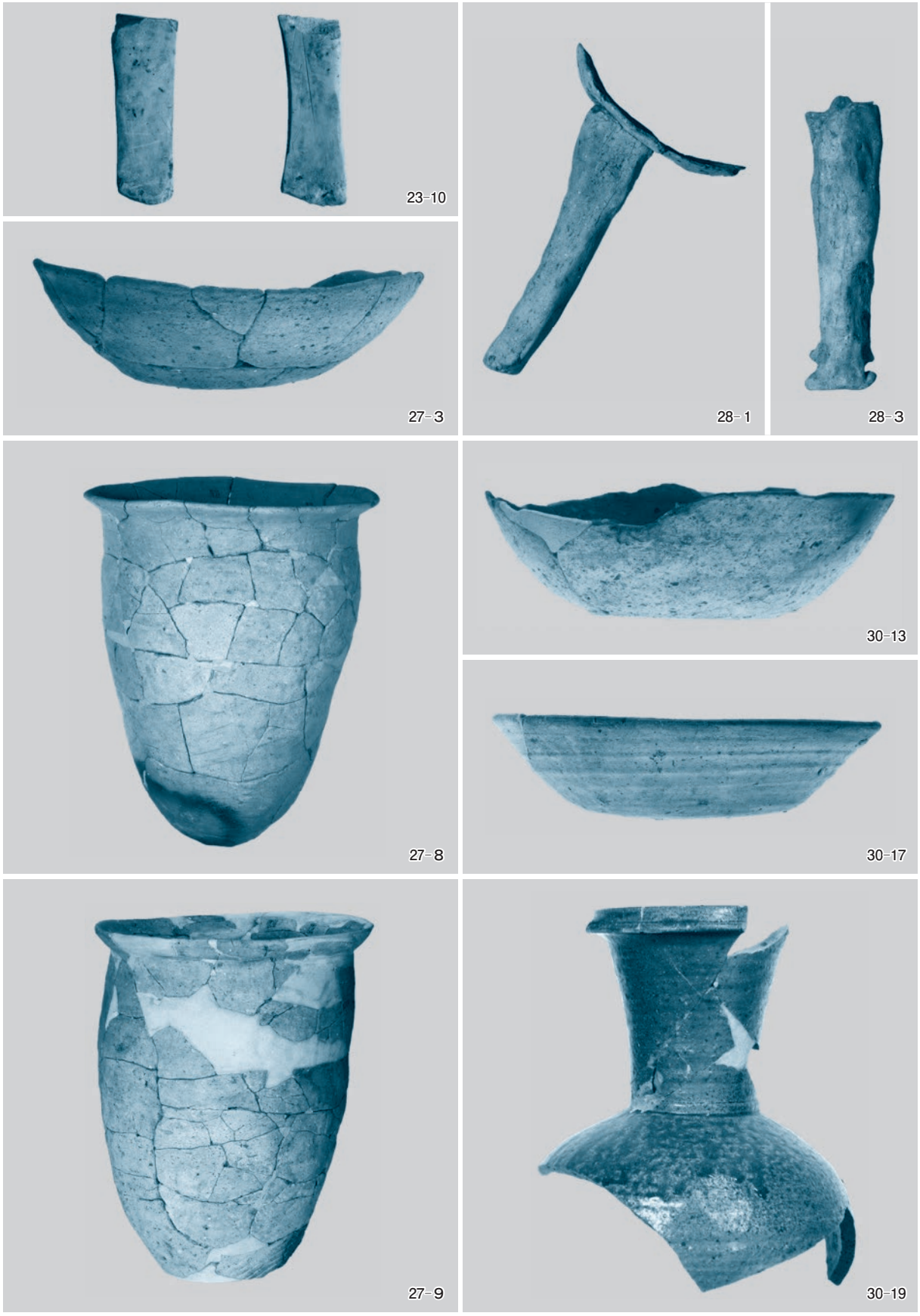








22　出土遺物（1）



23　出土遺物（2）

報 告 書 抄 録

ふ り が な	あいづじゅうかんきたどうろいせきはっくつちょうさほうこく15
書 名	会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告15
シ リ ー ズ 名	福島県文化財調査報告書
シ リ ー ズ 番 号	第496集
編 著 者 名	藤谷 誠，後藤信佑，佐藤悦夫，菊田順幸，日下部正和，作田一耕，阿部知己
編 集 機 関	公益財団法人福島県文化振興財団 遺跡調査部 調査課 〒960-8115 福島県福島市山下町１-25 TEL 024-534-2733
発 行 機 関	福島県教育委員会 〒960-8688 福島県福島市杉妻町２-16 TEL 024-521-1111
発 行 年 月 日	2014年12月19日

所収遺跡名	所在地	コード		北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
鶴沼C	福島県 会津若松市 高野町中沼 字鶴沼	2028	00498	37° 32′ 15″ ～ 37° 32′ 20″	139° 54′ 40″ ～ 139° 54′ 46″	2013年４月22日 ～ 2013年11月29日	11,000㎡	会津縦貫北道路の建設に伴う事前調査
西坂才（１次）	福島県 会津若松市 高野町中沼 字西坂才甲	2028	00499	37° 32′ 6″ ～ 37° 32′ 12″	139° 54′ 48″ ～ 139° 54′ 53″	2013年４月10日 ～ 2013年10月４日	7,800㎡	会津縦貫北道路の建設に伴う事前調査

所収遺跡名	種類	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鶴沼C	集落跡	古墳時代 平安時代 中世以降	河川流路跡 ３か所　流路跡付属施設 ２か所 掘立柱建物跡 ９棟　溝跡 25条 土坑 36基　井戸跡 １基 ピット 130個	土師器 須恵器 陶磁器 木製品など	今回の調査では，平安時代の建物跡群と，それに隣接した流路跡などを調査した。流路跡からは，土器と木製品などが多数出土している。
要約	鶴沼C遺跡では，流路跡から大量の平安時代の土器などとともに，木製品も見つかっている。出土土器には墨書土器が多く含まれており，中には複数の文字が書かれたものや，「倉人」等の郡衙関連の性格を持つ遺跡であることを示すものも出土した。また，井戸跡は，木枠を井桁に組んだ平安時代のもので，木枠材として建物の扉などを再利用していた。流路跡・井戸跡は，いずれも建物群に付随する平安時代施設と思われる。				
西坂才（１次）	集落跡	平安時代	掘立柱建物跡 ９棟　溝跡 22条 土坑 ８基　土器焼成坑 １基 井戸跡 １基　小穴 131個	土師器 須恵器 陶磁器 石器など	今回の調査では，平安時代の建物跡群と，建物群より古い溝跡などを調査した。
要約	西坂才遺跡では，平安時代の堀立柱建物群と，それよりも古い溝跡などを確認した。建物群よりも古い14号溝跡は，そのまま西側の鶴沼C遺跡まで直線的に延伸している。平面形が釣鐘形をした土器焼成坑からは，主に土師器甕の破片が出土し，中には三本脚付鉢なども破片となって出土している。				

※経緯度数値は世界測地系（平成14年４月１日から適用）による。

福島県文化財調査報告書第496集

会津縦貫北道路遺跡発掘調査報告15

鶴沼C遺跡

西坂才遺跡（１次）

平成26年12月19日発行

編 集　公益財団法人福島県文化振興財団 遺跡調査部（〒960-8115）福島県福島市山下町１-25
発 行　福島県教育委員会（〒960-8688）福島市杉妻町２-16
　　公益財団法人福島県文化振興財団（〒960-8116）福島市春日町５-54
　　国土交通省東北地方整備局郡山国道事務所（〒963-0111）郡山市安積町荒井字丈部内28-１
印 刷　北斗印刷株式会社（〒965-0052）会津若松市町北町大字始字深町67-2